

玖珠町

よっ か いち  
四 日 市 遺 跡 4

－玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)－

2021

大分県立埋蔵文化財センター

# 四 日 市 遺 跡 4

－ 玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)－

2 0 2 1

大分県立埋蔵文化財センター





四日市遺跡第16次調査区と伐株山



# 序 文

本書は、大分県教育委員会が、大分県地域づくり機構大分県土地開発公社の依頼を受けて実施した玖珠工業団地造成工事に伴う四日市遺跡埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

四日市遺跡の発掘調査は、平成14年度から平成29年度までの16年間にわたり継続して行ってきました。総調査面積は約100,000㎡にも及び、台地の上全体を調査したことになります。これまでの調査から、旧石器時代から近世に至るまでの遺構・遺物が出土しており、いにしえの人々の営みを連綿とたどることができます。

今回報告するのは最終年度に行った第16次調査と、第1次調査の旧石器時代・縄文時代の調査成果です。第16次調査では、約19,740㎡という大規模な面積を調査しましたが、その結果、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物・土坑・貯蔵穴などの遺構を多数検出し、これにより集落の全容を把握することができました。そこからは多くの遺物とともに、県内でも出土事例の少ない鹿の線刻絵画土器や、筒形器台などの貴重な遺物が出土しました。

本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

最後に、発掘調査ならびに報告書の刊行にあたり、多大な御支援と御協力をいただきました関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

令和3年3月31日

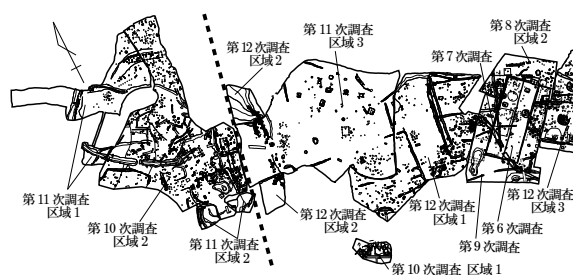
大分県立埋蔵文化財センター

所 長 松 本 昌 浩

# 例 言

- 1 本書は、大分県教育委員会が大分県土地開発公社から依頼を受けて実施した玖珠工業団地造成事業に伴う四日市遺跡発掘調査の調査報告書である。
- 2 調査は、平成14年度の第1次調査から平成29年度の第16次調査まで毎年継続して実施した。本書は平成14年度の第1次調査、平成29年度の第16次調査についての調査報告書である。
- 3 発掘調査にあたっては、実測作業・写真撮影・発掘作業員の労務管理等の業務を発掘調査支援委託業務として、株式会社九州文化財総合研究所（平成29年度）に委託した。
- 4 出土遺物の整理作業・報告書作成に伴う諸作業については、大分県立埋蔵文化財センター職員が担当した。このほか、遺物の洗浄・注記・接合・実測・トレース・写真撮影については、株式会社九州文化財総合研究所（平成30年度～令和2年度）に委託し実施した。
- 5 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県立埋蔵文化財センターに保管している。
- 6 本書で使用する測量座標値は世界測地系で、方位は座標真北である。
- 7 本書で使用する遺構名称は、SB：掘立柱建物、SD：溝、SF：道路状遺構、SK：陥穴・土坑・甕棺墓等、SH：竪穴建物、S：円形周溝遺構、SX：不明遺構である。
- 8 本書の執筆分担は以下の通りである。

第1章	服部真和
第2章	後藤一重
第3章	綿貫俊一
第4章	服部真和
第5章	1 九州大学 田渕朱莉・米元史織・足達悠紀・舟橋京子 2 (株)加速器分析研究所
第6章	1 綿貫俊一 2・5 小柳和宏 3・4 服部真和
- 9 図版作成、レイアウト、データ入力、本書の編集については小野千恵美・岡本瑛梨・佐々木茂伸・東晃平・小柳・綿貫・服部が行った。
- 10 四日市遺跡が立地する台地は地名でいえば東側の字上の原と西側の字西の原にあたる。大分県教育委員会が2018年に刊行した『大分県遺跡地図』によると、上の原部分は四日市遺跡（218056）、西の原部分は西の原遺跡（218106）とされており、丁度、11次調査区域3の西端、12次調査区域2にかかるところを境界としていた。しかし同一の台地上であることから、本書を含め、これまでの報告書では四日市遺跡として報告している。



旧四日市遺跡と旧西の原遺跡の境界

# 目 次

第1章	はじめに	1
1	調査の経緯	1
2	調査の体制と概要	1
3	本年度の事業概要と調査体制	3
第2章	遺跡の位置と環境	5
1	四日市遺跡の位置と地理的環境	5
2	四日市遺跡の立地	6
3	四日市遺跡の歴史的環境	6
第3章	第1次調査－旧石器時代後期・縄文時代草創期初頭－	11
1	経緯	11
2	基本層位	11
3	4トレンチの遺構と遺物	11
4	7トレンチ・8トレンチの遺構と遺物	21
第4章	第16次調査	33
1	第16次調査の概要	35
2	調査区の基本層序	35
3	旧石器時代・縄文時代	36
4	弥生時代	42
(1)	竪穴建物	42
(2)	土坑	118
(3)	小児用甕棺	219
(4)	円形周溝遺構	231
(5)	掘立柱建物	232
(6)	不明遺構	234
5	古墳時代（弥生時代終末～古墳時代初頭）	237
(1)	竪穴建物	237
(2)	土坑	269
6	調査区出土遺物	271
7	第16次調査のまとめ	272
(1)	旧石器時代・縄文時代	272
(2)	弥生時代	272
(3)	古墳時代（弥生時代終末～古墳時代初頭）	273
第5章	自然科学的分析	275
1	四日市遺跡6号周溝墓出土人骨について	275
2	四日市遺跡第16次における放射性炭素年代	282
第6章	総括	290
1	旧石器時代後期・縄文時代草創期初頭	290
2	弥生時代	291
3	古墳時代	296



4 古代	299
5 中世	301
遺物観察表	307
第1次調査区出土の旧石器時代・縄文時代草創期初頭石器類の実測図掲載の観察表	308
第16次調査区 土器観察表	310
第16次調査区 石器観察表	347
第16次調査区 土製品観察表	351
第16次調査区 金属製品観察表	352
写真図版	353
第1次調査区	355
第16次調査区 (遺構写真)	365
第16次調査区 (遺物写真)	460

## 第1章 はじめに

### 1 調査の経緯

四日市遺跡は、大分県北西部、玖珠郡玖珠町が所在する玖珠盆地のほぼ中央部を流れる玖珠川にそって形成された丘陵上に位置する。この丘陵を含む玖珠盆地一帯が、九州横断道路（長崎～大分）の開通及び国道210号線、国道387号線といった基幹道路の集束地域となった。さらに玖珠町内に「玖珠インターチェンジ」が設置される運びとなり、かねてより玖珠町が抱えていた人口減少や高齢化などへの対応策として、新たな基幹産業の誘致による地域活性化を求められていた。特に四日市遺跡が所在する台地は、九州横断自動車道玖珠インターチェンジから直線距離で約2kmと近接した位置にあり、かつ台地上は400,000㎡近い面積が確保されるもので、生産拠点及び加工品の物流面でも非常に評価される場所であった。

玖珠町の地域経済の活性化対策として工業団地の整備を行う構想が本格的に始動したのは、1994年（平成6年）に作られたマスタープラン「内陸型工業団地基本計画及び基本設計委託業務基本計画報告書」であった。以後このマスタープランにしたがって具体的な事業が進められるようになった。1999年（平成11年）に、工業団地予定地内の取り扱いについて関係部局との協議を行い分布調査及び試掘調査を実施した。その結果、台地上のほぼ全域で弥生時代・古墳時代・中世などの遺構や遺物が存在することが確認された。台地上のほぼ全面に遺跡が存在することから、開発部局である大分県商工労働観光部産業振興課企業立地推進室（現商工労働部企業立地推進課）及び土地開発公社（現大分県地域づくり機構大分県土地開発公社）と協議を重ねた。

当初は、調査対象範囲が100,000㎡を超えることから、単年度での調査は困難であったため、平成14年度から平成32年度に及ぶ長期にわたる年次計画を作成し、この年次計画をもとに計画的に調査を進めていた。ところが、平成28年度末に工業団地をめぐる情勢に大きな変化が生じる可能性が高まったため、大分県地域づくり機構大分県土地開発公社と協議を行い、当初の調査計画を前倒しにし、平成29年度に本調査をすべて終了することとなった。また、報告書については平成28年度刊行分に加え、平成30年度から3カ年で順次報告書を刊行することとした。

なお、調査に至る詳細な経緯については、平成28年度に刊行した『四日市遺跡1』内の第1章第1節を参照願いたい。

### 2 調査の体制と概要

本調査は、平成14年度の第1次調査から平成29年度の第16次調査まで毎年実施した。ここでは、本書で報告する調査回数についてのみ、調査体制と調査概要を述べる。

#### 第1次調査（平成14年度）

##### 調査体制

調査主体	大分県教育委員会
調査総括	石川公一 大分県教育委員会教育長
調査員	岩男康晴 大分県教育庁文化課長
	麻生祐治 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	清水宗昭 大分県教育庁文化課参事兼課長補佐
	綿貫俊一 大分県教育庁文化課発掘調査大型事業担当副主幹 調査担当
	河野哲郎 大分県教育庁文化課嘱託
	古庄博之 大分県教育庁文化課嘱託
	戸田英佑 大分県教育庁文化課嘱託

調査期間 平成14年5月16日～平成15年3月20日

調査面積 10,800㎡

##### 調査概要

## 第1章 はじめに

第1次調査は、台地上の最も東側に当たる部分に位置する。旧石器時代の包含層及び弥生時代から古墳時代の堅穴建物・貯蔵穴・土坑、古代の木棺墓等が調査された。

### 第4次調査（平成17年度）

#### 調査体制

調査主体 大分県教育委員会  
調査総括 深田秀生 大分県教育委員会教育長  
調査員 渋谷忠章 大分県教育庁埋蔵文化財センター所長  
益永孝則 大分県教育庁埋蔵文化財センター次長  
小柳和宏 大分県教育庁埋蔵文化財センター調査第一課大型事業担当主幹 調査担当  
下田智隆 大分県教育庁埋蔵文化財センター嘱託  
調査期間 平成17年9月1日～平成17年10月31日  
調査面積 800㎡

#### 調査概要

第4次調査は、第3次調査区の南側、弥生時代の集落の南端部に当たる場所を調査した。調査の結果、弥生時代中期の大型円形堅穴建物と方形の堅穴建物の他、貯蔵穴や掘立柱建物、古墳時代の主体部に箱式石棺をもつ円墳、方墳が確認された。6号周溝墓出土人骨の分析を第5章に掲載している。

### 第16次調査（平成29年度）

#### 調査体制

調査主体 大分県教育委員会  
調査総括 工藤利明 大分県教育委員会教育長  
調査員 阿部辰也 大分県立埋蔵文化財センター所長  
江田 豊 大分県立埋蔵文化財センター副所長兼調査第一課長  
友岡信彦 大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第二課長  
後藤晃一 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主幹 調査担当  
土谷崇夫 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課主事 調査担当  
服部真和 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主事 調査担当  
園田涼太 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主事（国東市派遣職員） 調査担当  
坂本嘉弘 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課嘱託 調査担当  
宮内克己 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課嘱託 調査担当  
後藤一重 大分県立埋蔵文化財センター企画普及課嘱託 調査担当  
調査期間 平成29年4月11日～9月29日  
調査面積 19,738㎡

#### 調査概要

第16次調査は、第1次調査の西側に位置する。旧石器時代の包含層及び弥生時代・古墳時代の堅穴建物・貯蔵穴・土坑等が多数調査され、集落の中心部であることが確認された。

### 第16次調査整理作業（平成30年度）

#### 調査体制

調査主体 大分県教育委員会  
調査総括 工藤利明 大分県教育委員会教育長

調査員 江田 豊 大分県立埋蔵文化財センター所長  
 森次正浩 大分県立埋蔵文化財センター副所長兼総務課長  
 友岡信彦 大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長  
 吉田 寛 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長 整理作業総括  
 綿貫俊一 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課課長補佐 整理作業担当  
 服部真和 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主任 整理作業担当

### 第16次調査整理作業（令和元年度）

#### 調査体制

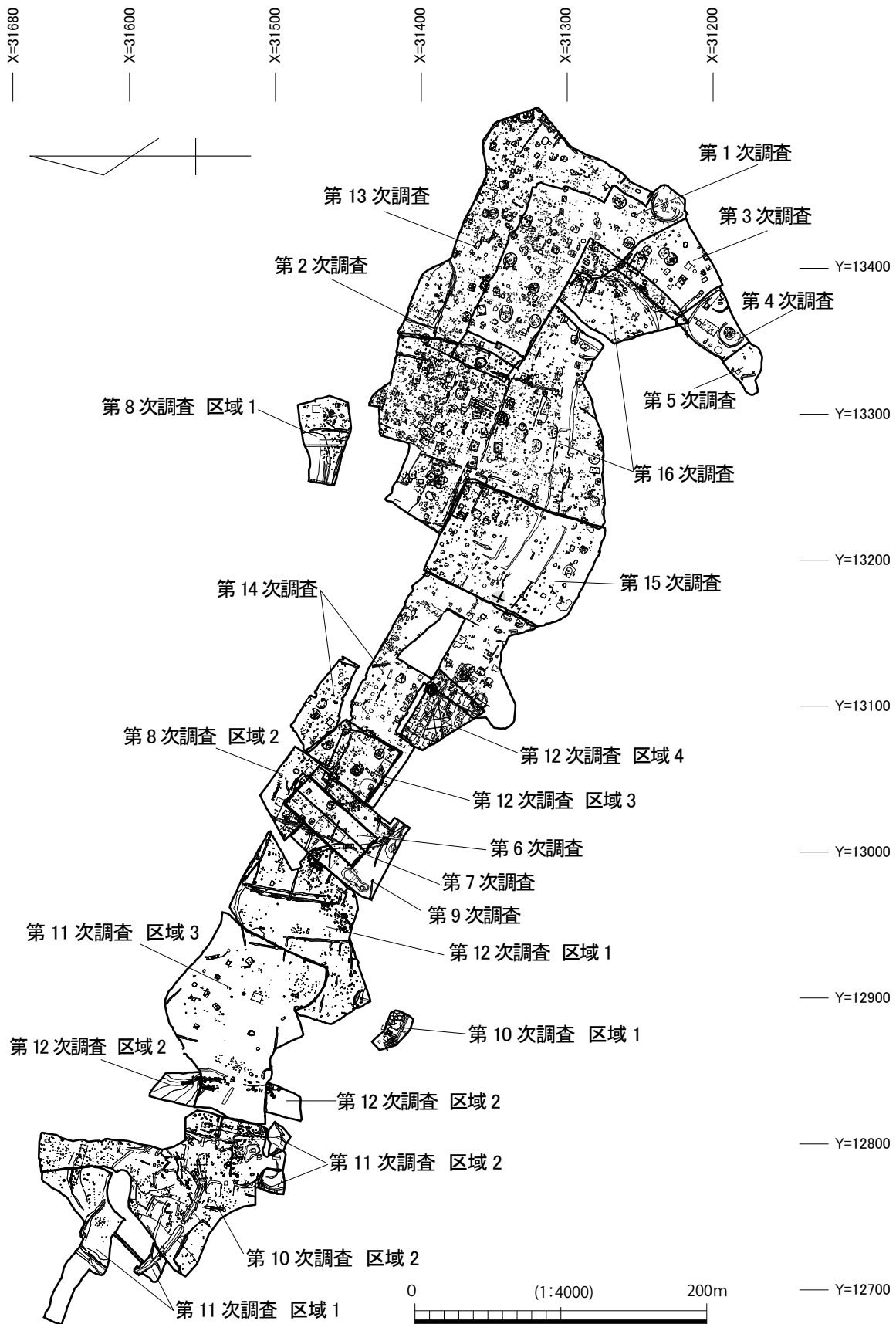
調査主体 大分県教育委員会  
 調査総括 工藤利明 大分県教育委員会教育長  
 調査員 江田 豊 大分県立埋蔵文化財センター所長  
 松本昌浩 大分県立埋蔵文化財センター副所長兼総務課長  
 友岡信彦 大分県立埋蔵文化財センター参事兼調査第一課長  
 吉田 寛 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長 4月25日まで  
 後藤晃一 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課長 整理作業総括 4月26日から  
 綿貫俊一 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課課長補佐 整理作業担当  
 服部真和 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主任 整理作業担当

### 3 本年度の事業概要と調査体制

平成28年度の『四日市遺跡1』（第1次調査）、平成30年度の『四日市遺跡2』（第10次調査、第11次調査、第12次調査区域1・2）、令和元年度の『四日市遺跡3』（第2～9次調査、第12次調査区域3・4、第13～15次調査）に続き、発掘調査報告書の『四日市遺跡4』（第1次調査、第16次調査）の刊行を行った。また今年度の報告書作成に伴う遺物整理作業を実施した。

#### 調査体制

調査主体 大分県教育委員会  
 調査総括 工藤利明 大分県教育委員会教育長  
 調査員 松本昌浩 大分県立埋蔵文化財センター所長  
 後藤晃一 大分県立埋蔵文化財センター調査第一課兼第二課課長 整理作業総括  
 服部真和 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課主査 整理作業担当・執筆担当  
 後藤一重 大分県立埋蔵文化財センター企画普及課嘱託 執筆担当  
 小柳和宏 大分県立埋蔵文化財センター企画普及課嘱託 執筆担当  
 綿貫俊一 大分県立埋蔵文化財センター調査第二課嘱託 執筆担当



第1図 四日市遺跡第1次～第16次調査区配置図(1/4000)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 1 四日市遺跡の位置と地理的環境

四日市遺跡は、大分県玖珠郡玖珠町大字四日市字上の原及び字西の原に所在する。

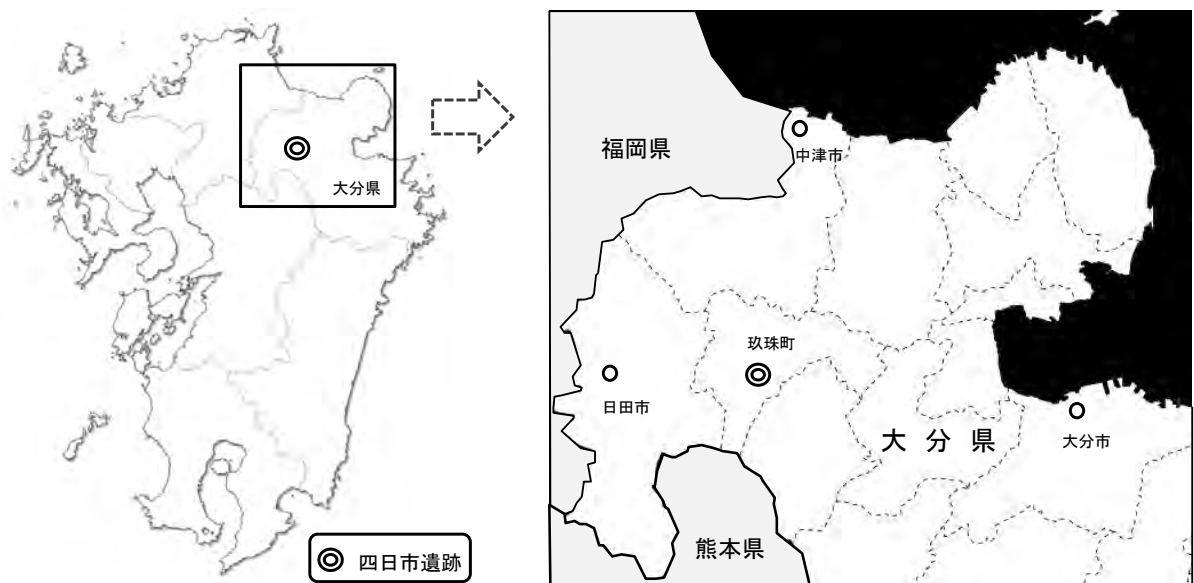
玖珠町は大分県の西部に位置しており、九州島の内陸部にあたる。玖珠町を含む周辺の地域は山地が大部分を占めており、平野部は少ない。周囲の山は、耶馬溪溶岩や万年山溶岩の堆積物が侵食されて形成されたメーサ（卓状台地）と呼ばれる特徴的な山容を呈する。これらの山々は地質学的に貴重なもので、景観的にも独特な様相を呈する。

これらの山地を縫うように玖珠川が西流しており、玖珠川に沿って当地域では最大の平野である玖珠盆地が形成されている。盆地は、玖珠町の東に隣接する九重町にもおよび、東西10km余、南北2kmの細長い形状を呈する。玖珠川は九州最大の河川である筑後川の上流にあたり、その源は盆地東方の玖珠郡と大分郡の境界である水分峠付近や久住山麓などに求められる。玖珠盆地周辺では、太田川、森川、松木川、町田川などの小河川が北側や南側から玖珠川に合流する。各々の小河川では、川に沿うように河岸段丘などの狭小な平坦面が形成されている。平野部の少ない当地域において、これら川沿いの平坦面は水田等の農地や集落として利用されている。

玖珠盆地の標高は、東端で約380m、西端で約310mである。盆地内は概ね平坦な地形を呈している。しかし、細かく見てみると、玖珠川の流路移動の痕跡や、河岸段丘の形成などが各所にみられ、微起伏が比較的顕著な状況が観察できる。現在では、大規模な圃場整備事業が盆地内の各地域で実施されるなどにより、本来の微地形が失われた箇所も多い。盆地の周囲には、万年山、宝山、大岩扇山、小岩扇山、伐株山などの山々が展開する。

これらの山々は、前述したメーサ地形を呈するものもあり、独特な景観を呈する。これらの山々は、標高700～1100mで、盆地平野部との比高差は400～800mである。また、これらに加えて、先の山々から派生した丘陵や独立丘陵がみられる。その標高は400m前後を測り、上面が比較的平坦な地形を呈し、盆地平野部との比高差は50～100mである。後段で詳述するように、盆地を見下ろすこれらの丘陵上には先史時代からの遺跡が多数確認されている。

次に、玖珠盆地と九州島内各地の地理的關係についてみてみる。玖珠盆地の西方は、山塊の中を縫うように流れる玖珠川に沿って西進すると、約20kmで大分県（旧豊後国）の西端に位置する日田盆地に至る。日田盆地周辺には各時代の遺跡が数多くみられる。玖珠盆地からみて、最も近い遺跡密集地がこの日田盆地である。日田盆



第2-1図 四日市遺跡位置図

## 第2章 遺跡の位置と環境

地から西進すると、すぐに福岡県（旧筑後国）にはいる。さらに川を下ること約20kmで朝倉市に至る。朝倉市からさらに約20kmで久留米市に到達する。河川を媒介に筑後方面中枢部と繋がる様子が分かる。玖珠盆地の北方は、盆地から小河川に沿い北上すると、約10kmで旧豊前国である旧下毛郡に入る。豊前国に入ると玖珠川水系から離れ山国川水系となる。山国川水系の小河川に沿い下り、さらに山国川本流に沿い約20km行くと、周防灘に面する大分県中津市に至る。中津市及び山国川を挟んだ福岡県側には各時代の遺跡が集中する。中津市からは、北九州市経由の陸路や周防灘に直接乗り出す海路により、西瀬戸内地域と繋がっており、その東方には吉備や畿内がかえる。玖珠盆地の東方は山地が連なる。旧豊後国の中心である大分市へは直線距離で約40kmを測り、途中には玖珠川水系と大分川水系を分ける分水嶺がある。河川交通が利用し難く、筑後方面に向かうのに比べ難儀な道程であったと思われる。最後に玖珠盆地の南方は、盆地から小河川に沿い南進すると約20kmで熊本県（旧肥後国）の小国に至る。

以上のように、玖珠の地は豊後国に属しながらも、筑後国や豊前国、肥後国に非常に近い位置関係にある。険しい陸路が続く豊後国中枢部への道程に比べ、距離的に近い周辺の国々への親近感が強かったかもしれない。特に、玖珠川（筑後川）により結ばれる筑後国方面は、実際の距離以上に極めて近い存在であったと考えられる。豊後国の内陸に位置する玖珠の歴史・文化の形成には、このような地理的な関係が少なからず影響しているものと思われる。

### 2 四日市遺跡の立地

四日市遺跡は、玖珠盆地北西側の独立丘陵上に立地する。標高は360～380mで、平野との比高差は30～50mを測る。丘陵上からは、西流する玖珠川と盆地平野部を眼下に広く見渡すことができる。丘陵上は、西側が山地形を呈するが、中央部から東側にかけては比較的平坦な部分が多い。丘陵上の平坦面は東西約0.65km、南北約0.05～0.2kmで、概ね西から東へ、また一部では南から北へ傾斜している。

弥生時代の集落のうち、中期は丘陵上の中央部から東側にかけて広く展開しており平野部に近い東側の密集度が高く、後期は主として東側にみられる。墳墓は、古墳時代前期の古墳が東側の平坦部端部に集中し、これとは反対の位置にあたる平坦面の西端に石棺群がみられる。また、古墳時代後期の横穴墓群が中央部南側の斜面に展開する。一方、西側の山地形の部分には中世の城跡や寺院跡がみられる。

### 3 四日市遺跡の歴史的環境

玖珠盆地周辺や玖珠川支流の小河川沿いのほか、少数ではあるが山間の丘陵上などにおいて各時代の遺跡を確認することができる。なかでも、本遺跡の所在する玖珠盆地周辺には遺跡が特に集中しており、先史時代以降、本地域の中心的な役割を担っていたことが分かる。以下、各時代の概要を述べる。

**旧石器時代** これまで玖珠町内では、旧石器時代のまとまった遺物が出土する遺跡は確認されていないが、盆地を離れた山間部の丘陵・台地上に立地する小岩扇遺跡などで、石器が少数採集されている。玖珠町の所在する筑後川上流域では、隣接する日田市天瀬町の台地上などで良好な遺跡が多数確認されている。これらの遺跡からは、西北九州産黒曜石やサヌカイト・安山岩製のナイフ形石器・細石器などが出土している。今回の四日市遺跡の調査でも旧石器時代の遺物包含層が調査されており、今後盆地周辺の丘陵上からも遺跡の存在が確認されることが期待される。大分県では、大野川流域の火山灰台地上などで遺跡が集中することが知られている。大野川流域の遺跡では、大野川河床などにみられる流紋岩を材料にした石器が出土している。これに対し、本遺跡の所在する筑後川上流域では、流紋岩以外の石材が主に利用されていることが注目される。このような石材利用状況の差は、後期旧石器時代の集団関係などを考えるにあたり極めて示唆的な状況と思われ、遺跡・遺物の具体的な比較検討作業が期待される。

**縄文時代** 二日市洞穴、中西遺跡、西田遺跡、八幡中学校遺跡などの遺跡が確認されている。

二日市洞穴は松木川が玖珠盆地に流入する場所に位置する。縄文時代草創期から後・晩期までの遺物が層位的

に出土している。特に草創期から早期にかけては良好な包含層が残されており、土器編年研究の好資料となっている。また、埋葬人骨も確認されており、本地域における縄文時代の生活を知ることのできる良好な遺跡である。

八幡中学校遺跡は大田川沿いの段丘上に位置し、後期後葉の西平式土器とともに、土壙や溝状遺構が検出されている。

中西遺跡と西田遺跡は、盆地南側の緩斜面に位置する。縄文時代の遺物は、弥生・古墳時代以降の遺構埋土などから出土している。中西遺跡では、後期の石町式土器を中心に少数の早前期土器もみられる。西田遺跡では早期、前期、後期、晩期の土器が出土しており、量的には晩期前葉の土器がややまとまっている。また、扁平打製石斧が200本以上みられ、後晩期段階における原初的農耕の可能性を示唆するものとして注目される。

**弥生時代** 玖珠盆地周辺では、四日市遺跡をはじめとし、陣ヶ台遺跡、瀬戸遺跡、名草台遺跡、旦ノ原遺跡、瀬戸口遺跡、豆田遺跡、小竿遺跡、早水野中遺跡、坂口遺跡、白岩遺跡などが確認されている。

これらのうち、四日市遺跡、名草台遺跡、旦ノ原遺跡、陣ヶ台遺跡、瀬戸遺跡は丘陵上に立地する。四日市遺跡の調査は丘陵上全面に及び、中期・後期終末期の集落全容が明になった。特に中期については、竪穴建物や貯蔵穴などが広く丘陵上に展開し、加えて大型掘立柱建物も検出されるなどから、本地域の拠点集落と考えられている。陣ヶ台遺跡は、盆地南側の伐株山からのびる丘陵上にあり、盆地を見下ろす位置にある。後期の竪穴建物跡と溝が検出されている。瀬戸遺跡は盆地から森川をやや遡った丘陵上にあり、後期の竪穴建物跡から石包丁が7本まとめて置かれた状態で出土している。名草台遺跡は瀬戸遺跡西方に位置する丘陵で、中・後期の竪穴建物や土坑が確認されている。旦ノ原遺跡は盆地北側に位置し、盆地を見下ろす丘陵上にある。発掘調査は行われていないが、弥生時代各時期の遺物が採集されている。

瀬戸口遺跡、豆田遺跡、早水野中遺跡、坂口遺跡は盆地内の段丘上や微高地上などに立地する。瀬戸口遺跡、豆田遺跡では、中・後期の竪穴建物や小児甕棺墓、木棺墓などが確認されており、盆地を囲む丘陵上の遺跡と同様な内容の集落となっている。

また、白岩遺跡は四日市遺跡西方の丘陵上にある。遺跡からは山頂部を取り囲むように溝が検出されており、いわゆる「のろし台」的な機能を有する後期の高地性集落として注目された。

**古墳時代** 墳墓として、四日市遺跡、小竿遺跡、八幡中学校遺跡、おごもり遺跡、瀬戸墳墓群、千人塚古墳、亀都起古墳、將軍塚古墳、陣ヶ台姫塚古墳、陣ヶ台彦塚古墳、鬼塚古墳、鬼ヶ城古墳、四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群、志津里横穴墓群などがある。これらの多くは盆地周辺に位置している。

小竿遺跡、八幡中学校遺跡では石棺墓群が検出されている。小竿遺跡は50数基の石棺墓や土壙墓で構成される古墳時代前期の集団墓地で、副葬品をほとんどもたない。八幡中学校遺跡でも20数基の石棺墓や土壙墓が検出されている。

おごもり遺跡は、石棺を主体部とする5世紀前半の大規模な方形周溝墓である。石棺内からは豊富な副葬品が出土しており、小竿遺跡や八幡中学校遺跡の被葬者よりも上位に位置づけられる。

瀬戸墳墓群は盆地に北側から流れ込む森川を望む丘陵上にある。このうち1号墳は径約18mの円墳で、中央部に竪穴石室と箱式石棺があり、墳裾にも2基の箱式石棺がある。3世紀末から4世紀初めに比定されるもので、3号主体部からは仿製変形五乳文鏡などが出土した。千人塚古墳は瀬戸古墳西方の台地上にあり、主体部の石棺には4体が埋葬されていた。亀都起古墳は玖珠地域唯一の前方後円墳で、おごもり遺跡のすぐ北方に位置する。全長48mで、円筒埴輪などから6世紀の築造と考えられる。

將軍塚古墳、陣ヶ台姫塚古墳、陣ヶ台彦塚古墳は、盆地南側の伐株山からのびる丘陵上に位置する円墳である。鬼塚古墳は7世紀初頭前後の円墳で、横穴式石室内に同心円文等の装飾がみられる。

鬼ヶ城古墳は瀬戸古墳南方の丘陵上に所在する。主体部の横穴式石室内に線刻があり、7世紀初頭前後に比定される。

横穴墓群は各所にみられ、このうち発掘調査が実施されたものは、本遺跡に加え四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群、志津里横穴墓群などがある。四日市上ノ原横穴墓群、鷹巣横穴墓群は瀬戸古墳に西方に位置するもので、6～7世紀にかけての埋葬が確認されている。志津里横穴墓群は、盆地に北側から流れこむ太田川を望む位



## 第2章 遺跡の位置と環境

置にある。これらの横穴墓群の分布から、古墳時代後期には盆地周辺部のみならず、盆地に流れ込む河川流域にも有力な勢力が成長していたことが分かる。

集落として、西田遺跡、冷酒庵B遺跡などがある。両遺跡とも盆地内南側の緩傾斜地に立地しており、5～7世紀代のカマド付竪穴建物跡などが確認されている。近接して鬼塚古墳がある。

このほか治別当遺跡からは、古墳時代初めに比定される鍬などの木製品が出土している。遺跡は盆地に北側から流れ込む森川沿いの低地に立地し、導水施設などの可能性も考えられ杭列などが検出されている。

**古代** 古代に位置づけられる遺跡は少なく、西田遺跡、四日市遺跡などが確認されているのみである。

西田遺跡では、7世紀後半～8世紀初めの大型土坑から須恵器円面硯が出土している。しかし、遺跡の調査区内からは円面硯と同時期の建物等が検出されていないため、どのような施設に伴うものかは判然としない。古代における玖珠地域の状況を知る手掛りとして、福岡県の太宰府蔵司西地区出土の木簡資料がある。木簡には「久須評」の文字がみえ、玖珠の地に「評」が存在したことが分かる。奈良時代の玖珠群は3郷からなる小郡である。このうち小田郷は、西田遺跡の所在する現在の小田地区を中心とする地域と推定される。西田遺跡は小田地区の有力な集落と考えられ、郡（評）衙や郷あるいは駅に係わる施設があった可能性も考えられる。

四日市遺跡では9世紀代の木棺墓が検出されている。木棺墓内からは隅入方鏡、越州窯青磁唾壺などが出土しており注目される。

**中世** 中世の玖珠郡は「国侍持切ノ国」と呼ばれ、郡内には豊後清原氏の系譜をひく森氏、小田氏、松木氏、魚返氏、古後氏などの勢力が割拠する。これら諸氏に係わる山城跡が郡内各所にみられ、伐株山城跡、角埋山城跡、野田山城跡、魚返城跡、古後城跡など約20箇所が確認されている。

このうち伐株山城跡は、記録にみえる高勝寺城、玖珠城にあたりと考えられ、14世紀の南北朝期や16世紀の豊薩戦争の際に戦いの舞台になったことが分かる。山上には、土塁により囲まれた一辺25～60mの方形あるいは長方形の遺構が7箇所みられ、発掘調査により16世紀代を中心とする遺物が多数出土している。

角埋山城跡は、16世紀前半に大友氏が玖珠郡衆に対し堀の拡張などを含めた在番を命じるなど、大友氏にとって軍事上重要な城として把握されていたことが分かる。この角埋山城跡には、大友氏除国後の16世紀末に豊臣配下の毛利高政がはいる。現在残る穴太積みの石垣はその際に築かれたものと考えられており、中世の山城から近世城郭に変わる姿がみられる。発掘調査により、門跡なども確認されており、近世城郭初源期の姿を留めるものとして全国的にも注目されている。

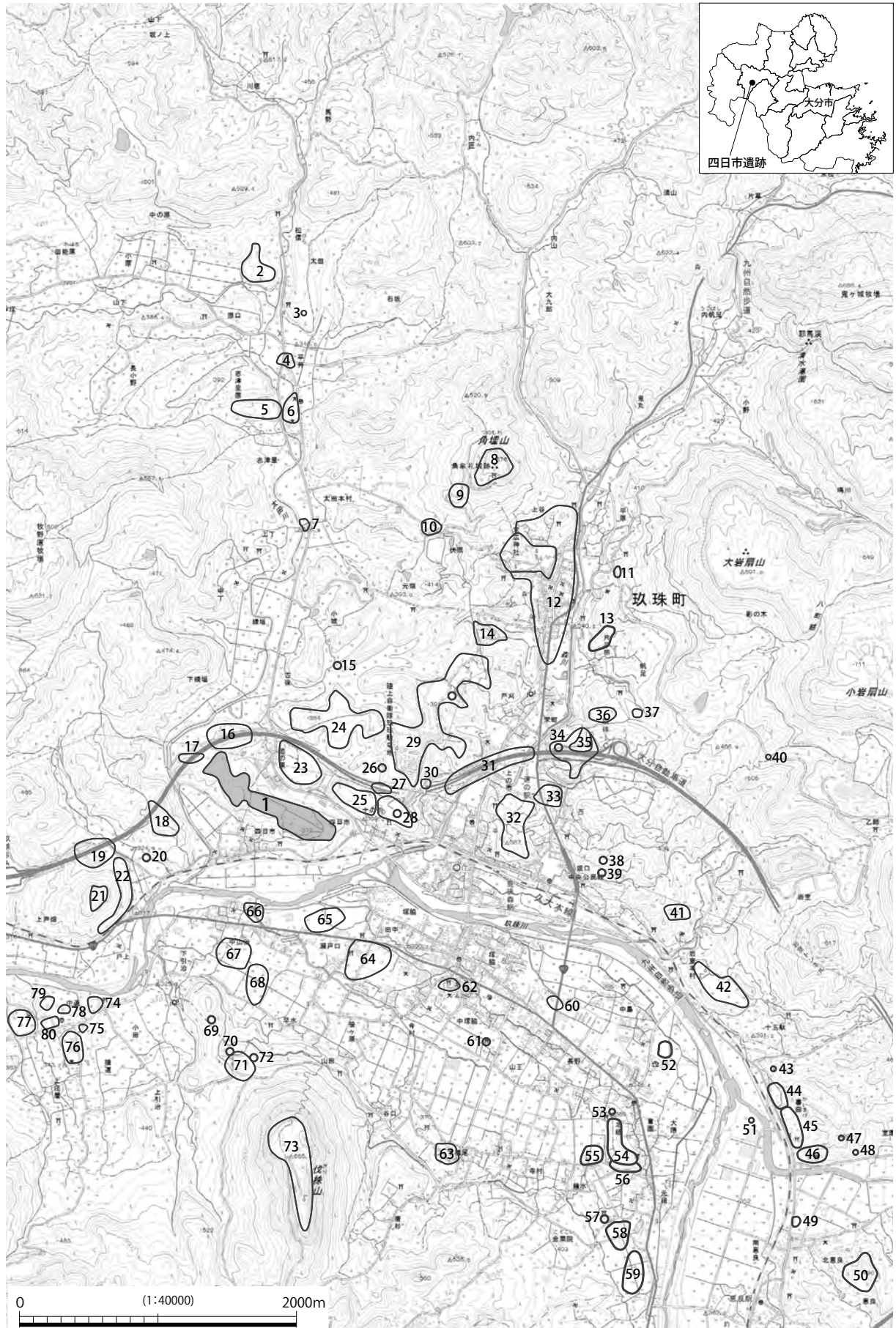
また、野田城跡、松木城跡、岐部城跡などでは多数の畝状堅堀が確認されている。これらは比較的小規模な山城ではあるが、高い防御機能を有する。これらの山城は各々玖珠盆地の西方、東方、南方の入口を守る位置にあり、角埋山城跡とあわせ、玖珠盆地防衛システムを担うものであったものと思われる。

このほか、小岩扇山の中腹に位置するアタタメ遺跡からは、火葬骨が納められた褐釉四耳壺が出土している。時期的には12、13世紀頃のものと考えられている。遺跡は玖珠盆地を一望できる場所で、自然地形を利用した径約8mの塚状の場所に埋納されていた。

**近世** 江戸時代になると、慶長6年（1601）に四国から久留嶋康親が玖珠・日田・速見三郡1万4千石で玖珠郡森に入部する。久留嶋氏は、文禄・慶長年間に毛利氏が近世城郭として整備に着手した角埋山城には入らず、麓に陣屋を築造し、東側に城下町を整備した。また、陣屋北側および南西側に家臣団の屋敷を配置した。これらの地区には、現在でも武家屋敷の佇まいが残る。

森藩は、豊後国内で居城を持たない唯一の藩であったため、代々の藩主は居城築造が悲願となっていた。八代藩主通嘉は、陣屋の裏手に三嶋宮の造営を行なった。これは石垣を整備するなどの大規模な土木工事であったため、三嶋宮造営に名を借りた擬城建設であったとも言われている。

平原遺跡では、石畳の道路が確認されている。この道路は、地元では「参勤道」と呼ばれ、昭和30年代までは生活道として利用されていた。城下から東方の丘陵に上がり、別府湾に面する日出町豊岡の頭成港まで続く道路である。幅2～3mで、0.3～1.0m程の石が敷かれている。



第2-2図 遺跡分布図 (1/40000) (国土地理院発行2万5千分の1地形図「豊後森・天ヶ瀬」に加筆)

第2章 遺跡の位置と環境

番号	遺跡名	時代							番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世			旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世
1	四日市遺跡	○	○	○	○	○	○	○	41	岩室遺跡						○	
2	岩崎台遺跡				○				42	巨ノ原遺跡			○				
3	平井台古墳				○				43	松山1号墳				○			
4	志津里遺跡				○				44	井尻日焼田遺跡			○	○			
5	志津里横穴墓群				○				45	書曲遺跡			○				
6	八幡中学校遺跡		○		○				46	四日市横穴墓群				○			
7	太田遺跡			○					47	二日市古墳				○			
8	角埋山城跡						○		48	二日市洞穴		○					
9	太田巨石遺跡	○							49	五行塚遺跡				○			
10	太田本村遺跡	○							50	恵良城跡						○	
11	平原遺跡							○	51	松山2号墳				○			
12	森城下町跡							○	52	塔ノ本遺跡			○				
13	平原横穴墓群				○				53	船岡山古墳				○			
14	上ノ原遺跡			○	○				54	船岡山石棺群				○			
15	中原古墳				○				55	鎌水遺跡				○			
16	下綾垣遺跡				○	○	○		56	船岡山横穴墓群				○			
17	下綾垣横穴墓群				○				57	亀都起古墳				○			
18	白岩遺跡			○					58	祇園遺跡			○	○			
19	谷ノ瀬遺跡				○				59	おごもり遺跡			○	○			
20	野田古墳				○				60	六十六間遺跡				○			
21	野田城跡						○		61	山王古墳				○			
22	野田山遺跡				○				62	寺山遺跡				○			
23	池の原B遺跡			○	○				63	下横尾遺跡				○	○		
24	池の原遺跡			○					64	瀬戸口遺跡		○	○	○			
25	井ノ尻遺跡			○					65	豆田遺跡			○	○			
26	井ノ尻古墳				○				66	中山田遺跡				○			
27	上ノ原横穴墓群				○				67	小竿遺跡				○			○
28	十ノ釣遺跡				○				68	早水野中遺跡			○				○
29	名草台遺跡			○	○				69	將軍塚古墳				○			
30	鷹巣横穴墓群				○				70	陣ヶ台姫塚古墳				○			
31	治別当遺跡		○		○				71	陣ヶ台遺跡			○	○		○	
32	平台遺跡				○				72	陣ヶ台彦塚古墳				○			
33	西遺跡			○	○				73	伐株山城跡						○	
34	瀬戸古墳				○				74	妙大寺A遺跡		○					
35	瀬戸遺跡			○			○		75	鬼塚古墳				○			
36	平田山土壘跡						○		76	中西遺跡		○		○		○	
37	鬼ヶ城古墳				○				77	西田遺跡		○		○	○		
38	般若寺1号墳				○				78	冷酒庵C遺跡		○		○		○	
39	般若寺2号墳				○				79	冷酒庵A遺跡			○	○			
40	アタタメ遺跡						○		80	冷酒庵B遺跡				○		○	

表1 四日市遺跡周辺の遺跡地名表

### 第3章 第1次調査 - 旧石器時代後期・縄文時代草創期初頭 -

#### 1 経緯

平成14年度に調査を行った第1次調査の弥生時代以降の遺構と出土遺物については、平成29年3月に報告書を刊行している。この遺跡からは、旧石器時代及び縄文時代草創期初頭の遺物も数多く出土した。これらについては整理作業が思いのほか時間がかかり、報告書に掲載することができなかった。調査中、旧石器時代かと思われる資料には石器類や焼礫などが弥生時代の住居址や土坑内から出土したり、遺構検出作業中にローム層内から出土したりしていた。そこで遺構検出作業中に遺物が出土した付近や、調査区内で遺構の分布が少ない部分に旧石器時代遺物探索のトレンチを9か所で設定した(第3図)。遺構の少ない部分の間隙をぬってトレンチを設定したこともあり、いびつな形となった。トレンチで掘り下げを行った結果、遺物は、4、5、7、8のトレンチで出土した。これらのトレンチからは1,000点を超える数量の遺物が出土しているが、紙数の都合から十分な報告ができない。そのため今回は、第1次調査4、5、7のトレンチで出土した資料を報告する。8トレンチで出土した資料と、9次調査で出土しながら未報告となっている資料については当センターが刊行する『研究紀要』等に順次報告を掲載する。

#### 2 基本層位

四日市遺跡の層位の基本層位は、1層：耕作土層、2層：黒色土層、3層：アカホヤ(黄灰色土)土層、4層：黒色土層、5層：暗黄色土層(漸移層)、6層：茶褐色土層(ソフト・ローム)、7層：黄橙色土層(ハード・ローム)、8層：漆黒色土層(黒色帯)からなる。5層は、ソフト・ロームの最上部が黒色系の土との移行部分である。6層は、やや粘質で、AT〔始良Tnテフラ:30,009±189cal BP (2σ)〕は7層の下半から8層最上部に位置するものと思われる。5層は硬く締まっている。基本的には、大野川中流域の堆積と変わることはない。

#### 3 4トレンチの遺構と遺物

4トレンチは、東西に長い第1次調査区の南壁沿いに約60m、南北方向に最大で10m前後の規模を有する(第4図)。このトレンチ付近は、1層の下に4層が堆積している状況であり、4層の下部もしくは5層上面で遺構検出をしていた。そのため掘削層とその深度は、4層下部もしくは5層上部から開始し、それらの層を10cmから15cm程度掘り下げ、6層の最上部域付近は15cm程度下げた。このトレンチには大きく三つの遺物ブロックが分布している。

トレンチ北西部のロE1区・ロD91区・ロD92区をまたがるように分布するのが1ブロックで、1aと1bのブロックに区分されるが、その境界は明瞭ではない。1aブロックは、ロD91区・ロD92区の境界で、南寄り部分に分布の中心がある傾向は窺えるものの散漫である(第4図・第5図)。1bブロックについては、その平面分布の南端で、石器類の密集部分があり(第6図上段)、比較的大型の石核や剥片類が多いが、チップが少ない。出土層位は、5層(漸移層)が多いが、大型遺物は確実に6層最上部域に含まれており、生活面は6層最上部内に存在するとみられる。

1aブロックの取り上げ記録点数は50点で、削器2点、石核2点、剥片21点、剥片フラグメント9点、チップ4点、礫片1点、自然礫1点からなり、ほかは不明なもの10点である。石材別の器種は、凝灰岩質輝石安山岩30点：削器2点・剥片16点・剥片フラグメント9点、チップ3点、泥岩7点：剥片5点・石核1点・自然礫1点、サヌカイト1点：石核1点、小国系黒曜岩1点：チップ1点、不明石材：礫片1点・器種不明10点である。石材の構成は、凝灰岩質輝石安山岩が多く、次いで泥岩が多い。



第3図 四日市遺跡第1次調査 旧石器トレンチ (1/800)

1 bブロックの取り上げ記録点数は53点で、内訳は削器1点、片刃礫器1点、剥片26点、剥片フラグメント3点、チップ8点、フラグメント1点、石核6点、礫片4点、器種不明3点である。石材別の器種は、**凝灰岩質輝石安山岩**15点：剥片9点・剥片フラグメント2点・チップ2点・石核2点、**泥岩**22点：剥片15点・剥片フラグメント1点・フラグメント1点・チップ3点・石核2点、**泥岩他**6点：片刃礫器1点・剥片1点・チップ1点・石核3点、**安山岩**1点：礫片1点、**推定小国系黒曜岩**1点：剥片1点、**灰色黒曜岩**1点：チップ1点、**石材不明**7点：礫片3点・チップ1点・器種不明3点からなる。

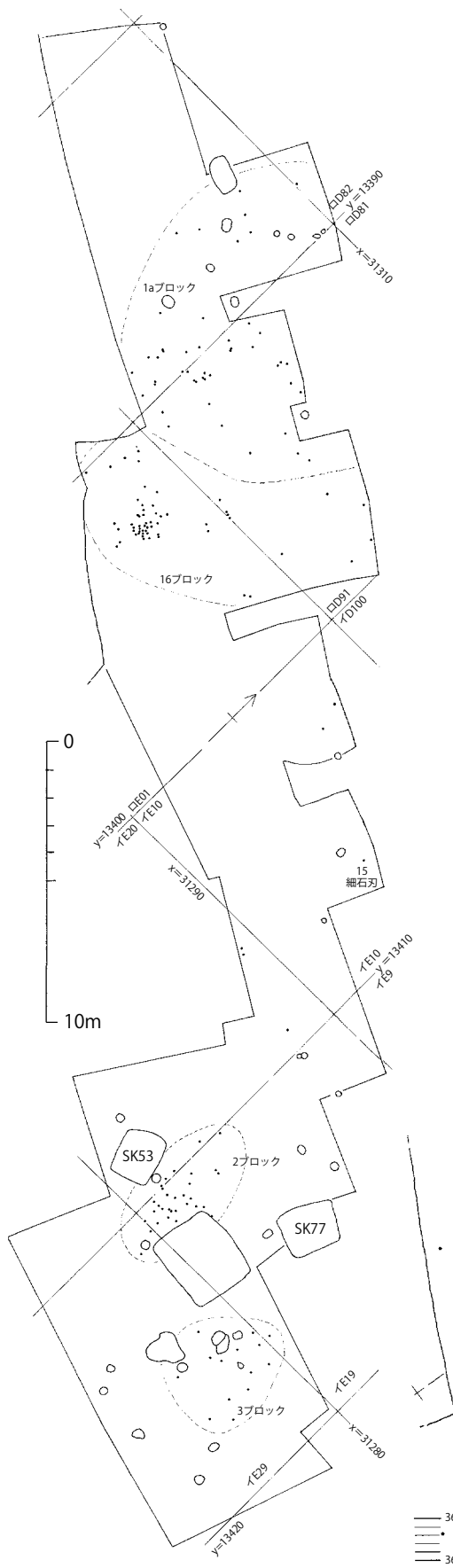
石材については1 aブロック、1 bブロックとも凝灰岩質輝石安山岩と泥岩などの石材が数量的に主体となる。遠隔地産と推定される黒曜岩とサヌカイトは3点であり、数は少ない。

礫や礫片の多くは、被熱しているが、礫群を構成するまでには至っていなかった。

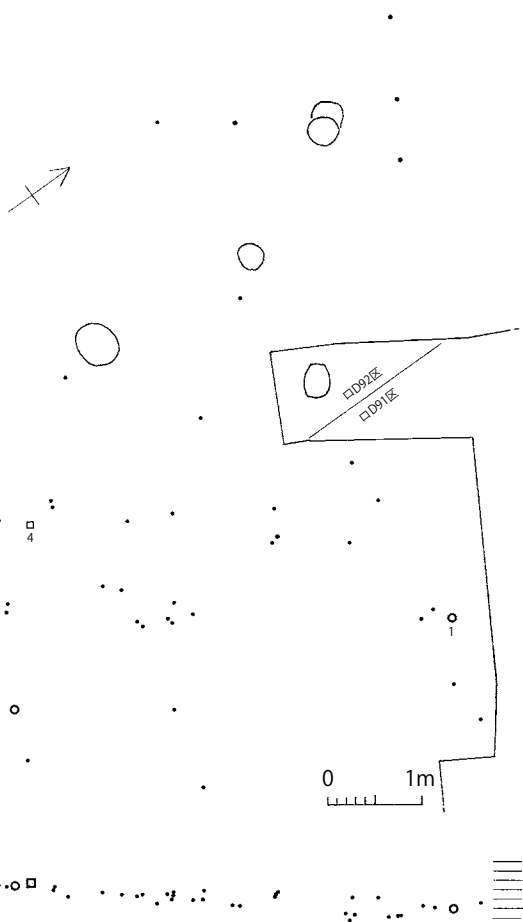
遺物 1 aブロック・1 bブロックとも時期が判定できるようなナイフ形石器などの石器類は皆無であった。凝灰岩質輝石安山岩を石材とするもののうち図示した資料は、1 aブロックでは削器（第7図1・2）と石核（第7図4）を図示した。削器は表面

側に多方向の剥離がある幅広い剥片を素材に用いている。泥岩他を石材とする石核は、角礫を用いた例で、90度近い変化を持つ側面方向へ一方向から打撃剥離を行った痕跡を有する例である（第7図4）。

1 bブロックで図示した凝灰岩質輝石安山岩を石材とするものは次とおりである。表裏両面



第4図 4トレンチの遺物分布



第5図 4トレンチ1aブロック平面・垂直分布図

### 第3章 第1次調査

での打面入れ替えによる幅色の剥片剥離を行った石核であるが（第7図3、第9図12）、後者は両面調整尖頭器の未成品である可能性もある。この1bブロックにおける凝灰岩質輝石安山岩を石材とする典型的な石器は出土していない。一方、泥岩を石材としたものは以下のとおりであるが、やはり典型的な石器は少ない。石核としての剥片剥離痕は小さく、ポジ面を打面として急角度の整形剥離痕が部分的に観察される例である（第8図7）。このほか石器としては緩い勾配を持つ自然礫を打ち欠いた片刃礫器がある（第8図9）。泥岩の石核は、4例を図示した。礫を半裁したかのような剥離面を打面として側面方向に剥離を行った例（第8図8）や、角礫の側面を割り落した後に半円形に周縁を両刃礫器状に打面を入れ替えて打撃・剥離を行った例（第8図10）、立方体形角礫の各面で打面を移動して打撃・剥離を行った石核がある（第8図11）。もう一例は、接合資料で、表裏両面での打面入れ替えによる幅色の剥片剥離を行った石核である（第9図13～14、13+14）。

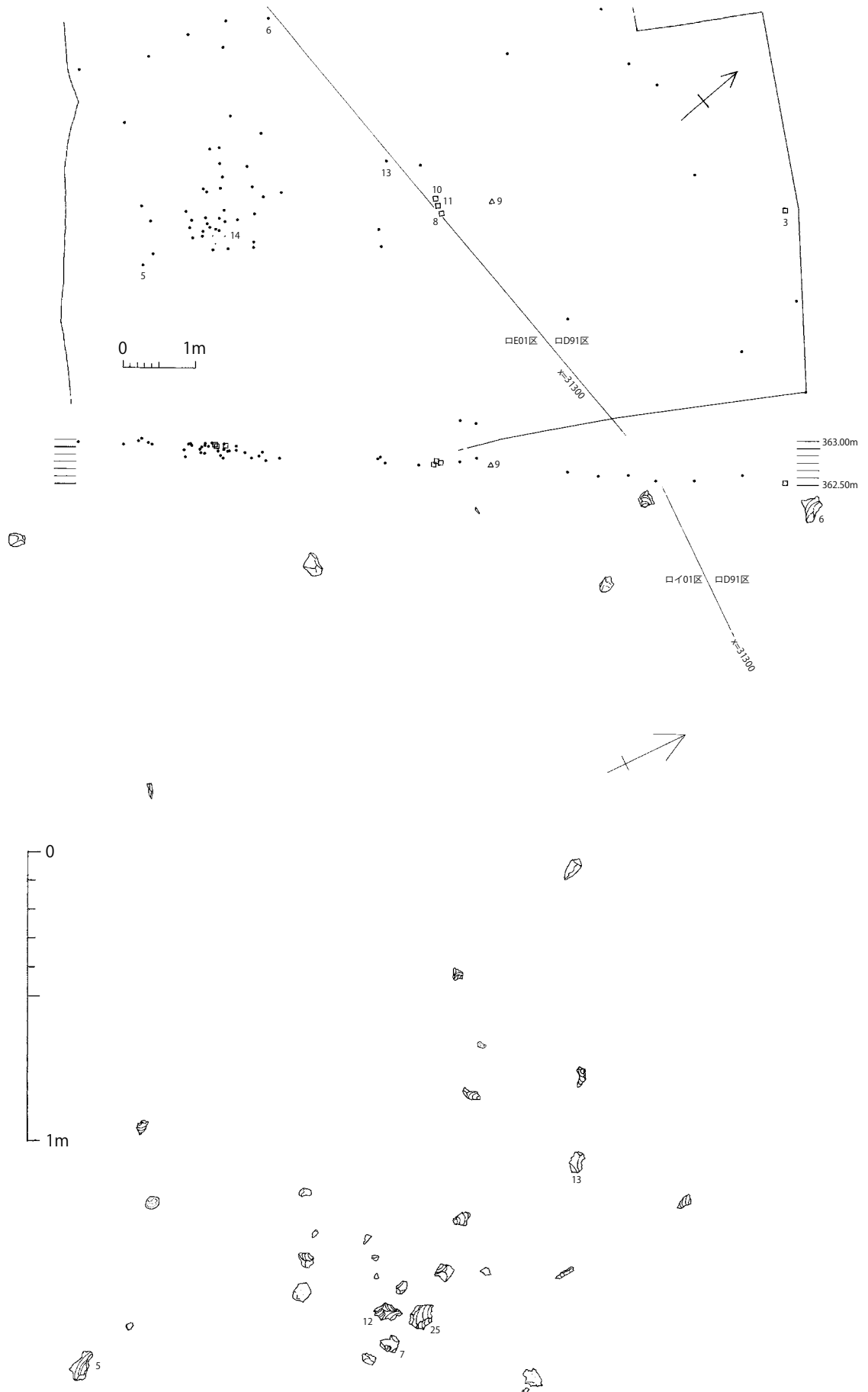
4トレンチの1bブロックと2ブロック間は約20mの間隔が空いている。この間にも散漫ながら遺物が分布している。その中のIE10区で細石刃が1点出土している（第4図・第12図15）。ほかに石器類はなく、4トレンチの石器ブロックとどのような関係にあるのかは不明である。

4トレンチの2ブロックは、IE19の南西部に位置する。2ブロックの規模は、南北約5m、東西2.4mと細長い分布である（第10図上段）。出土層位は、5層及び6層最上部域を中心とした部分に含まれる。2ブロックの取り上げ記録点数は41点で、削器1点、RF 2点、受熱礫1点、尖頭器未成品1点、尖頭器未成品フラグメント2点、剥片14点、剥片フラグメント5点、チップ4点、石核2点、石核フラグメント1点、フラグメント1点、被熱礫1点、礫3点、その他4点である。

石材別の器種は、**凝灰岩質輝石安山岩** 8点：削器1点・RF 1点・剥片4点・フラグメント1点・チップ1点、**泥岩** 18点：尖頭器未成品1点・尖頭器未成品フラグメント2点・剥片9点・剥片フラグメント3点・チップ1点・石核1点・石核フラグメント1点、**泥岩他** 4点：RF 1点・剥片フラグメント1点・チップ2点、**安山岩** 1点：礫1点、**チャート** 1点：石核1点、不明9点：剥片1点・剥片フラグメント1点・被熱礫1点・礫2点・器種不明4点であった。石材については、泥岩の数量が多く、次いで凝灰岩質輝石安山岩の順となる。

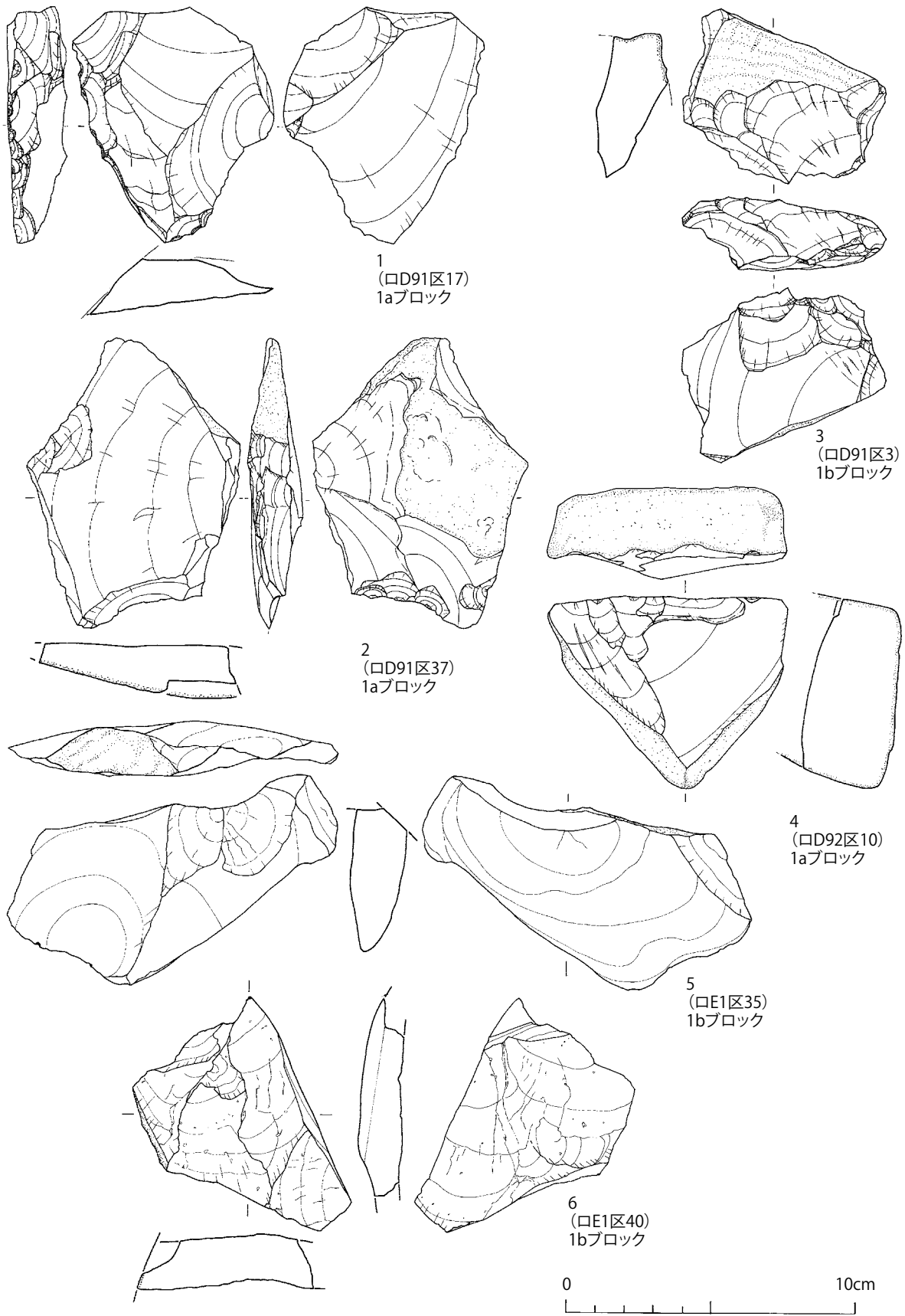
遺物 2ブロックの遺物は、泥岩を石材とするもの4点とチャートを石材とするもの1点を図示した。尖頭器未成品は、幅広の剥片を用いたもので、表面側の緩やかな礫面の湾曲と裏面のポジ面を利用している（第12図16）。周縁部から内側へ、表裏の面を打面として入れ替え、交互に幅広の剥片を打撃により薄く剥離している。そのため器体の横断面が凸レンズ状を呈するようになっている。しかしその剥離は不十分であるが、以上の特徴から両面調整による尖頭器の未成品と推定する。幅広の剥片は大型角礫のコーナーから割り取ったもの（第12図17）、もう一例は、やはり表面に多方向からの剥離痕のある大型の石核から割とられた不定形の大型剥片である（第12図18）。石核は、2点図示した。泥岩を石材とする例は、ほぼ角礫である原石の形態を残した例である（第12図19）。その大きさは高さが6.3cm、横方向幅8.4cm、奥行き幅約6cmであり、a面からみるとほぼ三角形、b面からみると方形を呈するという小型の角礫を用いている。角礫には、角部以外は平坦面であり、角部近くの平坦面を打面として打撃剥離を側面方向に行っている。その剥離面の形と大きさは、貝殻形、幅広など、長さがせいぜい2.5cm前後、幅4cm以下という小型の剥離痕である。そして礫面と剥離面の隣接関係から、剥離は礫面を剥いだだけであり、石器製作に使われる剥片ではない。チャートを石材とする石核も多面体に近いやや扁平で、角礫の形に沿って打面転移を行ったことを示している（第12図20）。

ブロック外の石器 4トレンチの1bブロックと2ブロックの間に散発的に遺物が分布する。この間に腰岳・牟田系の黒曜石を用いた細石刃がある（第12図15）。しかしブロックとの関係は不明。

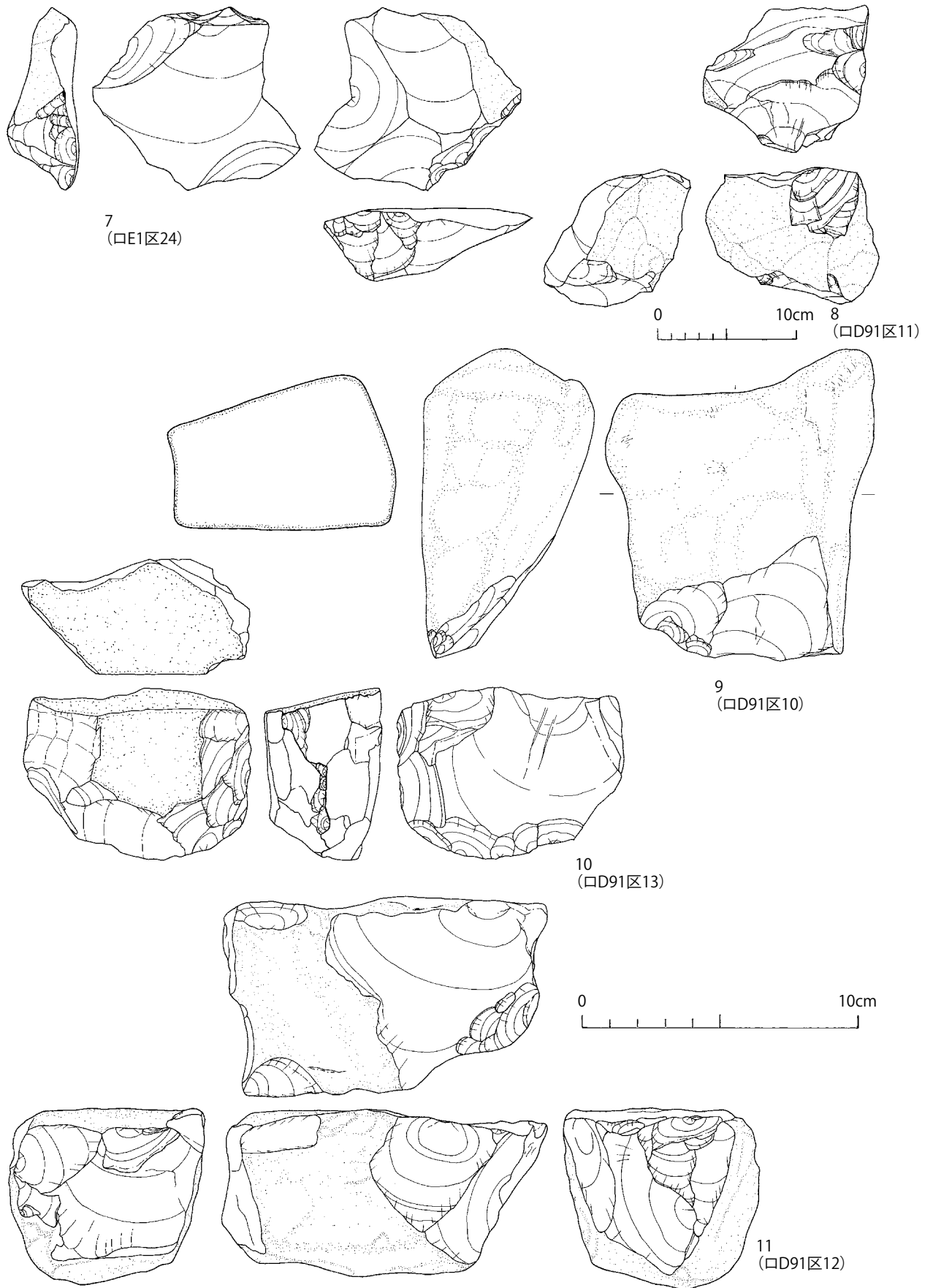


第6図 4トレンチ1bブロックの遺物分布図 ※番号は挿図番号に同じ

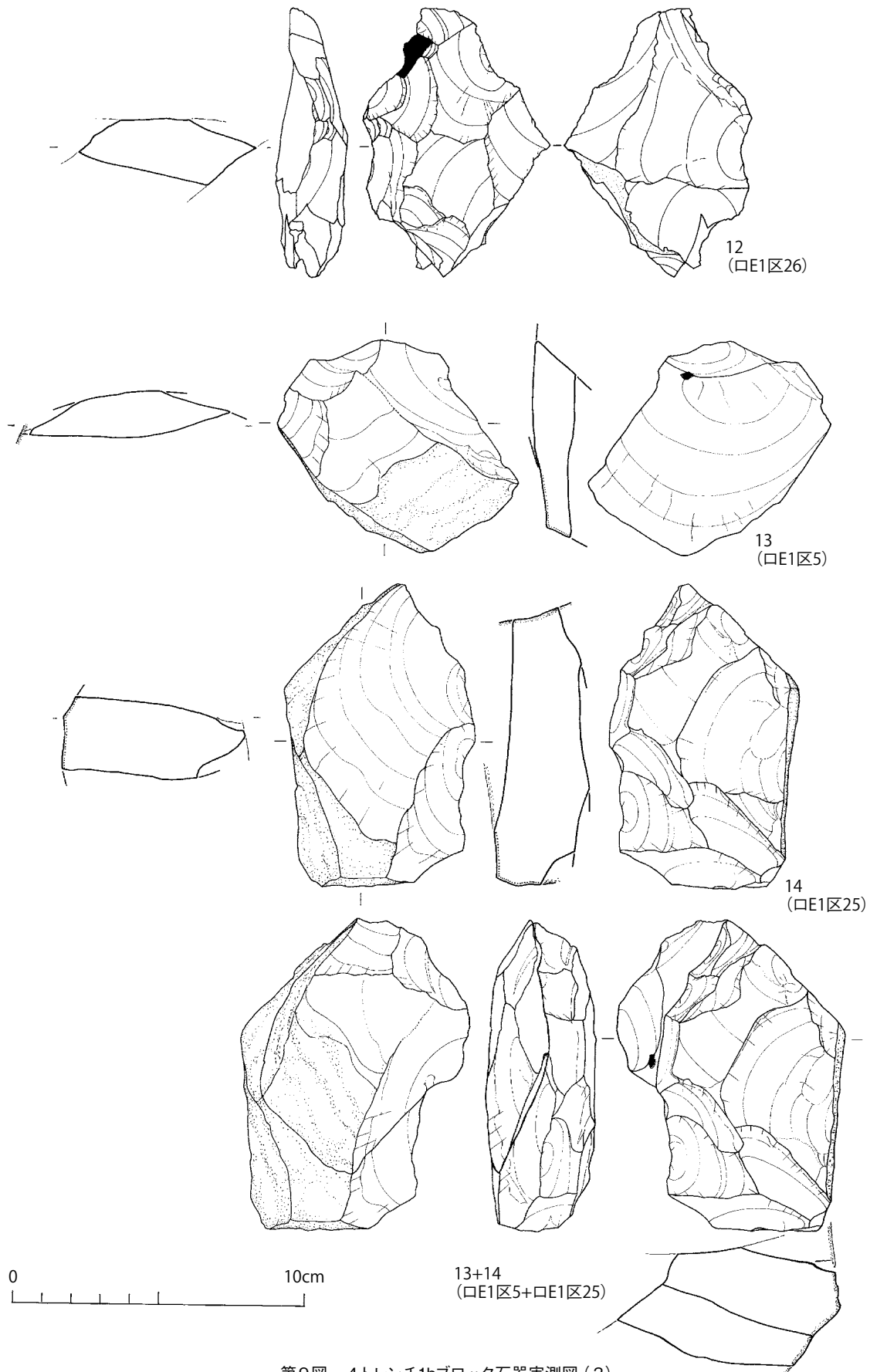




第7図 4トレンチ1aブロック・1bブロック(1) 石器実測図



第8図 4トレンチ1bブロック石器実測図(2)



第9図 4トレンチ1bブロック石器実測図(3)

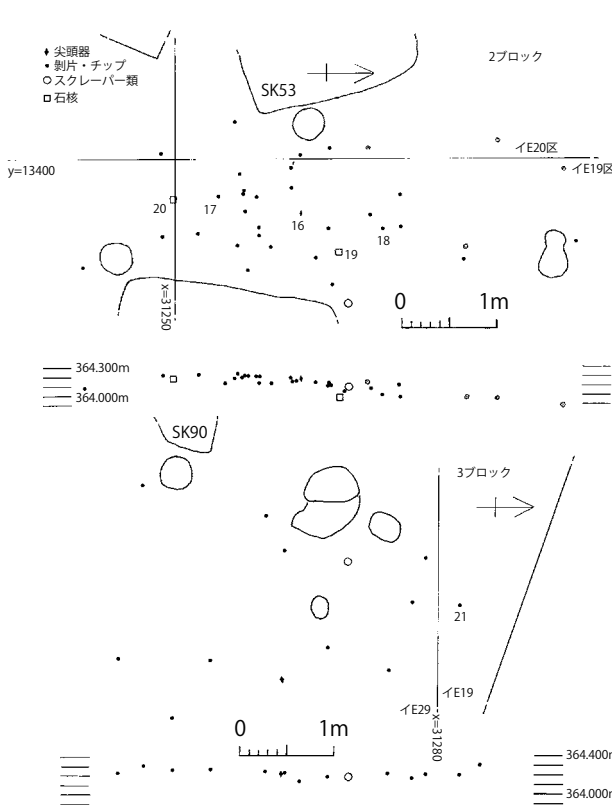
4トレンチの3ブロックは、2ブロックの南西2m地点で、イE29の北辺を中心とした場所に位置する（第10図下段）。3ブロックの規模は、南北約3.6m、東西3.2mの楕円形に散漫な分布をしている。出土層位は、5層及び6層最上部域を中心とした部分に含まれる。3ブロックの取り上げ記録点数は14点で、搔器1点、尖頭器未成品1点、剥片7点、剥片フラグメント4点 チップ1点である。

石材別の器種は、**泥岩**7点：尖頭器未成品1点・剥片3点・剥片フラグメント3点、**ガラス質溶結凝灰岩**1点：搔器1点、**凝灰岩質輝石安山岩**6点：剥片4点・剥片フラグメント1点・チップ1点である。石材については、泥岩と凝灰岩質輝石安山岩がほぼ同数である。

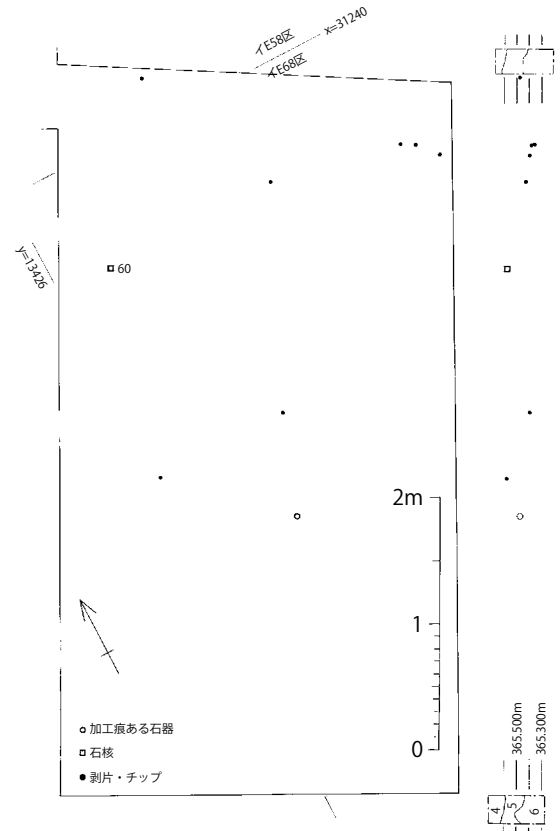
遺物 3ブロックの遺物は、泥岩を石材とするもの1点を図示した（第16図21）。尖頭器未成品は、巨大な角礫から輪切りにするように幅広の盤状剥片を割り取り用いたもので、縦13cm・幅11.5cm・2.7cm前後の規模である。そのためa面側に素材剥離時のポジ面、b面に先行する盤状剥片剥離痕であるネガ面が大きく残り、横断面形は平行四辺形を呈する。この盤状剥片素材の縁を、表裏交互に打面を入れ替え、打撃剥離による幅広の剥片を剥離して調整を開始し始めた段階である。その技法は縁部から奥行きのある剥離を行い、縁部を両刃状にする意向が窺える。交互に打面を入れ替えて調整していく技法は、4トレンチ2ブロックの尖頭器未成品（第12図16）と共通する。

5トレンチは、1次調査区の1号墳北側にあつて東側に珍珠盆地を直下に臨む台地の端部に位置する。このトレンチからは、2点の旧石器が出土した。ここは1層の耕作土の下がかなり削平され、いきなり7層面が露出した。出土層位は8層の黒色帯中で、AT下位に相当する。

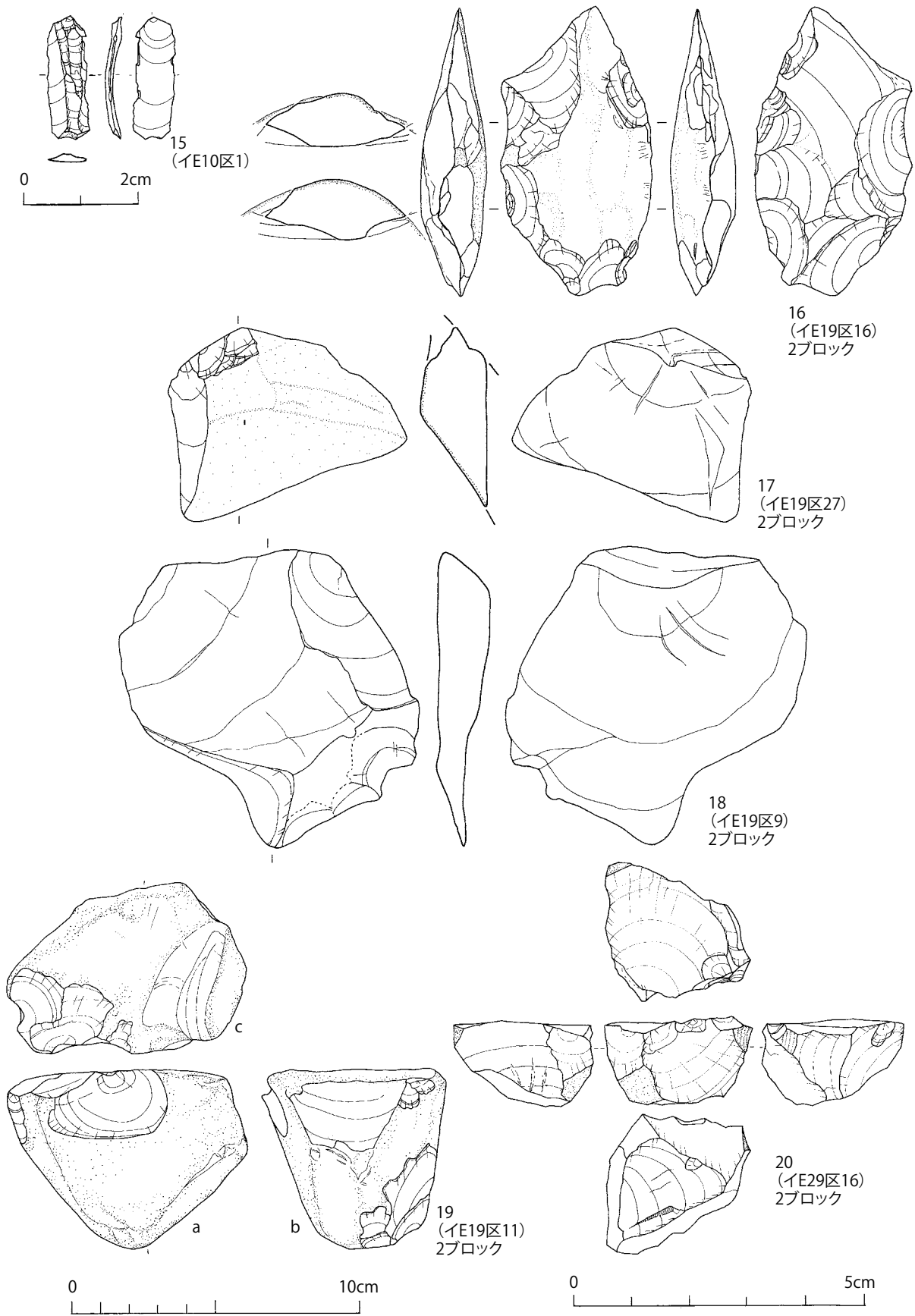
遺物 出土したのは2点だけで、二側縁加工のナイフ形石器の破損品（第16図22）と裏面に鋸刃状の刃部を有



第10図 4トレンチ2ブロック（上段）・3ブロック平面図（下段）



第11図 8トレンチ1ブロック平面・垂直分布図



第12図 4トレンチのブロック外と2ブロックの石器実測図

する削器（第16図23）であり、いずれも西北九州産と推定される灰色黒曜岩である。

#### 4 7トレンチ・8トレンチの遺構と遺物

7トレンチは、第1次調査区東南の1号墳の北東イE58区に位置する。この付近の微地形は平坦な場所であり（第3図）、若干の拡張部分はあるものの、約5.5×約6mで約26.63㎡前後の方形トレンチである（第13図）。この付近は3層：アカホヤ層下の、4層：黒色土層の中位付近まで弥生時代遺構の検出面として掘り下げていた。この4層の下部もしくは5層上面で遺構検出をしていた。そのため掘削層とその深度は、4層の中位から下部で掘り下げを開始した。

7トレンチの設定後、4層下部域から5層内まで10cm程度掘り下げたところで夥しい石器類が出土しはじめた。遺物量は5層内で最も多く、次いで6層上部域（ソフト・ルーム上部）に多い。6層上部域は、5層との層理面から下に10cm程度の間であり、この領域に大型の石器類が多く、生活面の存在が予測される。石器類は7トレンチのほぼ全域に広がるが、N-40°-Wの角度で横断するような状況で分布する。その間に環状分布する部分がある。石器類は拳大以上の大型遺物も多い。これをブロック区分するのは難しいので、7トレンチの1ブロックとして把握し、報告する。

7トレンチ1ブロックの取り上げ記録点数は455点で、パイフェイス1点、尖頭器未成品フラグメント1点、

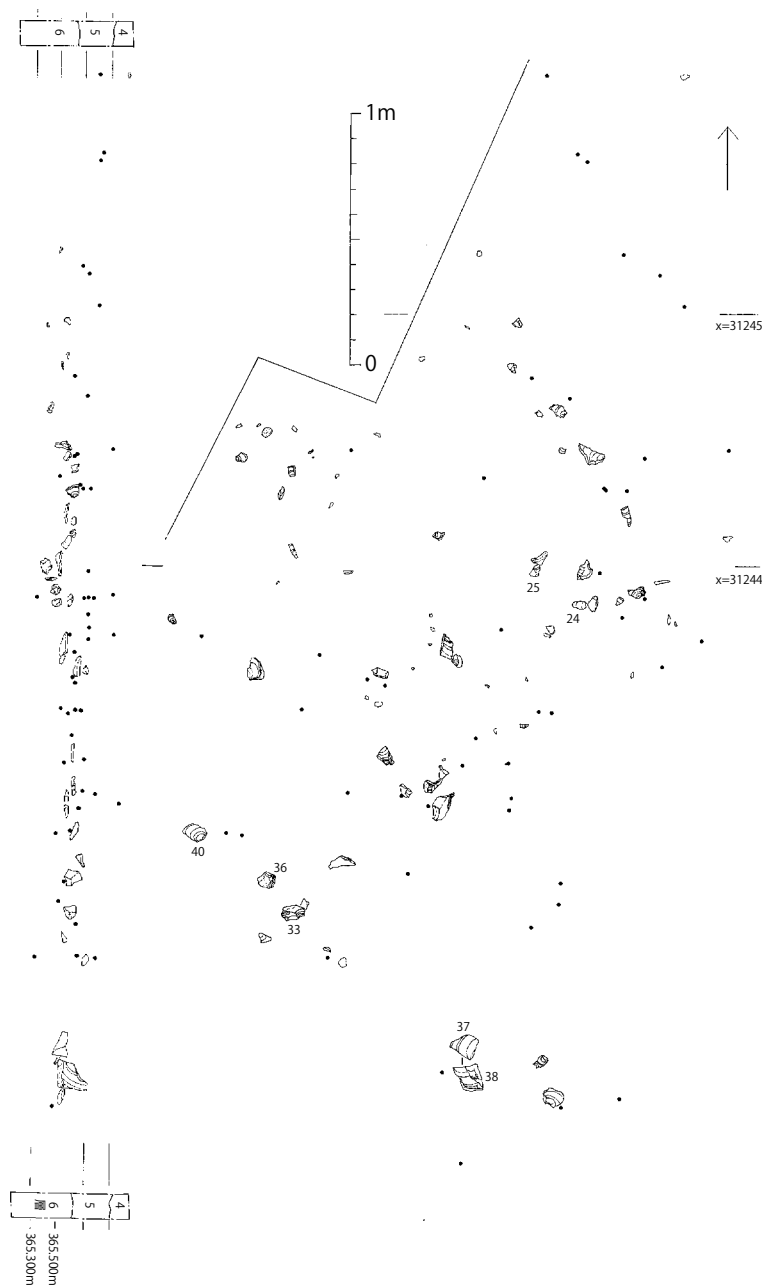


第13図 7トレンチ 1ブロック詳細平面分布全体図

第3章 第1次調査

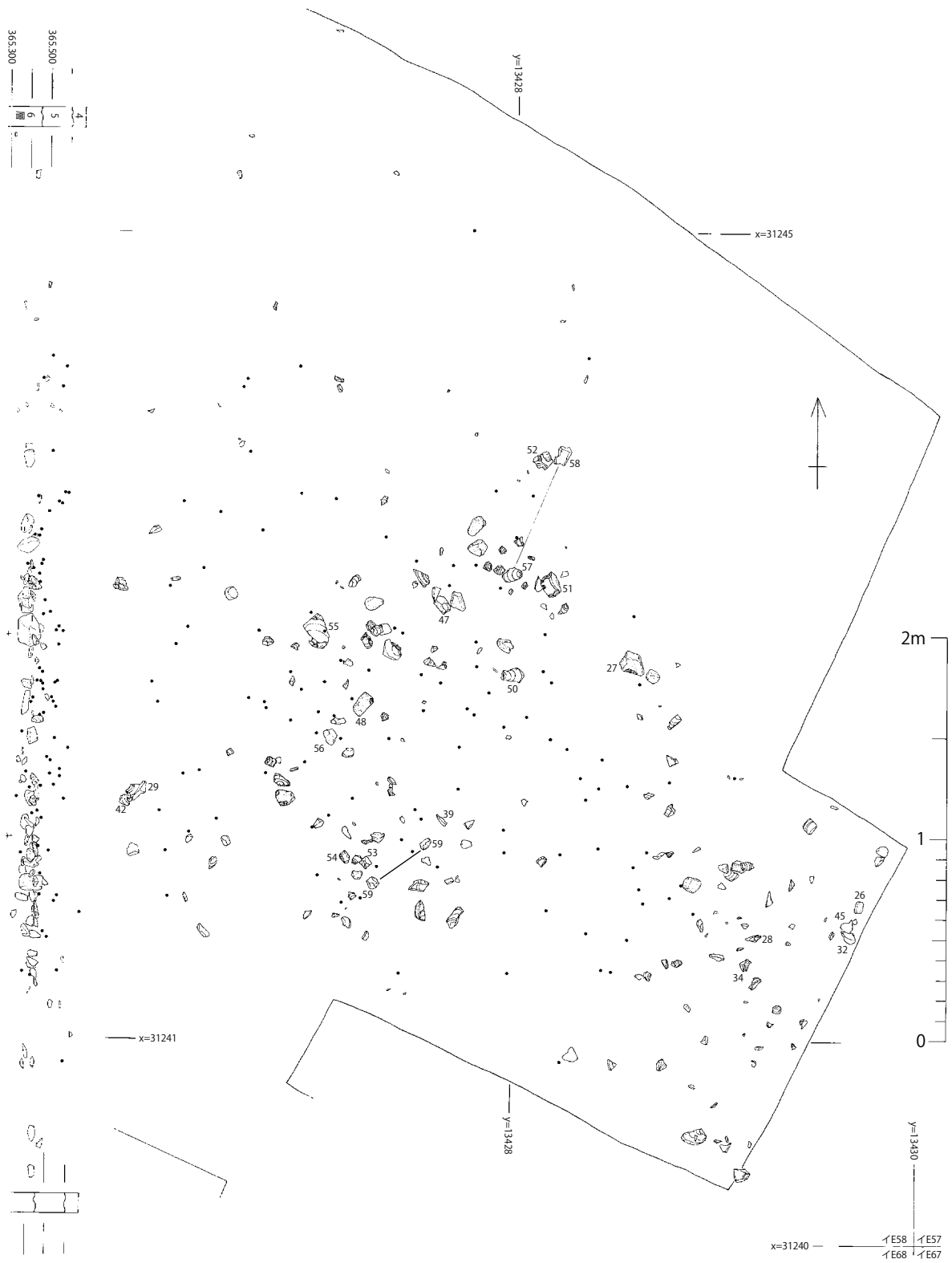
尖頭器素材1点、搔器1点、削器2点、削器フラグメント2点、剥片220点、剥片フラグメント67点、礫器1点、その他のフラグメント12点、チップ103点、破砕破片1点、原石3点、石斧未成品1点、石核24点、石核フラグメント3点、敲石4点、赤化礫4点、配石4点である。

石材別の器種は、**泥岩**201点：搔器1点・削器1点・原石1点・石斧未成品1点・石核14点・石核フラグメント3点・その他のフラグメント3点・尖頭器素材1点・剥片117点・剥片フラグメント38点・チップ19点・赤化礫1点・両刃礫器1点、**泥岩**49点：削器フラグメント1点・剥片19点・剥片フラグメント4点・チップ21点・石核1点・自然礫2点・器種不明1点、**泥岩／凝灰岩質輝石安山岩**1点：原石1点、安山岩1点：赤化礫1点、**角閃石安山岩**2点：敲石2点、**ガラス質溶結凝灰岩**1点：剥片1点、**凝灰岩**2点：赤化礫2点、**凝灰岩質輝石安山岩**187点：円形バイフェイス1点・尖頭器未成品フラグメント1点・剥片79点・剥片フラグメント23点・チップ61点・破砕破片1点・石核7点・原石1点・削器1点・削器フラグメント1点・その他のフラグメント8点・器種不明3点、**輝石安山岩**3点：敲石2点・石核1点、砂岩1点：配石1点、**不明石材**5点：チップ1点・石核1点・礫1点・自然礫2点であった。



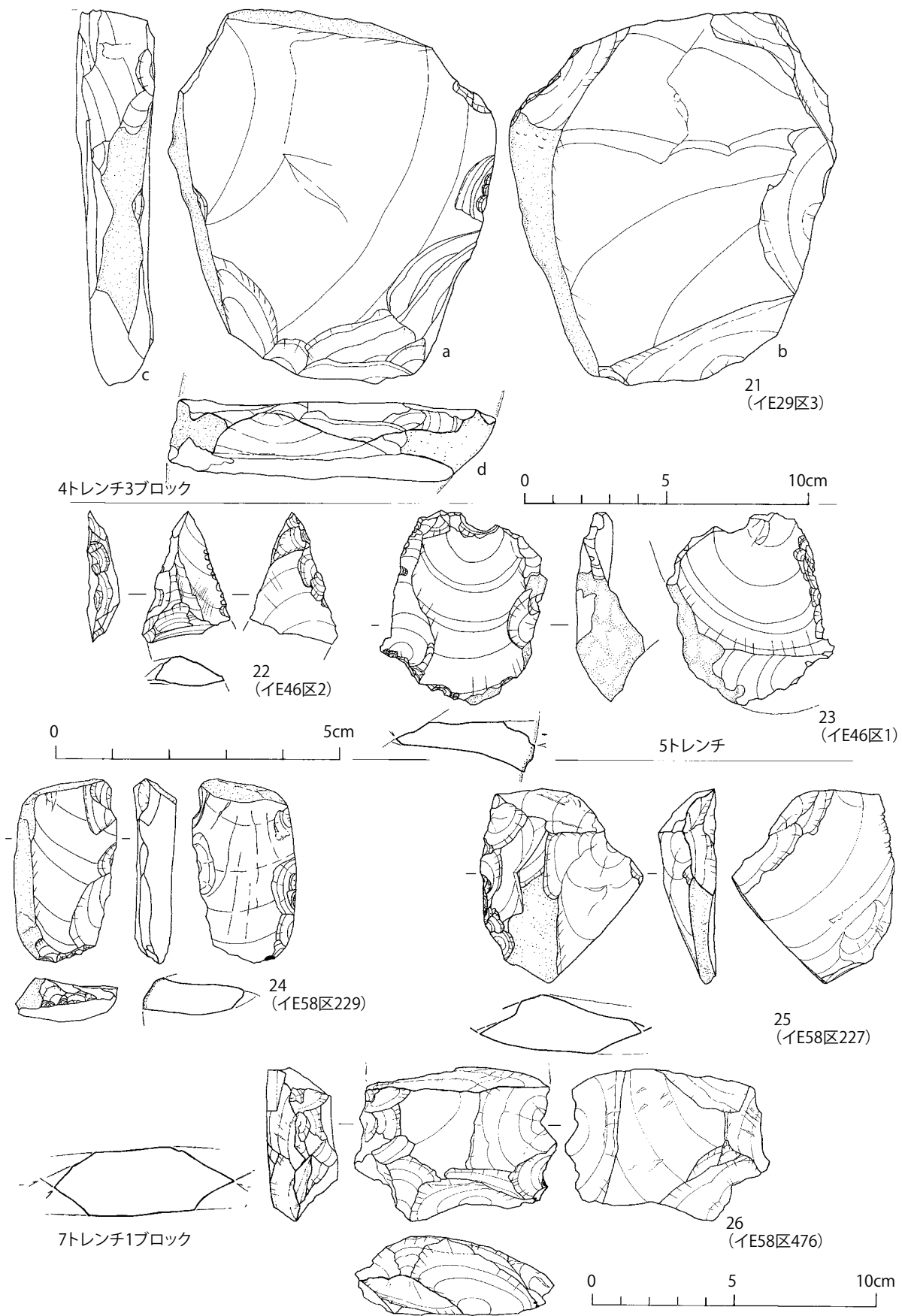
第14図 7トレンチ 1ブロック西半詳細平面分布図

遺物 本遺跡を代表する石材である泥岩から割り取られた石器類の形態上の特徴を見てみたい。搔器は1点だけであり、打面と左辺部に礫面を残す縦長剥片を素材としている(第16図24)。縦に長いのはこの例だけであることから組織的な割り取りではなく、礫面の位置から角礫の角部付近から剥離されている。削器は右側縁側の礫面と表面側の礫面の角度から角礫素材であることが分かる(第16図25)。この例は、素材端部を扇形になるように整形するが、刃部角度は急傾斜ではない。石斧の未成品は、部厚く幅広い素材を用い、最初に裏面側、次に表面側を大きく剥離している(第16図26)。断面形が急角度でないことから、石核としての割り取りではなく、面的調整を意図した剥離痕と推定する。両刃礫器は、平面形が角のとれた台形で、表裏はやや扁平な角礫を素材に用いる(第16図27)。近位の幅広い部分の端部付近の断面が薄くなっており、ここを表裏両面から剥離を加えている。剥片は二例を図示している。一例は、角礫の角部を剥離後に、その下位の角部を取り込むことで先細りとなる剥片を割りとした剥片である(第17図28)。剥片の二例目は、幅

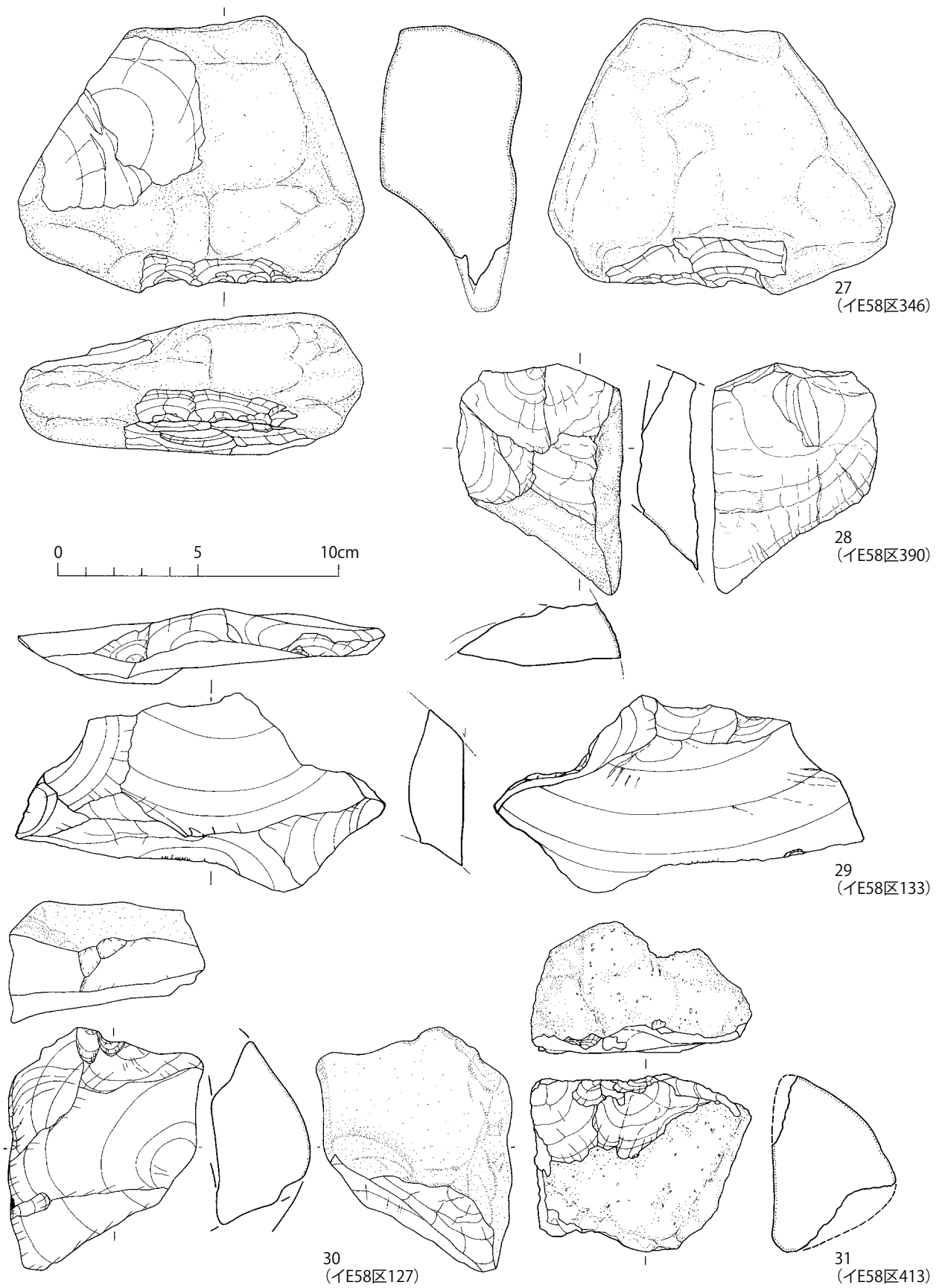


第15図 7トレンチ 1ブロック東半詳細平面分布図

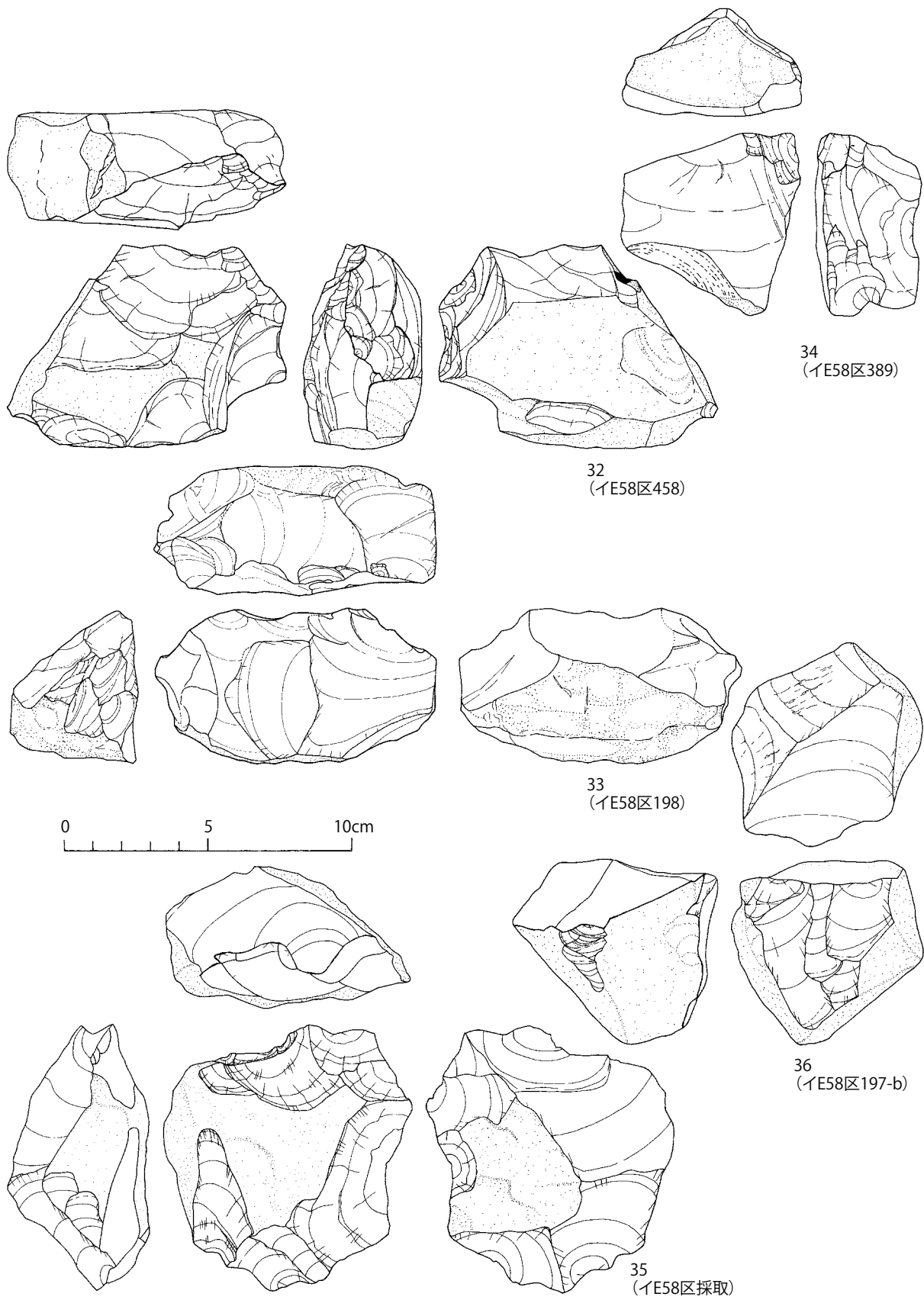




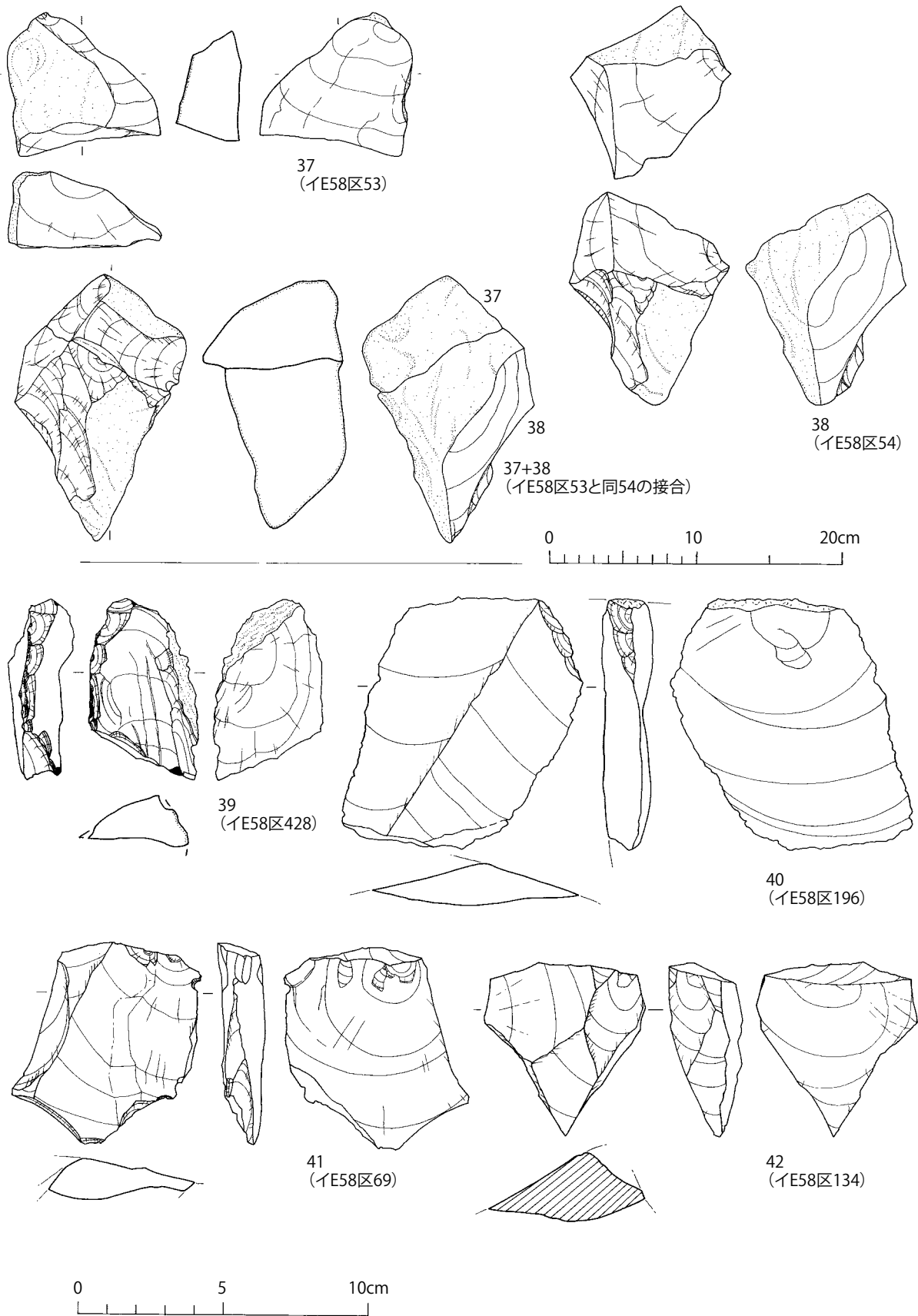
第16図 4トレンチ3ブロック、5トレンチ、7トレンチ1ブロックの石器



第17図 7トレンチ1ブロックの石器



第18図 7トレンチ1ブロックの石器



第19図 7トレンチ1ブロックの石器

### 第3章 第1次調査

広い石核の表裏両面の短軸方向から幅広剥片を割り取った例で、打面部や表面側、裏面のポジ面に剥離痕が残る(第17図29)。

泥岩の石核は、10例を図示している。これを分類するとA 1類からB 4類に分類できる。

A 1類は、角礫を縦位に配置し、頂部に打面を作出するか、礫面を打面とし、その後小口や側面を上方・下方からの剥離痕が観察されるものである(第20図45)。

A 2類は、やや扁平気味を呈する角礫の周辺部に作出した剥離面(打面)もしくは礫面を打面として僅か平坦な方向に向け、周囲から剥離作業を行う例である(第17図30、第18図32・35)。この中には、表側を中心に剥離が進行している例(第17図30)と、剥離が裏側にも行われ、あたかも円盤形石核を呈する例がある(第18図32・35)。この種類の石核から剥離された推定されるのが、削器である(第16図25)。この場合は、前者から後者へと剥離が進行する場合が想定できる。

A 3類は、やや細長い角礫の形状からか、主に短軸方向からの剥離作業が観察されるものである(第18図33)。この場合、角礫の断面が部厚い断面の場合は角柱の短軸方向の各面に沿って剥離が展開される例である(第18図33)。また、細長扁平ぎみに角礫の短軸方向の表裏両面で剥離が行われる例が想定できる。後者の場合の結果として剥離されたのが前述した横長の剥片である(第17図29)。

B類は剥片もしくは分割剥片を素材とする石核である。

B 1類は、素材剥片を縦位に配置し、頂部に打面を作出後に小口や側面の上方・下方からの剥離痕が観察されるものである(第20図46)。接合資料も大きくはこの類に相当するのかもしれない(第19図37+38)。

B 2類は、扁平な剥片の周辺から求心的に剥片剥離を行う円盤形の例である(第20図43)。

B 3類は、やや細長く扁平な剥片素材の短軸方向からの剥離作業が主に観察されるものである(第20図44)。

B 4類は、幅広く扁平な剥片を素材とし、裏もしくは表面を打面として、打角が直角になるように幅広い剥片剥離を行う例である(第18図34)。本類はB 2類の前段階に相当するのかもしれない。

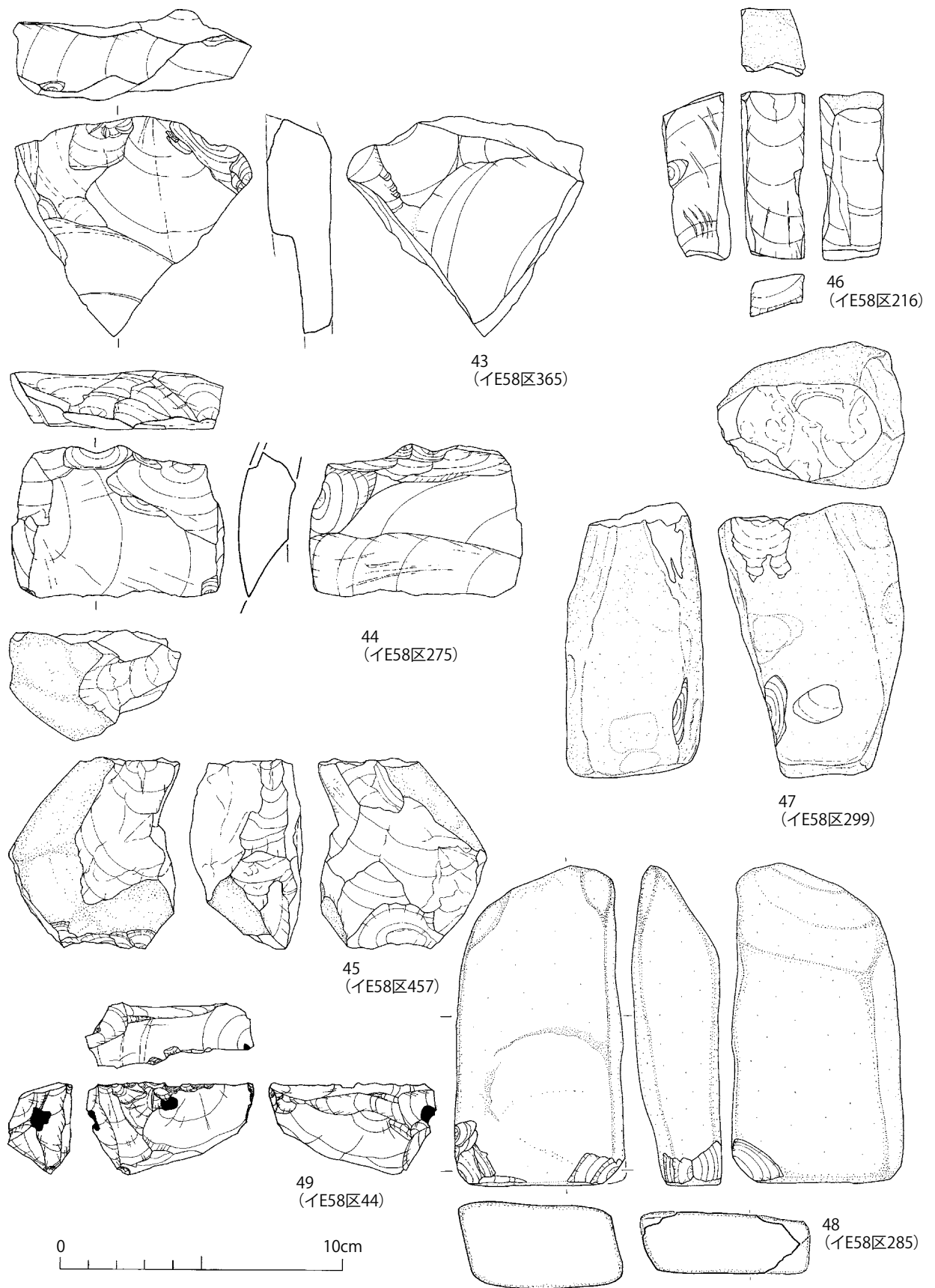
原石は、2点図示している。一例は部厚いが、細長い角柱礫であり、上端を輪切り状に割り取っている(第20図47)。この原石の礫表面二か所に石見と思われる薄い小剥離痕がある。形状からするとA 1類石核としての使用が想定できる。もう一例は、細長く長方形に近い盤状の原石であり、厚さが約3cmの横断面は平行四辺形を呈する(第20図48)。この形状と規模からすると石核素材としての運用は難しく、槍先形尖頭器の素材と推定する。器体の下端に接する側縁部に石見ともみられる剥離痕がある。右側の小剥離痕は、打面を入れ替えることで表裏に剥離を施しており、槍先形尖頭器の先行剥離の可能性はある。

次に凝灰岩質輝石安山岩を石材とした石器類について報告する。

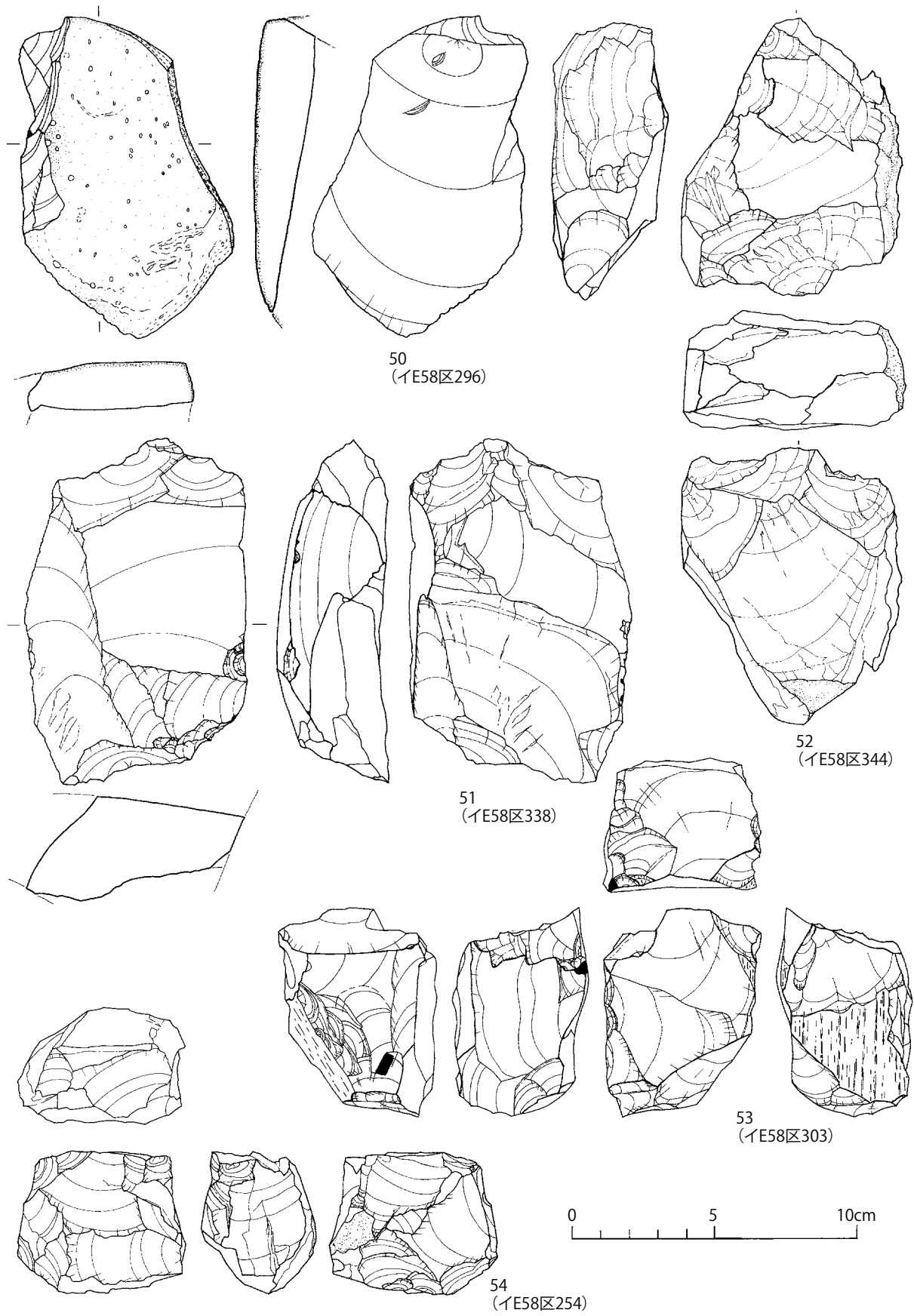
凝灰岩質輝石安山岩を石材とした加工痕を有する石器は、2点を図示している。一例めは、ノ字状に剥離軸が斜行する剥片を素材としており、表裏のネガ面とポジ面の剥離方向が異なっている(第19図39)。礫面を打面としており、角礫由来の石核から剥離されたと推定する。端部を欠くが、削器としての加工痕は片側縁部に加えられている。二例目は、表裏のやや斜行するネガ面・ポジ面とも礫面を打面とする剥離である(第19図40)。その大きさからかなり大きな角礫由来の石核から連続的に剥離されたことが窺える。削器としての加工は、打面と接する右側縁側に3回の剥離で形成される。しかし削器の加工としては極めて中途半端で、未成品もしくは加工痕のある剥片とするべきかもしれない。

剥片は3点図示しているほか、接合資料としてほかに2点図示している。打面が剥離面で、裏面の素材剥離時のポジ面剥離軸とは違う方向の剥離痕が表面側のネガ面に観察される例がある(第19図41・42)。これらのことから泥岩の石核におけるB 2類に近いものから剥離された可能性がある。

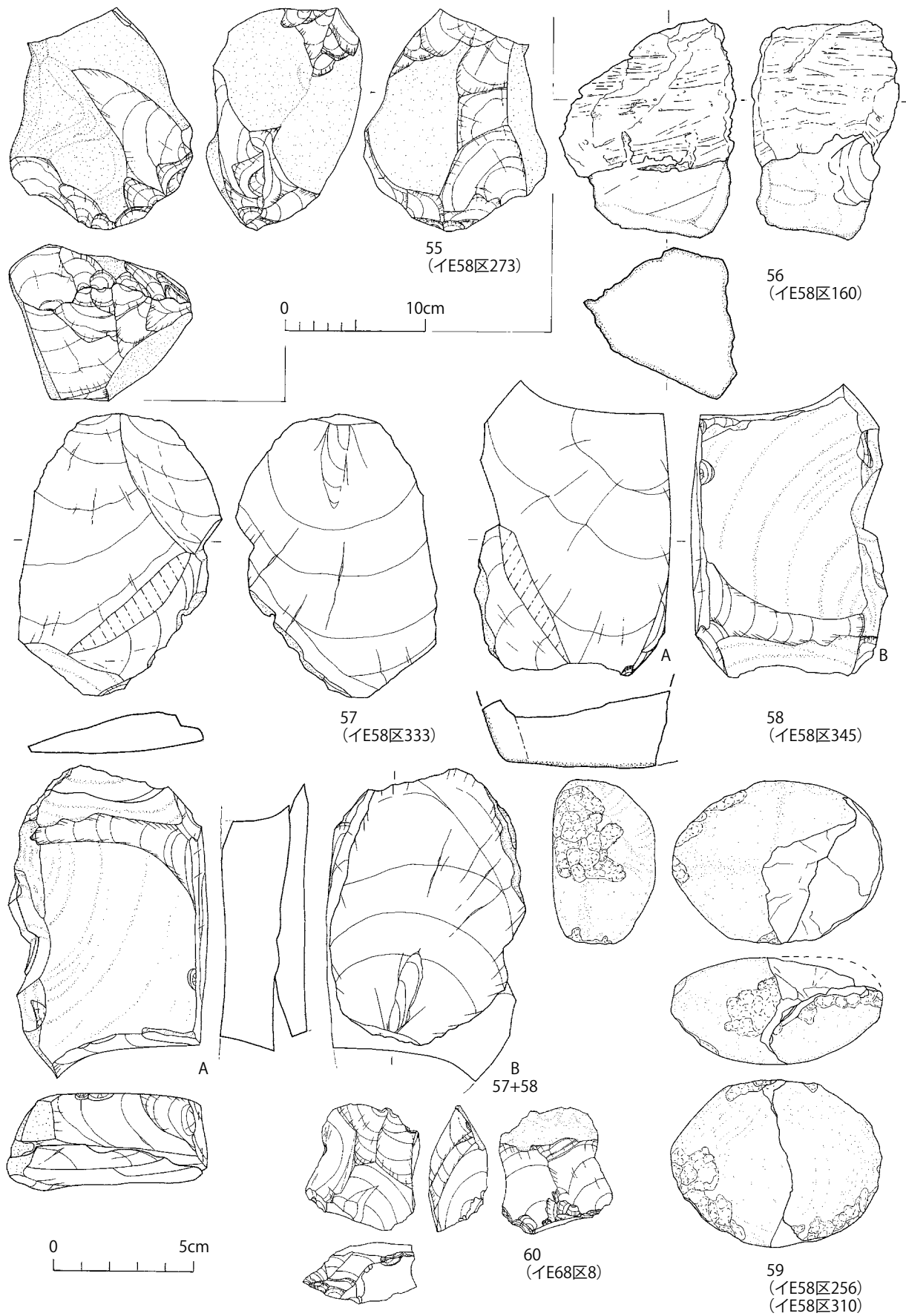
もう一例は、左側面に60°近い横断面角度で縦方向からの剥離痕があるもの、大半が礫面を残す縦に長い剥片である(第21図50)。それに加え、横断面と縦断面とも、90°近い角度有する関係にある面で礫面が観察されることから、原石に近い角礫を母体とする石核から剥離された初期剥片である。この初期剥片と同様な原石に近い角礫を母体とする石核から剥離された二つの剥片があり、両者は接合する。大きく礫面を有する剥片のポジ面が、



第20図 7トレンチ1ブロックの石器



第21図 7トレンチ1ブロックの石器



第22図 7トレンチ1ブロック・8トレンチ1ブロックの石器



### 第3章 第1次調査

もう一例の表面側のネガ面の形どおりにハマっていることと、同一方向の剥離痕であることから連続して同一方向に向けて剥離したのだろう。

凝灰岩質輝石安山岩の石核は、6例を図示している。これをみると、泥岩の石核とは若干ことなるので、別個に分類する。

1 A類は、角礫状の原石が祖形で、簡単な打面の作出、もしくは斜行する礫面を打面として片方もしくは上下方向から剥離作業を行う例である（第17図31、第20図55）。この場合、必ずしも整った縦長剥片のような剥片剥離は行っておらず、不定形な剥片剥離となっている。特に巨大な石核は（第22図55）、後述する2 A類・1 B類の祖型となると推定する。

2 A類は、おそらく角礫状の原石が祖形とみられ、剥離作業を90°近い角度で打面を全周囲に転移させながら行った例である（第21図53・54）。そのため、石核の体形はサイコロ状の5面体・6面体をなす。

1 B類は、分厚い剥片を素材として、剥離と打面の入れ替えを伴う剥片剥離作業を両端方向から行う例である（第21図51、第21図52）。こうした石核から剥離されたと推定されるのが後述する接合資料である（第22図57・58、57+58）。

その他、石核としては出土していないが、剥片や加工を加えた石器などの剥離痕を観察すると、求心的な方向をもった痕跡が観察されるものがみられるので（第19図41・42）、円盤形の石核も存在したのかもしれない。

凝灰岩質輝石安山岩を石材とする接合資料は、その第1剥片の表面には大きく礫面が残り、その右側面（B面の右側面）にも80°近い角度で礫面が残る（第22図58）。この第1剥片のポジ面（A面）は、上方向からの剥離痕であり、この部分が第2剥片のネガ面の広い範囲で接地接合する（第22図57・第22図57+58）。接合資料の左側面は礫面であり、右側面は大きなポジもしくはネガ面であることから、7.5cm前後の分厚く、扁平な石核の小口を作業面として剥離を行ったと推定する。具体的には、上述したように1 B類の石核からであろう。

その他の石材（不明石材）による石核を一例図示している（第20図49）。石材は安山岩系の石材と推測されるが明確ではない。剥片を素材としているとみられ、上端に甲板面のような打面があり、ここから表裏両面にわたって剥離が行われ、楔形もしくは船底形の形となっている。その後、直交する小口方向から大小の剥離作業が行われた剥離痕がある。

原石 凝灰岩質輝石安山岩と泥岩からなる角礫状態の原石がある（第22図56）。これは両岩石が地層堆積の中で上下の関係にあったことを示すものである。図では、下側の泥岩部分に石見とみられる小剥離痕が一つ観察されるだけである。

7 トレンチでは、敲石も出土している。楕円形で、周縁部を中心に打痕が残る（第22図59）。

8 トレンチは、7 トレンチの南に隣接する部分にある。7 トレンチでの大量の石器類の出土をうけて、その広がりを見るために設定したトレンチである（第3図）。出土した石器類は、加工痕ある剥片が1点、剥片・チップが7点、石核が1点である。石材別の器種は、凝灰岩質輝石安山岩石器類が2点：剥片2点、泥岩5点：剥片3点・チップ1点・加工痕ある剥片1点、灰色黒曜岩1点：石核1点である。このトレンチ遺物は、石核1点を図示している（第22図60）。石核は、縦横3.5cmから5cm前後の大きさで、一部に礫面を残すが、求心的な剥片剥離痕をもつ円盤形の石核である。石材は、灰色の黒曜岩であることから、佐世保市周辺を産地とする黒曜岩であろう。



第23図 第16次調査区全体図 (1/800)

## 第4章 第16次調査

### 1. 第16次調査の概要

四日市遺跡発掘調査の最終年度に当たる第16次調査区は、台地の東部に位置する。調査面積は19,738㎡で、造成工事の関係により日程が限られていたことから7班体制によって平成29年4月11日～9月29日にかけて調査を実施した。調査においては、調査区中央を東西にはしる道路を境に北側をA区、南側をB区とし、B区・A区の順で調査を進めた。区を分ける東西道路部分については調査終盤で取り去り、この部分についてはA区に含めて調査を行った。またB区については南北にはしる道路を境に西をB1区、東をB2区とした。B1区南側・B2区北側部については遺構掘削が終了した後、旧石器時代の調査として包含層掘削を行った。

調査の結果、第16次調査区では旧石器時代の遺物の出土は少なかったものの、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴建物や土坑等の遺構が多数検出され、周囲の調査成果とあわせて集落跡の全容を把握することができた。出土遺物はコンテナケース540箱に及ぶ。

報告書内で使用する遺構番号は、調査時に用いた番号ではなく報告用の新たに付した番号であり、『四日市遺跡3』の続き番号を用いた。遺物への注記は旧番号で行っているため、混乱が生じる可能性もあることから、遺物観察表には旧番号も併記している。

以下、調査の経過を列記する。

平成29年4月19日 調査区の設定、重機によるA・B区の表土除去開始

5月8日 B区の人による遺構検出作業開始

7月11日 B区の空中写真撮影実施

8月3日 重機により東西道路部分の表土除去を開始

8月24日 包含層掘削開始

9月1日 A区空中写真撮影実施

9月2日 現地説明会 149名

9月13日 SX12の重機による立ち割り調査

9月21日 掘削作業終了

9月29日 片付け完了

### 2. 調査区の基本層序

第16次調査区の地形は、南側が高所で北側に向かい傾斜している。B1区では傾斜は比較的急であるが、A区からはなだらかな傾斜となっている。またB2区の西側には、南に向かって開析する谷が形成されており、B2区南東から谷の最深部までの傾斜は急である。このように第16次調査区は地形の起伏が非常に大きく、土層は概ね起伏に富んだ地形に沿って堆積している。ただし各層が均一に全ての場所において確認できるわけではない。

第16次調査区の基本層序はI層からⅨ層に分けられるが、Ⅶ層以下は包含層掘削を行った部分でのみ確認している層である。I層は表土である。耕作に限らず、削平後に堆積した埋め土など現代に至るまでに人為的影響が及んだもの全てを総じている。深度は場所により異なる。II層は黒色土（クロボク土）である。II層は特にB1・B2区間の谷部で厚く堆積している。III層はアカホヤ層である。第16次調査区では面的に堆積しておらず、傾斜や谷部で部分的に確認できる程度である。IV層は黒褐色土で、II層よりも色調が淡い。この層上面を遺構検出面とした。V層は暗褐色土で、IV層とVI層との漸移層である。硬質で粘性がある。VI層は暗黄色土で、ソフトロームに近い土質である。第1次調査区のようにソフトローム・ハードロームの区分は明確ではない。弥生時代から古墳時代の遺構はおおむねこの層まで掘り込まれており、土層注記や本文で記している地山土がこの層に当たる。Ⅶ層は暗灰褐色土で、ブラックバンドに相当すると考えられる。この上部でATと思われる黄褐色ブロックが確認できる場所もあるが、その範囲は限定的であり断定できないため分層は行っていない。Ⅷ層は暗黄褐色土であ

第4章 第16次調査

る。粘性が強く硬質でありハードロームに近い土質である。5～10mmのスコリアをまばらに含む。IX層は暗黄褐色土で、VIII層と比べ軟質で、5～15mmのスコリアをまばらに含む。

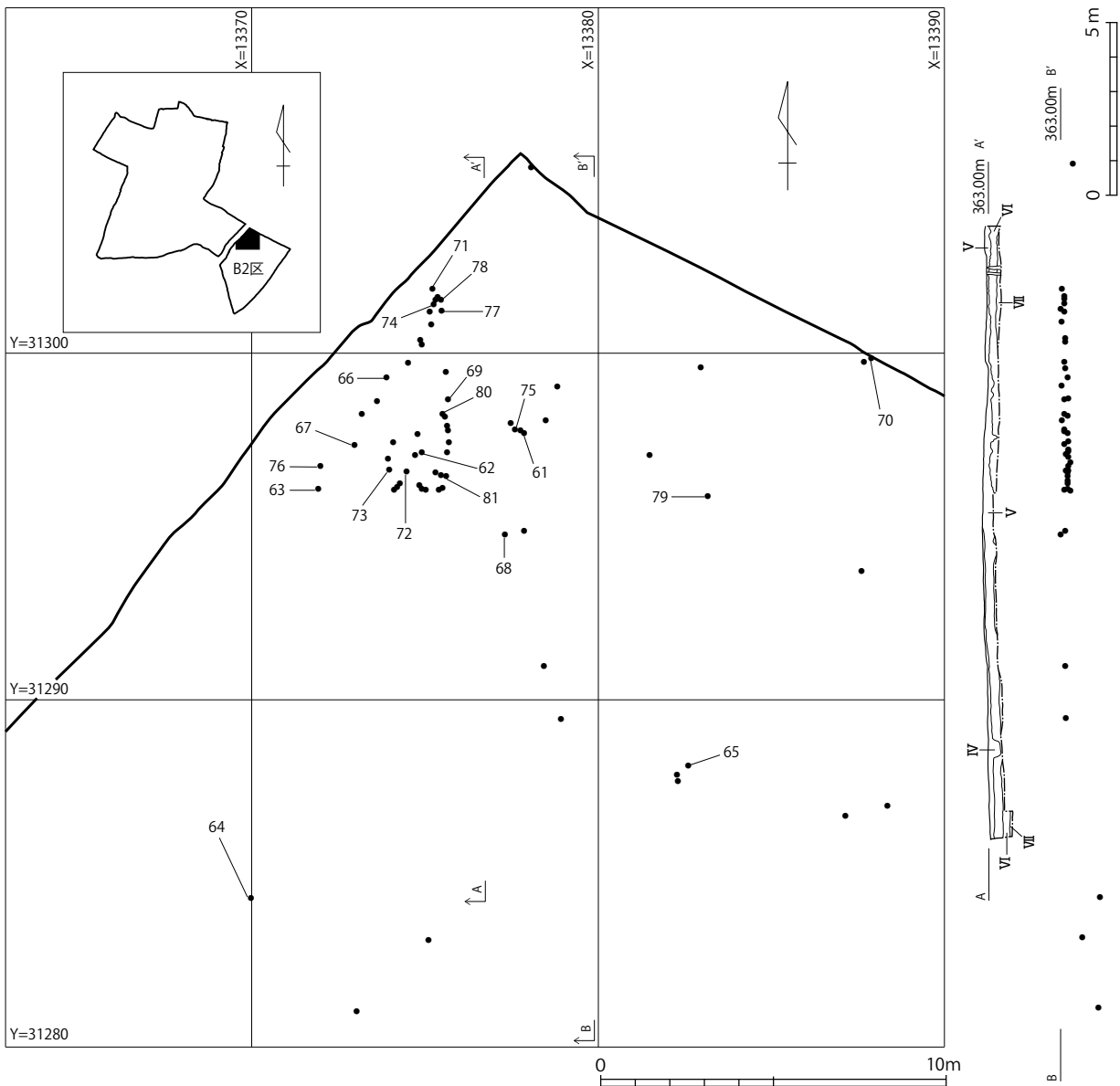
第16次調査区と第1次調査区との層序の対応は、I層＝1層、II層＝2・(4)層、III層＝3層、IV層＝4層、V層＝5層、VI層＝6・7層、VII層＝8層となる。

3. 旧石器時代・縄文時代

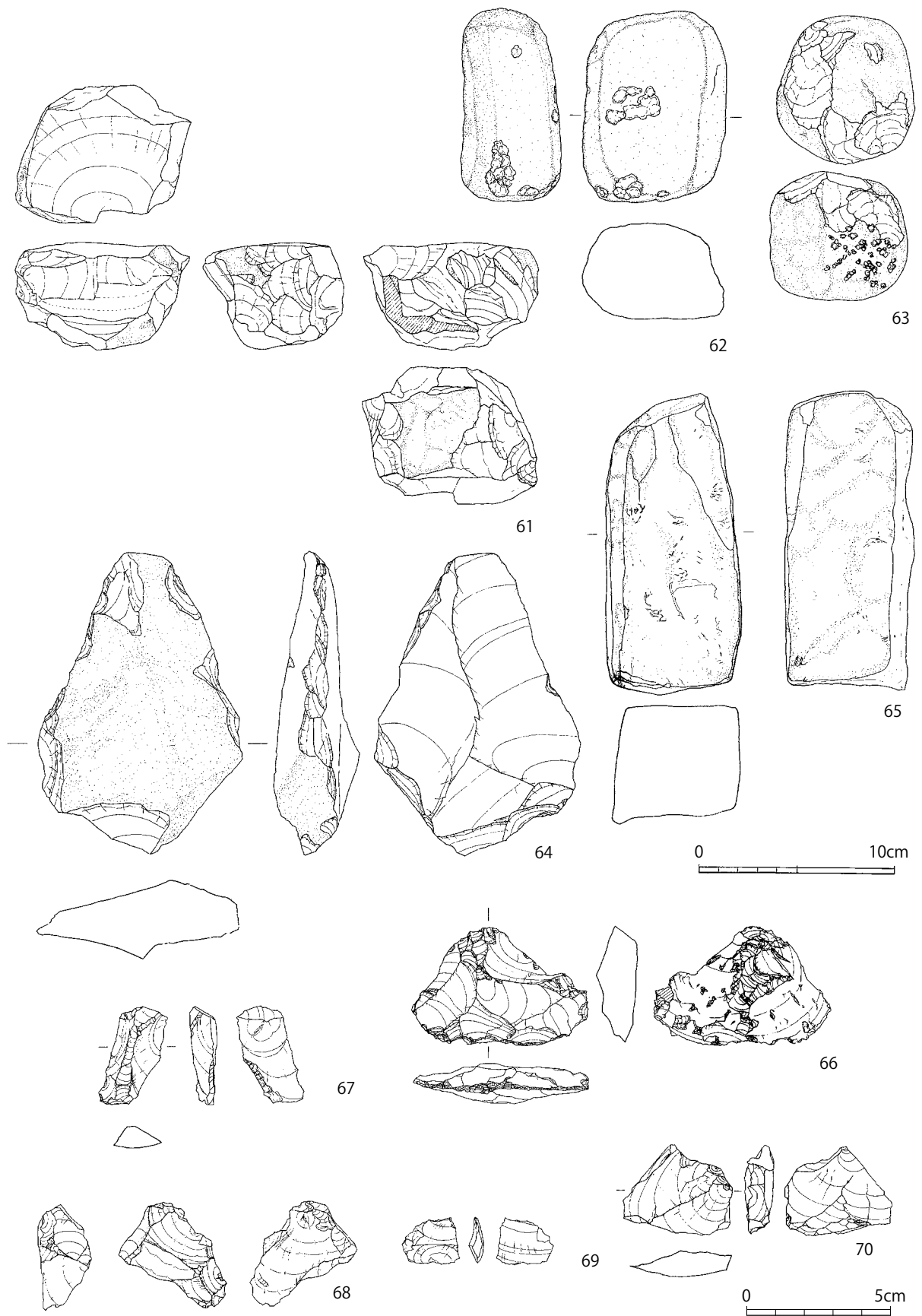
第16次において旧石器時代の調査を行った。調査場所は第1次調査区において石器ブロックが確認された周辺部、および第16次調査区の検出・遺構掘削時に石器が出土した地点を中心に、選定した。B1区南側からB2区北側にかけてグリッドを設定し、人力による掘り下げを行った。

B1区南側は上部が大きく削平を受けているため、VI層からVII層まで、場所によってはVIII層まで掘り下げを行ったが、出土した石器はわずか2点である。種類は剥片で、出土層位はVI層である。

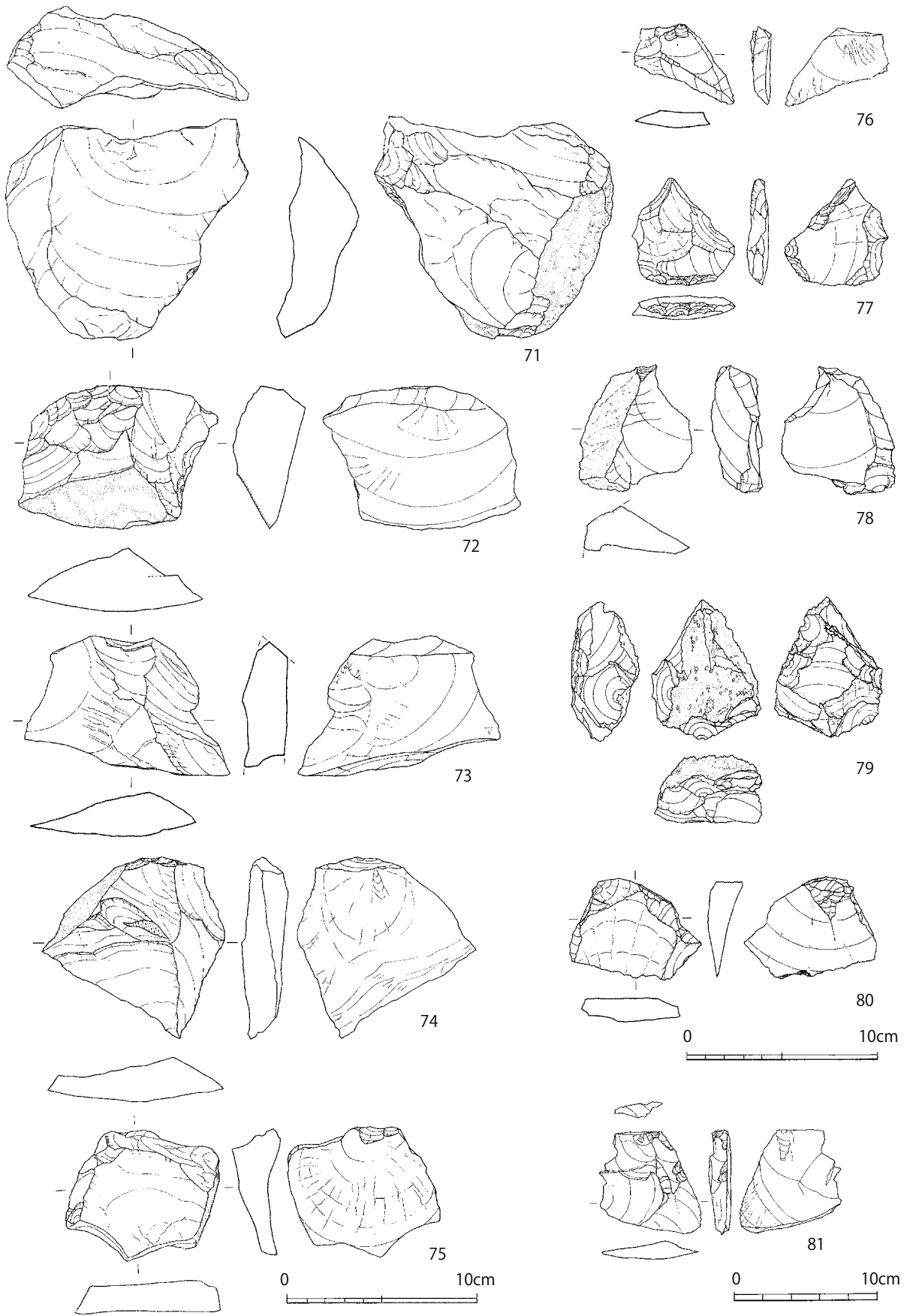
B2区北側はII～IV層からVII層まで、場所によってはIX層まで掘り下げを行った。南方向に開析する谷部の落



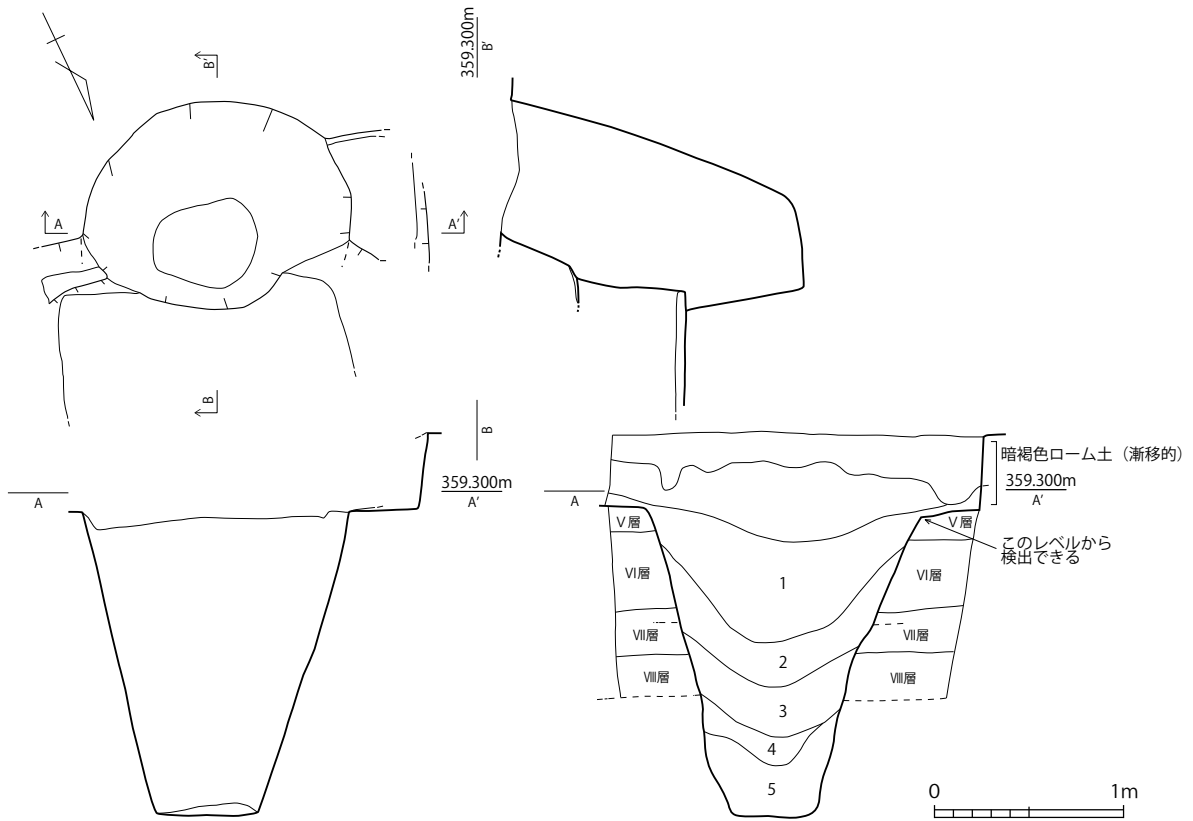
第24図 石器ブロック平面・垂直分布図・土層図 (1/200)



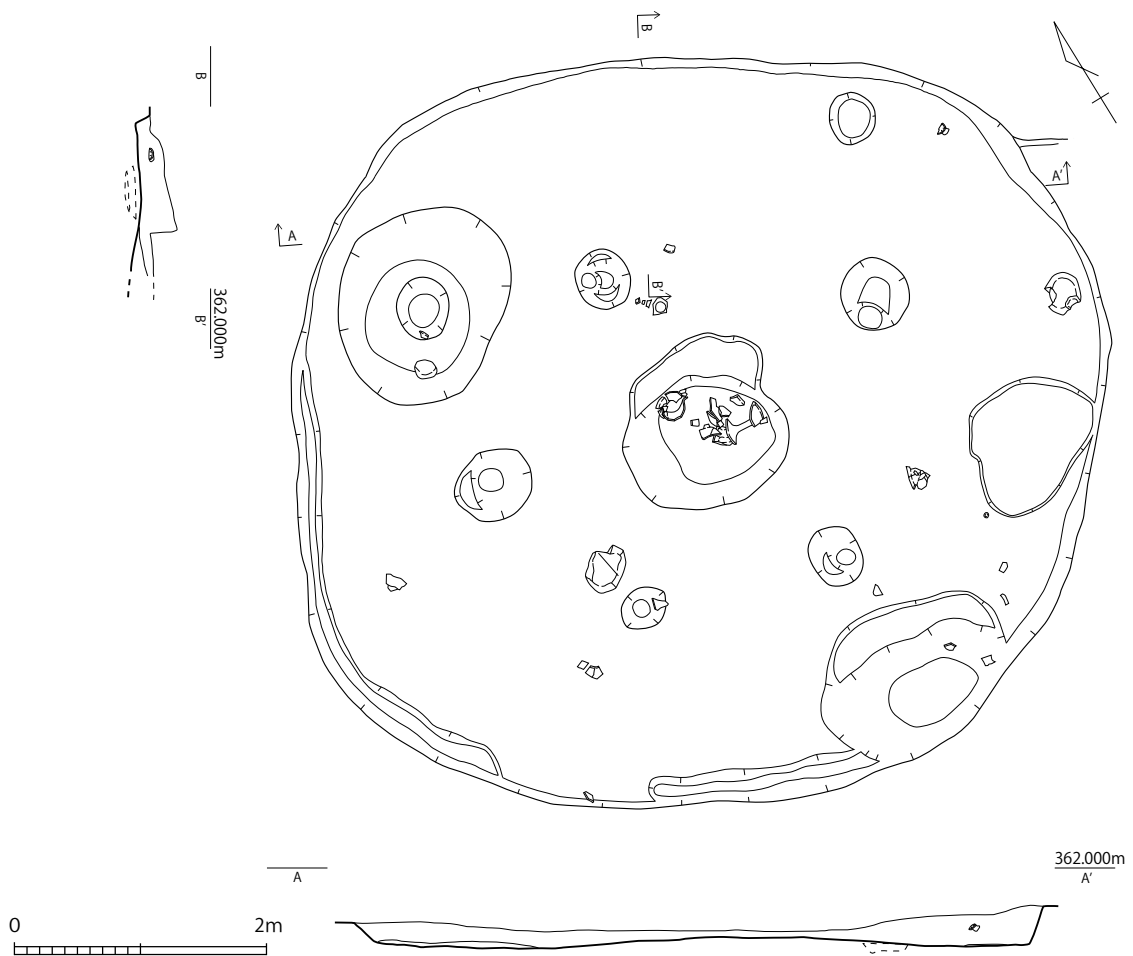
第25図 石器ブロック出土遺物①



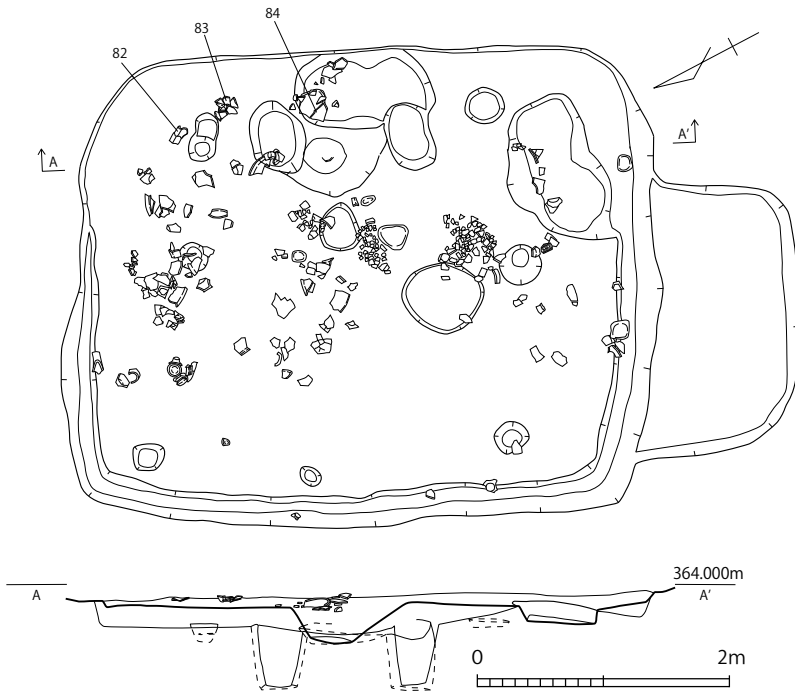
第26図 石器ブロック出土遺物②



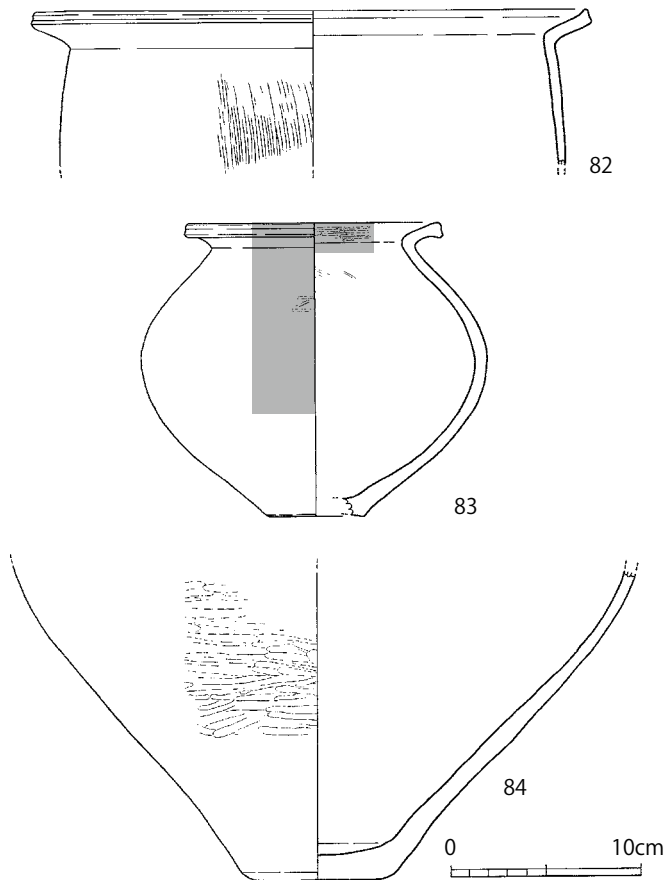
第27図 SX11実測図 (1/40)



第28図 SH76実測図 (1/60)



第29図 SH78実測図 (1/60)



第30図 SH78出土遺物実測図

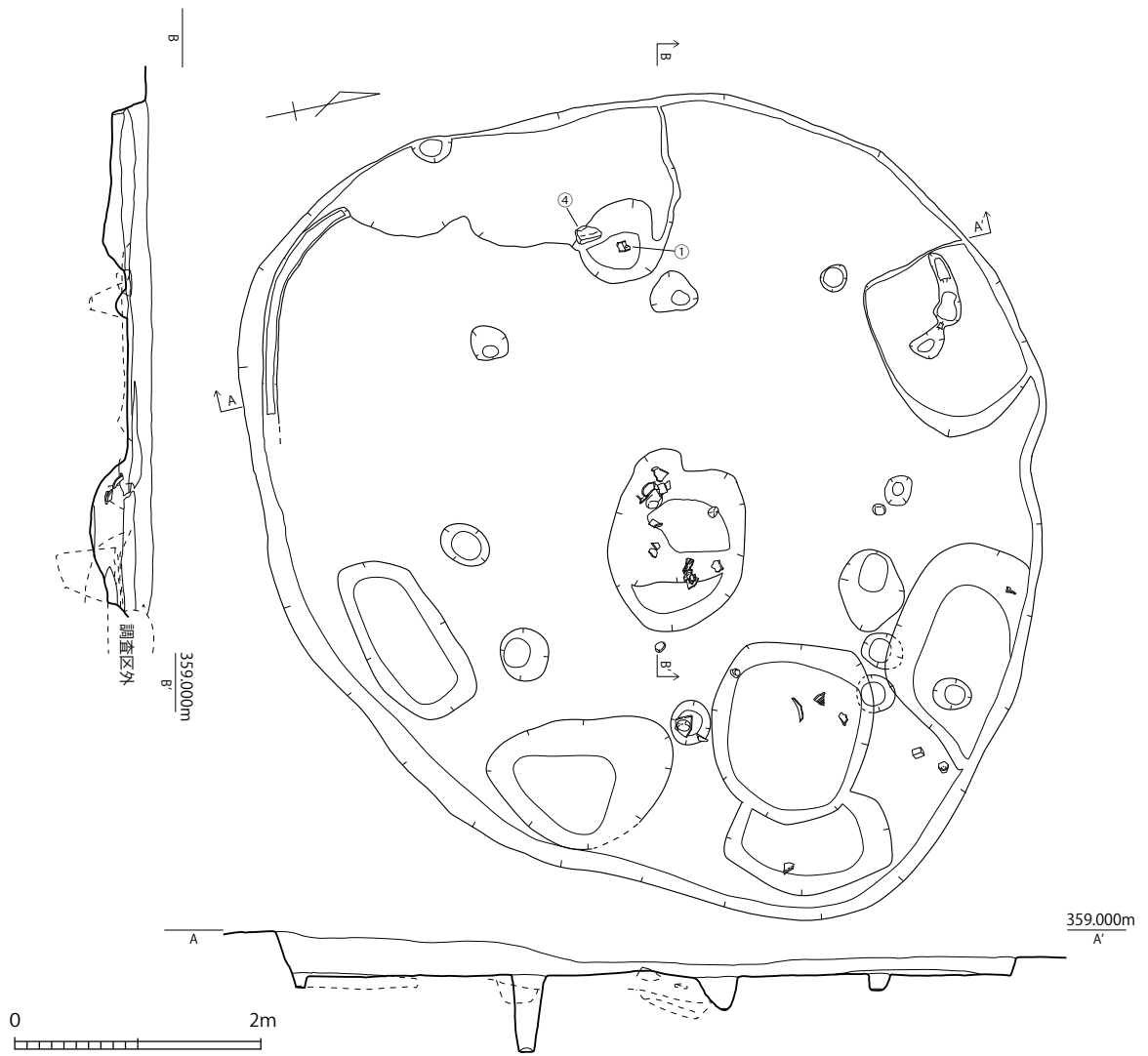
ち際周辺と第1次調査区に接する場所から、石器・剥片などがまとめて出土した。これらはV層とVI層の層境付近から出土しており、出土層位や出土位置から第1次調査区で出土した石器ブロックの続きとみられる。石材は泥岩・凝灰岩が主体であるが、わずかではあるが西九州産黒曜石・小国産黒曜石・姫島産角閃石安山岩なども確認できる。種類は敲石・石核・スクレイパー・剥片等である。旧石器時代終末から縄文時代草創期頃のものと考えられる。ここでは遺物がまとめて出土したB2区の分布図(第24図)と代表的な遺物実測図(第25・26図)を報告する。

この他にも旧石器時代・縄文時代の遺物は、検出時や弥生時代から古墳時代の遺構に混じり出土するが、その数はわずかである。これらの遺物については出土遺構のなかで報告している。また旧石器時代・縄文時代に該当するとみられる遺構が1基のみ(SX11)検出されている。

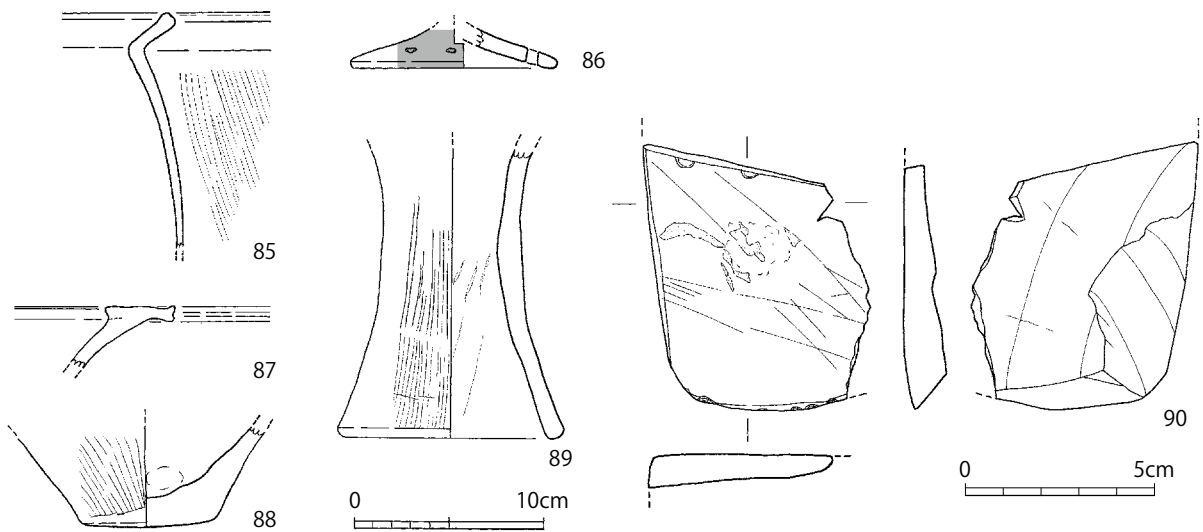
**SX11 (第27図)**

SX11はSH129の壁面で検出できた遺構である。形状は楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.1m、深度は1.5mである。上場から下場にかけて狭まっていることから陥穴とも考えられるが、床面で杭痕は確認できなかった。基本層序VI層の暗黄色土層を明確に掘り込んでおり、遺構の立ち上がりは基本層序V層下部あたりから確認できたことや、埋土に黒褐色土が混じらないことから、縄文時代早期以前に掘り込まれた遺構と判断した。遺物は出土していない。

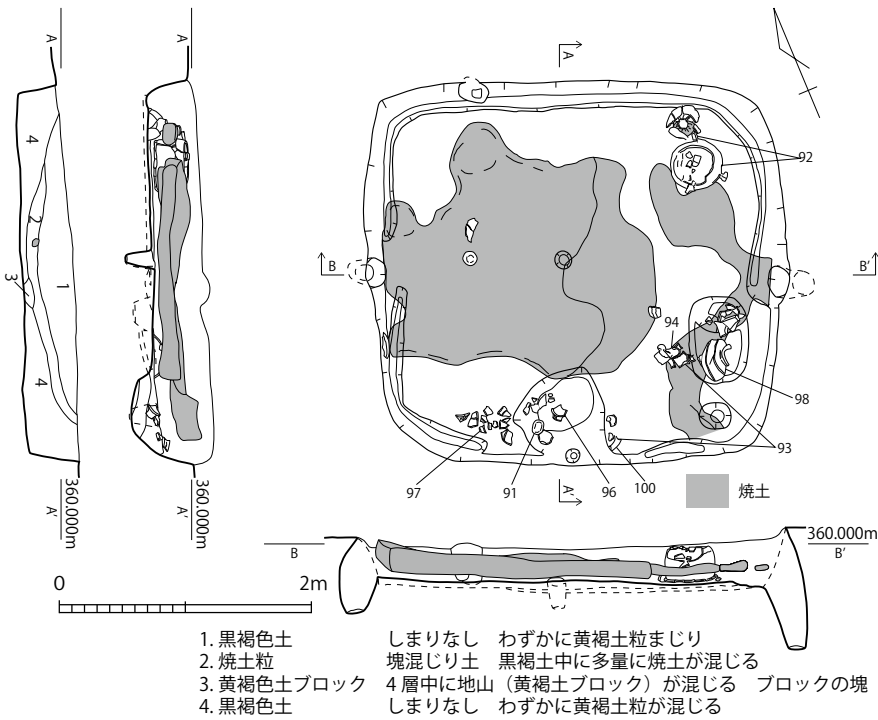




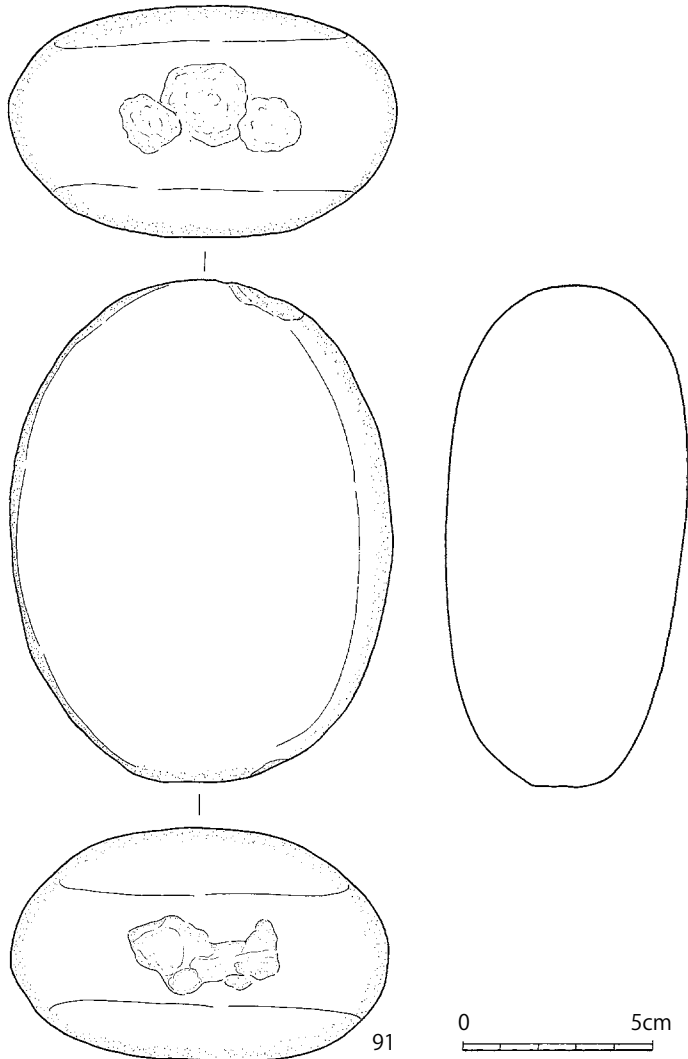
第31図 SH83実測図 (1/60)



第32図 SH83出土遺物実測図



第33図 SH121実測図(1/60)



第34図 SH121出土遺物実測図①

#### 4. 弥生時代

ここでは弥生時代中期後半段階の遺構、及び時期は判然としないが中期後半段階よりも以前に掘られたと考えられる遺構を報告する。また第13・15次調査ですでに報告済だが、今回の第16次調査で改めて全形が判明した遺構も改めて報告する。

第16次調査区からは竪穴建物・土坑・貯蔵穴・陥穴・小児用甕棺・円形周溝遺構・掘立柱建物・不明遺構が検出されている。

##### (1) 竪穴建物

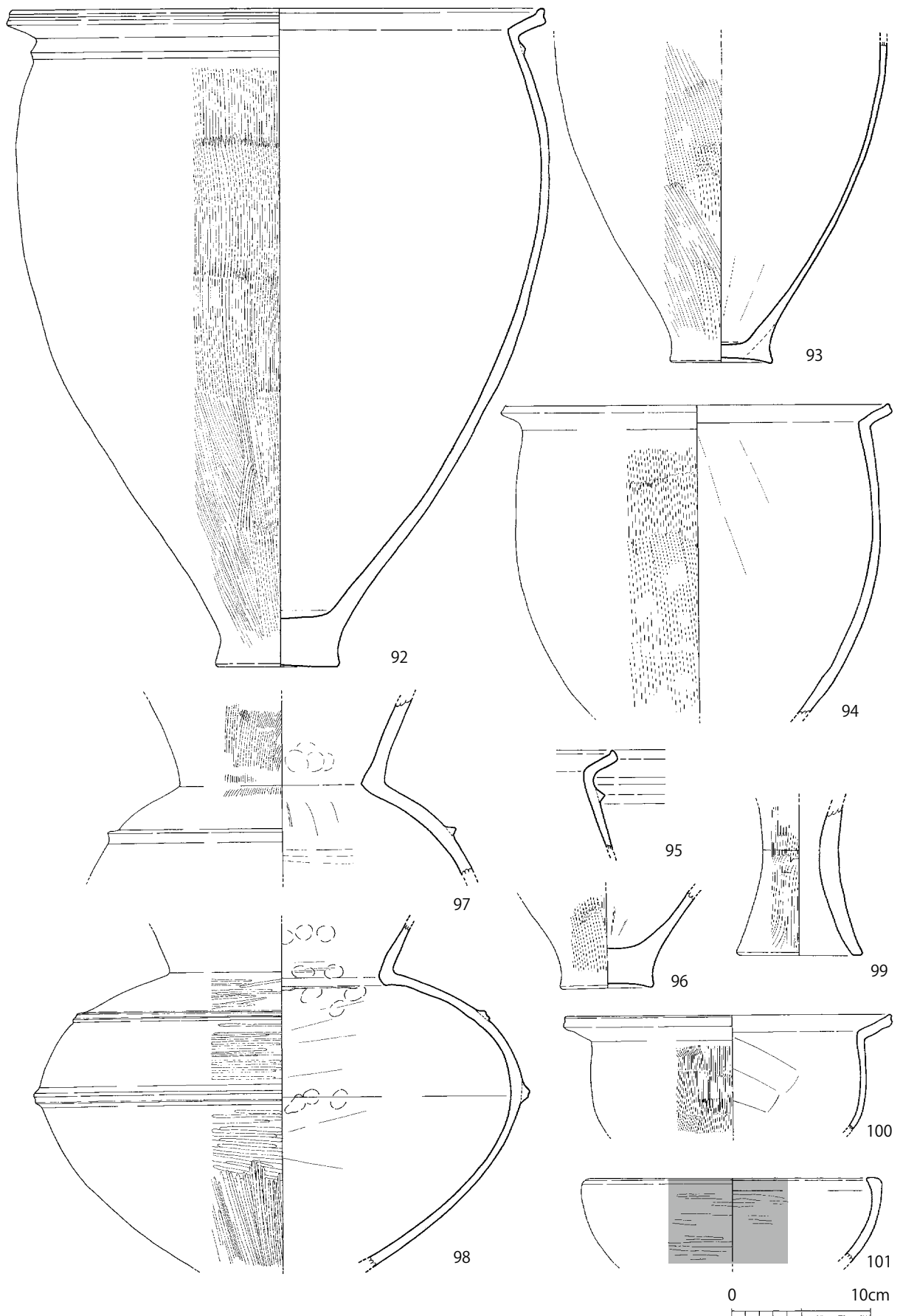
##### SH76 (第28図)

SH76は『四日市遺跡3』で報告した第15次調査区の竪穴建物である。第16次調査区で北側部分を調査したことにより全体が判明したため、改めて報告する。形状が楕円形で、規模は長軸6.5m、短軸5.9m、深度は0.3mである。中央には土坑があり、その周囲に支柱穴5本が円形に配置されている。

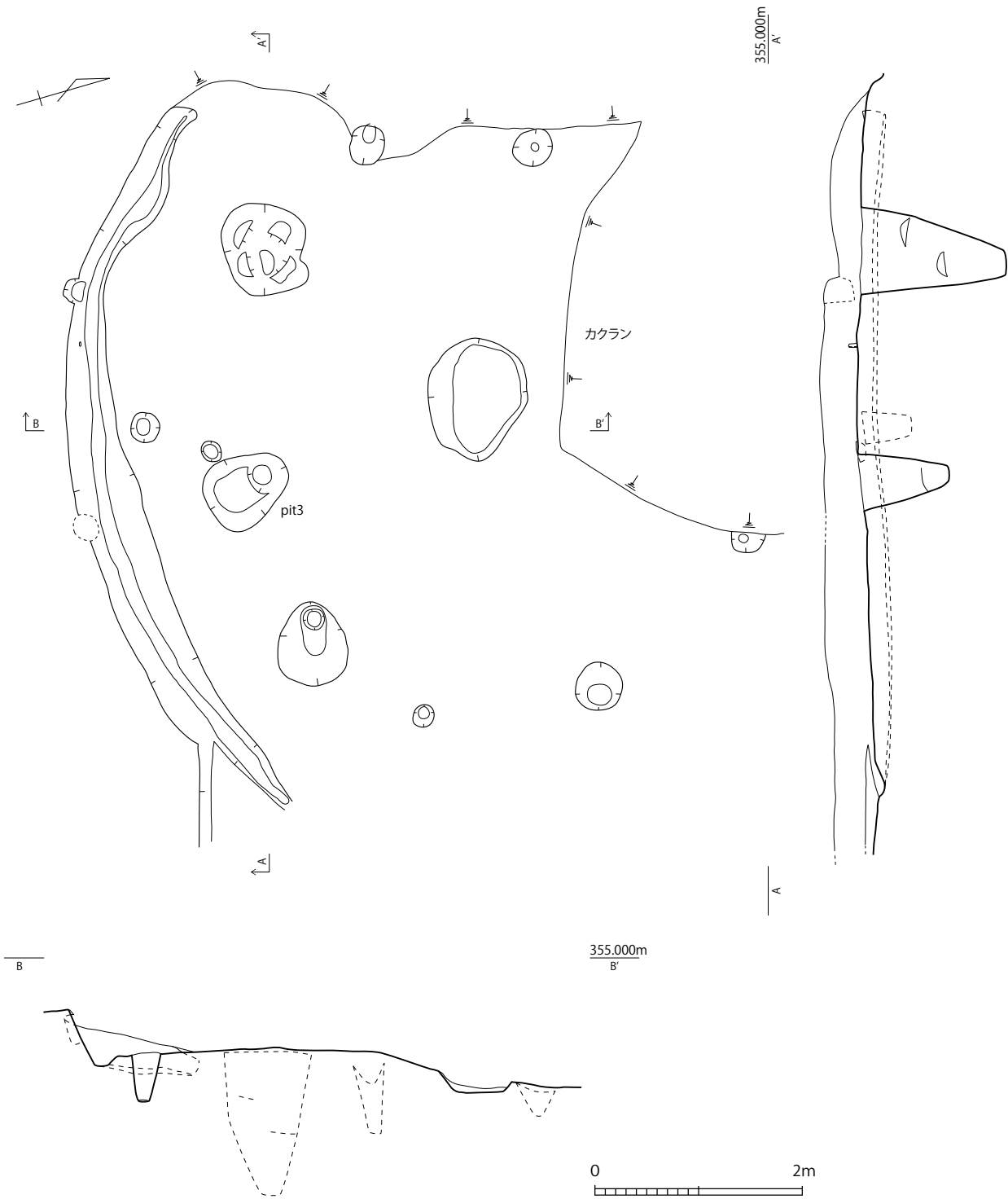
遺物は床面からやや浮いた状態で甕片が出土しているが、出土量も少なく図示できる資料ではない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

##### SH78 (第29・30図)

SH78は『四日市遺跡3』で報告した第15次調査区の竪穴建物である。第16次



第35図 SH121出土遺物実測図②

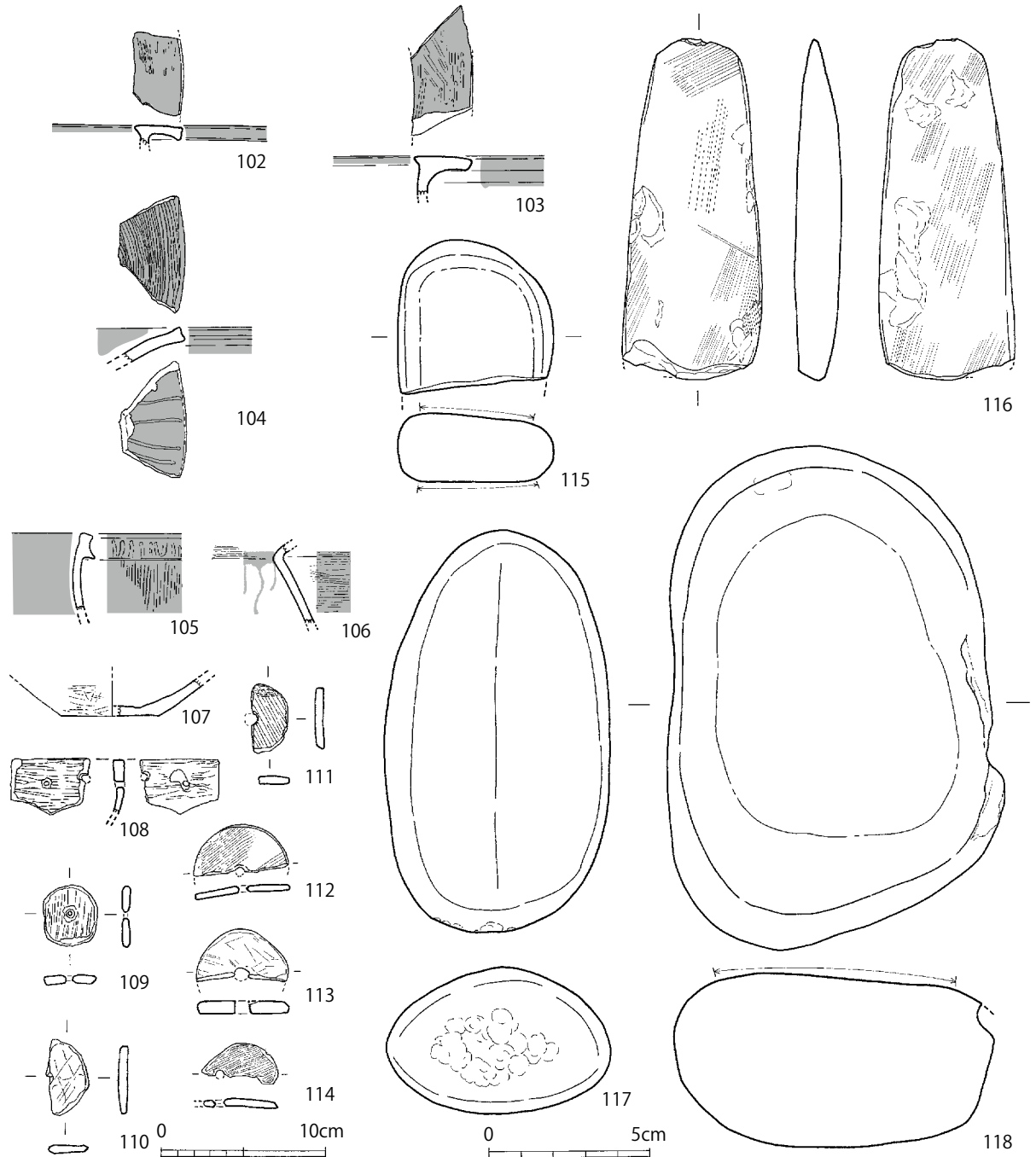


第36図 SH122実測図 (1/60)

調査区で東側部分を調査したことにより全形が判明した。形状は長方形で、規模は長軸4.6m、短軸3.8mである。黄褐色土による貼床が施されている。主柱穴は4本で、東壁際には土坑がある。第15次調査区で建物中央部あたりから遺物が面的に出土しているが、その続きが第16次調査区においても検出できた。

遺物は床面から浮いた状態で出土しており、埋没過程でまとめて廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH83 (第31・32図)



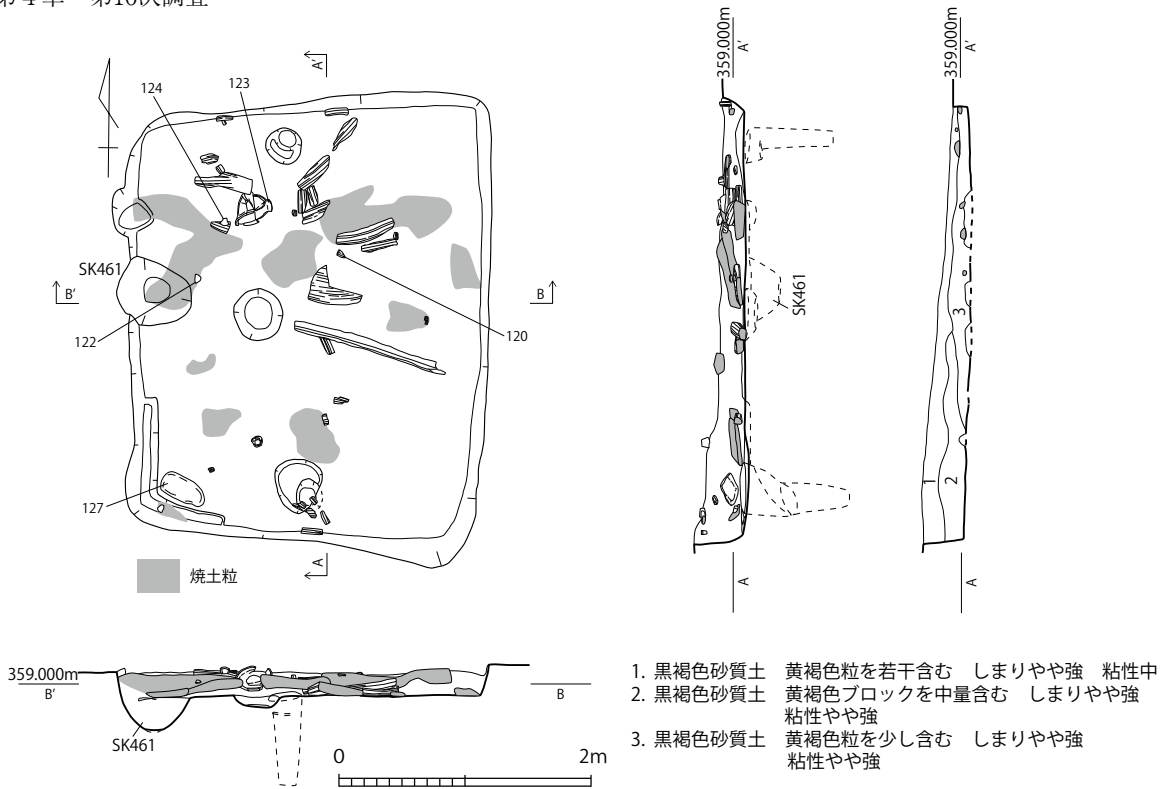
第37図 SH122出土遺物実測図

SH83は『四日市遺跡3』で報告した第13次調査区の竪穴建物である。第16次調査区で西側半分を調査したため改めて報告する。形状は円形で、規模は径6.2m、深度は0.4mである。中央の土坑を囲むように7ないし8本の支柱穴がめぐっている。南西部でのみ壁面に沿うように周溝が確認できたが、深度は極めて浅い。

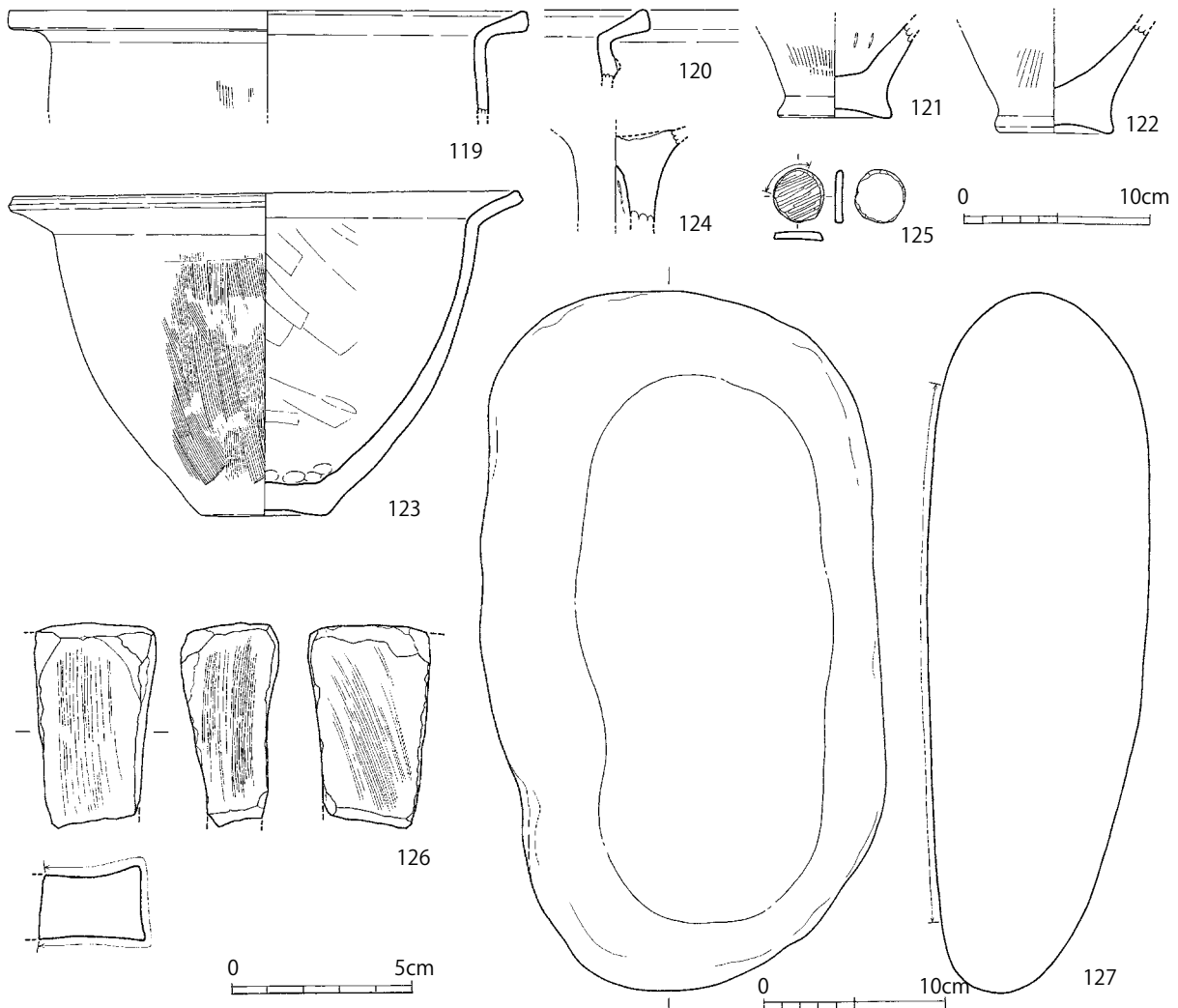
遺物は中央土坑と建物埋土中から出土している。いずれも床面から浮いた状態で出土していることから、埋没にともない混じり込んだものとみられる。出土遺物から弥生時代中期後半段階に埋没したと考えられる。

**SH121 (第33・34・35図)**

SH121は竪穴建物と考えられる。形状は長方形で、規模は長軸3.35m、短軸3.05m、深度は0.4mである。支柱穴は3本確認されているが、そのうち2本は壁面に、柱が中心部に向かって傾くように斜めに掘り込まれている。



第38図 SH123実測図 (1/60)



第39図 SH123出土遺物実測図

残りの1本は建物中央にあり、これが支え柱となったと考えられる。周溝は南西部分を除いた壁際にめぐっており、周溝の途切れた壁際部分には土坑が掘られていることから、周溝と土坑は相互に関連性をもって掘られていたことがわかる。

遺物は床面直上から出土している。遺物の廃棄後、4層の流入により自然堆積しているが、その埋没過程において焼土が面的に堆積する。炭化材があまり認められないことから、焼土はまとめて廃棄された可能性もある。焼土の堆積後は再び自然堆積により埋没したとみられる。出土遺物から廃絶時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

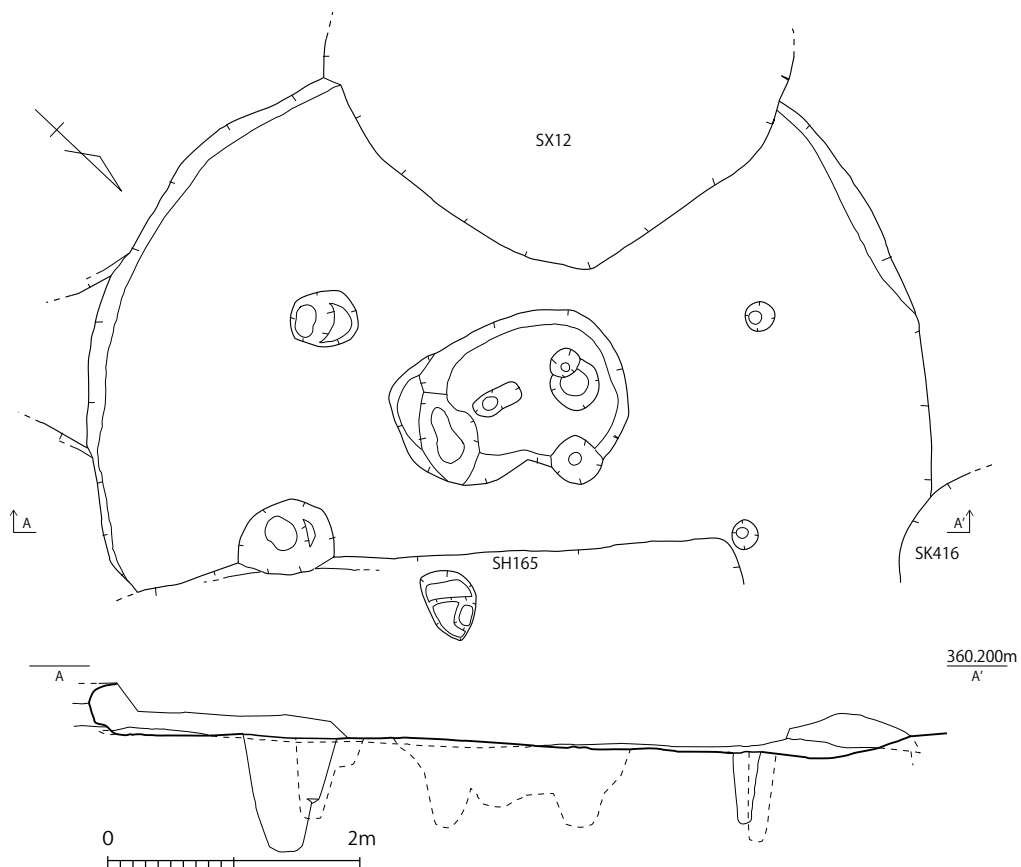
**SH122 (第36・37図)**

SH122は竪穴建物である。南壁面がかろうじて残るのみで、その他は攪乱や削平のため残りがよくない。形状は円形と推測でき、中央土坑や主柱穴の配置を考慮すると径8.5m程度に復元できる。主柱穴は中央土坑を中心に円形にめぐっており、確認できるものだけで8本ある。残りのよい南壁際には周溝があることから、壁際全体をめぐっていたとみられる。

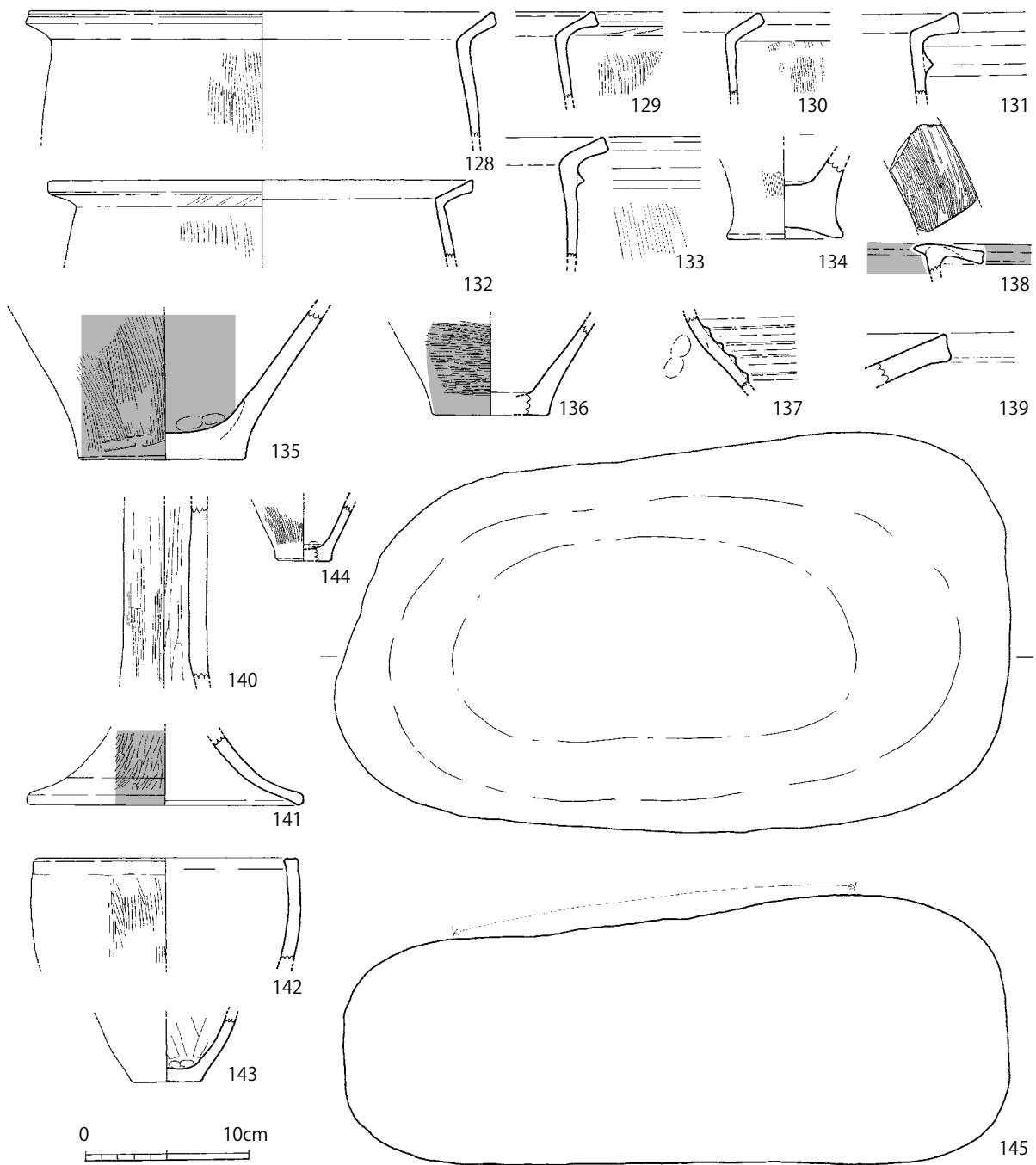
埋土は黒色土の単一層で、遺物は破片となったものが多く、埋没過程で混じり込んだものとみられる。この建物からは石製や土器片を加工した紡錘車が、一遺構からとしては比較的多く出土しているのが特徴としてあげられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH123 (第38・39図)**

SH123は竪穴建物である。西壁中央あたりがSK461に切られる。形状は長方形で、規模は長軸3.6m、短軸2.9m、



第40図 SH124実測図 (1/60)



第41図 SH124出土遺物実測図

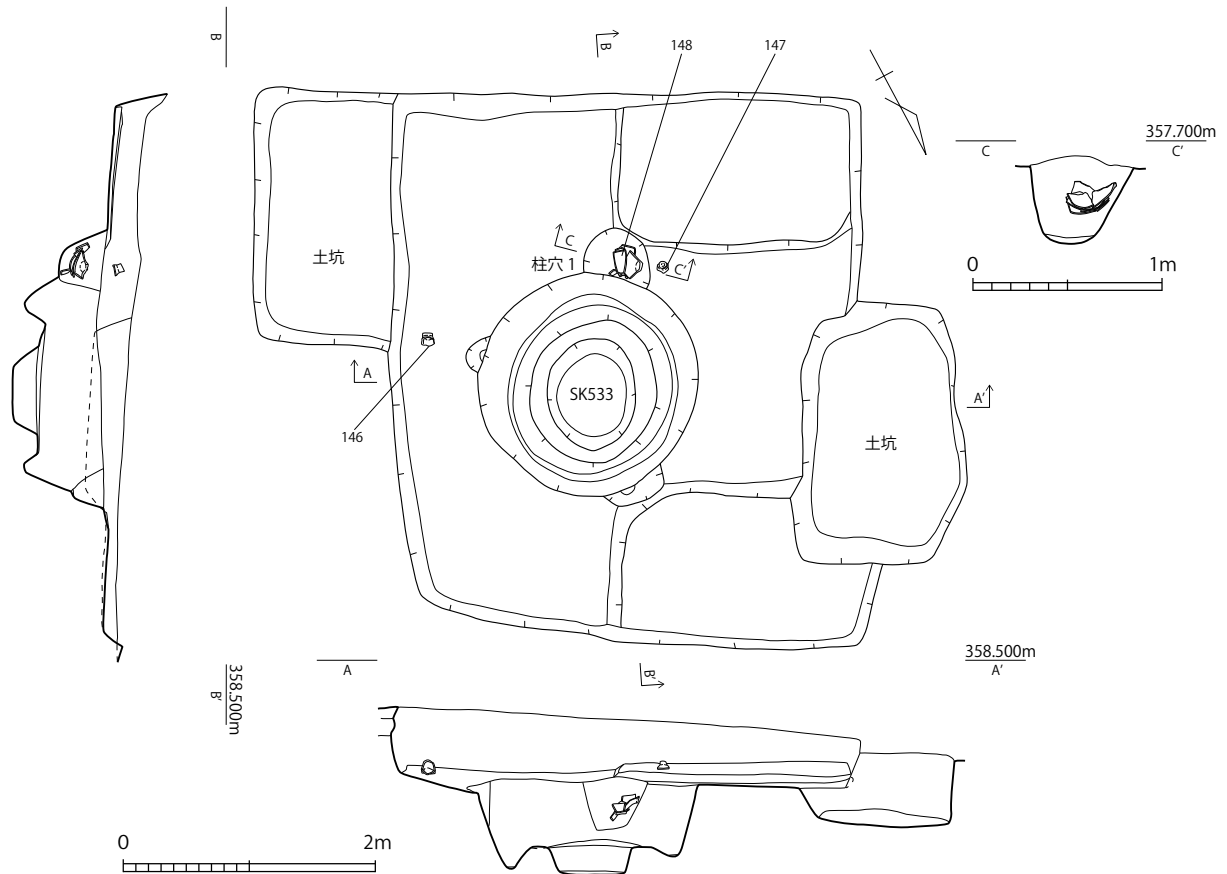
深度は0.3mである。支柱穴は長軸上に2本あり、深度は床面から0.7～0.8mと深い。南西隅にのみ周溝が確認できる。中央には浅い窪みがあり炉跡の可能性はあるが、被熱してはいない。

床面直上で炭化材と焼土が全面に出土していることから、廃絶にともない焼却行為が行われ、その後は流入土の堆積により自然埋没したとみられる。遺物は埋土全般から出土していることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

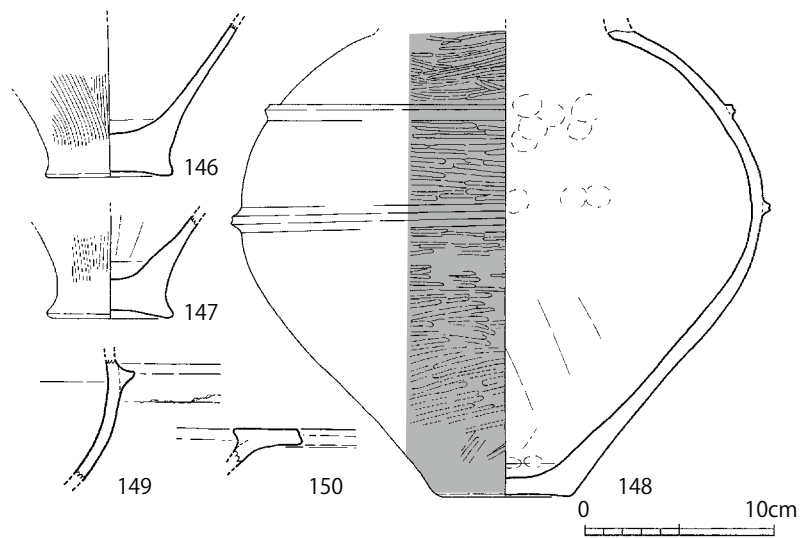
SH124 (第40・41図)

SH124は竪穴建物である。東側がSH165、西側がSX12、北側がSK416により切られているため、残りがよくな





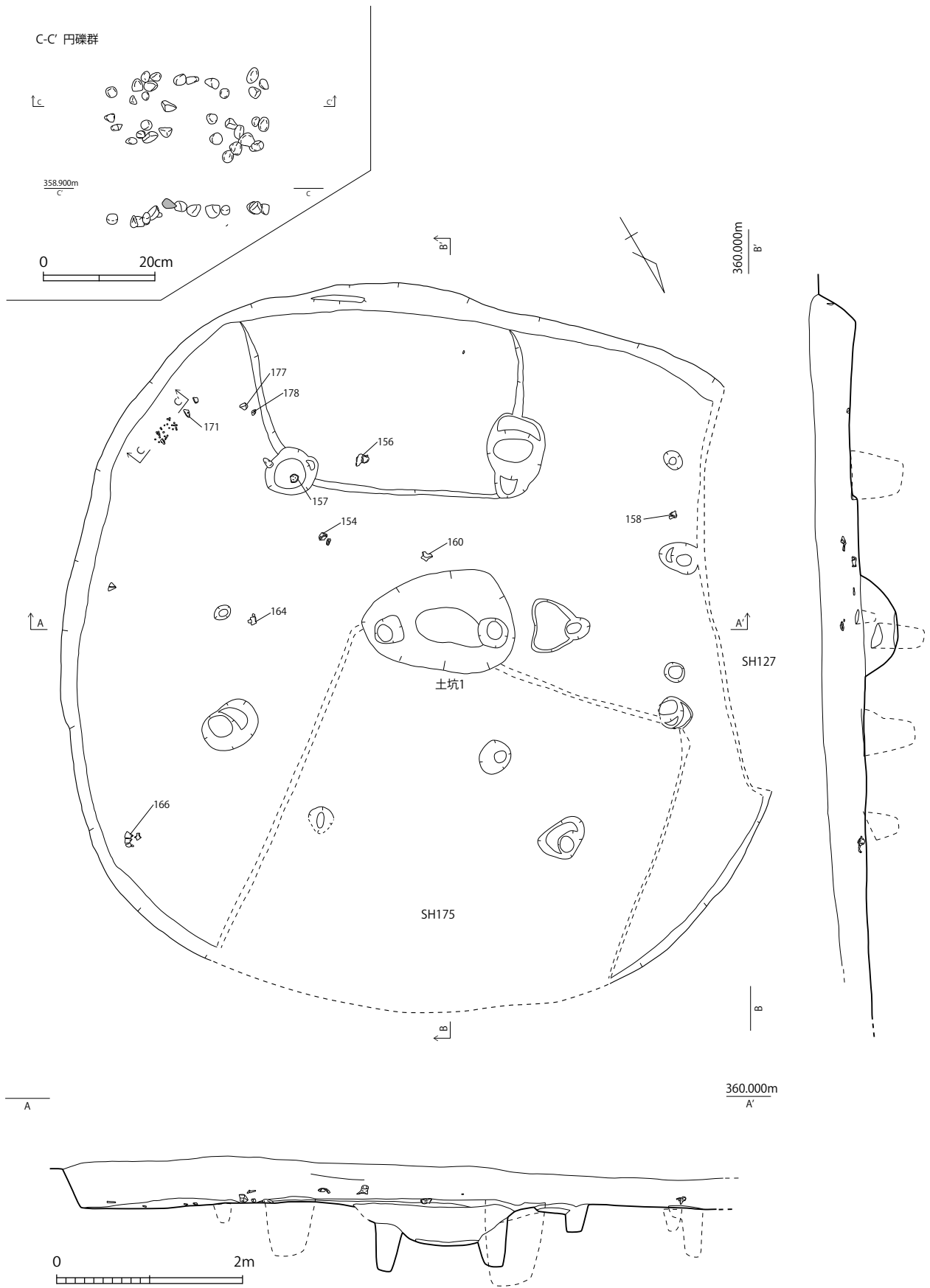
第42図 SH125実測図 (1/60・1/40)



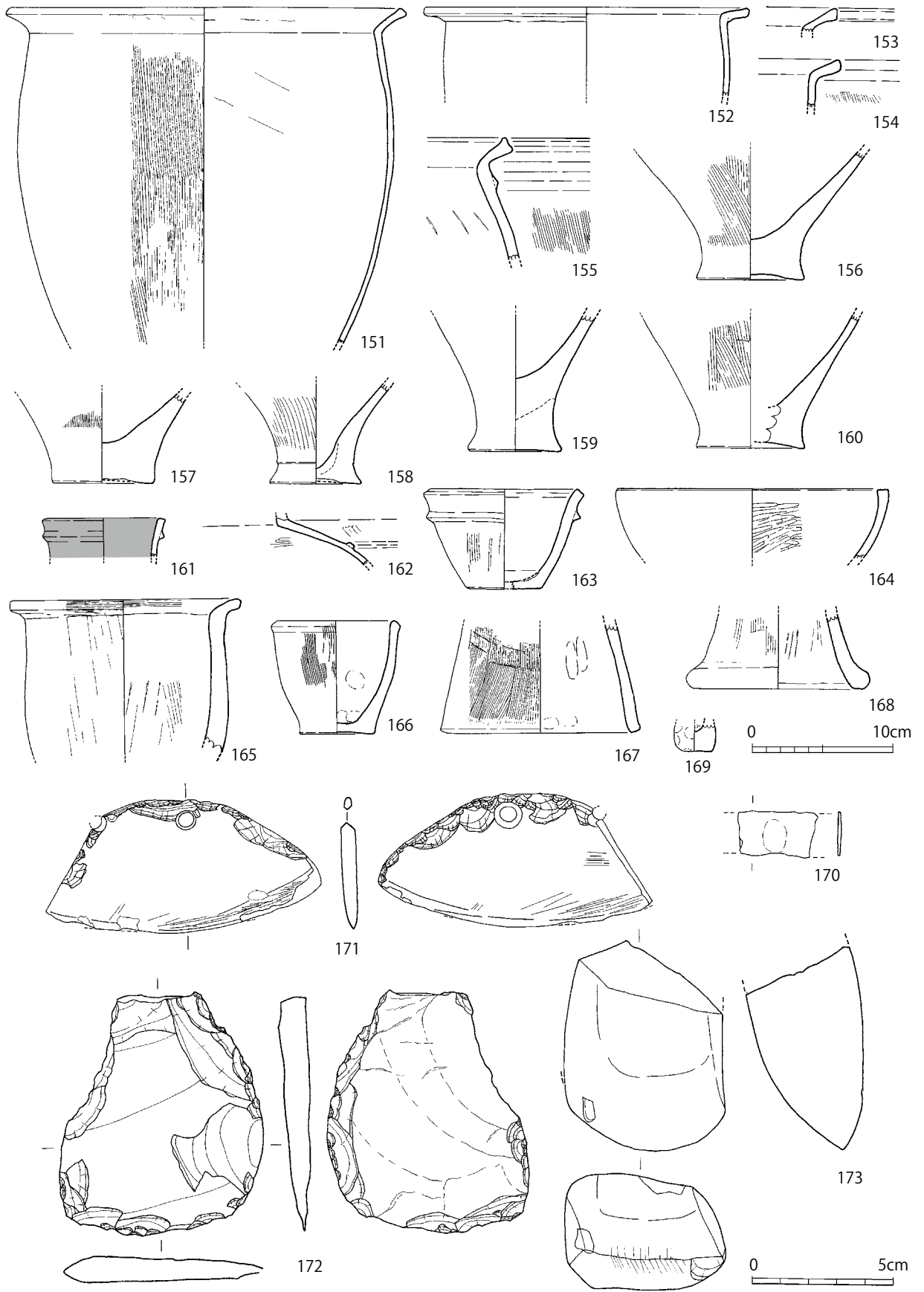
第43図 SH125出土遺物実測図

い。形状は円形で、規模は径6.7mに復元できる。支柱穴は5本確認できたが、本来は6本であったと考えられる。建物中心部には楕円形の土坑が掘り込まれており、土坑の両端には柱穴状の掘り込みが確認できる。

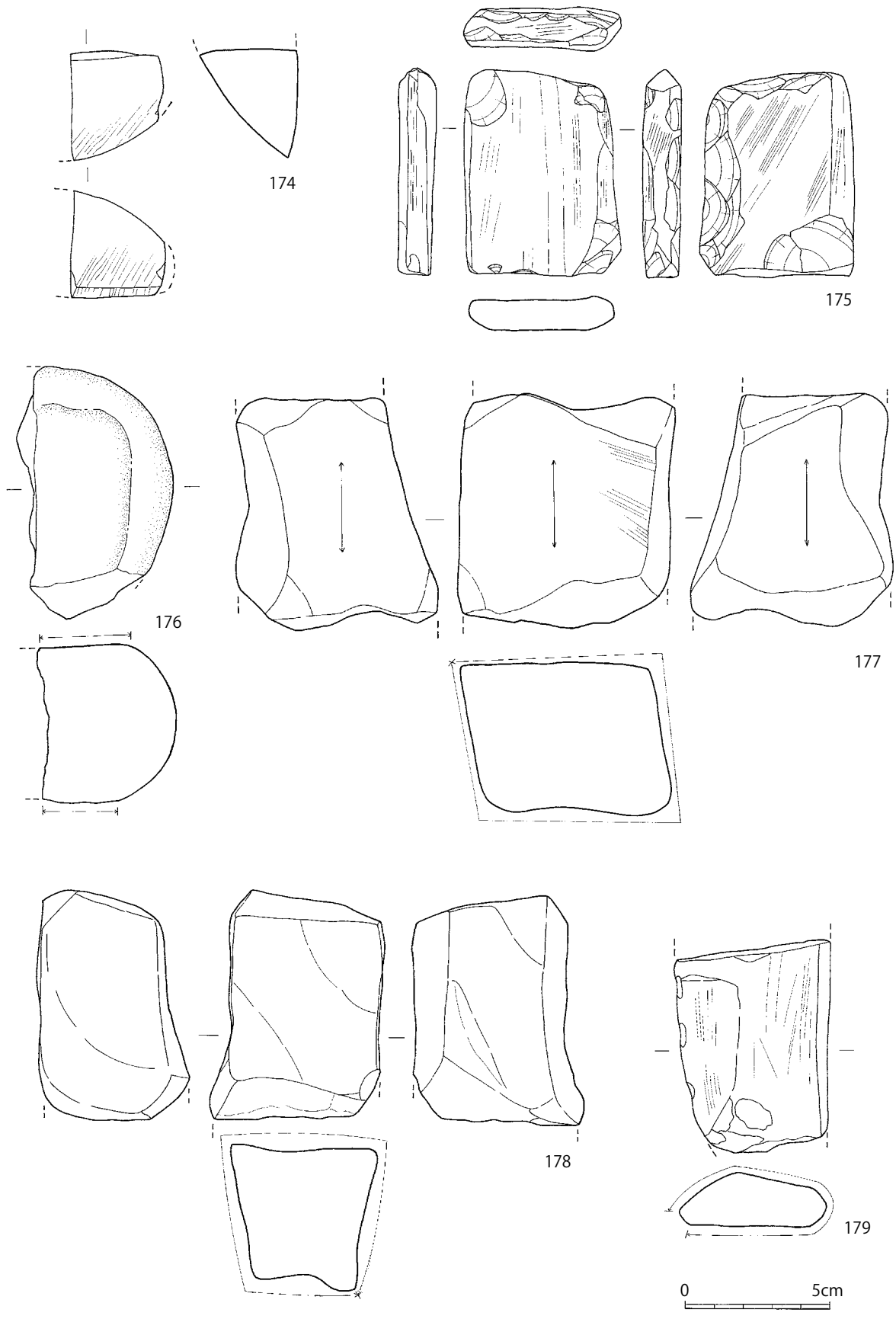
埋土は黒色土の単一層で自然堆積したものとみられる。遺物はまとまりなく、多くが小破片となって出土していることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



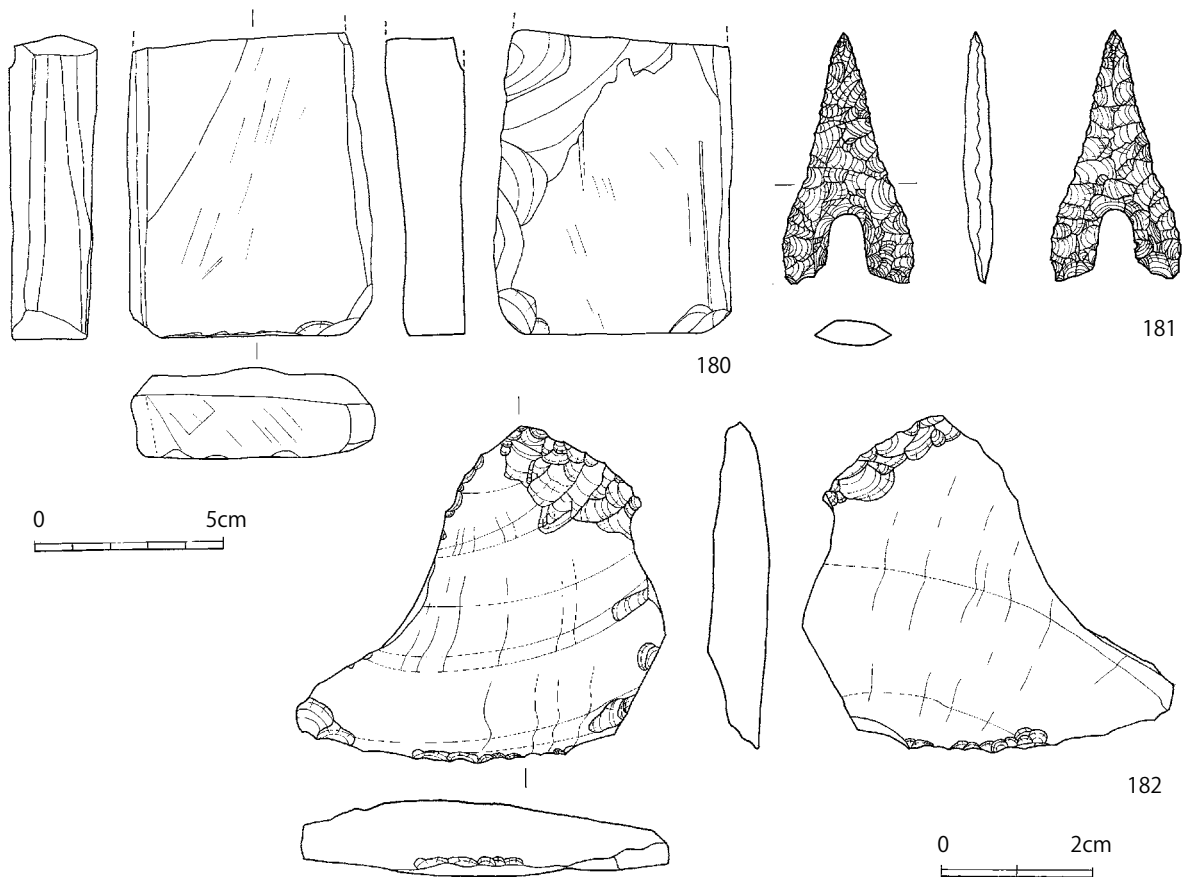
第44図 SH126実測図 (1/60・1/10)



第45図 SH126出土遺物実測図①



第46図 SH126出土遺物実測図②



第47図 SH126出土遺物実測図③

SH125 (第42・43図)

SH125は竪穴建物である。建物中央部がSK533に切られる。形状はやや歪な長方形で、規模は長軸4.4m、短軸3.6m、深度は0.5mである。主柱穴はかろうじて2本確認できるが、柱穴間が1.5mと建物規模に比べて狭い配置となる。南側柱穴（柱穴1）からは柱の抜き取り後に入れたと考えられる壺破片がまとまって出土した。北西・南西隅には長方形のベット状遺構が確認できる。

遺物は埋没過程で混じり込んだとみられ、埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH126 (第44・45・46・47図)

SH126は竪穴建物である。SH127・SH175に切られる。形状は円形で、規模は径8.2m、深度は0.4mである。主柱穴は6ないし7本で円形にめぐる。中心には楕円形の土坑があるが、土坑両端において2本の柱穴状の掘り込みが確認できた。炉跡や被熱した痕跡は確認できなかった。南西壁面に長方形のベット状遺構がある。

埋土は単一層で、自然堆積したとみられる。遺物は埋土全般から出土していることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。南壁際の床面直上から2～3cm大の投弾に使用したとみられる円礫が32個まとまって出土した。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH127 (第48・49図)

SH127は竪穴建物である。SH126を切るため、東側の壁は明確に検出できていない。形状は長方形で、規模は長軸5.6m、短軸3.8m、深度は0.4mである。主柱穴は長軸状に2本、東側の壁際中央には土坑がある。この土坑の埋土は建物の覆土と同一であることから、竪穴建物とともに埋没したとみられる。北側には不定形なベット状

遺構のような高まりがある。

埋土は単一層であることから自然堆積したとみられ、遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH128 (第50・52図)**

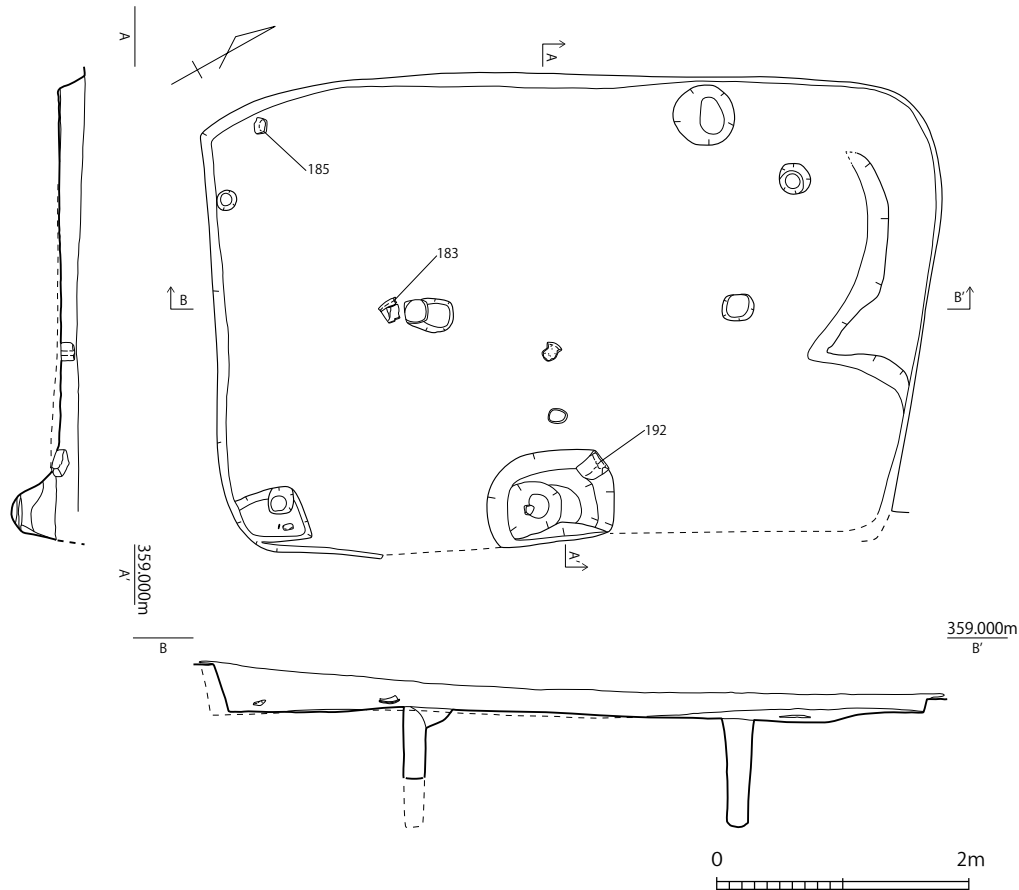
SH128は竪穴建物である。北西部分がSH169によって切られる。形状は長方形で、規模は長軸4.3m、短軸3.65m、深度は0.35mである。支柱穴は2本で、南側柱穴（柱穴3）からは柱の抜き取り後に混入したとみられる甕がまわって出土した。西壁際に土坑があり、土坑内からは台石が出土している。炉跡はSH169により切られた可能性があるため確認できていない。

埋土は自然堆積したものとみられる単一層で、遺物は埋土全般から出土していることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

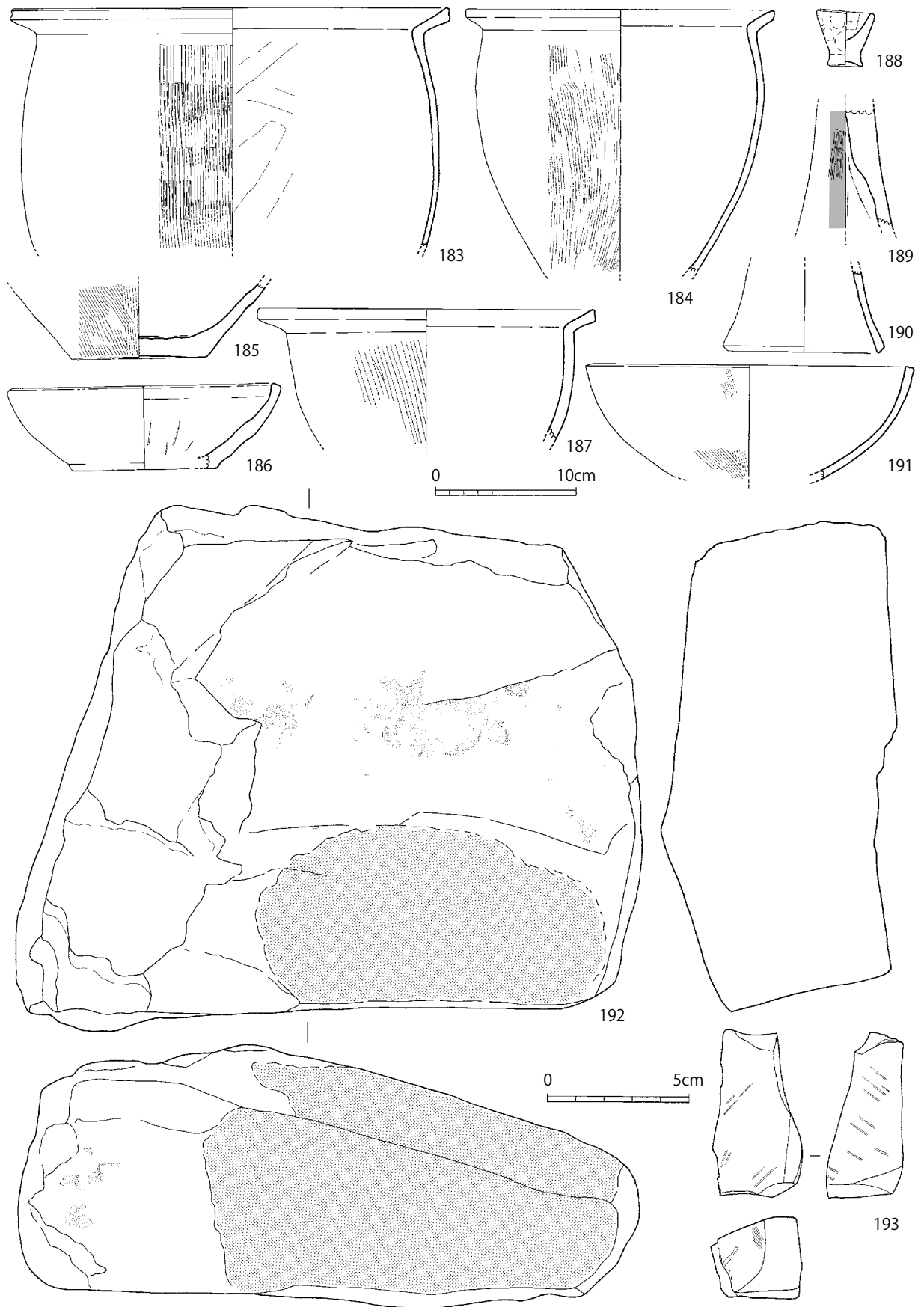
**SH129 (第51・53・54図)**

SH129は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸5.8m、短軸4.6m、深度は0.5mである。支柱穴は2本で、中央からやや南寄りに炉跡とみられる被熱した箇所がある。土坑は2基あり、埋土から竪穴建物とともに埋没したことがわかる。北東隅にある長方形の土坑1内では、西側で地山の黄褐色土が盛られた状態で検出できた。この土坑を掘り込んだ際の地山土を盛ったとは考えづらく、地山土をストックしていたかのような出土状況を見せられているが、用途は不明である。

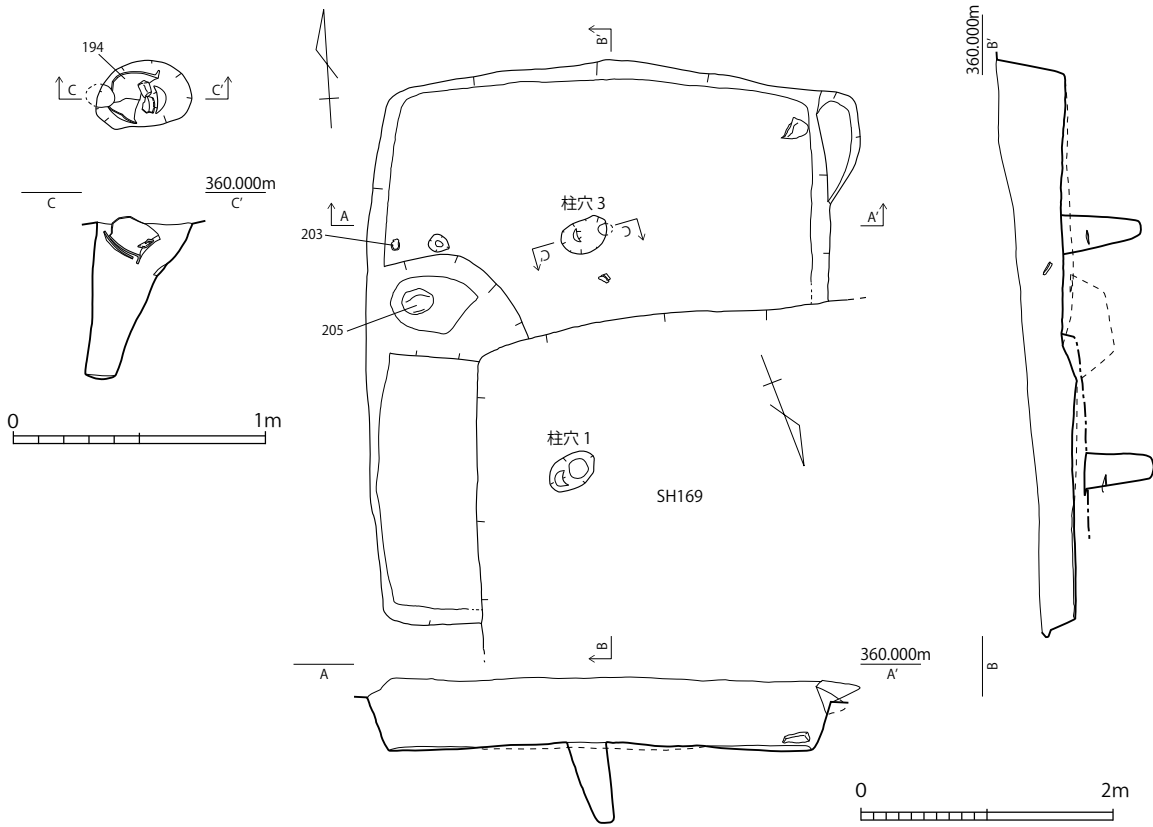
埋土はレンズ状に堆積していることから自然堆積とみられる。床面からやや浮いた状態で遺物と焼土が検出されており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



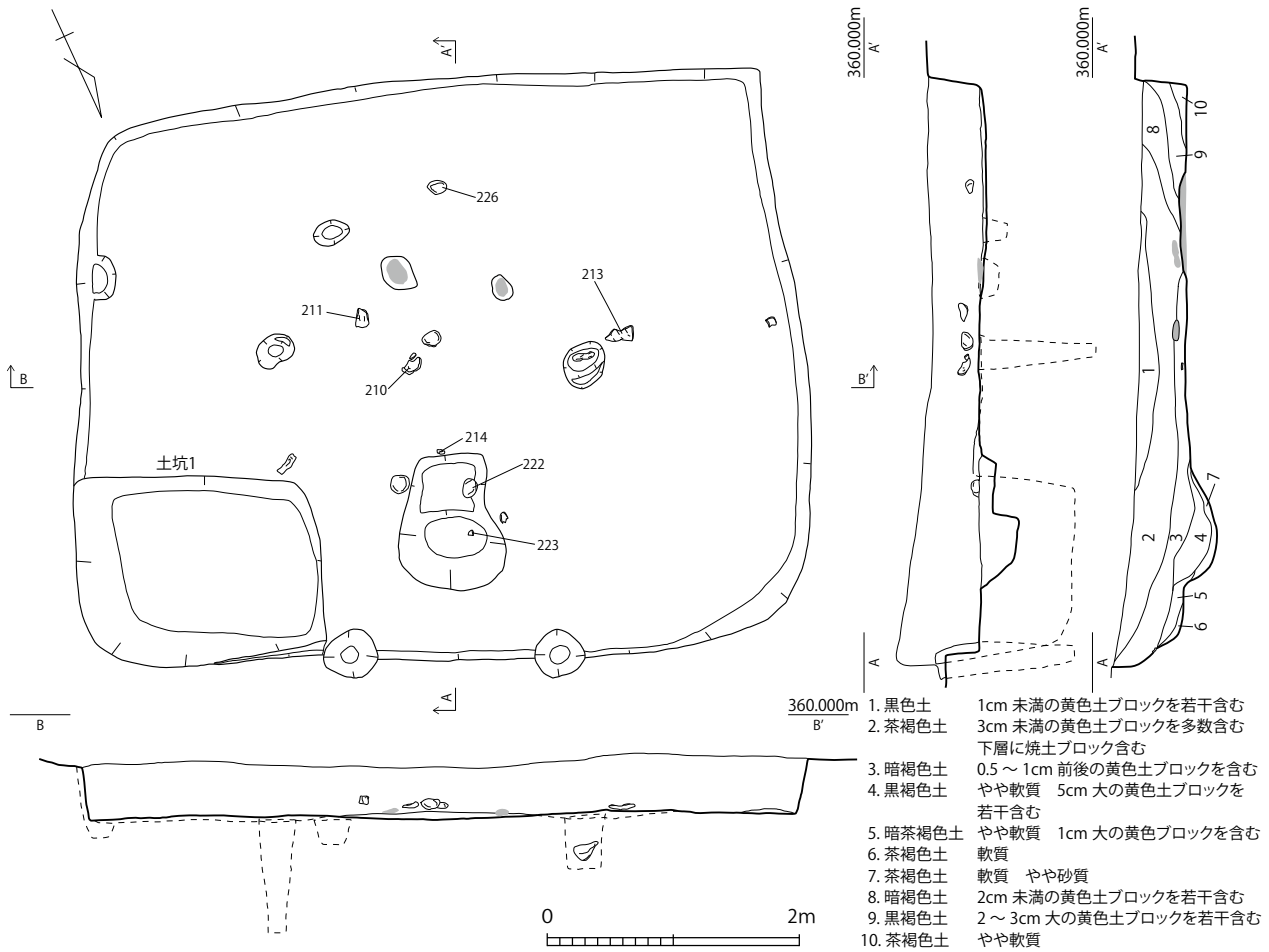
第48図 SH127実測図 (1/60)



第49図 SH127出土遺物実測図



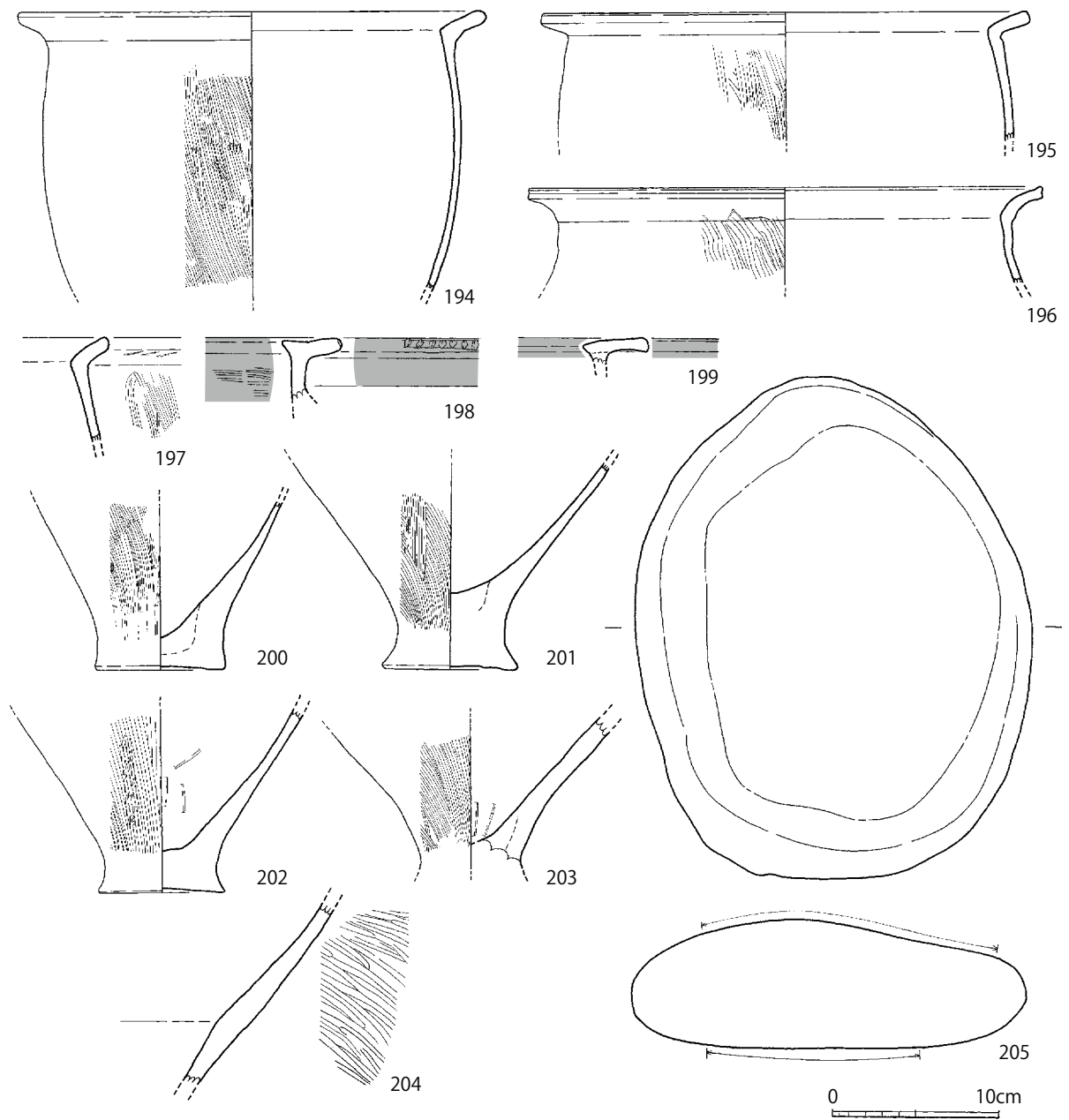
第50図 SH128実測図 (1/60・1/30)



第51図 SH129実測図 (1/60)

- |          |                                    |
|----------|------------------------------------|
| 1. 黒色土   | 1cm 未満の黄色土ブロックを若干含む                |
| 2. 茶褐色土  | 3cm 未満の黄色土ブロックを多数含む<br>下層に焼土ブロック含む |
| 3. 暗褐色土  | 0.5 ~ 1cm 前後の黄色土ブロックを含む            |
| 4. 黒褐色土  | やや軟質 5cm 大の黄色土ブロックを<br>若干含む        |
| 5. 暗茶褐色土 | やや軟質 1cm 大の黄色土ブロックを含む              |
| 6. 茶褐色土  | 軟質                                 |
| 7. 茶褐色土  | 軟質 やや砂質                            |
| 8. 暗褐色土  | 2cm 未満の黄色土ブロックを若干含む                |
| 9. 黒褐色土  | 2 ~ 3cm 大の黄色土ブロックを若干含む             |
| 10. 茶褐色土 | やや軟質                               |



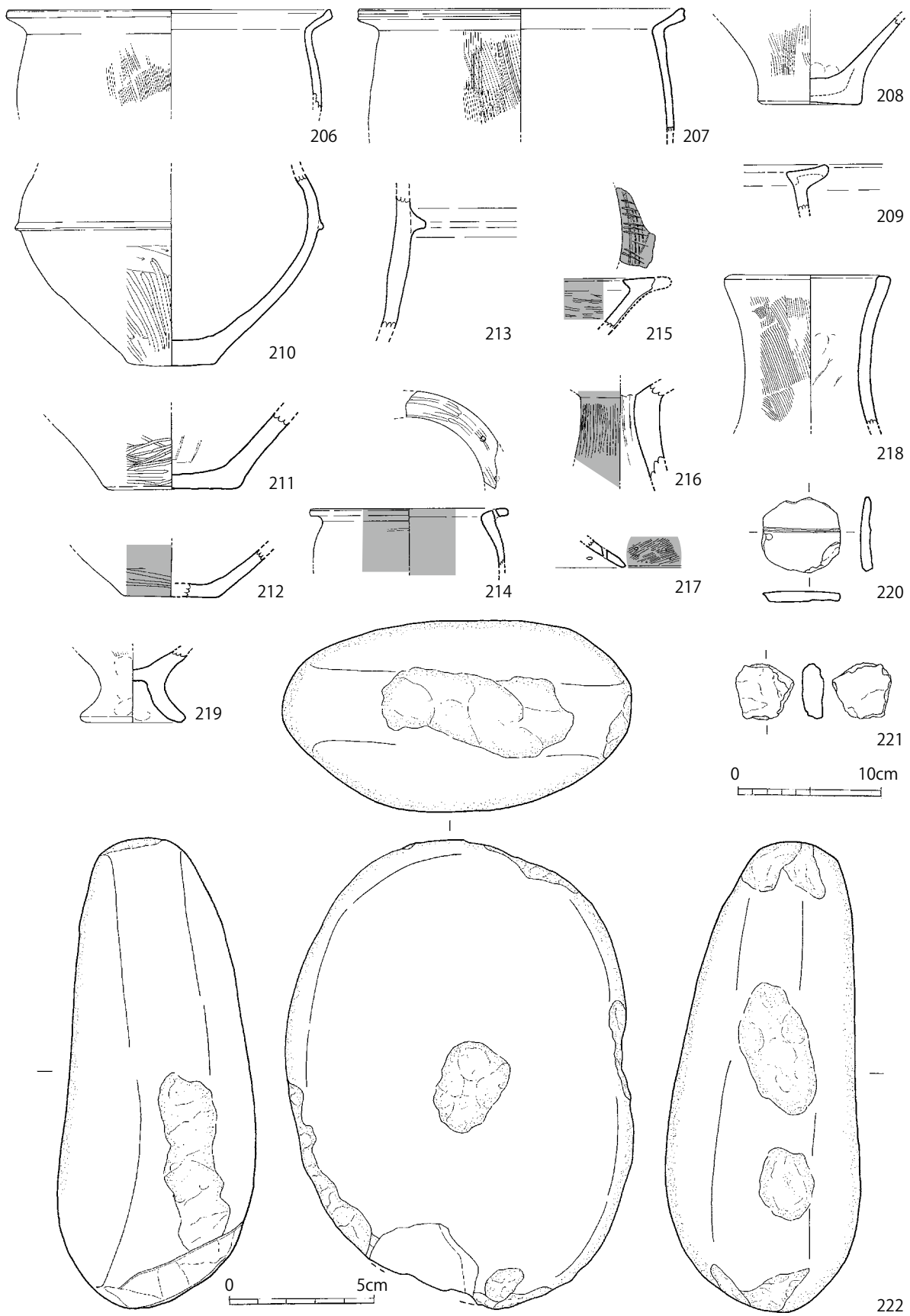


第52図 SH128出土遺物実測図

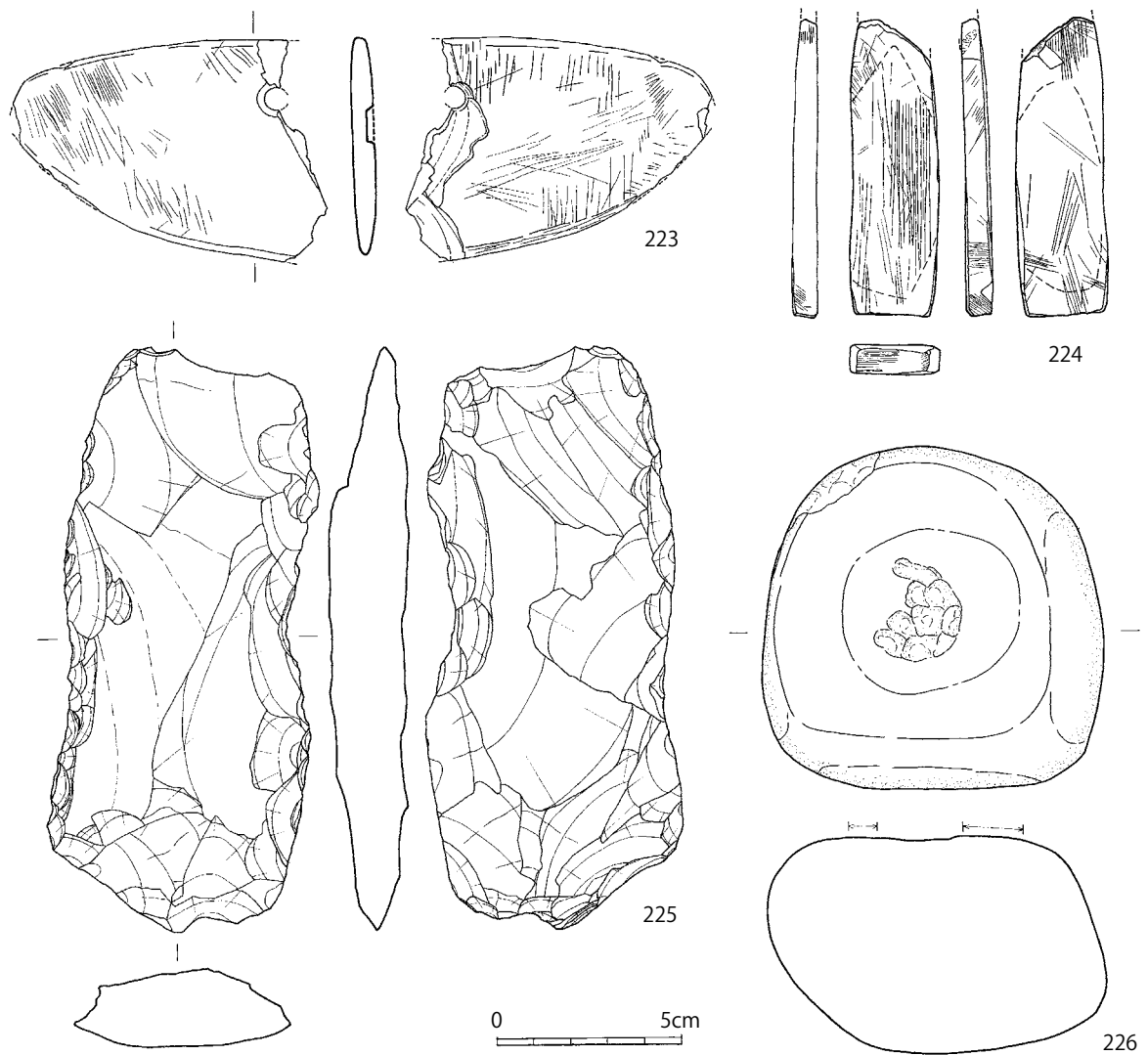
SH130 (第55・56・57図)

SH130は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸4.5m、短軸3.2m、深度は0.5mである。支柱穴は2本で、北側には竪穴内土坑がある。土坑の形状は長方形で、規模は長軸1.9m、短軸1.2mであり、埋土の観察から竪穴建物とともに自然埋没したことがわかるため、竪穴建物に付随した土坑であると判断した。南壁面際には土坑があり、北西と南西隅部には周溝がめぐっている。建物内で被熱した場所は確認できなかったが、建物中央部には浅い窪みがあり、その周辺の床面が硬化していたことから、炉跡の可能性が考えられる。

埋土はレンズ状に堆積していることから自然堆積とみられる。遺物は埋土全般から出土しており、埋没過程で混じり込んだものと考えられる。SH130とSK448との遺構間で、高坏(237)の接合が認められた。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第53図 SH129出土遺物実測図①



第54図 SH129出土遺物実測図②

**SH131 (第58・59図)**

SH131は竪穴建物である。SK535に切られる。形状は長方形で、規模は長軸3.95m、短軸3.3m、深度は0.4mである。主柱穴は2本で、長軸上の壁面際から斜め方向に掘り込まれている。東方向の壁際には土坑が、北壁際と南西隅には周溝がめぐっている。

埋土は自然堆積したものとみられる単一層で、遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH132 (第60・61図)**

SH132は竪穴建物である。SH181に切られる。形状は隅丸長方形で、規模は長軸4.45m、短軸3.5m、深度は0.15mである。主柱穴は2本で、建物の中心には浅く掘りくぼめた炉跡がある。東壁際には土坑が掘り込まれている。

出土遺物は極めて少なく図示した高坏以外は甕の小破片のみで、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH133 (第62・63図)

SH133は竪穴建物である。上部の削平が著しく、北側の壁はほとんど残っていない。形状は長方形で、規模は長軸6.2m、短軸は4.4mと推定され、深度はかろうじて残る南壁で0.15mである。主柱穴が2本と、南壁際に土坑が1基確認できた。

出土遺物は図示した磨石と甕片の他は器台片が出土しているが、土器片はすべて小破片で出土量もきわめて少ないことから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

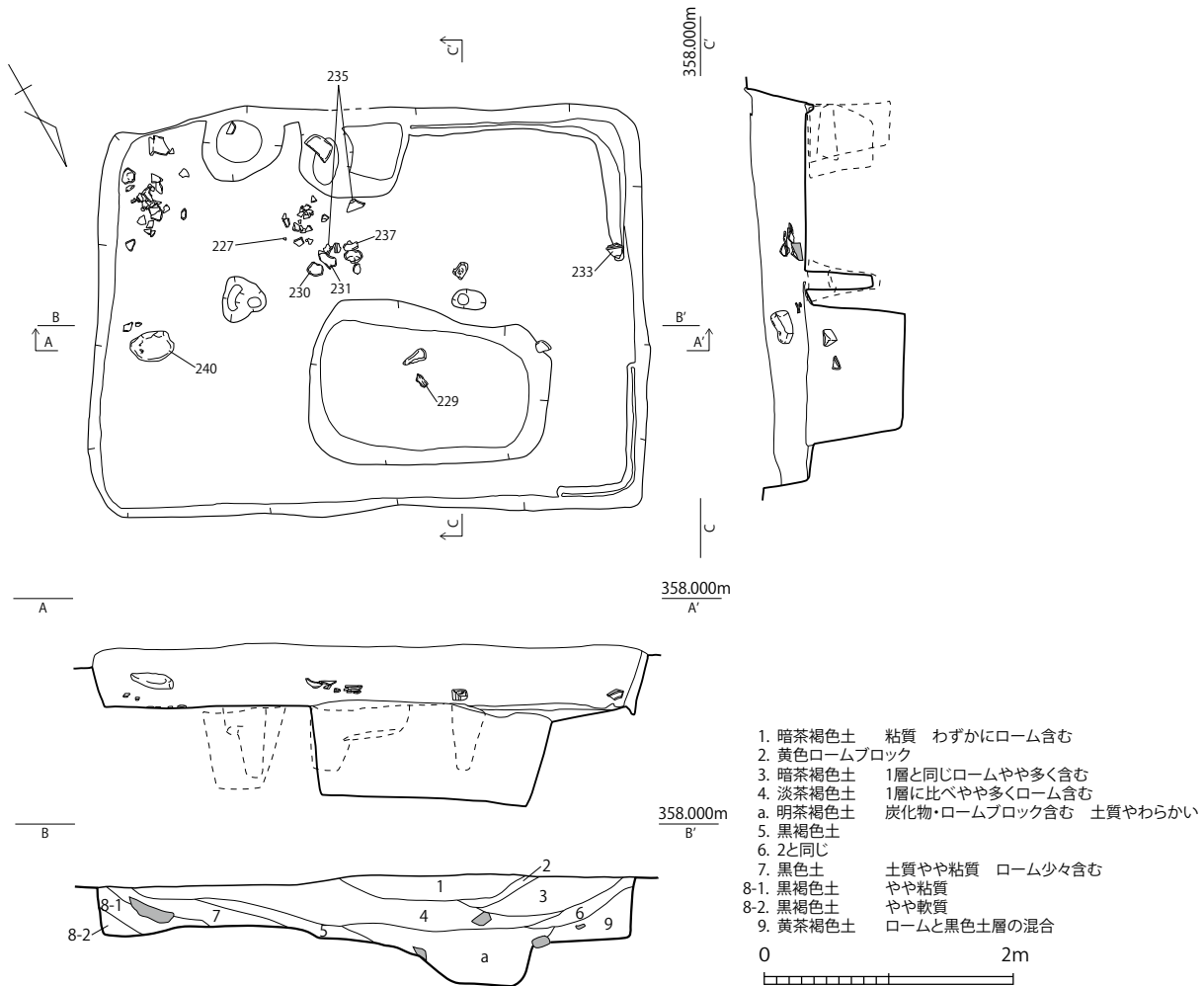
SH134 (第64・65図)

SH134は竪穴建物である。SH182や近現代の溝に切られる。形状は円形で、規模は径9.2～8.8m、深度は0.2mである。主柱穴は円形に配置された8本と推定できるが、近接して複数の柱穴があることから、補助柱ないしは建て替えが行われた可能性が考えられる。主柱穴の多くで抜き取りの痕跡が確認できた。建物中央部には楕円形の土坑が1基あり、この土坑の長軸壁際には柱穴状の掘り込みが2本検出できた。建物壁際には周溝が途切れつつも部分的にめぐっている。

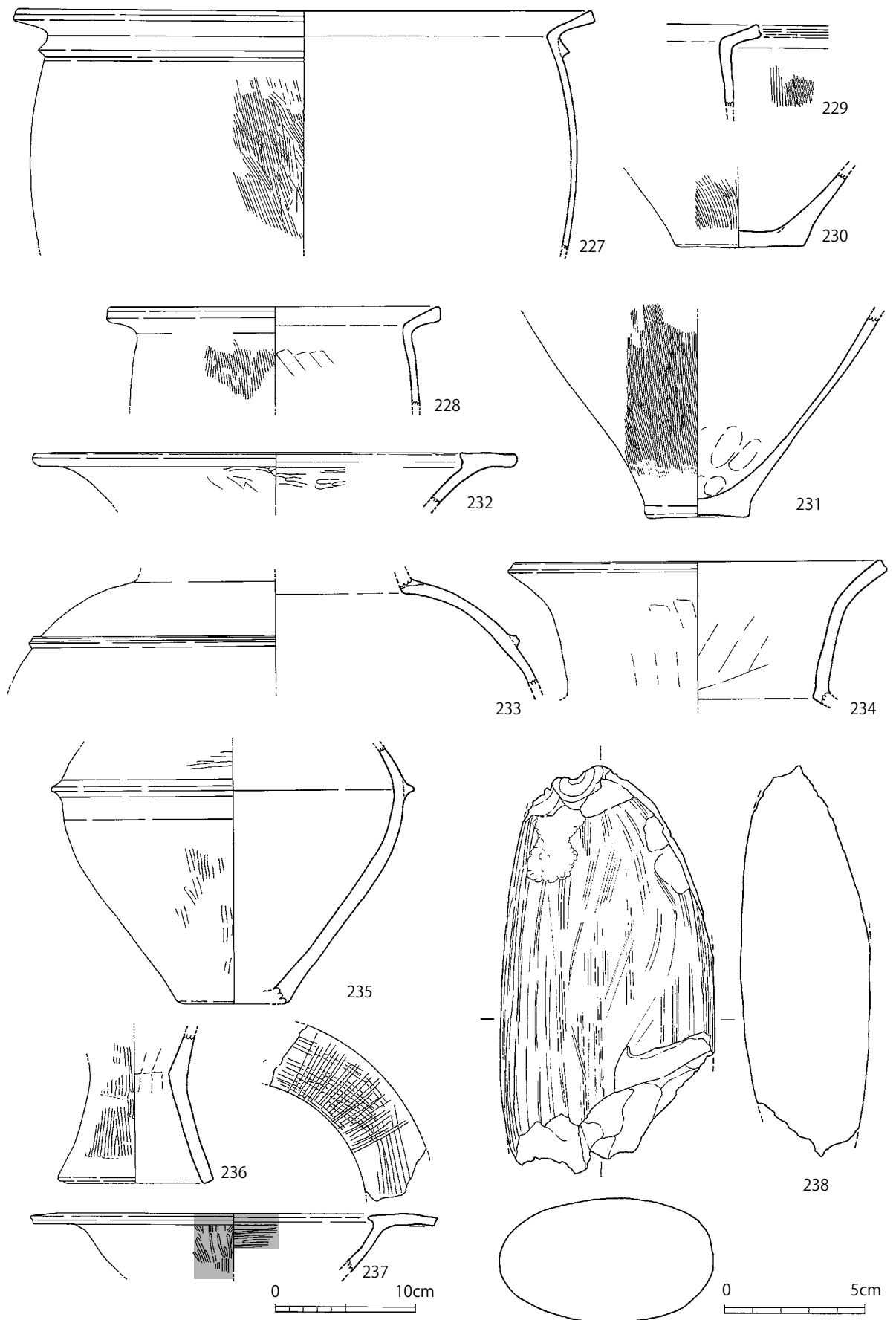
埋土は黒褐色土の単一層で、遺物の多くは主柱穴や土坑から出土したもので破片が多い。出土遺物の中には、石庖丁を転用したとみられる石剣形石製品も出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH135 (第66・67図)

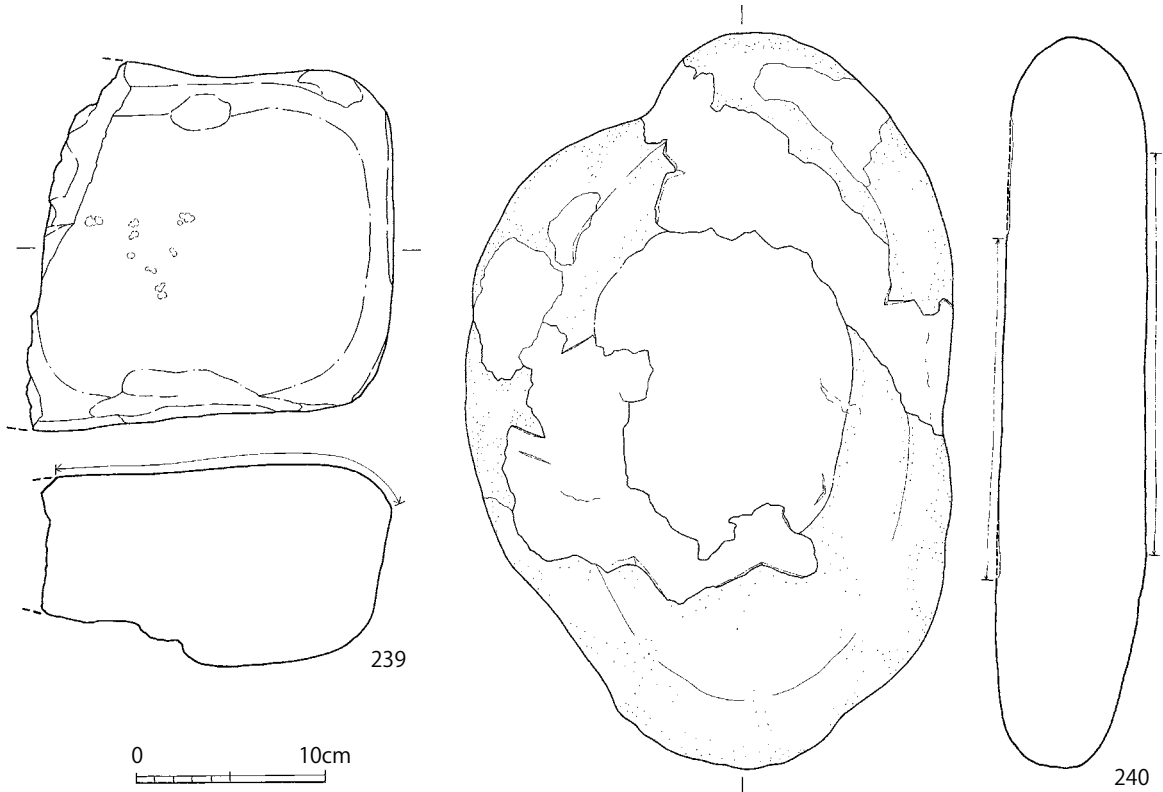
SH135は竪穴建物である。SH183に切られる。形状は方形で、規模は一辺が5.0m、深度は0.4mである。主柱穴



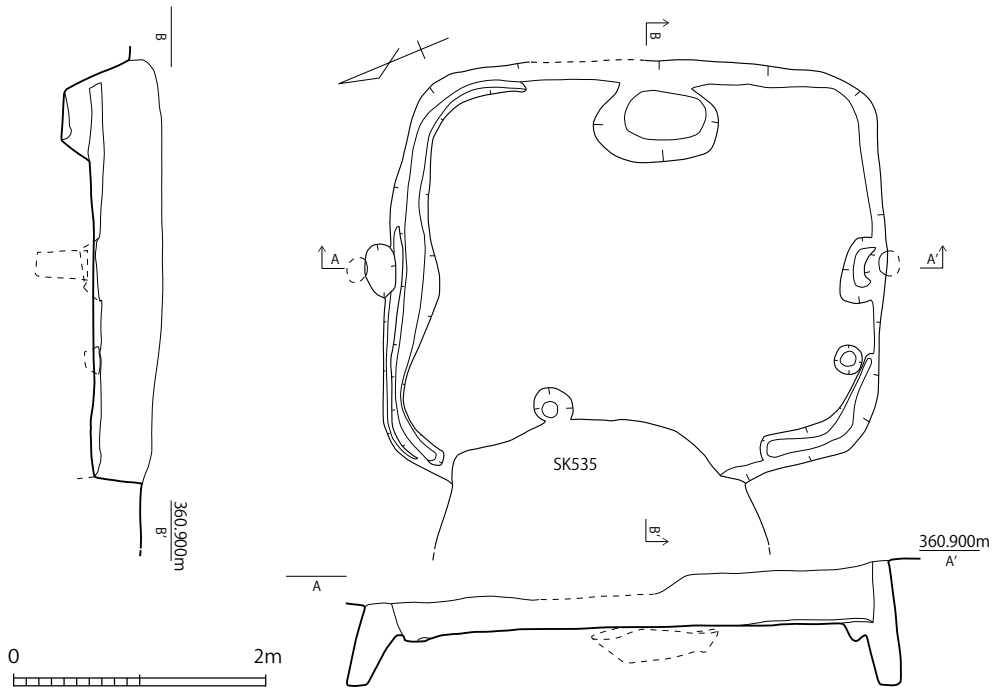
第55図 SH130実測図 (1/60)



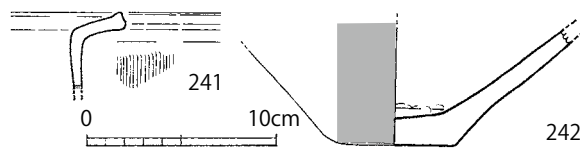
第56図 SH130出土遺物実測図①



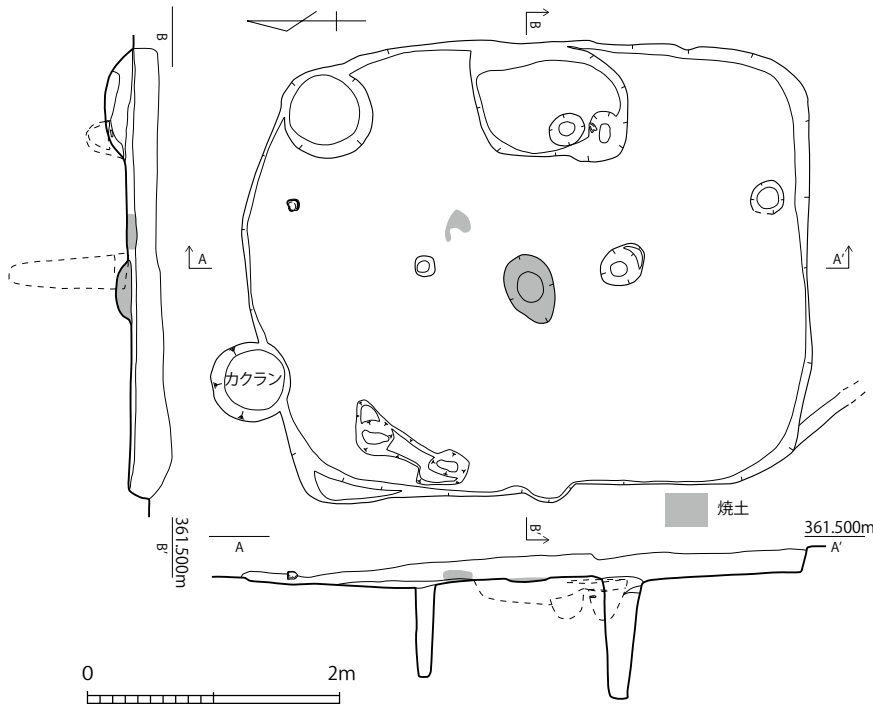
第57図 SH130出土遺物実測図②



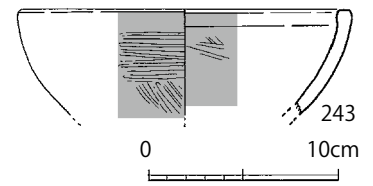
第58図 SH131実測図 (1/60)



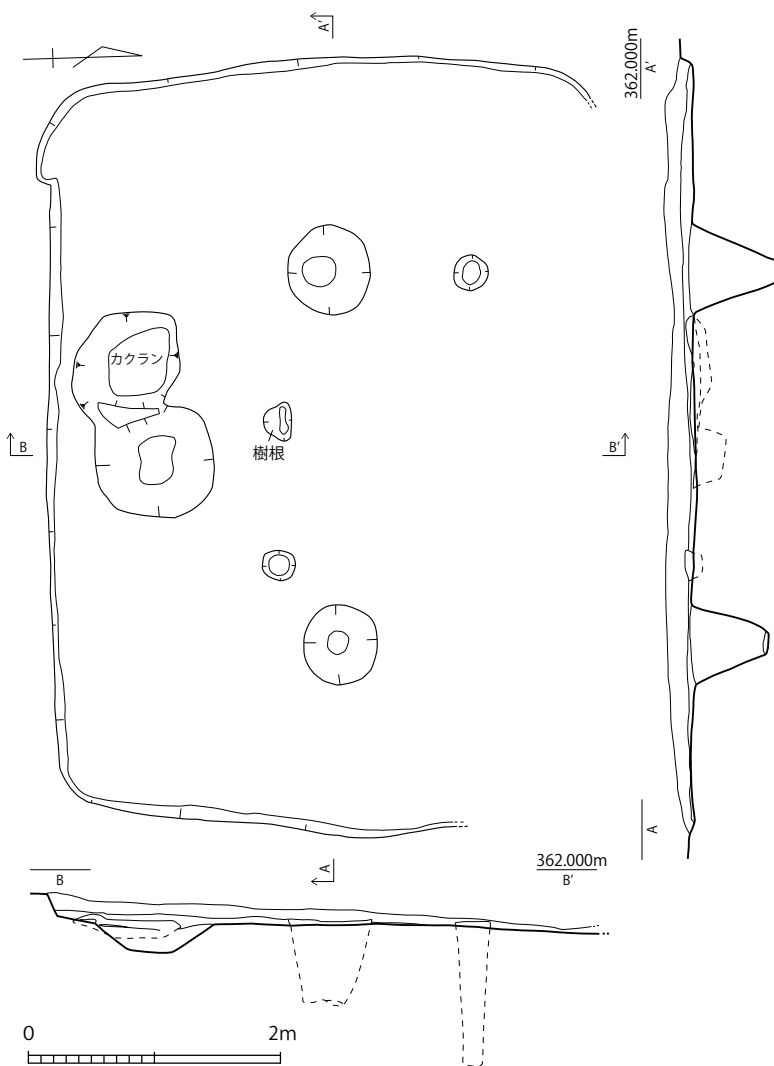
第59図 SH131出土遺物実測図



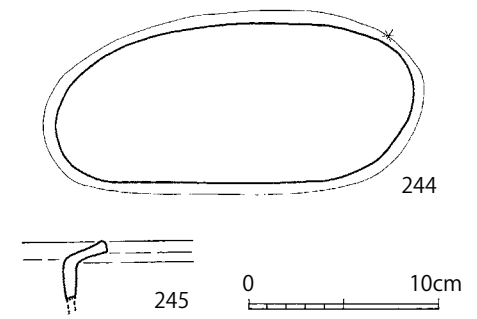
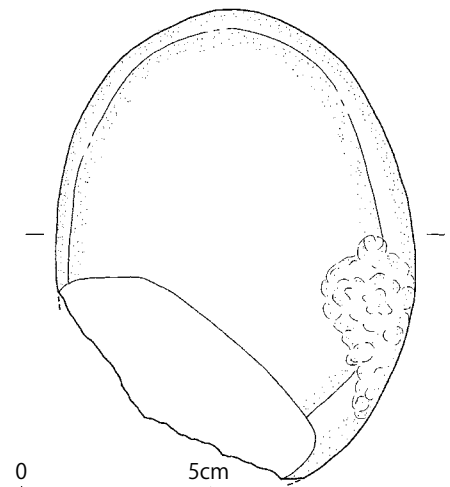
第60図 SH132実測図 (1/60)



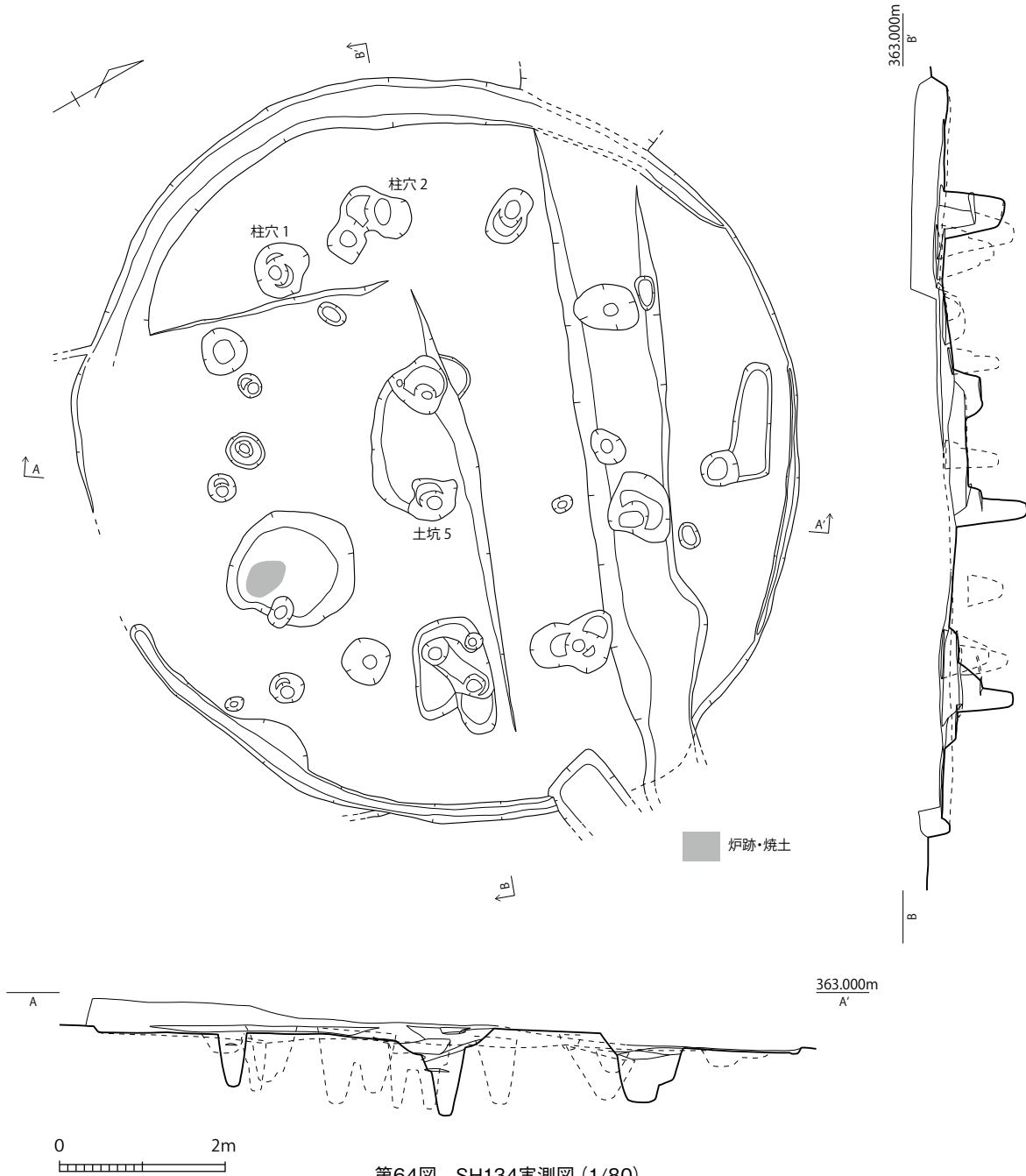
第61図 SH132出土遺物実測図



第62図 SH133実測図 (1/60)



第63図 SH133出土遺物実測図



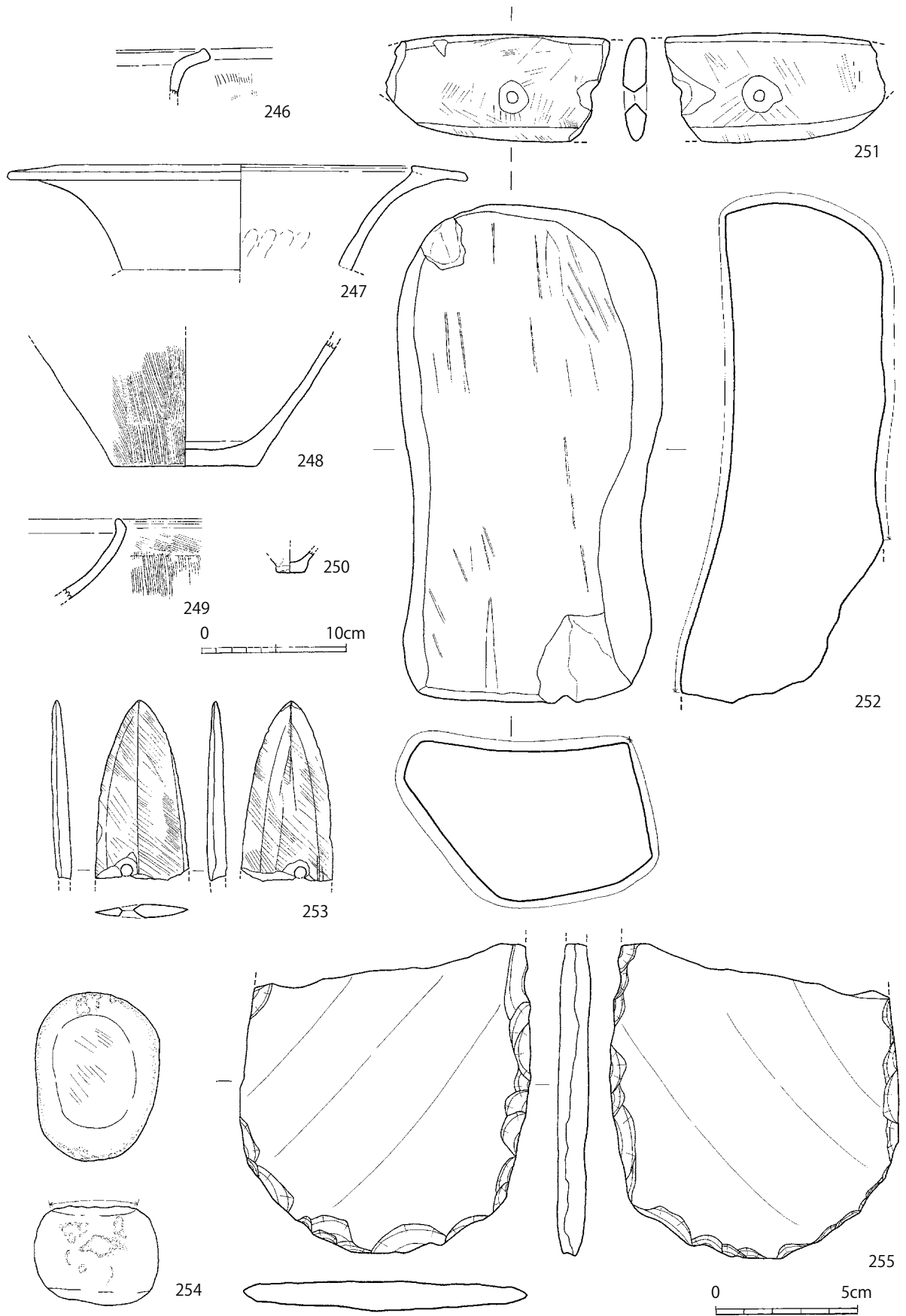
は2本で、建物中央部には炉跡と考えられる浅いくぼみが確認できるが、被熱していない。東壁際には土坑があり、その南側の壁際にはわずかに周溝が確認できる。建物北西隅にのみ長方形のベット状遺構がある。

埋土は単一層で自然埋没したとみられる。遺物は主に土坑と柱穴から出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

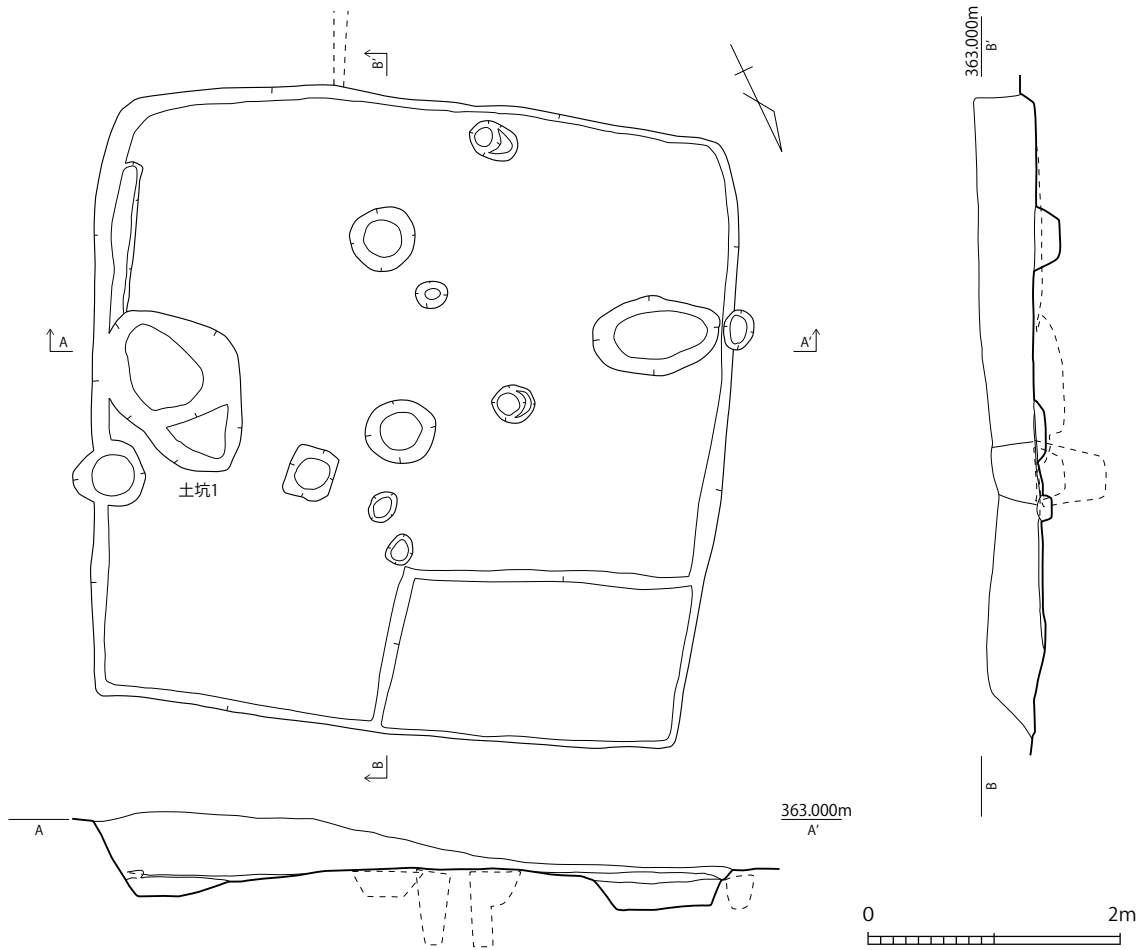
**SH136 (第68・69・70・71・72・73図)**

SH136は竪穴建物である。形状は円形で、規模は径7.6～8.0m、深度は0.5mである。貼床の下から柱穴や土坑などが検出できたため建て直しがあることがわかる。古段階は規模が径6.4m程度であり、新段階になり南東方向に拡張されるとともに方形の張り出しが付設されたと考えられる。支柱穴は新段階では明確に6本を検出できたが、古段階の支柱穴の配置は明確ではない。それは貼床下から柱穴を検出できているが、こうした柱穴のみで配置を考えても歪な配置となってしまうため、新段階の柱穴のなかには古段階から踏襲されたものが含まれて

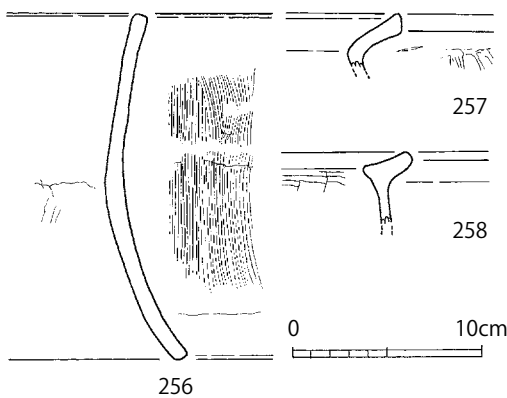




第65図 SH134出土遺物実測図



第66図 SH135実測図 (1/60)



第67図 SH135出土遺物実測図

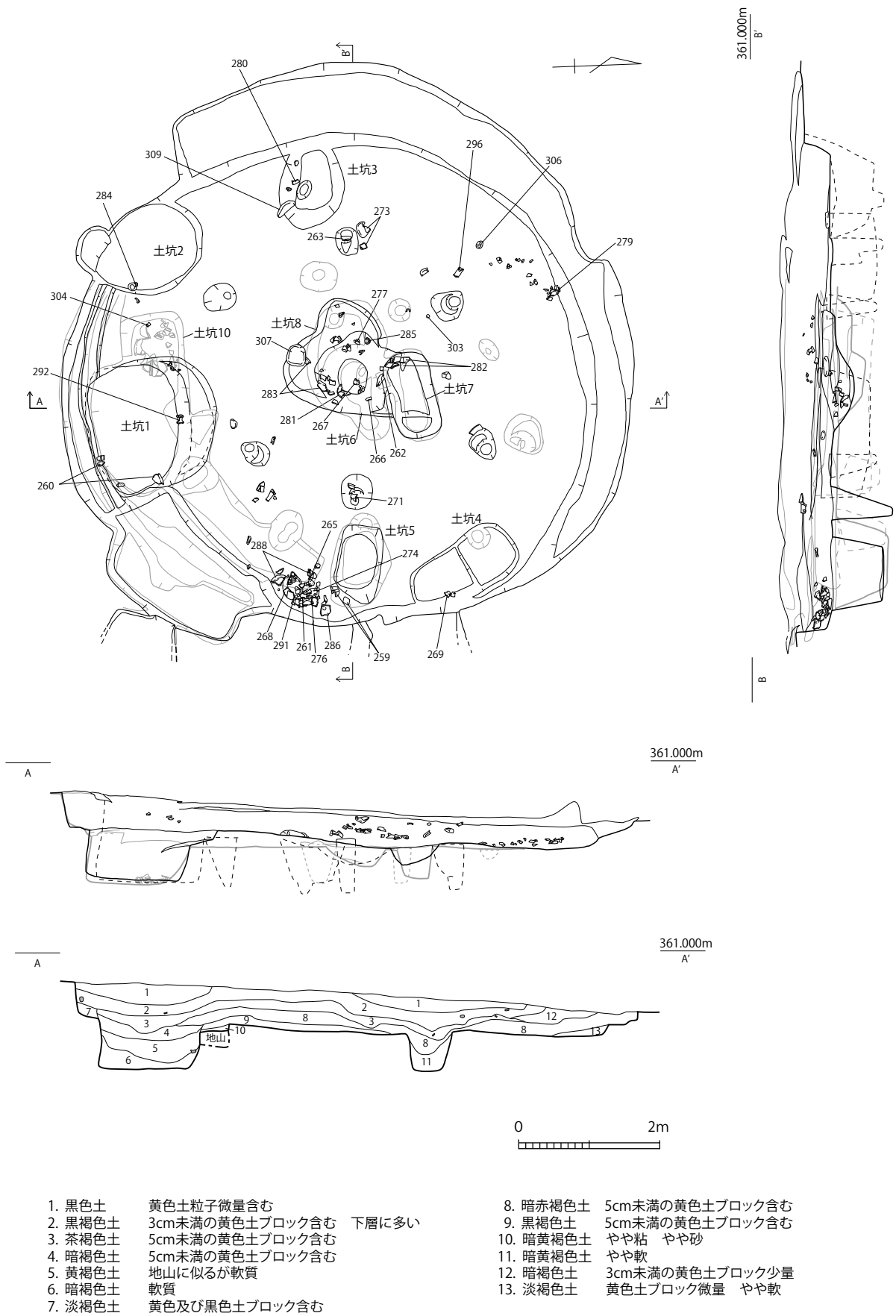
いる可能性がある。建物内では壁面際および中心部で複数の土坑が確認できる。新段階の土坑は土坑2・3・4・5・7が、古段階の土坑は土坑8・10がそれぞれ該当すると考えられる。土坑1については土層から竪穴建物の埋没過程において掘り込まれた土坑であることがわかり、竪穴建物が一様に埋没していくのではない事を示している。新段階の拡張部の壁際で周溝が確認できた。

出土した遺物の大半は新段階の廃絶後、埋没過程で混じり込んだものである。貼床や古段階の土坑等からも遺物はわずかに出土しているが、埋没過程の遺物との明確な時期差を見出すことはできなかった。SH136の埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

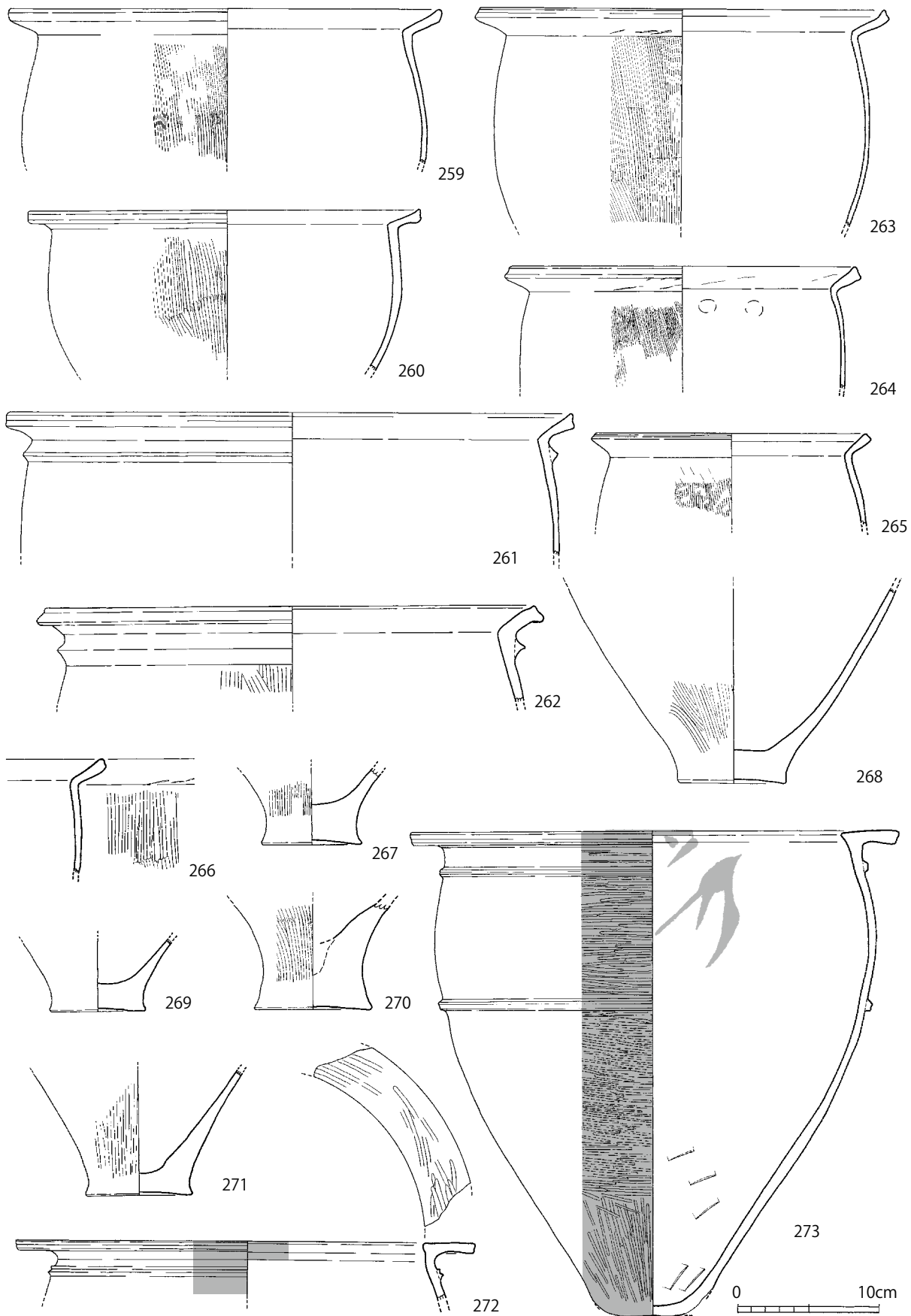
### SH137 (第74・75図)

SH137は竪穴建物と考えられる。遺構の東半分は近現代の溝により切られる。形状は方形で、規模は一辺3.5m、深度は0.2mと推測できる。床面は平坦だが、貼床や硬化面は確認できなかった。支柱穴は2本確認できるが、いずれも径が大きいことから抜き取りが行われた可能性が考えられる。建物中心部には浅く掘りくぼめた炉跡があり、その周辺では焼土の堆積がわずかに確認できた。

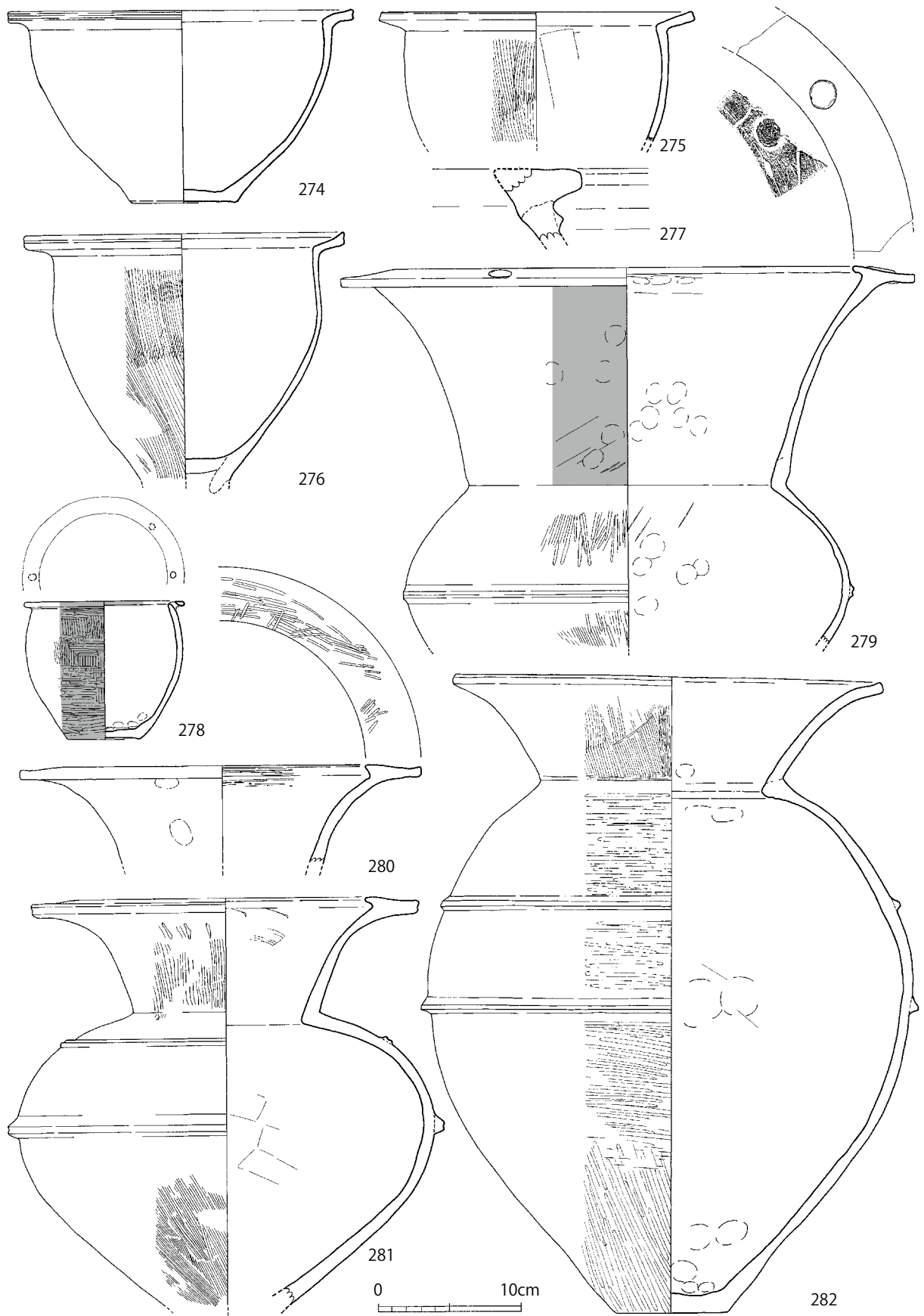
床面からやや浮いた状態で台石等の遺物が出土しており、埋没過程での混じり込みとみられる。埋没時期は弥



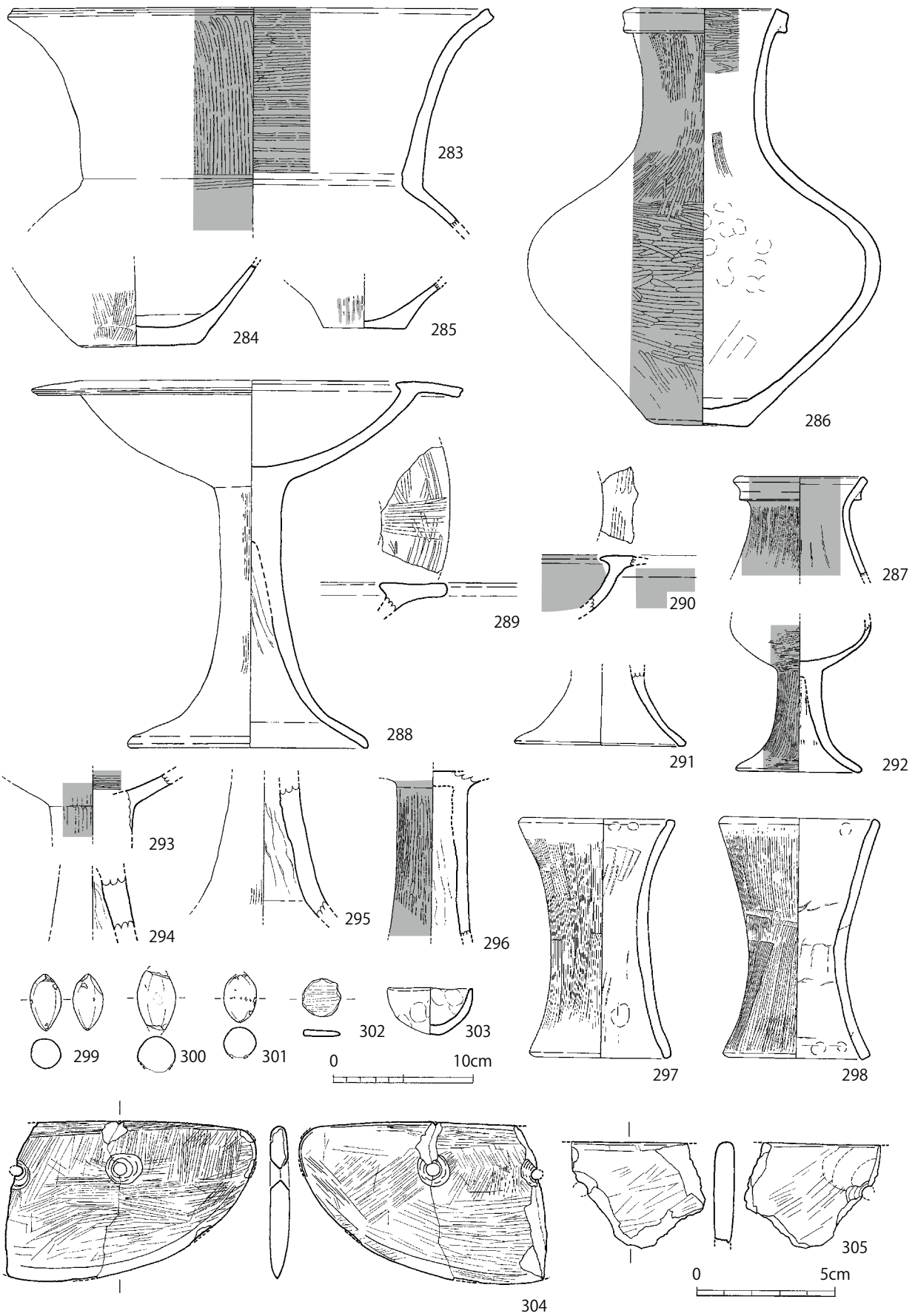
第68図 SH136実測図 (1/80)



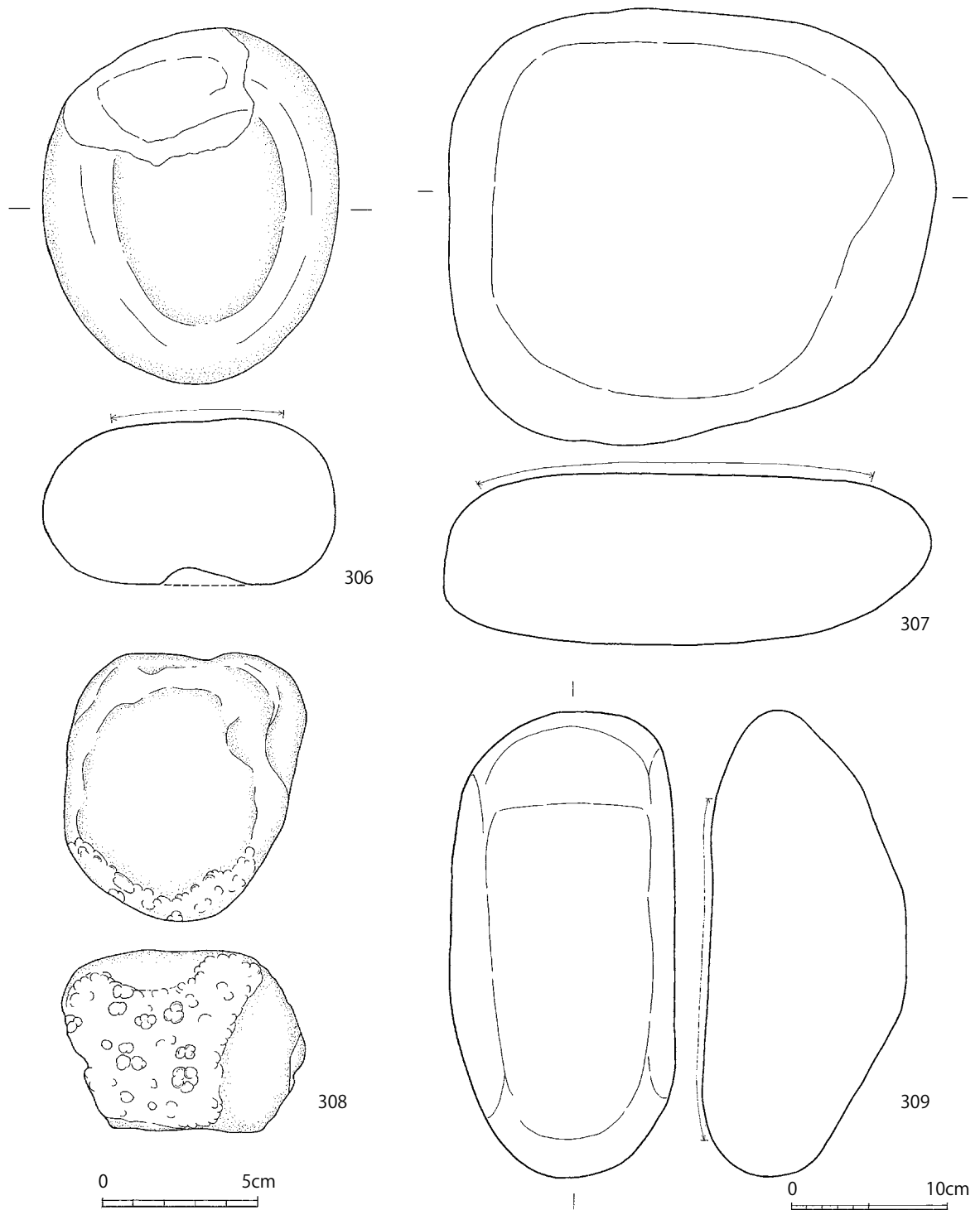
第69図 SH136出土遺物実測図①



第70図 SH136出土遺物実測図②



第71図 SH136出土遺物実測図③

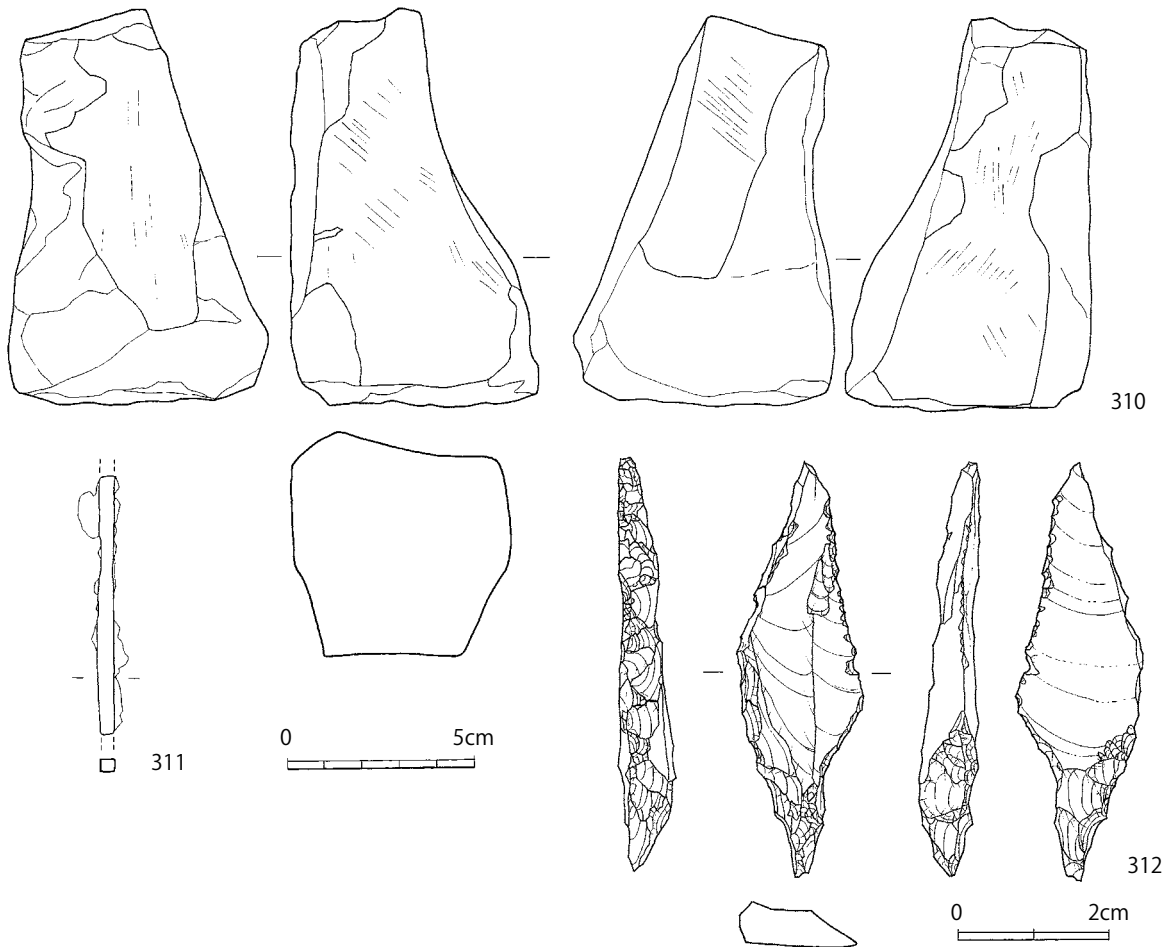


第72図 SH136出土遺物実測図④

生時代中期後半段階と考えられる。

**SH138 (第76・77図)**

SH138は竪穴建物である。SH185と近現代の溝により切られるため北西部分の状況が判然としない。主柱穴は2本確認でき、西壁際に土坑がある。この土坑部分を除き、ベット状遺構が全周していたと推測できる。ベット



第73図 SH136出土遺物実測図⑤

状遺構の幅が全て一定であったとすると、SH138の形状は方形で、規模は一辺が5.4mに復元できる。

埋土はレンズ状に堆積していることから自然埋没し、遺物は埋没過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH139 (第78・79・80・81・82・83図)**

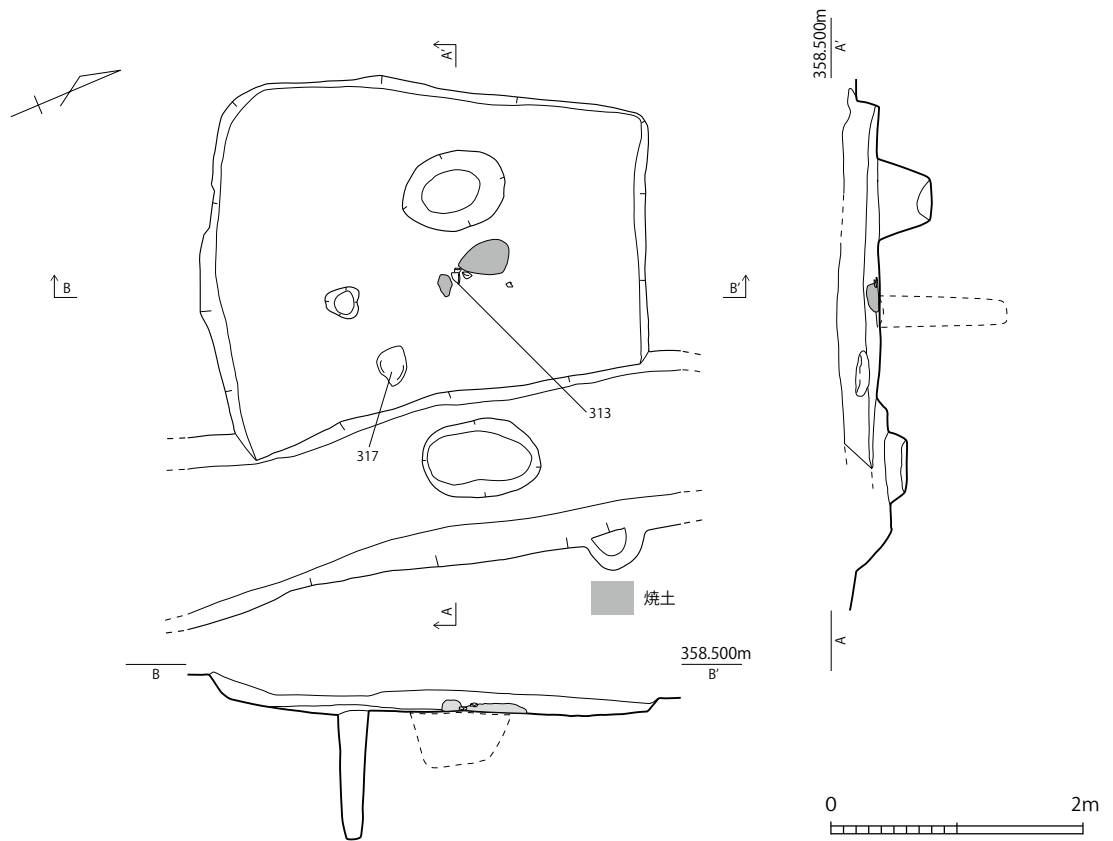
SH139は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸6.7m、短軸5.1m、深度は0.7mである。主柱穴は2本で、北隅に長方形のベット状遺構がある。明確な炉跡は確認できていない。南壁際中央部に土坑が掘り込まれており、南壁の一部では周溝が確認できる。また西側の壁面には貯蔵を目的としたと考えられる奥行き0.5mの横穴が掘られているが、この中から遺物は出土していない。

土層をみると8層や2層が堆積した後に、土坑のような掘り込みが行われているようにも見えるが、調査時には輪郭など確認できてはいない。遺物は覆土全般から出土しているが、特に床面近くで土器がまとまって出土している。また北側柱穴の上部では壺や器台がまとまって出土していることから、柱穴が抜き取られた後、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。またこの建物からは片刃石斧・打製石斧・磨製石鏃・敲石・砥石などの豊富な種類の石器が出土しているのも特徴といえる。しかしこれらの石器は同じ層から出土したものではないため、必ずしも一括性があるものとは言えない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

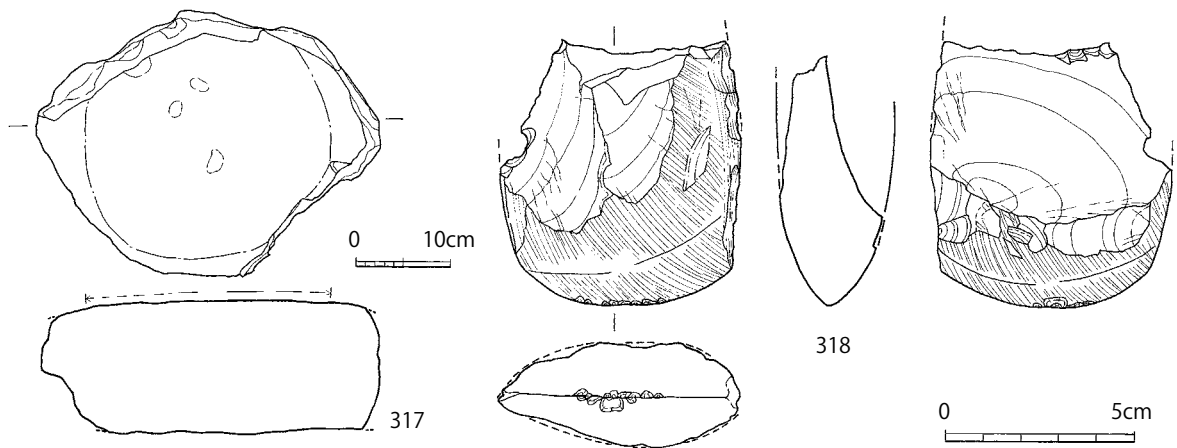
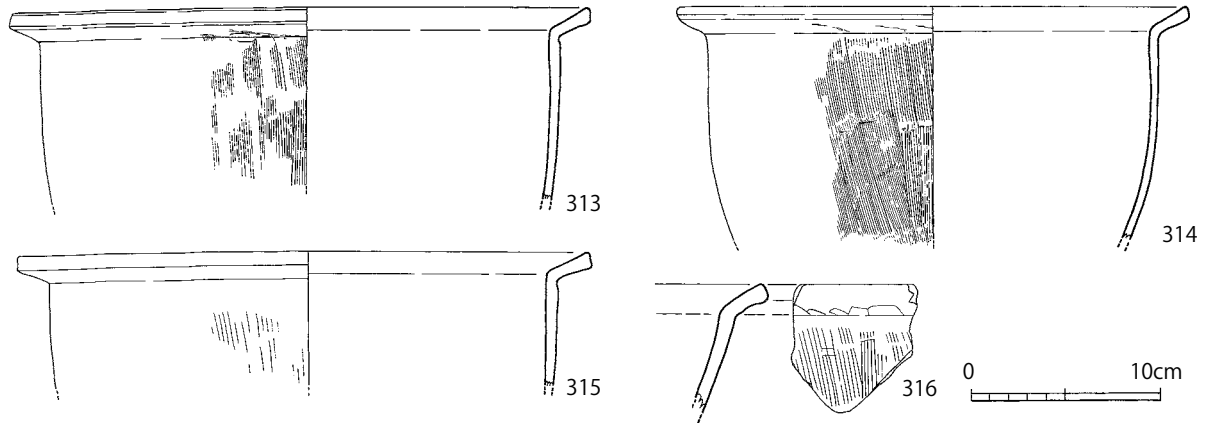
**SH140 (第84・85・86図)**

SH140は竪穴建物である。近現代の溝に西側が切られる。形状は長方形で、規模は長軸6.2m、短軸4.0m、深度は0.2m

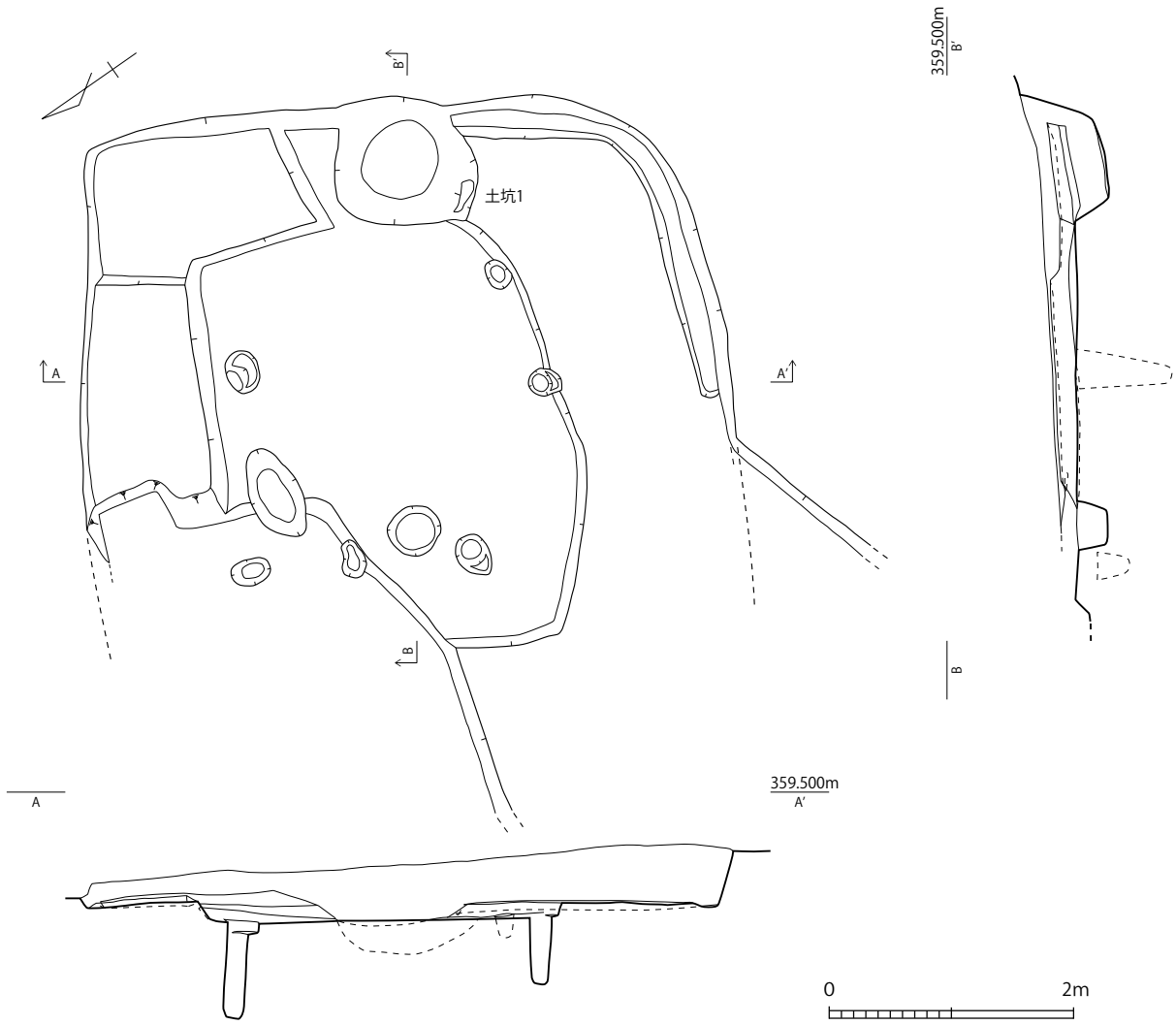




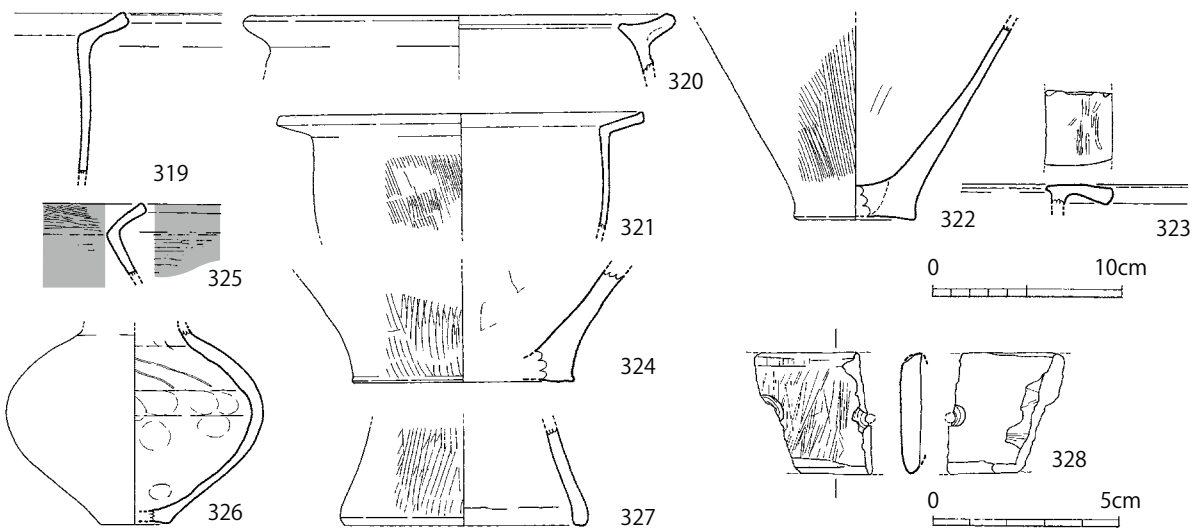
第74図 SH137実測図 (1/60)



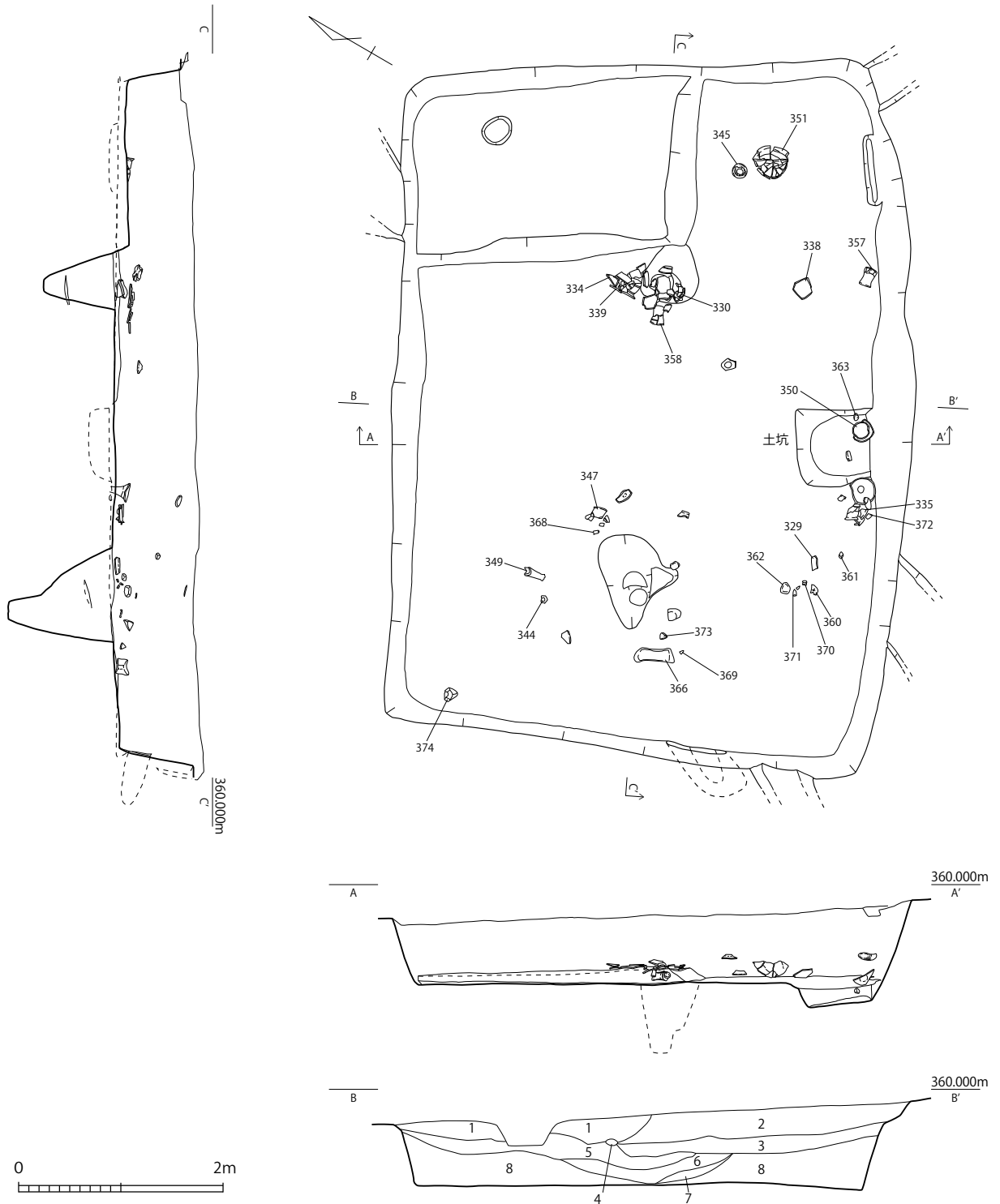
第75図 SH137出土遺物実測図



第76図 SH138実測図 (1/60)

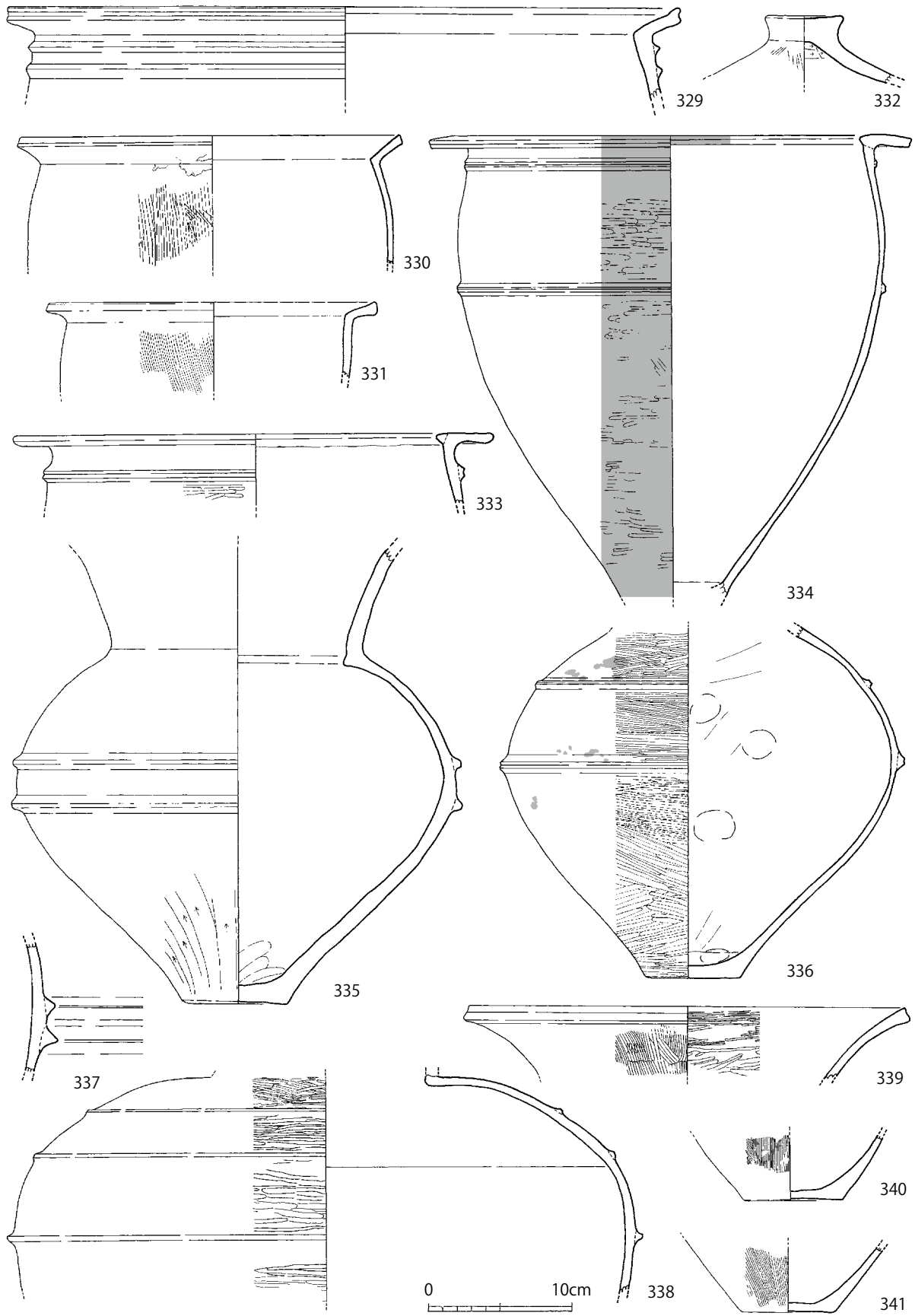


第77図 SH138出土遺物実測図

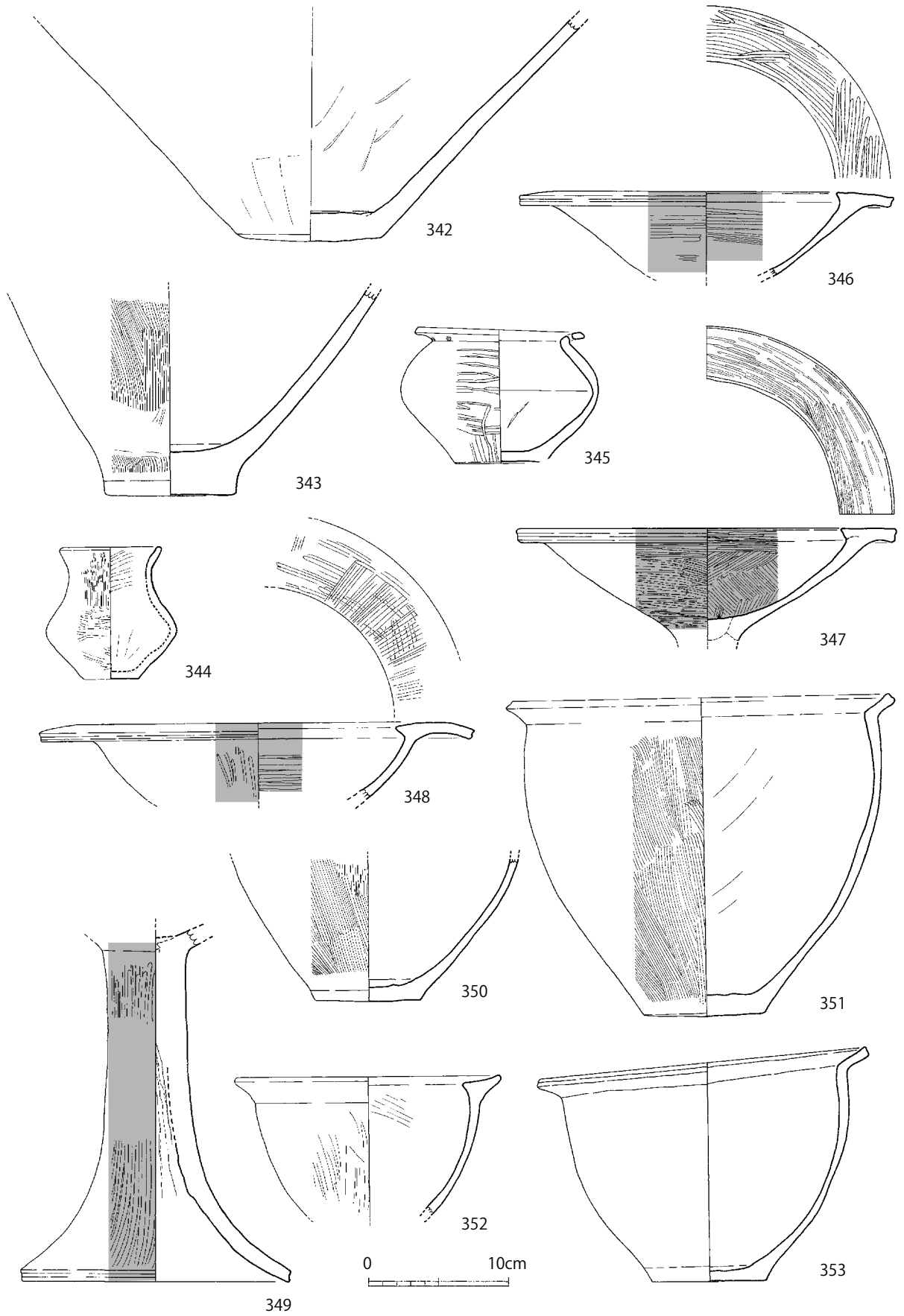


- |           |                     |         |        |
|-----------|---------------------|---------|--------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 黄褐色土粒を若干含む          | しまりやや強い | 粘性中    |
| 2. 暗褐色砂質土 | 黄褐色土粒を少し含む          | しまり中    | 粘性中    |
| 3. 暗褐色砂質土 | 黄褐色土粒を少し含む          | しまりやや強い | 粘性中    |
| 4. 黒褐色砂質土 | しまりやや強              | 粘性中     |        |
| 5. 暗褐色砂質土 | 黄褐色土粒を多く含む          | しまりやや強い | 粘性やや弱い |
| 6. 暗褐色砂質土 | 1~3cmの黄褐色土ブロックを若干含む | しまりやや弱い | 粘性やや強い |
| 7. 暗褐色砂質土 | 黄褐色土粒1~2cm若干含む      | しまりやや弱い | 粘性やや強い |
| 8. 暗褐色砂質土 | 1~3cmの黄褐色土ブロックを多く含む | しまりやや弱い | 粘性やや強い |

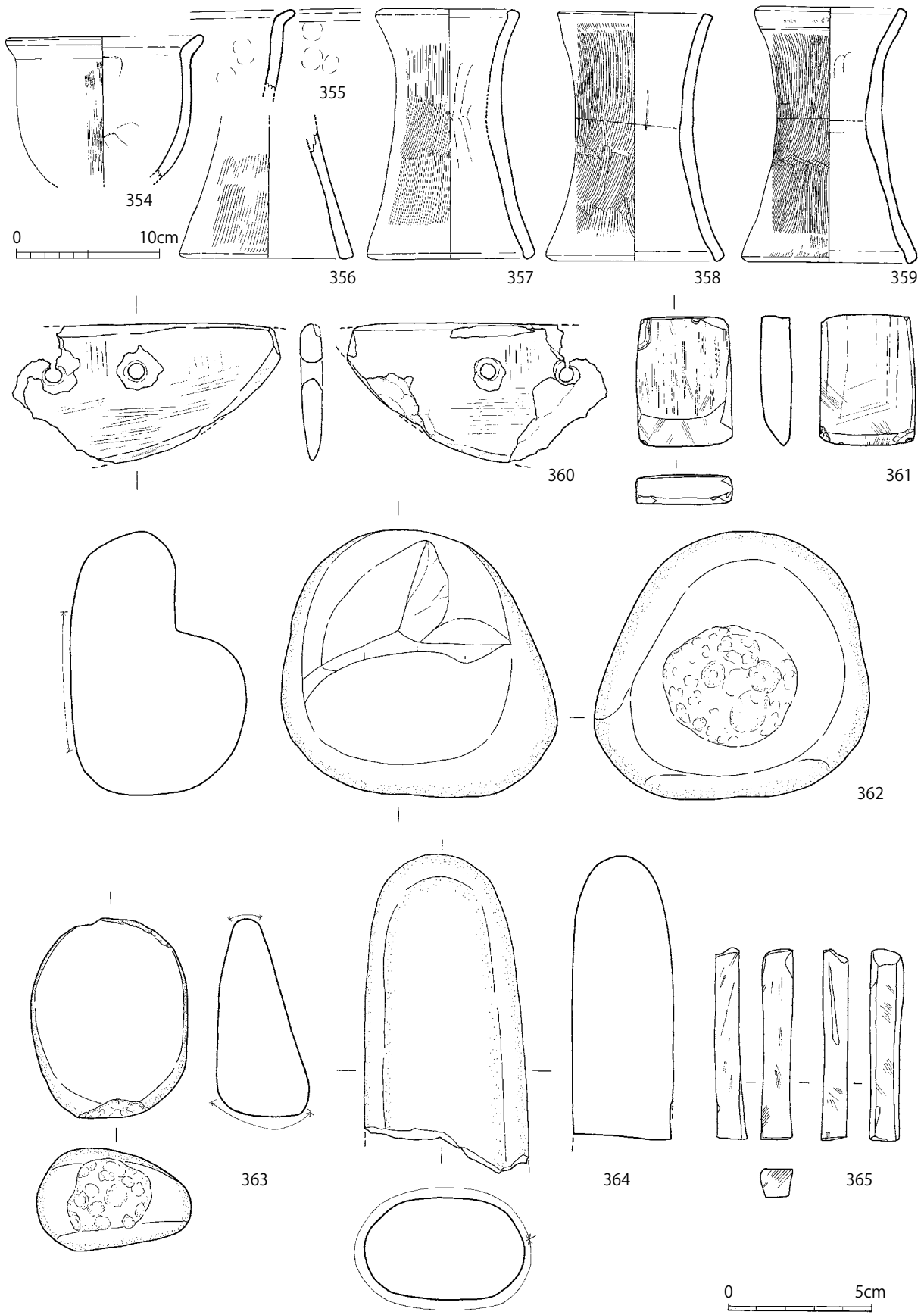
第78図 SH139実測図 (1/60)



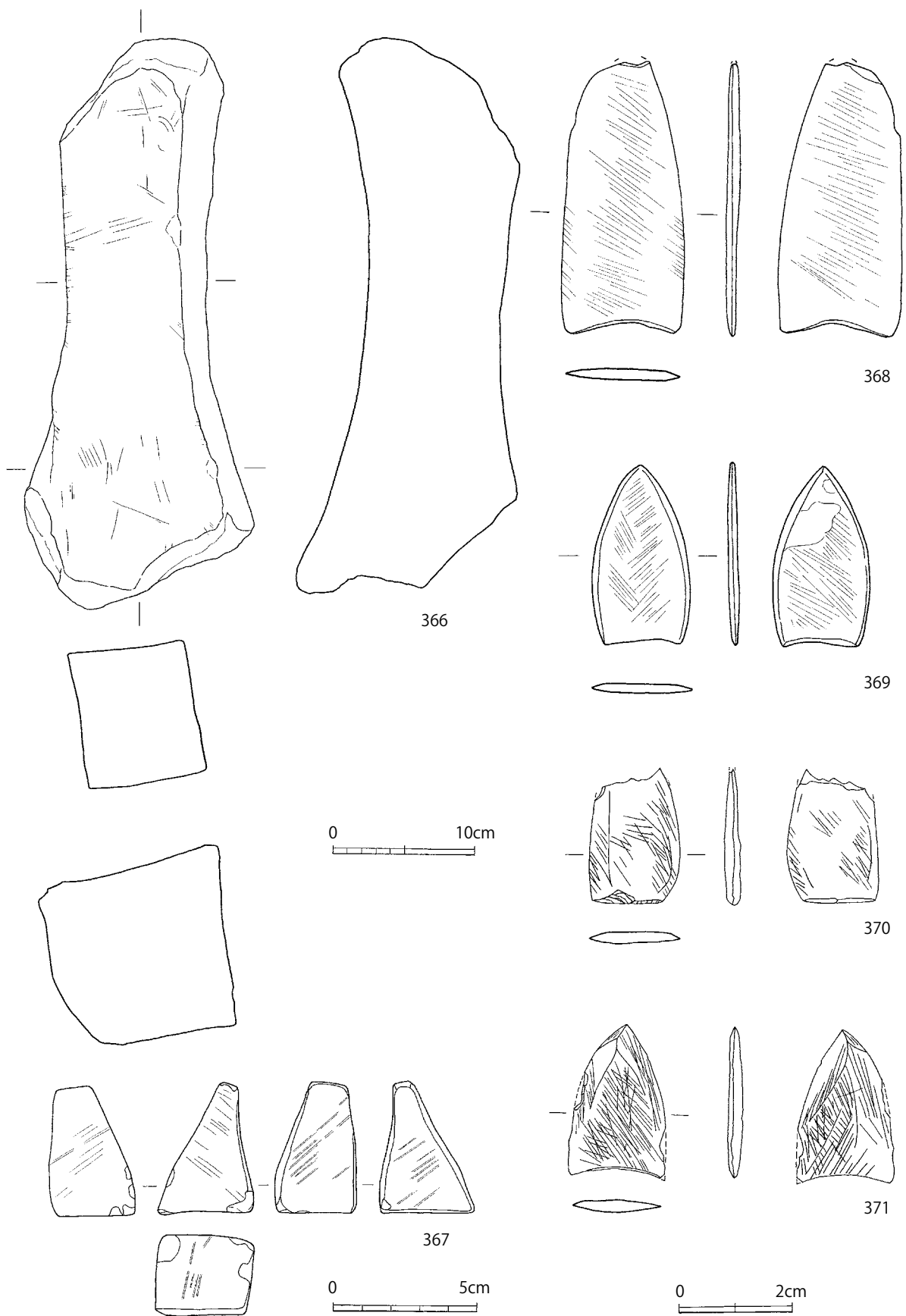
第79図 SH139出土遺物実測図①



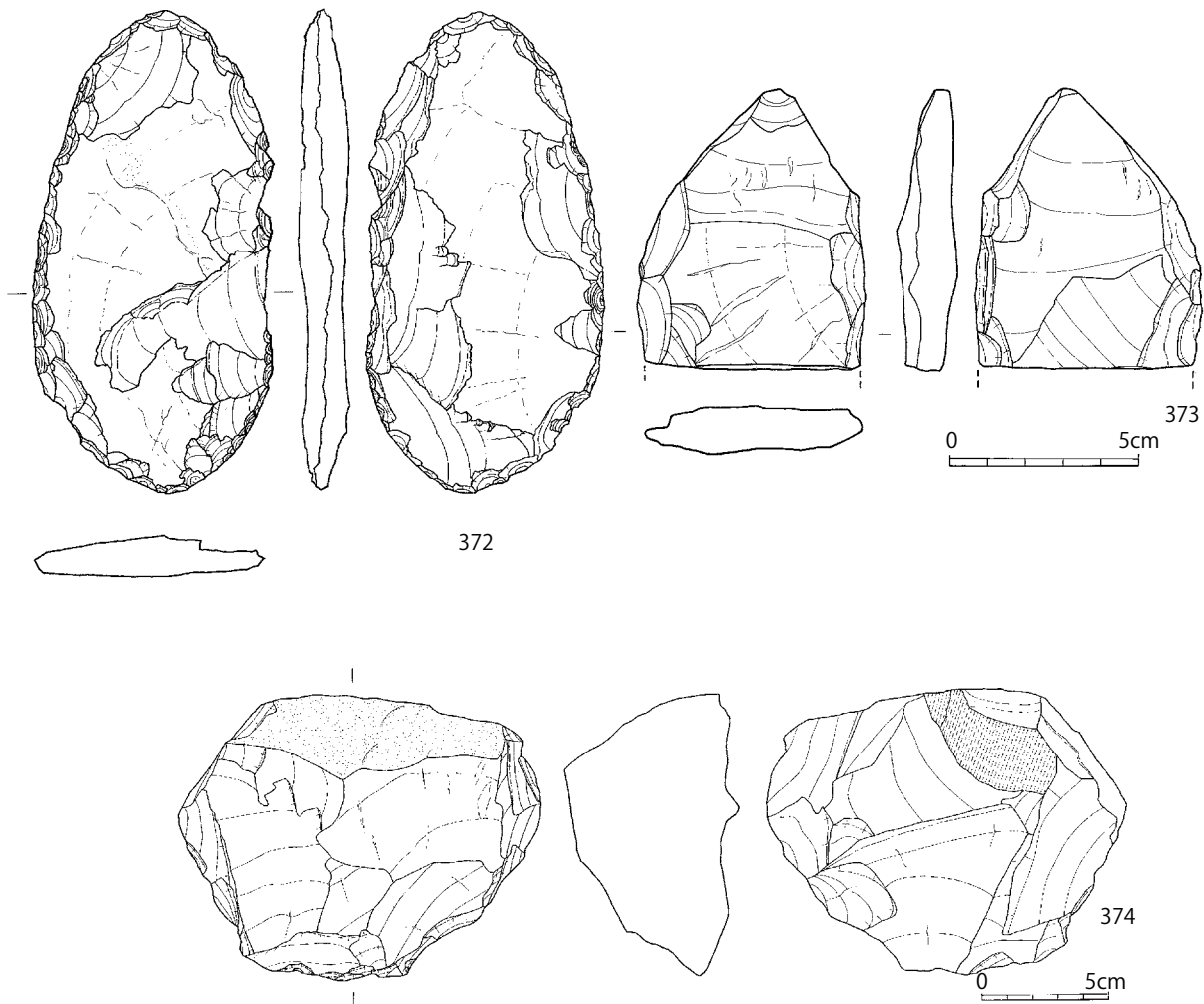
第80図 SH139出土遺物実測図②



第81図 SH139出土遺物実測図③



第82図 SH139出土遺物実測図④



第83図 SH139出土遺物実測図⑤

である。方形・長方形のベット状遺構が建物の両端に付設されているが、北側のベット状遺構は支柱穴を取り込むように歪に張り出している。支柱穴は2本あり、南壁際中央に土坑1がある。土坑1からは器台や台石などの遺物がまとまって出土しているが、土坑1は埋土の観察から竪穴建物とともに埋没している事がわかるため、廃絶後の埋没過程において廃棄されたものとみられる。出土遺物から埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

なお整理作業の段階で青銅製品(384)が出土していることが判明した。長さ1.6cm、幅は3.4cm、厚さは0.1～0.2cmと非常に薄く、器表面の残存状況は悪い。現場で出土位置を押さえられていないことや、SH140が攪乱や削平を大きく受けている点などを考慮すると、SH140にともなうものかを判断するのも慎重にならざるを得ない。器種については銅鏡ではないとの御教示を高橋徹・小柳和宏両氏から頂いており、現状では器種不明としておきたい。

**SH141 (第87・88図)**

SH141は竪穴建物と考えられる。形状は方形で、規模は一辺2.9m、深度は0.35mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。支柱穴は確認できなかった。南壁際に土坑が1基あり、その両側には柱穴が2本ともなっている。

自然堆積により埋没したとみられるが、埋没当初に堆積した3層中に炭化材や炭・焼土粒が多く混じることから、廃絶にともない焼却行為が行われたと考えられる。遺物は各層全般から出土していることから、埋没過程で



廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

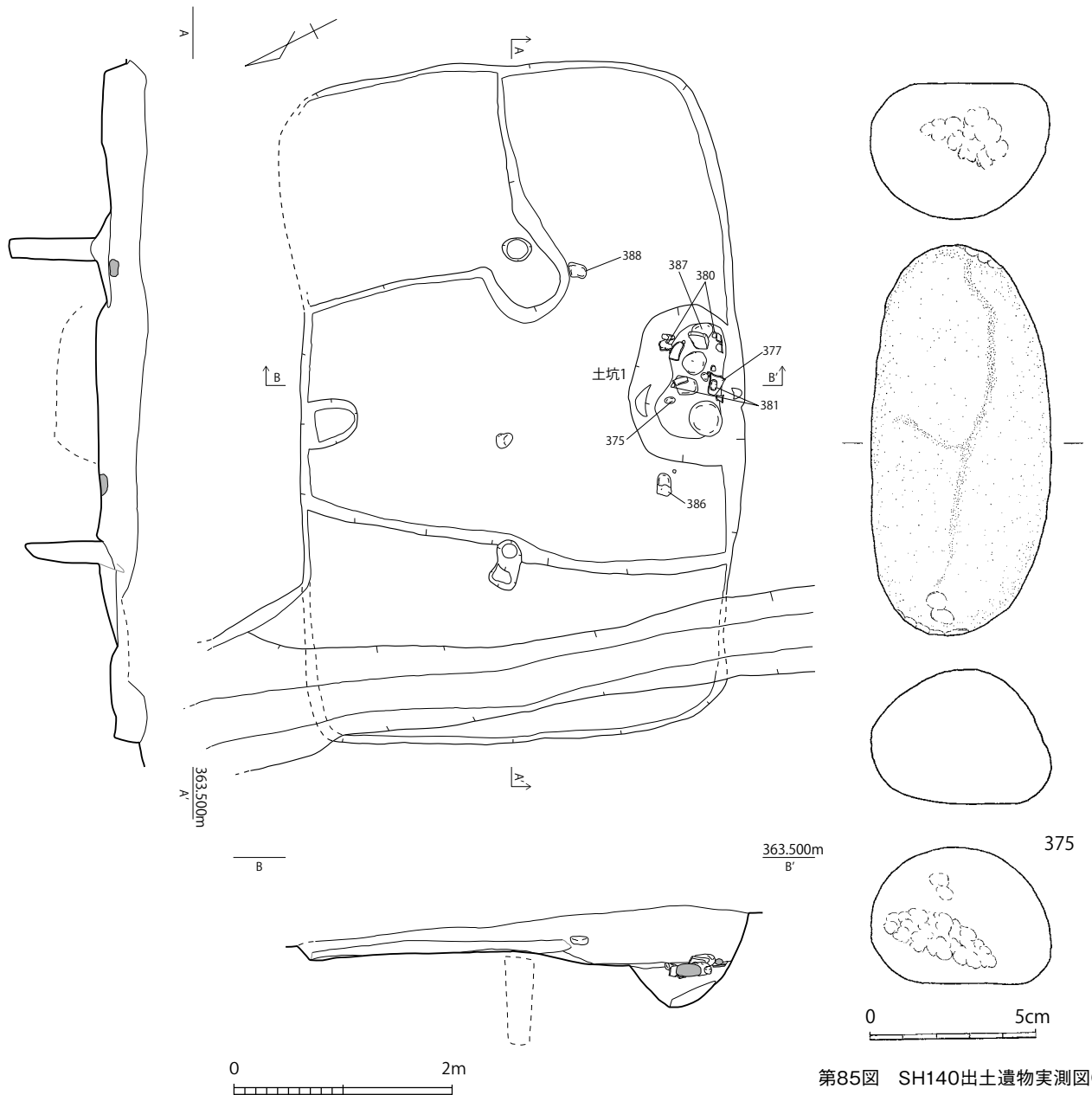
**SH142 (第89・90図)**

SH142は竪穴建物である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸3.2m、短軸2.7m、深度は0.25mである。支柱穴は確認できなかったが、建物中央付近に炉跡の可能性のある浅い土坑と、西壁際に土坑1基がある。また土坑の南から北東隅にかけての壁際には周溝がめぐっている。

埋土は黒色土の単一層で、自然堆積により埋没したとみられる。遺物は床面から浮いた状態で出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

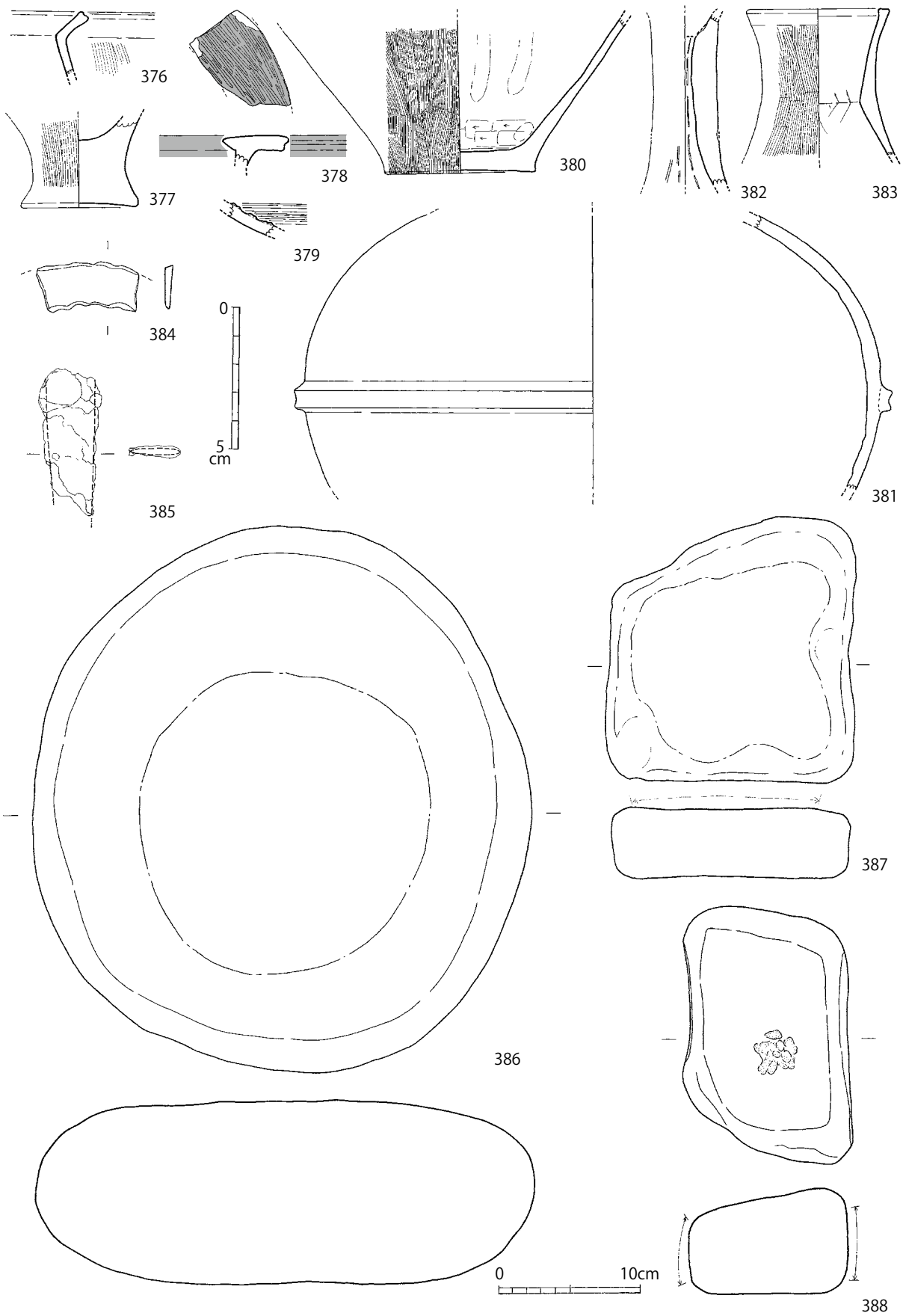
**SH143 (第91・92・93・94図)**

SH143は竪穴建物である。北側は床面まで削平を受けているため遺構の輪郭は明確ではないが、形状は長方形と推測できる。規模は長軸5.4m、短軸3.5m以上、深度は0.4mである。支柱穴は2本、南壁際付近に土坑1基がある。この竪穴建物からは炭化材と焼土が多量に出土している。炭化材は残りが悪いものの、建物の中心部に集まるよ



第84図 SH140実測図 (1/60)

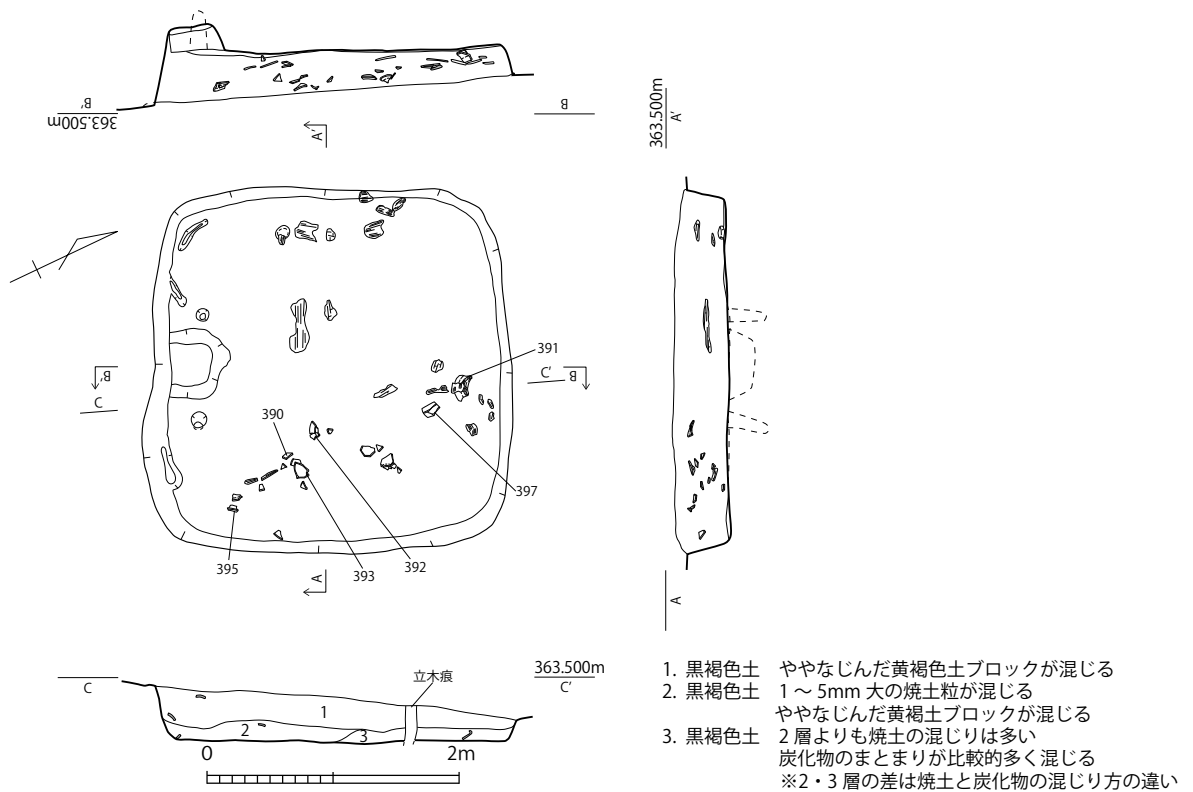
第85図 SH140出土遺物実測図①



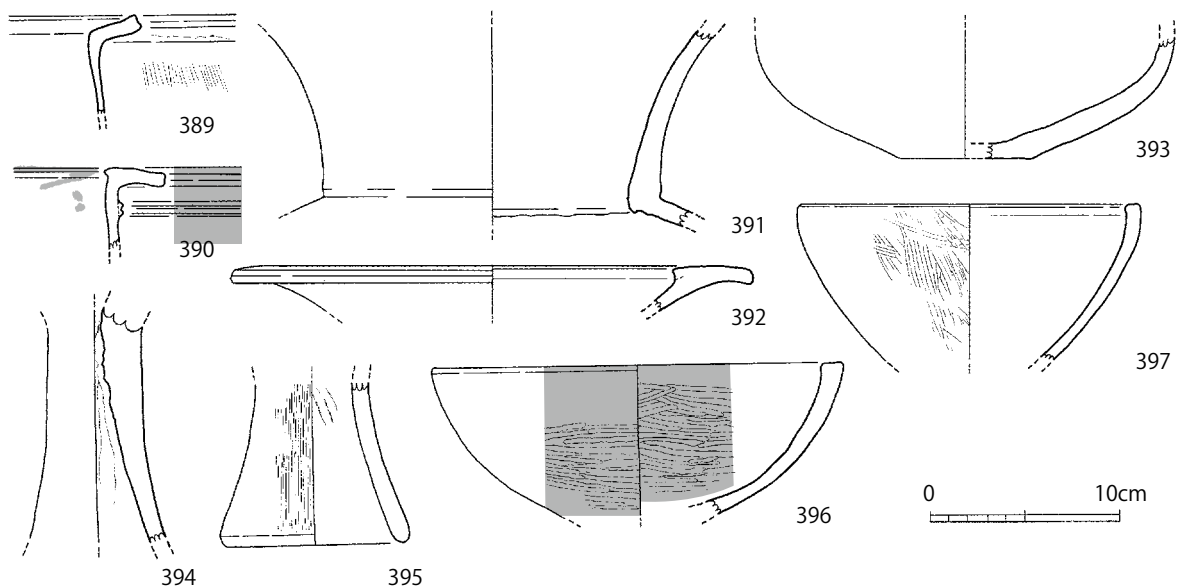
第86図 SH140出土遺物実測図②

うに検出できたことから、上屋の構造が反映されている可能性もある。炭化材の周辺には黄褐色土が比較的まとまって認められた。この炭化材と焼土は、床面よりもやや浮いた位置で出土しており、床面直上に3層が薄く堆積した段階で焼却行為が行われたことがわかる。

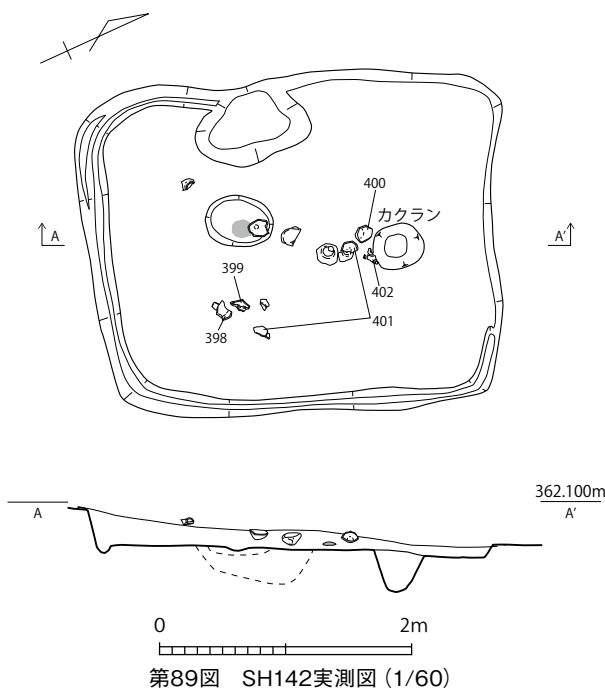
遺物は炭化材・焼土の上で出土していることから、焼却行為後にまとめて廃棄されたとみられる。建物南西部では複数の甕が潰れた状態で、南壁際中央部では高坏（411）が伏せられた状態で出土した。高坏は意図的に天地逆に埋置されたものとみられるが、高坏の鋤先状口縁部上面には鹿の線刻が描かれていた。鹿は直線的な細線で輪郭が描かれ、鹿の胴部と頸部の内側には格子線を、顔は長い頸部の横に三角形で表現されている。高坏の



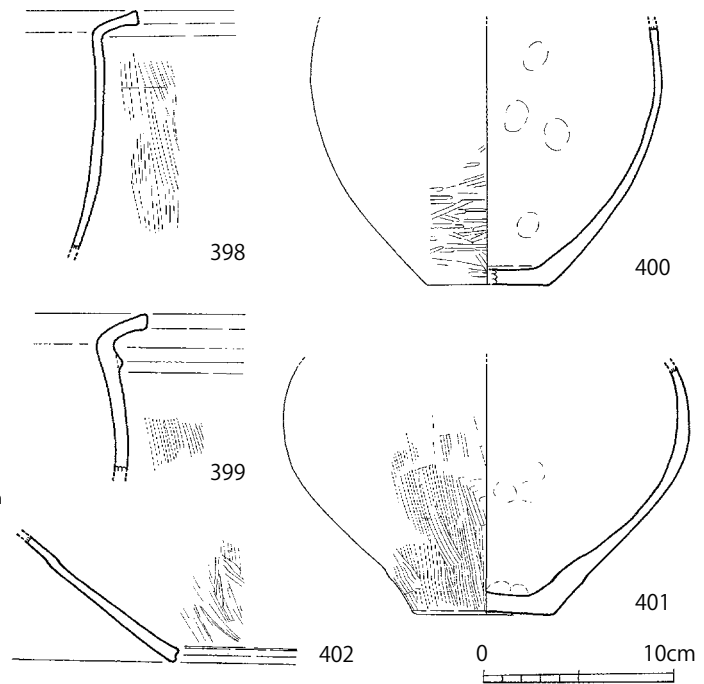
第87図 SH141実測図 (1/60)



第88図 SH141出土遺物実測図



第89図 SH142実測図 (1/60)



第90図 SH142出土遺物実測図

口縁部は線刻のある部分とその反対側が打ち欠かれており、坏部底には無数の敲打痕が確認できるなど、廃棄にともない意図的に欠損させたことがわかる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SH144 (第95・96図)

SH144は堅穴建物である。北側が大きく削平を受けているため、遺構の南壁付近しか残存していない。形状は方形と推測でき、規模は東西5.2m以上、深度は0.1mである。南壁際には土坑があるが、土層の観察からこの土坑は堅穴建物とともに埋没したとみられる。主柱穴は削平によるためか確認できなかったが、周溝が南東部でのみわずかに確認できた。

埋土は単一層であることから自然に埋没したとみられる。遺物は南東隅の床面直上付近で甕・鉢が出土していることから廃絶直後に廃棄されたもので、それ以外は埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SH145 (第97・99図)

SH145は堅穴建物である。北側は削平を受けているため残りがよくない。形状は長方形で、規模は長軸5.6m、短軸3.65m、深度は0.6mである。主柱穴は中心軸よりやや北寄りでも2本検出できた。また南壁際には土坑が1基あり、堅穴建物とともに埋没している。床面は地形にあうように南から北方向にわずかに傾斜しており、貼床が施されている。

埋土の観察から、土の流入により自然に埋没したとみられる。遺物は建物全体に散らばるように出土しているが、床面から浮いた状態であることから埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SH146 (第98・100図)

SH146は堅穴建物である。SH147を切る。上部全体が削平を受けているが、特に北側は削平が床面にまで達している。形状は円形で、規模は径6.5m、深度は0.1mである。建物中央に土坑1があり、その周囲を主柱穴がめぐっ

ている。主柱穴は6ないし7本が確認できるが、配置は判然としない。土坑と建物の埋土は同じであることから、建物の廃絶にともない自然埋没したと考えられる。土坑内からは打製石斧や砥石が廃棄された状態で出土した。壁面際から主柱穴の手前までの床面レベルがわずかに低い事から、幅広の周溝のようにもみえる。

遺物は主柱穴と土坑からわずかに出土する程度である。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

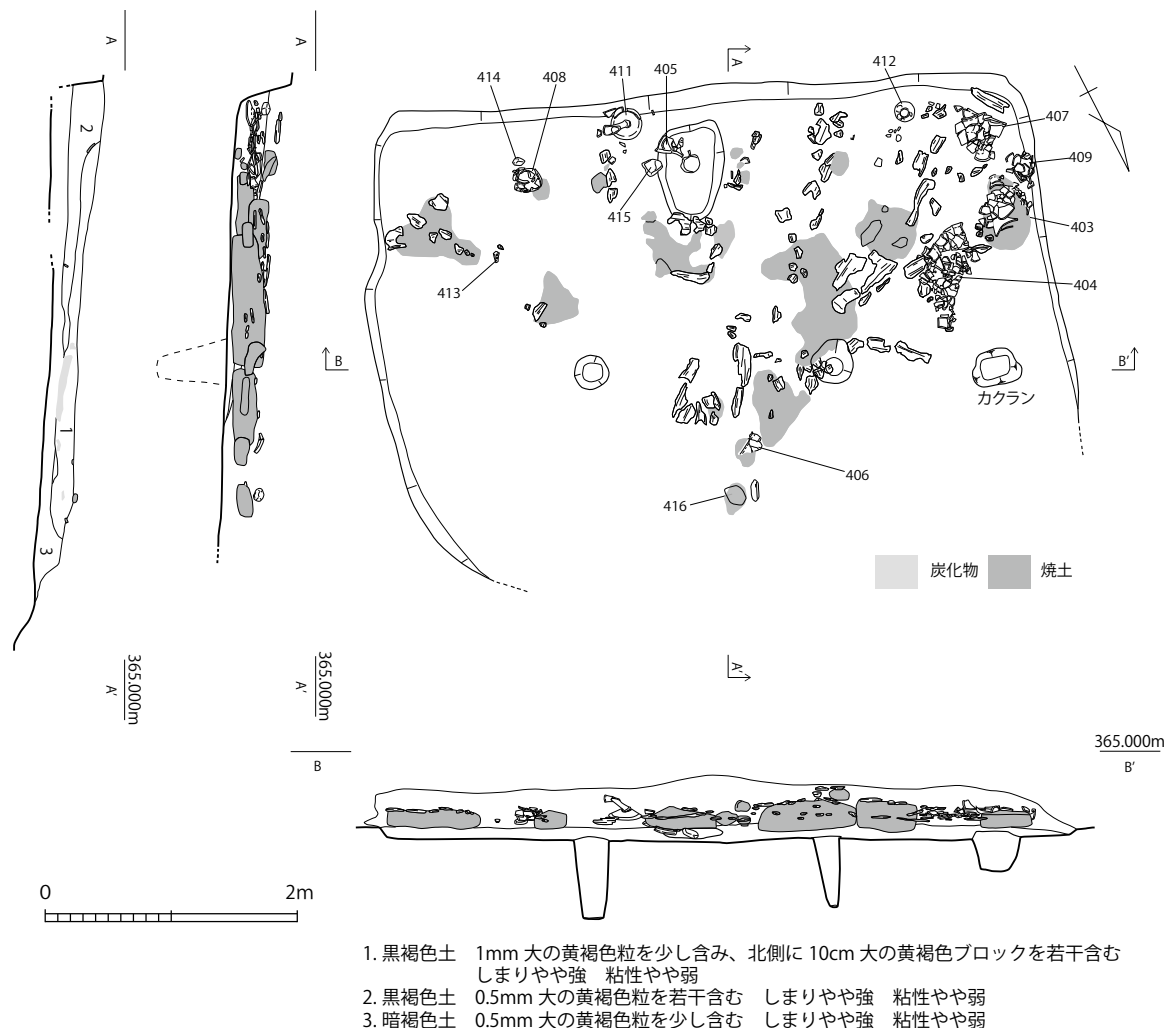
**SH147 (第101・102図)**

SH147は竪穴建物である。SH146に切られる。上部は削平を受け、南部分のみ輪郭を確認できた。形状は円形と推測でき、規模は推定径8.0m以上、深度は0.05mである。主柱穴と土坑が検出できた。主柱穴は14本確認しているが、掘り直しが行われたとみられる柱穴もあることから、主柱穴7本が円形に配置されたものが建て替えられたものとみられる。主柱穴以外の柱穴7・10からは糸切り土師器坏片(434・435)が出土していることから、この2本の柱穴は中世段階の柱穴であり、SH147とは別遺構であることを明記しておきたい。土坑は中央部にあり、埋土の観察から建物の廃絶にともない自然埋没したと考えられる。SH146と同様に、壁際から柱穴の手前までが一段低くなっているため、周溝がめぐっていた可能性もある。

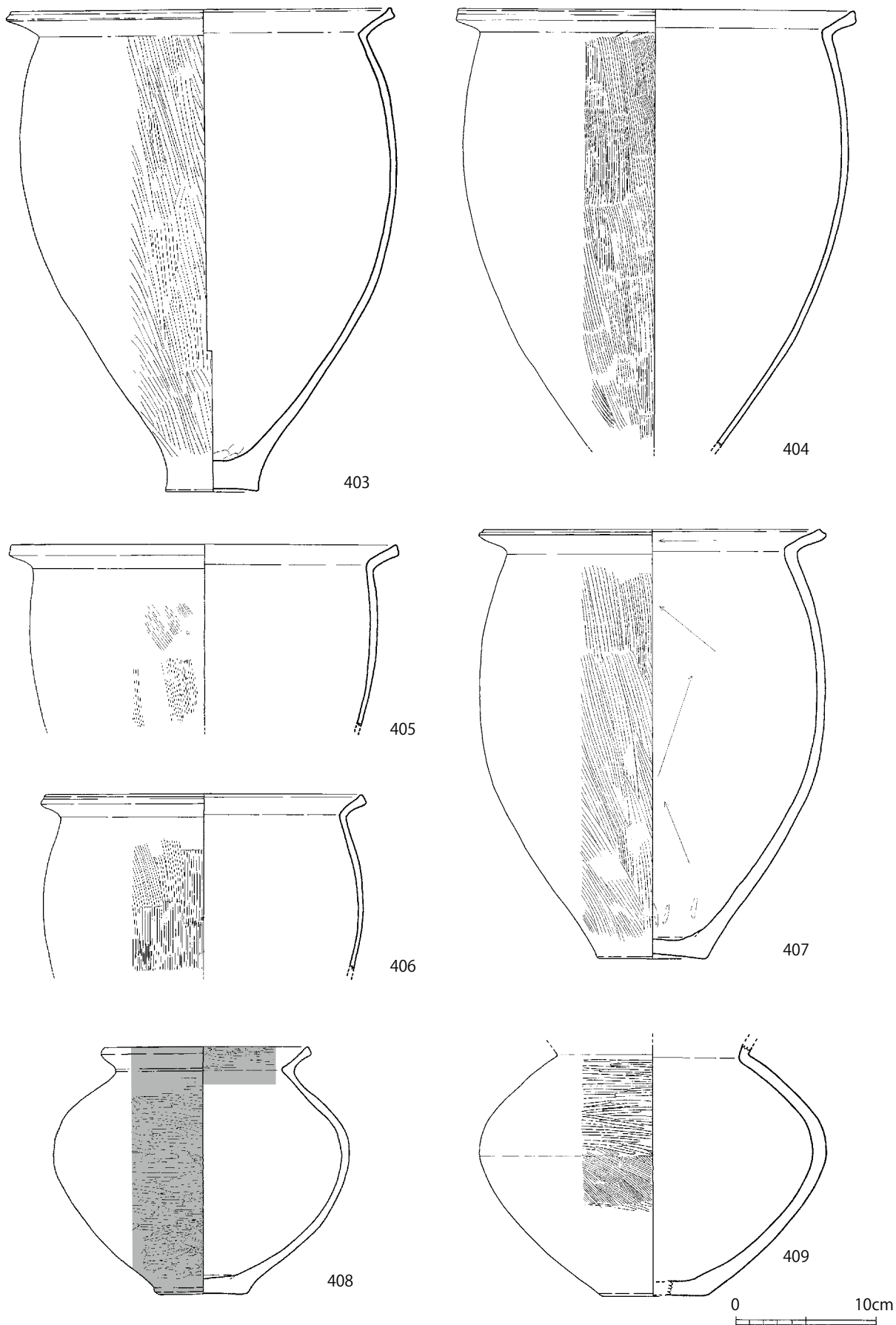
遺物は主柱穴・土坑内から出土しているが、その多くが破片でまとまった資料はない。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH148 (第103・104図)**

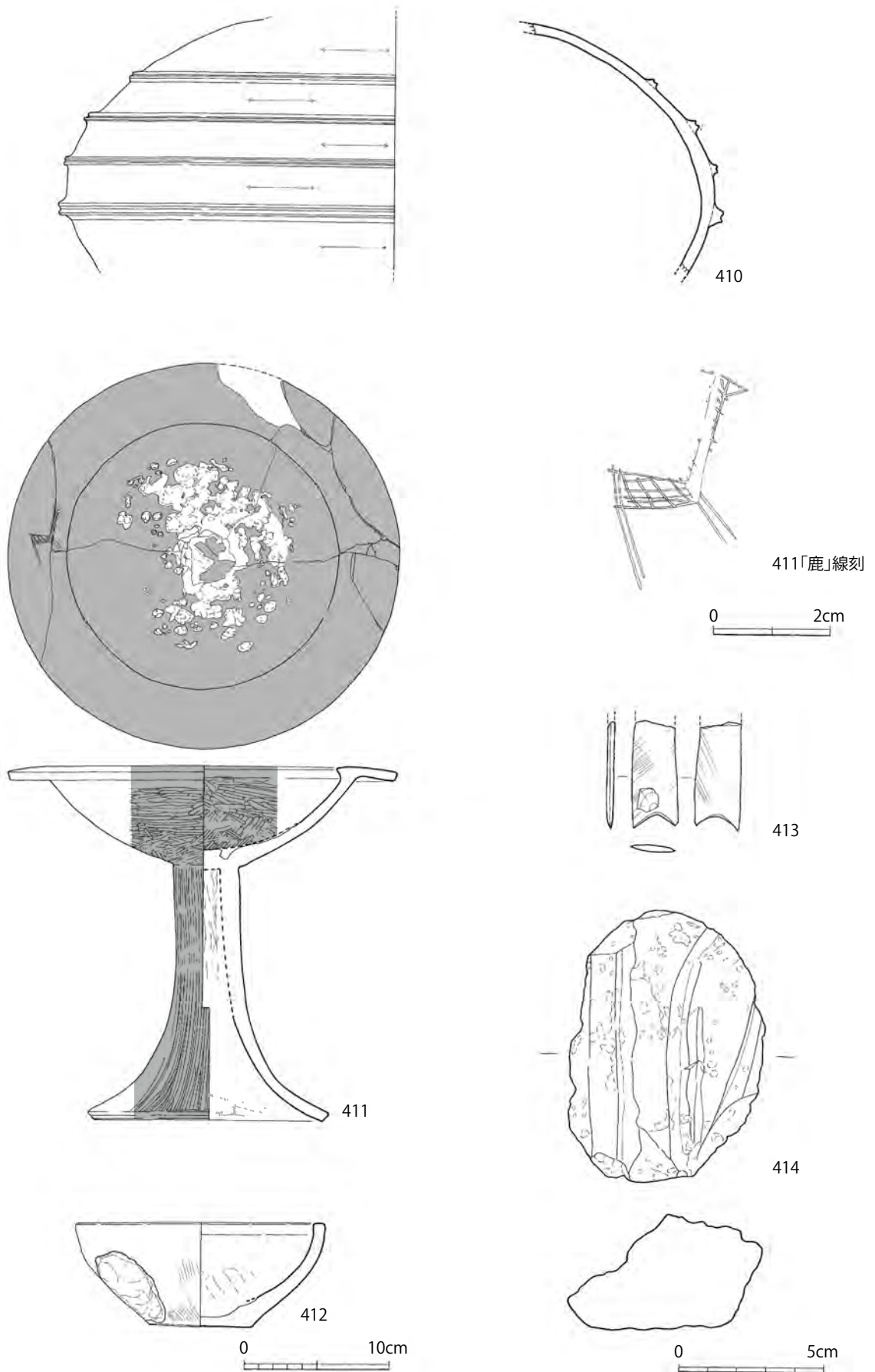
SH148は竪穴建物である。SK474を切る。上部がかなり削平を受けているため残りはよくない。形状は歪な隅



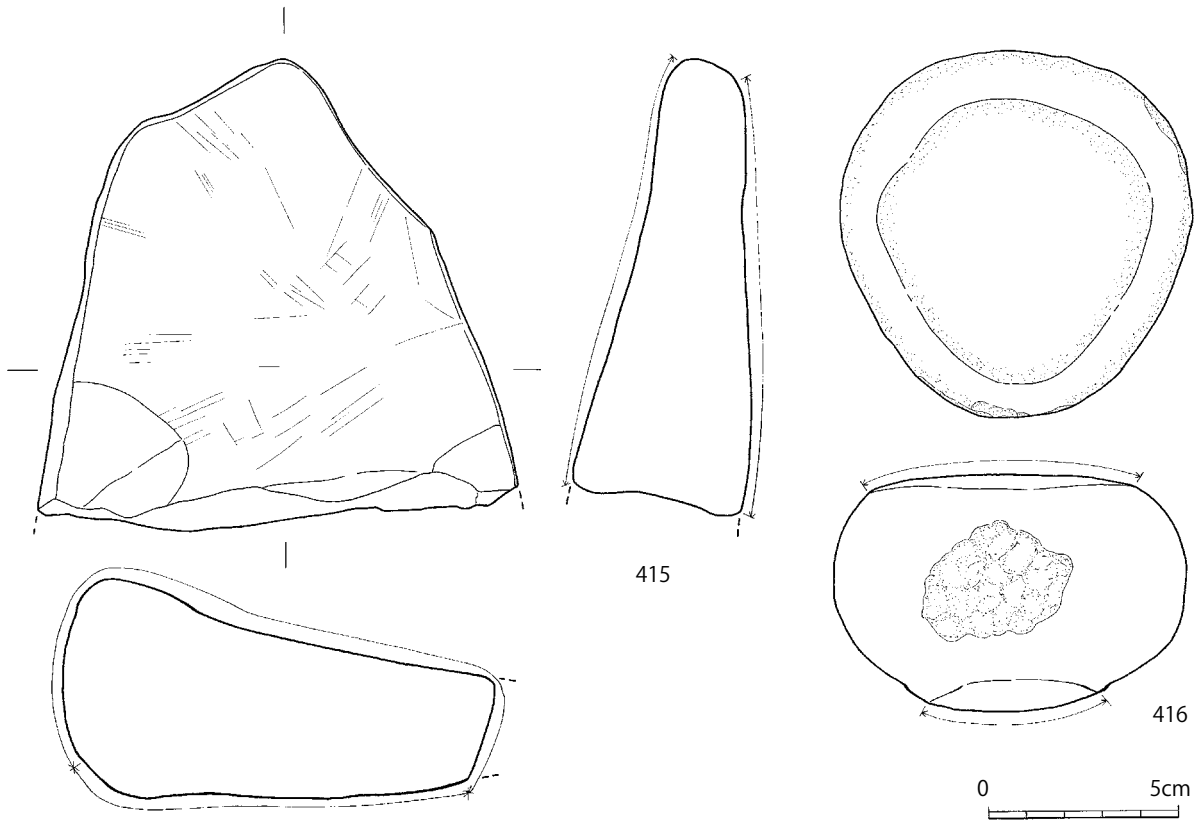
第91図 SH143実測図(1/60)



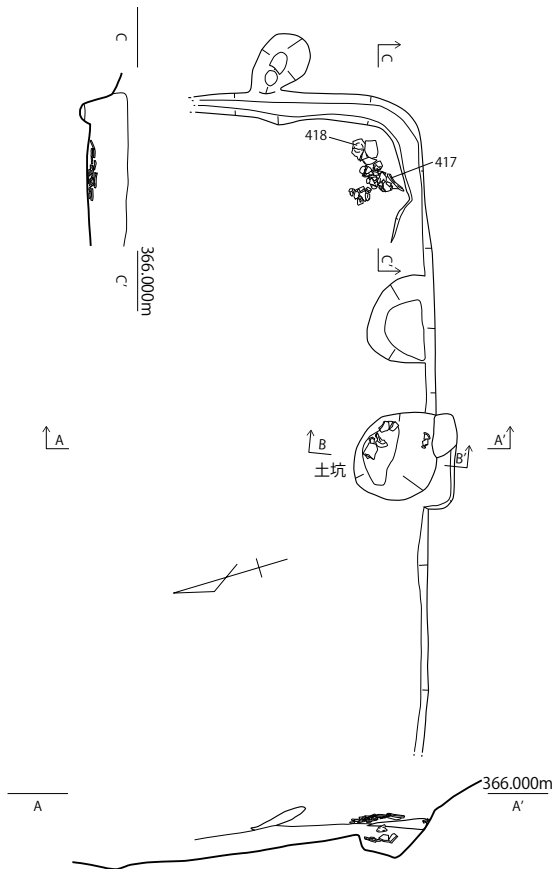
第92図 SH143出土遺物実測図①



第93図 SH143出土遺物実測図②



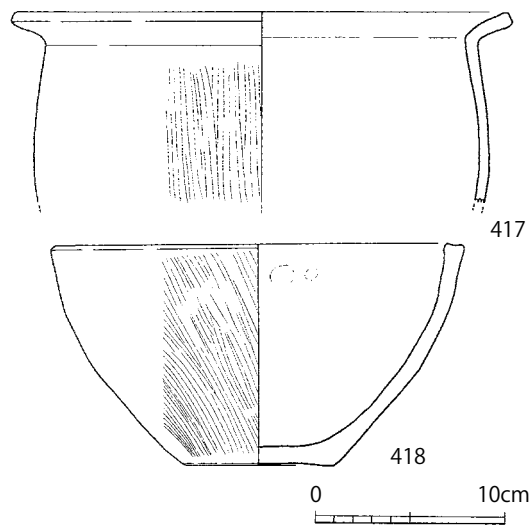
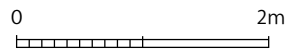
第94図 SH143出土遺物実測図③



第95図 SH144実測図 (1/60)

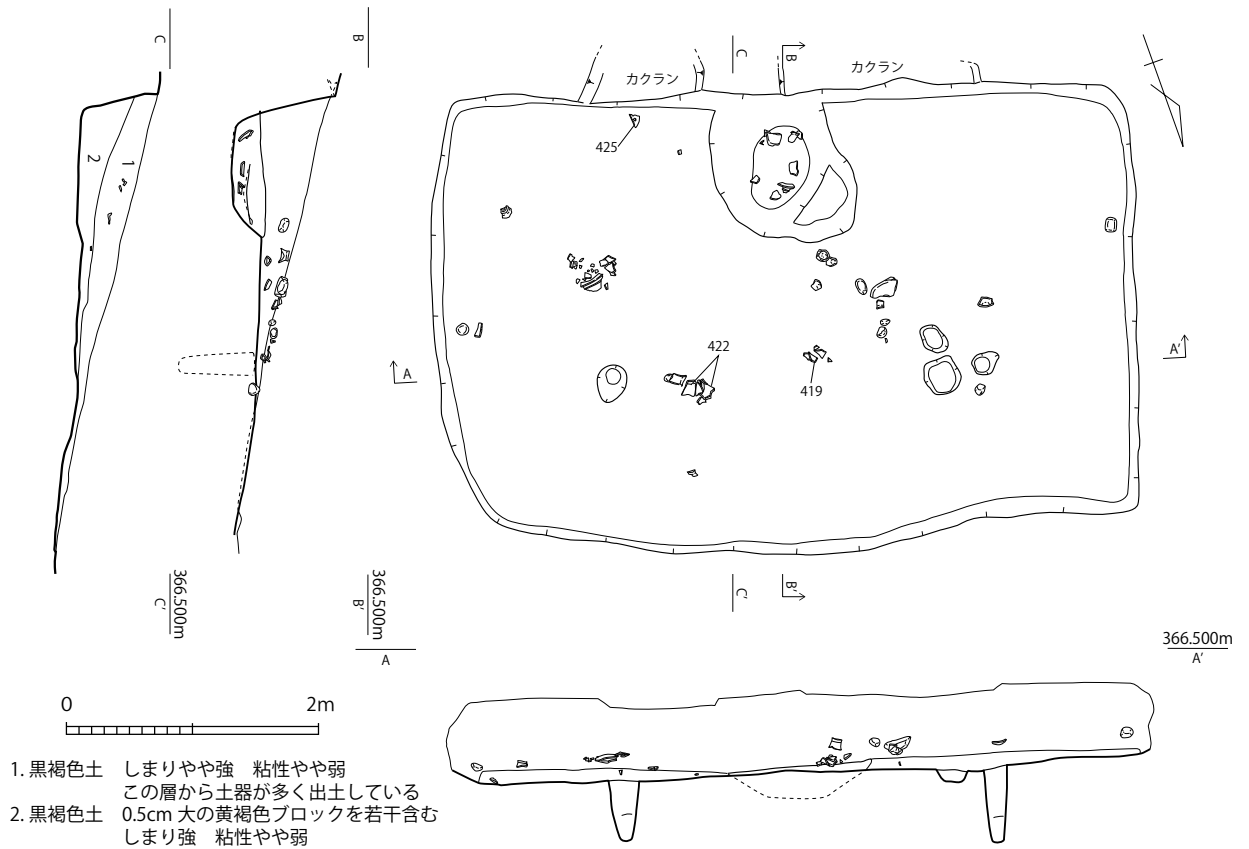


- 1. 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや弱  
(この層から土器が少し出土している)
- 2. 黒褐色土 0.5~3cm 大の黄褐色土にブロックを少々含む  
しまりやや強 粘性やや弱

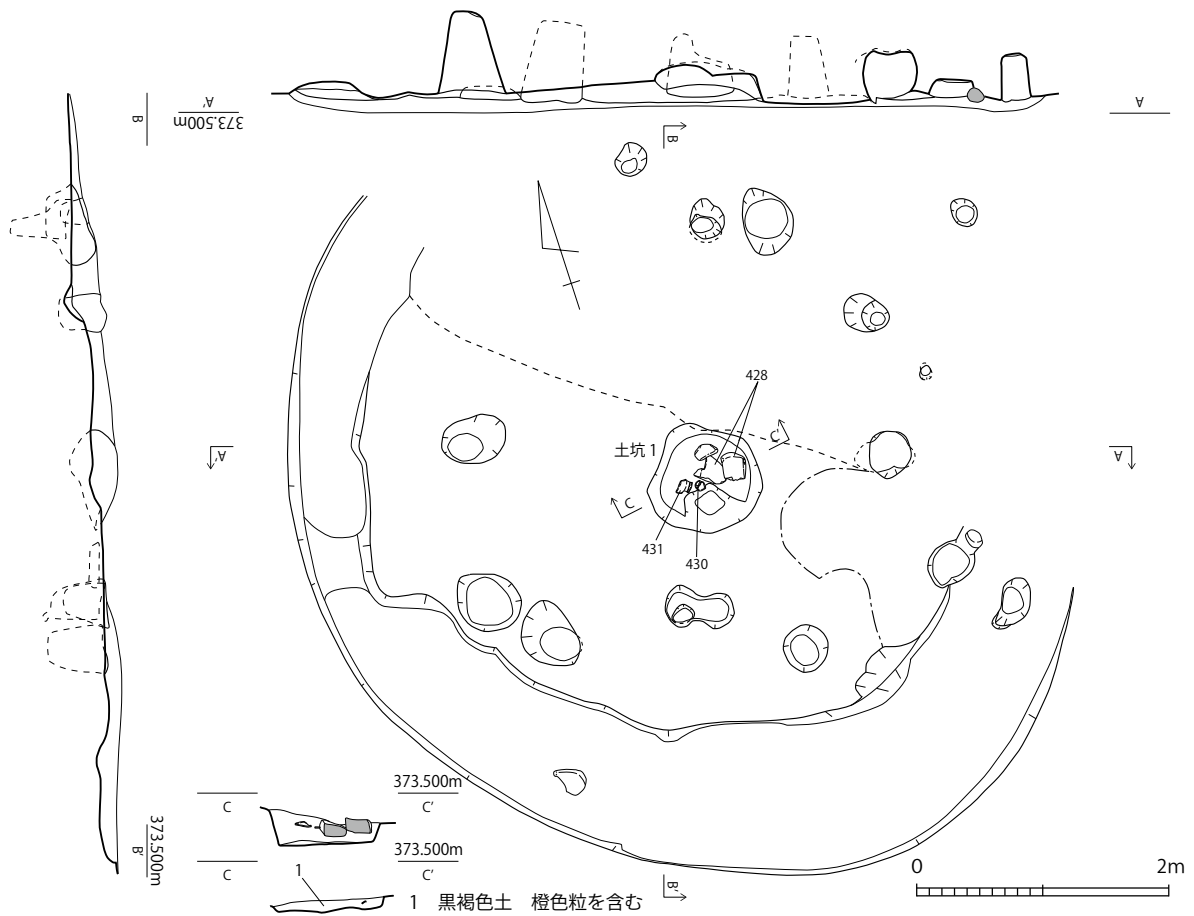


第96図 SH144出土遺物実測図

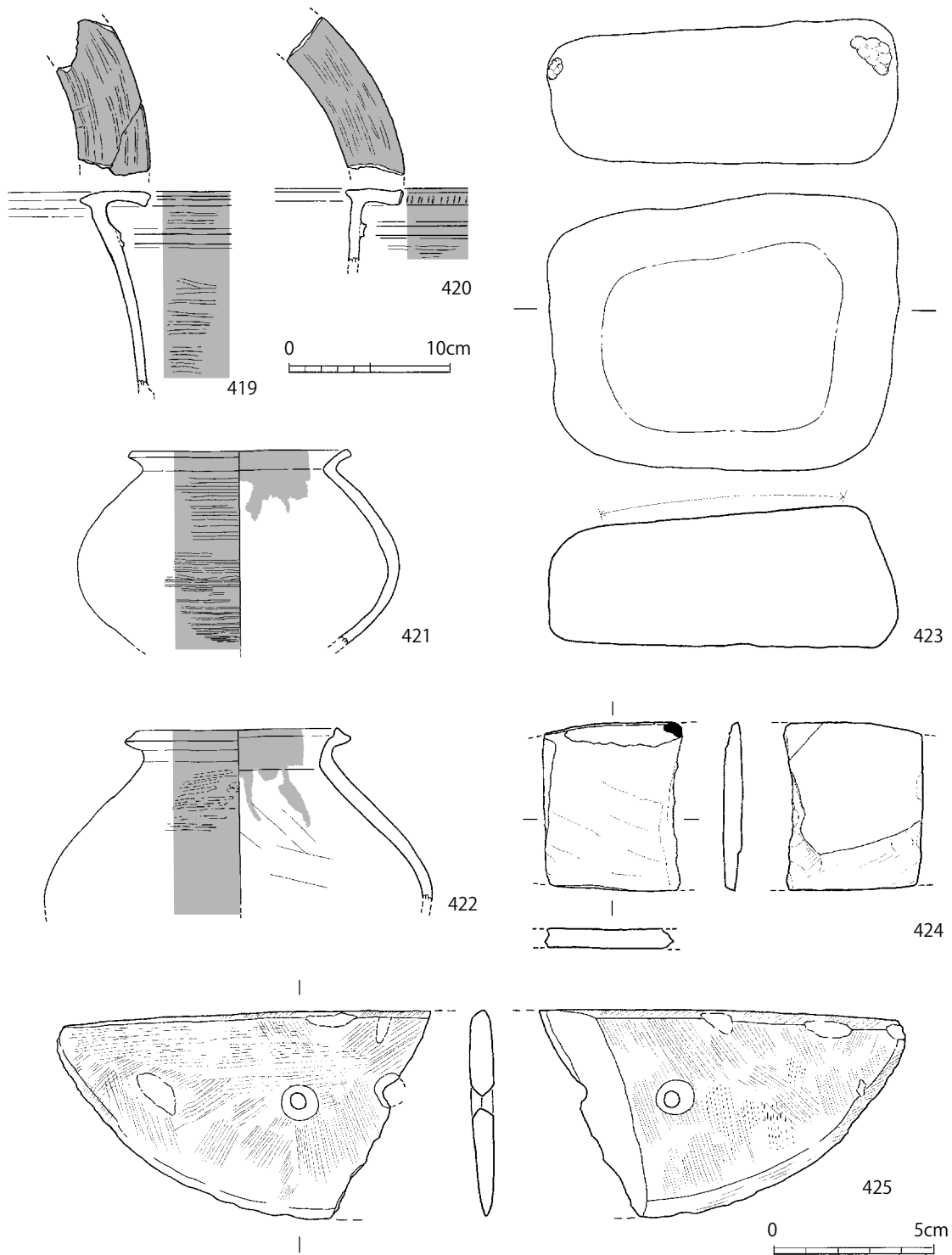




第97図 SH145実測図 (1/60)



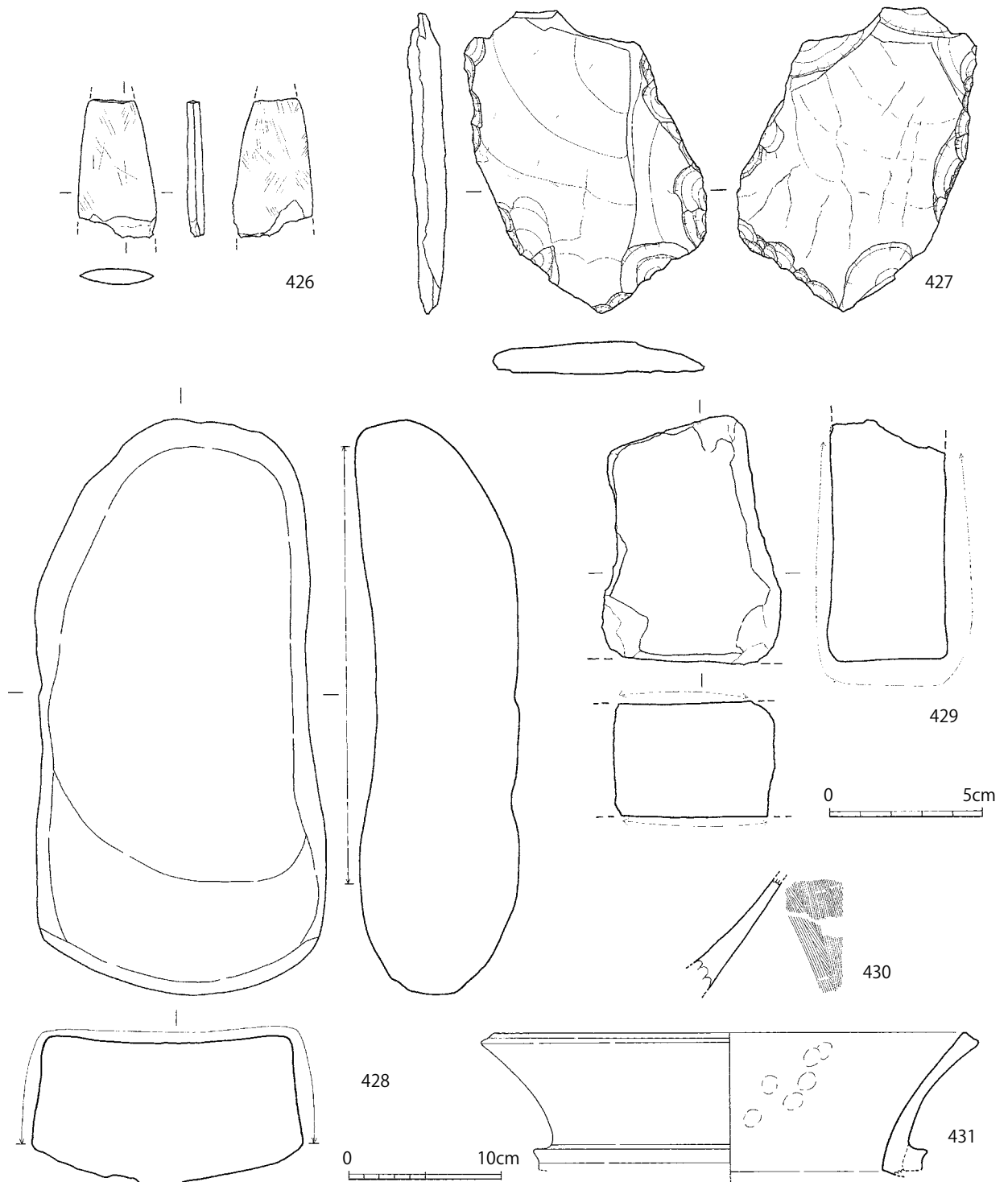
第98図 SH146実測図 (1/60)



第99図 SH145出土遺物実測図

丸長方形で、規模は長軸4.5m、短軸3.4m、深度は0.2mである。支柱穴2本、炉跡、土坑1基を確認した。炉跡は建物中央部にあり、浅い窪みに炭と焼土粒が混じる。土坑は南壁際に段掘りされており、埋土は竪穴建物の埋土と異なることから、建物廃絶前に埋め戻されたと考えられる。

竪穴建物の埋土は黒色土の単一層で、自然埋没したとみられる。遺物は南西隅で砥石が床面より浮いた状態で出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

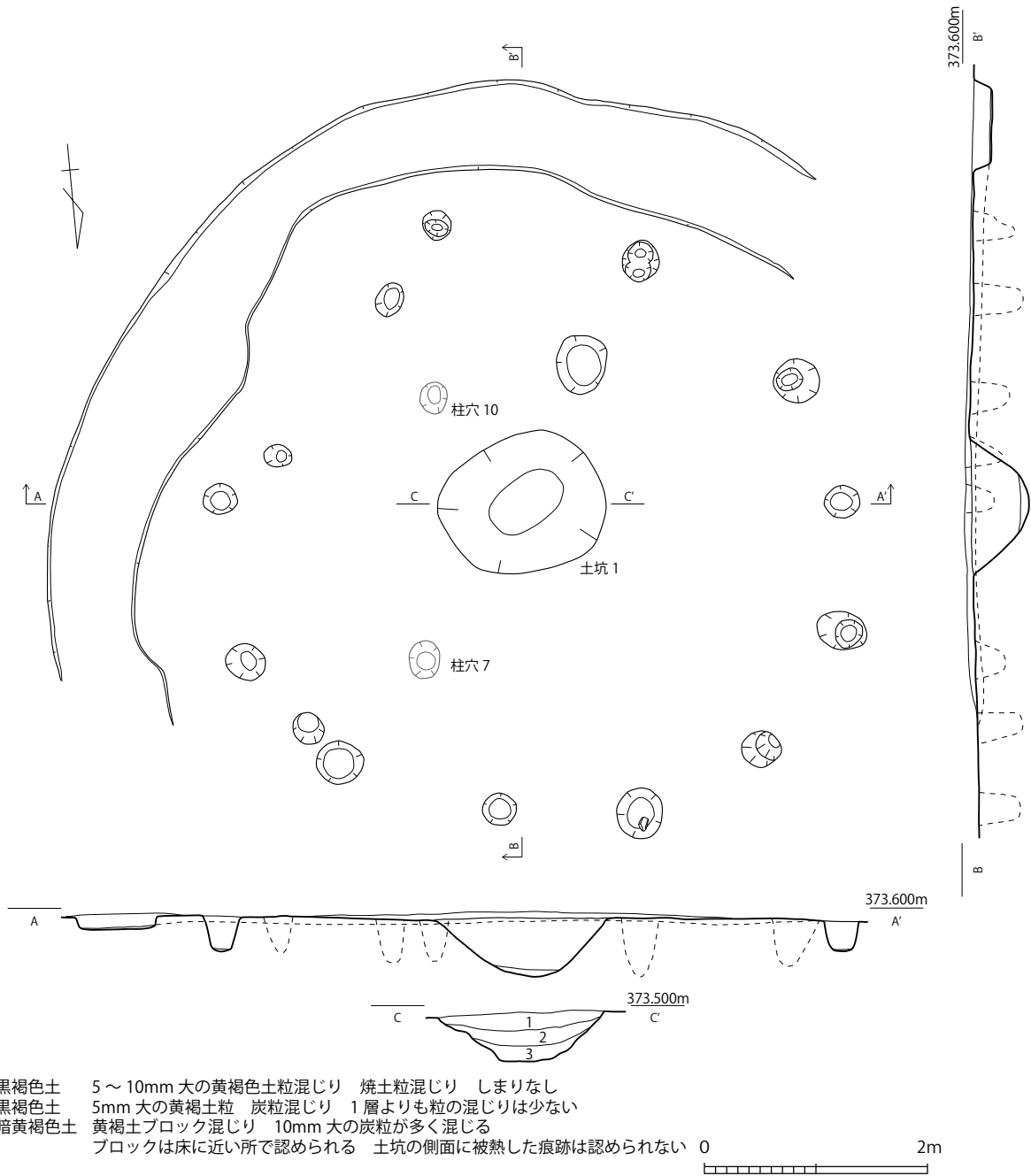


第100図 SH146出土遺物実測図

**SH149 (第105・106図)**

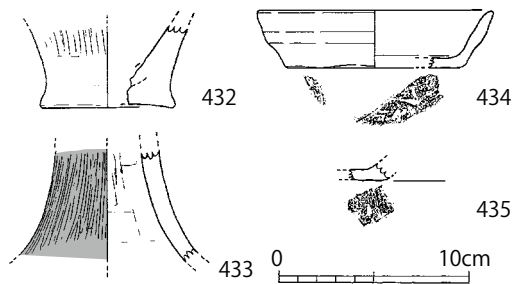
SH149は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸66m、短軸40m、深度は02mである。支柱穴2本、土坑1基を確認した。

埋土は1～4層に分層できる。4層が堆積した段階で、北西部のテラス状になっている部分が拡張されたとみられる。3層の黄褐色土上面のレベルは、拡張部床面のレベルとおおむね一致することから、拡張にともない人為的に埋められた埋土の可能性はある。遺物は各層全般から出土しているが、特に2層の上部から出土している。



第101図 SH147実測図 (1/60)

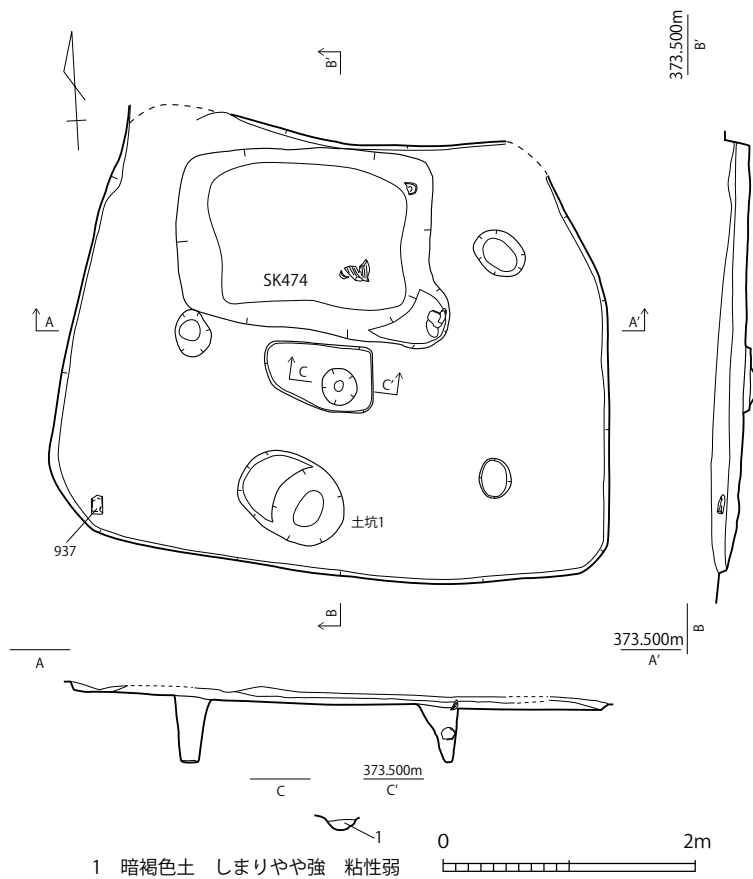
ただし遺物は破片が多く、復元できるものはない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



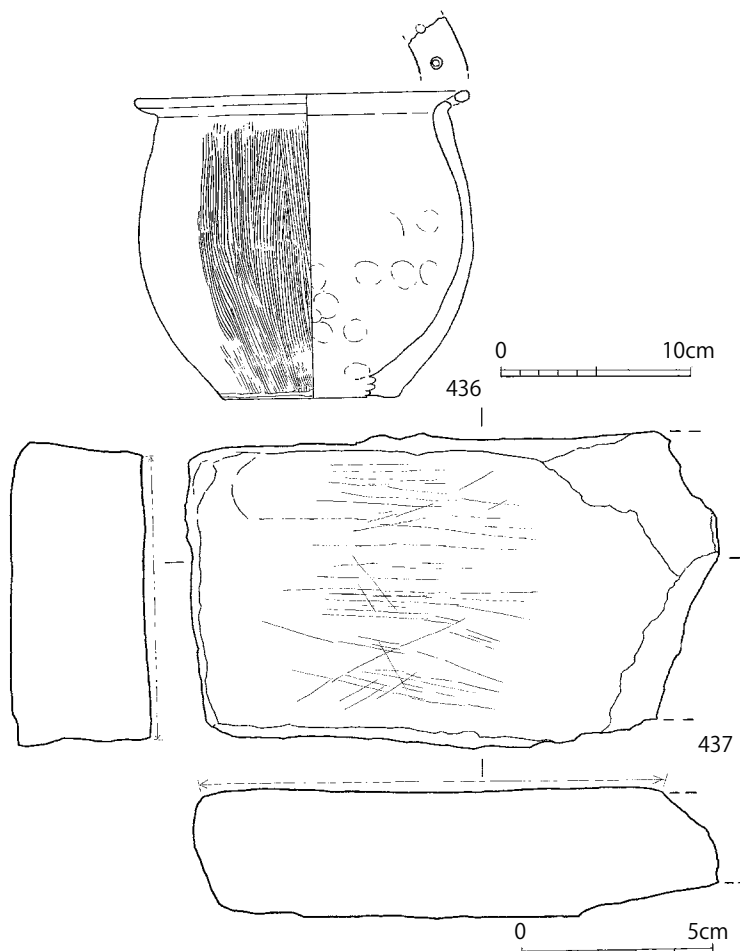
第102図 SH147出土遺物実測図

**SH150 (第107・108図)**

SH150は堅穴建物である。上部が大きく削平を受け、東部分も削平と木根により遺構の輪郭も明確ではない。形状は円形で、規模は径7.5m、深度は0.1mである。主柱穴と土坑が検出できた。建物中央に土坑があり、周囲には7本の主柱穴が円形に配置されている。かろうじて残る建物南東部分から推測すると、本来の床面は平坦で、壁際に周溝はなかったとみられる。



第103図 SH148実測図 (1/60)



第104図 SH148出土遺物実測図

遺物は主柱穴と土坑から出土しているが、いずれも破片資料で復元できるものはない。これらの遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

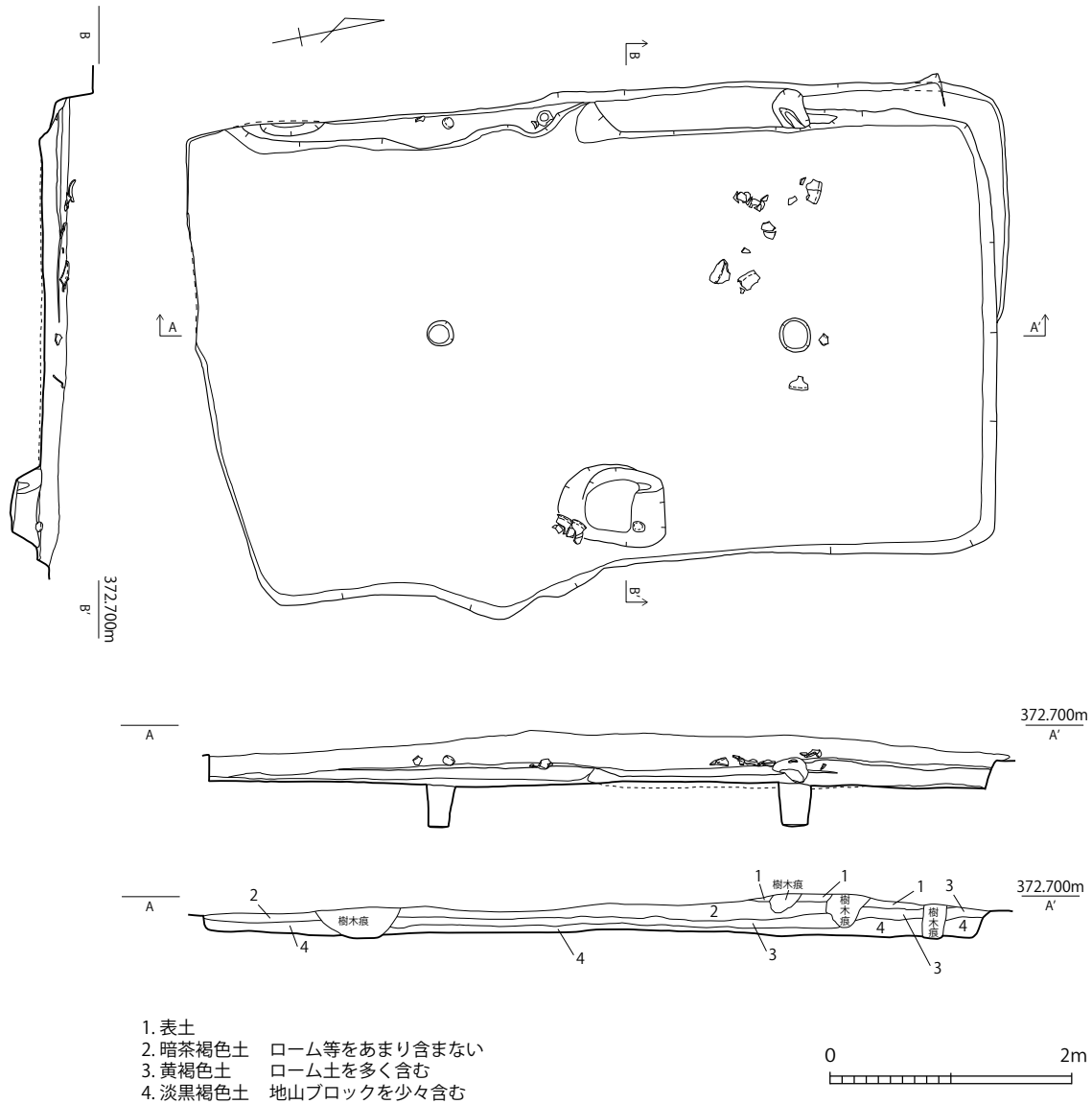
SH151 (第109・110図)

SH151は竪穴建物である。南半分は調査区外のため未掘である。形状は円形で、径7.0m、深度は0.1mである。竹の根により遺構の残りはよくないが、主柱穴が3本、土坑1基、西壁から北壁際に浅い周溝を確認した。主柱穴は円形に配置されると復元できるが、全てを検出できていない。土坑は建物の中心部に位置し、土坑内の底面から遺物がまともに出土した。土坑は竪穴建物とともに埋没していることから、土坑内遺物は建物の廃絶直後に廃棄されたものとみられる。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

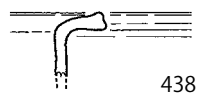
SH152 (第111・112図)

SH152は竪穴建物である。北側が床面まで削平を受けているが、形状は楕円形と推測できる。規模は長軸8.9m、短軸6.8m以上、深度は0.55mである。形状が楕円形となるのは、南から北へと傾斜する地形に制約された結果とみられる。建物中央には楕円形の土坑(土坑1)があり、土坑の東壁面で柱穴1本が確認できた。後述するSH153と同様に西壁面にも本来は柱穴があったと想定できるが、検出できていない。土坑の周囲を9本の主柱穴が楕円形に配置されている。削平を受けた北側以外の壁際に周溝が確認できた。

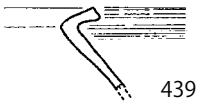
埋土の観察から、土の流入により自然に埋没したとみられる。遺物は



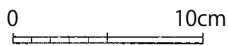
第105図 SH149実測図 (1/60)



438



439



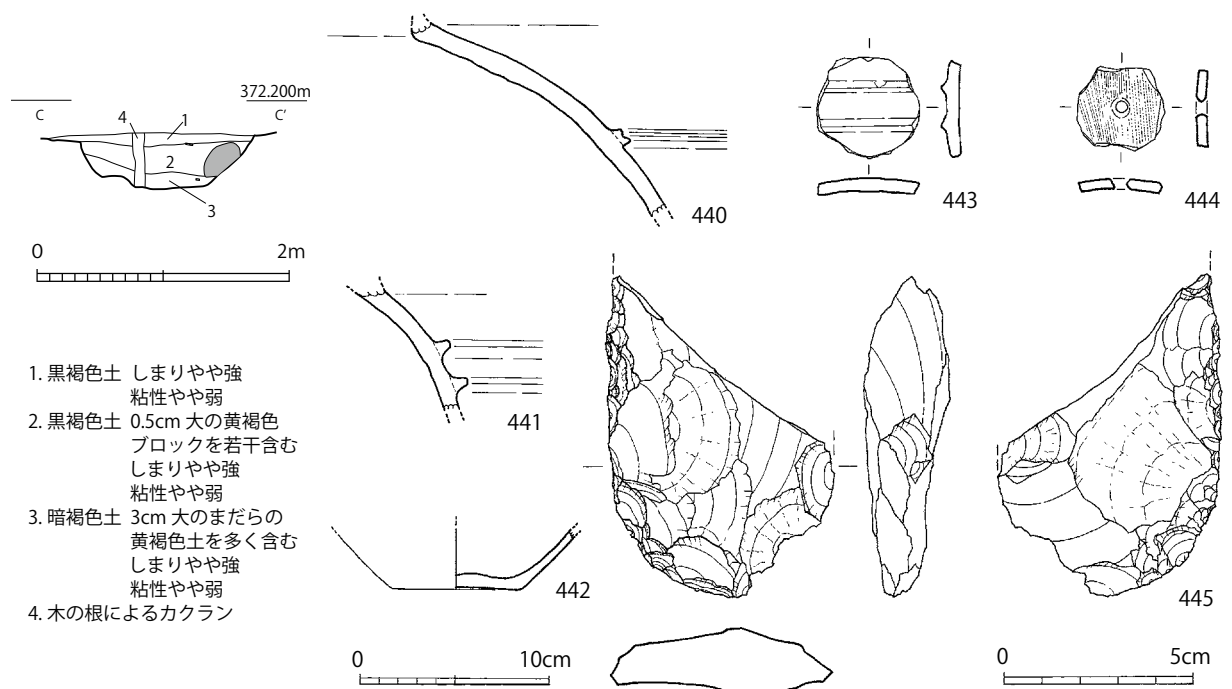
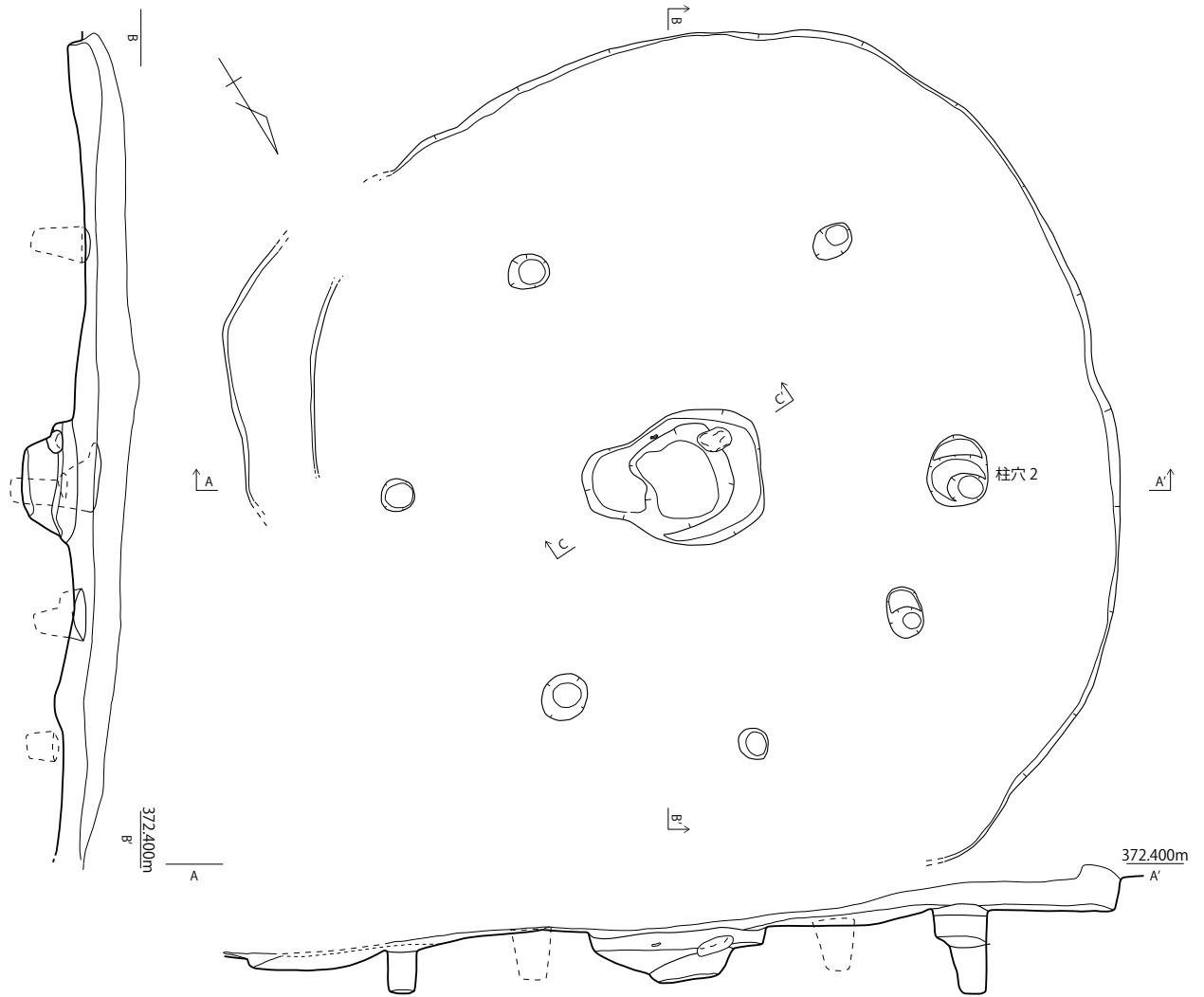
第106図 SH149出土遺物実測図

埋土全般から出土しているが、特に削平を受けていない南半分の床面付近で破片が散見された。ただし破片はまとまった状態で出土していないことから、建物の埋没過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SH153 (第113・114・115図)**

SH153は竪穴建物である。北側は床面まで削平を受けているため、遺構の輪郭が確認できない。形状は東西を長軸とする楕円形と推測できるが、これはSH152同様、地形に制約されたためと見られる。規模は東西径9.1m、深度は0.35mである。主柱穴は9本が楕円形に配置されるが、主柱穴に近接した位置にも複数の柱穴があることから、補助的ないしは建て替えの可能性が考えられる。また建物中央部に楕円形の土坑が1基あり、土坑端部の壁面で2本の柱穴が確認できた。南壁際には周溝がめぐるが、西側で途切れている部分もあるため全周したかは不明である。

埋土の観察から、土の流入により自然埋没したとみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられるが、特に中央土坑内からは小破片となった甕・壺とともに土製勾玉(484)・不明軽石製品(486)等が出土している。



第107図 SH150実測図 (1/60)

第108図 SH150出土遺物実測図

埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

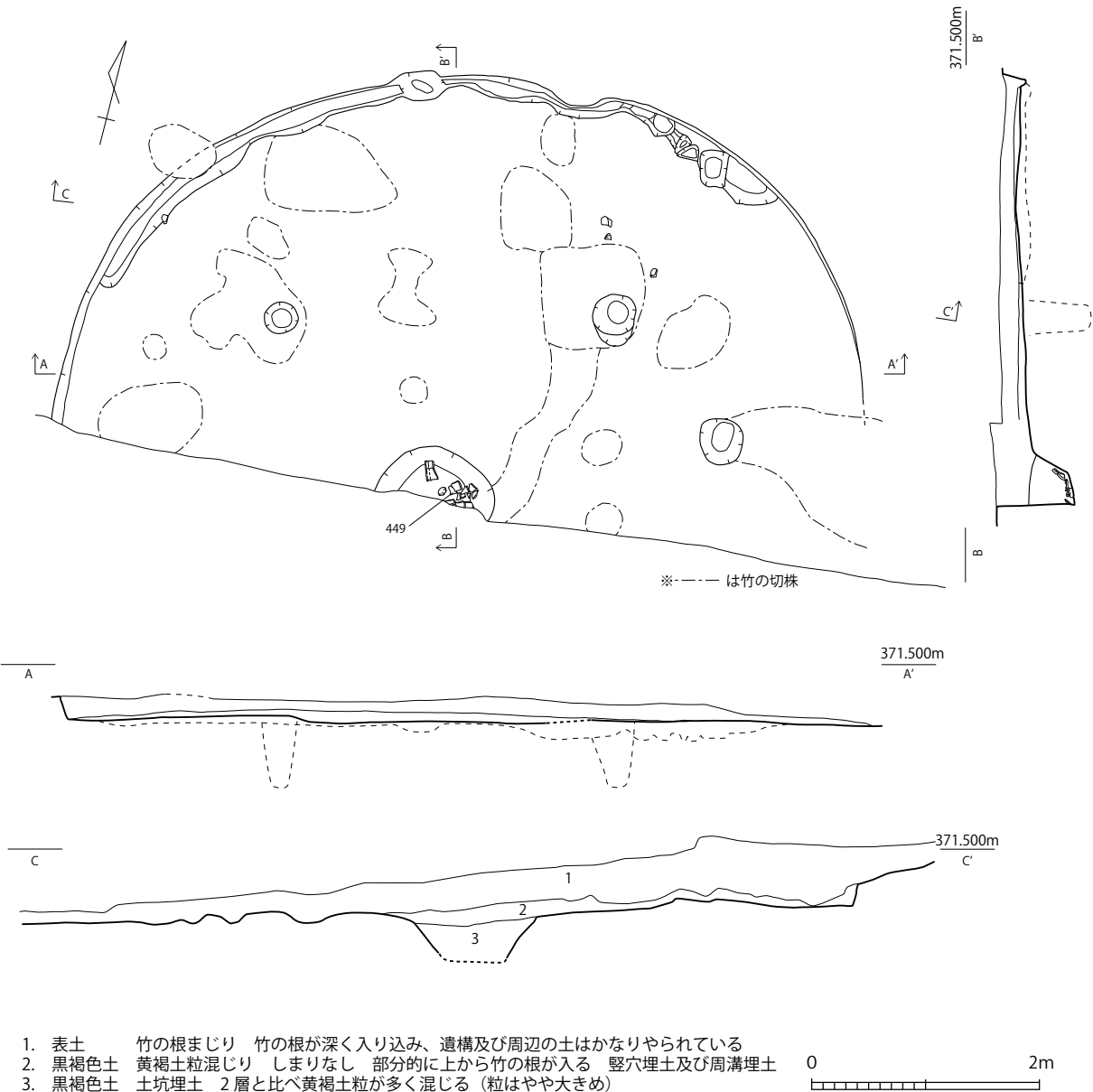
**SH154 (第116・117・118図)**

SH154は竪穴建物である。SK478に切られる。北側が床面まで削平を受けていることもあるが、遺構の形状は判然としない。部分的にやや歪になっているが、円形と判断した。規模は径5.8～6.2m、深度は0.3mである。建物中央部に楕円形の土坑があり、周囲に支柱穴が4本配置されている。床面は地形にそったように南から北に向かってわずかに傾斜している。

埋土の観察から、流入土により自然埋没したとみられる。遺物は床面からやや浮いた状態で土器・石器が面的にまとまって出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

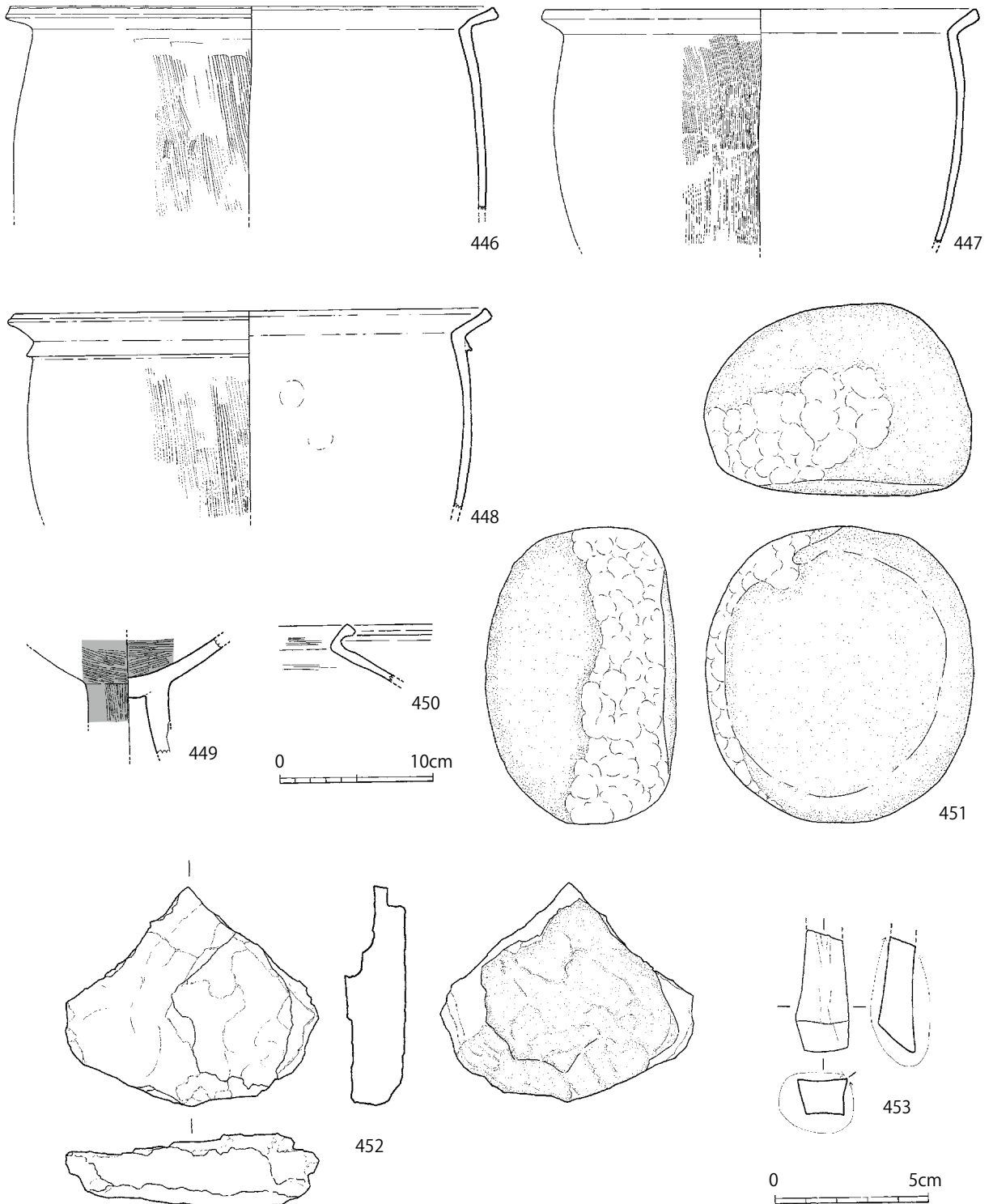
**SH155 (第119・120図)**

SH155は竪穴建物である。北半分は床面まで削平を受けているが、支柱穴の位置を参考にするに形状は長方形



第109図 SH151実測図 (1/60)

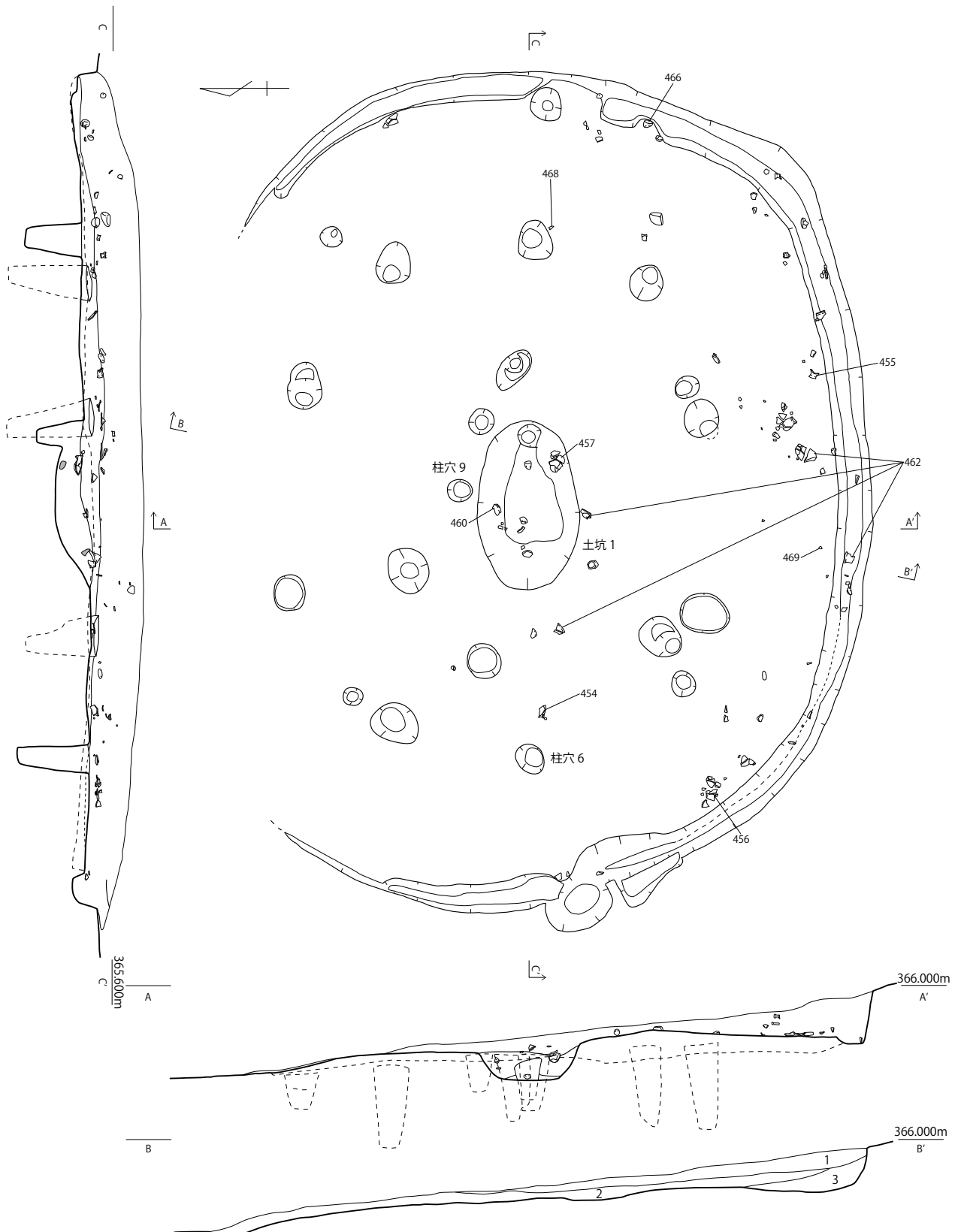




第110図 SH151出土遺物実測図

に復元できる。規模は長軸3.5m、推定短軸2.9m、深度は0.15mである。長軸上の壁際に支柱穴が2本、壁際には周溝が部分的に確認できる。SH155を床面まで掘り下げた段階でSK481を検出した。竪穴建物内土坑の可能性も考えたが、削平により切り合いを確認できなかったため別遺構として報告しておきたい。床面からやや浮いた状態で炭化材と焼土が比較的まとまって出土した。削平を受けているため推測の域を出ないが、本来は建物内全面に炭化材が広がっていたと考えられる。

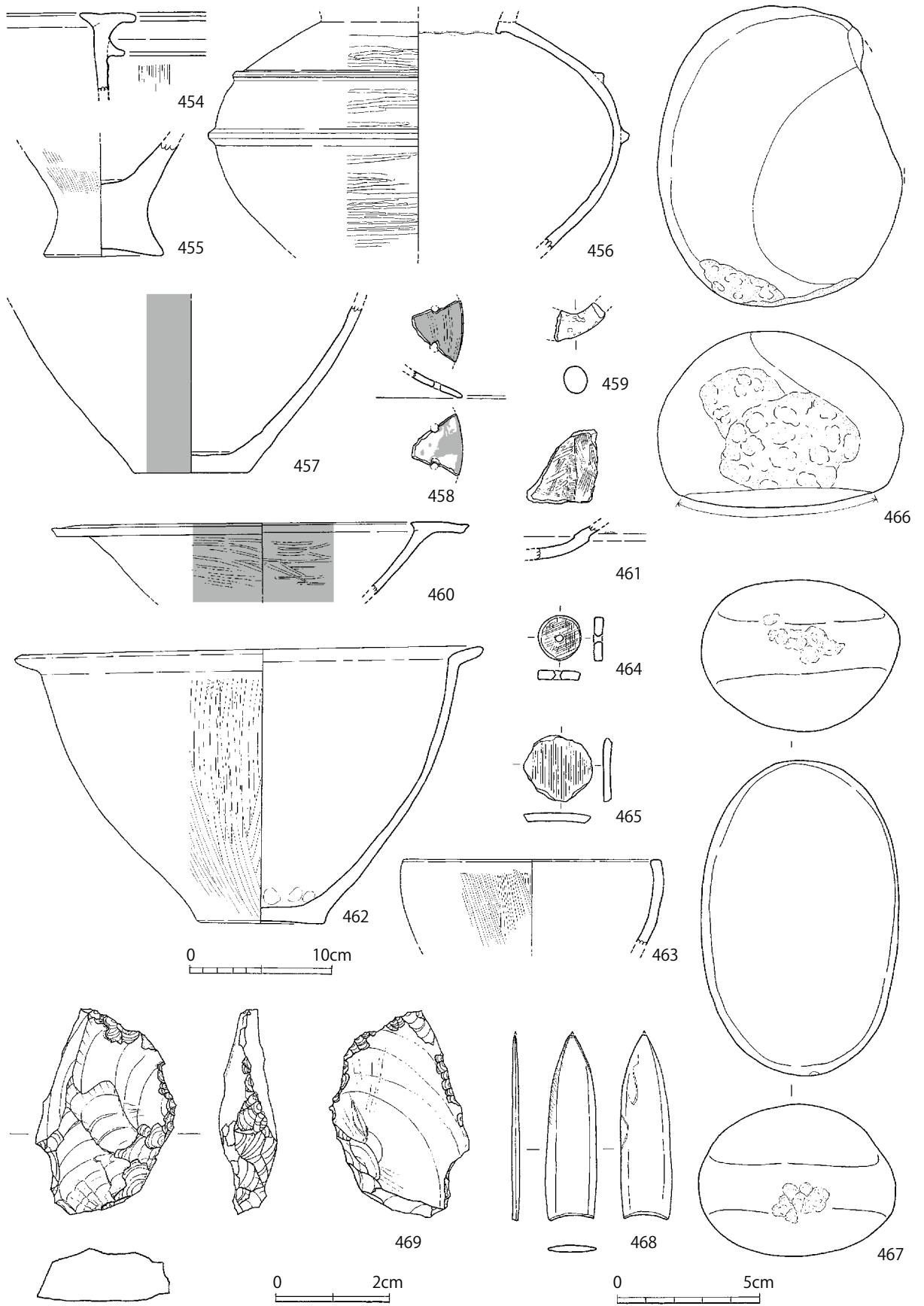
遺物は削平を受けていない南側で出土している。南東の壁際からは完形に復元できる高坏（524）が、建物中



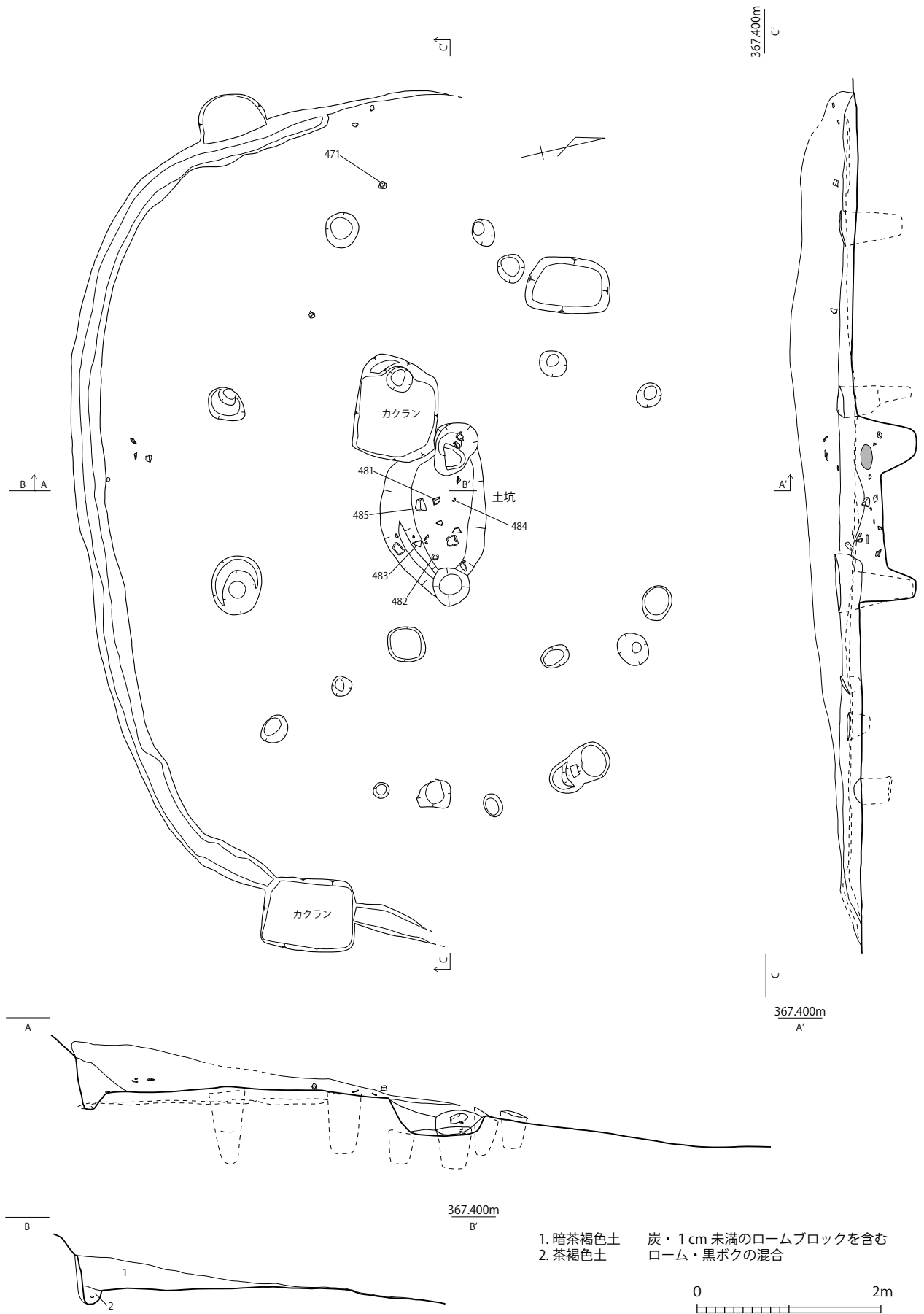
1. 黒褐色土 全体的に1～3mm大の黄褐色土粒がわずかに混じる
2. 黒褐色土 1層土中に5mm大の黄褐色土ブロックがわずかに混じる
3. 黒褐色土 2層土と比べて5mm大の大きめの黄褐色土ブロック(1～3cm)がわずかに混じる

0 2m

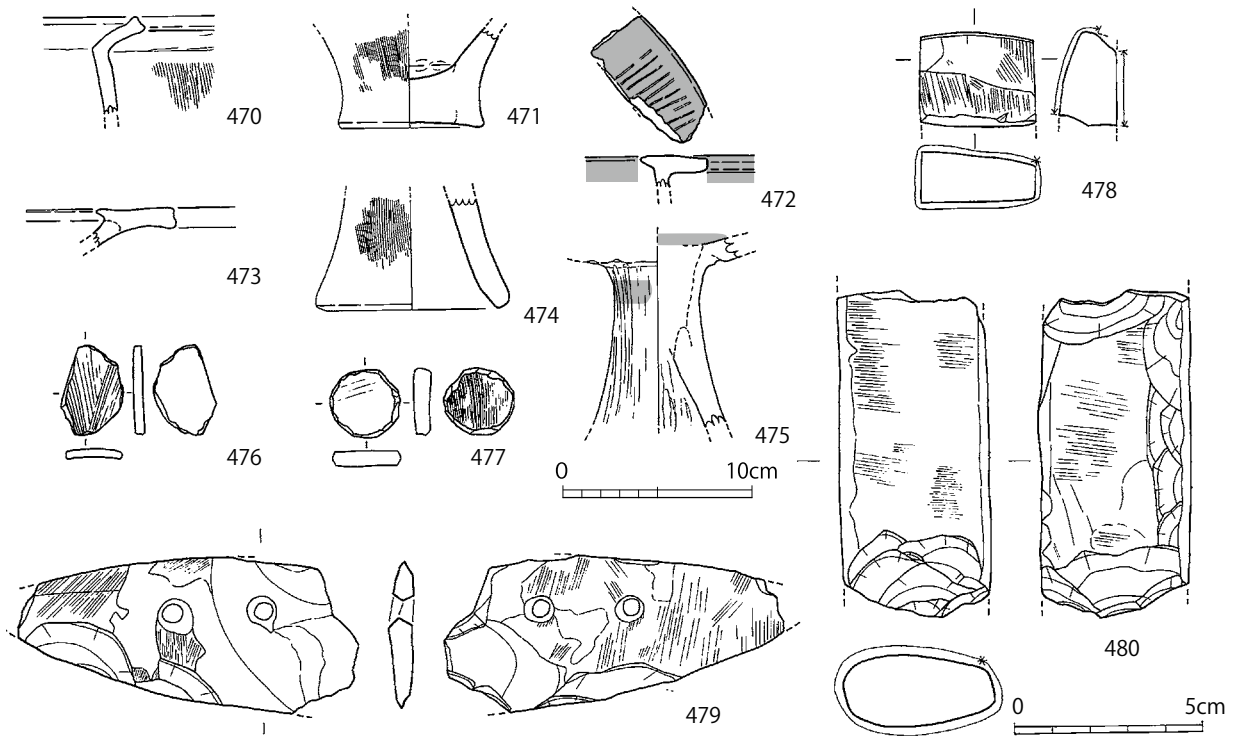
第111図 SH152実測図(1/60)



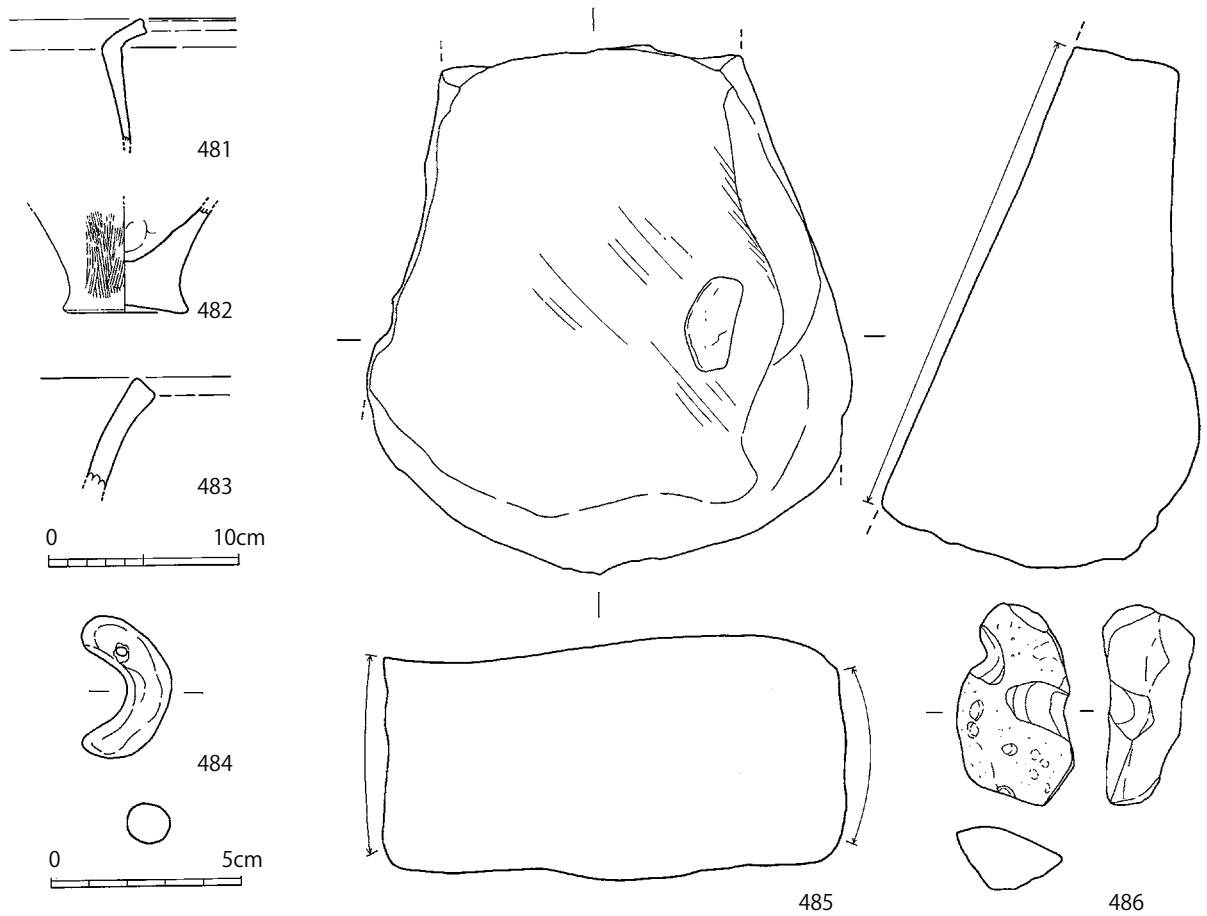
第112図 SH152出土遺物実測図



第113図 SH153実測図 (1/60)



第114図 SH153 出土遺物実測図



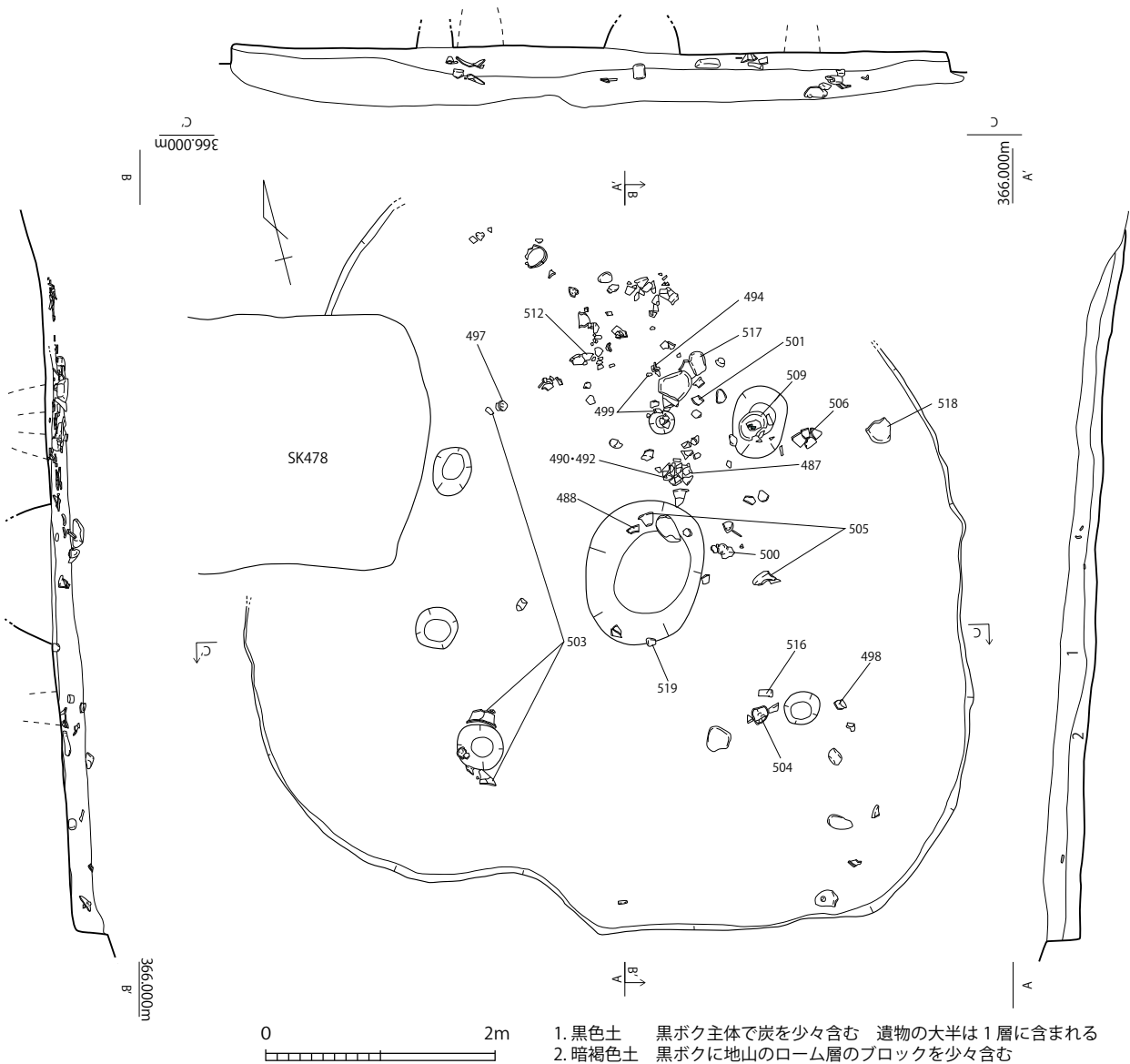
第115図 SH153土坑出土遺物実測図

中央付近からは台石（525）も出土しているが、これらの遺物は炭化材や焼土の上部から出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

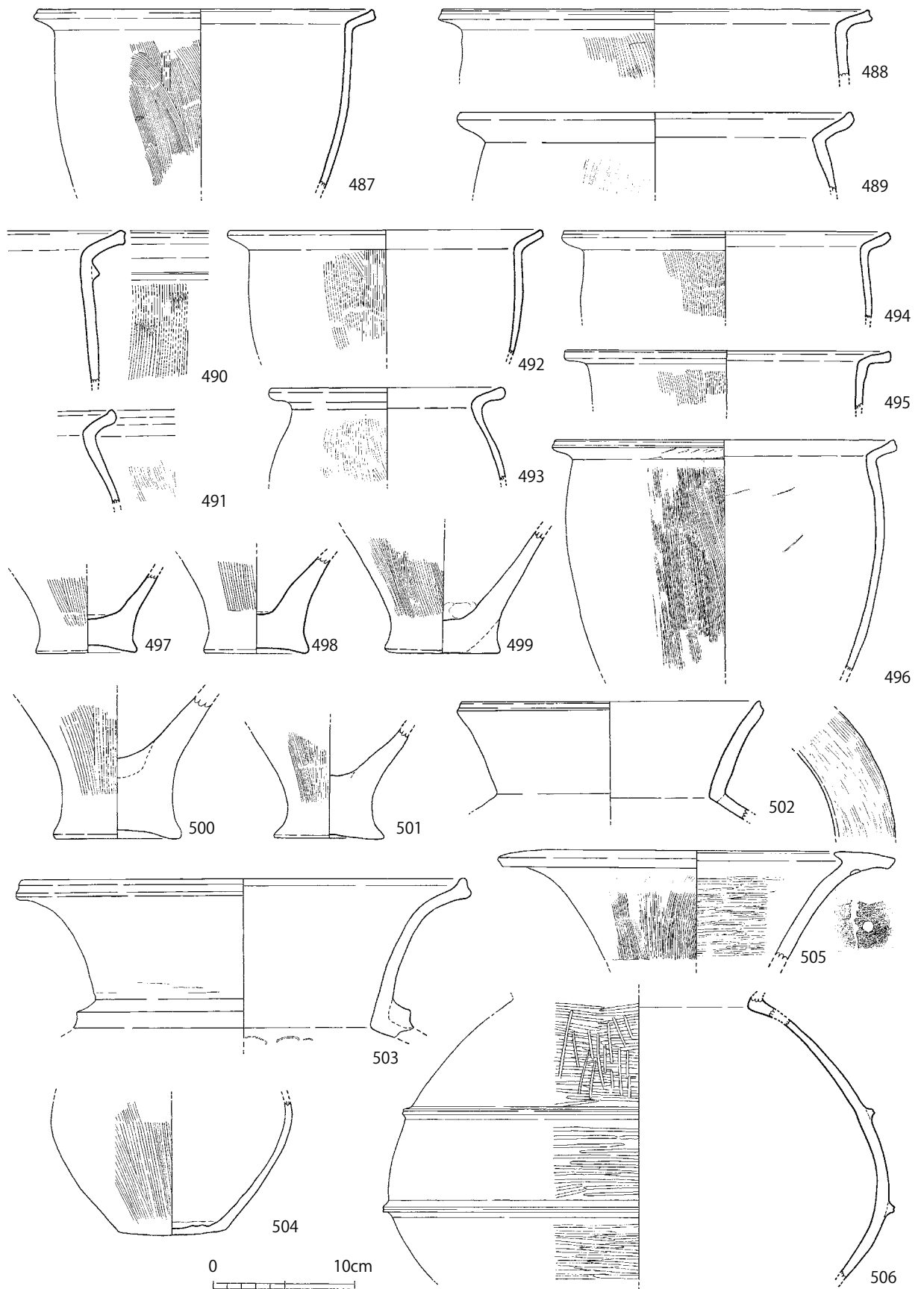
**SH156 (第121・122図)**

SH156は竪穴建物である。東部分は近現代の溝や攪乱のため残りが良くない。形状は長方形で、長軸4.2m、短軸3.8m、深度は0.4mである。主柱穴は3本で、長軸上の壁面際に2本と建物中心部の1本に配置されている。いずれも床面からの深度は0.6～0.8mと深い。中央の柱穴に近接して浅い掘り込みがあり、炉跡の可能性もある。西半分の壁際にのみ周溝が確認できた。

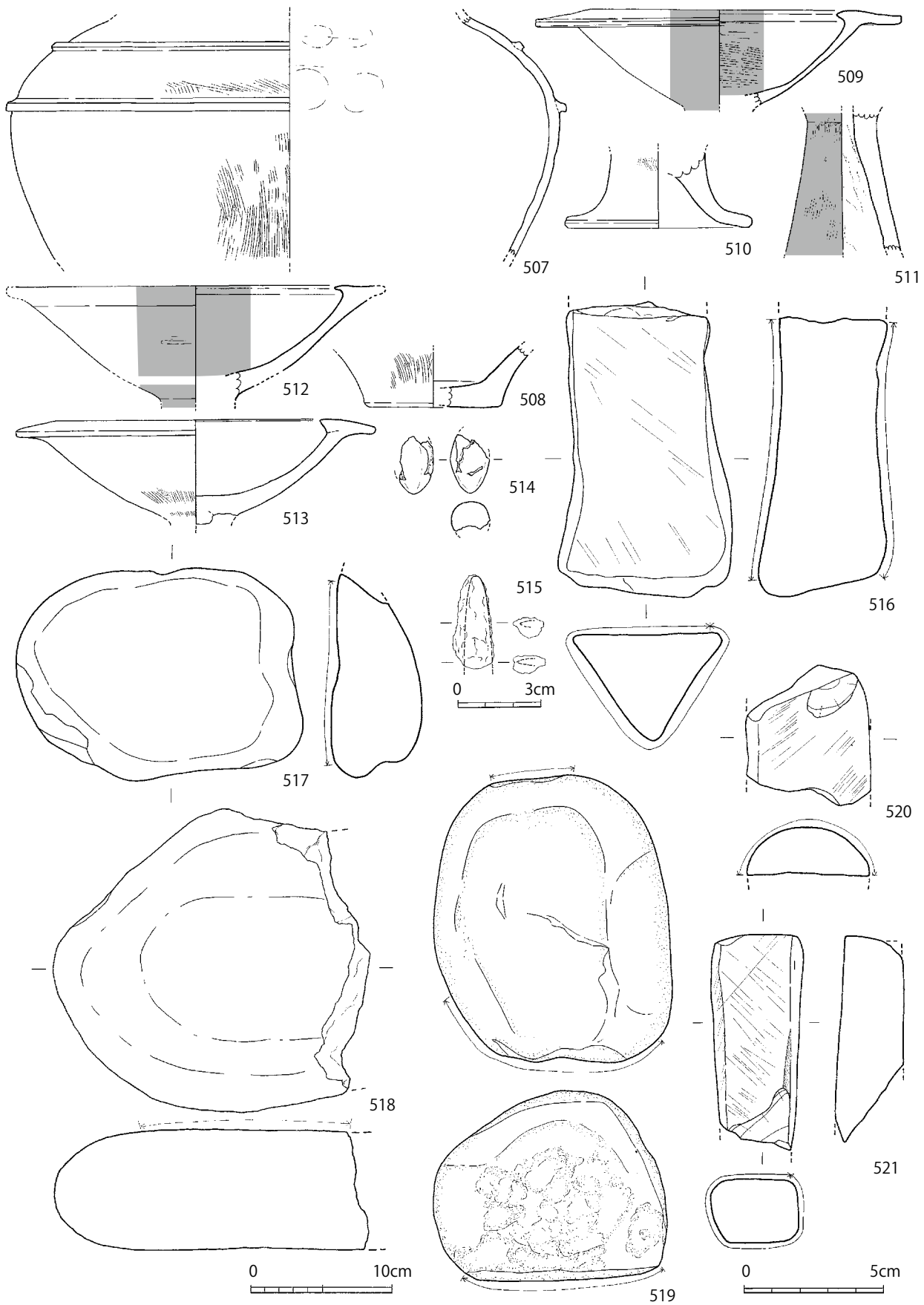
埋土は黒色土の単一層で自然埋没したとみられ、遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第116図 SH154実測図 (1/60)

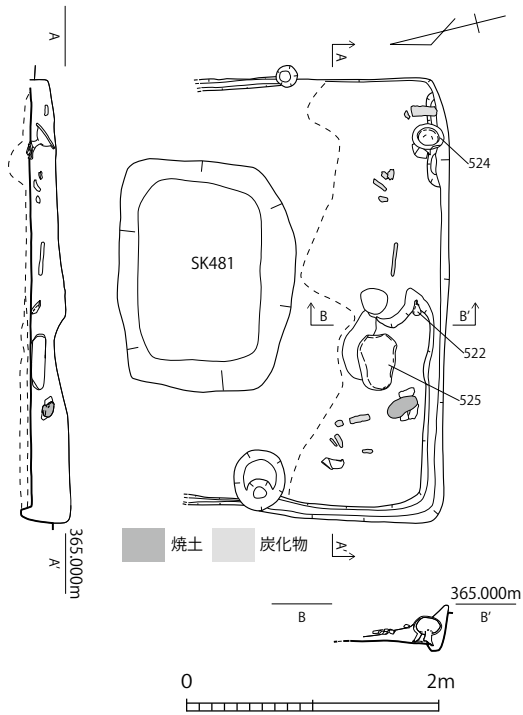


第117図 SH154出土遺物実測図①



第118図 SH154出土遺物実測図②





第119図 SH155実測図 (1/60)

**SH157 (第123・124図)**

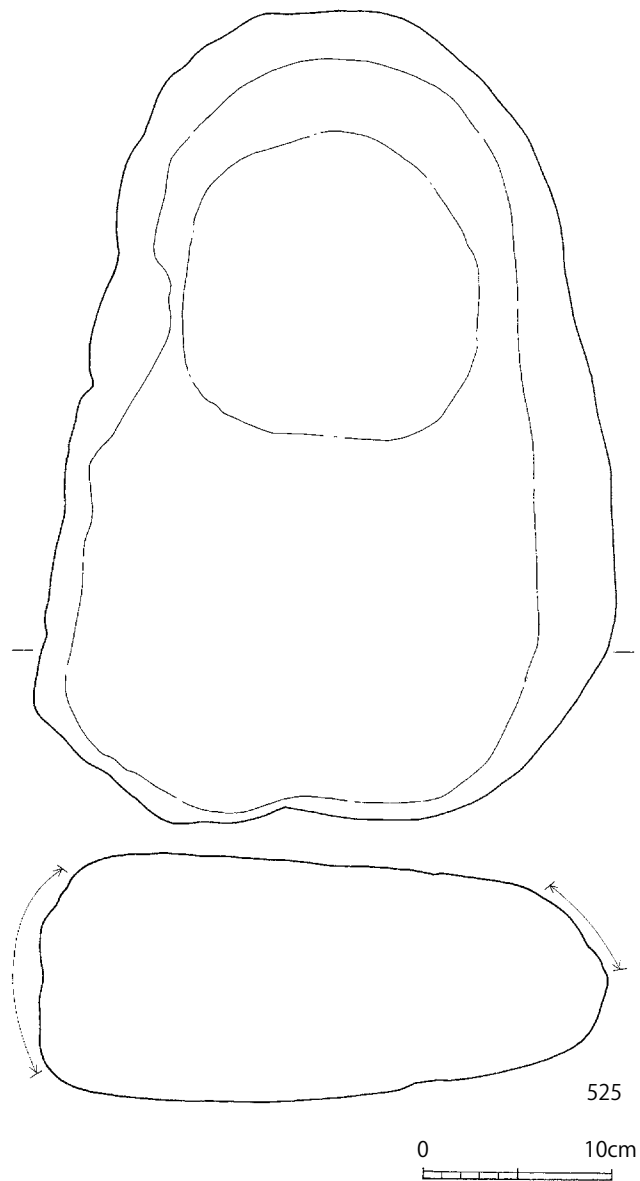
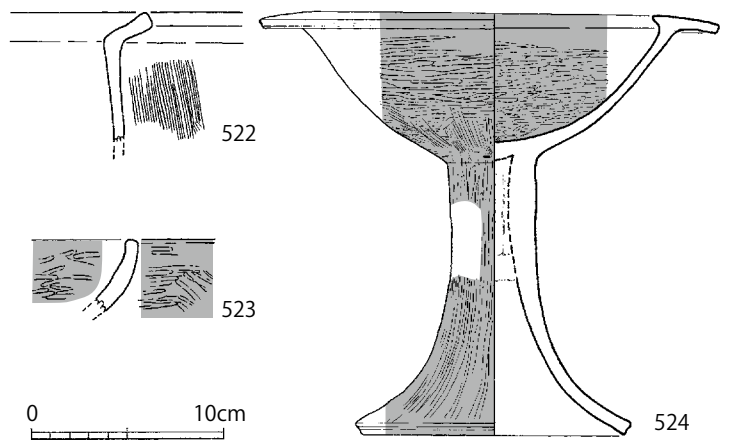
SH157は竪穴建物である。北側は床面まで削平を受け、西側は攪乱に切られるため残りは良くないが、形状は円形で、規模は径6.5～7.0mと推定できる。建物中心部に楕円形の土坑が1基あり、土坑両端には柱穴2本が確認できる。支柱穴は6本で、土坑を取り囲むように円形に配置される。南壁際には周溝がめぐっていることから、本来は全周していたと考えられる。

遺物は土坑上部と建物南西部分からまともに出てきている。いずれも破片資料で床面からやや浮いた状態で出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

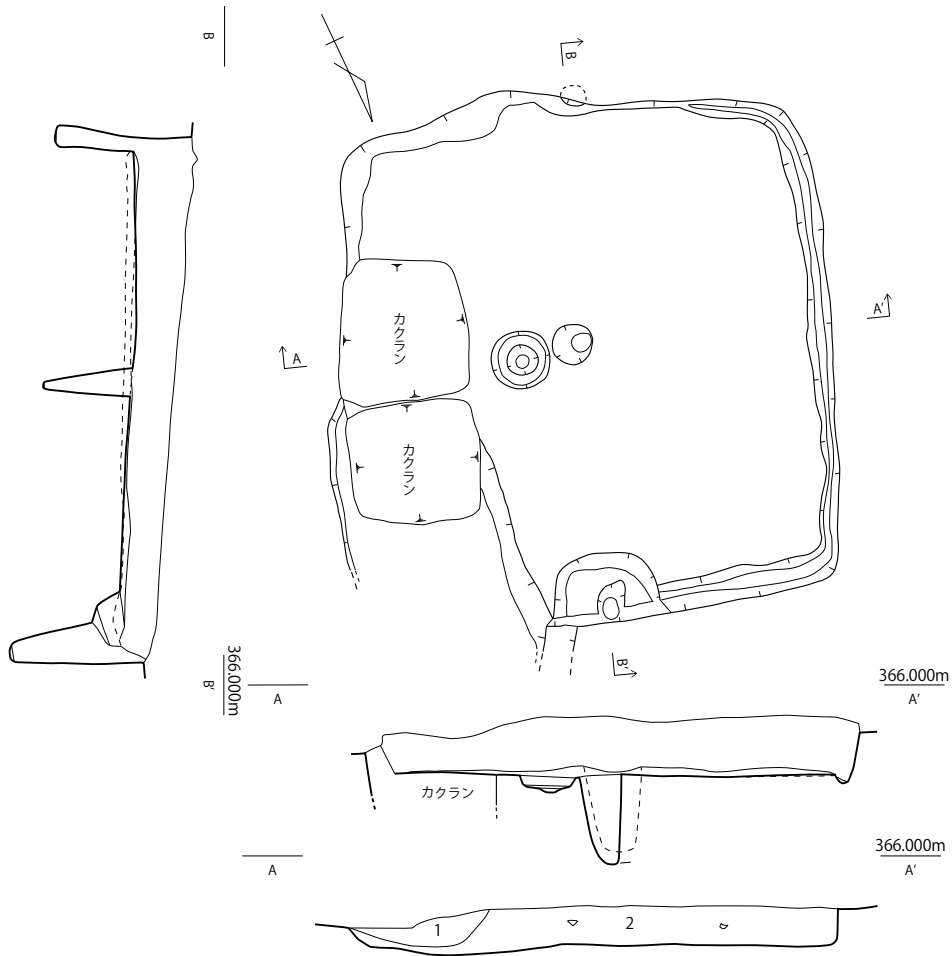
**SH158 (第125・126図)**

SH158は竪穴建物と考えられる。形状は隅丸方形で、規模は長軸3.3m、短軸3.0m、深度は0.4mである。東壁際に土坑1基がともなうが、支柱穴は確認できなかった。

遺物は床面直上からやや浮いた状態で出土するが、各層全般からも出土している。破片

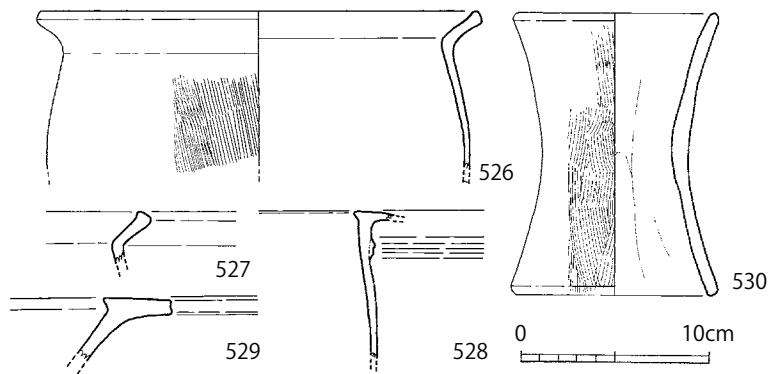


第120図 SH155出土遺物実測図



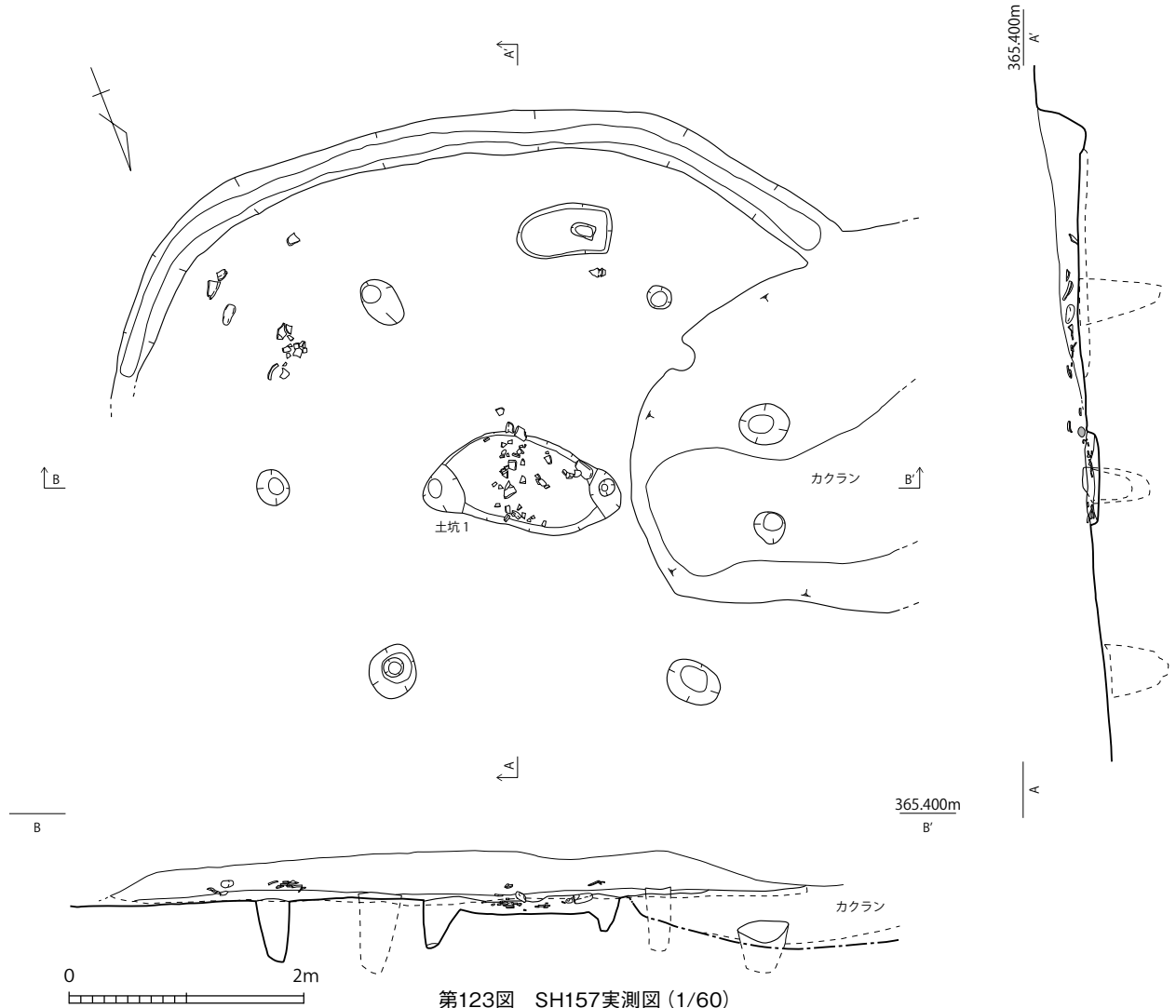
- 1. 灰黄褐色土 1~10mm 大の黄褐色土ブロック 粒混じり 砂混じり しまりなし
- 2. 黒褐色土 1~30mm 大の黄褐色土粒 ブロックが全体的に混じる

第121図 SH156実測図 (1/60)

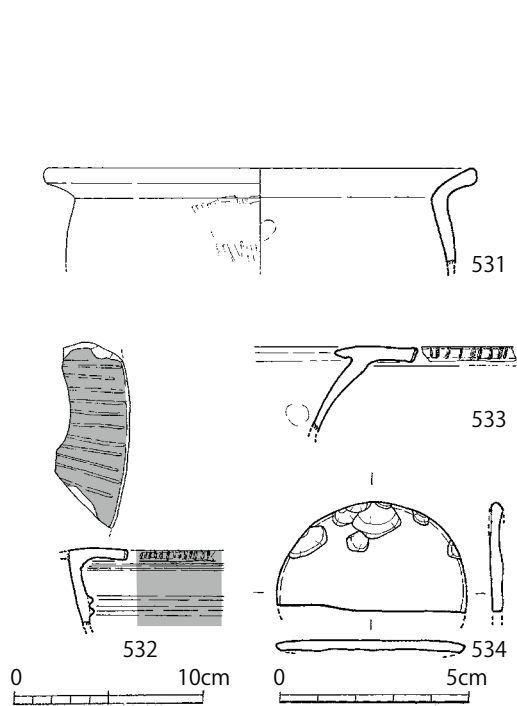


第122図 SH156出土遺物実測図

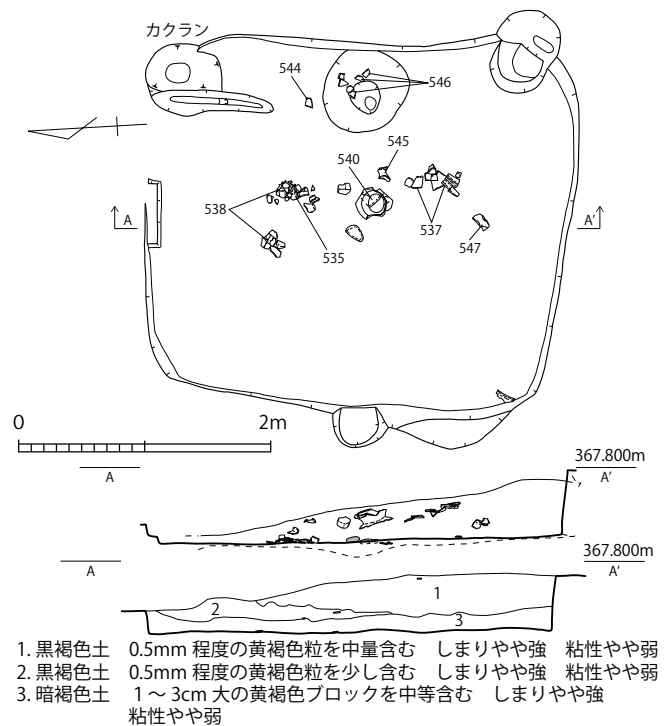
は比較的まとまっており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。遺物は南から北に傾斜して出土することから廃棄方向が推測できる。遺物には口縁部のみとなった大型壺や土製紡錘車等が出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第123図 SH157実測図 (1/60)

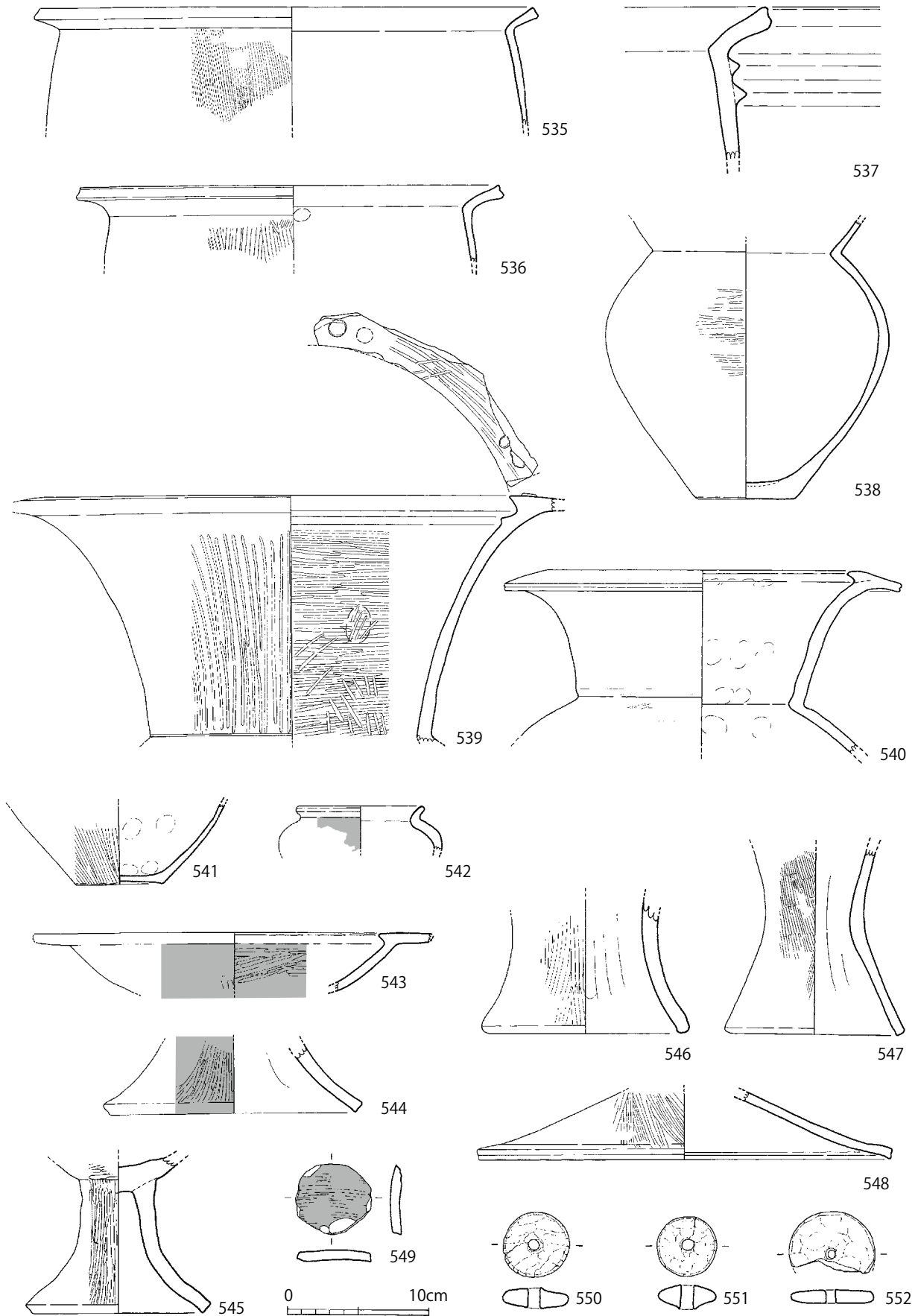


第124図 SH157出土遺物実測図

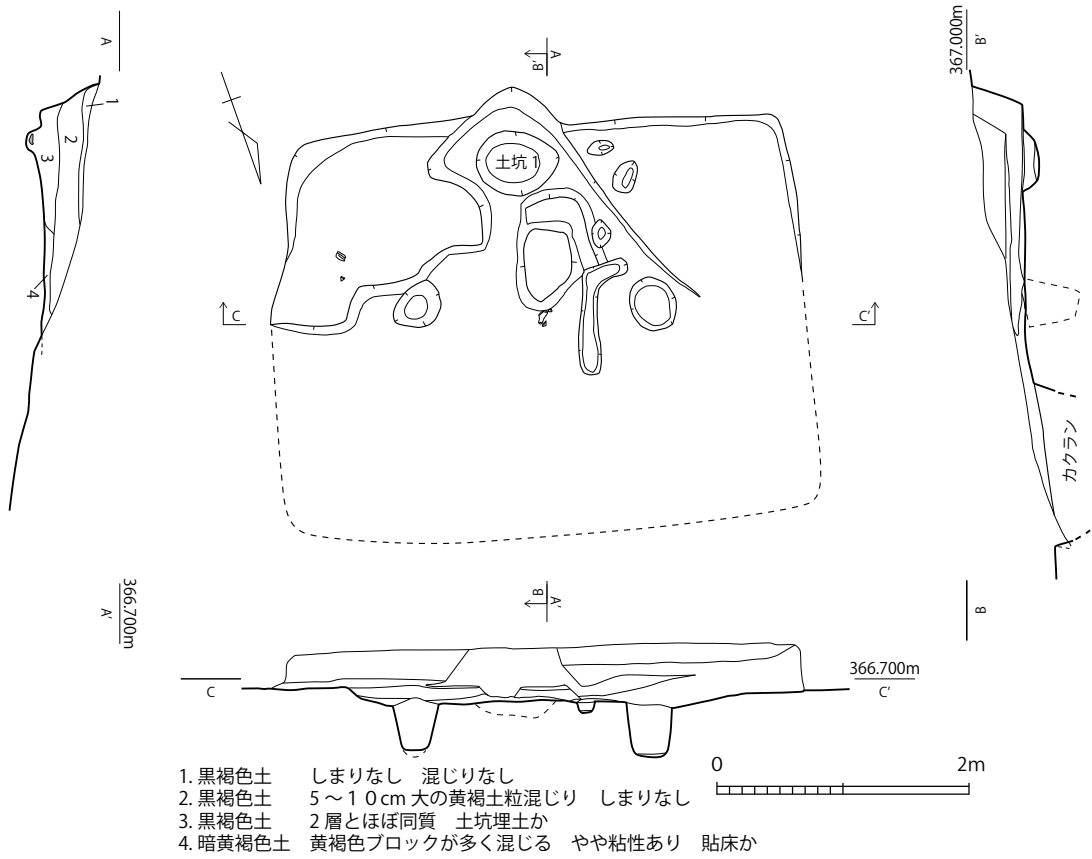


第125図 SH158実測図 (1/60)

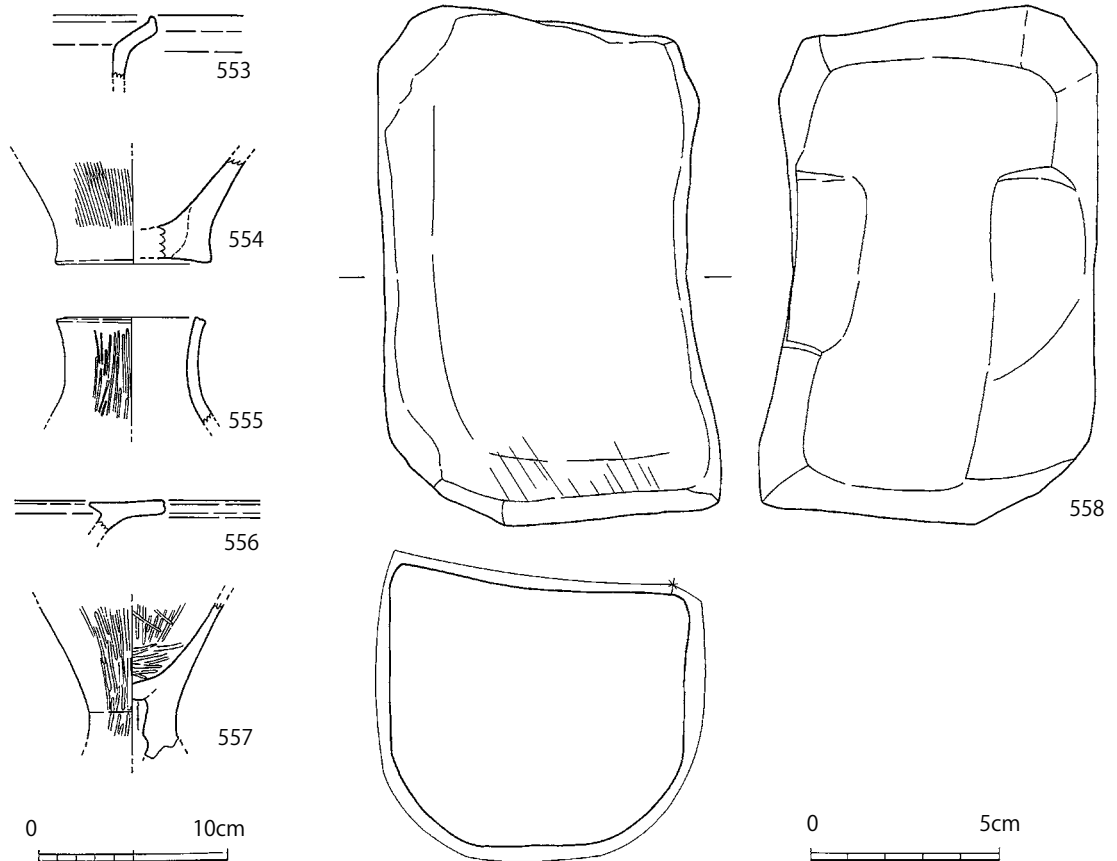
1. 黒褐色土 0.5mm程度の黄褐色粒を中量含む しまりやや強 粘性やや弱
2. 黒褐色土 0.5mm程度の黄褐色粒を少し含む しまりやや強 粘性やや弱
3. 暗褐色土 1~3cm大の黄褐色ブロックを中等含む しまりやや強 粘性やや弱



第126図 SH158出土遺物実測図



第127図 SH159実測図 (1/60)



第128図 SH159出土遺物実測図

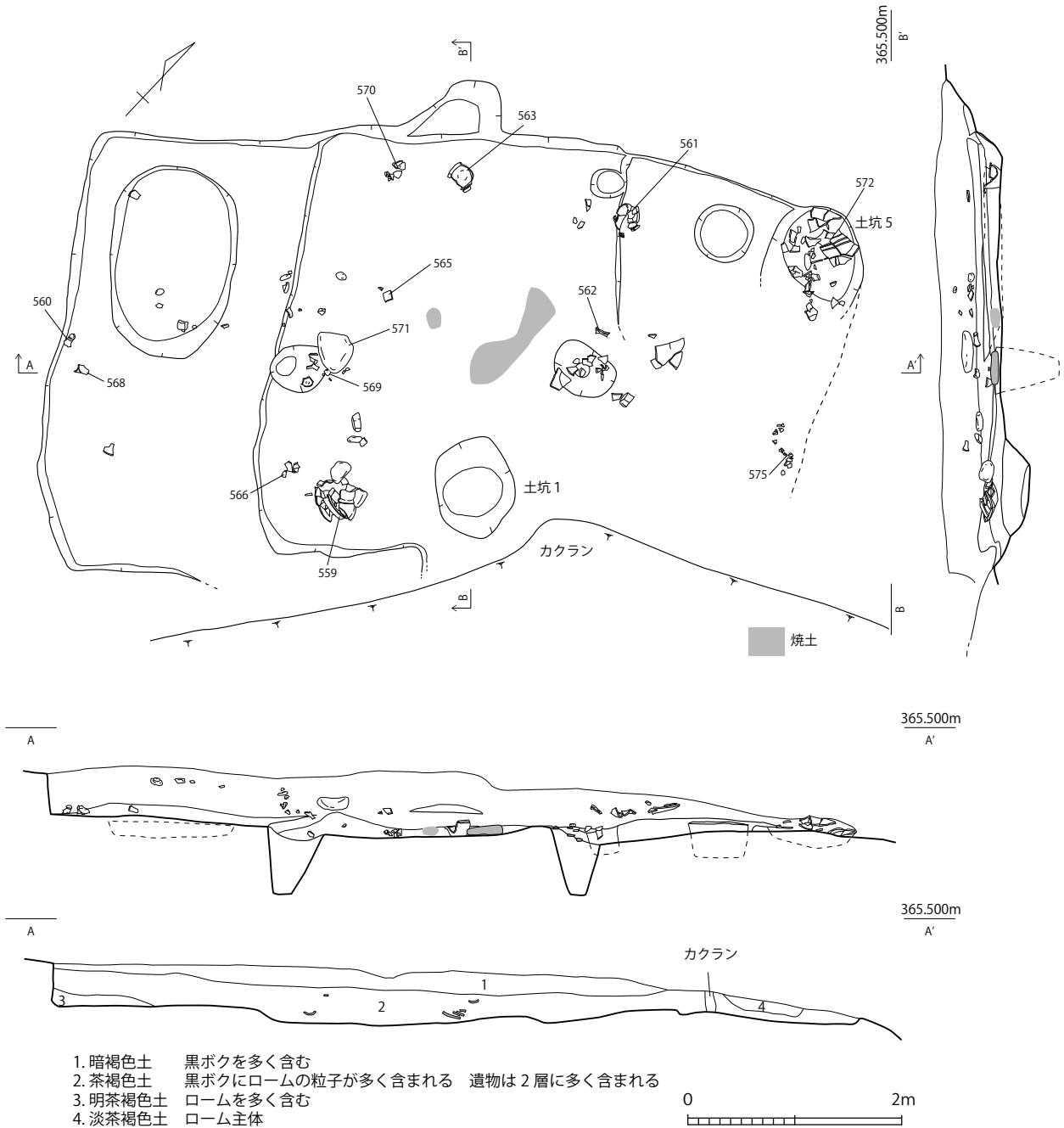
SH159 (第127・128図)

SH159は竪穴建物である。北半分が植栽痕などにより攪乱や削平を受けているが、形状は長方形と推測できる。規模は長軸4.25m、短軸は3.0m程度、深度は0.45mである。支柱穴が2本と南壁際で土坑1基が確認できた。床面も残りがよくなく、実測図上では段差がついているが、本来は貼床によって平坦であったとみられる。

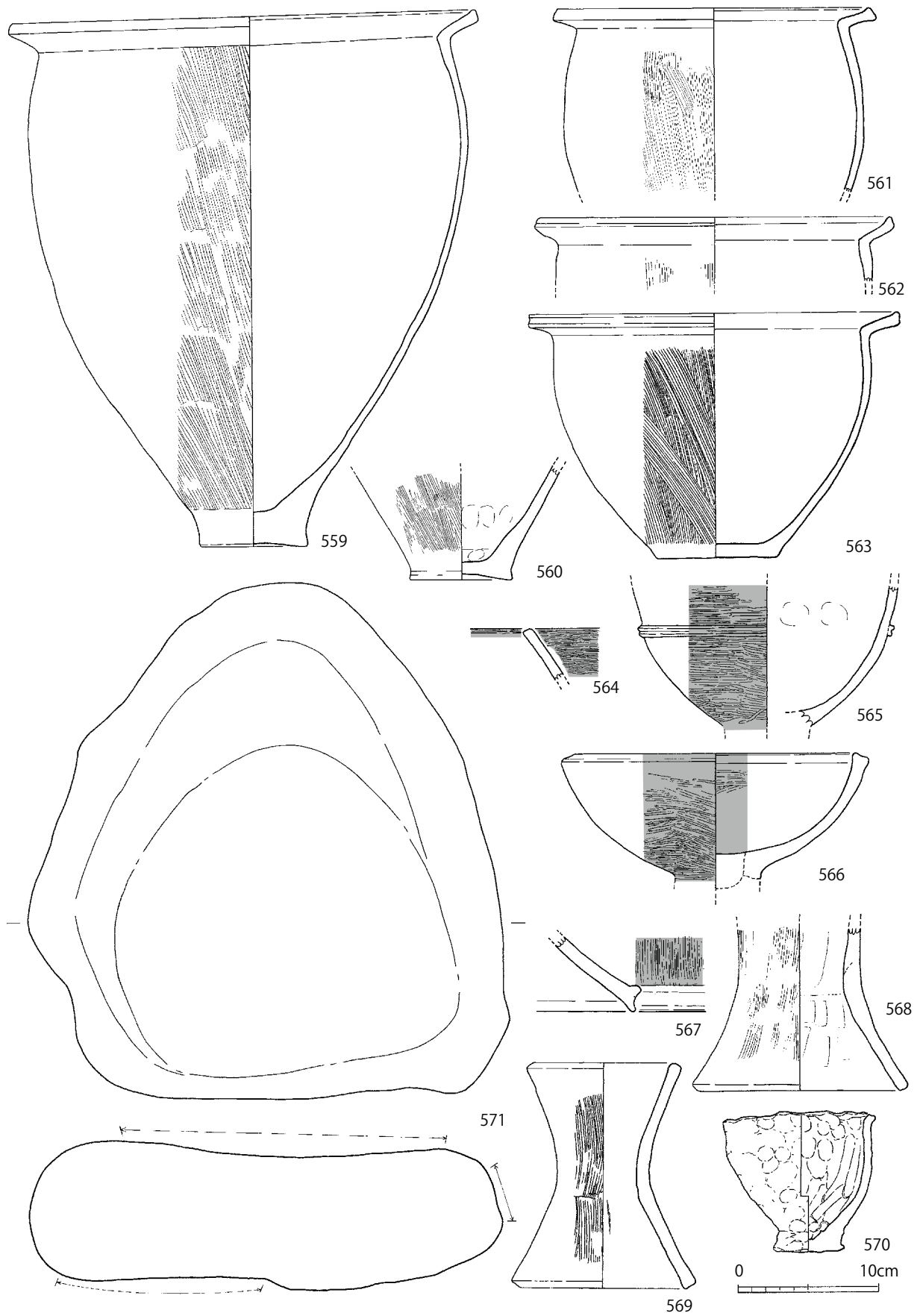
遺物は破片資料のみで復元できるものはなく、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SH160 (第129・130・131図)

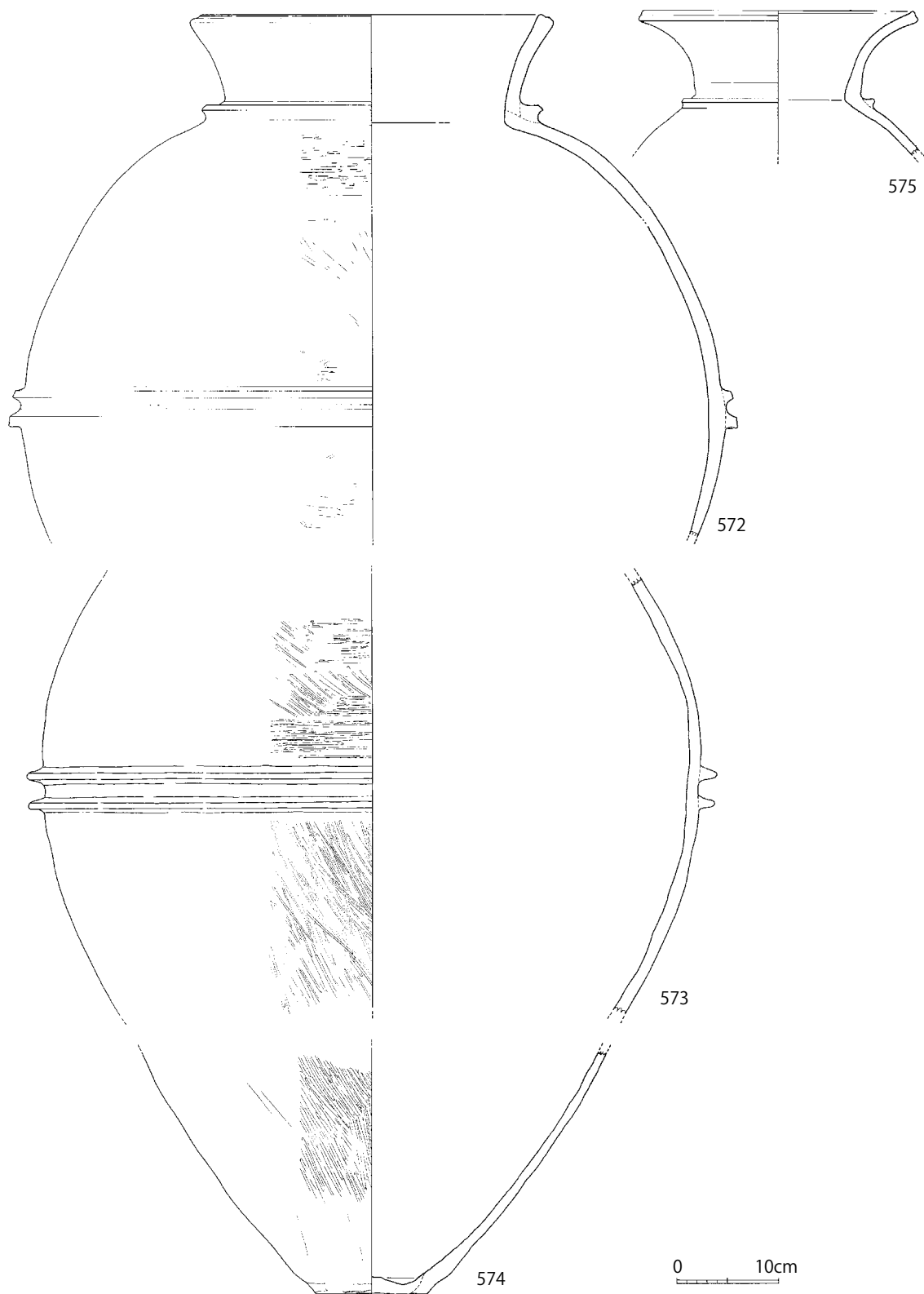
SH160は竪穴建物である。東側は段下げにより削平を受けている。形状は長方形で、規模は長軸7.2m、短軸推定4.2m、深度は0.35mである。支柱穴は2本で、土坑は4基確認できる。掘り込みはないものの床面で焼土が検



第129図 SH160実測図 (1/60)

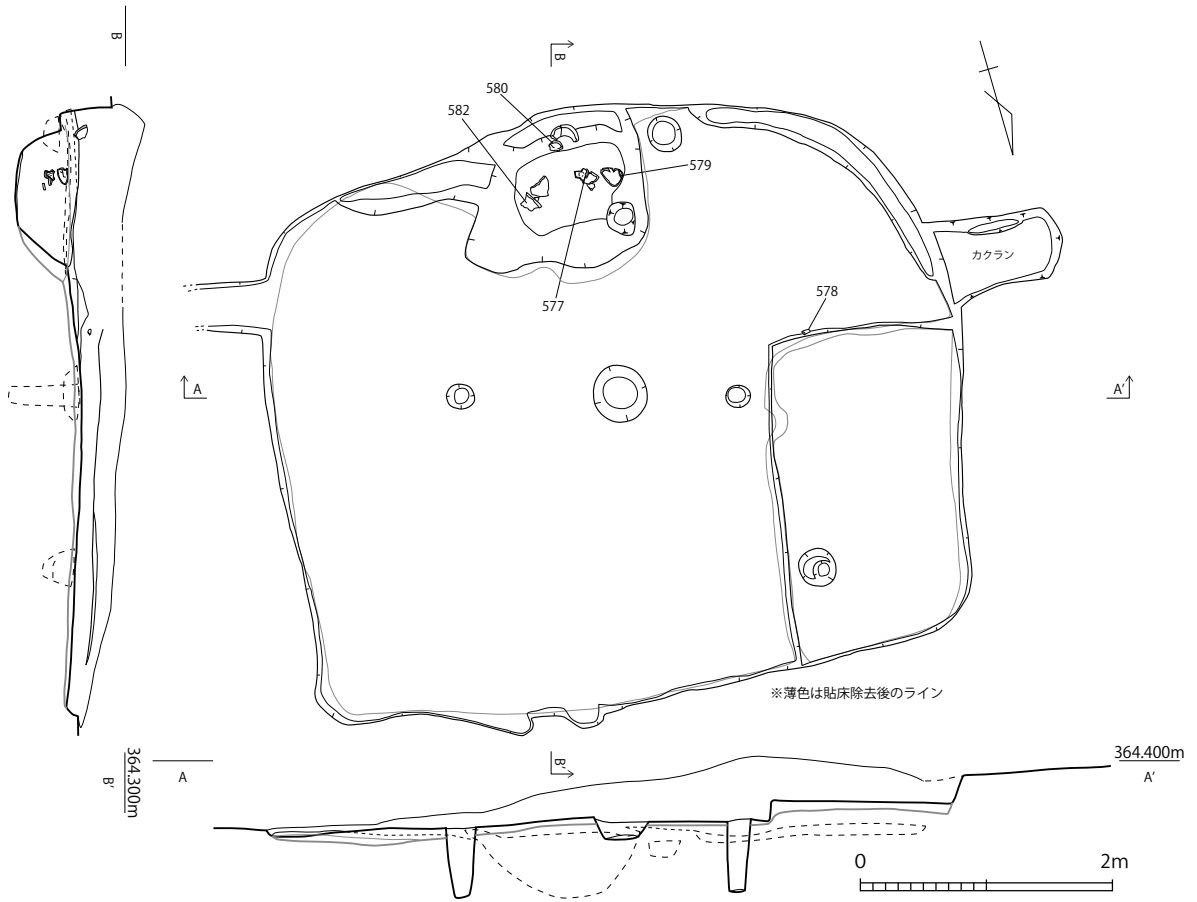


第130図 SH160出土遺物実測図①

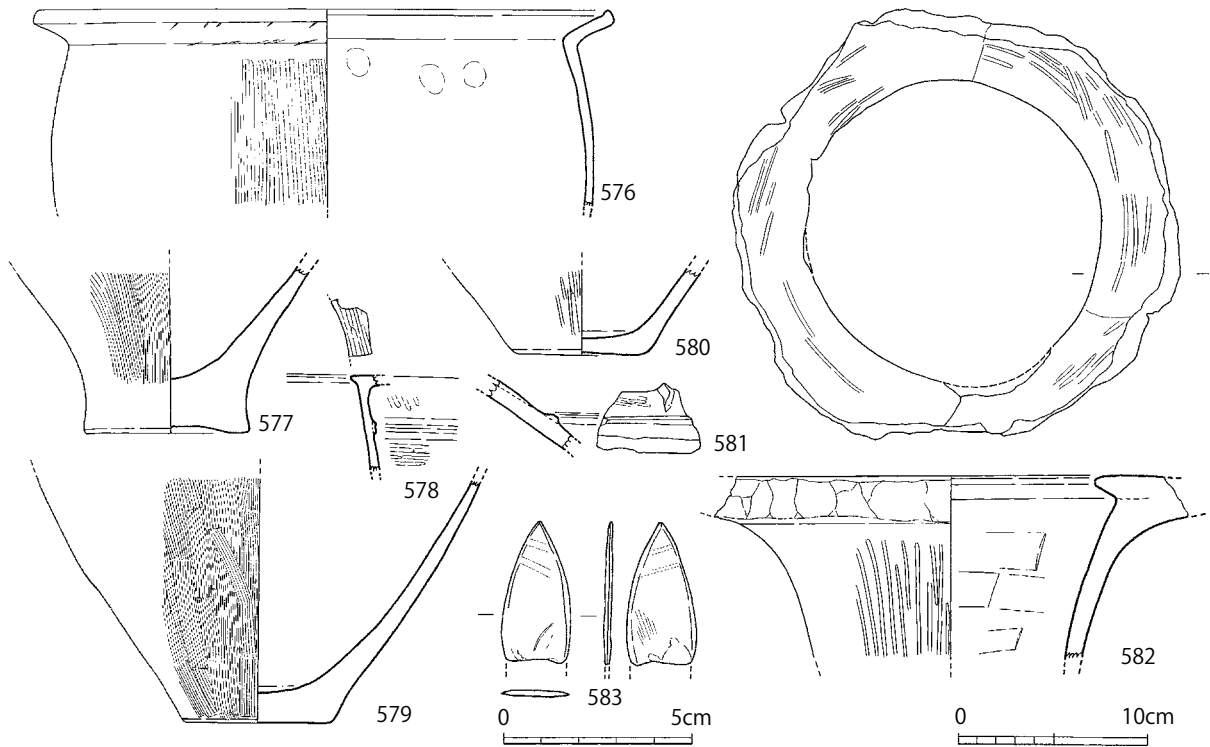


第131図 SH160出土遺物実測図②

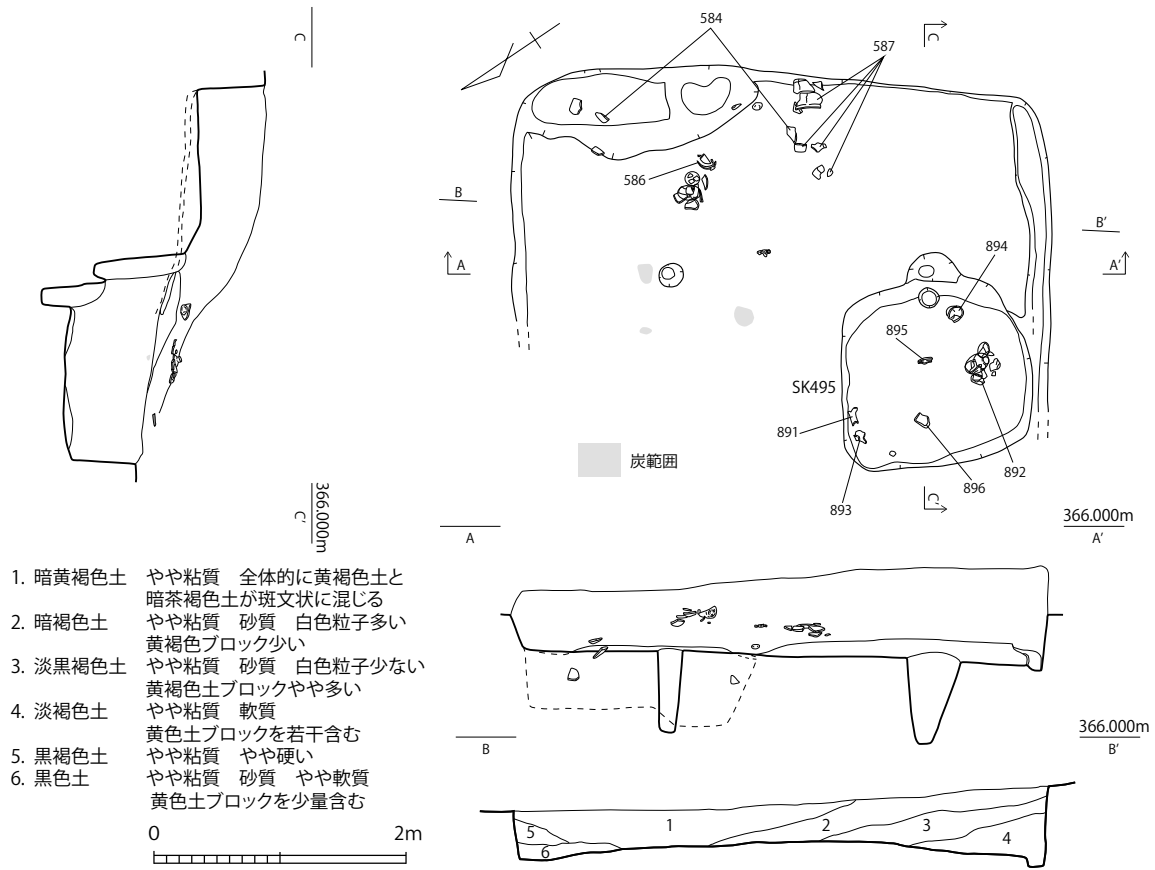




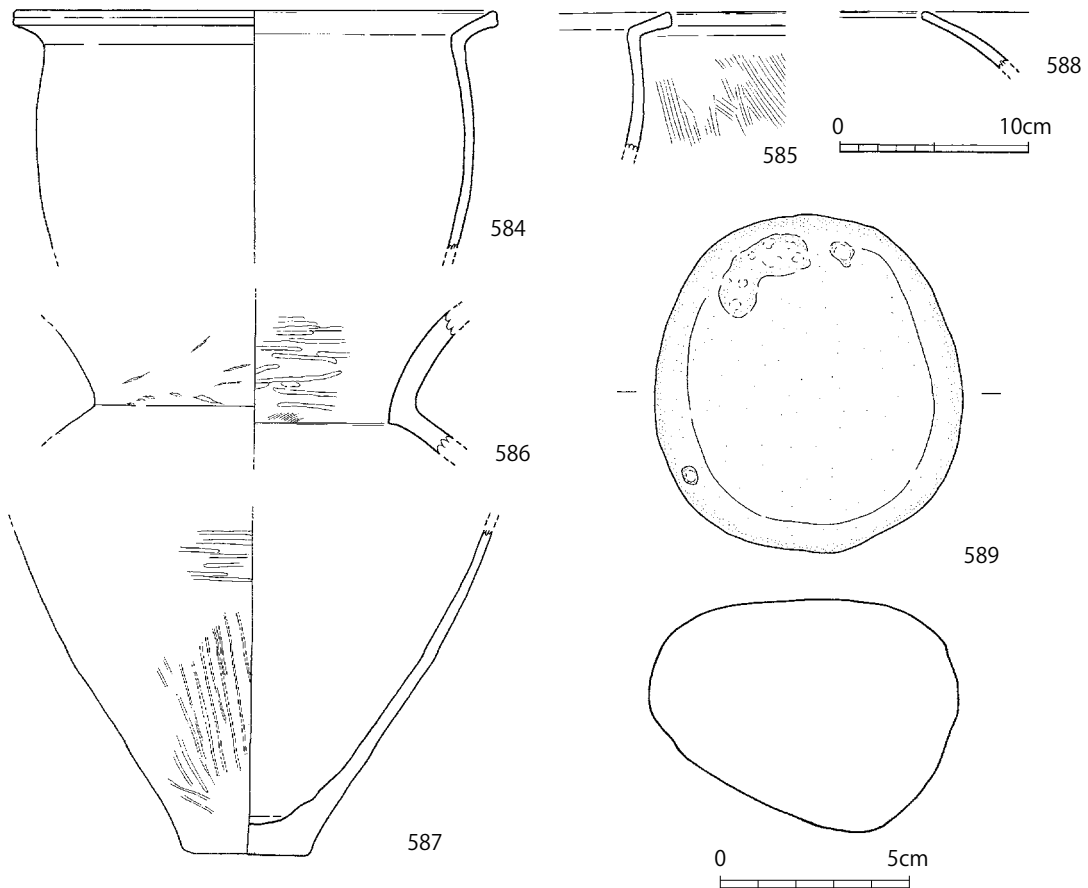
第132図 SH161実測図 (1/60)



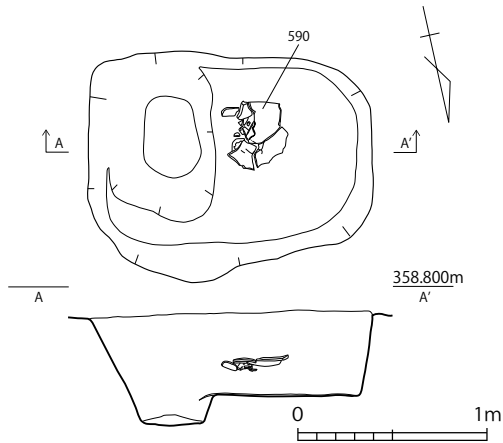
第133図 SH161出土遺物実測図



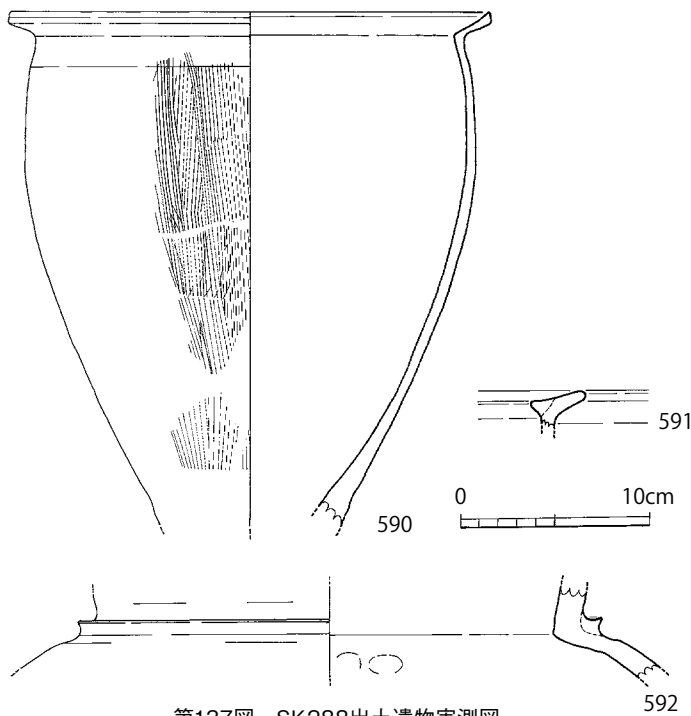
第134図 SH162・SK495実測図 (1/60)



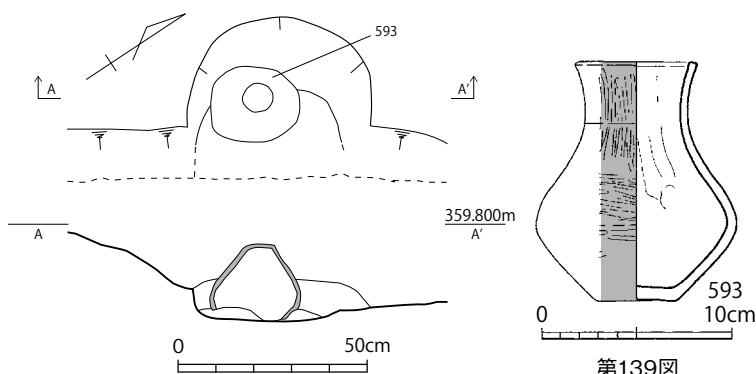
第135図 SH162出土遺物実測図



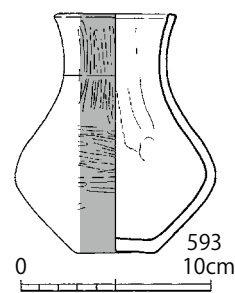
第136図 SK288実測図 (1/40)



第137図 SK288出土遺物実測図



第138図 SK412実測図 (1/20)



第139図 SK412出土遺物実測図

出できたことから、建物中央部に炉跡があったと考えられる。東西両端にベット状遺構があるため、中央部分が一段低くなる。

埋土観察から土の流入により自然埋没したものとみられる。遺物は各層全般から出土しているが、特に2層から多く出土している。土坑1の南側では甕が潰れた状態で、北東隅の土坑5上部からは大型壺がまとも出土しているなど、建物の廃絶直後から遺物の廃棄が行われたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

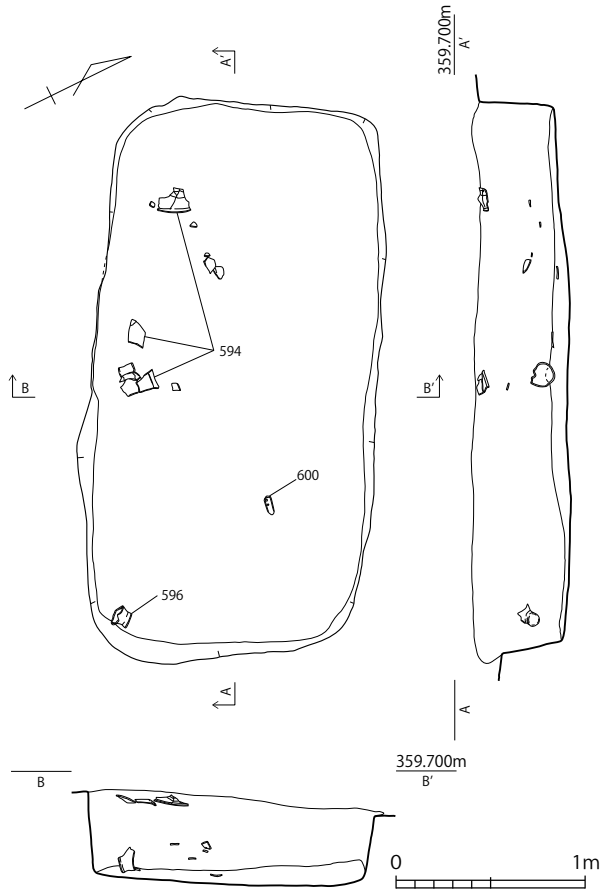
### SH161 (第132・133図)

SH161は竪穴建物である。近現代の溝により切られる。形状は隅丸長方形で、長軸5.5m、短軸4.8m、深度は0.2mである。主柱穴は2本で、中央では焼土は出土していないが浅い掘り込みがあることから、炉跡の可能性もある。床面は平坦で、貼床が施される。南西隅と南壁際には周溝がめぐっている。南壁中央部には土坑が1基、北西隅には長方形のベット状遺構がある。土坑と建物の埋土は同一であることから、ともに埋没したとみられる。

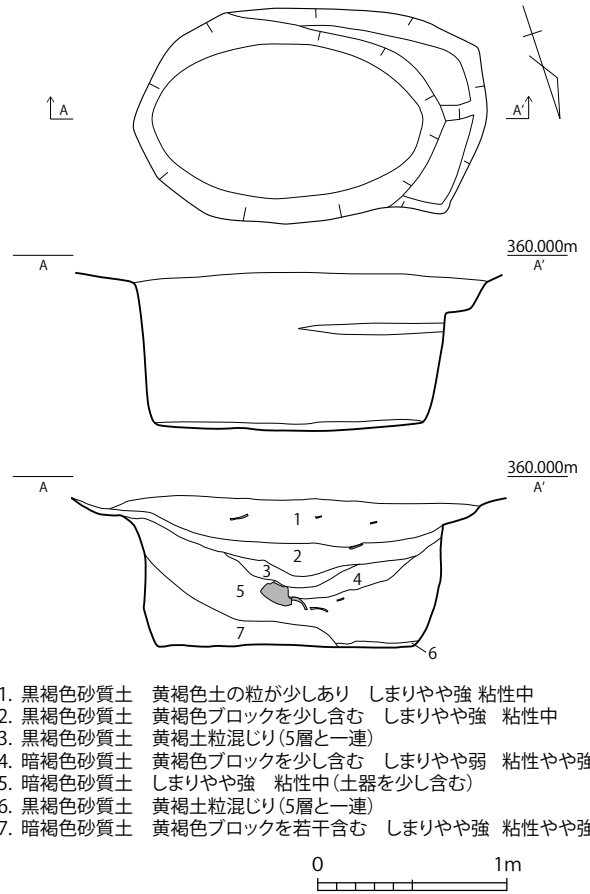
埋土は単一層で、自然埋没したとみられる。遺物は特に土坑内からまとも出土しているが、底面からやや浮いた状態で出土していることから、埋没途中で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

### SH162 (第134・135図)

SH162は竪穴建物である。SK495に切られる。西半分は削平を受けているため形状は明確ではないが、主柱穴の配置などを考慮すると長方形に復元できる。規模は長軸4.25m、短軸2.5m以上、深度は0.5mである。主柱穴は2本で、南柱穴がSK495により切られていることからSK495との切りあい関係が判明した。東壁際には楕円形を呈した土坑状の掘り込みがあるが、軟質の埋土で

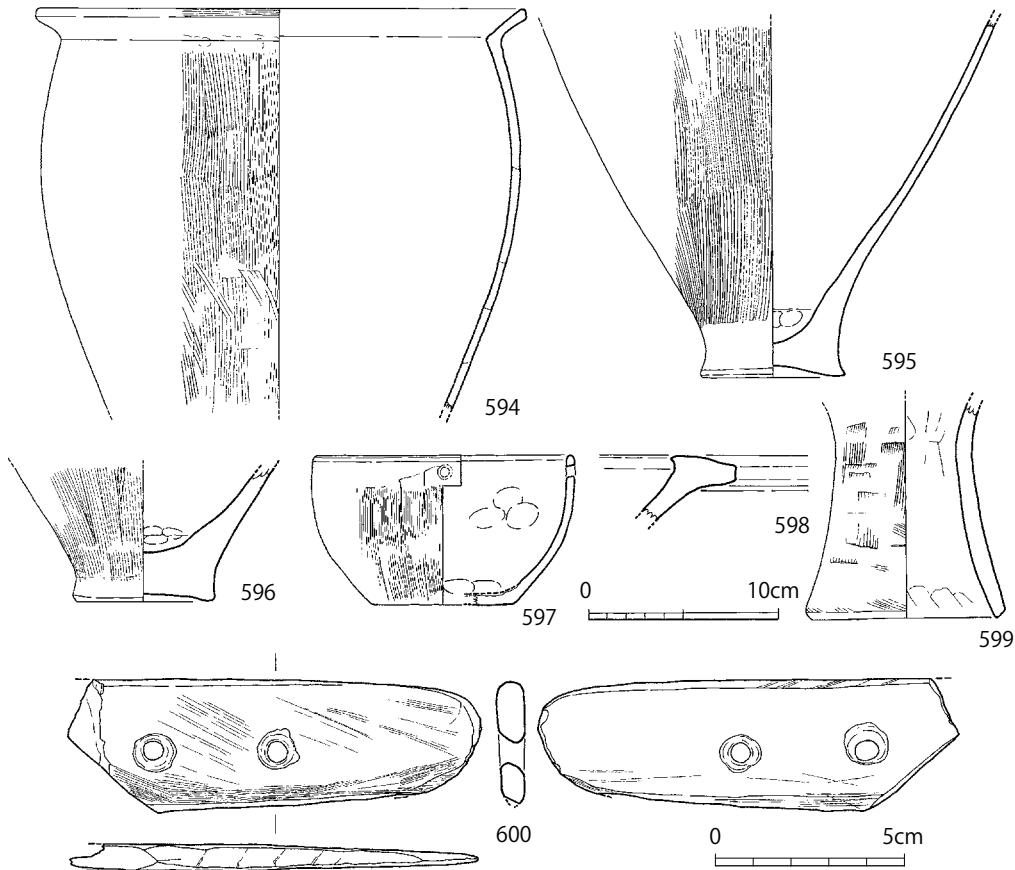


第140図 SK413実測図 (1/40)

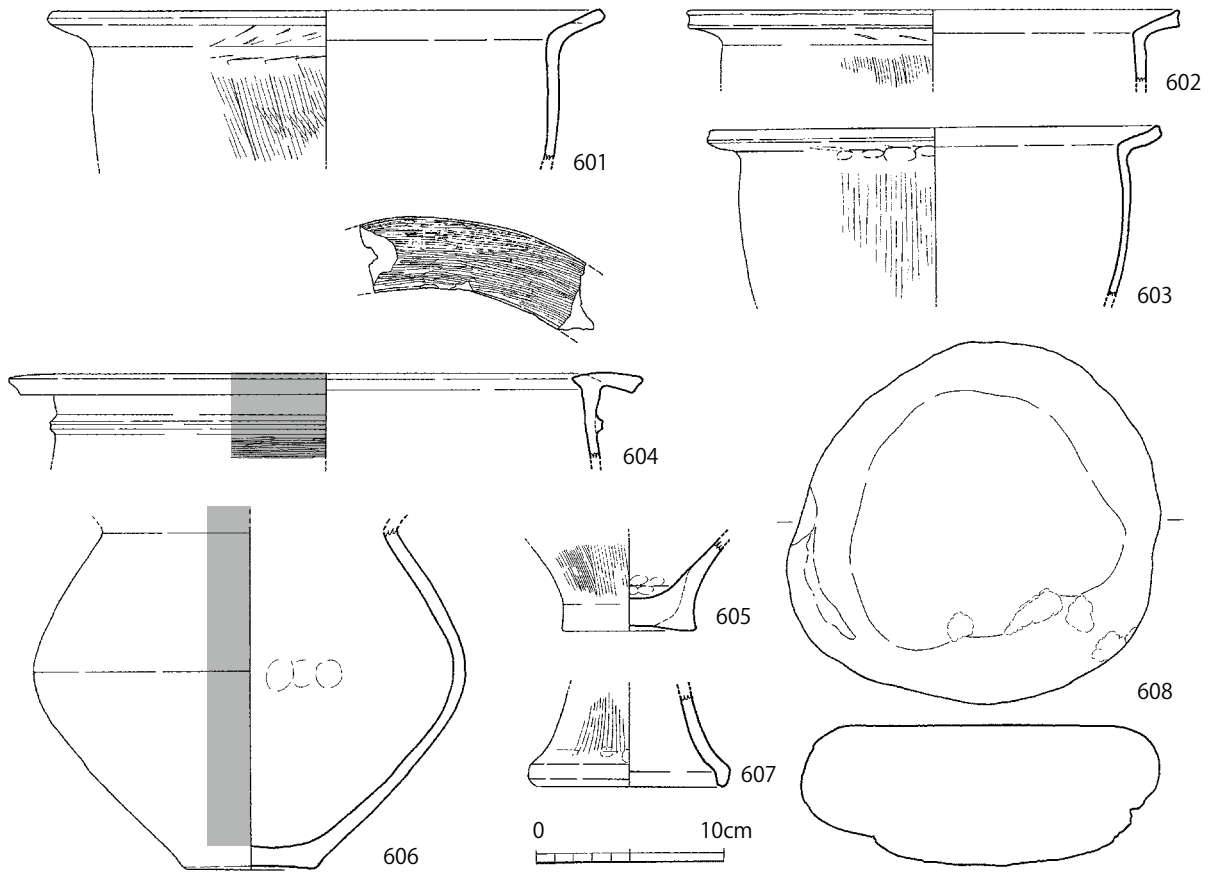


第141図 SK414実測図 (1/40)

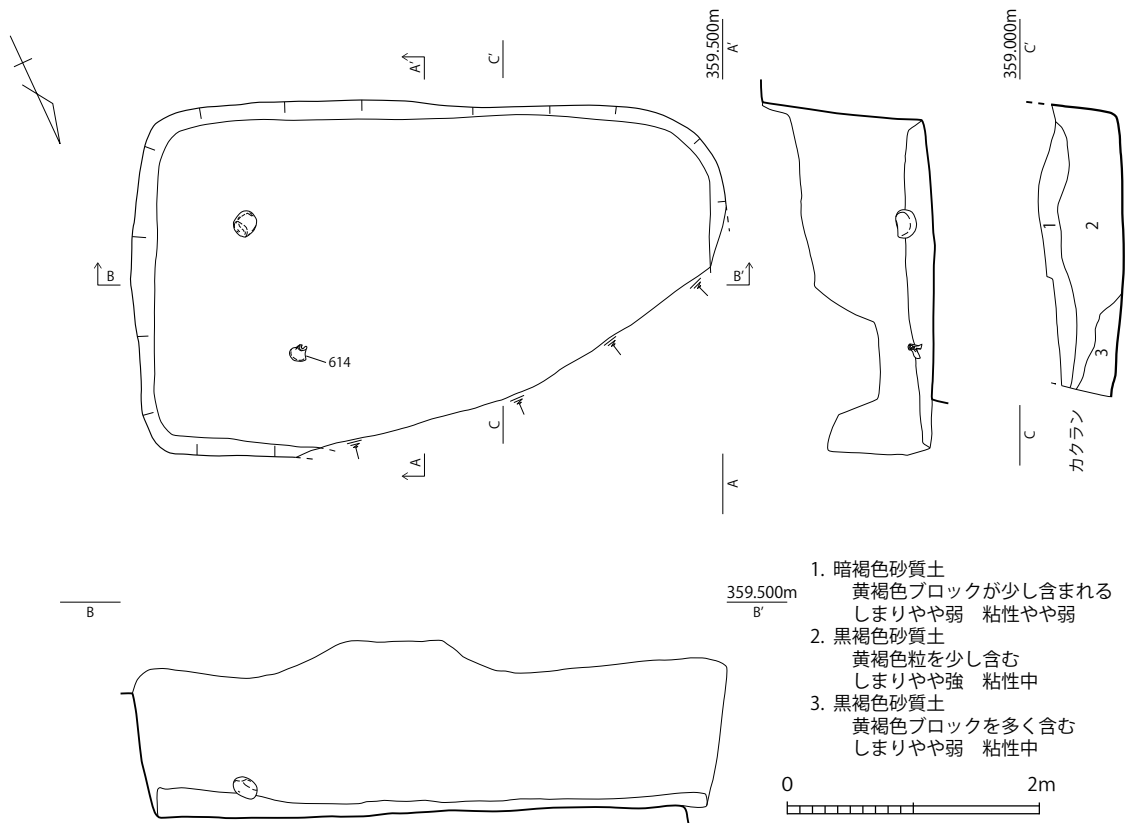
1. 黒褐色砂質土 黄褐色土の粒が少しあり しまりやや強 粘性中
2. 黒褐色砂質土 黄褐色ブロックを少し含む しまりやや強 粘性中
3. 黒褐色砂質土 黄褐色土粒混じり(5層と一連)
4. 暗褐色砂質土 黄褐色ブロックを少し含む しまりやや弱 粘性やや強
5. 暗褐色砂質土 しまりやや強 粘性中(土器を少し含む)
6. 黒褐色砂質土 黄褐色土粒混じり(5層と一連)
7. 暗褐色砂質土 黄褐色ブロックを若干含む しまりやや強 粘性やや強



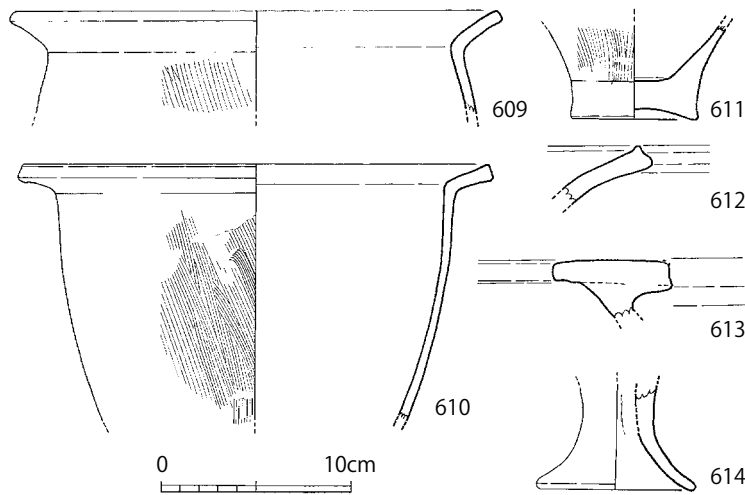
第142図 SK413出土遺物実測図



第143図 SK414出土遺物実測図

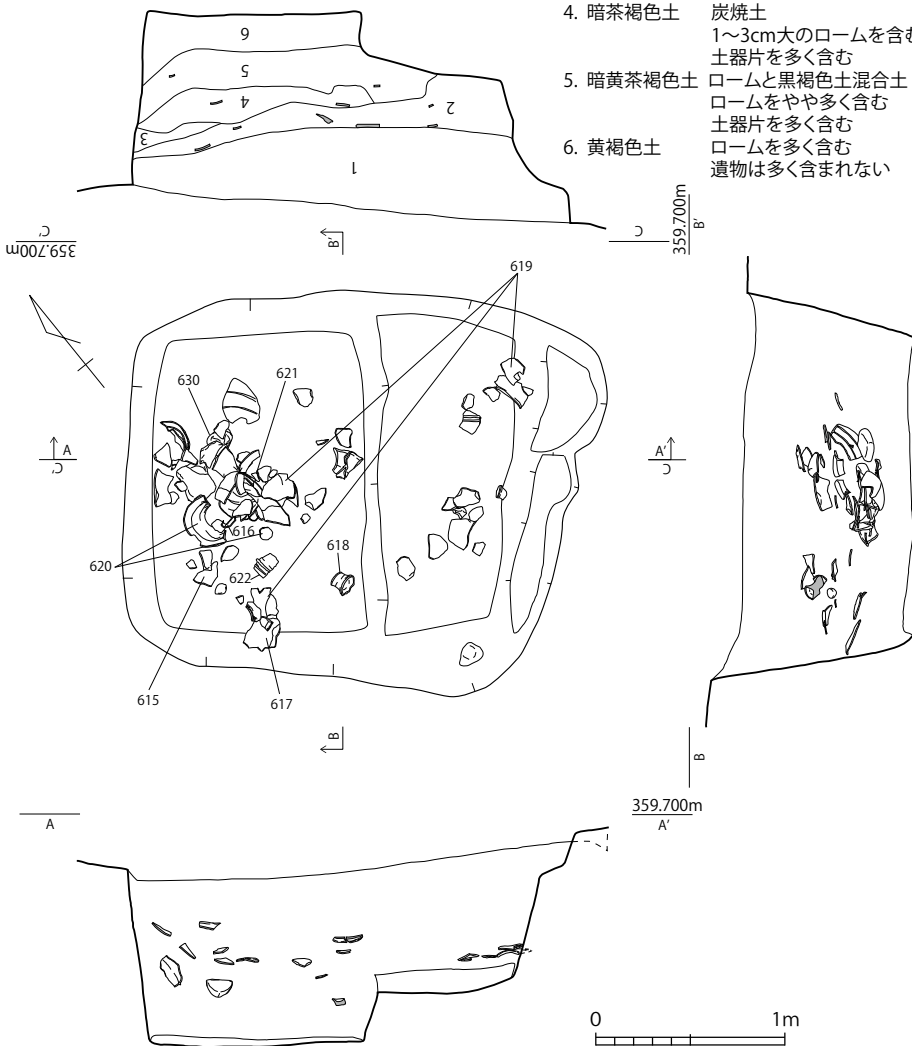


第144図 SK415実測図 (1/60)



第145図 SK415出土遺物実測図

- |           |   |
|-----------|---|
| 1. 淡黒褐色土  | ロームを含む<br>土器は多く含まれない  |
| 2. 黒褐色土   | 上面に炭化物のブロックを<br>やや多く含む  |
| 3. 暗黄褐色土  | 土器片を多く含む  |
| 4. 暗茶褐色土  | ロームと黒褐色土の混合土<br>炭焼土   |
| 5. 暗黄茶褐色土 | 1~3cm大のロームを含む<br>土器片を多く含む                                       |
| 6. 黄褐色土   | ロームと黒褐色土混合土<br>ロームをやや多く含む<br>土器片を多く含む<br>ロームを多く含む<br>遺物は多く含まれない |



第146図 SK416実測図 (1/40)

下部から木根があることから樹木による攪乱とみられる。南壁際にのみ周溝がめぐっている。

建物埋土は周囲からの土の流入により自然に埋没したとみられ、遺物は床面から浮いた状態で出土していることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

## (2) 土坑

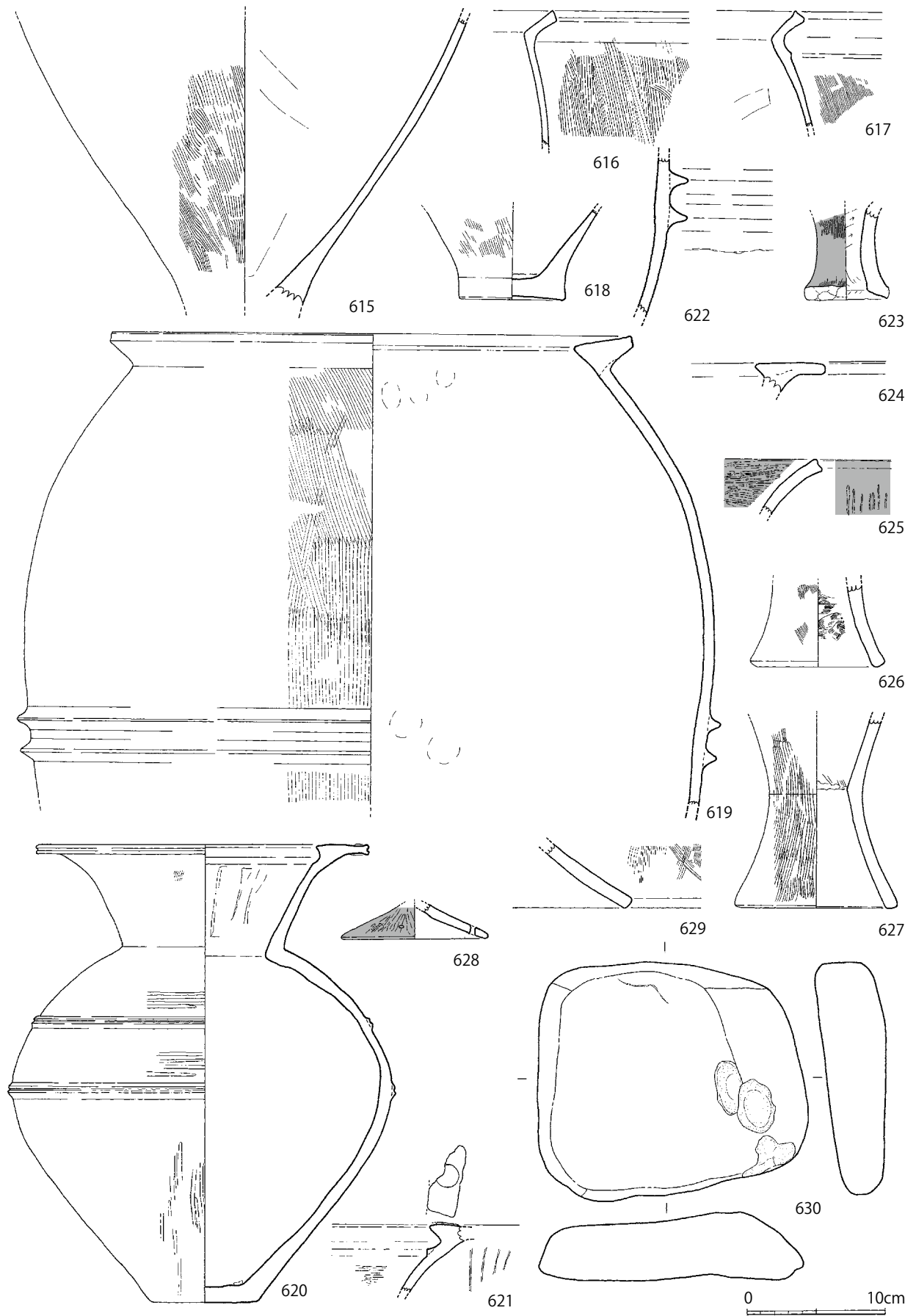
### SK288 (第136・137図)

SK288は『四日市遺跡3』で報告した第13次調査区の土坑である。第16次調査区での東側部分を調査したことにより全形が判明したため改めて報告する。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.5m、短軸1.1m、深度は0.45mである。西側(第13次調査区側)が一段深く掘り込まれた、段掘り状になっている。

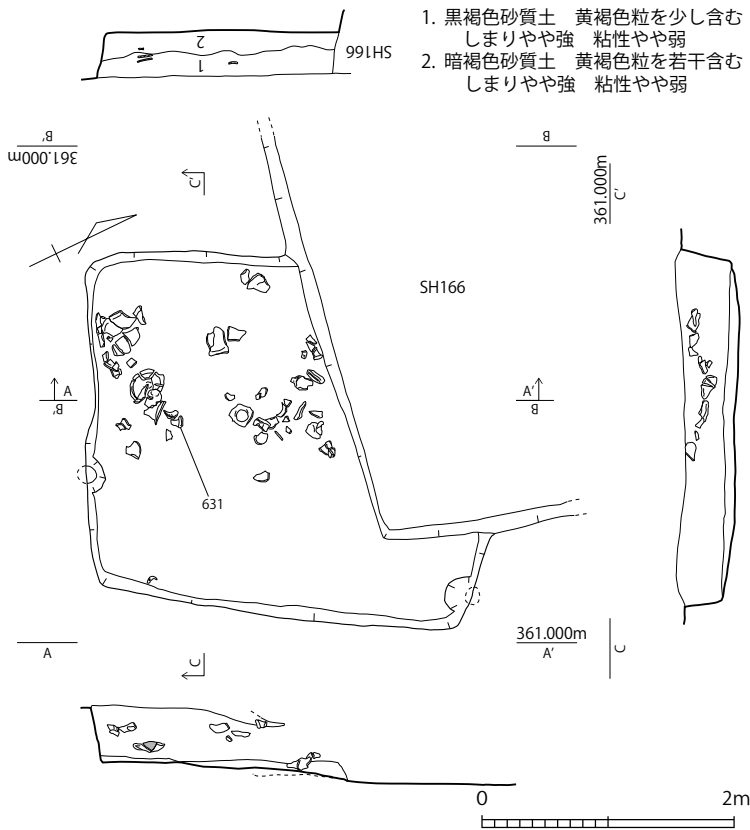
甕がまとめて出土したが、床面から浮いた状態であり、自然埋没の途中で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

### SK412 (第138・139図)

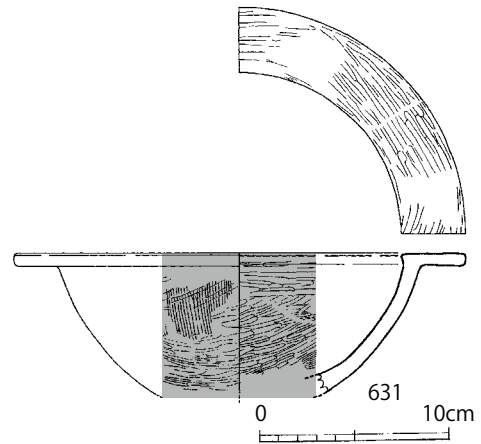
SK412は土坑である。東半分は攪乱を受けているが、形状は円形に復元でき、規模は径0.5mと推測する。床面に上部が欠損した長頸壺(593)を伏せた状態で埋置していた。頸部につい



第147図 SK416出土遺物実測図



第148図 SK417実測図 (1/60)



第149図 SK417出土遺物実測図

てはSK412内の埋土中から出土していることから、SK412において長頸壺の欠損・埋置が一連で行われたとみられる。長頸壺の内部からは何も出土していない。遺物の時期は弥生時代中期後半段階で、祭祀的遺構と考えられる。

#### SK413 (第140・142図)

SK413は土坑である。形状は長方形で、規模は長軸3.0m、短軸1.5m、深度は0.4mである。壁面は直立ぎみに立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黒色土の単一層で、遺物は床面から検出面までの埋土全体に混じり込んでいることから、自然埋没していく過程で遺物の廃棄が継続して行われたとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK414 (第141・143図)

SK414は土坑である。形状は楕円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.05m、深度は0.75mである。西壁には段掘り状のテラスがあるが、これは埋没途中ないしは埋没後に西側に拡張して掘り直しが行われたものと考えられる。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は埋土全般から出土しており、埋没過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK415 (第144・145図)

SK415は土坑である。北西部は攪乱を受けている。形状は長方形で、規模は長軸4.6m、短軸2.8m、深度は0.5mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は自然堆積により埋没したと考えられる。遺物は床面よりやや浮いた状態で出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK416 (第146・147図、第222図802)

SK416は土坑(貯蔵穴)である。形状は長方形で、規模は長軸2.4m、短軸2.0m、最深深度は0.9mである。壁面は直立ぎみに立ち上がり、床面は平坦である。東から西にかけて階段状の掘方となっている。



土層から最下段を人為的に埋めた（6層）後は、自然埋没したとみられる。遺物は特に2～5層から多く出土しており、遺物の大部分が大形の破片でまとまって出土していることから、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK417（第148・149図）**

SK417は土坑（貯蔵穴）である。SH166に切られる。形状は長方形で、規模は長軸3.3m、短軸2.8m、深度は0.4mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。壁際で2本の柱穴を確認したが、中心軸から離れているため、遺構にはともなわないと判断した。

遺物は1層と2層の層境付近から多く出土しており、自然埋没の途中でまとめて廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK418（第150・151図）**

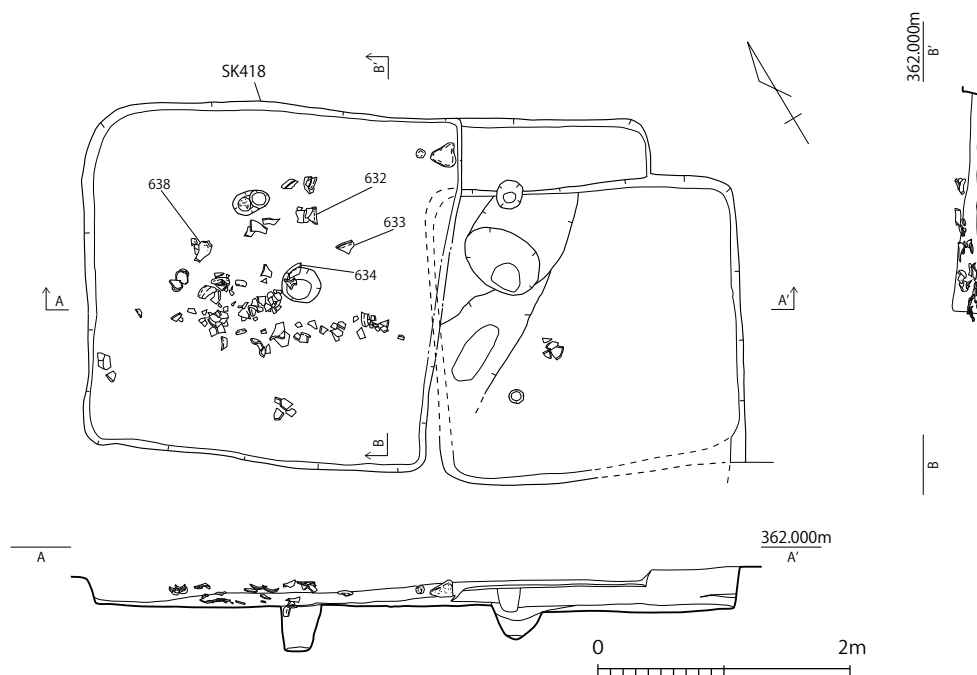
SK418は『四日市遺跡3』第15次調査でSH77として報告した遺構の北側部分である。調査の結果、柱穴が中心付近に1本しか確認できなかったため、SH77をSK418と改めて報告し、SH77は欠番とする。形状は方形で、規模は一辺が2.8m、深度は0.2mである。遺構図では切り合う東側の土坑をあわせて図化している。

遺物は床面からやや浮いた状態でまとまって出土しており、埋没過程でまとめて廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

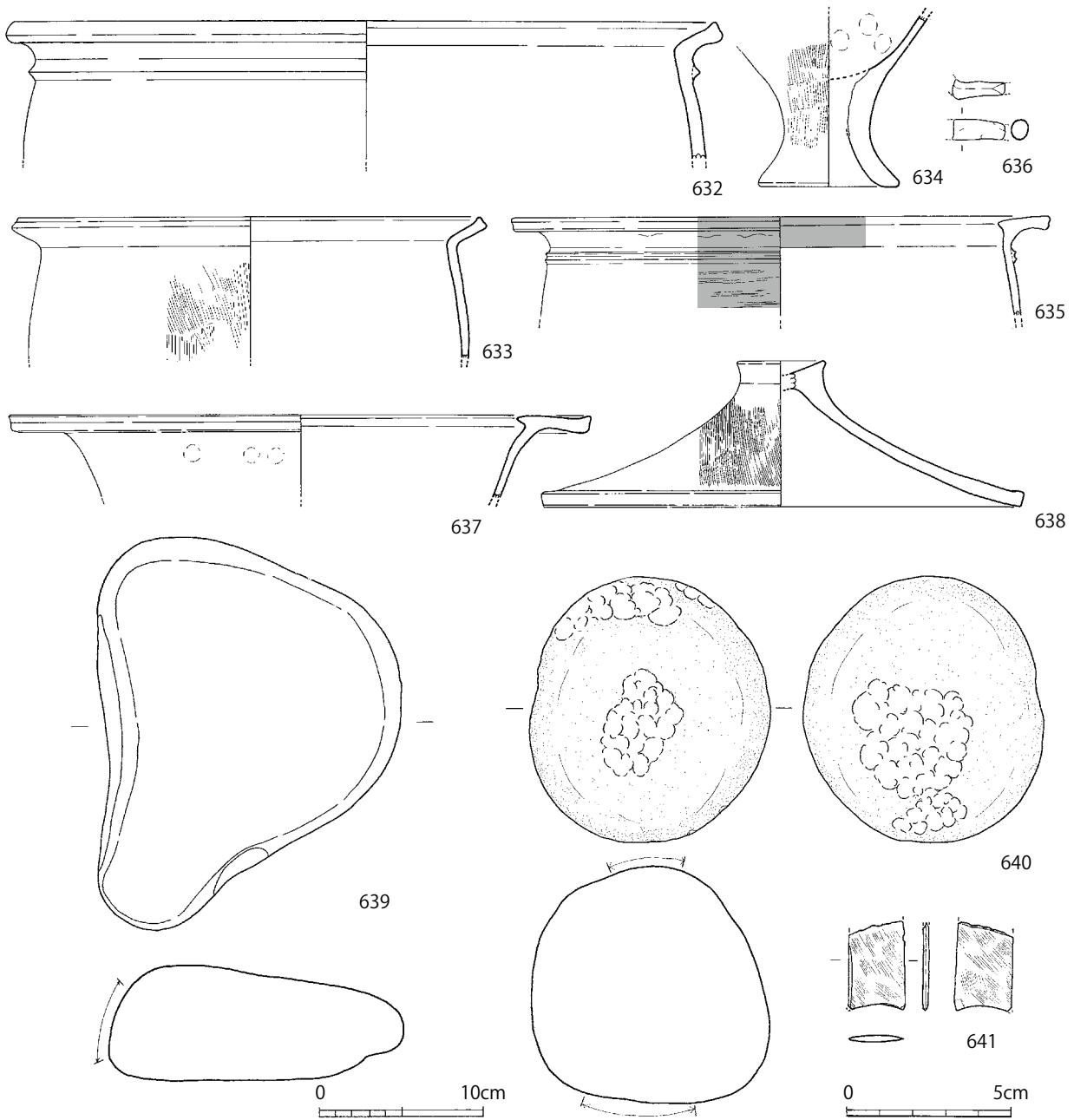
**SK419（第152図）**

SK419は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸2.6m、短軸1.9m、深度は1.15mである。土坑の各コーナーの外部には柱穴がともなうが、北方向の柱穴については削平を受けているため確認できなかった。

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は埋没の過程で混じり込んだとみられる甕・器台・高坏等の土器片がわずかに出土しているが、図示できる資料ではない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第150図 SK418実測図(1/60)



第151図 SK418出土遺物実測図

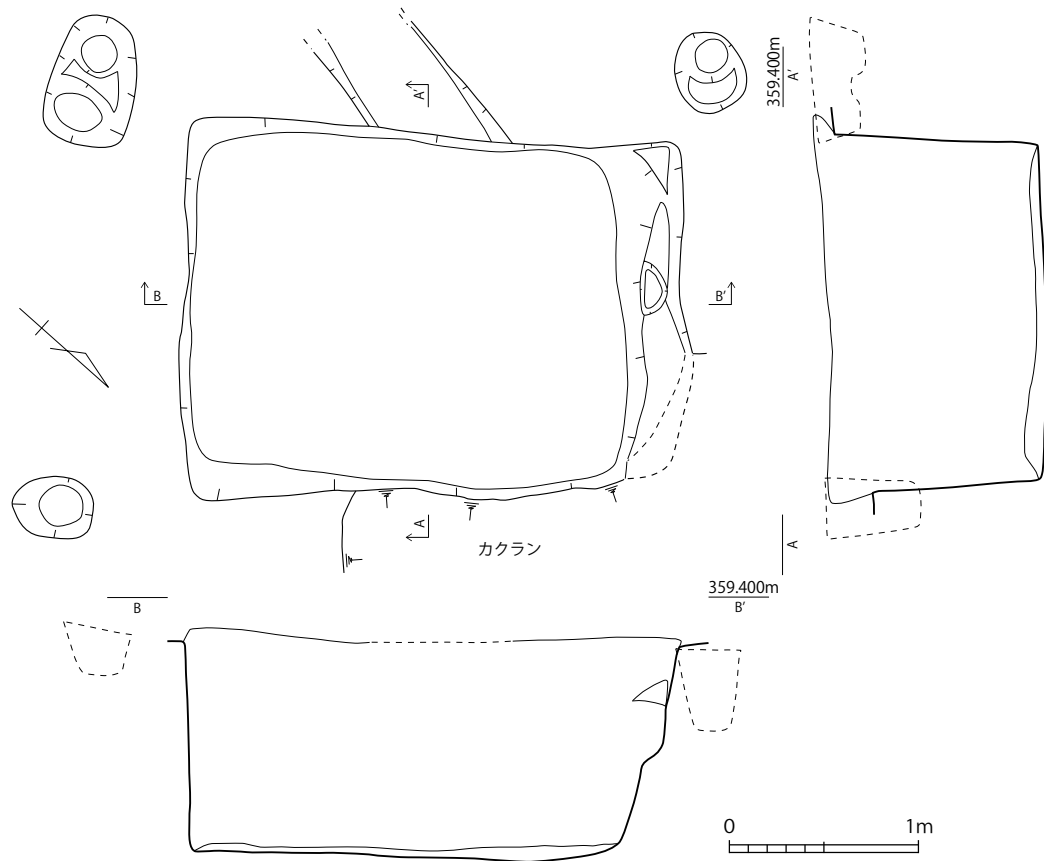
**SK420 (第153・154図)**

SK420は土坑（貯蔵穴）である。形状は歪な隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸1.6m、深度は0.6mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。土坑の各コーナーの外部に柱穴がともなう可能性もあったが、4本揃って確認できなかったことやコーナーからの距離が一定ではないことから柱穴とは判断しなかった。

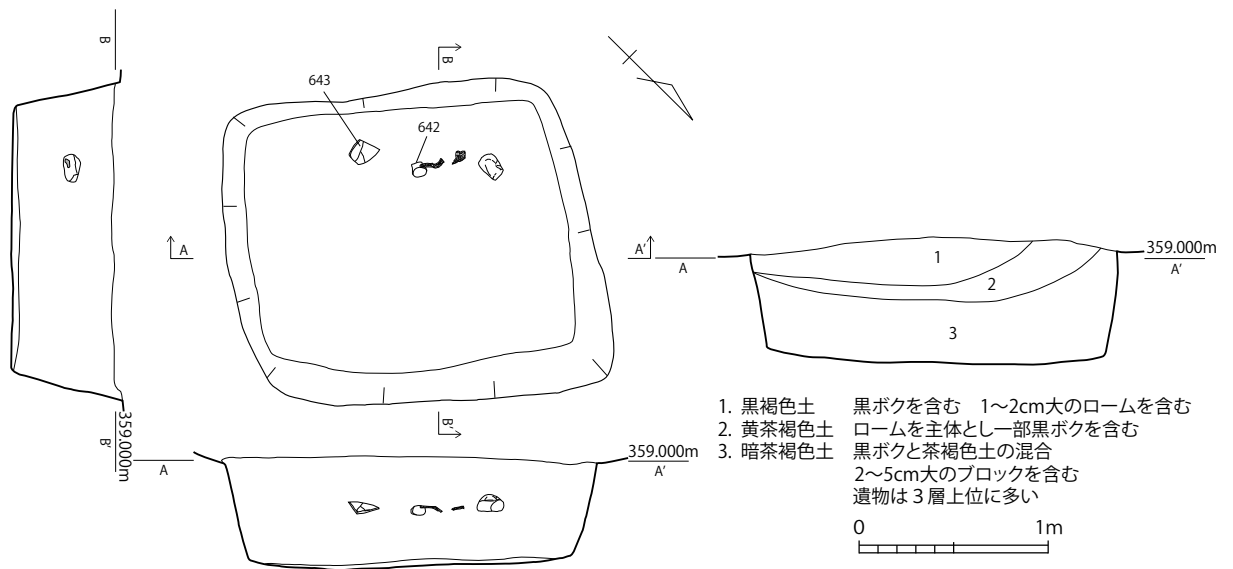
遺物は各層全般で出土しているが、特に2層と3層の間あたりから多く出土している。埋没の過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK421 (第155・157図)**

SK421は土坑（貯蔵穴）である。SK422と別の土坑に切られるため形状は明確ではないが、楕円形に近いものと推測できる。規模は長軸1.5m、深度は0.4mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。



第152図 SK419実測図(1/40)

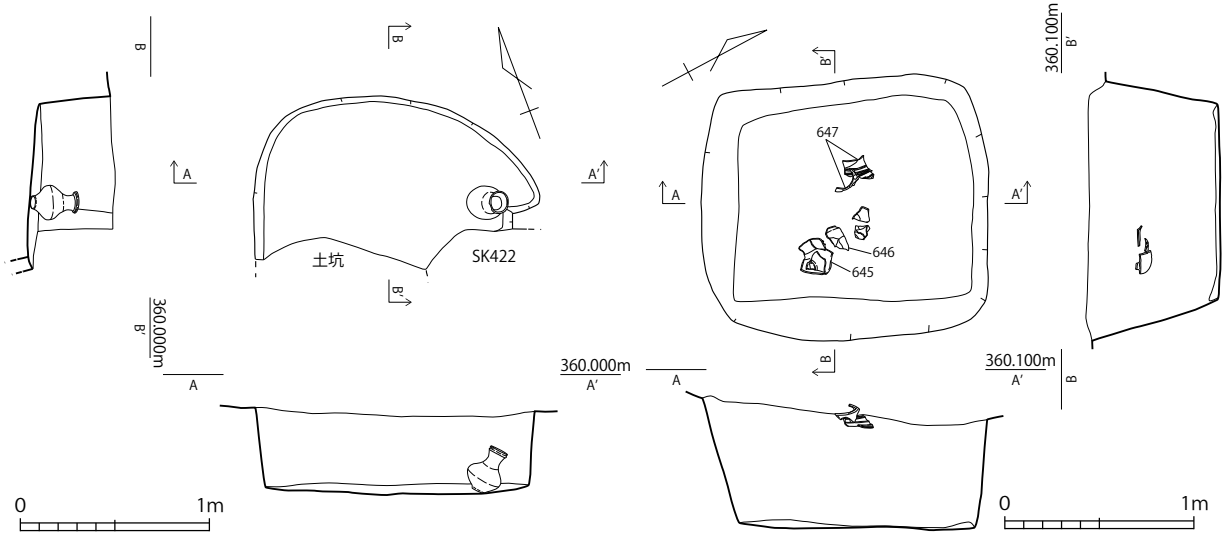


- 1. 黒褐色土 黒ボクを含む 1~2cm大のロームを含む
- 2. 黄茶褐色土 ロームを主体とし一部黒ボクを含む
- 3. 暗茶褐色土 黒ボクと茶褐色土の混合 2~5cm大のブロックを含む 遺物は3層上位に多い

第153図 SK420実測図(1/40)

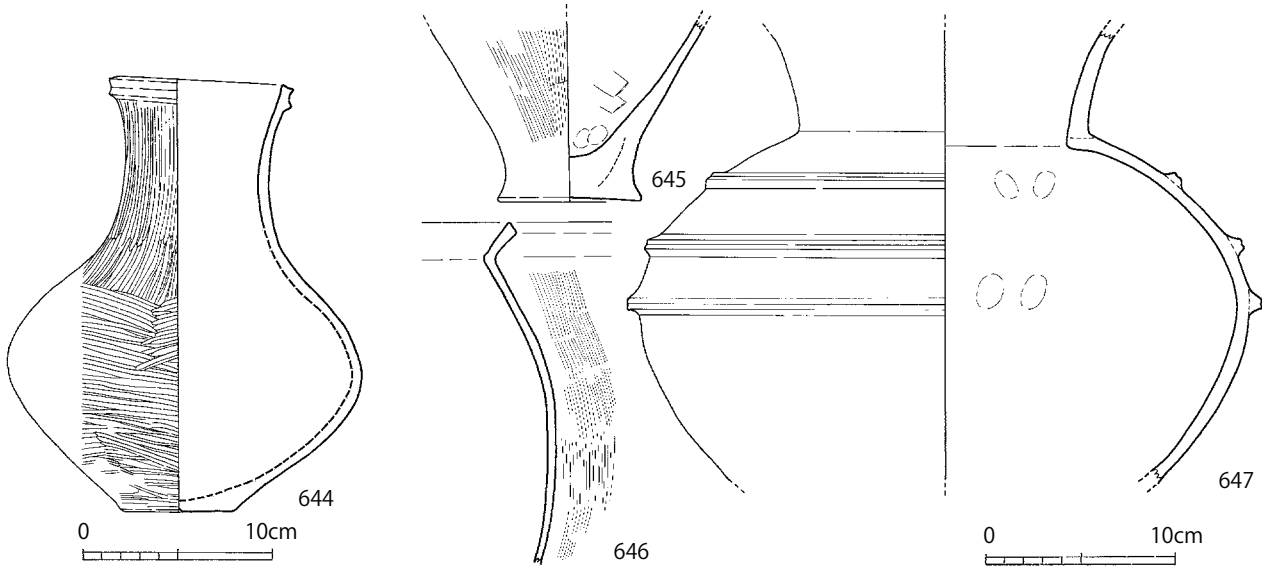


第154図 SK420出土遺物実測図



第155図 SK421実測図 (1/40)

第156図 SK422実測図 (1/40)



第157図 SK421出土遺物実測図

第158図 SK422出土遺物実測図

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は床面直上から完形の長頸壺(644)が1点出土した。廃絶にともない置かれたものとみられる。壺の中からは何も出土していない。この他では埋土中から甕などの小破片がわずかに混じり込んで出土したのみである。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

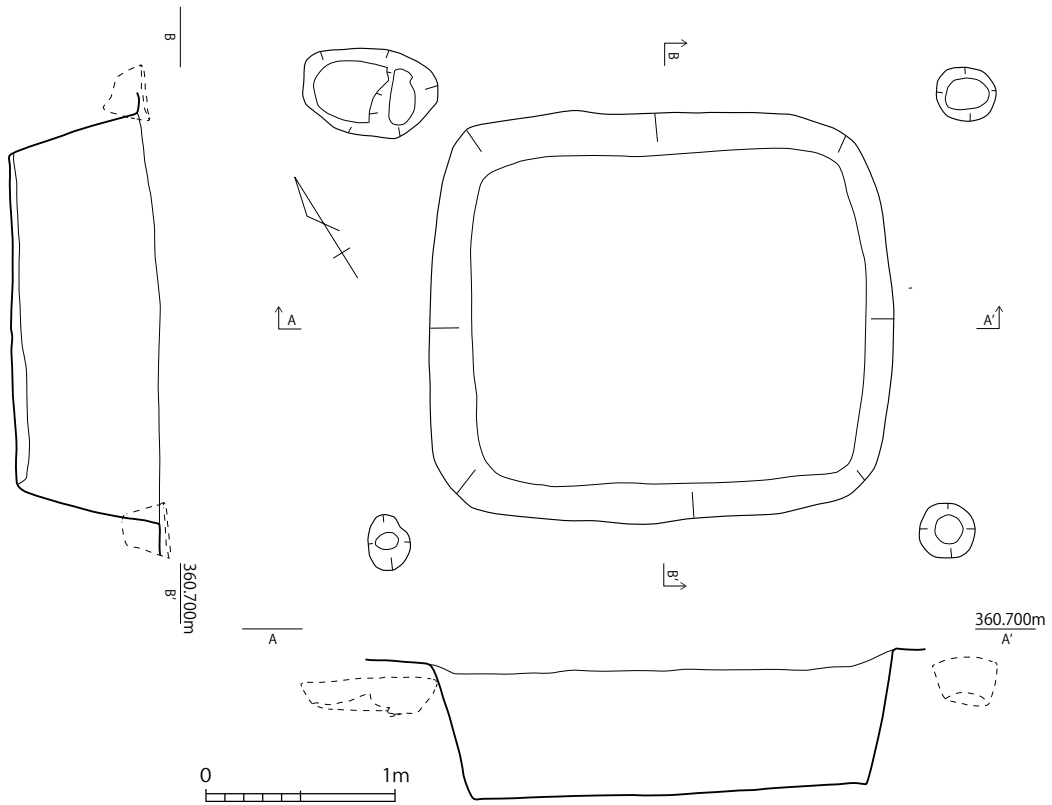
**SK422 (第156・158図)**

SK422は土坑(貯蔵穴)である。SK421を切る。形状は方形で、規模は一辺1.4～1.5m、深度は0.65mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

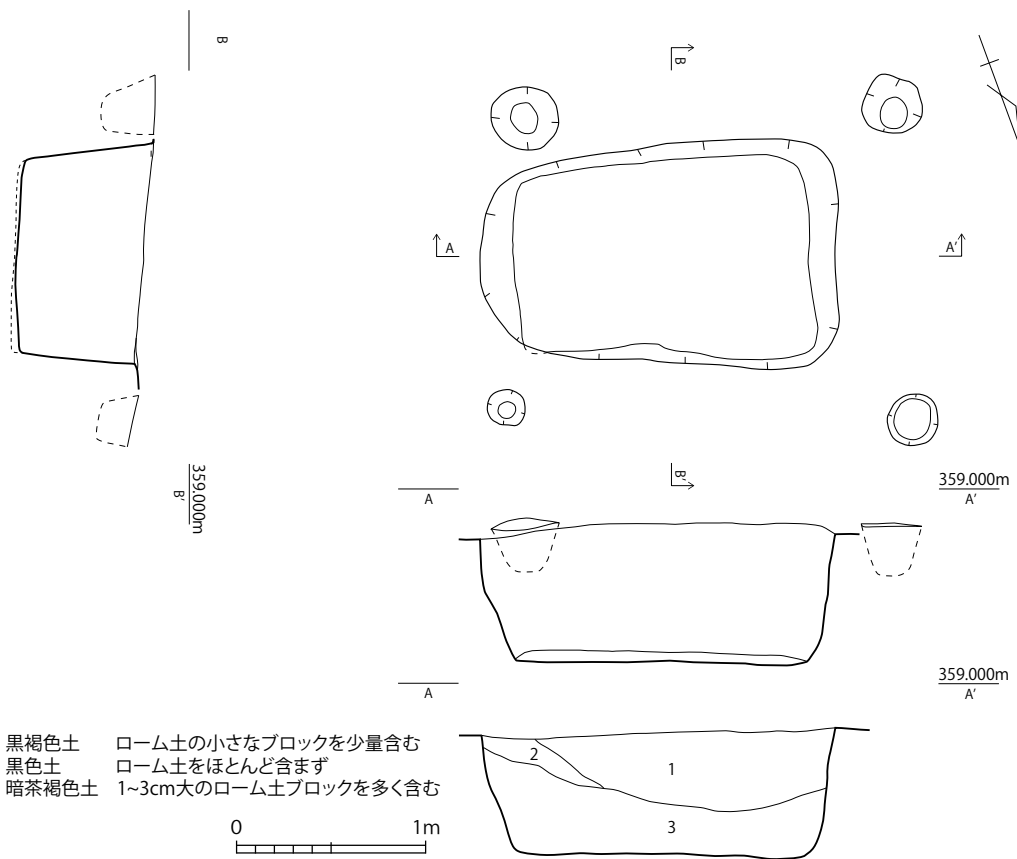
遺物は検出面に近い上部でまとまって出土しており、埋没の途中で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK423 (第159図)**

SK423は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.45m、短軸2.2m、深度は0.6mである。壁

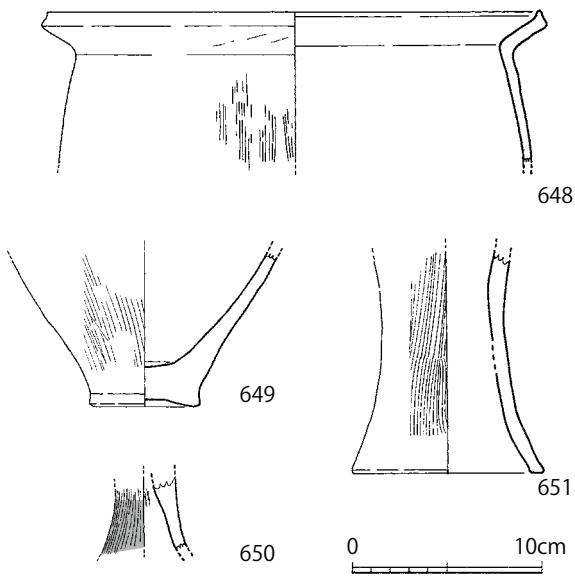


第159図 SK423実測図 (1/40)

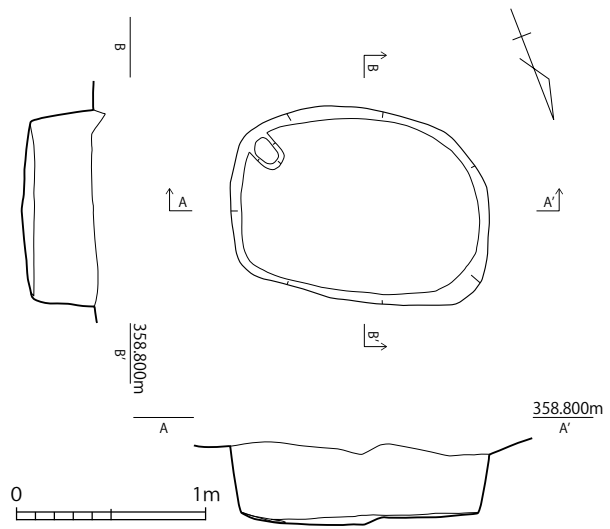


- 1. 黒褐色土 ローム土の小さなブロックを少量含む
- 2. 黒色土 ローム土をほとんど含まず
- 3. 暗茶褐色土 1~3cm大のローム土ブロックを多く含む

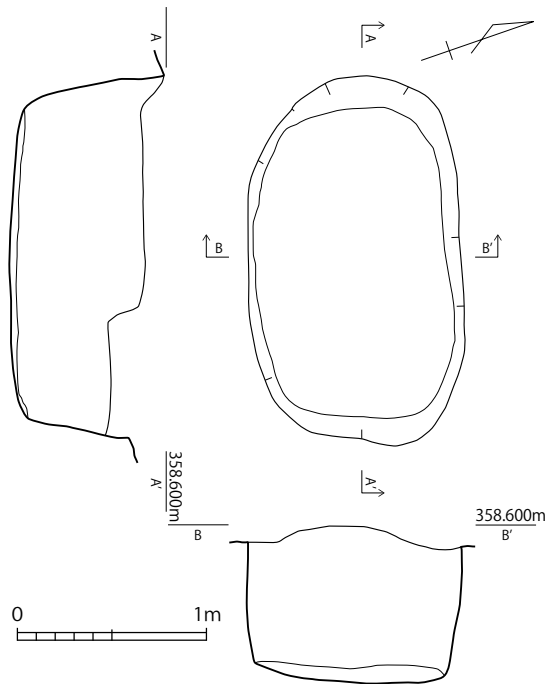
第160図 SK424実測図 (1/40)



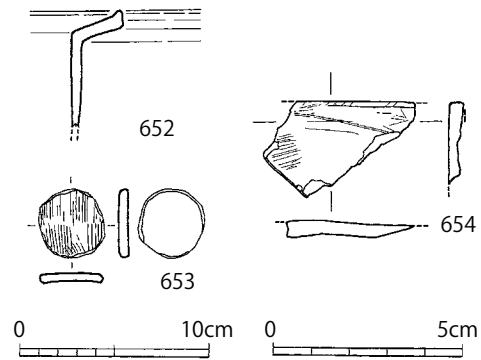
第161図 SK424出土遺物実測図



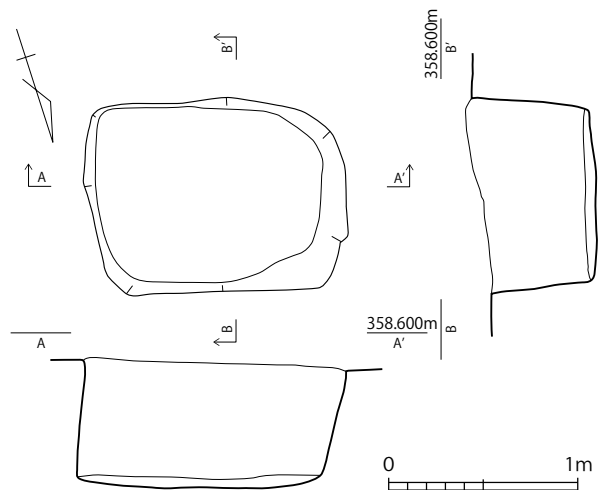
第162図 SK425実測図 (1/40)



第163図 SK426実測図 (1/40)



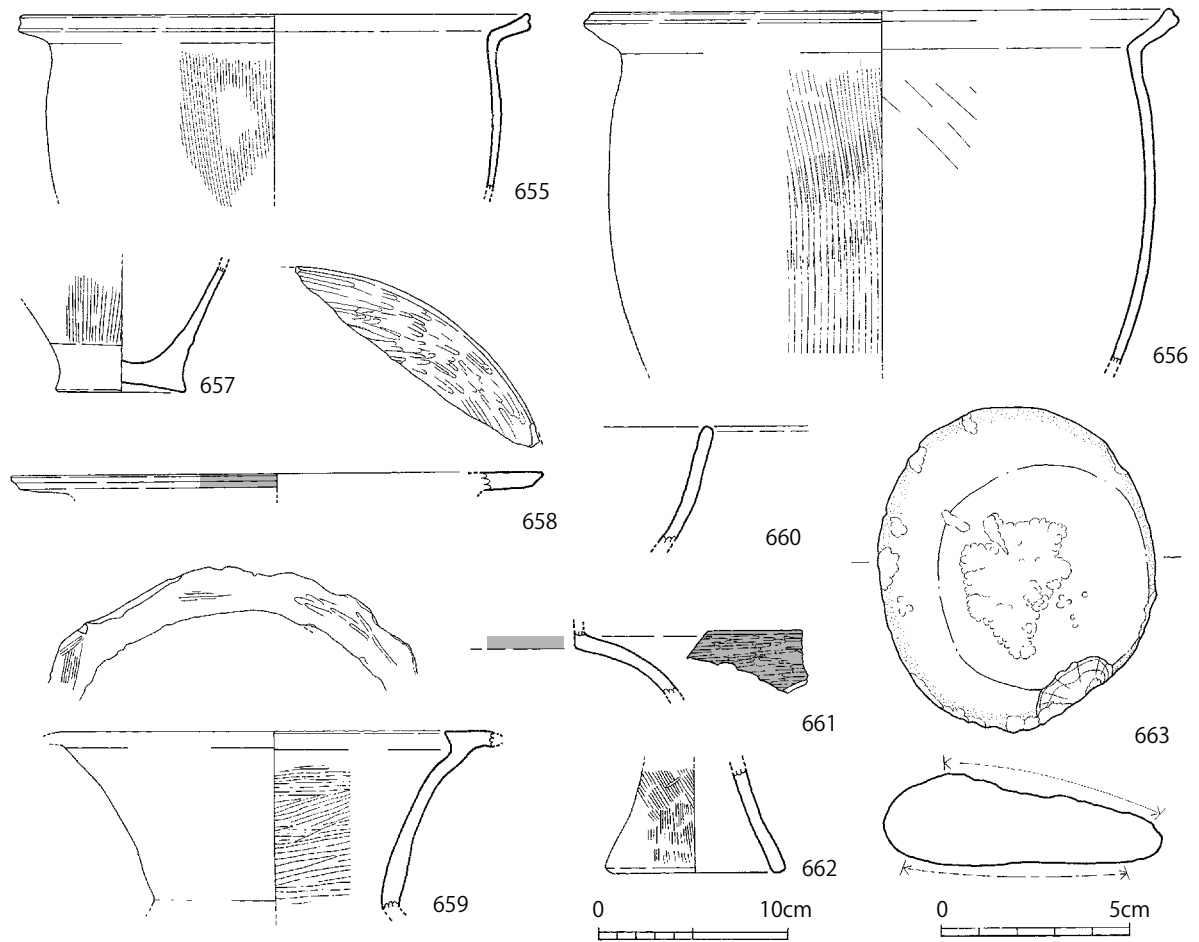
第164図 SK426出土遺物実測図



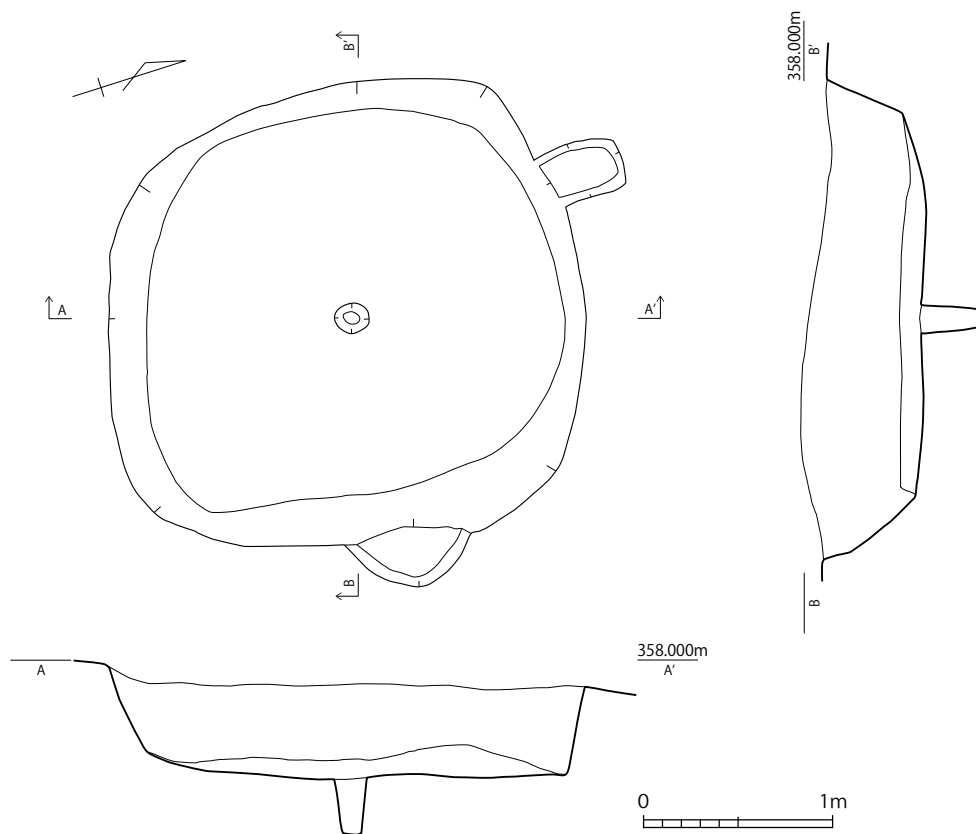
第165図 SK427実測図 (1/40)

面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。土坑の各コーナーの外部に柱穴がある。

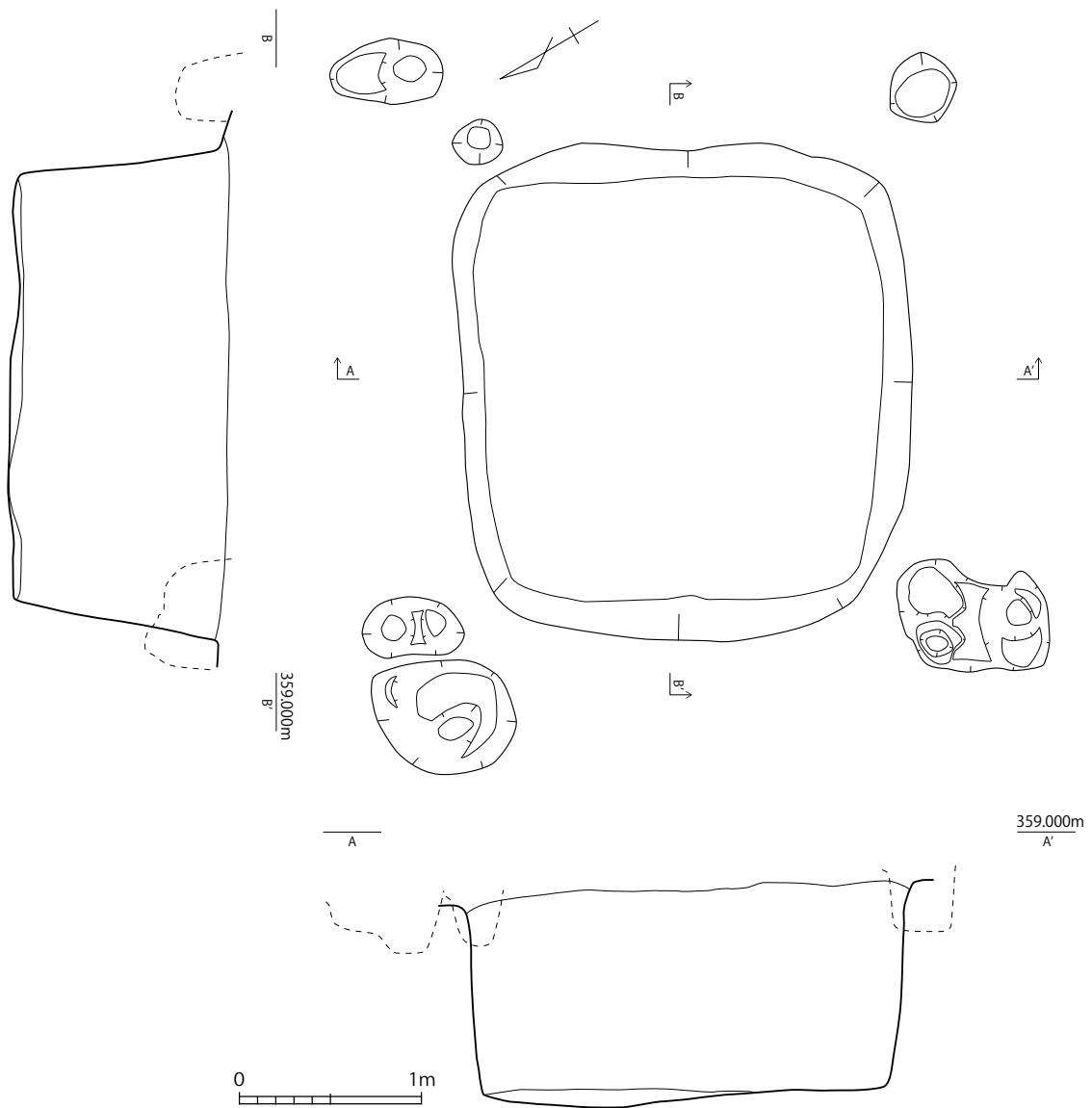
遺物は埋土全体から出土することから、埋没の過程で混入したものと思われる。しかし壺・須玖式甕・器台等の小破片がわずかに出土する程度であり、図化できるような資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



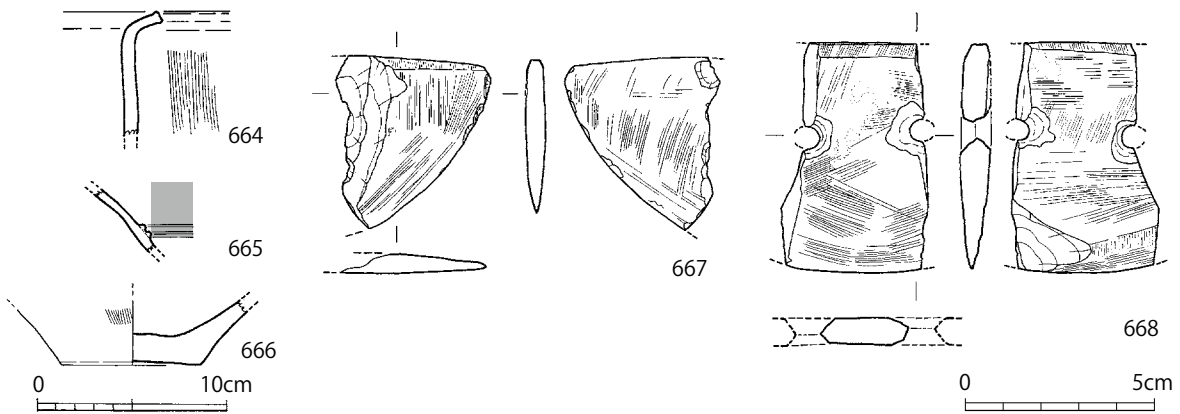
第166図 SK427出土遺物実測図



第167図 SK428実測図 (1/40)

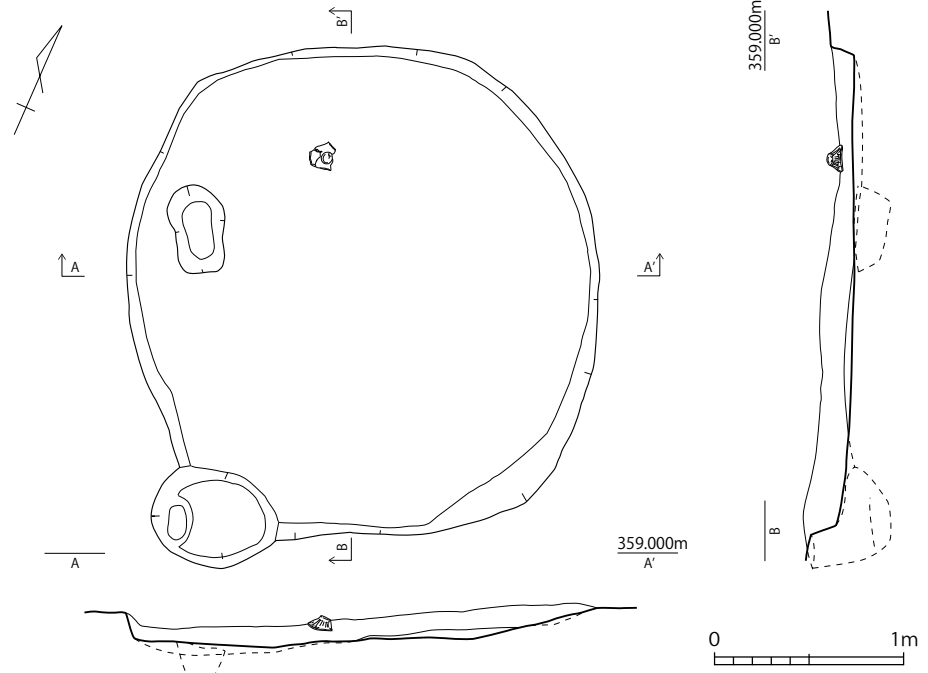


第168図 SK429実測図 (1/40)

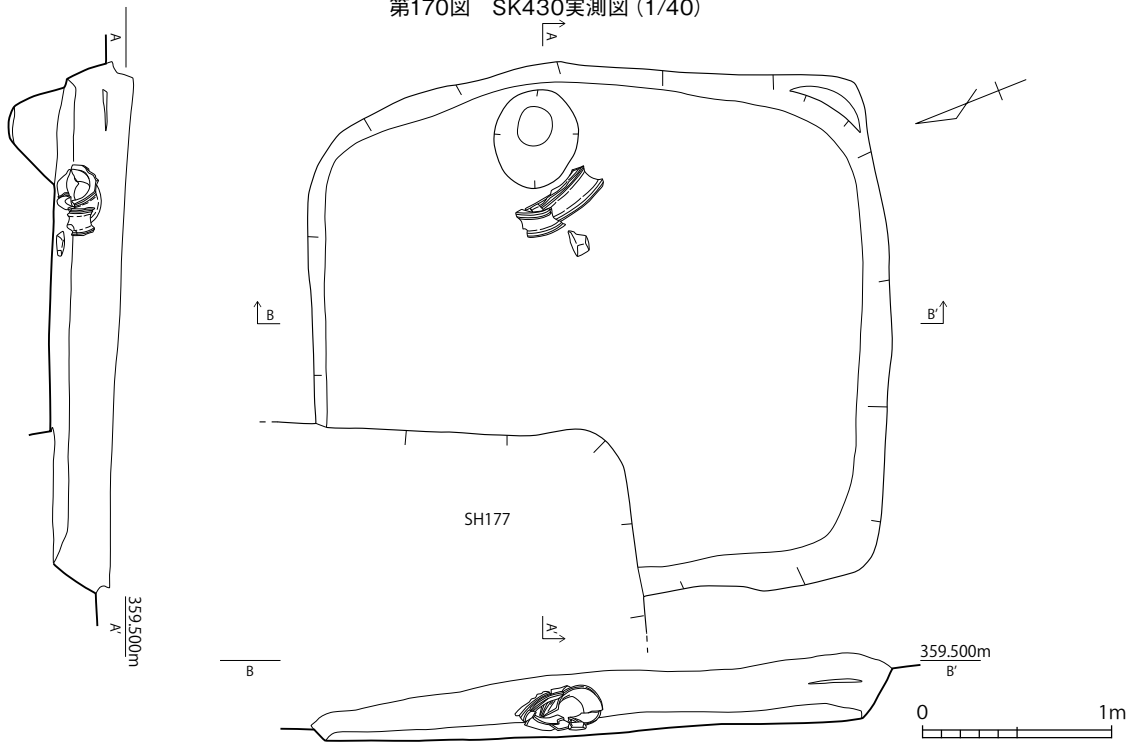


第169図 SK429出土遺物実測図

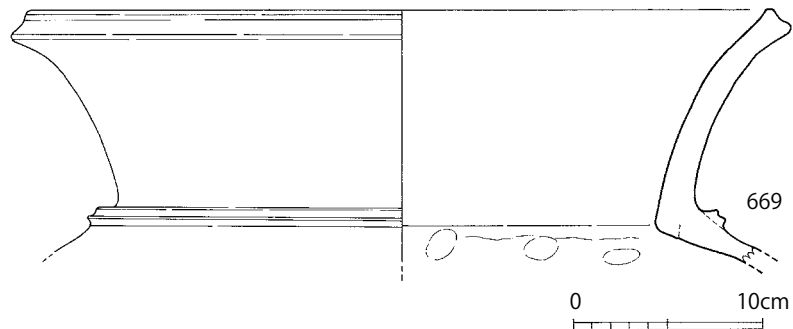




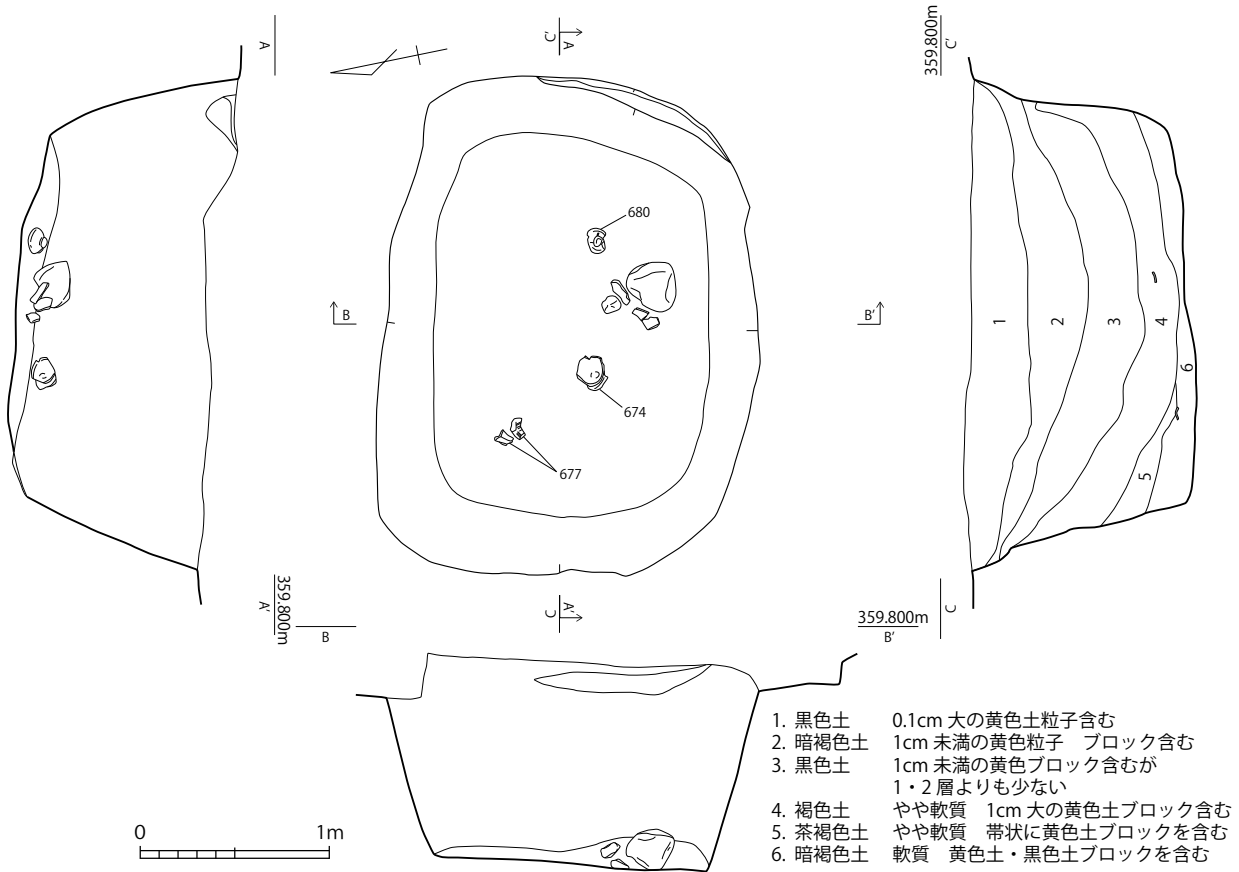
第170図 SK430実測図 (1/40)



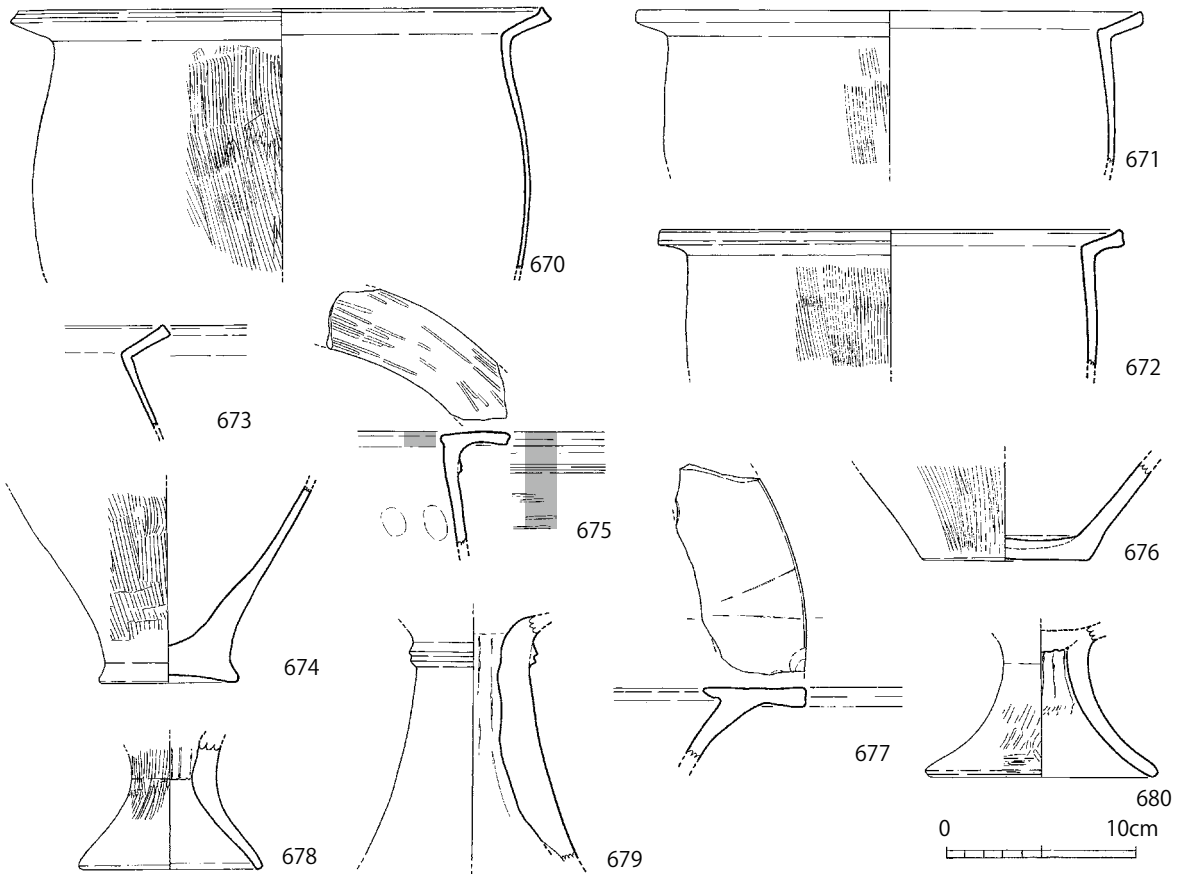
第171図 SK431実測図 (1/40)



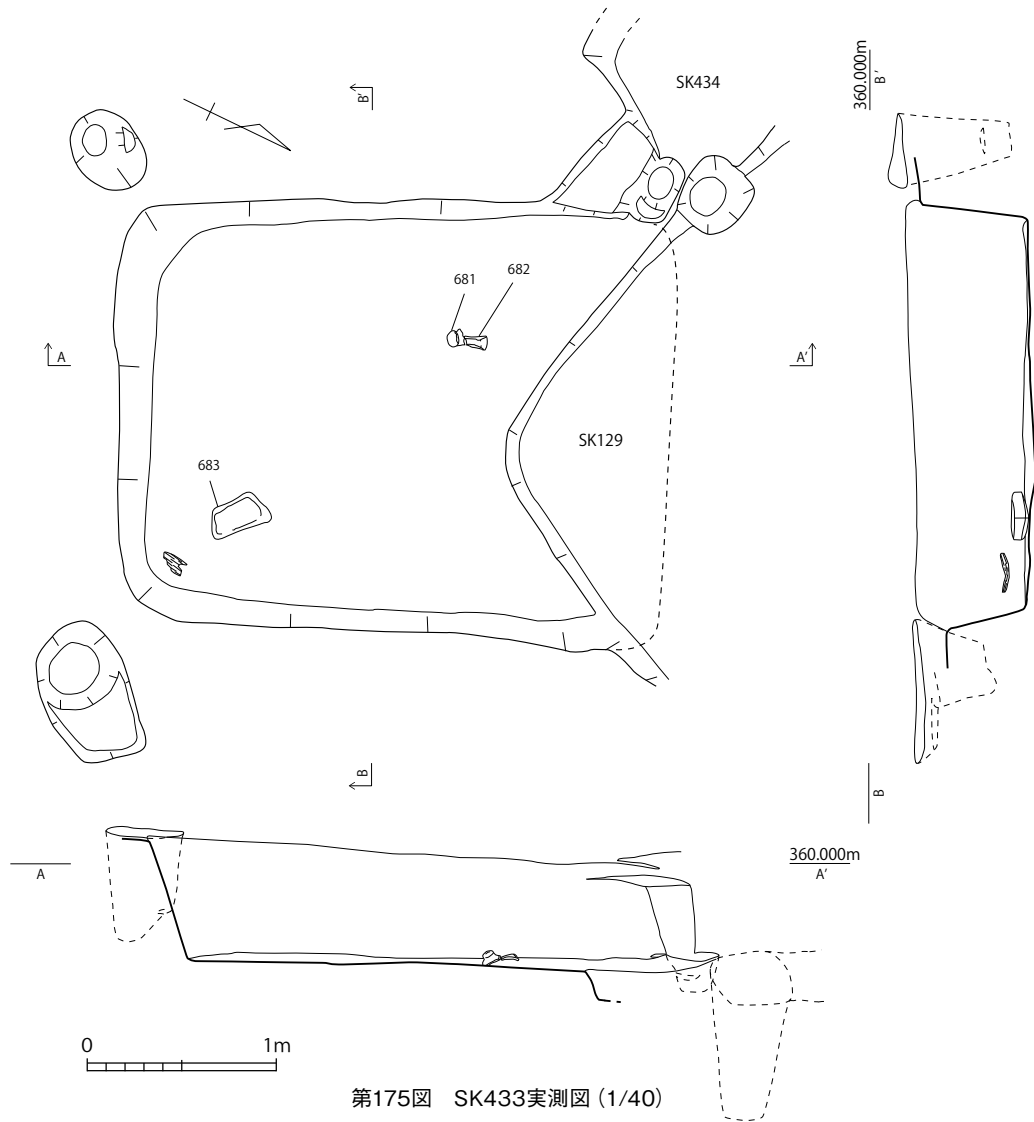
第172図 SK431出土遺物実測図



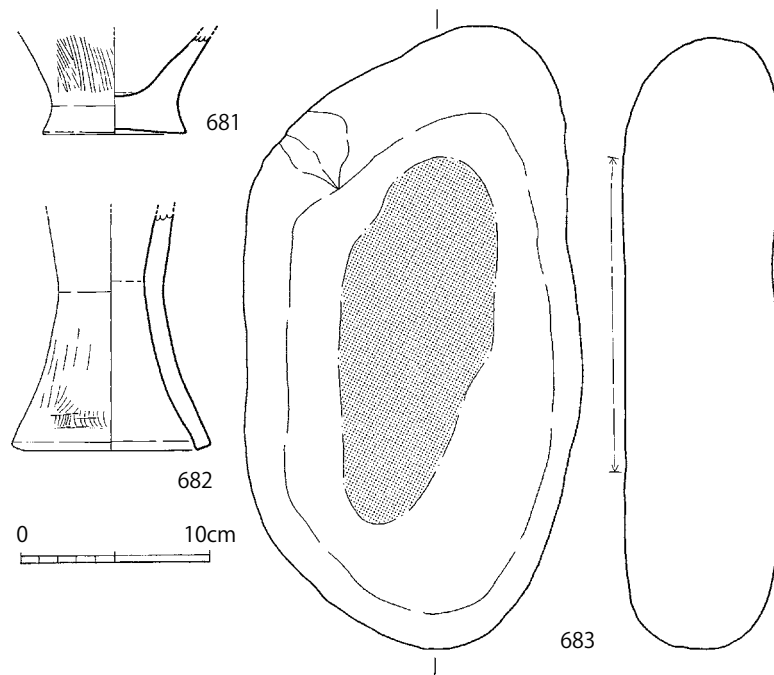
第173図 SK432実測図 (1/40)



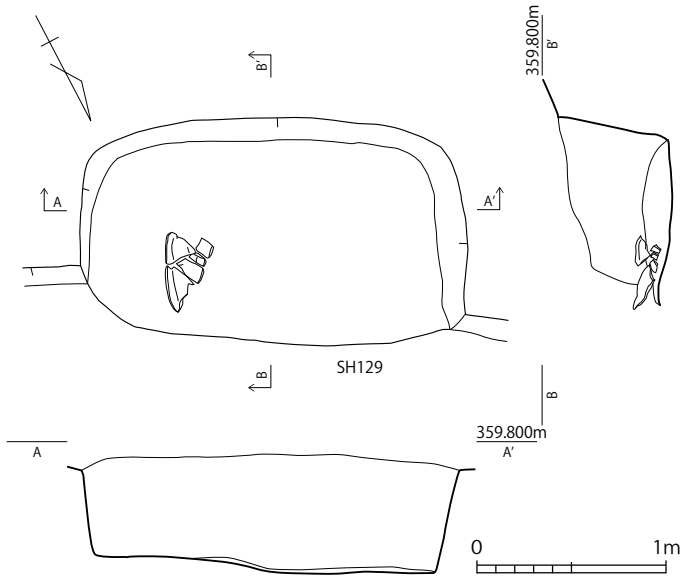
第174図 SK432出土遺物実測図



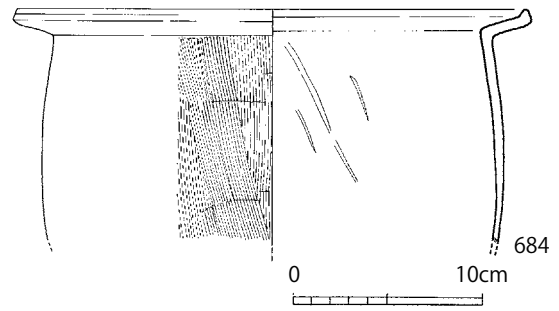
第175図 SK433実測図 (1/40)



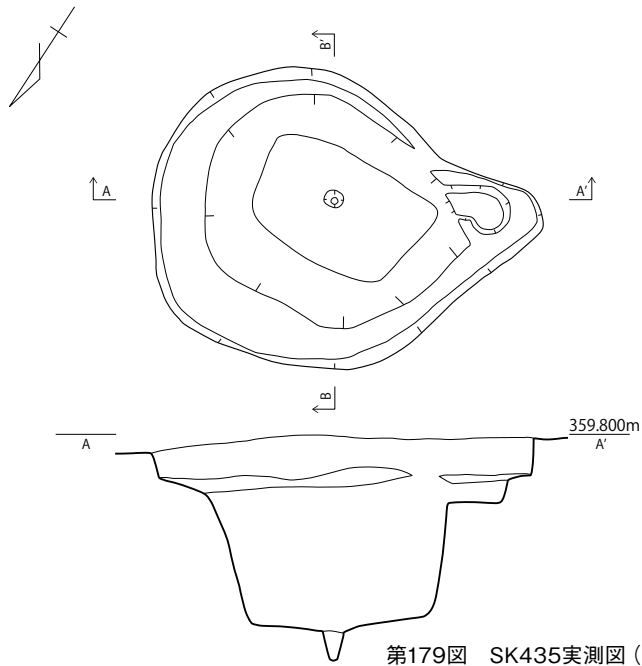
第176図 SK433出土遺物実測図



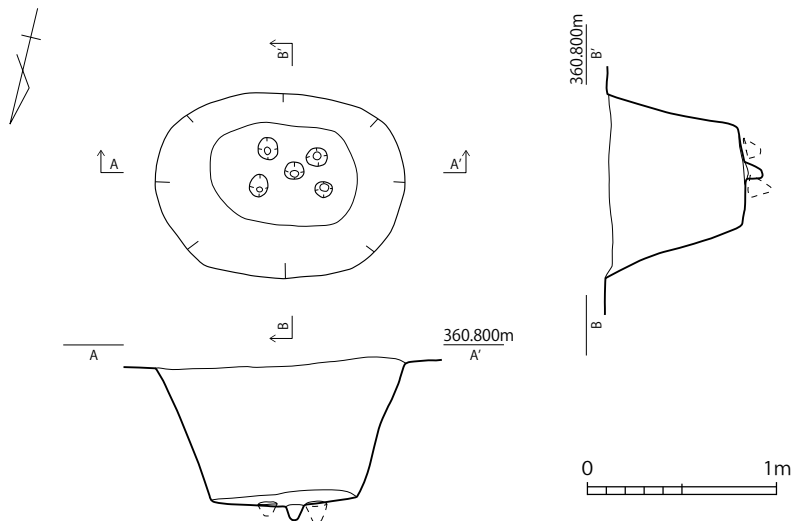
第177図 SK434実測図 (1/40)



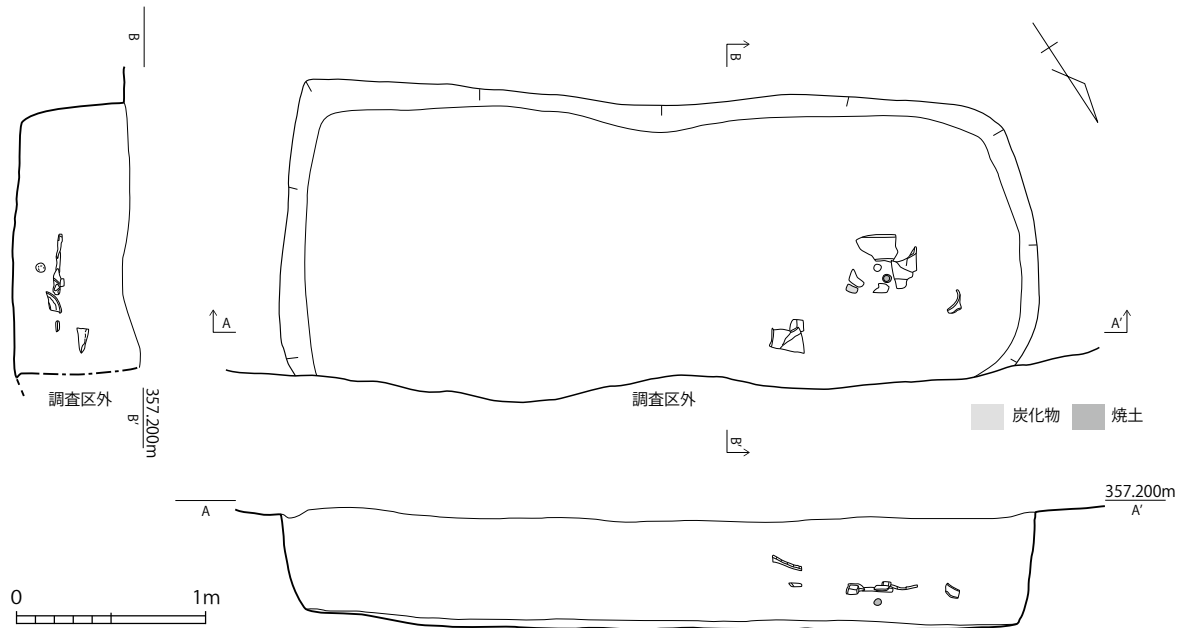
第178図 SK434出土遺物実測図



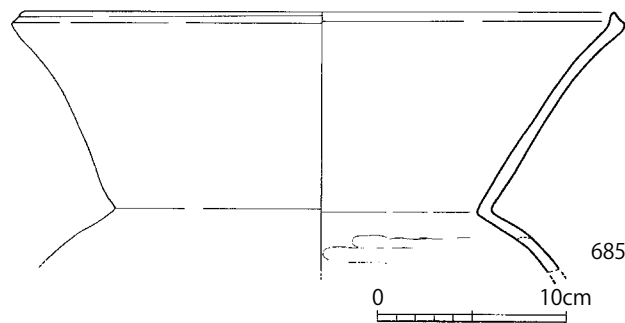
第179図 SK435実測図 (1/40)



第180図 SK436実測図 (1/40)



第181図 SK437実測図 (1/40)



第182図 SK437出土遺物実測図

**SK424 (第160・161図)**

SK424は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸0.9～1.2m、深度は0.7mである。この土坑の各コーナーの外部には柱穴が配置されている。柱穴は東側2本が土坑東壁の延長線上に位置するが、西側2本は土坑西壁からやや離れた位置にある。柱穴はいずれも深度が浅い。

土層の観察から自然に埋没したと考えられるが、特に東方向からの土の流入が顕著であった。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。また、後述するSK426とは規模や軸の方向が同じで、並行する位置にあることを考慮すると、同時併存した可能性がある関連性の強い遺構と考えられる。

**SK425 (第162図)**

SK425は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.35m、短軸1.0m、深度は0.4mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

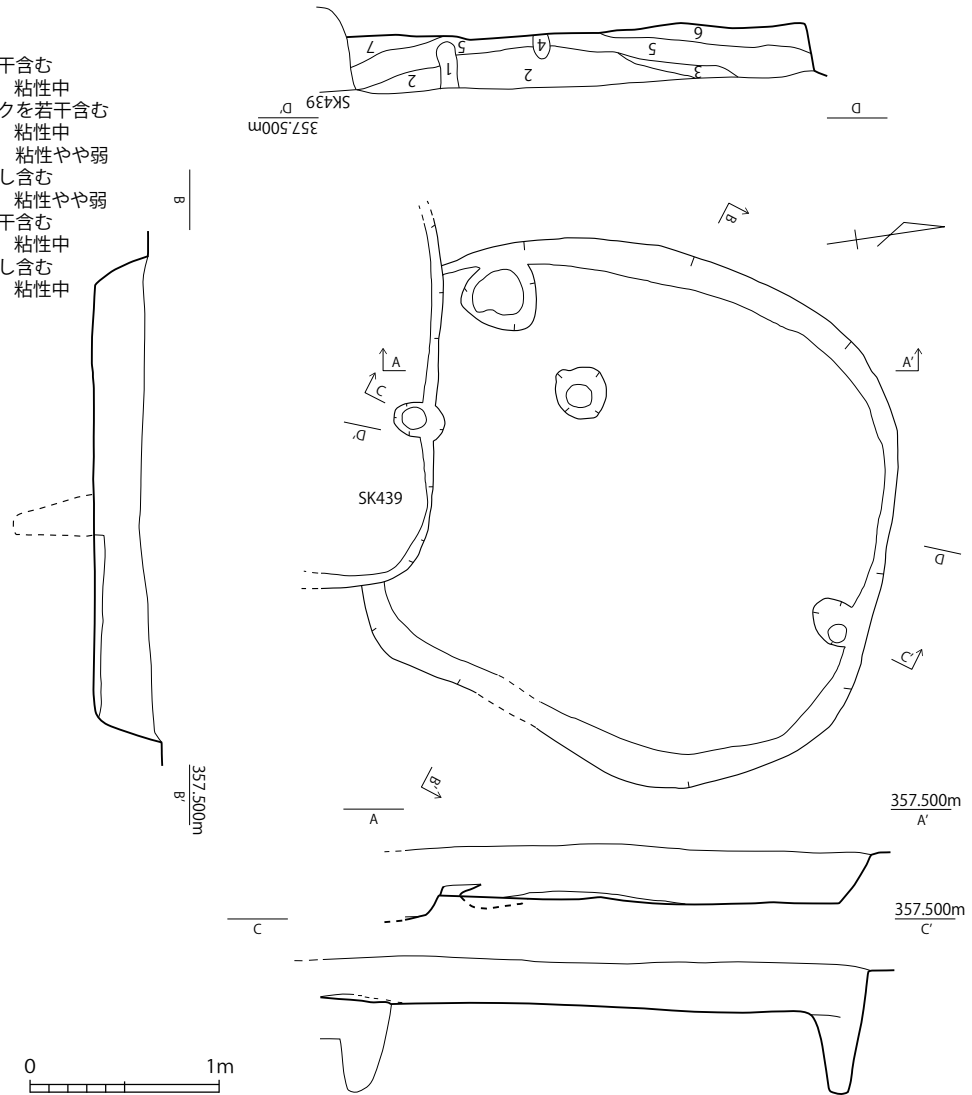
遺物は出土していないが、同規模・同軸で、並行した位置にあるSK427と同時併存した可能性を考えるならば、埋没時期は弥生時代中期後半段階と推測される。

**SK426 (第163・164図)**

SK426は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸1.15m、深度は0.75mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。SK424と規模や軸の方向が同じで、並行した位置にあること

第4章 第16次調査

- 1. 黒褐色砂質土 しまりやや弱  
粘性中
- 2. 黒褐色砂質土 黄褐色粒を若干含む  
しまりやや強 粘性中
- 3. 暗褐色砂質土 黄褐色ブロックを若干含む  
しまりやや強 粘性中
- 4. 黄褐色砂質土 しまりやや弱 粘性やや弱
- 5. 黒褐色砂質土 黄褐色粒を少し含む  
しまりやや強 粘性やや弱
- 6. 暗褐色砂質土 黄褐色粒を若干含む  
しまりやや強 粘性中
- 7. 暗褐色砂質土 黄褐色粒を少し含む  
しまりやや強 粘性中



第183図 SK438実測図 (1/40)

から関連性の強い遺構と考えられる。SK424では外部に4本柱を有していたが、SK426では柱穴を確認することはできなかった。

土層図はないが、埋土の観察から西側から埋土が流入し自然埋没したことがわかる。遺物は埋土中に混じり込んだとみられる小破片がわずかに出土した程度である。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK427 (第165・166図)**

SK427は土坑である。平面は隅丸長方形で、規模は長軸1.4m、短軸1.0m、深度は0.65mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。SK425との関連性が考えられる遺構である。

遺物は比較的多く出土しているが、破片が多く、まとまって出土していない。埋没過程で混じり込んだものとみられる。出土遺物から弥生時代中期後半段階に埋没したと考えられる。

**SK428 (第167図)**

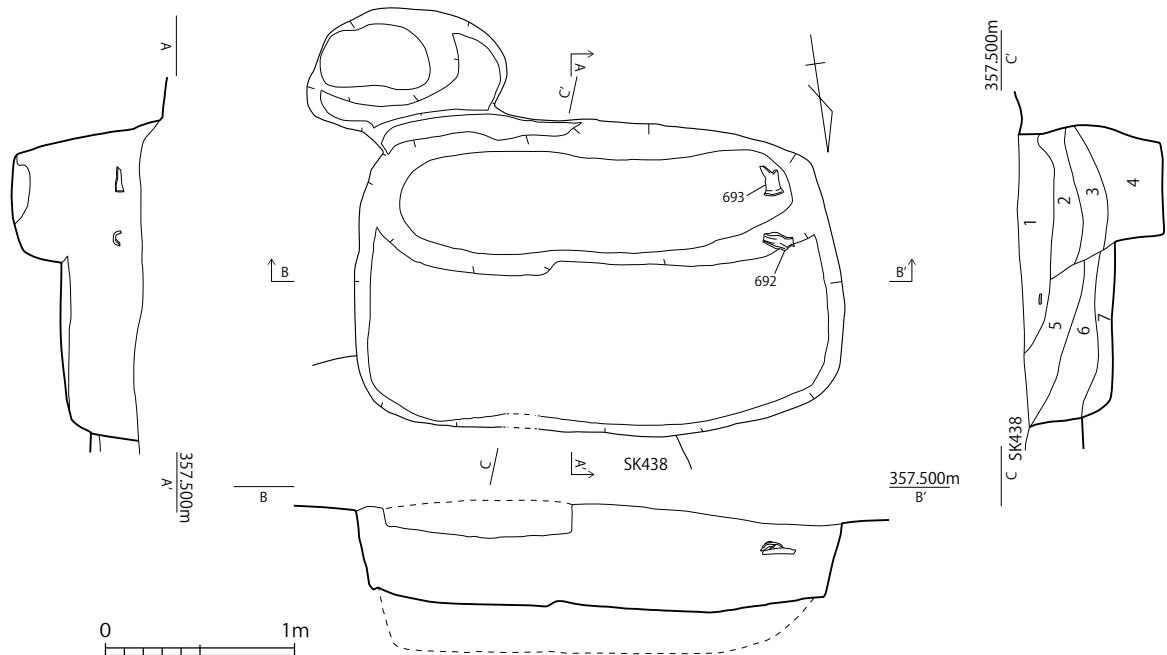
SK428は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸方形で、規模は一辺2.4～2.5m、深度は0.5mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。床面中央部に柱穴が1本あり、覆屋などの支柱と考えられる。

図示していないが、埋土はレンズ状に堆積していたことから、自然に埋没したとみられる。遺物は小破片となっ

た土器片が、床面から浮いた状態で多数出土しており、埋没の過程で混じり込んだものとみられる。図示できる資料はないが、出土遺物から弥生時代中期後半段階に埋没したと考えられる。

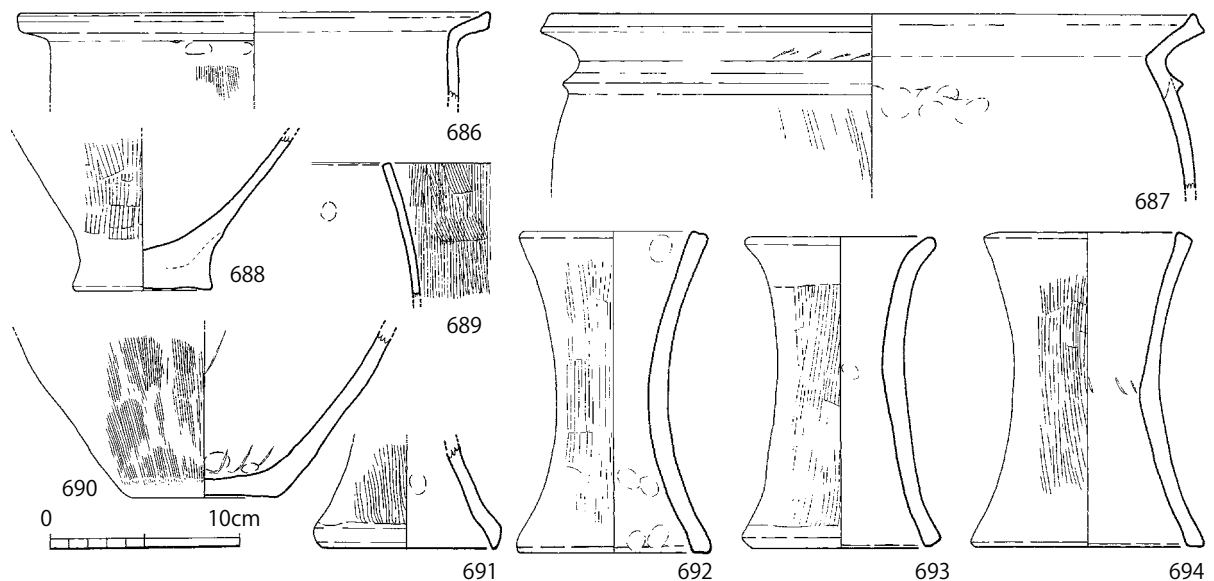
SK429 (第168・169図)

SK429は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸27m、短軸25m、深度は1.15mである。土坑の各コーナーの外部には柱穴が配置されている。南柱穴以外は近接して複数の柱穴が確認できるため、柱の補強ないしは立

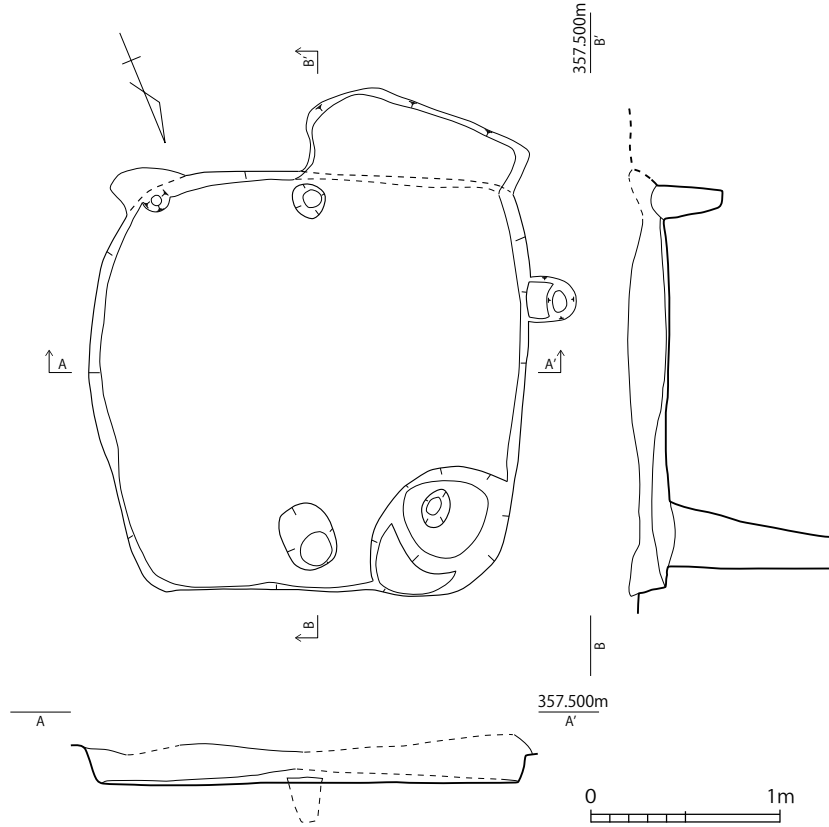


- |           |                              |           |                            |
|-----------|------------------------------|-----------|----------------------------|
| 1. 黒褐色砂質土 | 黄褐色ブロックが少し混じる<br>しまりやや強 粘性中  | 5. 暗褐色砂質土 | 黄褐色ブロックを少し含む<br>しまりやや強 粘性中 |
| 2. 黒褐色砂質土 | 黄褐色粒が若干混じる<br>しまりやや強 粘性中     | 6. 黒褐色砂質土 | 黄褐色粒を若干含む<br>しまりやや強 粘性中    |
| 3. 暗褐色砂質土 | 黄褐色ブロックを多く含む<br>しまりやや弱 粘性やや弱 | 7. 暗褐色砂質土 | 黄褐色粒を若干含む<br>しまり強 粘性やや弱    |
| 4. 暗褐色砂質土 | 黄褐色粒を少し含む<br>しまりやや弱 粘性やや弱    |           |                            |

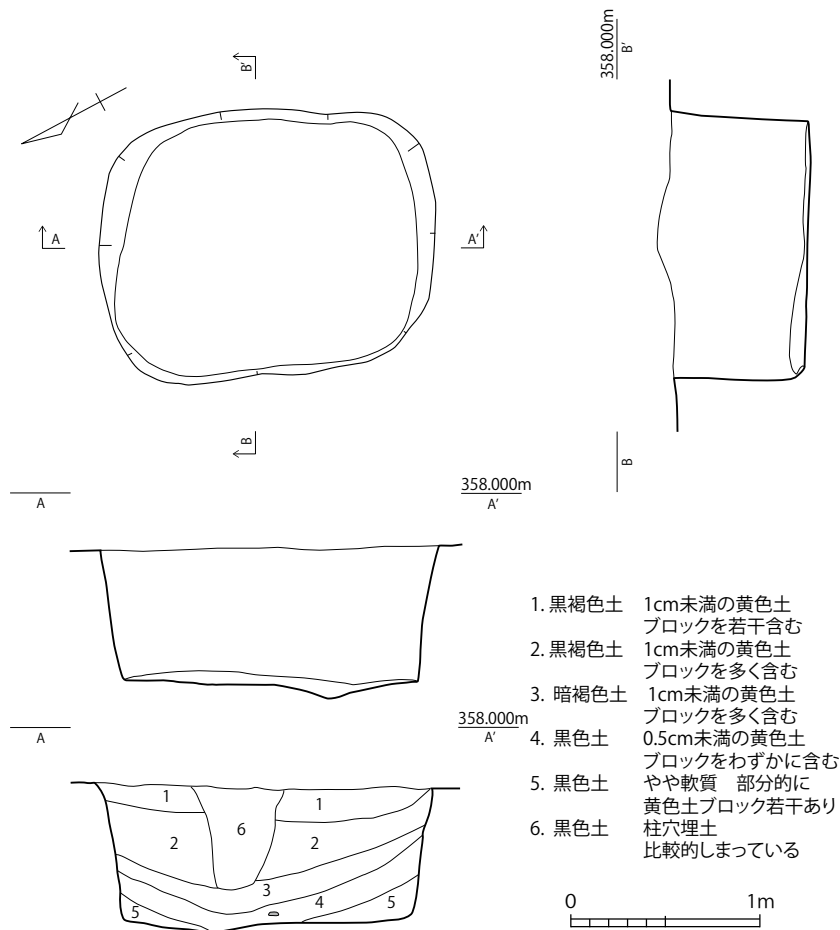
第184図 SK439実測図 (1/40)



第185図 SK439出土遺物実測図



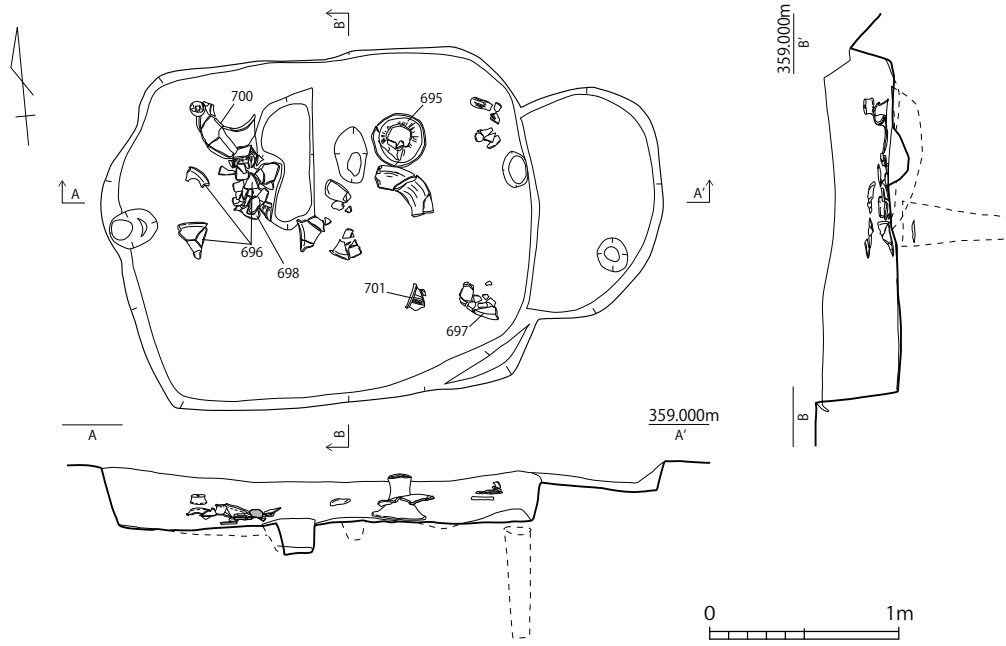
第186図 SK440実測図 (1/40)



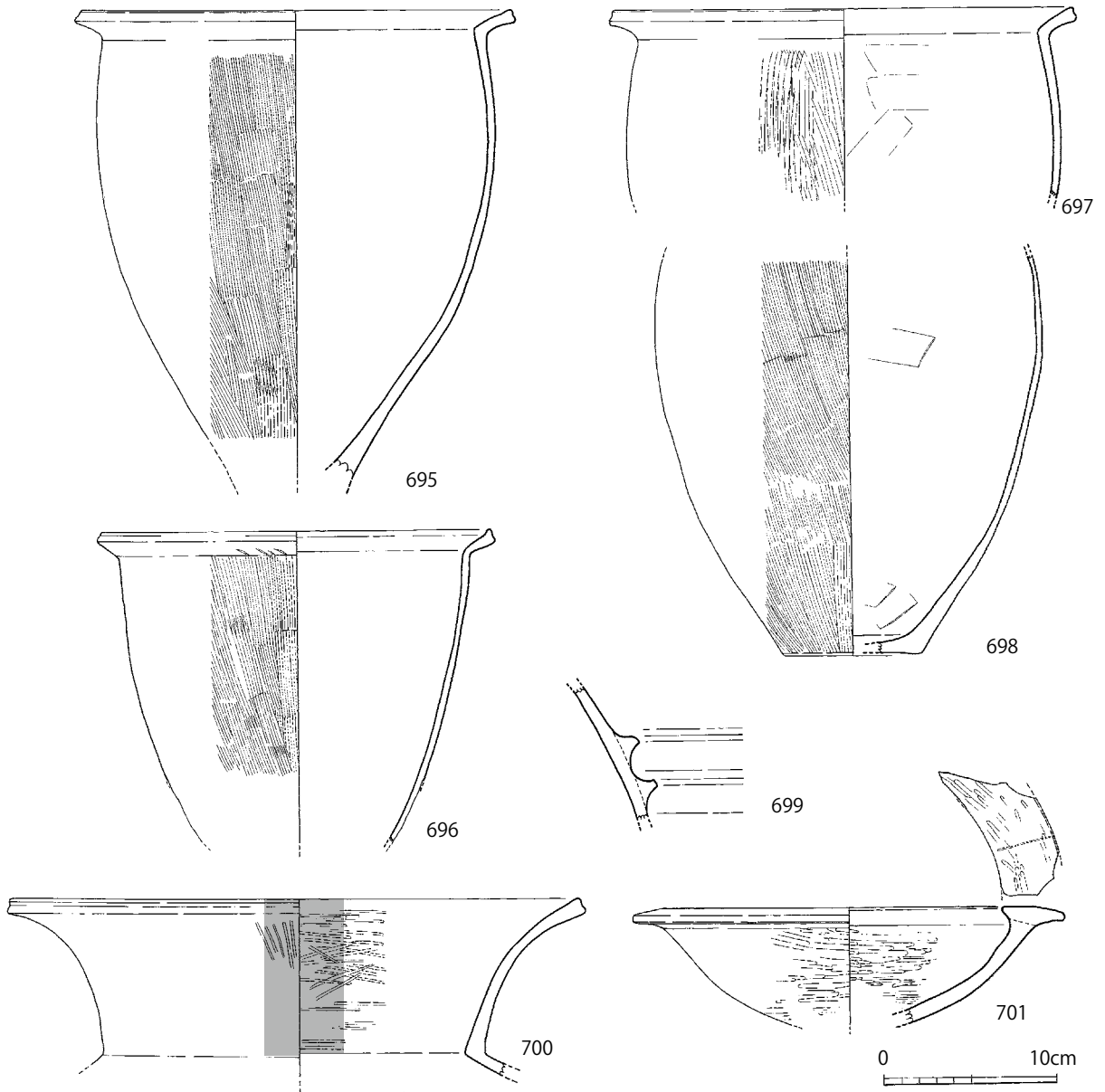
1. 黒褐色土 1cm未満の黄色土  
ブロックを若干含む
2. 黒褐色土 1cm未満の黄色土  
ブロックを多く含む
3. 暗褐色土 1cm未満の黄色土  
ブロックを多く含む
4. 黒色土 0.5cm未満の黄色土  
ブロックをわずかに含む
5. 黒色土 やや軟質 部分的に  
黄色土ブロック若干あり
6. 黒色土 柱穴埋土  
比較的しまっている

第187図 SK441実測図 (1/40)

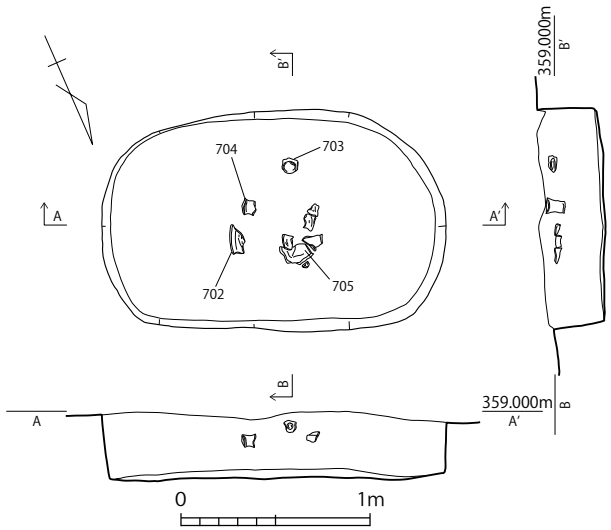




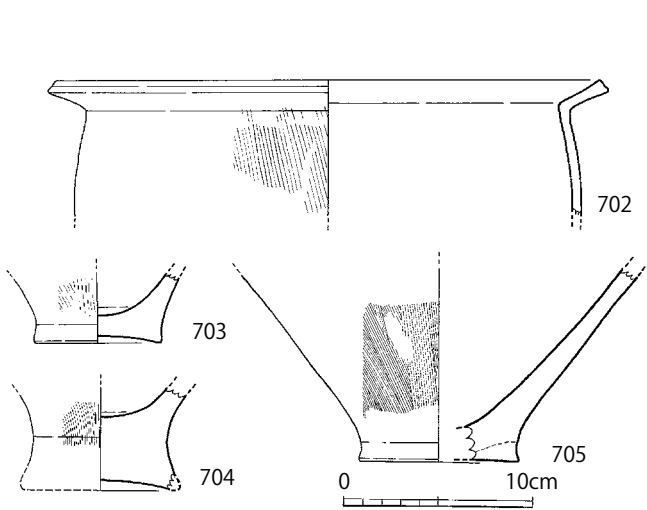
第188図 SK442実測図 (1/40)



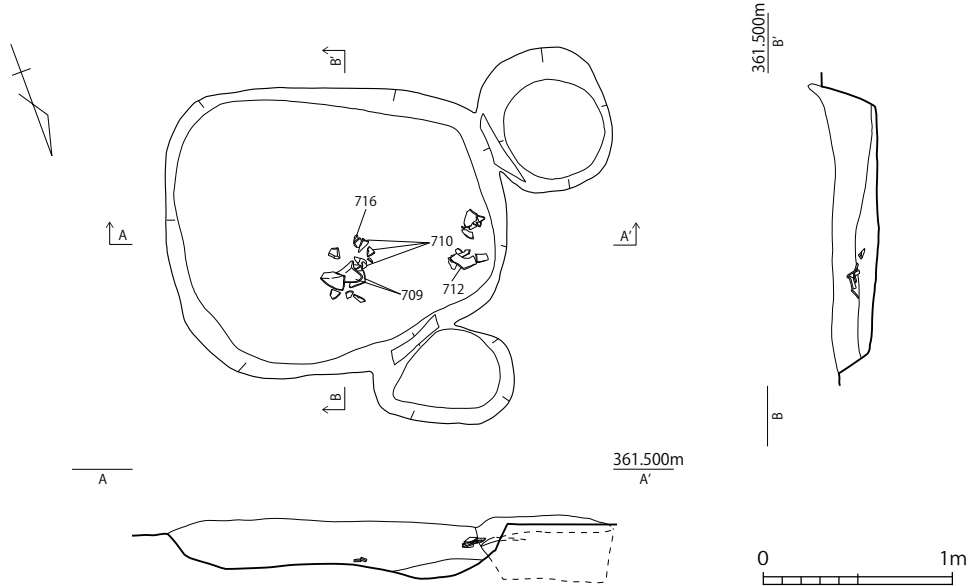
第189図 SK442出土遺物実測図



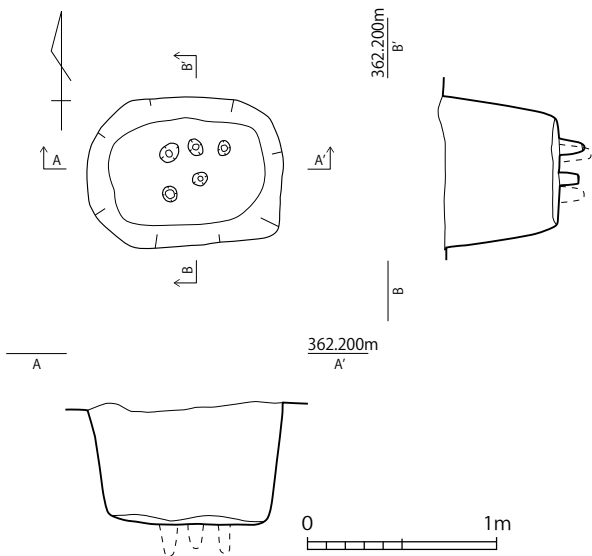
第190図 SK443実測図 (1/40)



第191図 SK443出土遺物実測図



第192図 SK444実測図 (1/40)



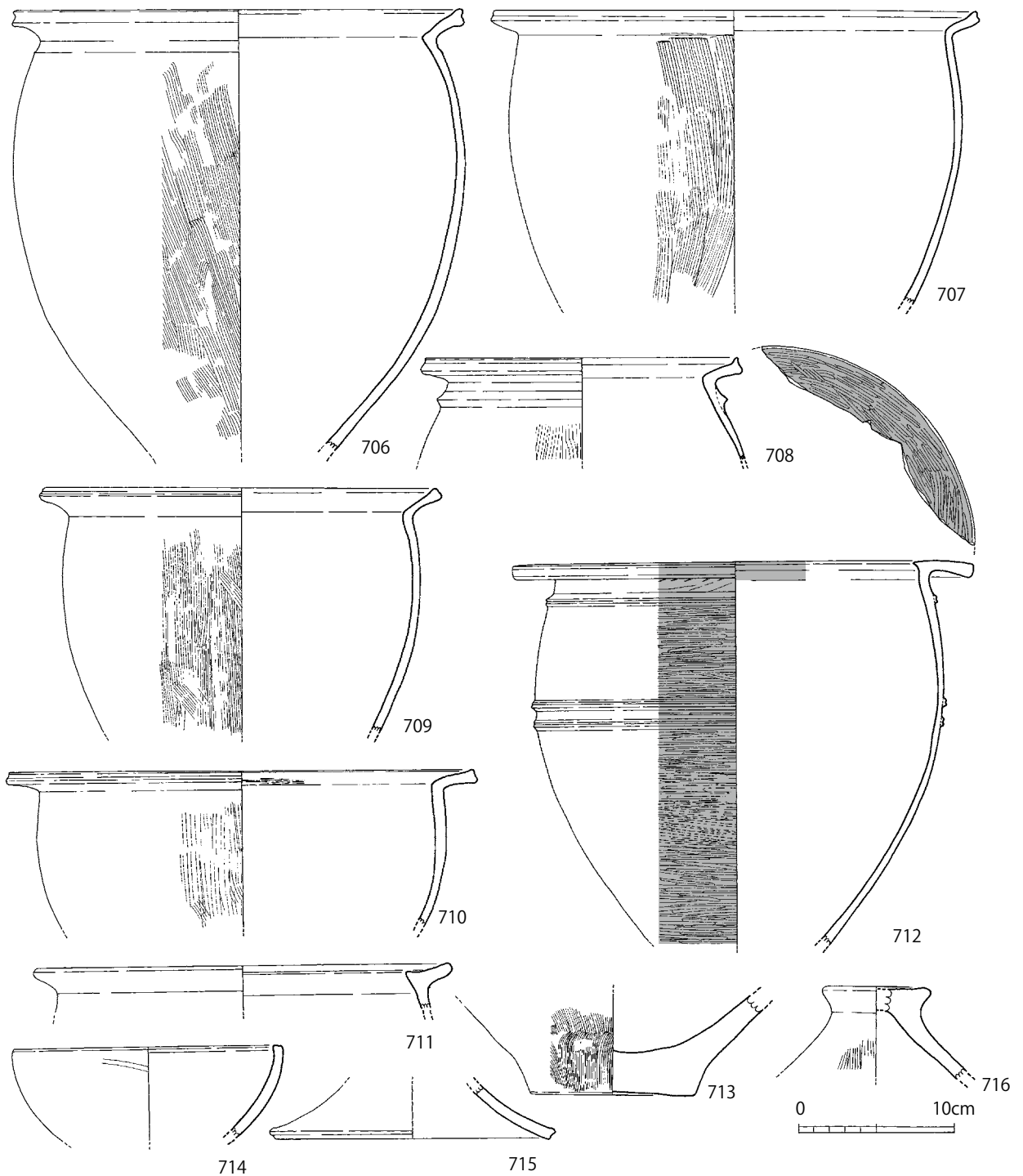
第193図 SK445実測図 (1/40)

て直しがなされた可能性が考えられる。

土層図はないが、埋土の下層部は地山黄褐色土ブロックが多く混じていたことから人為的に埋められたとみられる。一方上層部では地山土の混じりが少ないことから自然に埋没したものとみられる。遺物は埋土全般から出土しているが、その出土量はわずかで、小破片となったものが多いことから、埋没にともない混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK430 (第170図)**

SK430は土坑である。形状は楕円形で、規模は径2.5m、深度は0.15mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は壁際にむかって上がり気味となる。

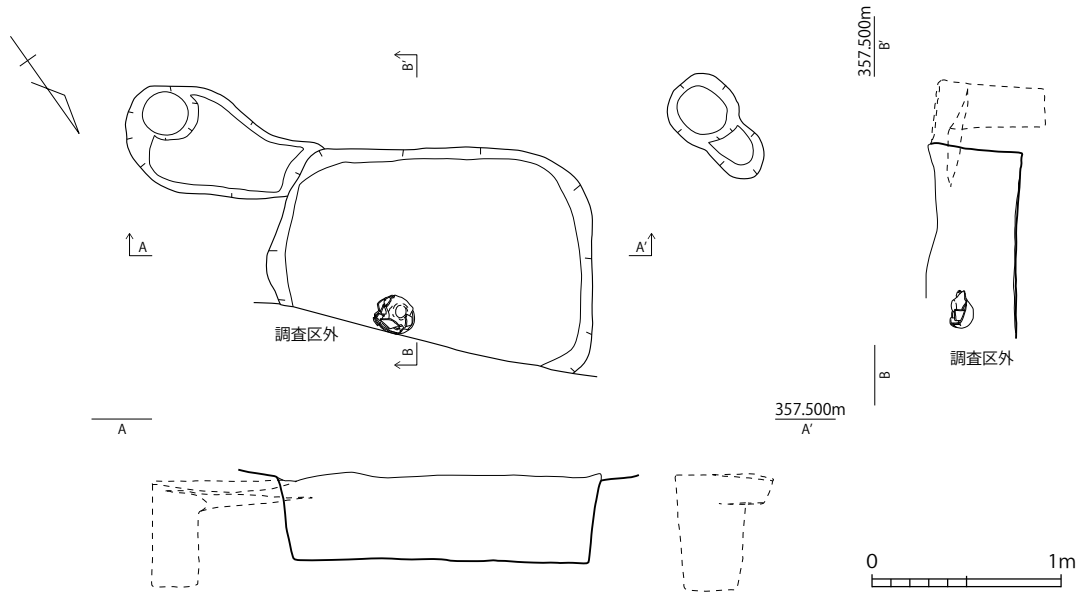


第194図 SK444出土遺物実測図

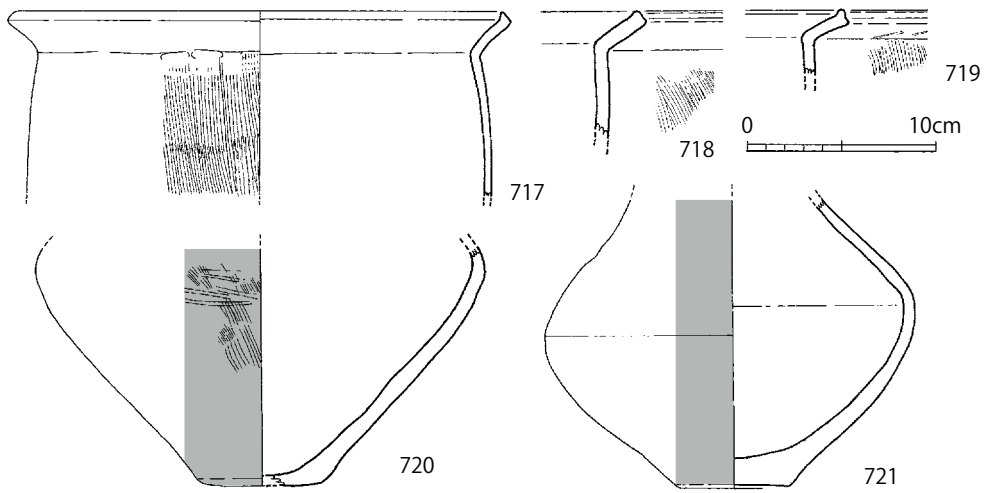
埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。埋没途中で混入した甕・高坏片等の小破片がわずかに出土しているが、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK431 (第171・172図)**

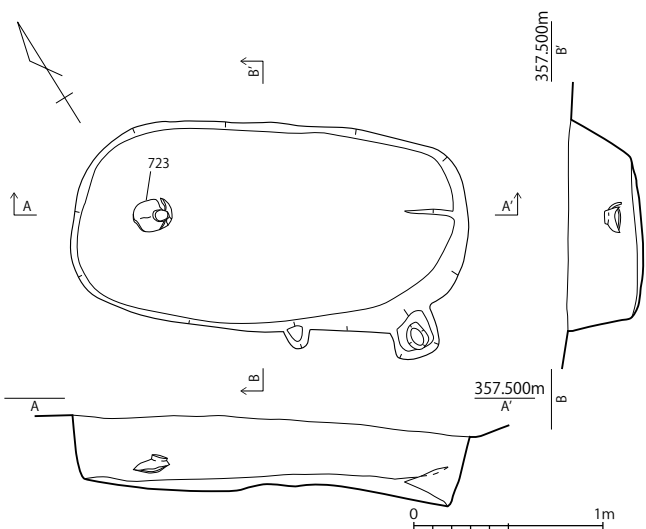
SK431は土坑である。SH177に切られる。形状は長方形で、規模は長軸3.05m、短軸2.8m、深度は0.3mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。床面の中央部は踏み固められたように締まっている。東壁面際に掘り込みがあるが、柱穴は確認できなかった。



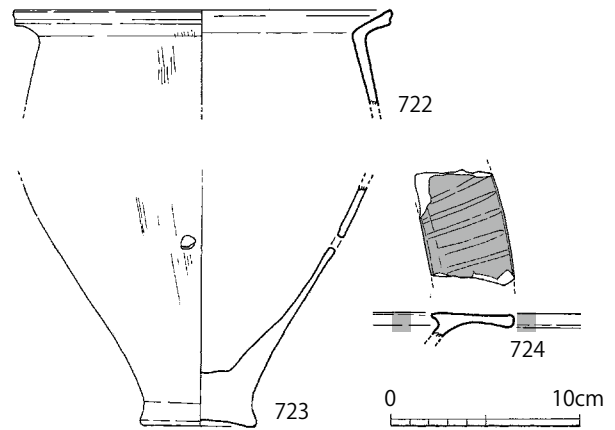
第195図 SK446実測図 (1/40)



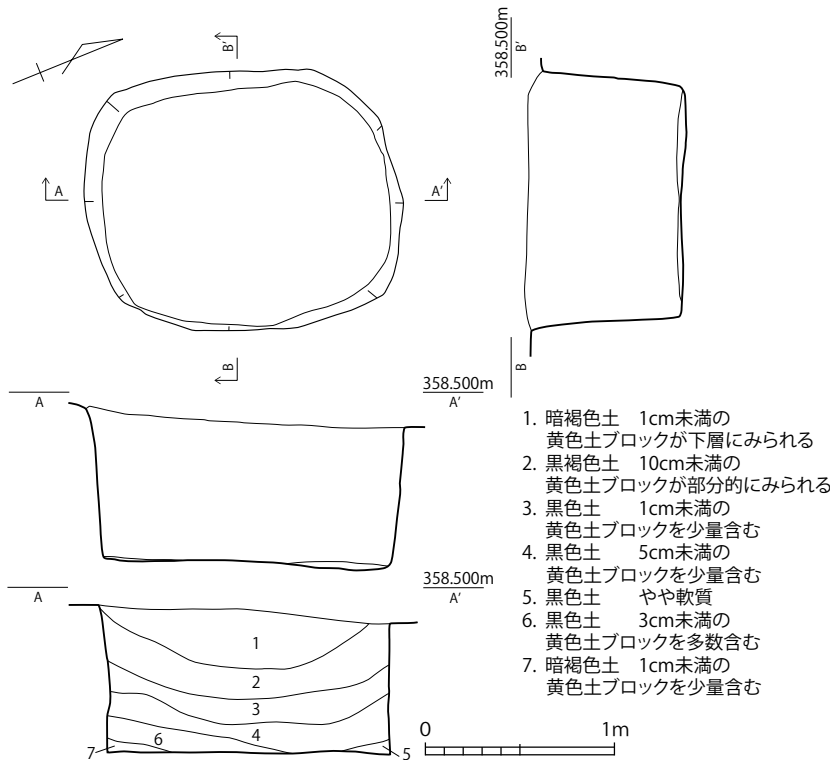
第196図 SK446出土遺物実測図



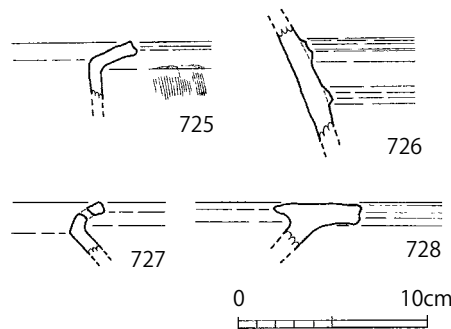
第197図 SK447実測図 (1/40)



第198図 SK447出土遺物実測図



第199図 SK448実測図 (1/40)



第200図 SK448出土遺物実測図

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。床面直上で広口壺の口縁部(669)が出土した以外は、埋土中から小破片が少量出土する程度であった。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK432 (第173・174図)**

SK432は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.65m、短軸は2.0m、深度は1.2mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したとみられる。遺物は床面に近いレベルでまとまって出土していることから、廃絶後早い段階で遺物の廃棄が行われたとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK433 (第175・176図)**

SK433は土坑(貯蔵穴)である。北側をSH129に切られる。形状は長方形に復元でき、規模

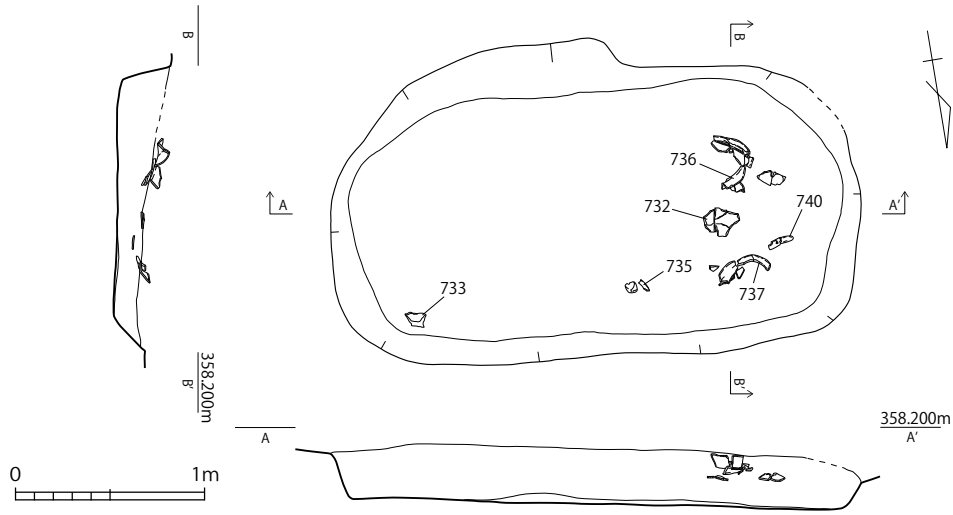
は長軸2.8mと推定され、短軸2.3m、深度は0.65mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。土坑の各コーナーの外部には柱穴があるが、確認できるのは3本である。北東部の柱穴はSH129によって切られた可能性がある。

遺物は床面直上で甕・器台片・台石が出土しているが、それ以外は埋没途中で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

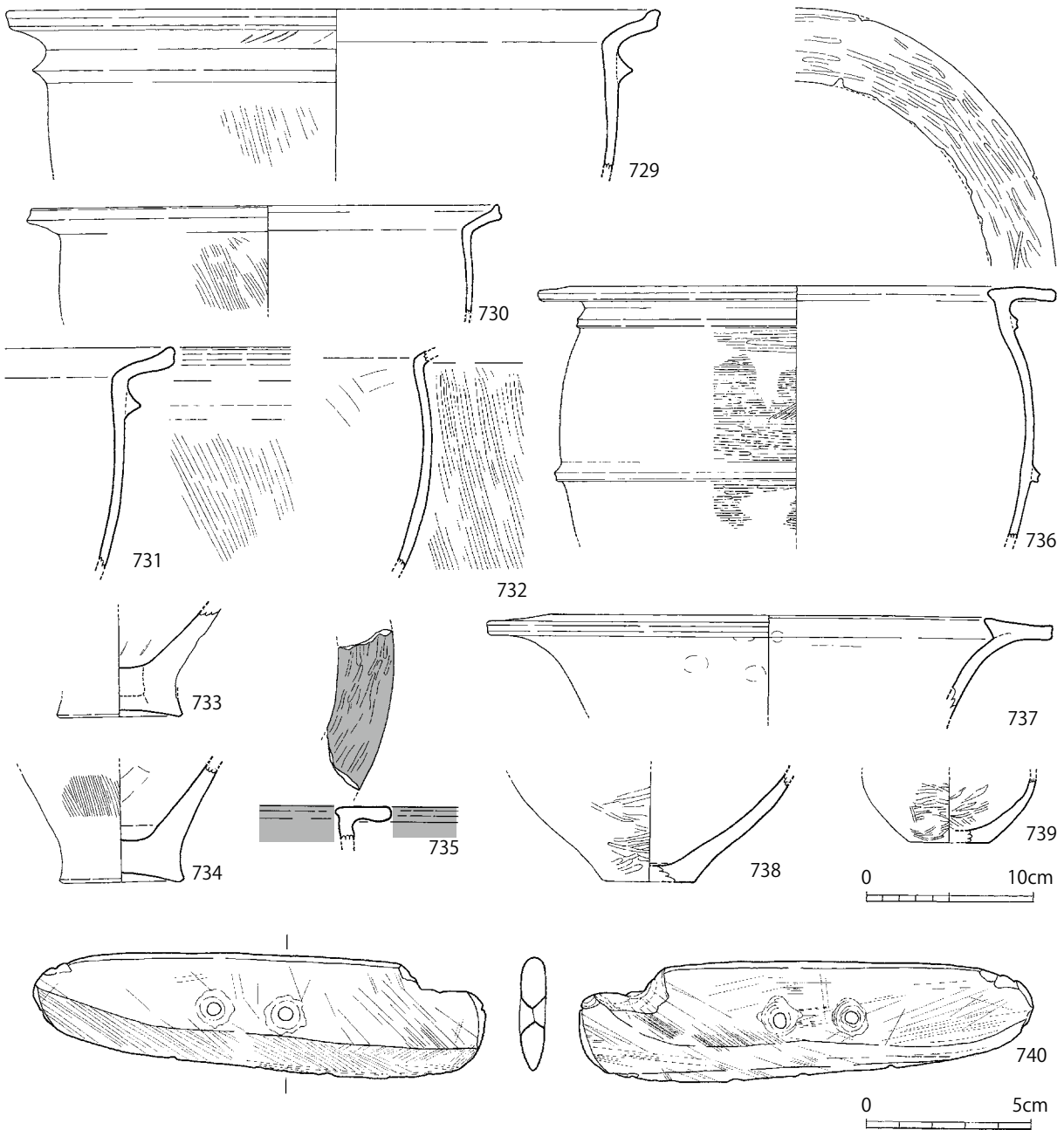
**SK434 (第177・178図)**

SK434は土坑(貯蔵穴)である。北半分がSH129に切られる。形状は隅丸方形ないし隅丸長方形で、規模は判明する辺で2.05m、深度は0.55mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は東から西に向かって緩やかに傾斜する。

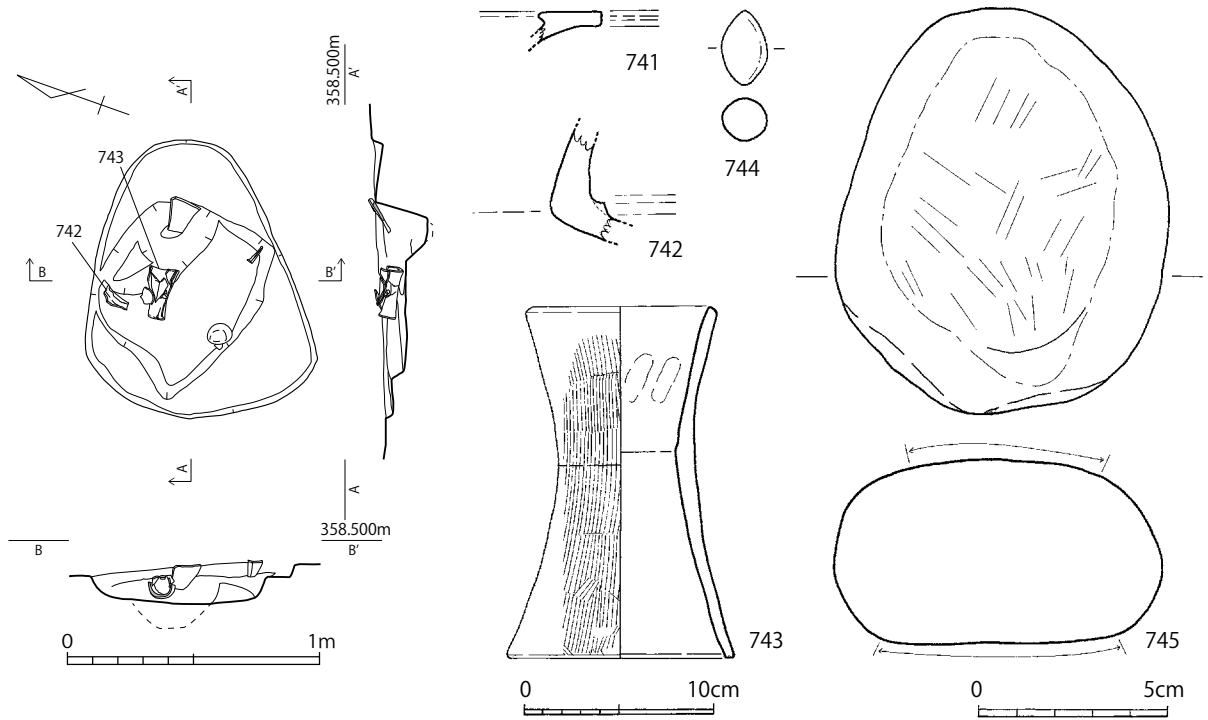
遺物は床面直上から甕の上部が出土したのみで、廃絶直後に廃棄されたものとみられる。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第201図 SK449実測図 (1/40)

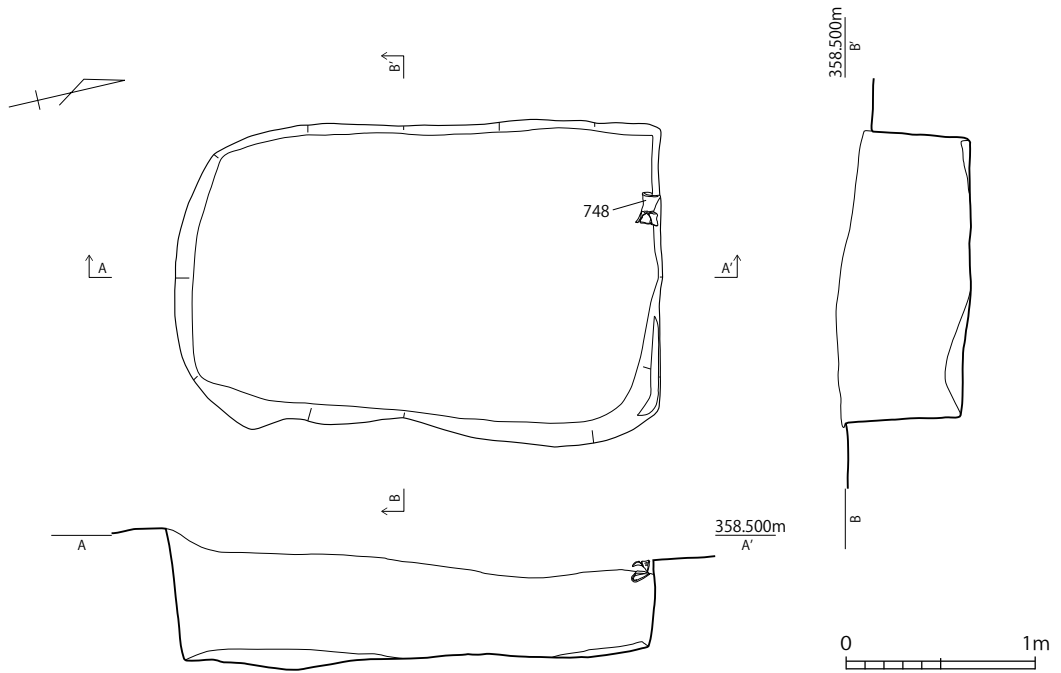


第202図 SK449出土遺物実測図

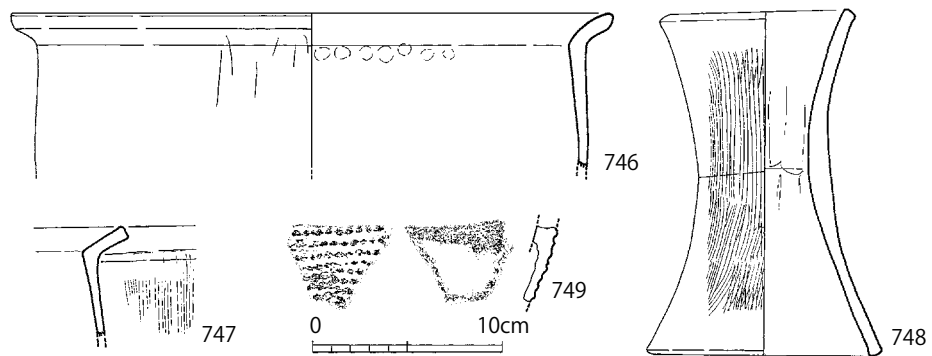


第203図 SK450実測図 (1/30)

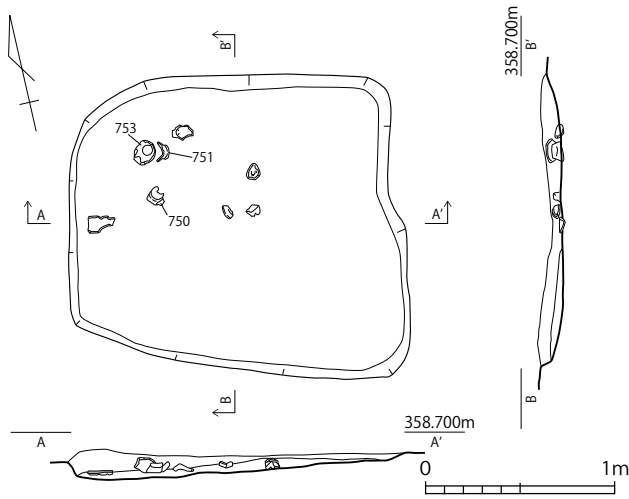
第204図 SK450出土遺物実測図



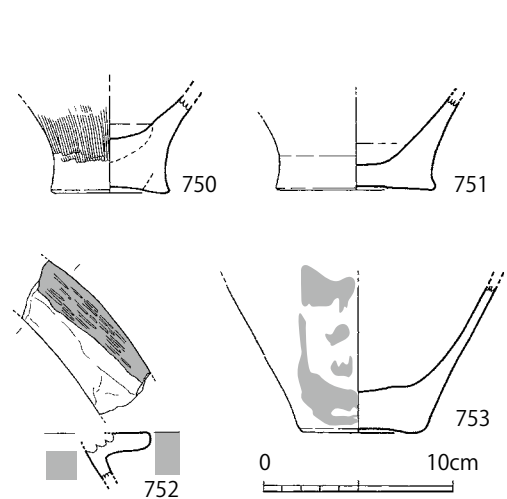
第205図 SK451実測図 (1/40)



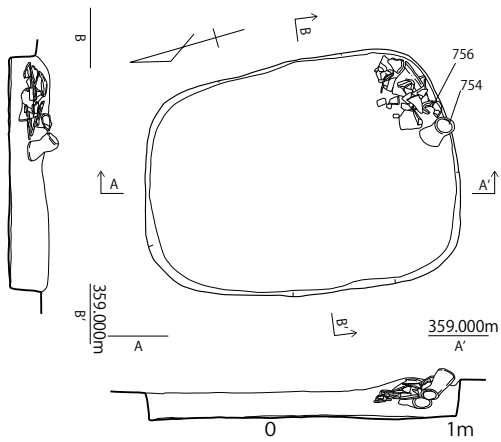
第206図 SK451出土遺物実測図



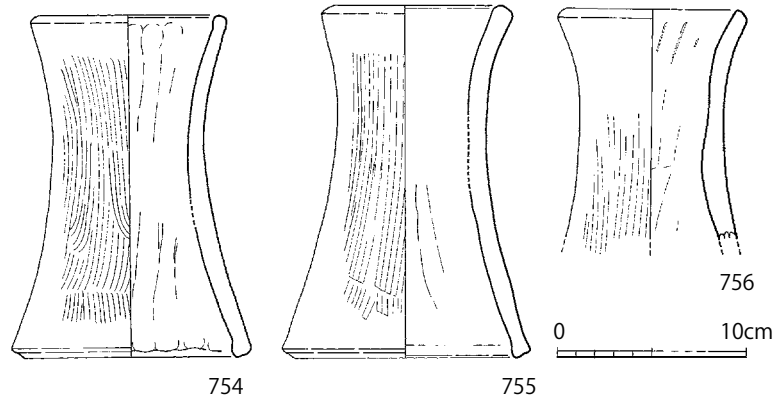
第207図 SK452実測図 (1/40)



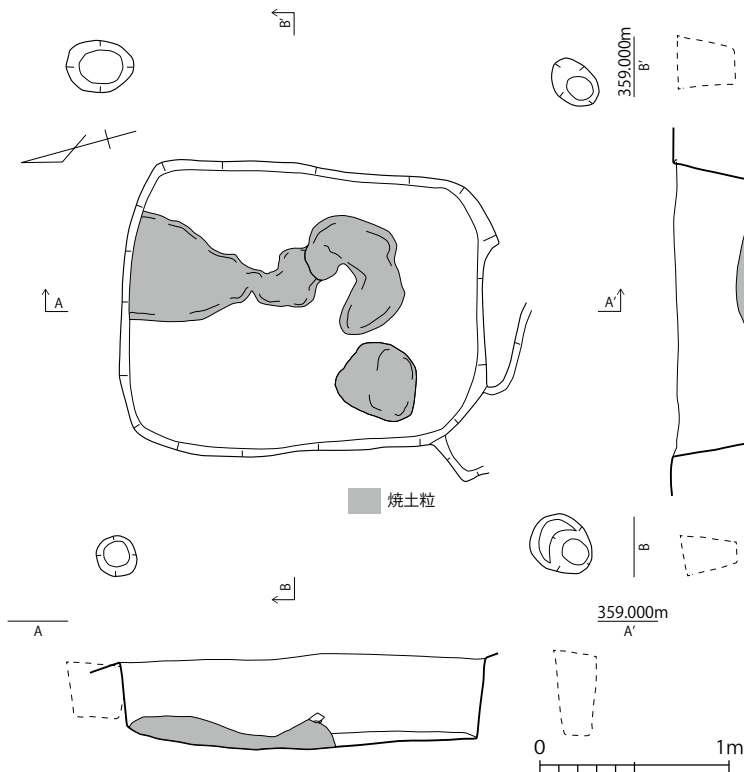
第208図 SK452出土遺物実測図



第209図 SK453実測図 (1/40)



第210図 SK453出土遺物実測図



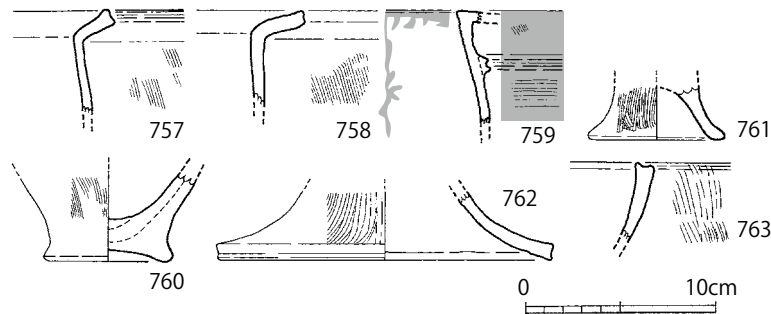
第211図 SK454実測図 (1/40)

**SK435 (第179図)**

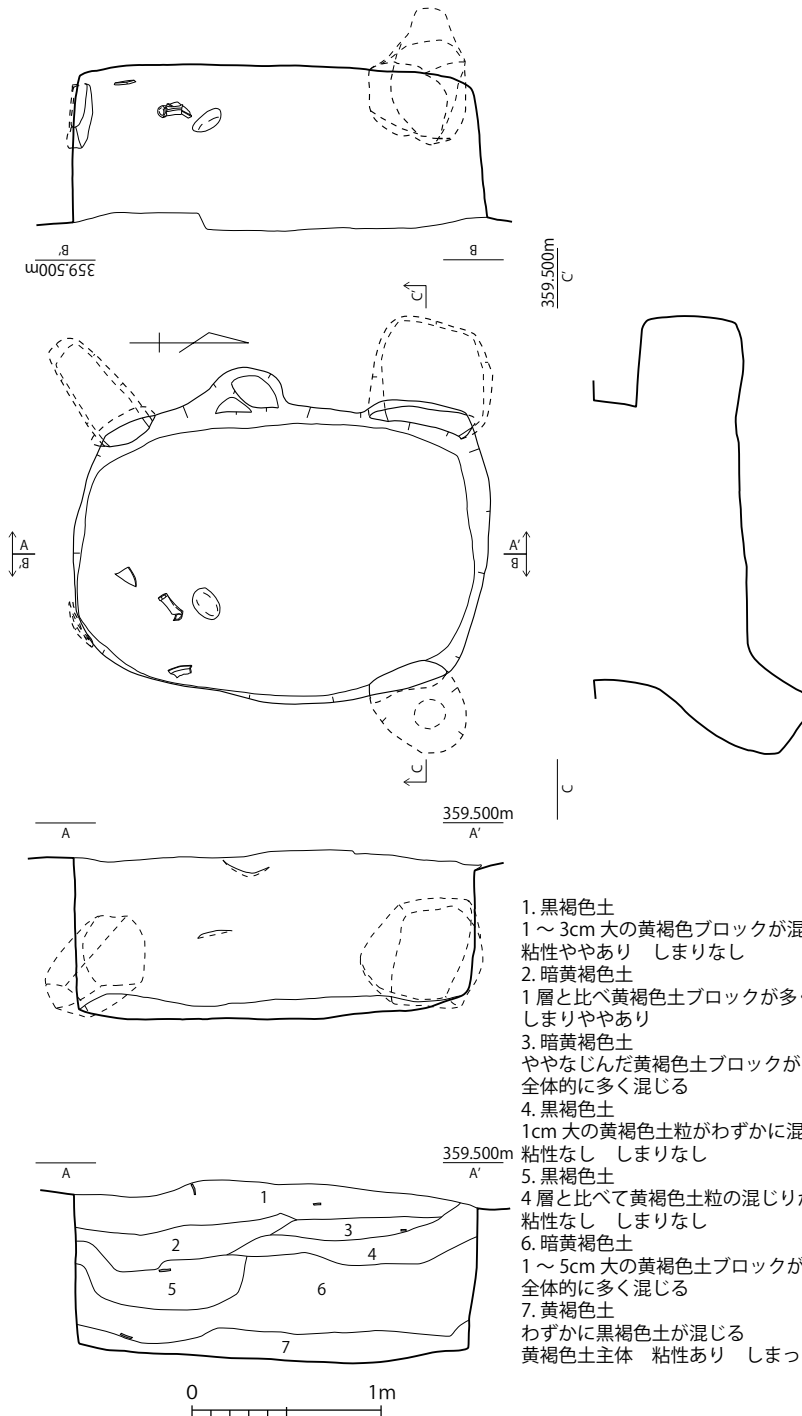
SK435は土坑（陥穴）である。幅の狭いテラスを有する2段掘りである。上場の形状は楕円形であるが、下場は隅丸長方形となる。規模は上場が径1.7～1.55mに対して、下場が長軸0.9m、短軸0.6mと狭い。床面の中央で杭痕が1本確認できた。

埋土は黒褐色土で、土層の観察から自然に埋没したものとみられる。遺物は出土していないため時期を判断するのは困難であるが、SK435に近接して弥生時代中期後半段階の遺構が展開していることや埋土の土質を考慮すると、弥生時代中期後半段階よりも以前に埋没した陥穴であると考えるのが妥当であろう。





第212図 SK454出土遺物実測図



1. 黒褐色土  
1～3cm 大の黄褐色ブロックが混じる  
粘性ややあり しまりなし
2. 暗黄褐色土  
1層と比べ黄褐色土ブロックが多く混じる  
しまりややあり
3. 暗黄褐色土  
ややなじんだ黄褐色土ブロックが  
全体的に多く混じる
4. 黒褐色土  
1cm 大の黄褐色土粒がわずかに混じる  
粘性なし しまりなし
5. 黒褐色土  
4層と比べて黄褐色土粒の混じりが多い  
粘性なし しまりなし
6. 暗黄褐色土  
1～5cm 大の黄褐色土ブロックが  
全体的に多く混じる
7. 黄褐色土  
わずかに黒褐色土が混じる  
黄褐色土主体 粘性あり しまっている

第213図 SK455実測図 (1/40)

SK436 (第180図)

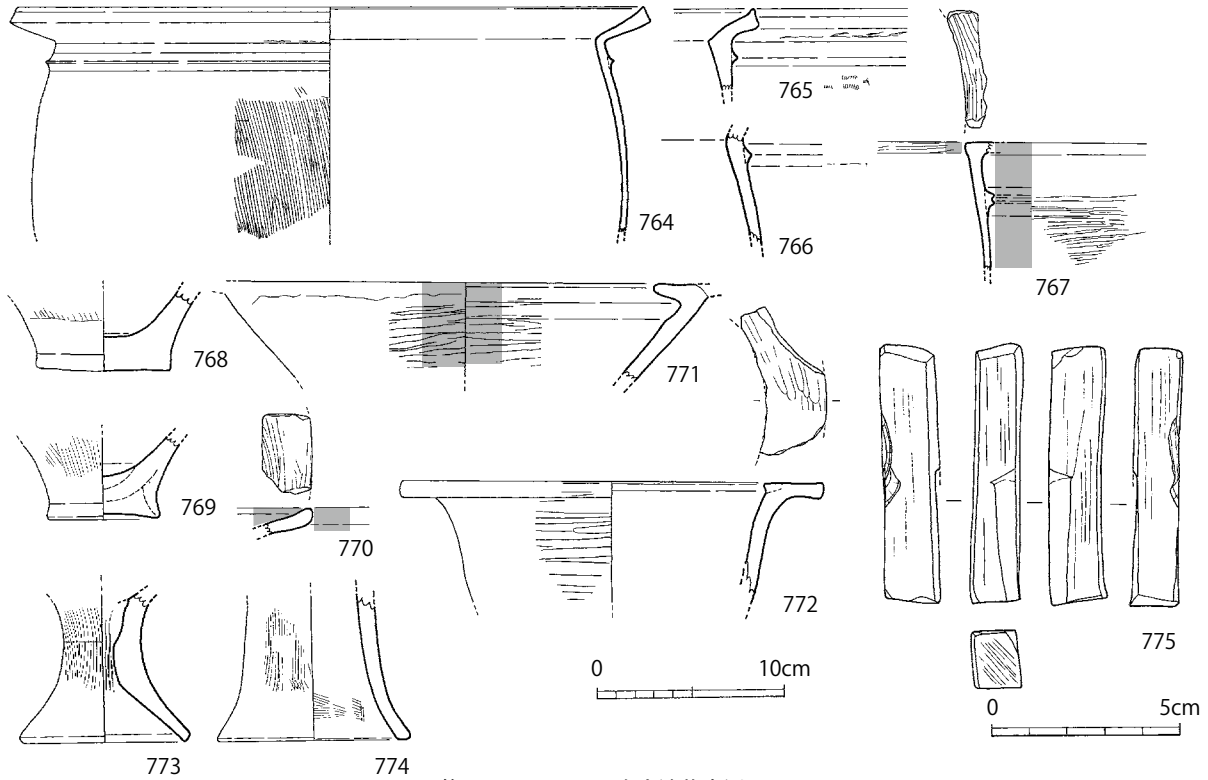
SK436は土坑(陥穴)である。形状は楕円形で、規模は上場が長軸1.3m、短軸1.0mに対して、下場が長軸0.75m、短軸0.5mと狭い。床面で杭痕と思われる跡を5本確認できた。

埋土は黒褐色土で、土層の観察から自然に埋没したとみられる。遺物は出土していないが、埋土の土質がSK435と類似することから、弥生時代中期後半段階よりも以前に埋没した陥穴と推測する。

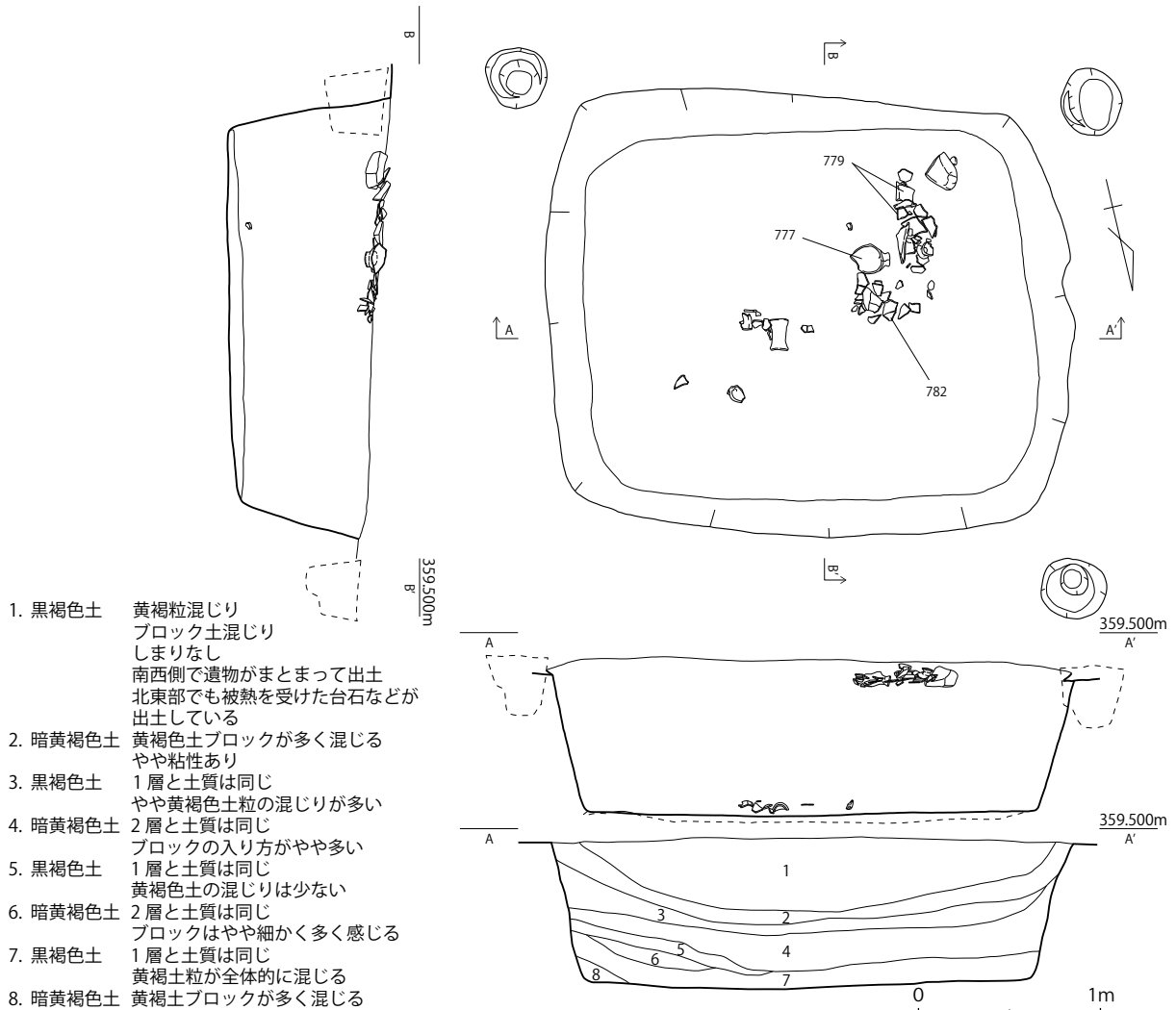
SK437 (第181・182図)

SK437は土坑(貯蔵穴)である。北側が調査区外のため未掘であるが、形状は長方形と推測できる。規模は長軸4.0m、短軸1.6m以上、深度は0.55mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面は硬化していない。

埋土は西側半分に茶褐色土・黄褐色土が、東半分に黒色土が堆積していたことから、調査時当初は土坑が2基切り合うと考えていたが、土層観察から西側に埋土が堆積した後、東側に土が流入したことにより埋没したことがわかった。遺物は西側から床面より浮いた状態で炭化物や焼土とともに壺の口縁部がまつまって出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

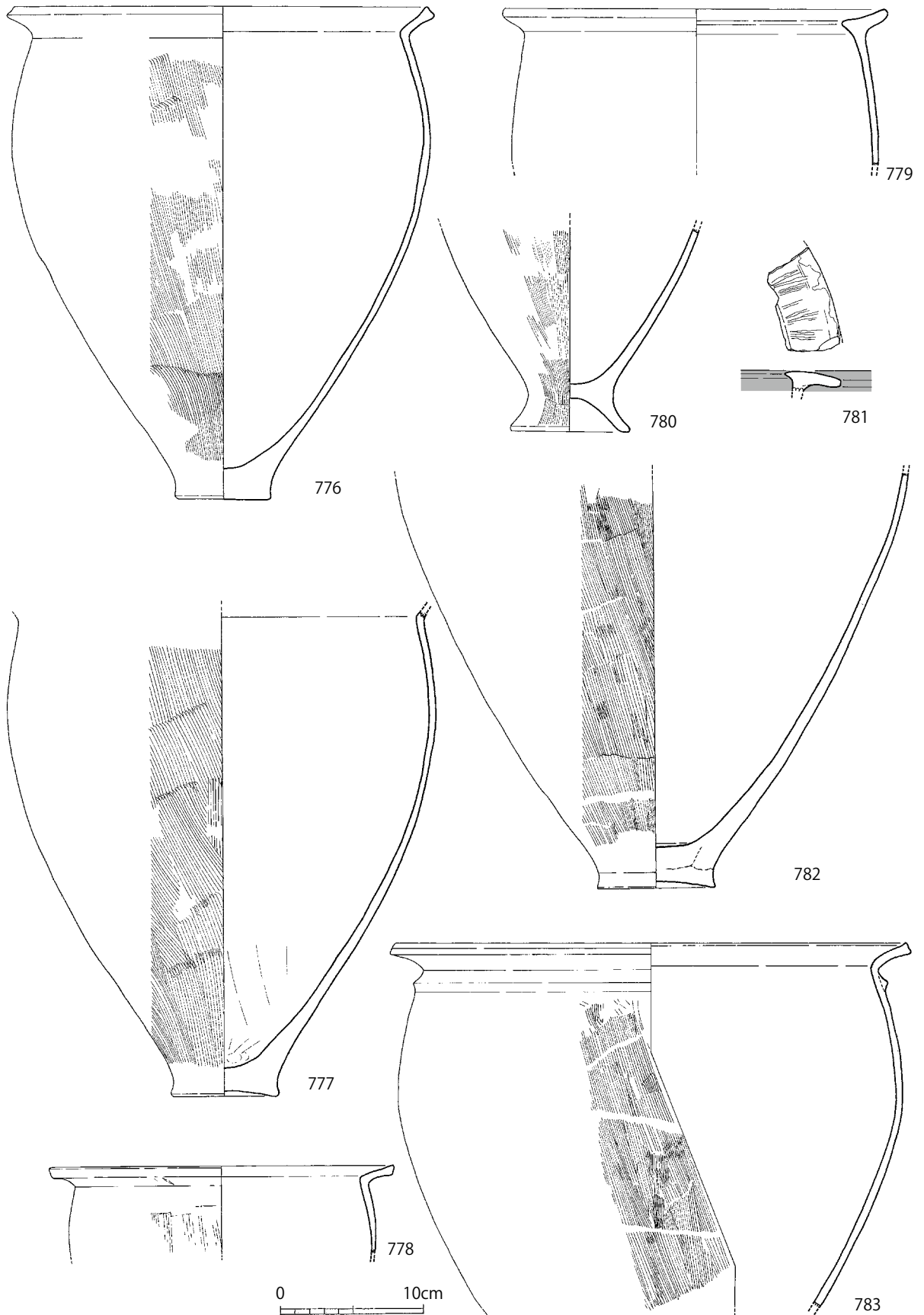


第214図 SK455出土遺物実測図

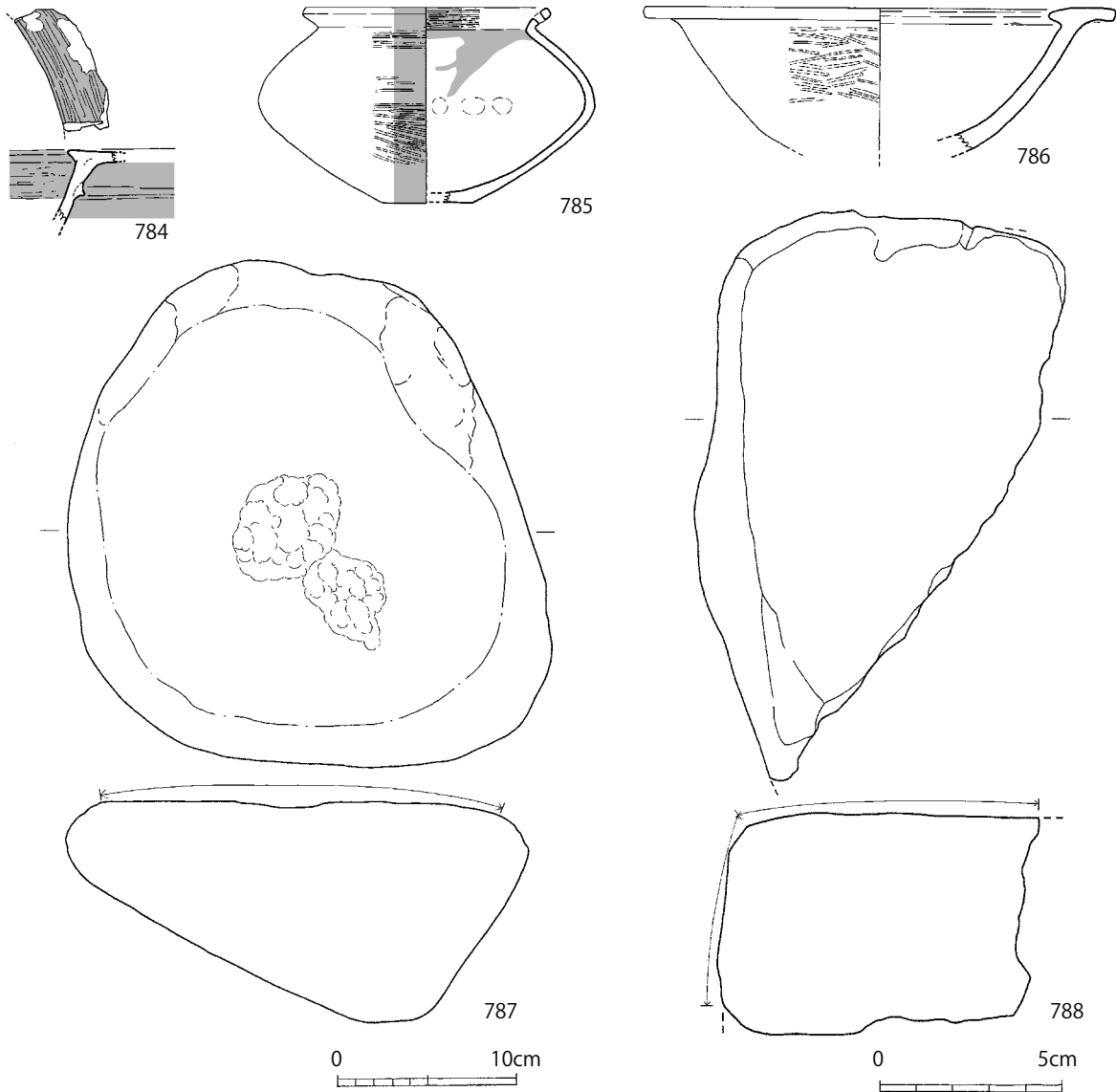


- 1. 黒褐色土 黄褐色粒混じり  
ブロック土混じり  
しまりなし  
南西側で遺物がまとまって出土  
北東部でも被熱を受けた台石などが  
出土している
- 2. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックが多く混じる  
やや粘性あり
- 3. 黒褐色土 1層と土質は同じ  
やや黄褐色土粒の混じりが多い
- 4. 暗黄褐色土 2層と土質は同じ  
ブロックの入り方がやや多い
- 5. 黒褐色土 1層と土質は同じ  
黄褐色土の混じりは少ない
- 6. 暗黄褐色土 2層と土質は同じ  
ブロックはやや細かく多く感じる
- 7. 黒褐色土 1層と土質は同じ  
黄褐色土粒が全体的に混じる
- 8. 暗黄褐色土 黄褐色土ブロックが多く混じる

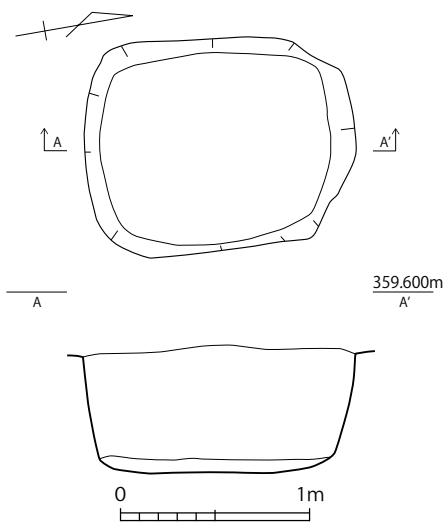
第215図 SK456実測図 (1/40)



第216図 SK456出土遺物実測①



第217図 SK456出土遺物実測図②

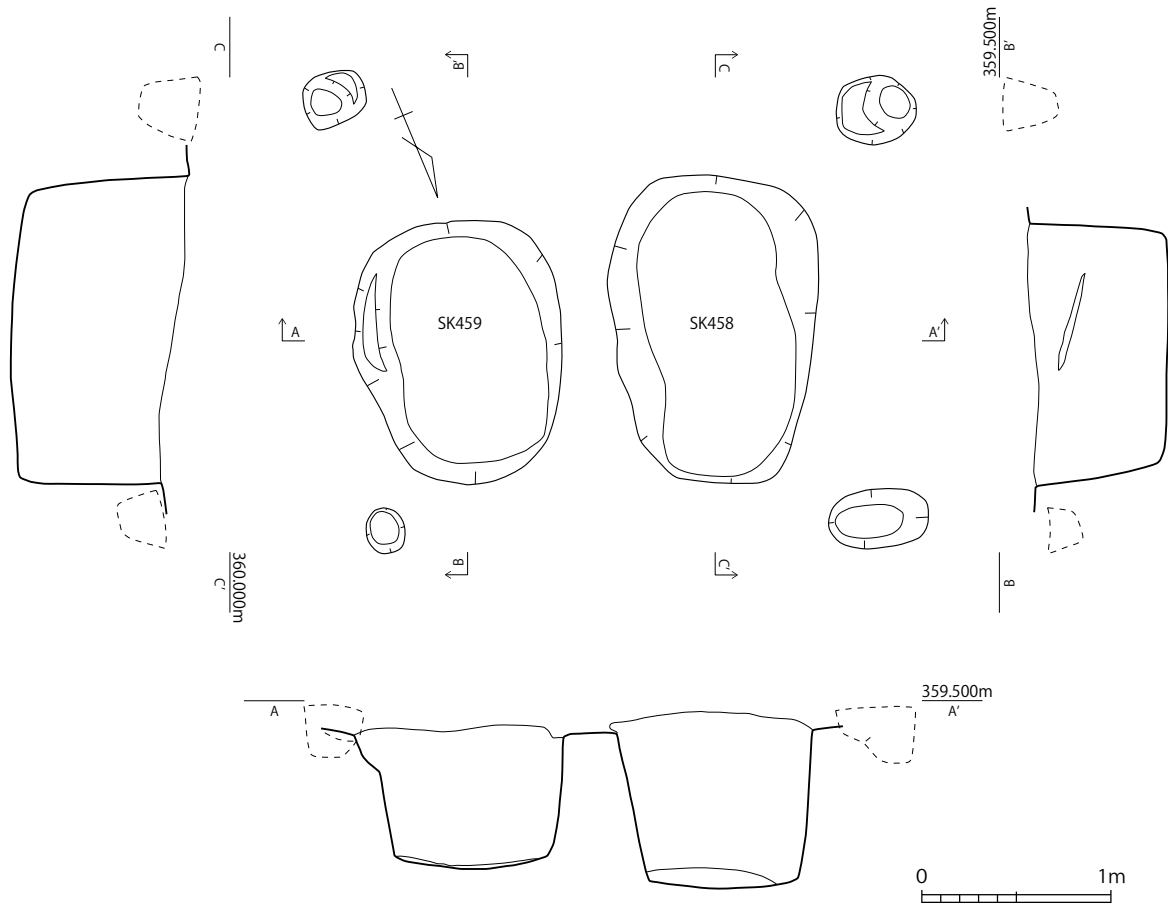


第218図 SK457実測図 (1/40)

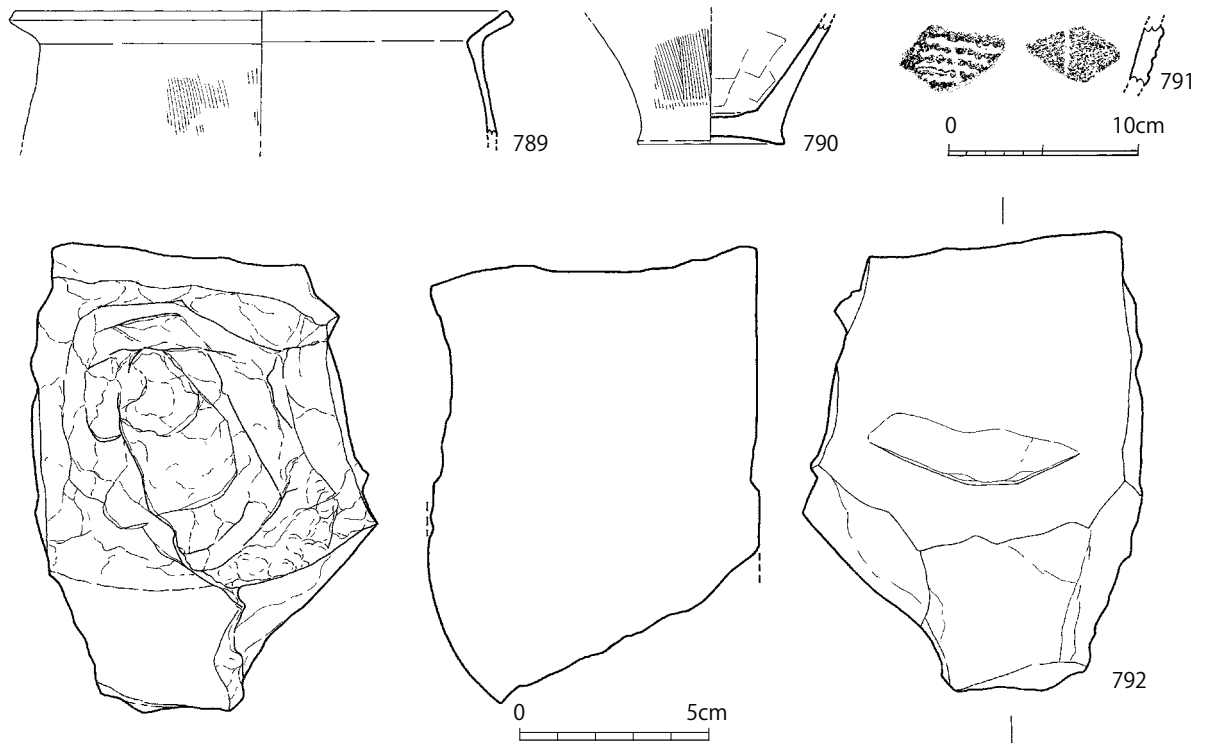
**SK438 (第183図)**

SK438は土坑である。SK439に切られる。形状は楕円形に近く、長軸2.8m、短軸2.6mに復元できる。深度は0.25mである。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は平坦である。長軸上の壁面際には2本の柱穴がある。

埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。遺物は甕・壺などの破片が比較的多く出土したが、図示できる資料はない。またこの土坑からは製品のように形が整ったものはないが、白色の脆い岩片が多く出土している。用途は不明である。出土遺物から弥生時代中期後半段階に埋没したと考えられる。



第219図 SK458・459実測図 (1/40)



第220図 SK459出土遺物実測図

**SK439 (第184・185図)**

SK439は土坑である。SK438を切る。形状は長方形で、規模は長軸2.6m、短軸1.65m、深度は0.45～0.75mである。埋土の観察から、遺構は5～7層が堆積した後に南側に細長い形状の土坑が掘り直され、1～4層が堆積したものとみられる。そのためSK439は切り合う2基の土坑ととらえるのが正しい。調査時に2基の土坑の遺物を厳密に分けられていないが、出土遺物全体を見ても時期差があるようにはみられなかった。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK440 (第186図)**

SK440は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸方形で、規模は一辺が2.1～2.2m、深度は0.2mである。南北壁際付近に柱穴が2本確認できた。南側柱穴は壁面際にあり深度は0.3mと浅いが、北側柱穴は壁面からやや離れた位置にあり、深度は0.9mと深い。床面は平坦だが、貼床や床面の硬化は確認できなかった。

この遺構から遺物は出土していないが、遺構の特徴から弥生時代中期後半段階の遺構と推測する。

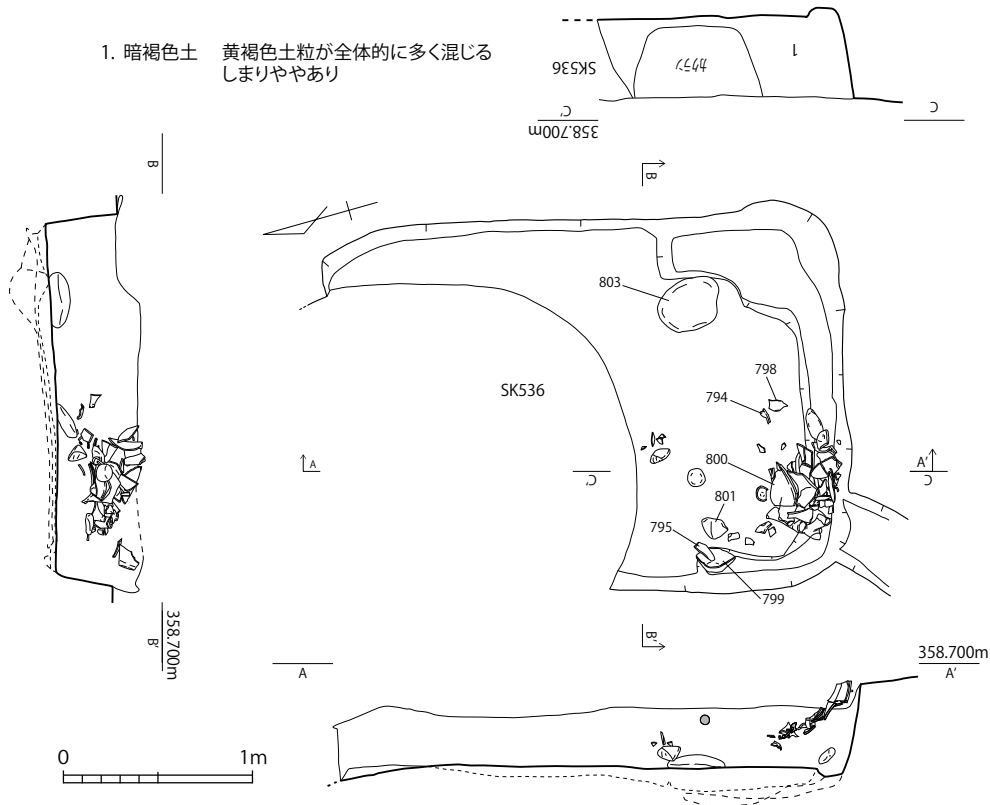
**SK441 (第187図)**

SK441は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸方形で、規模は一辺が1.4～1.5m、深度は0.75mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。平面では確認できなかったが、埋没後に中央付近に別の柱穴が掘り込まれている。

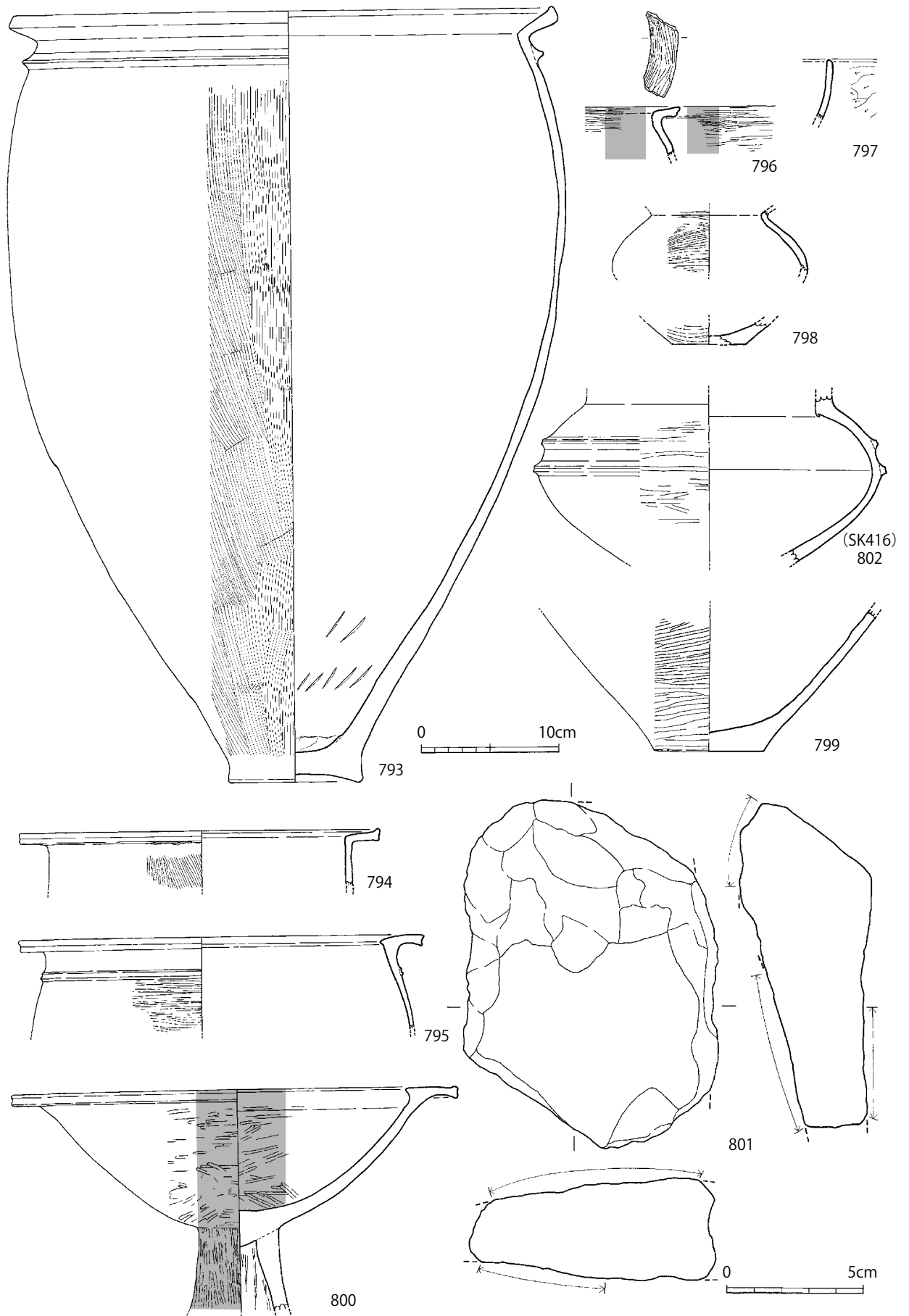
土層の観察から、周囲から土が流入し自然に埋没したものとみられる。遺物は須玖式甕・壺・蓋・高坏などの小破片がわずかに出土しているが、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK442 (第188・189図)**

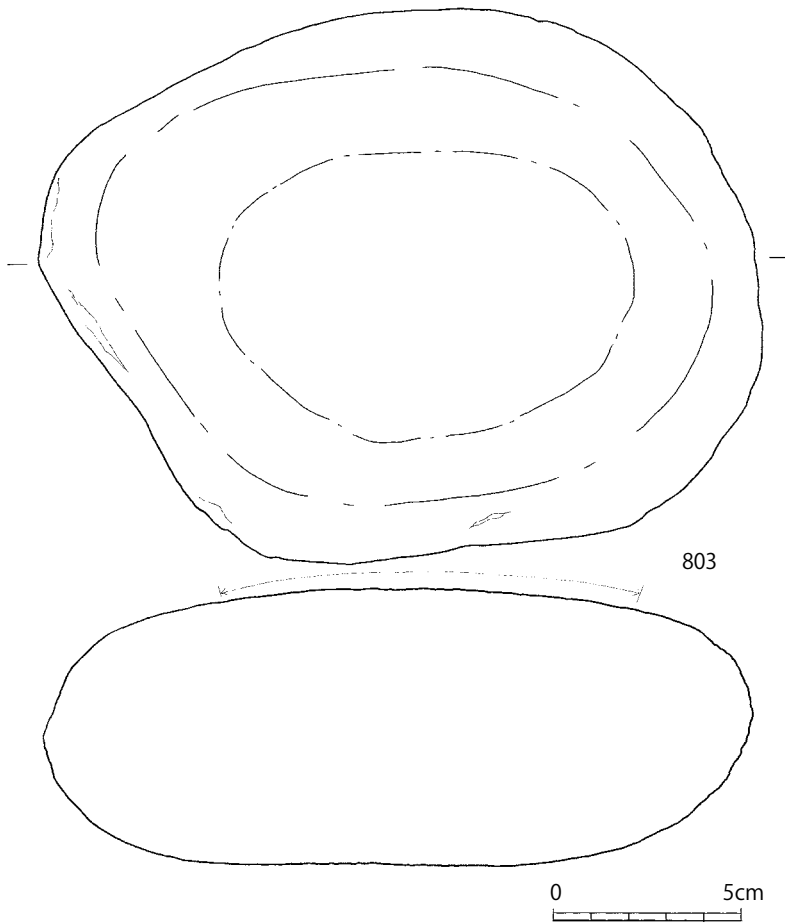
SK442は土坑(貯蔵穴)である。形状は長方形で、規模は長軸2.2～2.3m、短軸1.8m、深度は0.3mである。長



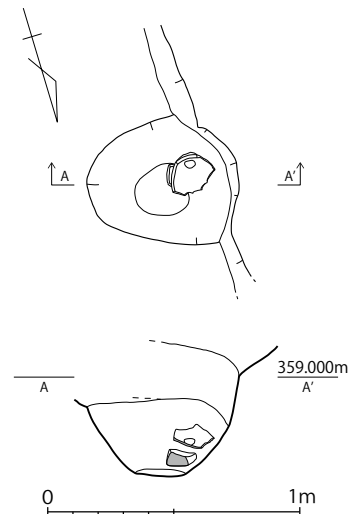
第221図 SK460実測図 (1/40)



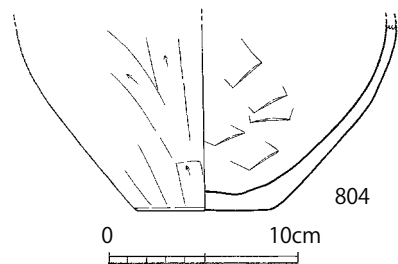
第222図 SK460出土遺物実測図



第223図 SK460出土遺物実測図②



第224図 SK461実測図 (1/30)



第225図 SK461出土遺物実測図

軸上の壁面際には2本の柱穴があり、これらの柱穴は床面からの深度が0.6mと深く掘り込まれている。床面は平坦で、中心部には浅い掘り込みがある。

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は床面直上付近でまとまって出土した。土器破片も小片ではなく、廃絶直後に廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK443 (第190・191図)

SK443は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.8m、短軸1.2m、深度は0.35mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

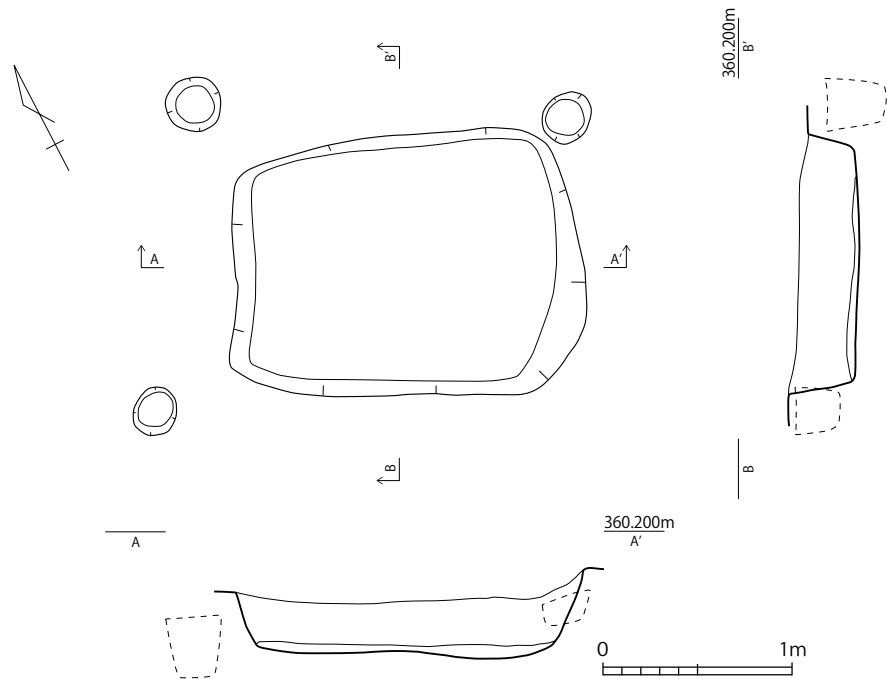
埋土は黒色土の単一層であり、自然に埋没したものとみられる。遺物は埋土全体から出土しているが、特に検出面に近い上層部でまとまって出土していることから、埋没の途中で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK444 (第192・194図)

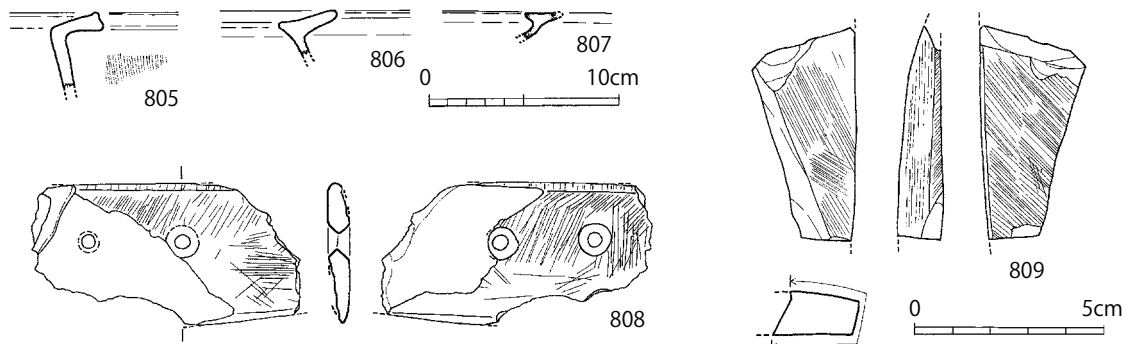
SK444は土坑である。形状は歪な楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸1.5m、深度は0.25mである。壁面は緩やかに立ち上がり、床面は平坦ではない。

埋土は自然に埋没したとみられ、遺物は埋没過程で廃棄されたものとみられる。遺物は埋土全体から出土しているが、特に西側で比較的まとまって出土した。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。





第226図 SK462実測図 (1/40)



第227図 SK462出土遺物実測図

**SK445 (第193図)**

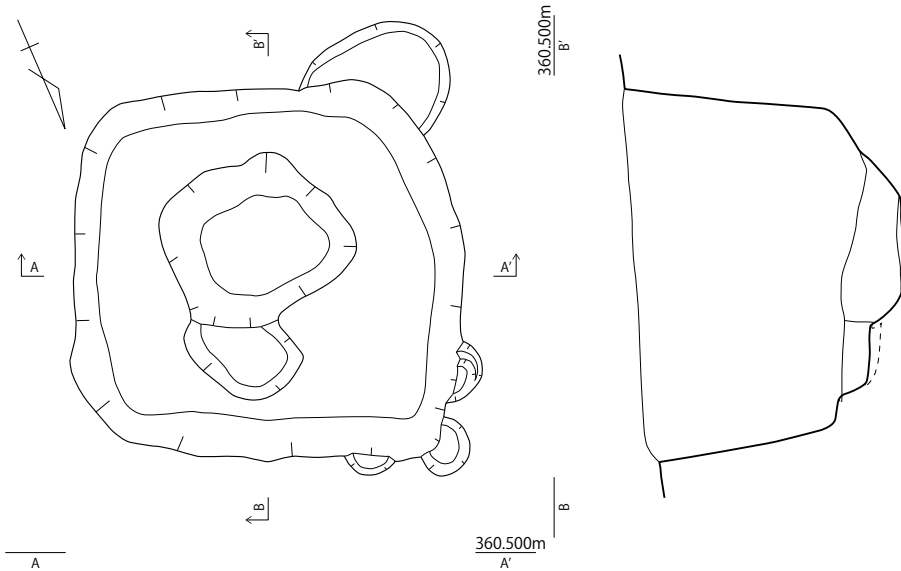
SK445は土坑（陥穴）である。形状は楕円形で、長軸1.05m、短軸0.8m、深度は0.65mである。壁面は直立に立ち上がり、床面で杭痕を5本検出した。

遺物は出土していないため時期の特定は困難であるが、埋土は周辺の遺構埋土と同じ黒褐色土であることや、弥生時代中期後半段階の竪穴建物に近接した位置にあることを考慮すると、弥生時代中期後半段階よりも以前に埋没したものとみるのが妥当であろう。

**SK446 (第195・196図)**

SK446は土坑（貯蔵穴）である。北東部が調査区外のため未掘であるが、形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.2mと推測され、深度は0.45mである。各コーナーの外部に柱穴をとまなうと考えられるが、調査できたのは南側の2本のみである。柱穴は径0.3～0.35mで、深度は0.6mと土坑よりも深く掘り込まれている。

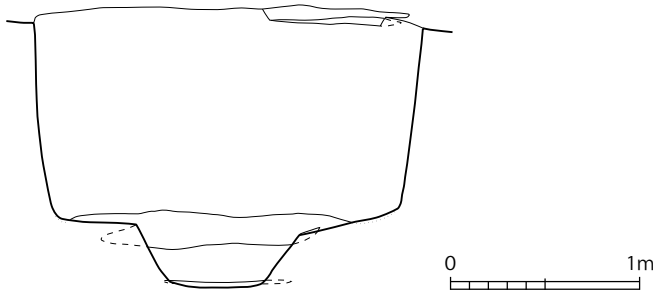
土坑の埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。遺物は埋没過程で廃棄されたものであろう。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



**SK447 (第197・198図)**

SK447は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.1m、短軸1.1m、深度は0.4mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は床面よりやや浮いた状態で出土していることから、埋没途中で混じり込んだとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

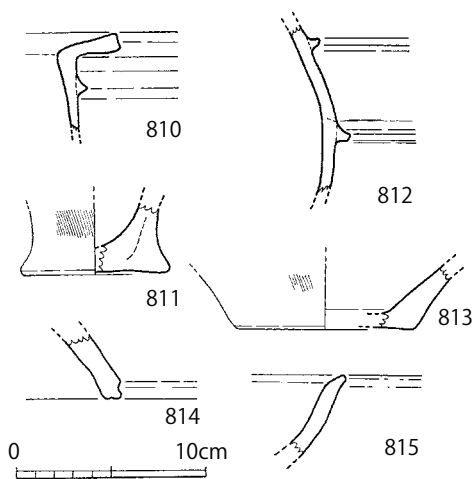


**SK448 (第199・200図)**

SK448は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸方形で、規模は長軸1.5m、短軸1.35m、深度は0.8mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黒色土がレンズ状に

堆積していることから、自然に埋没したとみられる。遺物は各層全般から出土しているが、破片となったものが多く、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



**SK449 (第201・202図)**

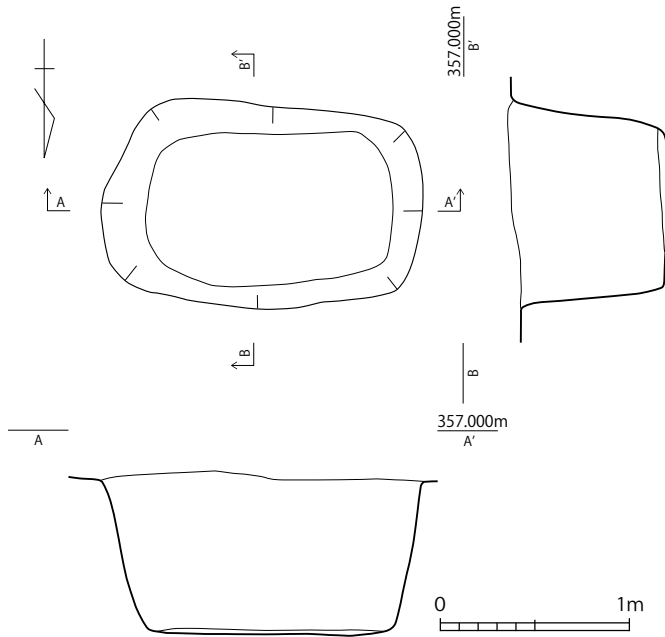
SK449は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.8m、短軸1.5m、深度は0.25mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は検出面に近いレベルからまとめて出土しており、埋没途中で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

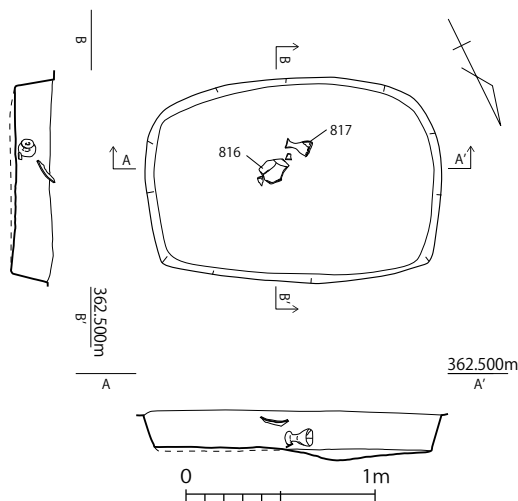
**SK450 (第203・204図)**

SK450は土坑である。2段掘りで、上段平面は不定形、下段平面は隅丸方形に近い形状である。下段部の規模は長軸0.55～0.75m、短軸0.5～0.6m、深度は0.2mである。

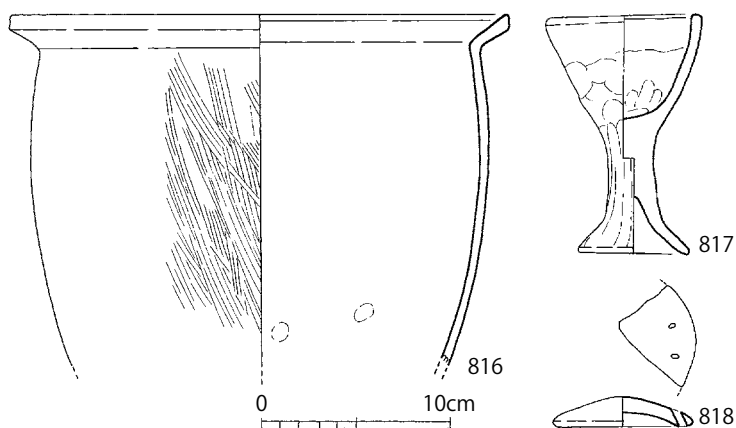
遺物は下段でまとめて出土しており、埋没にともない廃棄されたものとみられる。出土遺物から弥生時代中期後半段階に埋没したと考えられる。



第230図 SK464実測図 (1/40)



第231図 SK465実測図 (1/40)



第232図 SK465出土遺物実測図

**SK451 (第205・206図)**

SK451は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸2.5m、短軸1.7m、深度は0.7mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は北から南に向かってなだらかに傾斜している。

土層図はないが、埋土は黒色土に黄褐色土がブロック状に混じるもので、人為的に埋め戻されたとみられる。遺物の大半が検出面近くから出土しており、埋没の途中で廃棄されたものである。埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

**SK452 (第207・208図)**

SK452は土坑である。形状は隅丸台形で、規模は南北1.45～1.6m、東西1.7～1.8m、深度は0.1mである。遺構の上部はかなり削平されているとみられる。

床面直上で遺物が破片の状態出土している。出土遺物の時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK453 (第209・210図、第422図1490)**

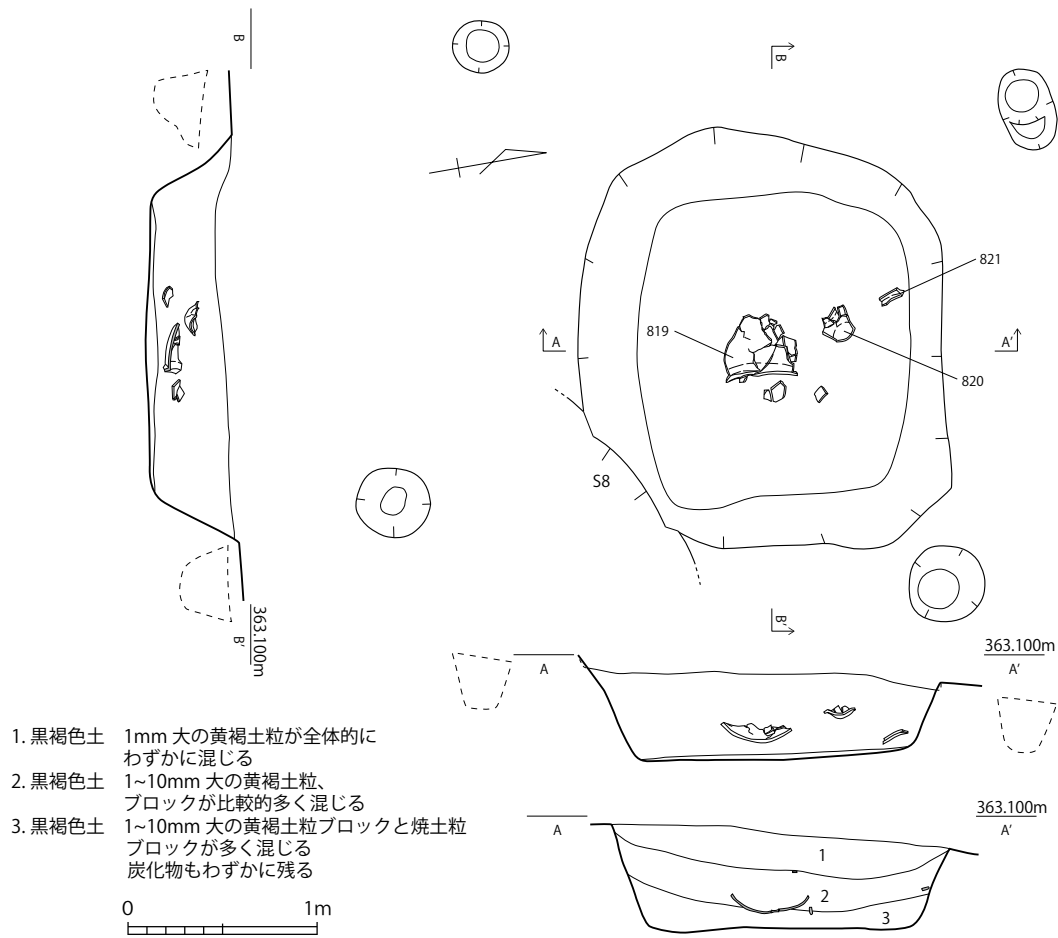
SK453は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.25m、深度は0.2mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黒色土の単一層であることから、自然に埋没したとみられる。南東壁際で器台がまとまって出土しているが、床面から少し浮いた状態で出土していることから、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は出土遺物から弥生時代中期後半段階と考えられる。

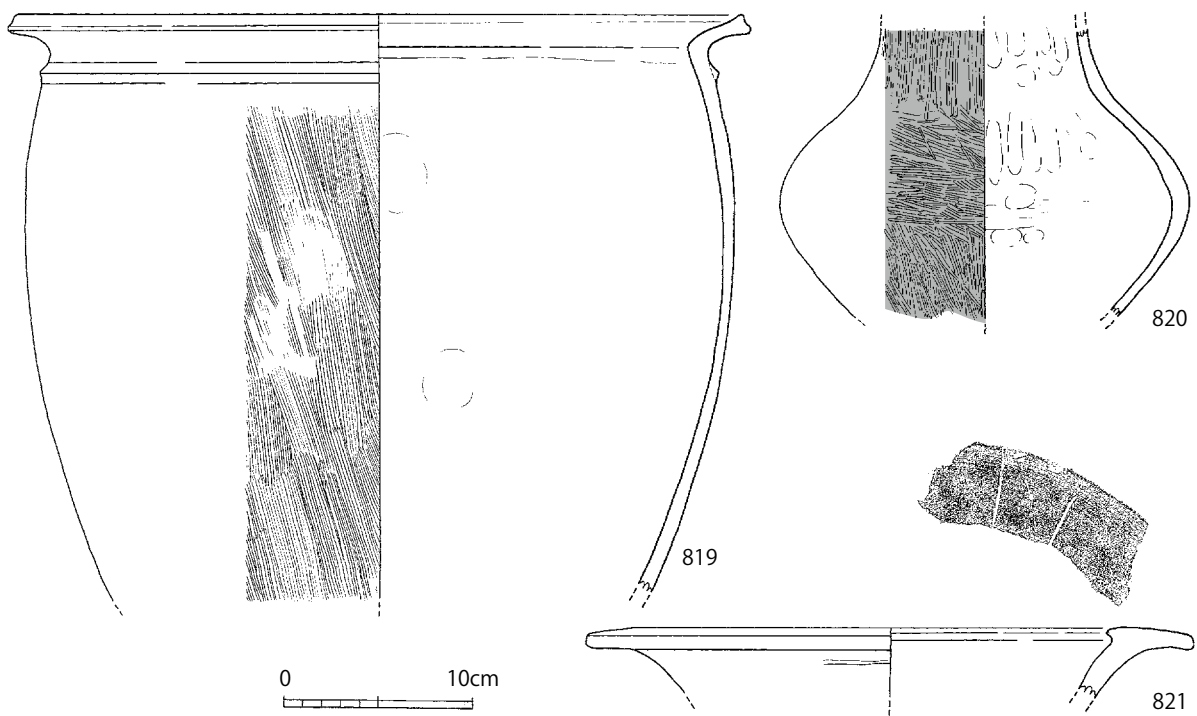
**SK454 (第211・212図)**

SK454は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.0m、短軸1.55m、深度は0.45mである。各コーナーの外部で柱穴が4本確認できた。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

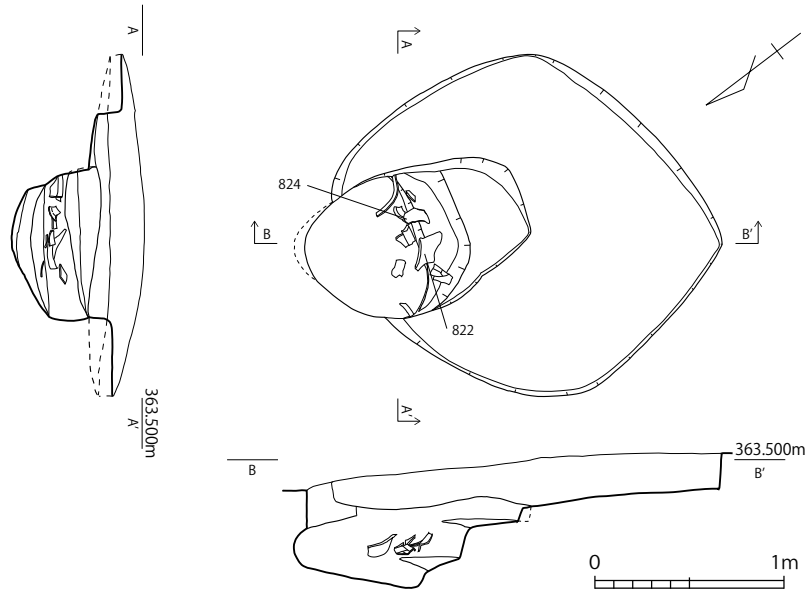
埋土の観察から、床面付近で焼土粒と炭



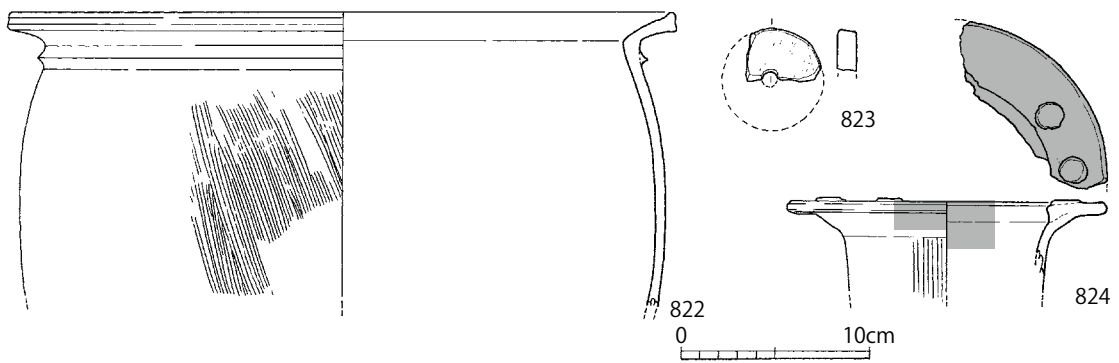
第233図 SK466実測図 (1/40)



第234図 SK466出土遺物実測図

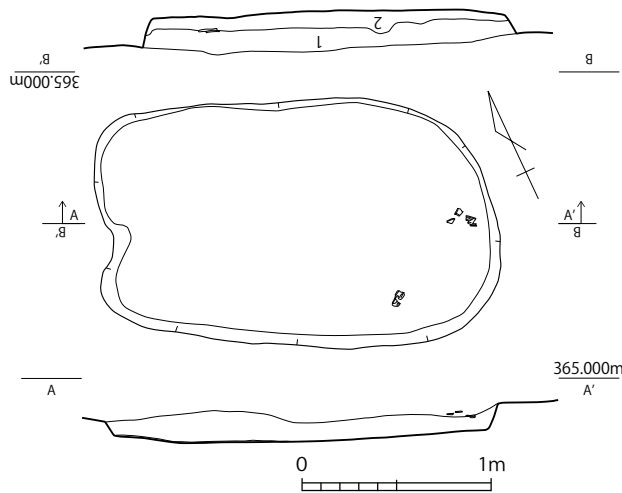


第235図 SK467実測図 (1/40)

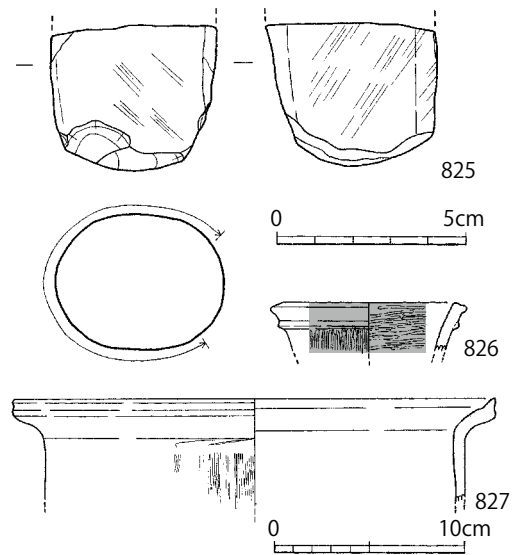


第236図 SK467出土遺物実測図

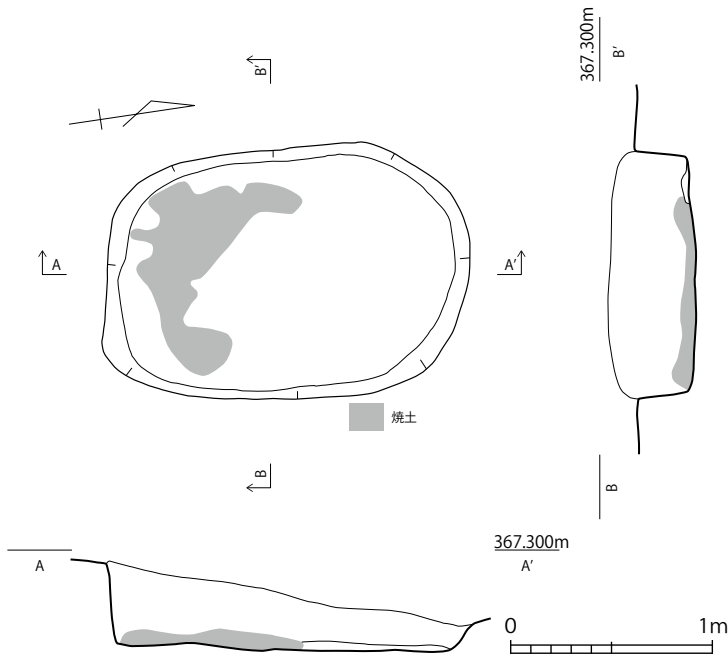
1. 黒褐色土 しまり強 粘性やや弱
2. 黒褐色土 0.5cm 大の黄褐色土のブロックを若干含む  
(2層の上面に土器がある程度まとまっている)  
しまりやや強 粘性



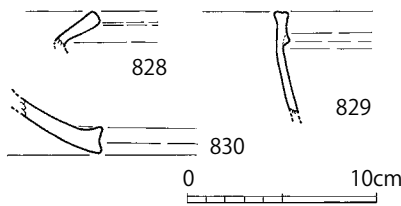
第237図 SK468実測図 (1/40)



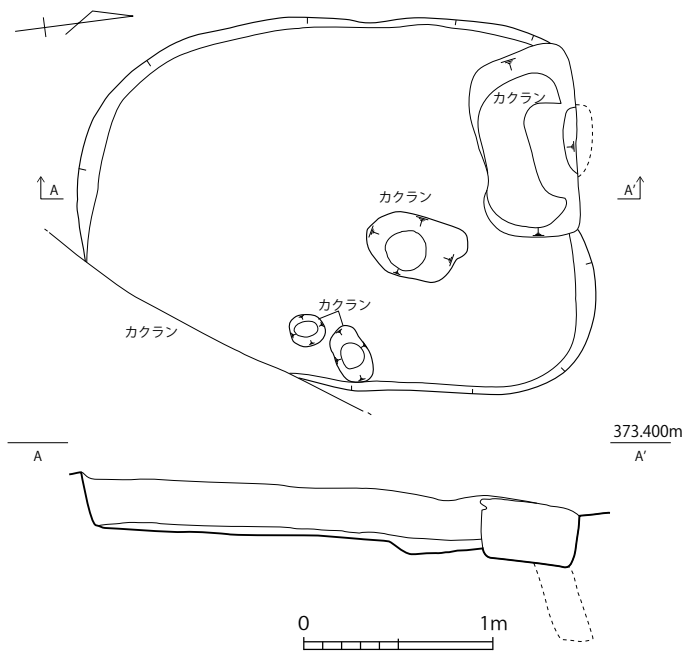
第238図 SK468出土遺物実測図



第239図 SK469実測図 (1/40)



第240図 SK469出土遺物実測図



第241図 SK470実測図 (1/40)

化材が堆積した後、自然に埋没したとみられる。遺物は埋土中から破片の状態と比較的多く出土している。埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

**SK455 (第213・214図)**

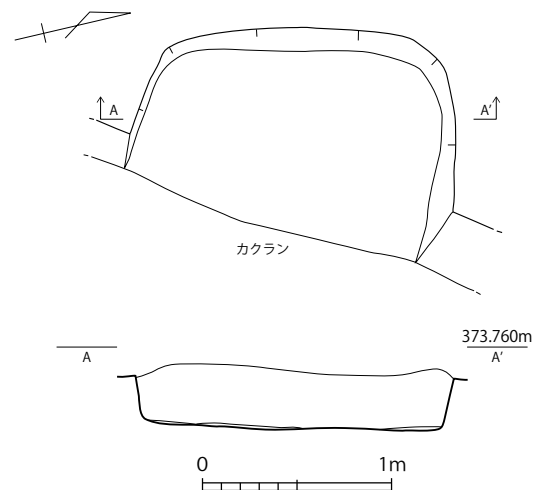
SK455は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.2m、短軸1.6m、深度は0.85mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。北東・北西・南西隅の壁面には床面から横方向ないし斜め下方向に掘られた横穴がある。土器などを貯蔵する目的の横穴と考えられ、類例としてはSH89等があげられる。

遺物は層全体から出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

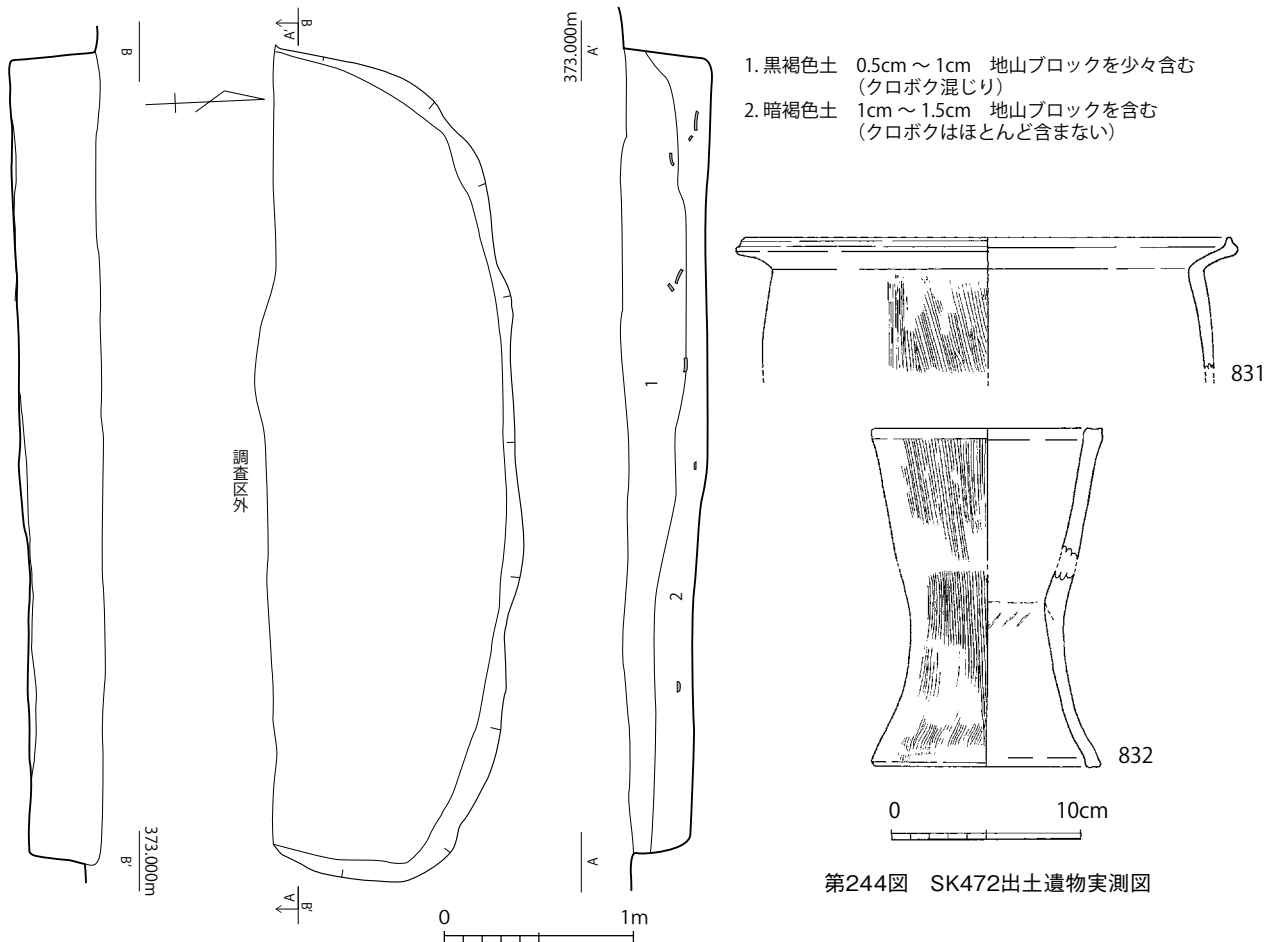
**SK456 (第215・216・217図)**

SK456は土坑(貯蔵穴)である。形状は長方形で、規模は長軸2.9m、短軸2.4m、深度は0.75mである。土坑の各コーナー外部には柱穴があるが、北東部の柱は深度が浅く柱穴ではない可能性が高い。

埋土は黒褐色土と黄褐色ブロックが混じる埋土が相互に堆積していることから、自然堆積と人為的埋土が繰り返された様相をみせる。遺物は各層から出土しているが、特に床面直上と検出面付近でまとまって出土していることから、廃絶当初と埋没途中での廃棄が顕著であったといえる。床面



第242図 SK471実測図 (1/40)



第243図 SK472実測図 (1/40)

第244図 SK472出土遺物実測図

直上と検出面付近の遺物には明確な時期差は見受けられない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK457 (第218図)

SK457は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸1.45m、短軸1.1m、深度は0.6mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

遺物は甕・壺等の小破片がわずかに出土している程度で、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK458・SK459 (第219・220図)

SK458・SK459は土坑（貯蔵穴）である。両土坑は同じ軸で近接し、外部の4本の柱穴が両土坑を囲むように配置されていることから、本来は一連の貯蔵穴として機能していたと考えられる。SK458は西側の土坑で、形状は歪んだ楕円形で、規模は長軸1.6m、短軸1.1m、深度は0.75mである。SK459は東側の土坑で、形状は楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.1m、深度は0.85mである。

SK458では遺物はわずかしこ出土しておらず、多くが破片であり図示できる資料はない。SK459についても破片資料が中心で、まとまって出土はしていない。ともに自然埋没の過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK460 (第221・222・223図) ※第222図802はSK416出土遺物

SK460は土坑（貯蔵穴）である。SK536に切られる。形状は長方形で、規模は長軸2.75m、短軸2.0m、深度は0.45

mである。床面は平坦で、南東から南西にかけて周溝がめぐる。

埋土は単一層で、自然埋没したものとみられる。遺物は床面直上から出土しているのは台石のみである。南西隅で甕・壺・高坏などまとめて出土しているが、これらは検出面あたりから中心部に向けてなだらかに傾斜して出土していることから、埋没の途中に南西の方向から一括廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半と考えられる。

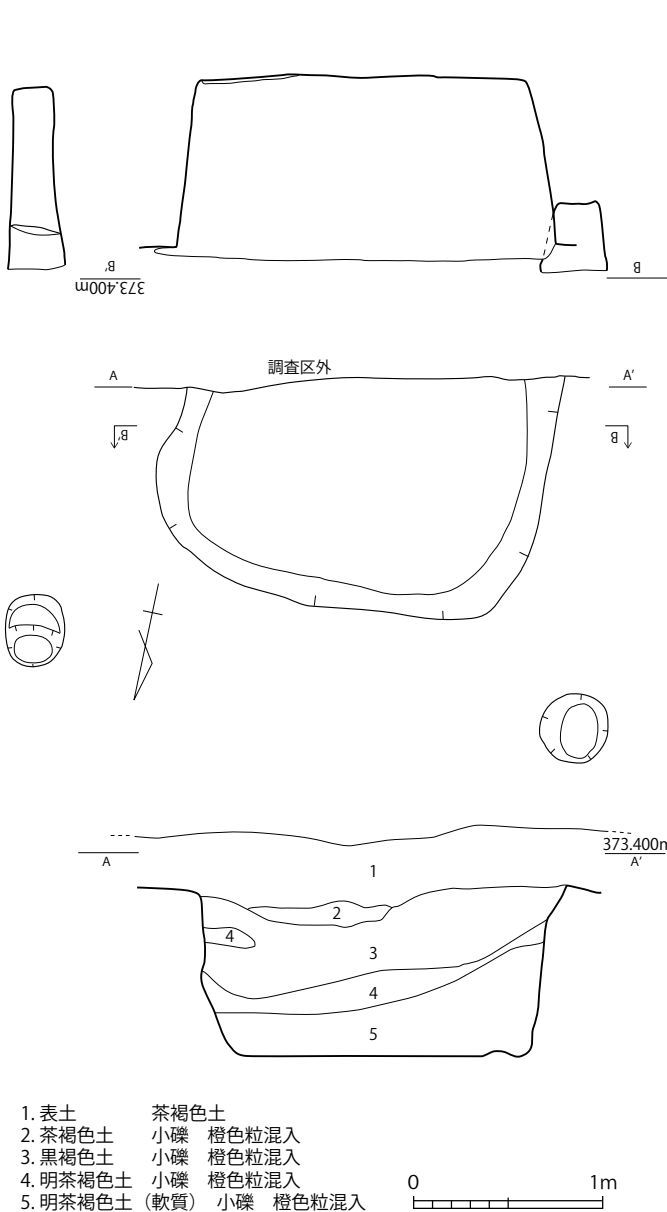
**SK461 (第224・225図)**

SK461は土坑である。SH123を切る。形状は楕円形で、規模は長軸0.6m、短軸0.5m、深度は0.5mである。上端から下端にかけて狭くなる。

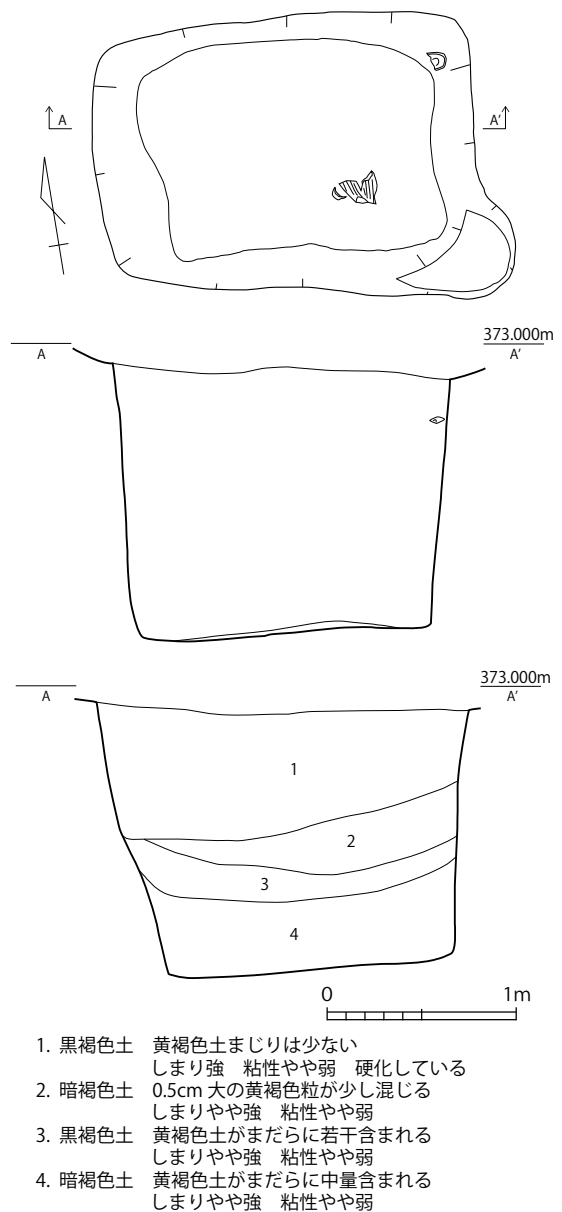
土坑内からは上部を欠いた壺と礫が出土した。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK462 (第226・227図)**

SK462は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.8m、短軸1.4m、深度は0.45mである。壁面はな

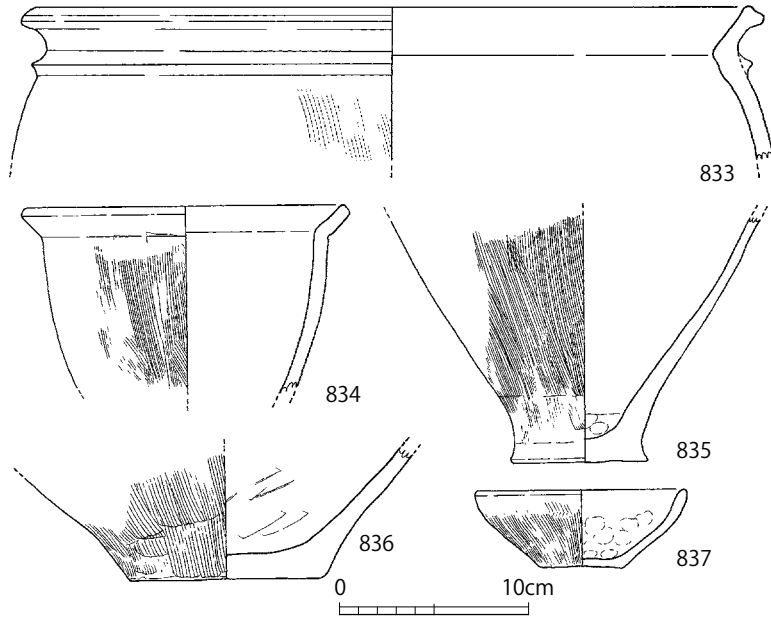


第245図 SK473実測図 (1/40)

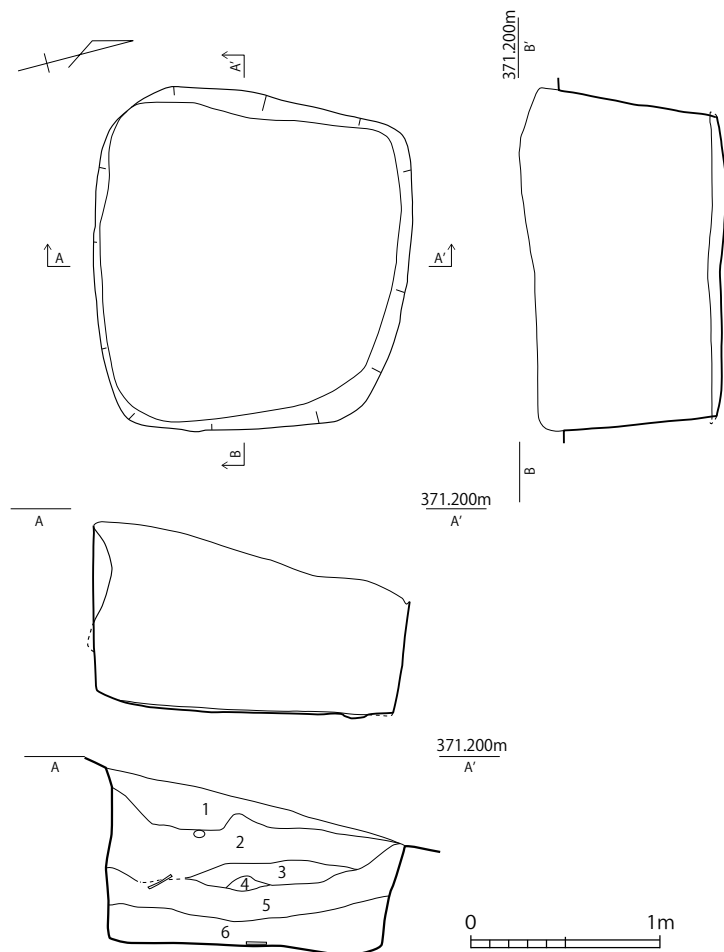


第246図 SK474実測図 (1/40)





第247図 SK474出土遺物実測図



1. 黒褐色土 しまりやや弱 粘性やや弱
2. 黒褐色土 0.5～3cm 大の黄褐色ブロックを少々含む しまりやや強 粘性やや弱
3. 暗褐色土 1cm 大の黄褐色ブロックを若干含む しまりやや強 粘性やや弱
4. 暗褐色土 しまりやや強 粘性やや弱
5. 暗褐色土 2～3cm 大の黄褐色土ブロックを少し含む しまりやや強 粘性やや弱
6. 栗褐色土 5cm 大の黄褐色土ブロックを多く含む しまり強 粘性やや弱

第248図 SK475実測図 (1/40)

だらかに立ち上がり、床面は平坦である。土坑各コーナーの外部に柱穴が確認できたが、南東部のみ検出できなかった。

埋土は自然に埋没したとみられる。遺物は破片の状態出土しており、埋没途中で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK463 (第228・229図)**

SK463は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸方形で、規模は一辺2.05m、深度は1.1mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面には歪んだ楕円形の掘り込みがある。

埋土の観察から、床面の土坑は埋没途中ないしは埋没後に掘り込まれたものではなく、廃絶前に掘り込まれ埋め戻されたものである。出土遺物はほとんどが破片の状態出土していることから、埋没過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

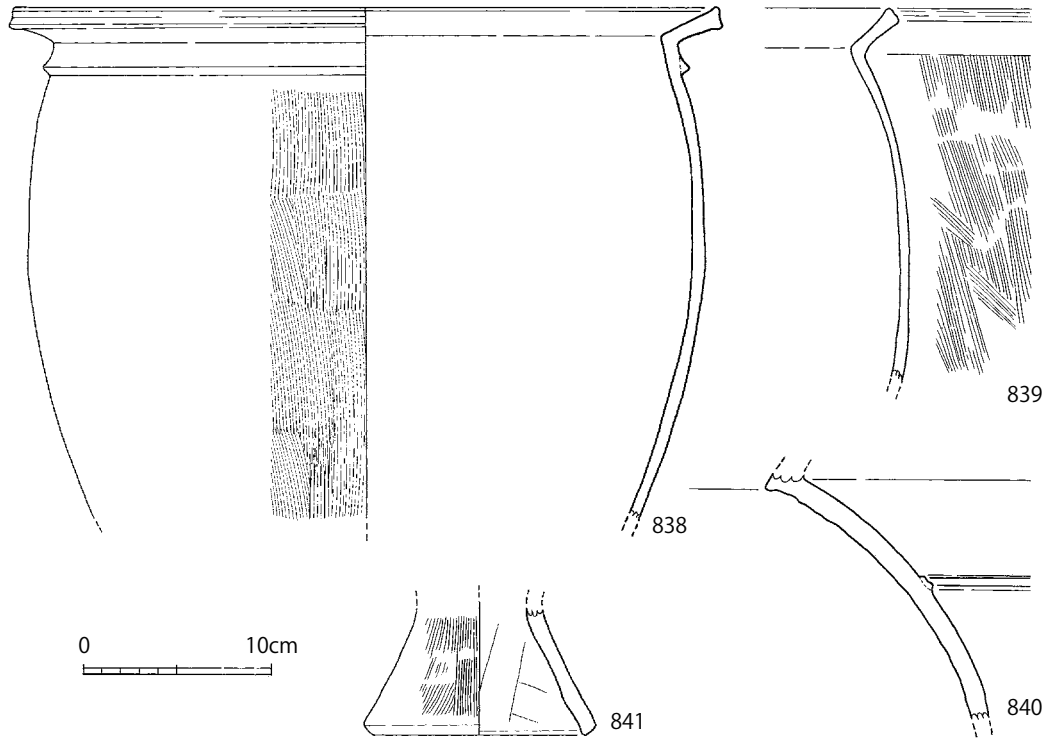
**SK464 (第230図)**

SK464は土坑(貯蔵穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.1m、深度は0.85mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

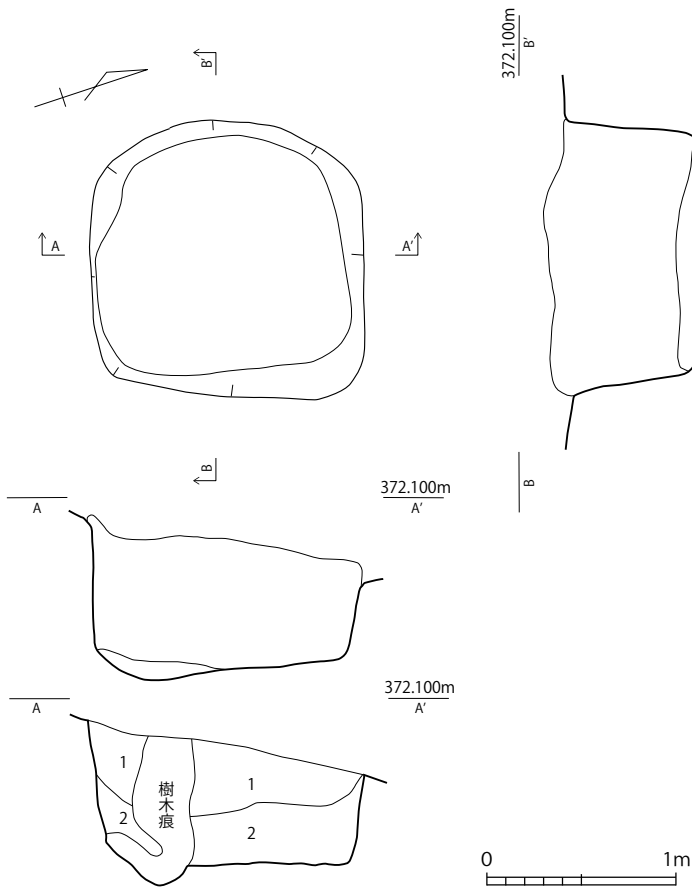
埋土は黒褐色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は土器の小破片が少量出土している程度であり、図示できるような資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK465 (第231・232図)**

SK465は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.55m、短軸



第249図 SK475出土遺物実測図



- 1. 黒褐色土 0.5～1cm 大の黄褐色ブロックが若干まじる しまりやや強 粘性なし
- 2. 黄褐色土 2～3cm 大の黒褐色ブロックが少々まじる しまりやや強 粘性やや弱

第250図 SK476実測図 (1/40)

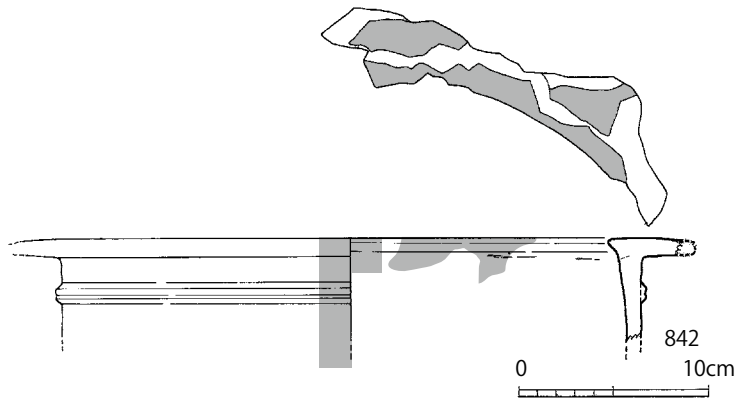
1.1m、深度は0.2mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は自然に埋没したものとみられる。遺物は埋没の過程で廃棄されたとみられるもので、床面付近から完形の脚付鉢と甕片が出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

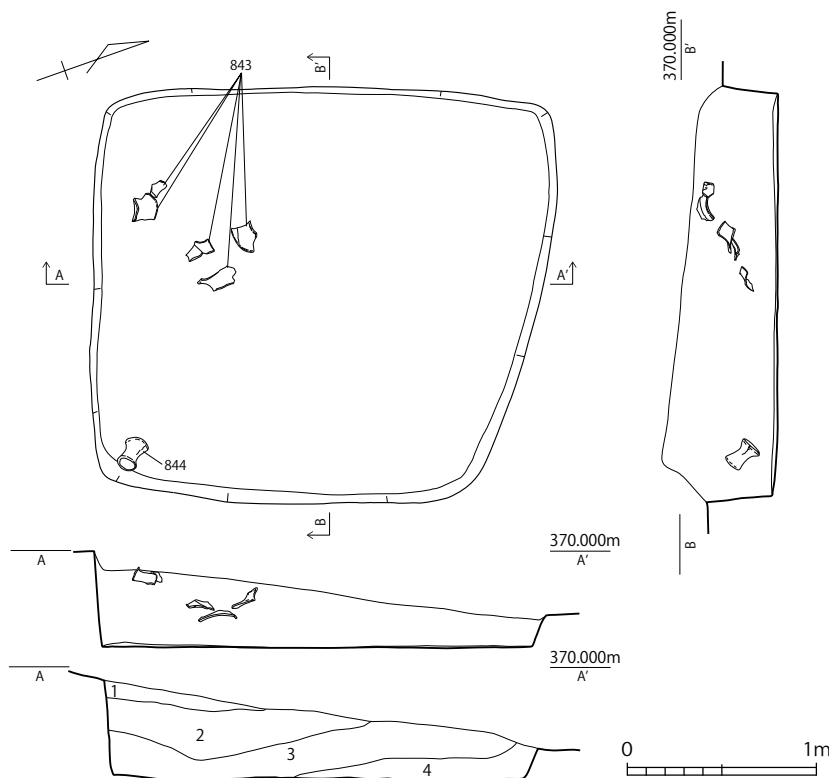
**SK466 (第233・234図)**

SK466は土坑(貯蔵穴)である。南東隅がS8に切られる。形状は長方形で、規模は長軸2.15m、短軸1.9m、深度は0.55mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。土坑コーナーの外部には柱穴が4本あるが、土坑からの間隔は一定にはない。柱穴は径0.3～0.4m、検出面からの深度は0.3mである。

埋土は主に南方向から土が流入したことにより埋没している。遺物は埋没過程で廃棄されたものとみられる破片がまとめて出土している。出土遺物は甕・壺などであるが、いずれも破損した破片が廃棄されている。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

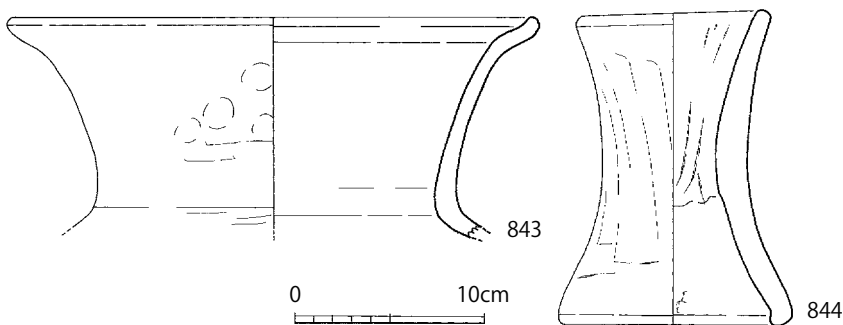


第251図 SK476出土遺物実測図



- 1. 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや弱
- 2. 黒褐色土 1～3cm 大の黄褐色ブロックを  
少々含む しまりやや強  
粘性やや弱
- 3. 黒褐色土 しまりやや強 粘性やや弱
- 4. 黒褐色土 0.5～3cm 大の黄褐色ブロックを  
若干含む しまりやや強 粘性やや弱

第252図 SK477実測図 (1/40)



第253図 SK477出土遺物実測図

SK467 (第235・236図)

SK467は土坑である。形状は菱形に近い歪な方形で、規模は長軸2.1m、短軸1.8m、深度は0.2mである。この北東隅に楕円形の土坑が掘り込まれている。楕円形の土坑は斜め方向に掘り下げられているため、奥壁はオーバーハングする。楕円形土坑の規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深度は0.6mである。

菱形と楕円形土坑の埋土は黒褐色土であり、ともに自然埋没したものとみられる。遺物は埋没途中でまともな状態で出土した。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

SK468 (第237・238図)

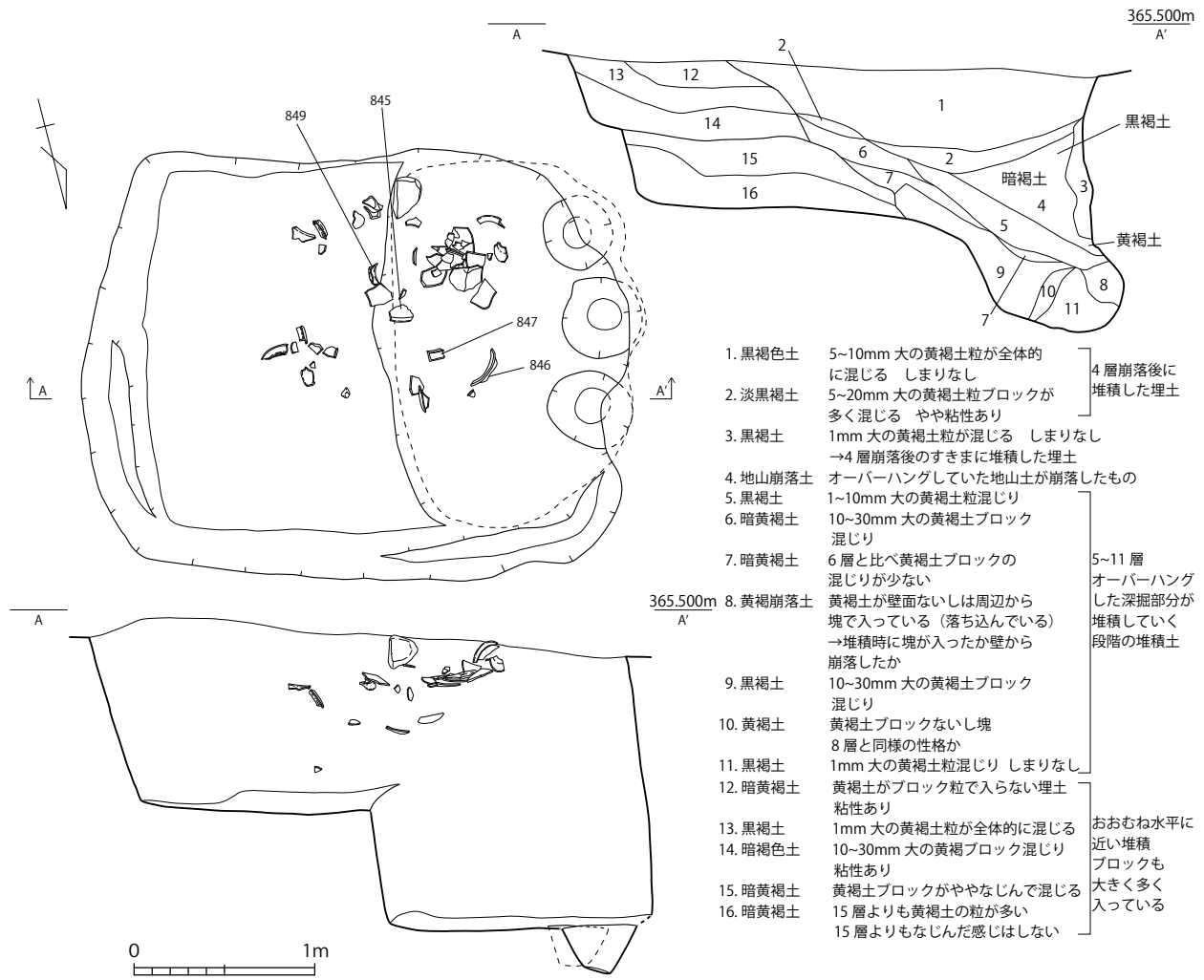
SK468は土坑である。形状は隅丸長方形に近く、規模は長軸2.1m、短軸1.3m、深度は0.15mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は中央から端にむかってなだらかに起伏する。

遺物は1層から出土したもので、遺物の多くが破片の状態であることから、埋没過程に混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

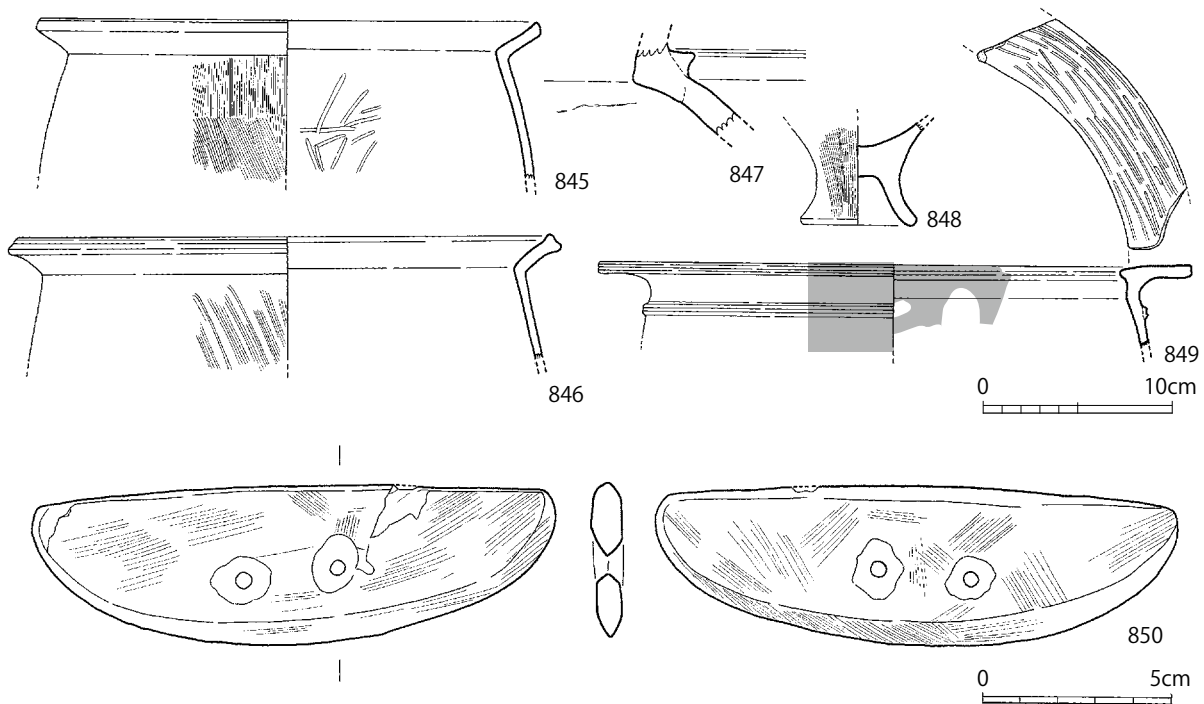
SK469 (第239・240図)

SK69は土坑である。形状は楕円形で、規模は長軸1.8m、短軸1.25m、深度は0.4mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。南側床面付近では焼土粒が面的に広がって検出できた。

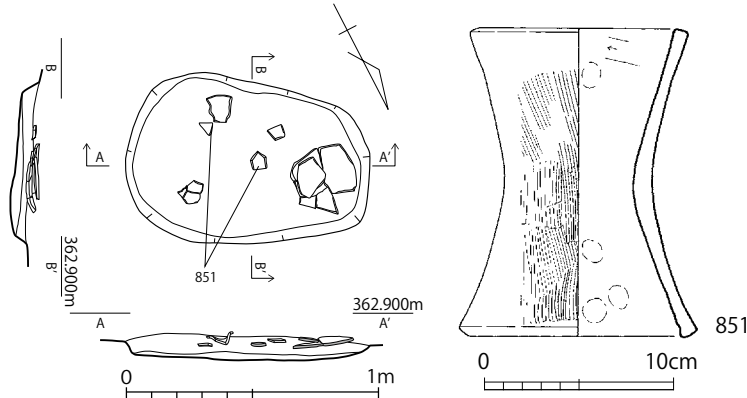
埋土は黒色土の単一層であることから、焼土粒の堆積後に自然に埋没したものとみられる。遺物は小破片が多く、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第254図 SK478実測図 (1/40)



第255図 SK478出土遺物実測図

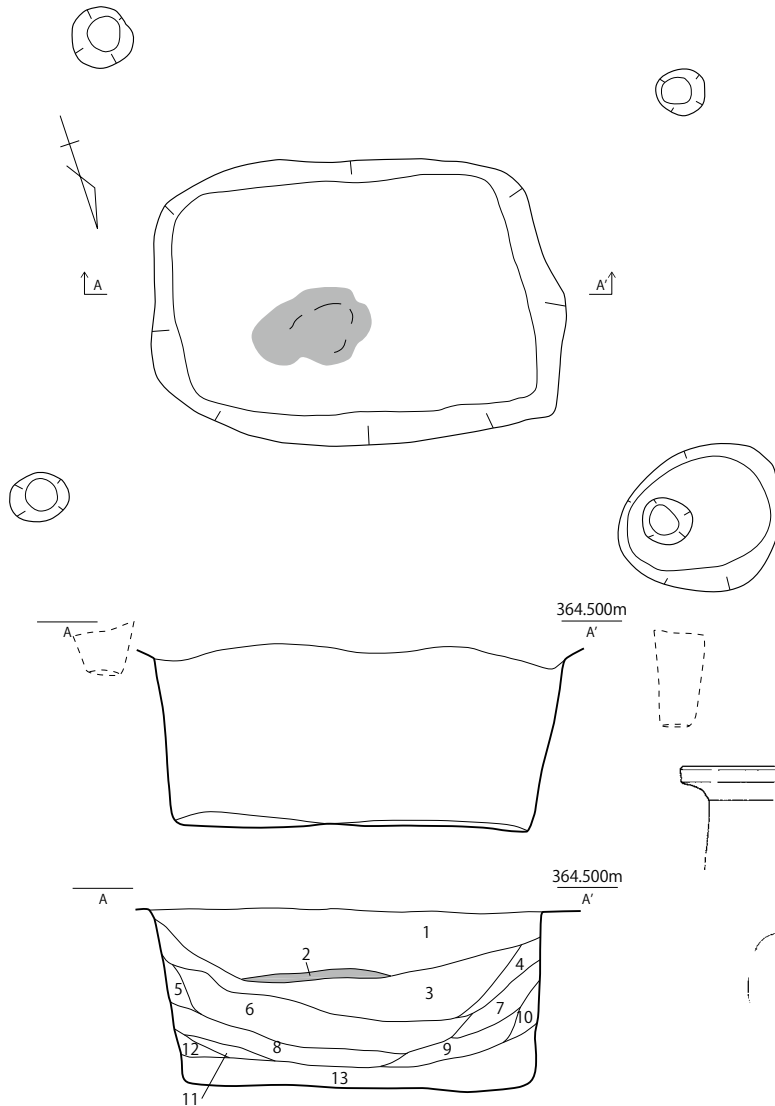


第256図 SK479実測図 (1/30) 第257図 SK479出土遺物実測図

SK470 (第241図)

SK470は土坑である。南東隅は攪乱により削平されている。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.65m、短軸1.95m、深度は0.3mである。

埋土は黒色土の単一層で、自然埋没したとみられる。遺物は甕の小破片がわずかに出土したのみで、図示できるような資料はない。こうした小破片が床面から浮いた状態で出土していることから、埋没過程で混入したものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



- |             |                                  |               |                                  |
|-------------|----------------------------------|---------------|----------------------------------|
| 1. 黒褐土      | 1~5mm 大の黄褐土<br>焼土粒が全体的に混じる       | 8. 暗黄褐土       | ややなじんだ黄褐土<br>ブロック混じり<br>(10層と同質) |
| 2. 焼土のまとまり  | 焼土のまとまりは面的に<br>認められる 3層の堆積に沿った形  | 9. 3層と同色 同質   |                                  |
| 3. 暗褐土      | 黒褐土中にややなじんだ暗褐土<br>ブロックが混じる       | 10. 暗黄褐土      | ややなじんだ黄褐土の<br>粒が多く混じる            |
| 4. 黒褐土      | 10~30mm 大の黄褐ブロックが<br>わずかに混じる     | 11. 黄褐土塊      | 崩落?                              |
| 5. 3層と同色 同質 |                                  | 12. 10層と同色 同質 |                                  |
| 6. 黒褐土      | 1~5mm 大の黄褐土粒が全体的に<br>多く混じる 1層と同質 | 13. 7層と同色 同質  |                                  |
| 7. 黒褐土      | 6層と比べ黄褐土粒の混じりが少ない                |               |                                  |

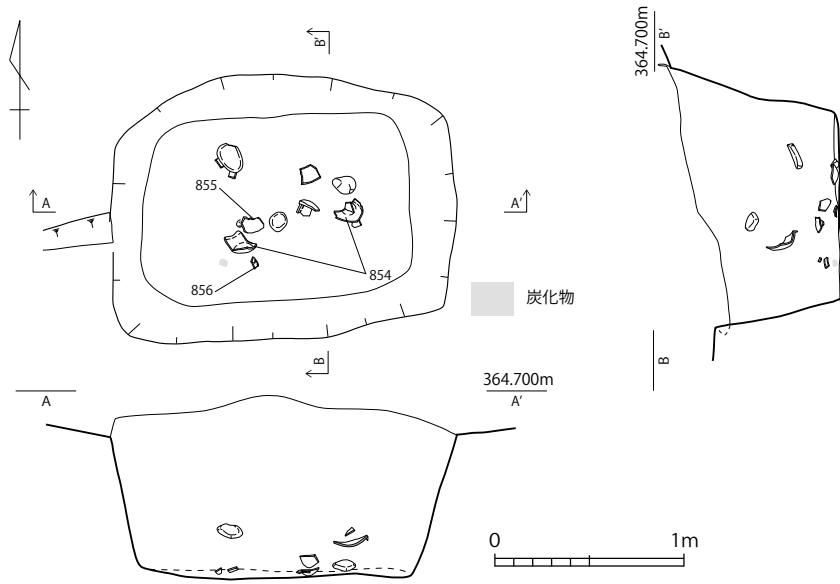
第258図 SK480実測図 (1/40)

SK471 (第242図)

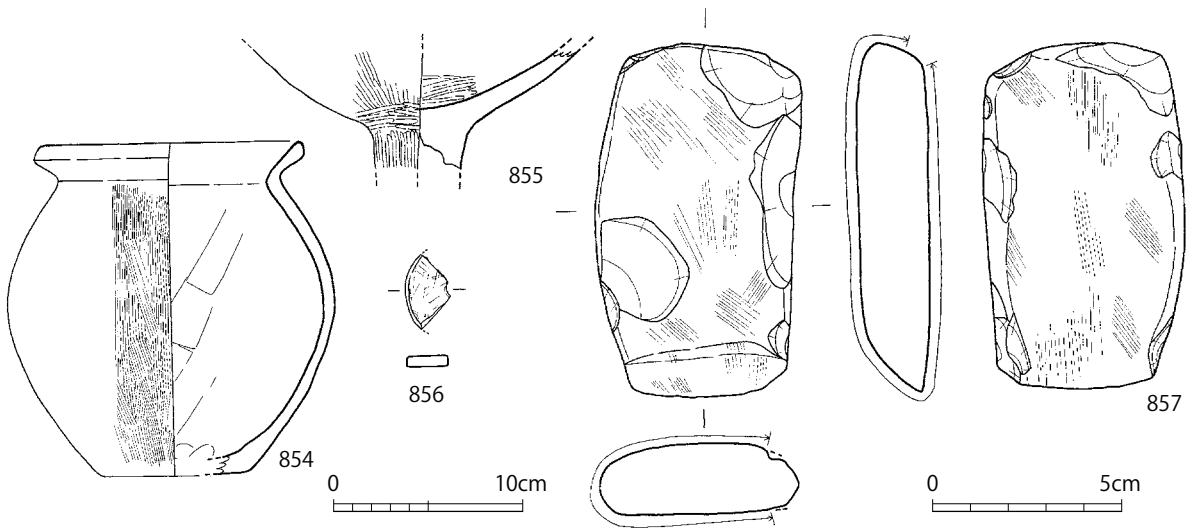
SK471は土坑(貯蔵穴)である。東半分は攪乱により削平されているが、形状は方形と考えられる。規模は削平を受けていない部分をみると、一辺が1.7m、深度は0.3mである。

埋土は黒色土の単一層で、埋没過程で混じり込んだとみられる遺物が出土している。遺物は小破片

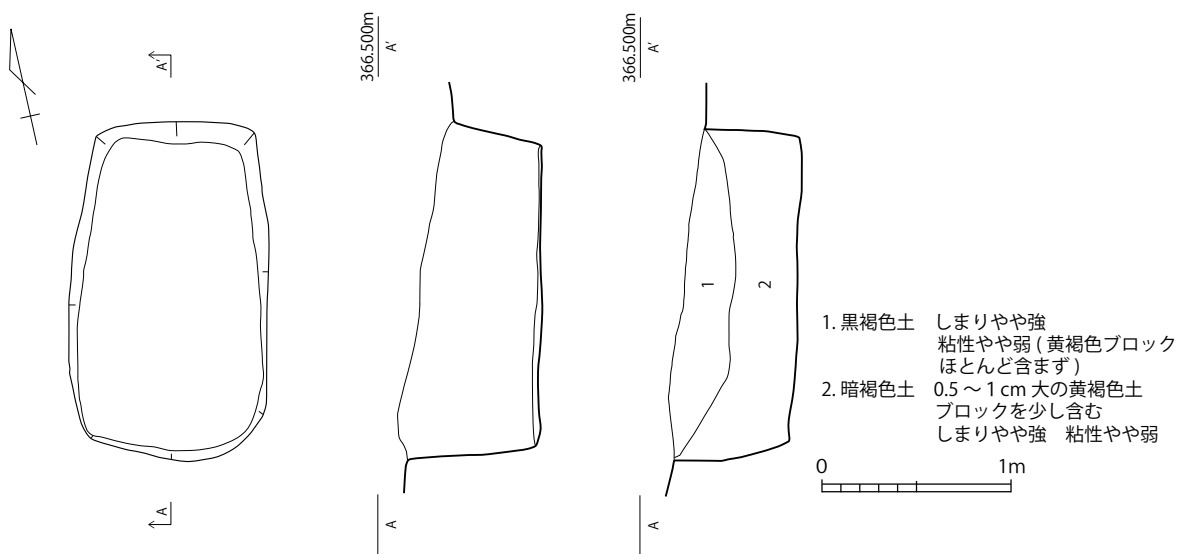
第259図 SK480出土遺物実測図



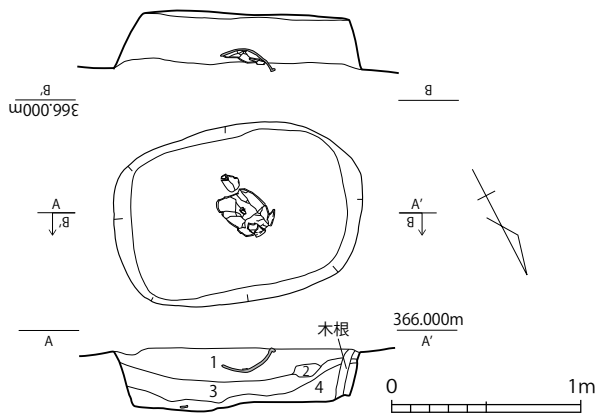
第260図 SK481実測図 (1/40)



第261図 SK481出土遺物実測図

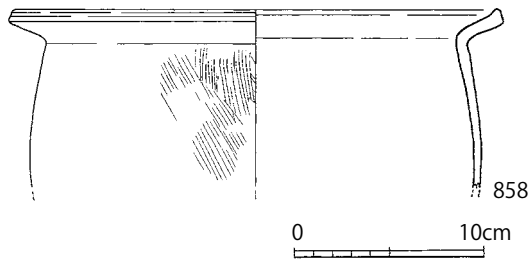


第262図 SK482実測図 (1/40)

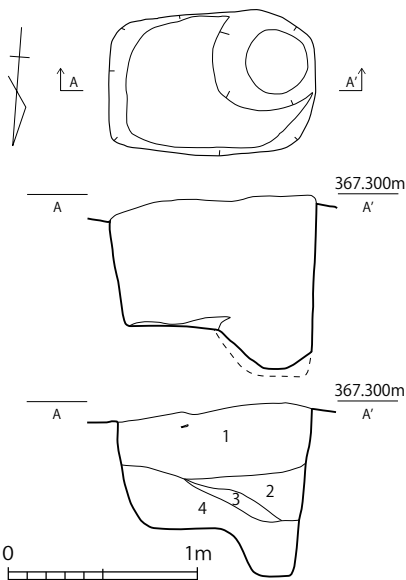


1. 黒褐色土 0.5cm 大の黄褐色粒を少し含む しまりやや強 粘性やや弱
2. 黒褐色土 0.5cm 大の黄褐色粒を中量含む しまりやや弱 粘性やや弱
3. 黒褐色土 0.5cm 大の黄褐色粒を若干含む しまりやや強 粘性やや弱
4. 黒褐色土 0.5～1cm 大の黄褐色粒を少し含む しまりやや強 粘性やや弱

第263図 SK483実測図 (1/40)

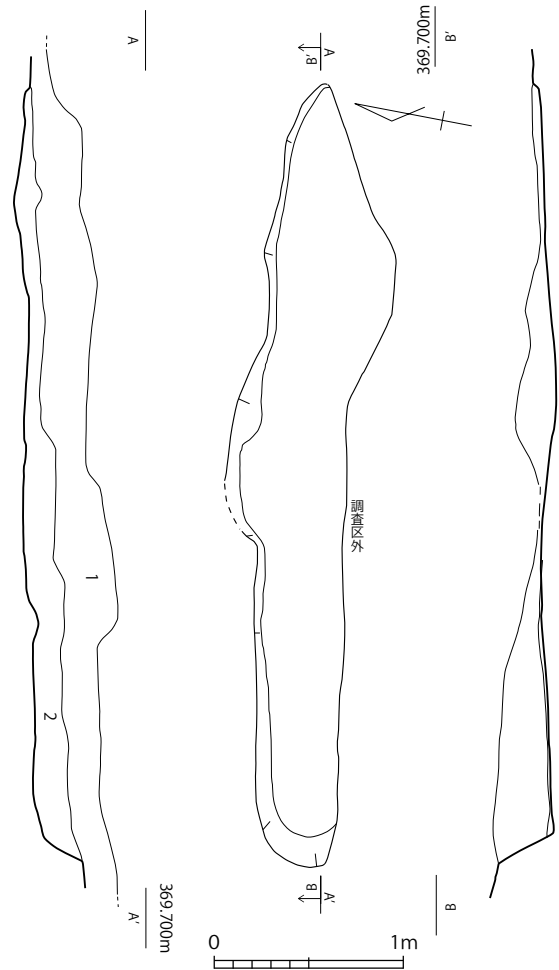


第264図 SK483出土遺物実測図



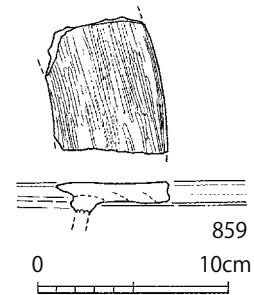
1. 黒色土 1～10mm 大の黄褐ブロックが全体的に多く混じる
  2. 暗褐色土 1cm 大の黄褐ブロックわずかに混じり
  3. 黒褐色土 5mm 大の黄褐色土が全体的に混じる
  4. 暗黄褐色土 黄褐土粒・ブロックが混じる やや黄褐土の混じりが他の層よりも多い
- ※ 4→3→2 は東側から堆積した様相を呈する  
ブロックは混じるがややなじんでおり、自然堆積による埋没か

第267図 SK485実測図 (1/40)

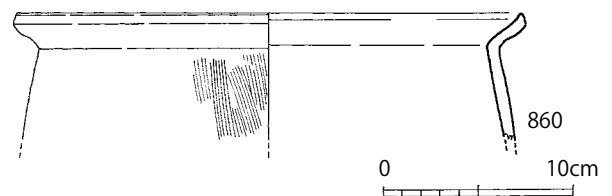


1. 表土 竹の根が多く入る 茶褐色を呈し、しまりなし
2. 暗褐色土 遺構埋土だが竹の根によりかなり攪乱されている黄褐色土粒まじり しまりややあり

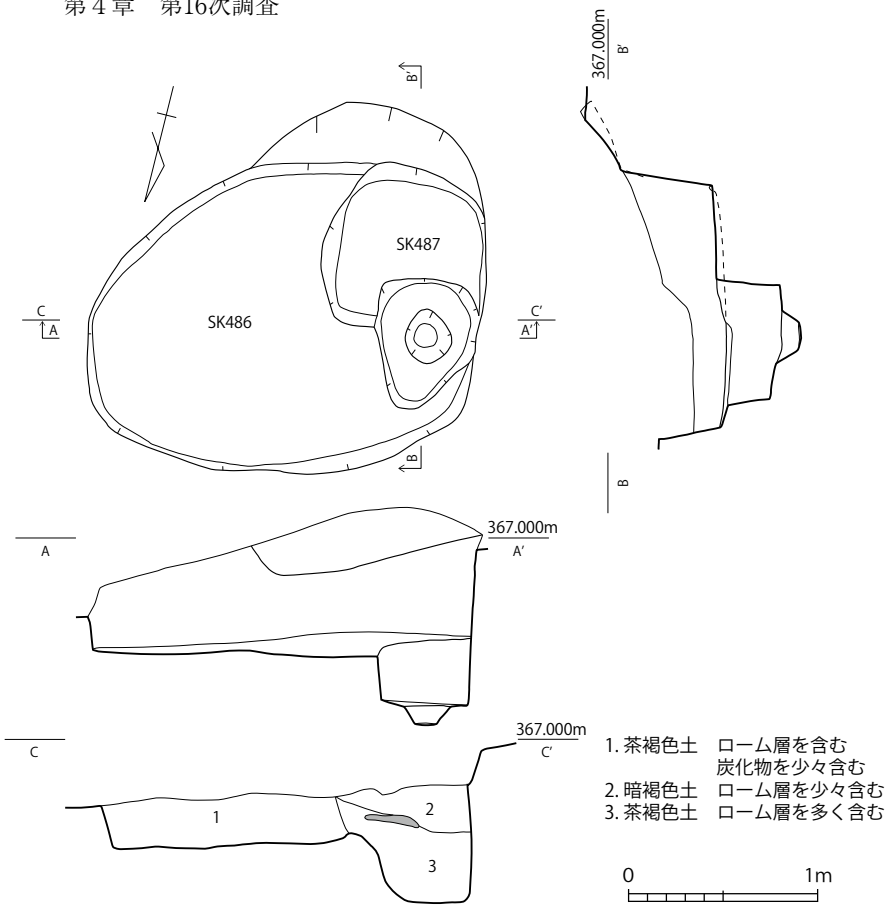
第265図 SK484実測図 (1/40)



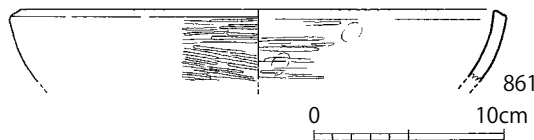
第266図 SK484出土遺物実測図



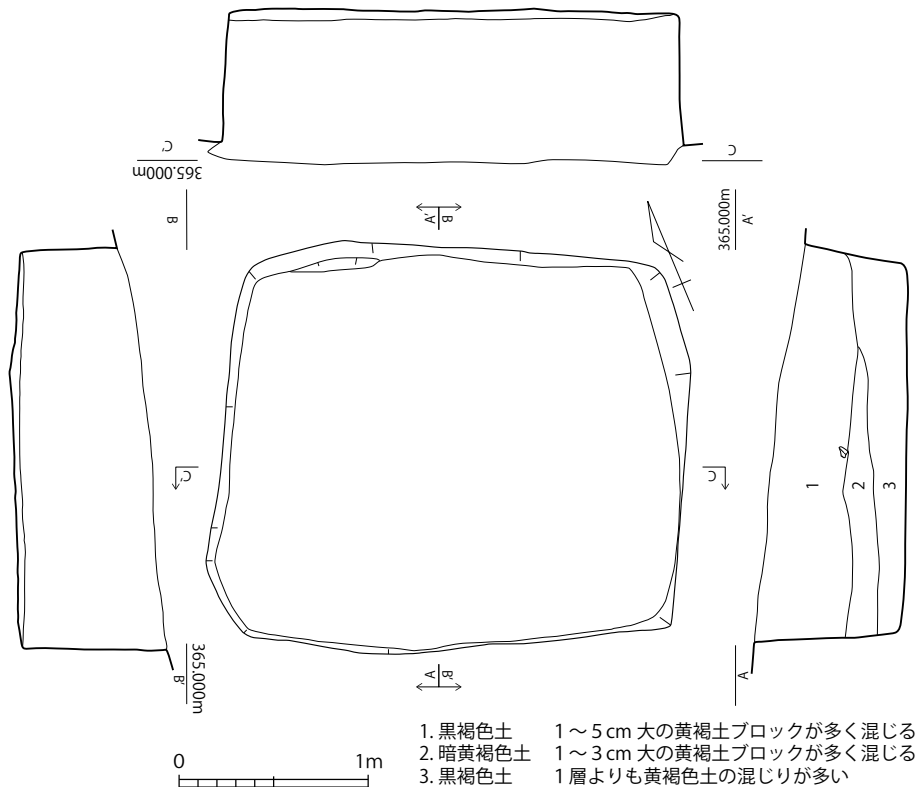
第268図 SK485出土遺物実測図



第269図 SK486・SK487実測図 (1/40)



第270図 SK486出土遺物実測図



第271図 SK488実測図 (1/40)

となった甕等がわずかに出土した程度で、図示できるような資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK472 (第243・244図)**

SK472は土坑である。南側は調査区外のため未掘であるが、形状は楕円形ないし隅丸方形と考えられる。規模は東西42m、深度は0.45mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

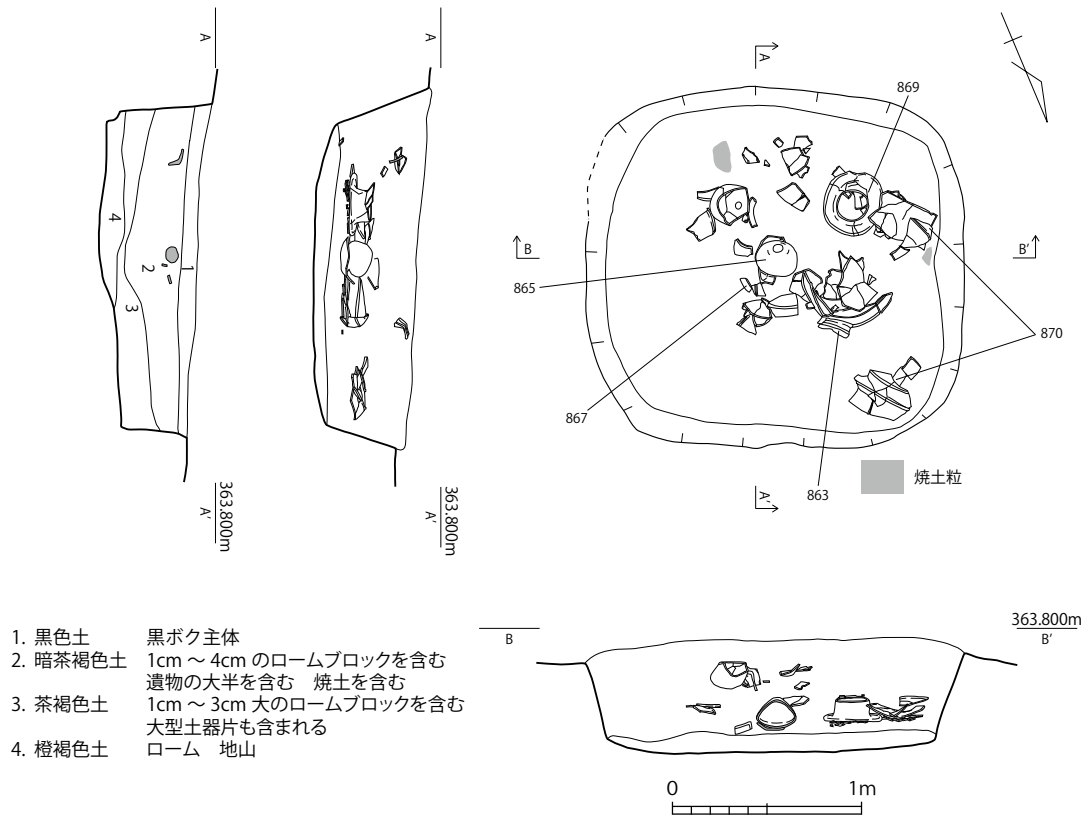
埋土は自然に埋没したものとみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだとみられる土器片が1・2層全般から出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK473 (第245図)**

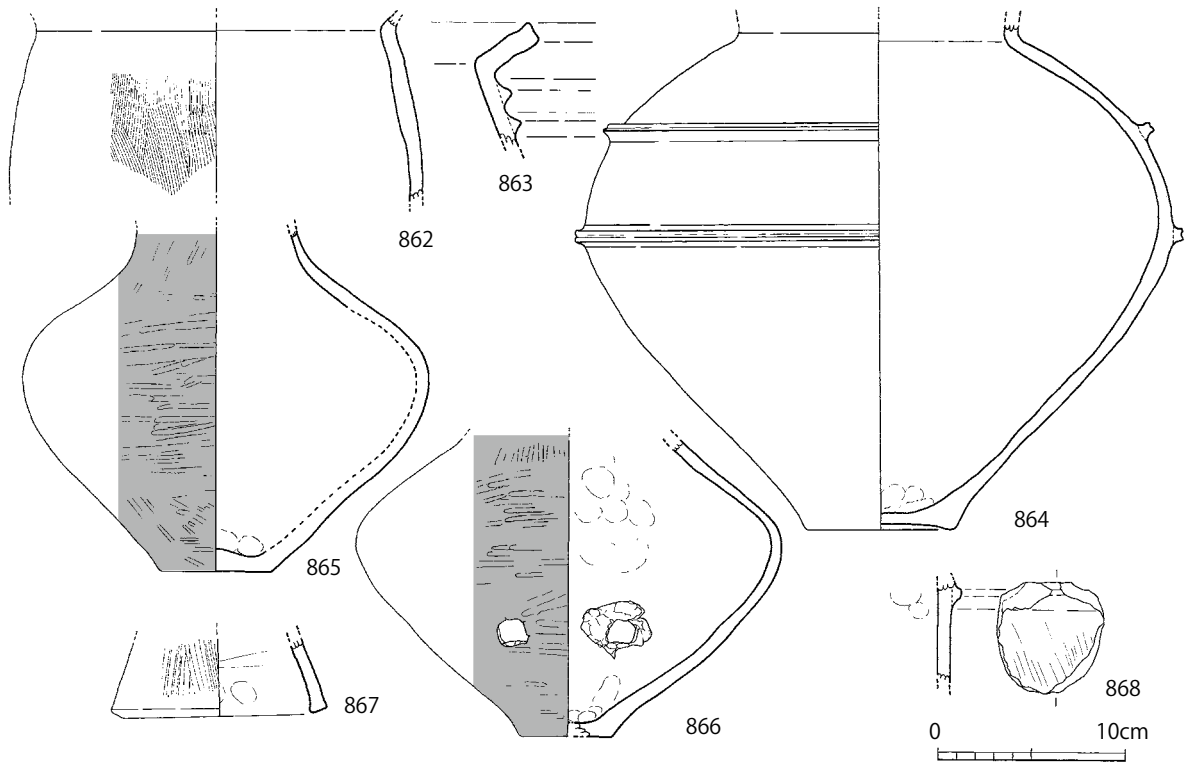
SK473は土坑（貯蔵穴）である。南半分が調査区外のため未掘であるが、形状は隅丸方形と推測できる。規模は判明している一辺が2.0m、深度は0.9mである。本来は土坑の各コーナーの外部に4本の柱穴がともなうと想定できるが、北側2本しか確認できていない。

埋土は西側からの流入土により埋没したとみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだもので、甕や壺の小破片がわずかに出土している程度で、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

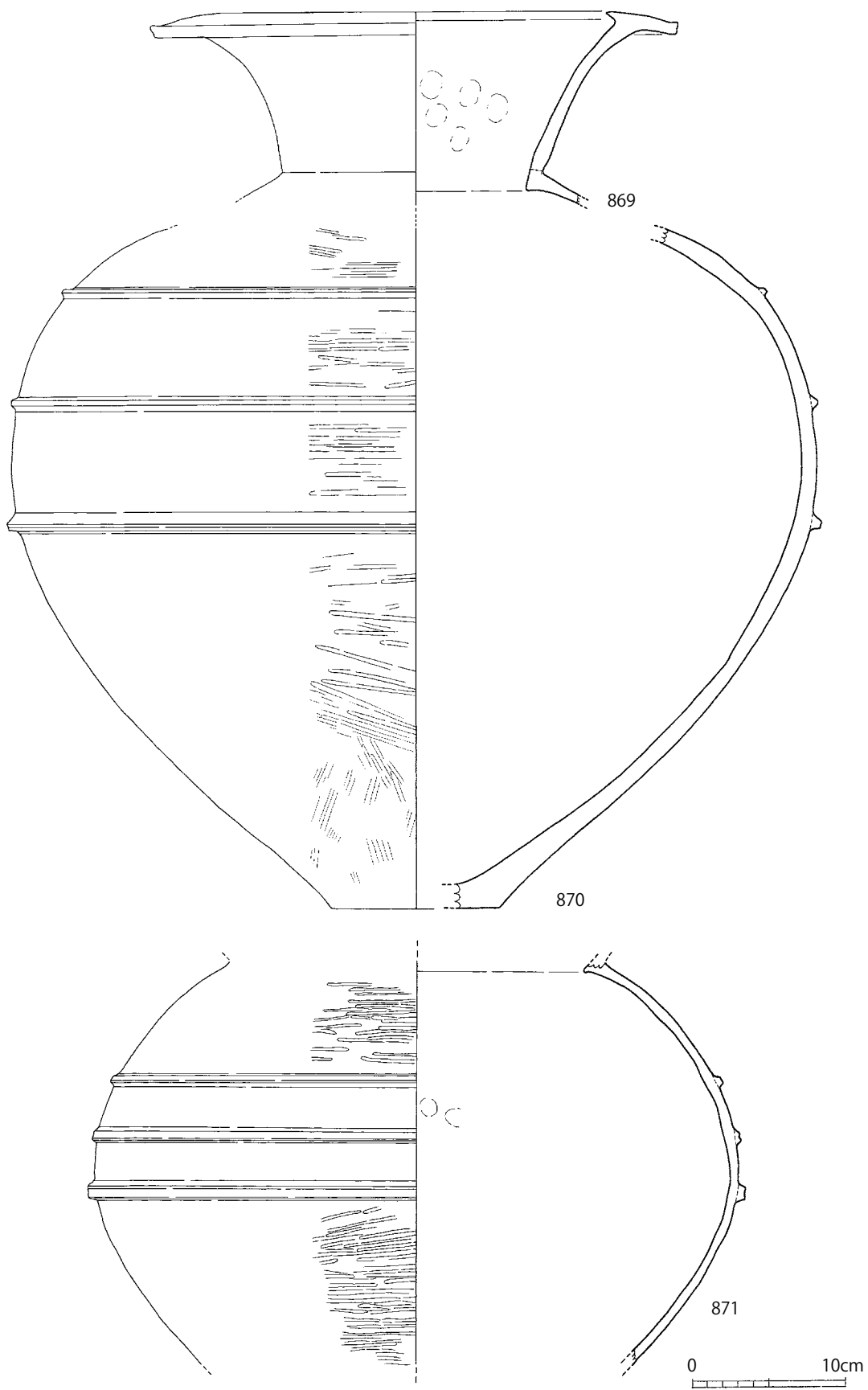




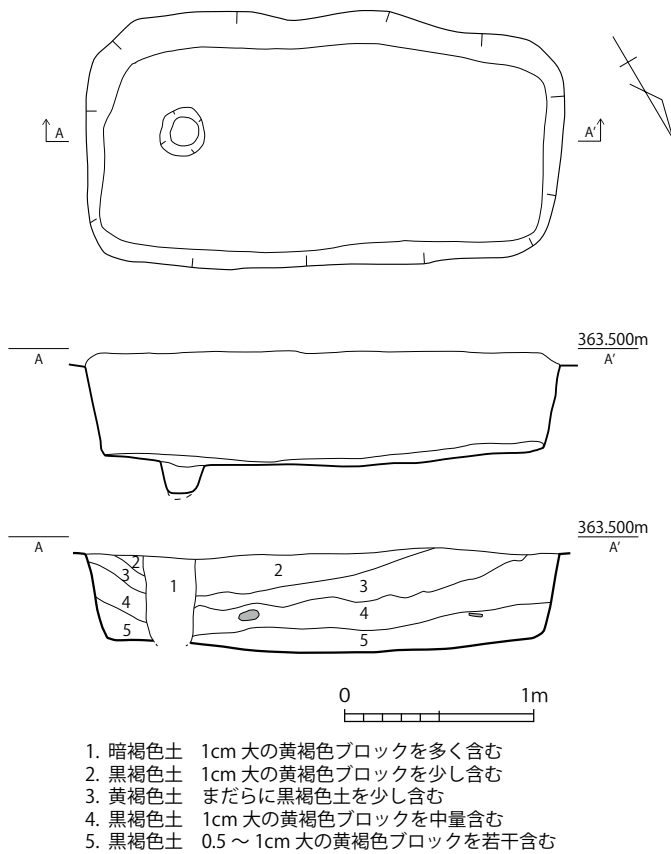
第272図 SK489実測図 (1/40)



第273図 SK489出土遺物実測図①

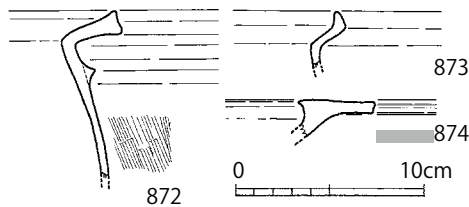


第274図 SK489出土遺物実測図②



1. 暗褐色土 1cm大の黄褐色ブロックを多く含む
2. 黒褐色土 1cm大の黄褐色ブロックを少し含む
3. 黄褐色土 まだらに黒褐色土を少し含む
4. 黒褐色土 1cm大の黄褐色ブロックを中量含む
5. 黒褐色土 0.5～1cm大の黄褐色ブロックを若干含む

第275図 SK490実測図 (1/40)



第276図 SK490出土遺物実測図

**SK474 (第246・247図)**

SK474は土坑である。SH148に切られる。形状は長方形で、長軸2.0m、短軸1.5m、深度は1.4mである。南東隅にテラスがあるが、これは床面に降りる際の足場としての機能が考えられる。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

各層から遺物が出土しており、自然に埋没していく過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK475 (第248・249図)**

SK475は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸方形、規模は一辺1.8m、深度は0.9mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は主に南側からの流入土により埋没したとみられる。遺物は主に1～3層といった上部層から出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK476 (第250・251図)**

SK476は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸方形で、一辺は1.45m、深度は0.7mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦であるが、南部分は樹木の影響を受けている。

遺物は甕・須玖式甕・壺・器台などの小破片がわずかに出土している程度で、自然埋没

の過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

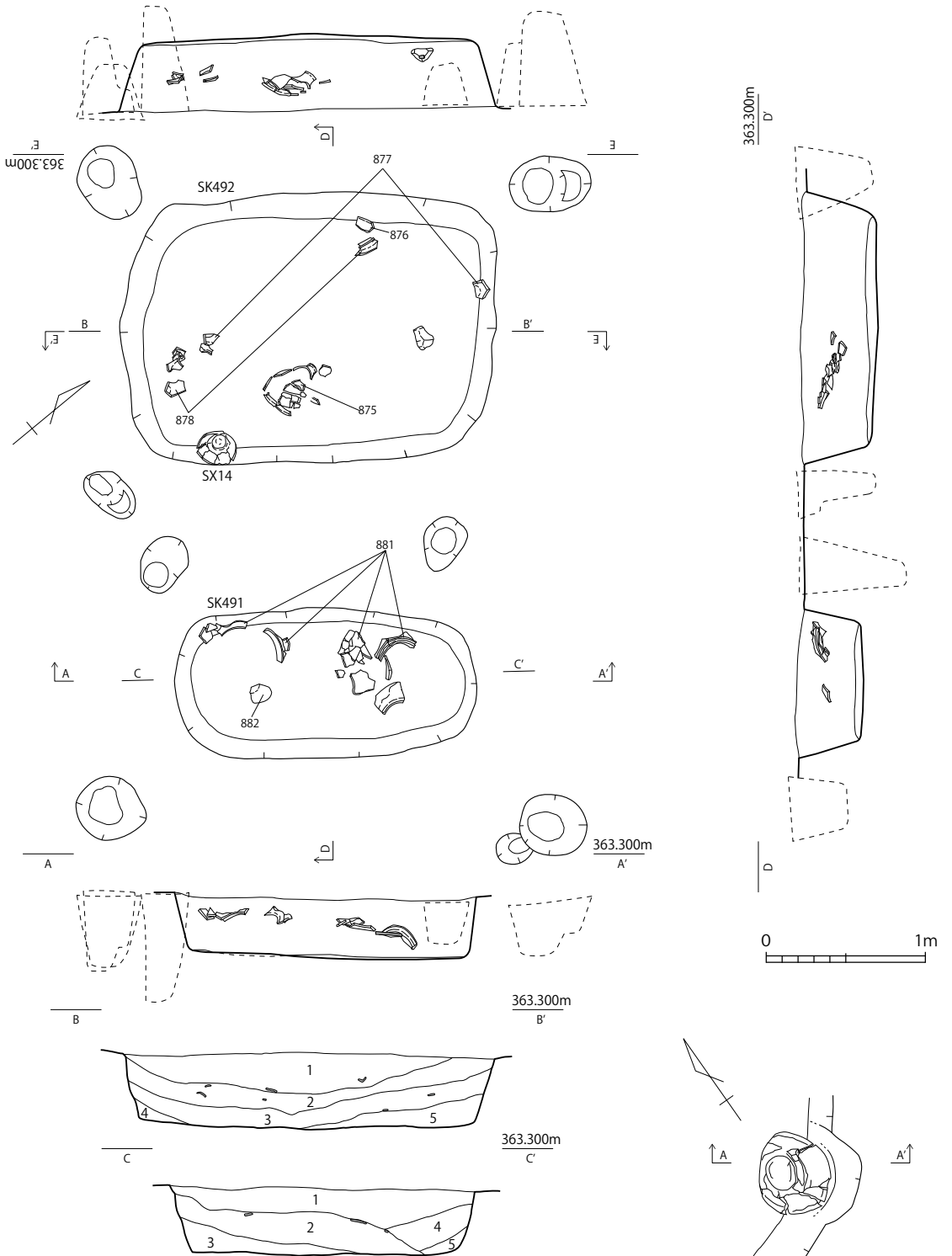
**SK477 (第252・253図)**

SK477は土坑（貯蔵穴）である。形状は歪な台形で、規模は長軸2.4m、短軸2.2m、深度は0.5mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。南側コーナーの外部に2本の柱穴を確認したが、北側では確認できなかったため、外部柱穴はないと判断した。

土層の観察から、埋土は傾斜する地形とは逆の北側方向から流入している。遺物は各層全般から出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。南東隅で器台が、南西付近では広口壺の口縁部がまとまって出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK478 (第254・255図)**

SK478は土坑である。SH154を切る。形状は長方形で、規模は長軸3.0m、短軸2.3m、最深度は1.4mである。SK478は一度埋没（12～16層）した後、西側に掘り直しが行われている。掘り直しは東から西方向に傾斜をつ



SK492

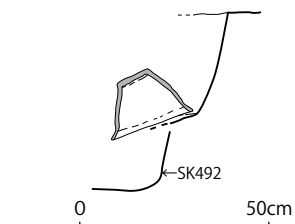
- 1. 黒褐色土 やや粘質 砂質 黄色粒子含む
  - 2. 暗褐色土 黄色土小ブロック含む
  - 3. 淡褐色土 大きめ黄色土ブロックが北側に多い
  - 4. 褐色土 やや粘質
  - 5. 淡褐色土 やや粘質 黄色土小ブロック若干含む
- 大半の土器が伴う

SK491

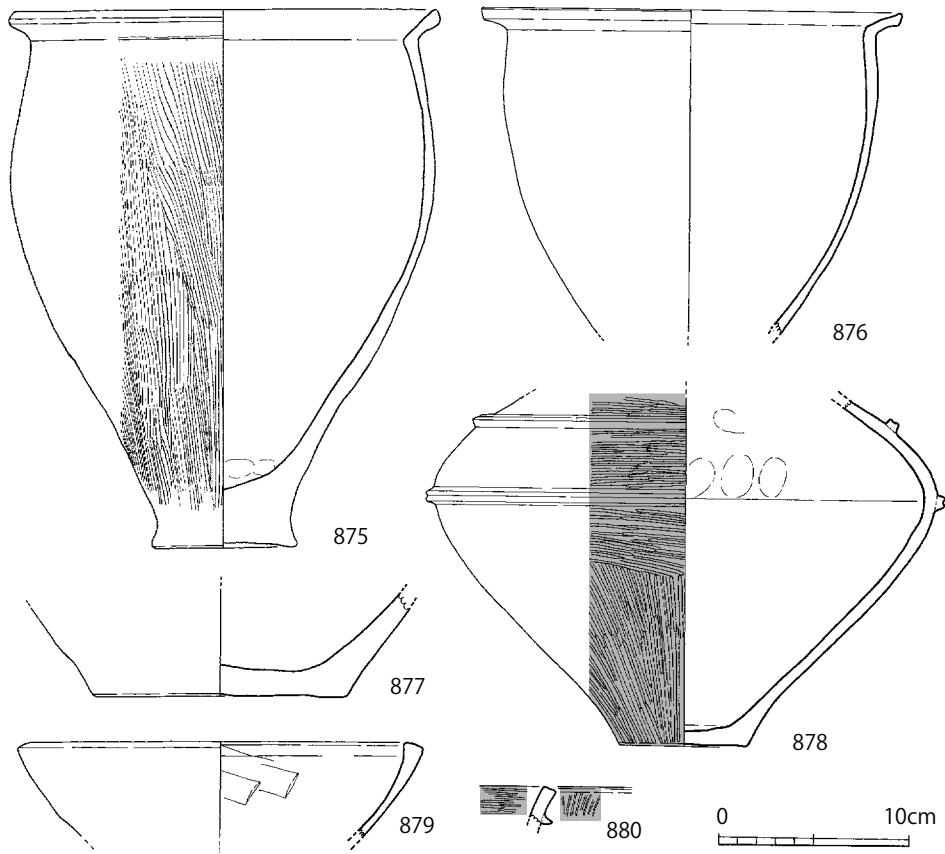
- 1. 黒褐色土 やや砂質 黄色土小ブロック含む
- 2. 茶褐色土 やや粘質 わずかに黄色土小ブロック含む  
出土土器の大半はこの層に含まれる
- 3. 暗褐色土 やや粘質 砂質 大きめの黄色土ブロック含む
- 4. 暗茶褐色土 わずかに黄色土ブロック含む
- 5. 暗褐色土 軟質

第277図 SK491・492実測図 (1/40)

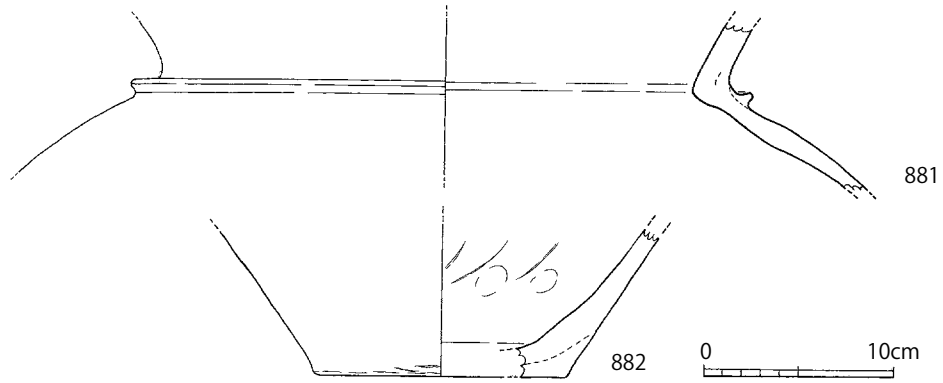
SK492



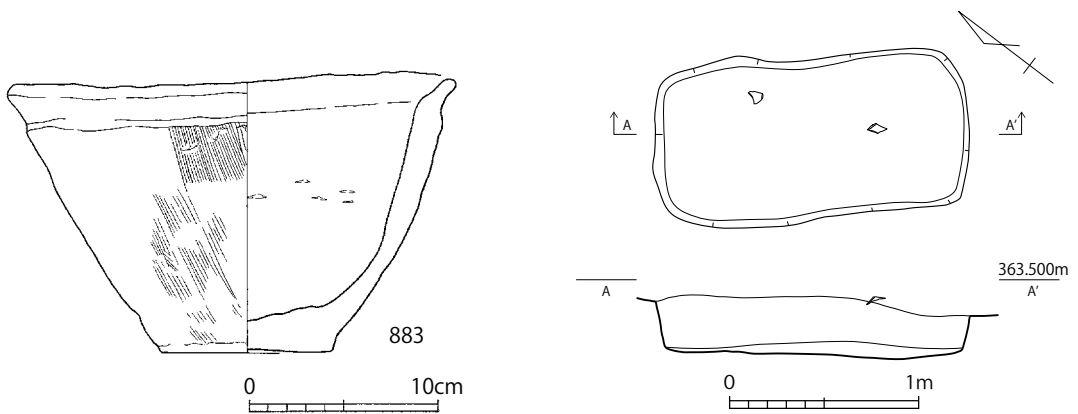
第278図 SX14実測図 (1/20)



第279図 SK491出土遺物実測図

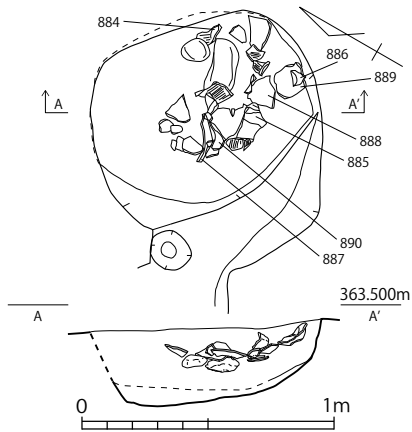


第280図 SK492出土遺物実測図



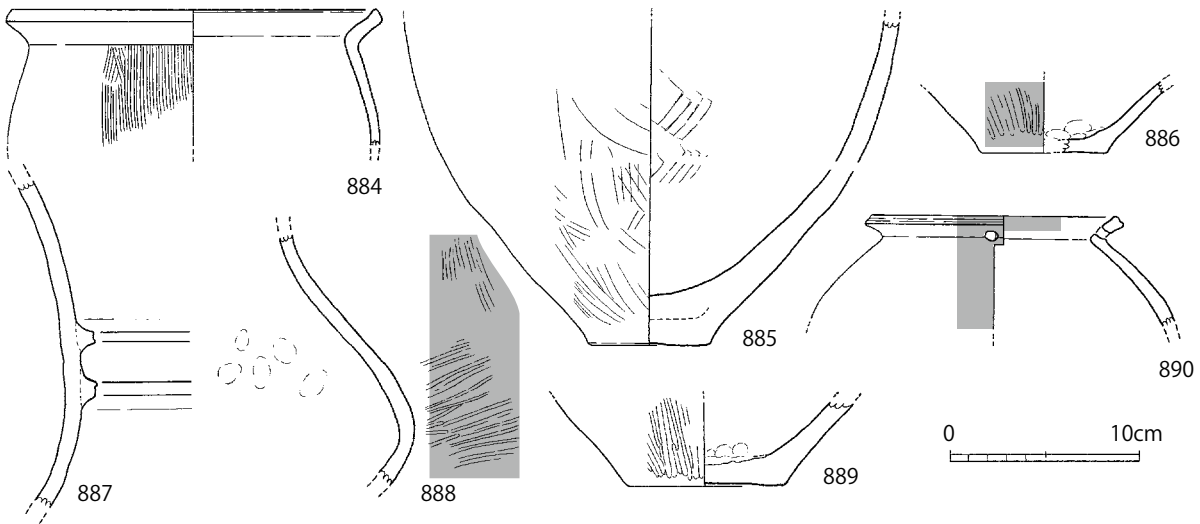
第281図 SX14出土遺物実測図

第282図 SK493実測図 (1/40)

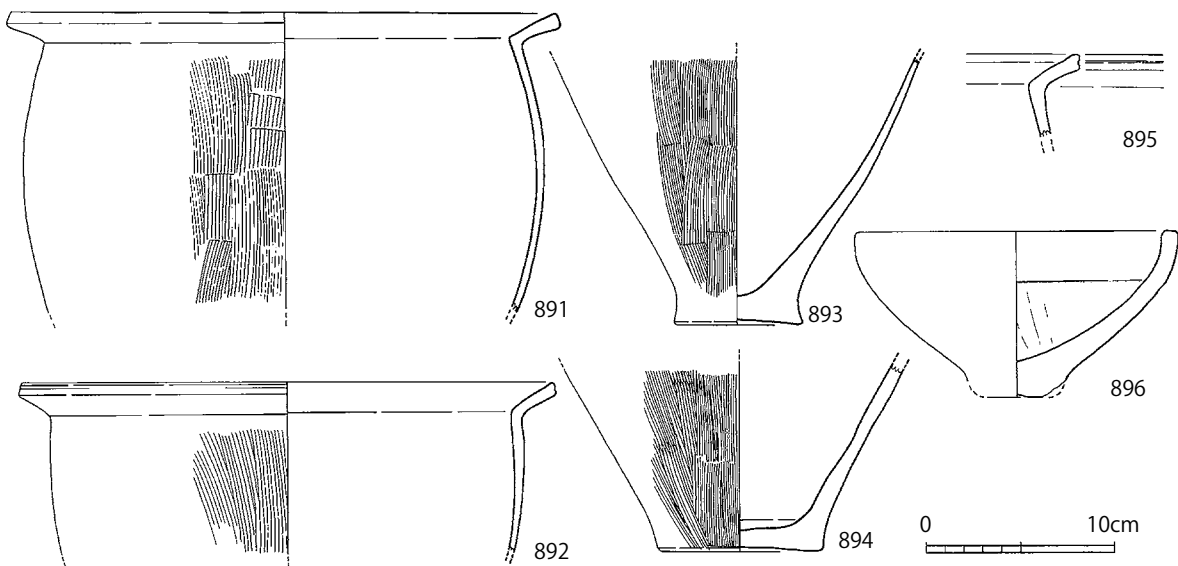


第283図 SK494実測図 (1/30)

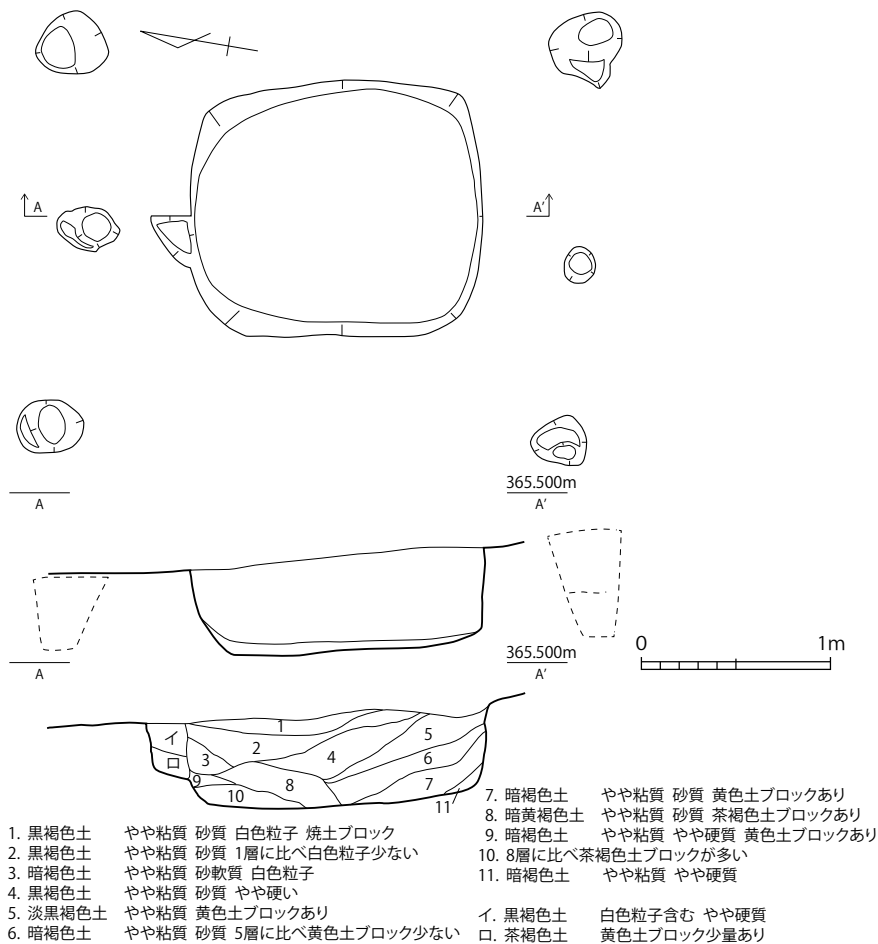
けて掘り込んでいるため、西壁は大きくオーバーハングしていたとみられる。実測図の最深部にある柱穴が3本並んだようなものは柱穴ではなく窪みであり、掘り直しの際に床面や壁面を最終的に整えていないことを表現している。掘り直した土坑は当初から壁面が不安定な状況であったようで、壁面は徐々に崩落していくが、ある段階でオーバーハングしていた部分がすべて崩落（4層）している。崩落後は再び土の流入（1層）により埋没しており、その過程で土器の廃棄が行われている。土器は傾斜して出土していることから、南東方向からまとめて廃棄されたことがうかがえる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



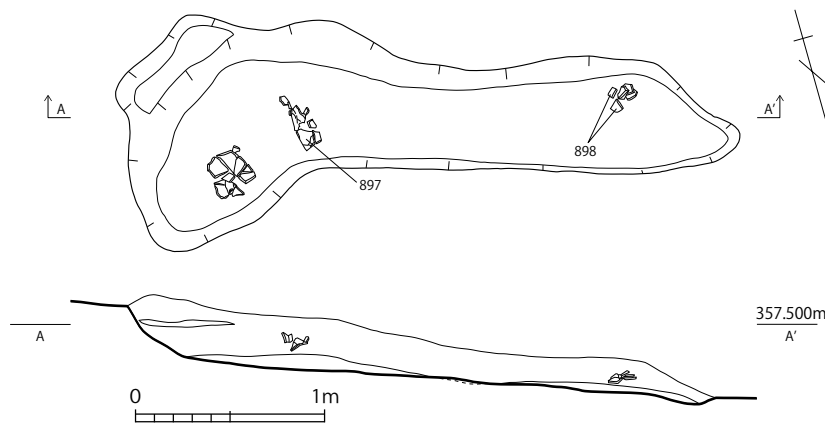
第284図 SK494出土遺物実測図



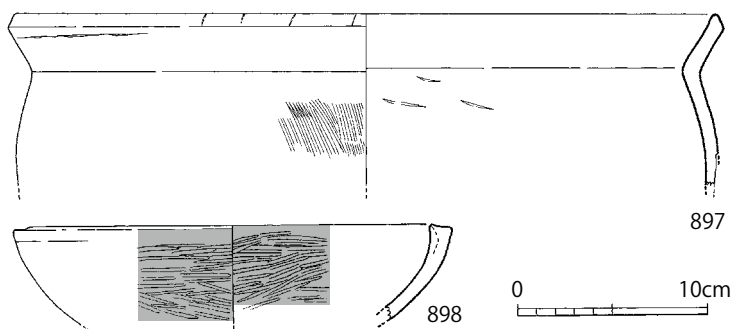
第285図 SK495出土遺物実測図



第286図 SK496実測図 (1/40)



第287図 SK497実測図 (1/40)



第288図 SK497出土遺物実測図

SK479 (第256・257図)

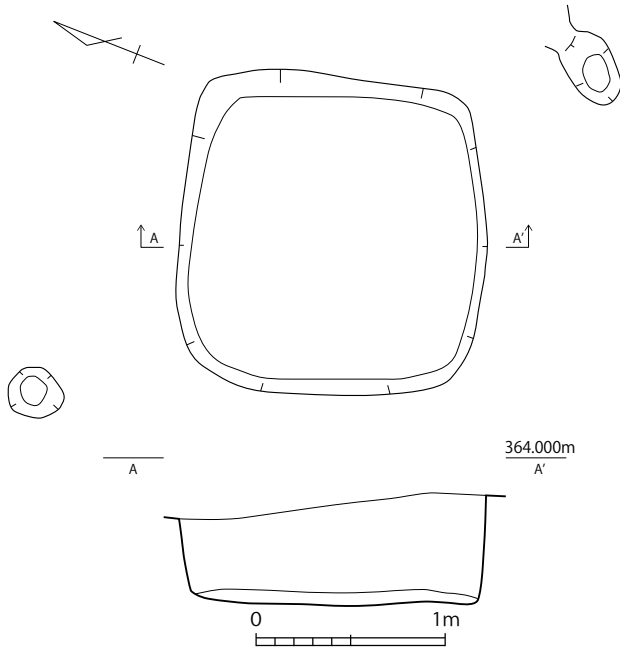
SK479は土坑である。形状は楕円形で、規模は長軸0.95m、短軸0.65m、深度は0.1mである。深度が浅く、検出面において既に遺物が見えていることから、上部はかなり削平を受けているとみられる。

埋土は黒褐色土の単一層で、埋没過程で廃棄されたとみられる器台や壺片がまともって出土した。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

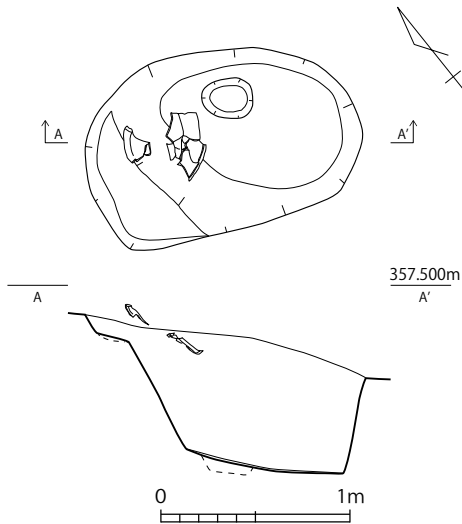
SK480 (第258・259図)

SK480は土坑(貯蔵穴)である。形状は長方形で、規模は長軸2.2m、短軸1.5m、深度は0.9mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。土坑隅の外部には柱穴が4本ともなう。柱穴は径0.25～0.3m、深度は0.25～0.5mと一定ではない。

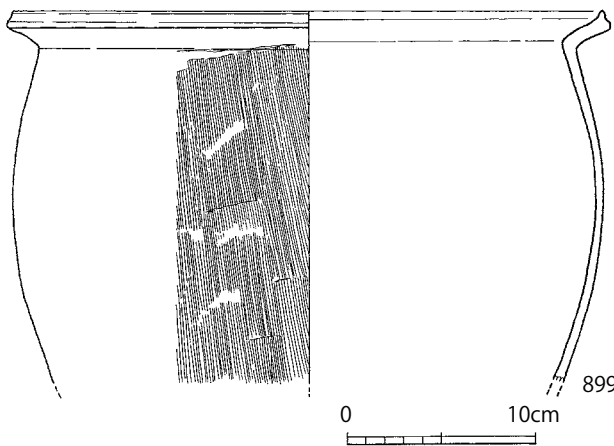
周囲から土が流入したことにより順次埋没しているが、3層が埋没した後に2層の焼土が面的に確認できたことから、埋没の途中で焼土の廃棄が行われたとみられる。遺物は各層から出土しているものの、まともって出土していないことから、埋没の過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



第289図 SK498実測図 (1/40)



第290図 SK499実測図 (1/40)



第291図 SK499出土遺物実測図

**SK481 (第260・261図)**

SK481は土坑である。SH155を床面まで掘り下げた段階で検出できたもので、SH155と埋土が類似し、切り合い等の判断ができなかったため別遺構として報告しているが、軸がそろっていることからSH155の竪穴内土坑の可能性も捨てきれない。形状は長方形で、長軸1.8m、短軸1.4m、深度は0.8mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

自然に埋没したとみられ、遺物は埋土全般から出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK482 (第262図)**

SK482は土坑である。形状は長方形で、規模は長軸1.8m、短軸1.05m、深度は0.7mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

周囲より流入した土により自然埋没したとみられる。遺物は甕の口縁や無頸壺等が破片で出土しているが、図示できる資料はない。遺物は埋土全般から出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK483 (第263・264図)**

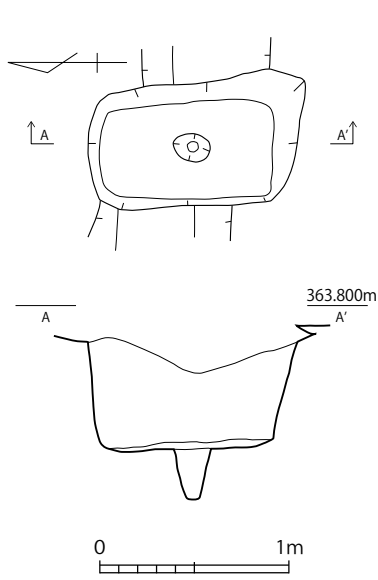
SK483は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.35m、短軸0.95m、深度は0.3mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面はおおむね平坦である。

周囲からの土が流入しレンズ状の堆積をなしていることから、自然に埋没したとみられる。遺物は主に1層中から出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。土坑中央部からは上部が削平を受けた甕が出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

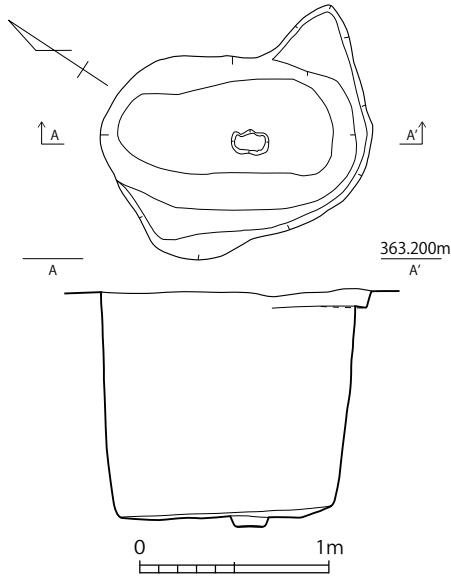
**SK484 (第265・266図)**

SK484は土坑である。南部分が調査区外となるため未掘である。そのため遺構の全容がわからず、規模からすると竪穴建物の可能性もあるが、西側で遺構の輪郭がわずかにカーブしていることから、隅丸長方形の土坑と推測した。規

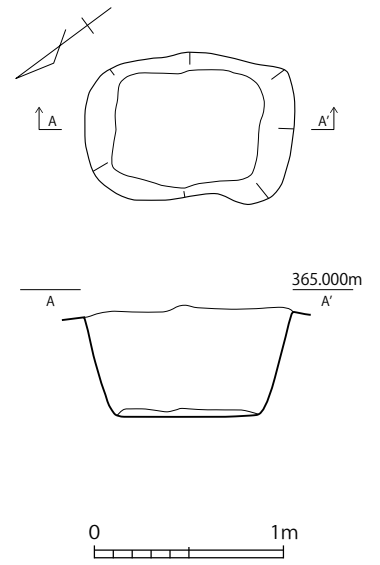




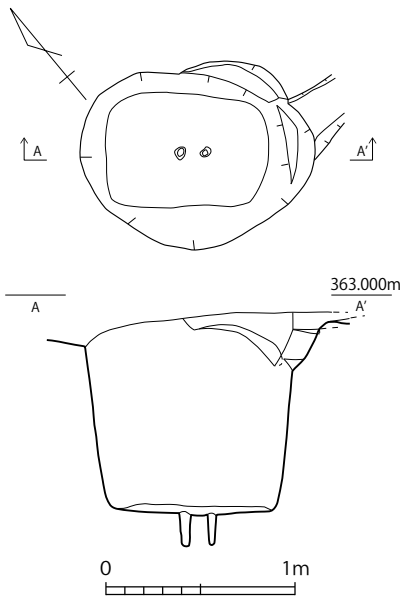
第292図 SK500実測図(1/40)



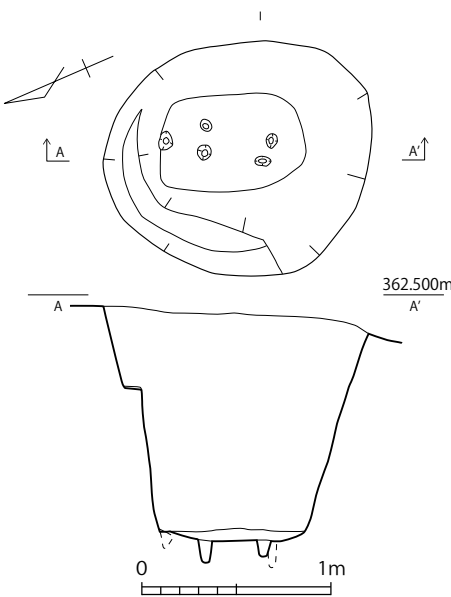
第293図 SK501実測図(1/40)



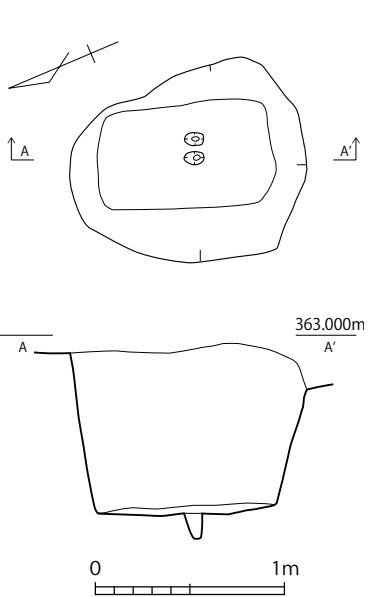
第294図 SK502実測図(1/40)



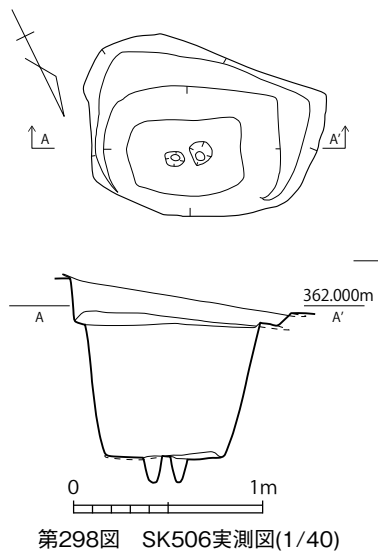
第295図 SK503実測図(1/40)



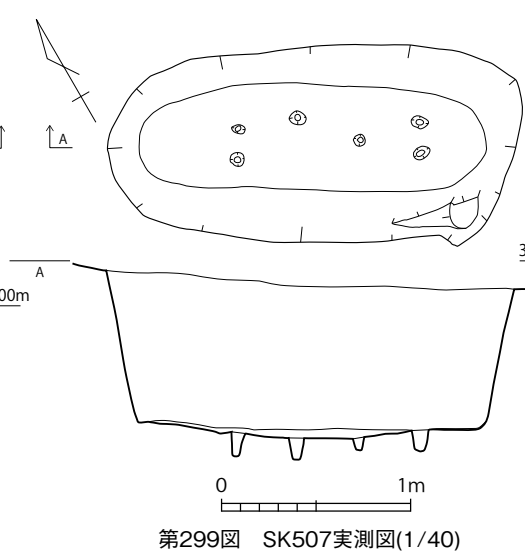
第296図 SK504実測図(1/40)



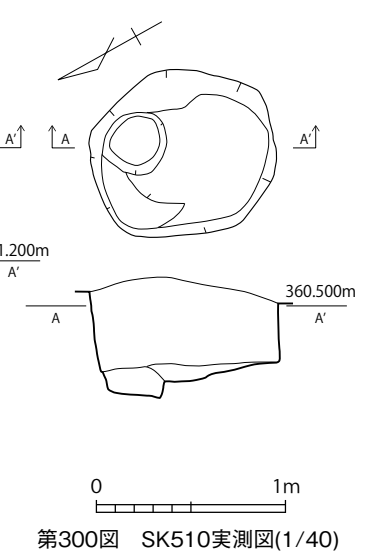
第297図 SK505実測図(1/40)



第298図 SK506実測図(1/40)

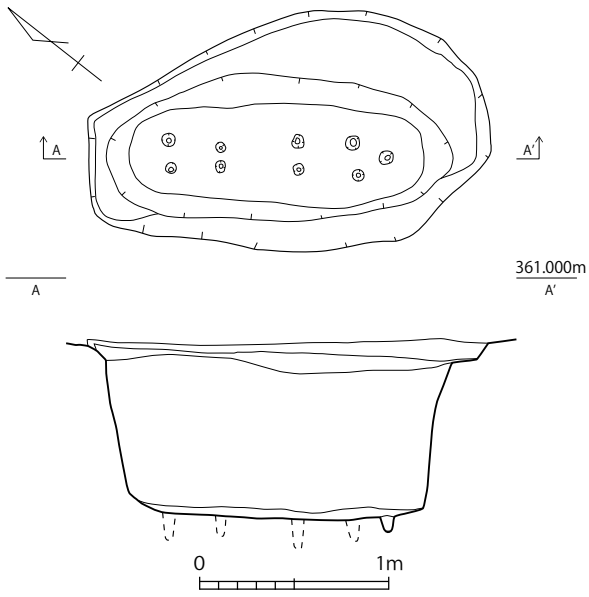


第299図 SK507実測図(1/40)

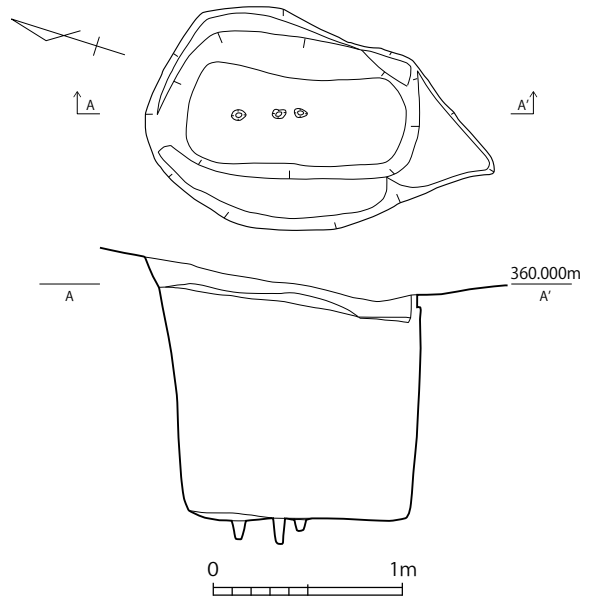


第300図 SK510実測図(1/40)

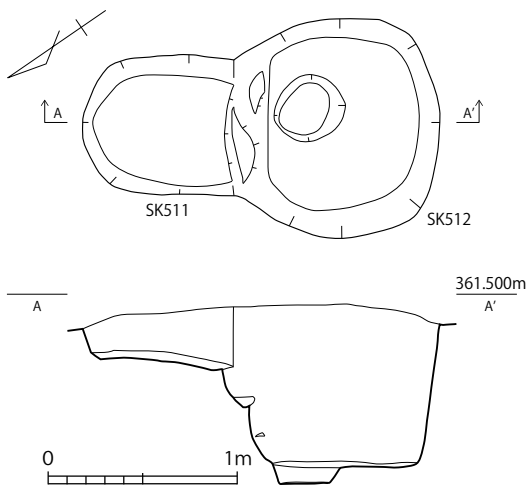
第4章 第16次調査



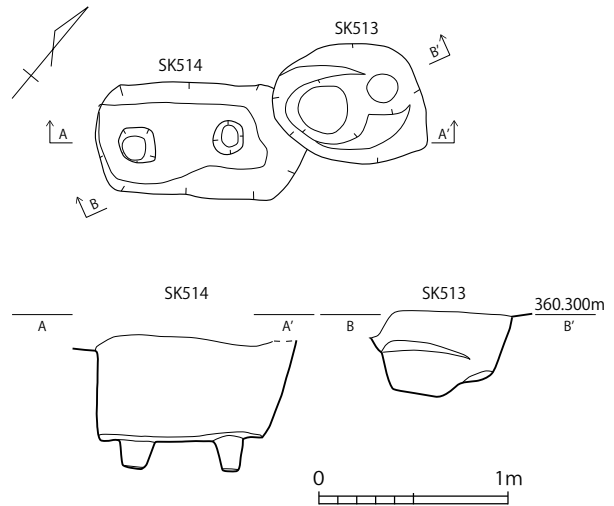
第301図 SK508実測図(1/40)



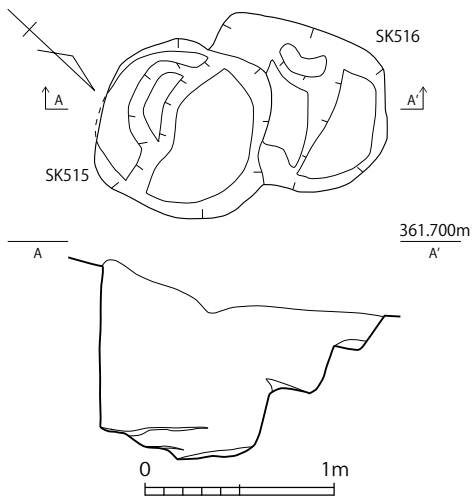
第302図 SK509実測図(1/40)



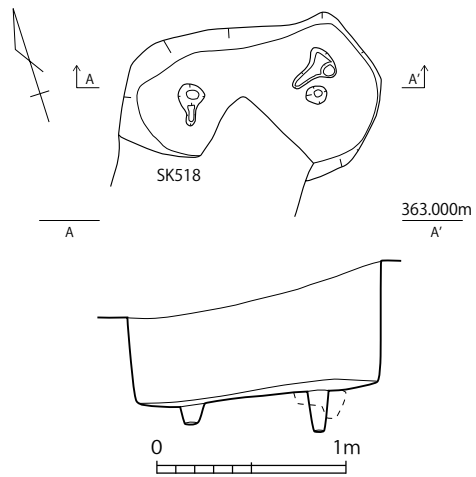
第303図 SK511・SK512実測図(1/40)



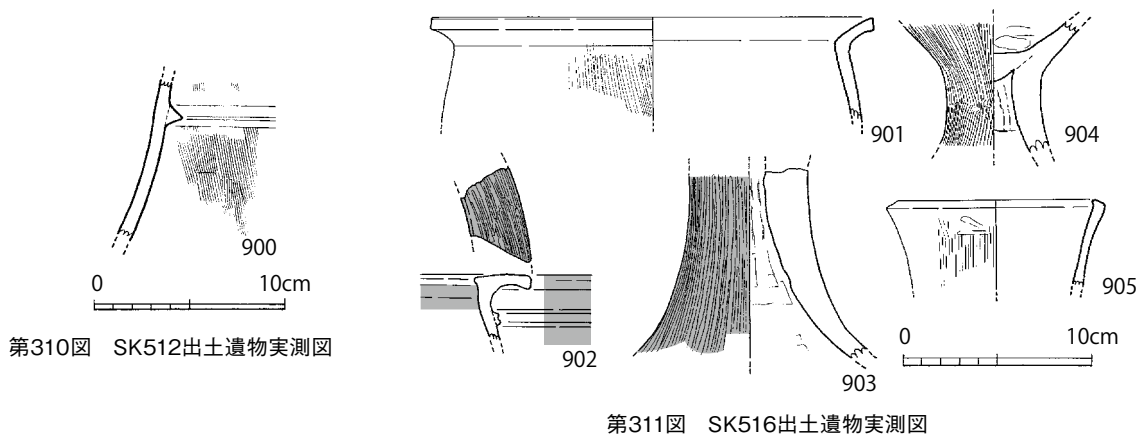
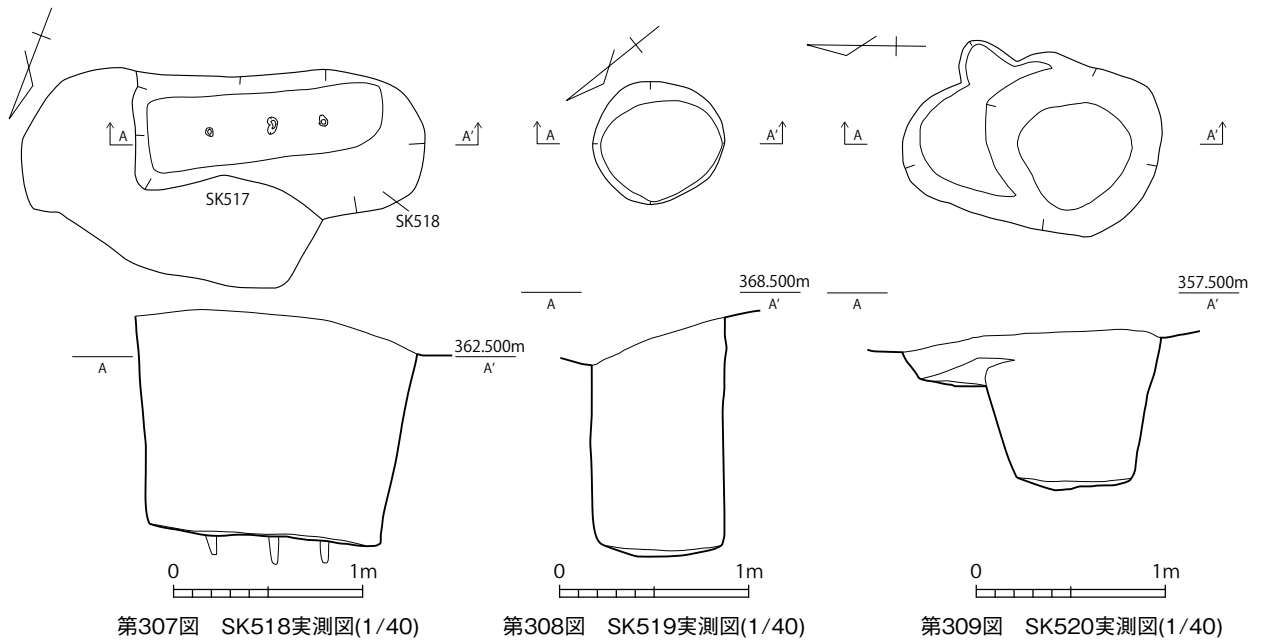
第304図 SK513・SK514実測図(1/40)



第305図 SK515・SK516実測図(1/40)



第306図 SK517実測図(1/40)



横は東西4.15m以上、深度は0.2mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦ではない。

埋土は黒色土の単一層であり、埋没過程で混入したとみられる小土器片がわずかに出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK485 (第267・268図)**

SK485は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.1m、短軸0.75mである。柱穴状の掘り込みがあるため2段掘りとなっており、最深深度は0.9mである。

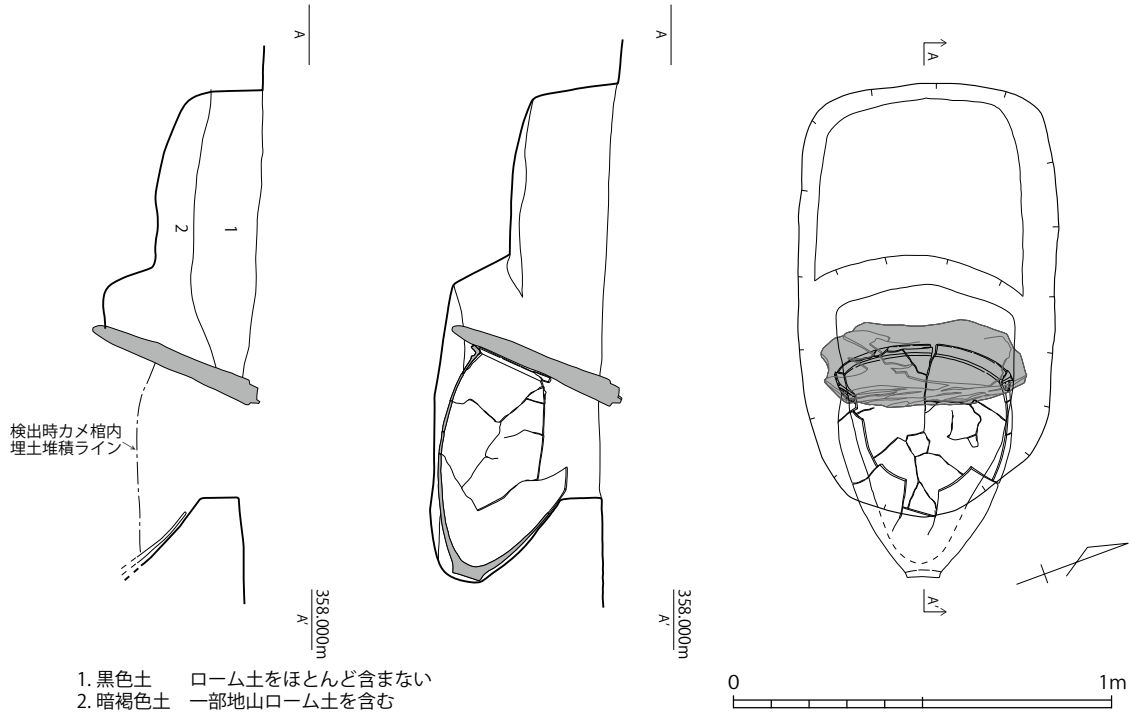
土層観察から2段掘りを行った後、東側から土が流入して埋没している。遺物は1・2層から破片がわずかに出土する程度であり、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK486・SK487 (第269・270図)**

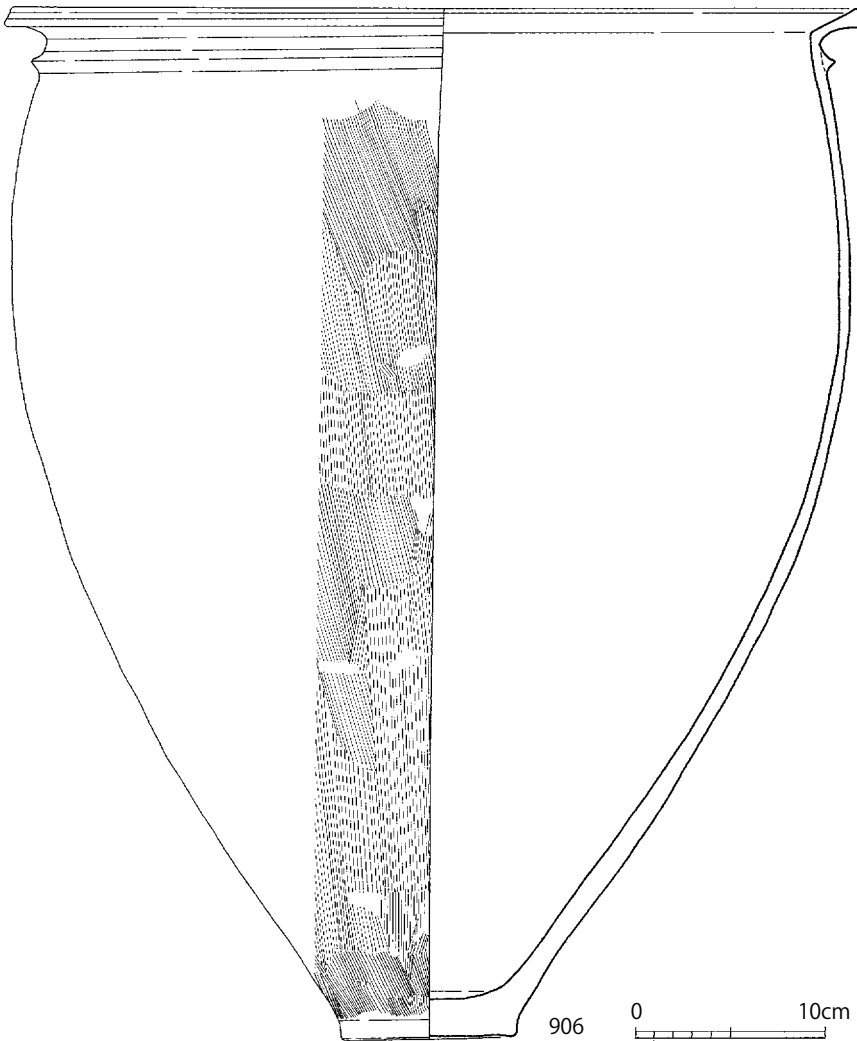
SK486・SK487は土坑である。SK487がSK486を切る。SK486は形状が楕円形で、規模は長軸2.2m、短軸1.65m、深度は0.25mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

SK487はSK486の埋没後に掘り込まれた遺構で、2段掘りで床面には柱痕状の掘り込みが認められる。段掘り後に東方向から土が流入し埋没している。形状や埋没状況は近接するSK485と類似する。

SK486・SK487ともに埋没過程で混じり込んだ小土器片がわずかに出土した程度である。出土した遺物はとも



第312図 SK521実測図 (1/20)



第313図 SK521出土遺物実測図

に弥生時代中期後半段階と考えられ、両土坑の時期差は明確ではない。

**SK488 (第271図)**

SK488は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸2.45m、短軸2.1m、深度は0.8mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黄褐色土ブロックが多く混じることから、人為的埋め土とみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだとみられる土器片が遺構の上部層から出土しているが、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK489 (第272・273・274図)**

SK489は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸方形で、一

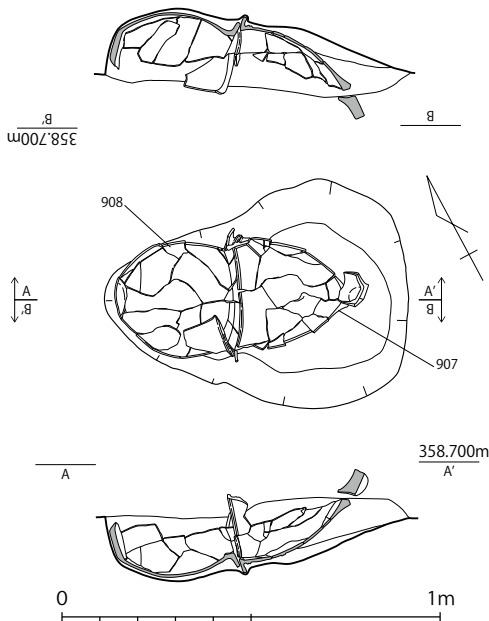
辺1.9～2.0m、深度は0.55mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦ではない。

埋土は自然に埋没したとみられる。遺物は特に2～3層にかけて複数個体の大型壺等がまとまって出土している。比較的大きな破片のまま出土していることから、埋没過程で一括廃棄されたとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK490 (第275・276図)**

SK490は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.5m、短軸1.35m、深度は0.55mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。東部分にある柱穴は、埋没後に掘り込まれた別遺構である。

埋土は周囲からの土の流入で埋没しているが、特に西方向からの流入が顕著である。レンズ状堆積となっているため自然に埋没したとみられるが、3層については黄褐色地山土を人為的に埋め戻したとみられる。遺物は各層全般から出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。



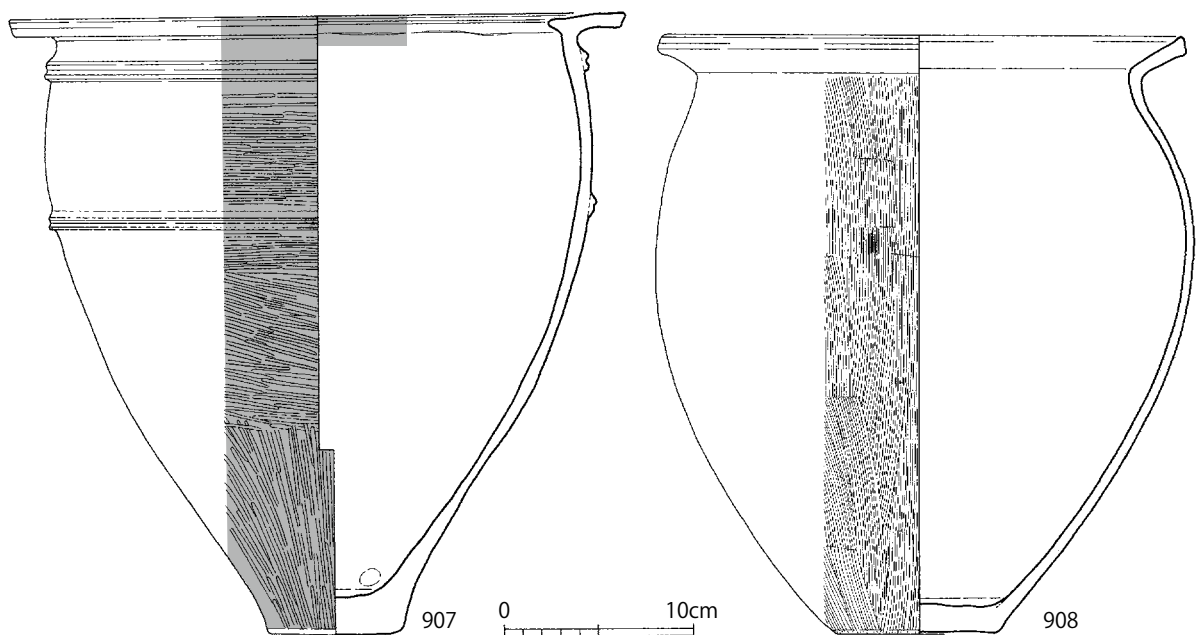
第314図 SK522実測図 (1/20)

**SK491・492 (第277・279・280図)**

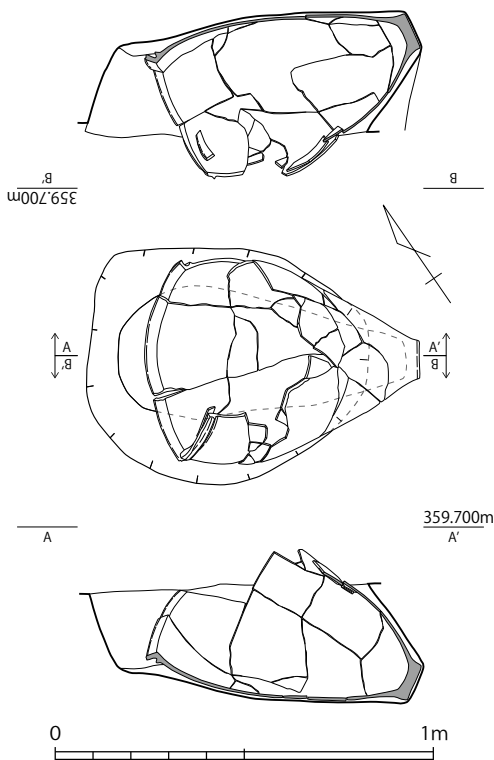
SK491・SK492は土坑(貯蔵穴)である。両土坑を囲むようにコーナーの外部に柱穴4本が配置され、土坑間にも補助的な柱穴が2本あることから、2基の土坑に対し一つの覆屋があったと推測する。SK491は形状が隅丸長方形で、規模は長軸2.4m、短軸1.7m、深度は0.45mである。南東隅をSX14が切る。

SK492は形状が隅丸長方形で、規模は長軸1.9m、短軸0.95m、深度は0.35mである。2基の土坑はともに壁面はなだらかに立ち上がり、床面は平坦である。

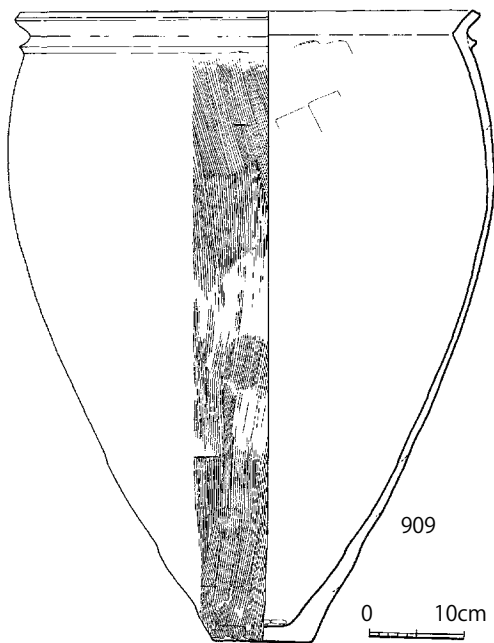
埋土は自然に埋没したとみられる。遺物は両土坑とも比



第315図 SK522出土遺物実測図



第316図 SK523実測図 (1/20)



第317図 SK523出土遺物実測図

は直立に立ち上がり、床面は平坦である。土坑各コーナーの外部には柱穴が4本配置されているが、これは『四日市遺跡3』でSB14として報告されたものである。これ以外に土坑の長軸上にも柱穴が2本検出できたが、これらがSK496にともなっていたかは不明である。

土の流入により自然埋没したとみられる。遺物は甕・壺・高坏などの小破片がわずかに出土する程度で、埋没過程で混じり込んだものとみられる。図示できるような資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

較的まともに出土しているが、床面直上から出土したものはなく、埋没の途中でまとめて廃棄されたとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK493 (第282図)

SK493は土坑である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.65m、短軸0.85m、深度は0.3mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

周囲から流入した土により埋没している。遺物は床面から浮いた位置から甕・壺などの土器が小破片の状態出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。図示できるような資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK494 (第283・284図)

SK494は土坑である。西側上部は掘削を受けている。形状は円形で、規模は径0.95m、深度は0.3mである。北壁はわずかにオーバーハングするが、他の壁面は緩やかに立ち上がる。床面は平坦ではない。

遺物は床面から浮いた状態で出土しており、埋没の途中で甕・壺等がまとめて一括廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK495 (第134・285図)

SK495は土坑である。SH162の床面まで掘り下げた段階で検出できた遺構で、SH162の支柱穴を切っていることから新古関係が判明した。形状は方形で、一辺1.5m、SH162床面からの深度は0.7mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。

土層図はないが、自然埋没とみられる上層部から遺物が出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

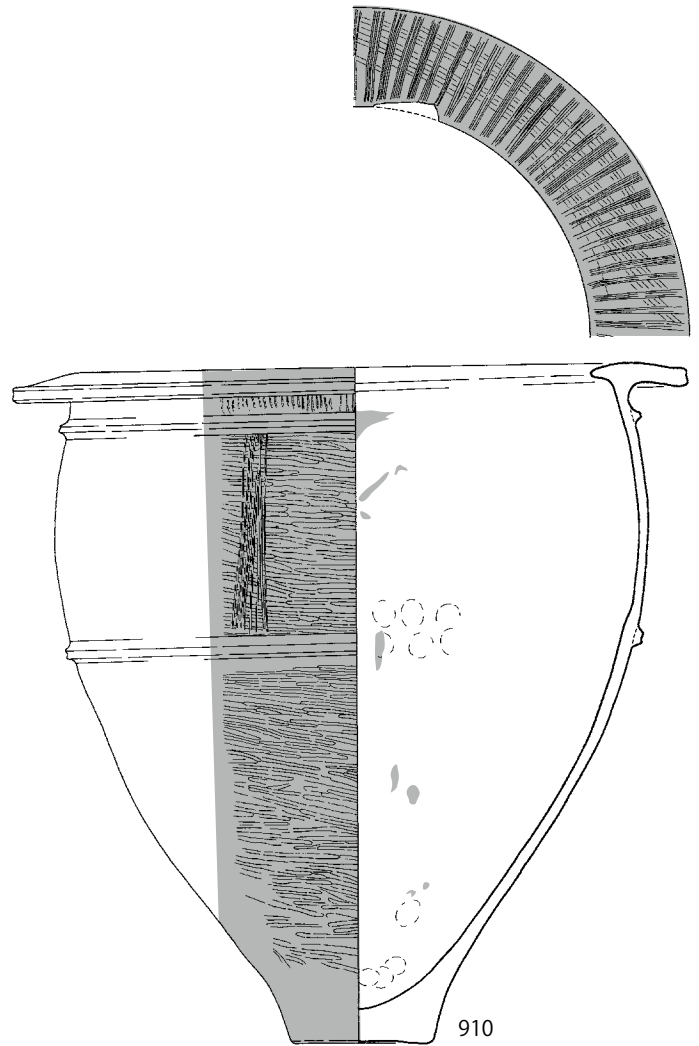
#### SK496 (第286図)

SK496は土坑（貯蔵穴）である。形状は長方形で、規模は長軸1.55m、短軸1.35m、深度は0.5mである。壁面

SK497 (第287・288図)

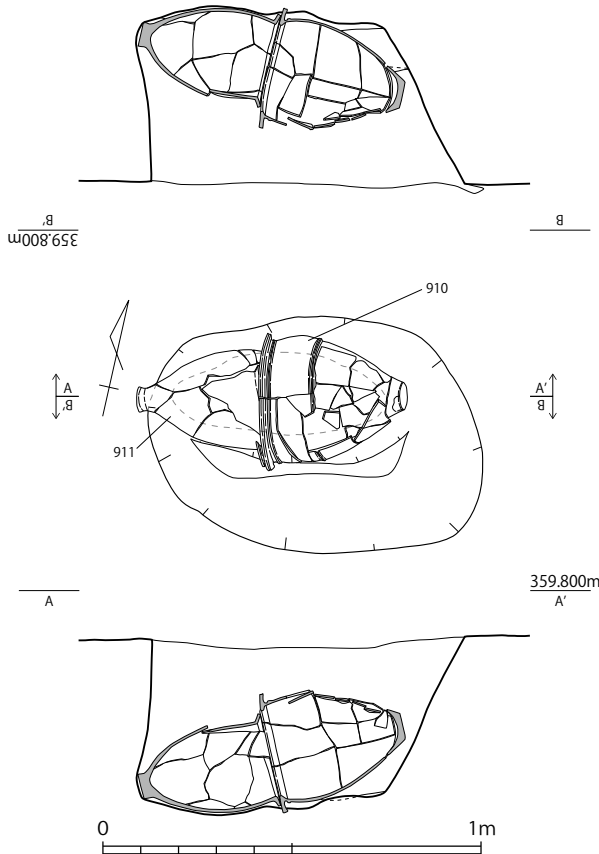
SK497は土坑である。L字に近い不定形土坑で、規模は長軸3.2m、短軸0.55～1.25m、深度は0.25mである。壁面はなだらかに立ち上がり、床面は地形に沿って東から西方向に傾斜する。

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。床面から浮いた状態で甕・高坏の破片が点々と出土しているが、遺物量は多くない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

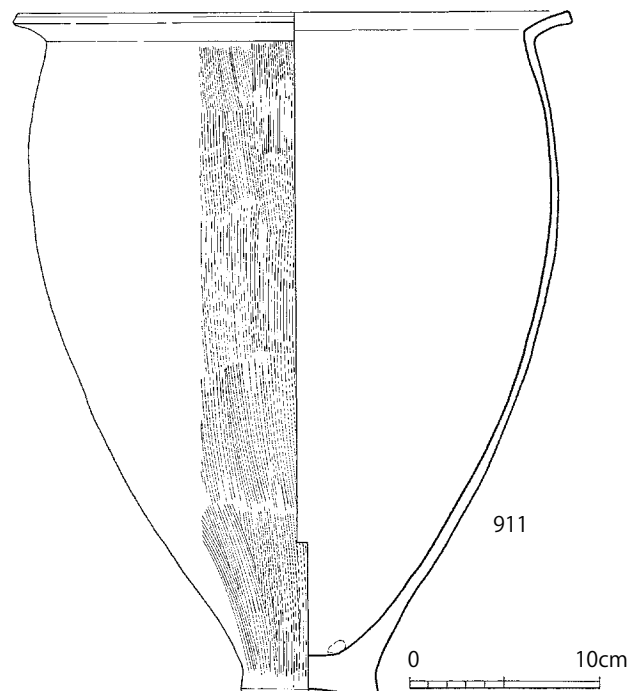


SK498 (第289図)

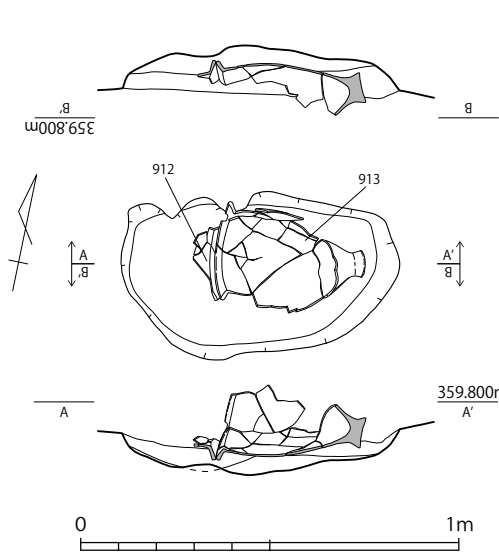
SK498は土坑（貯蔵穴）である。近現代の攪乱に切られる。形状は隅丸方形で、規模は一辺1.65m、深度は0.6mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。土坑コーナーの外部で柱穴2本を検出したが、実測図の柱穴がSK498にともなうかは判然としない。



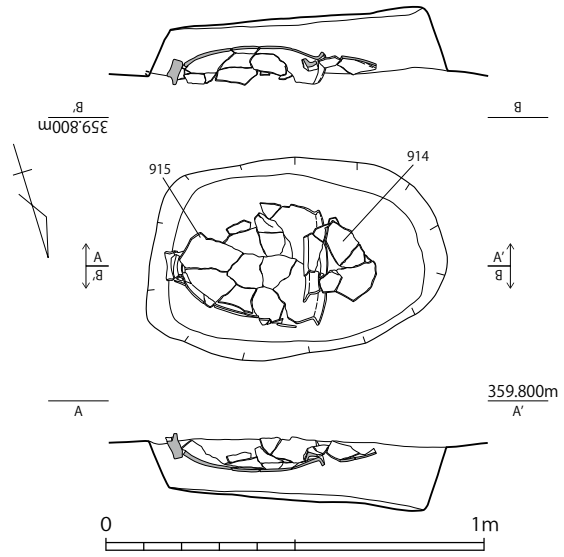
第318図 SK524実測図 (1/20)



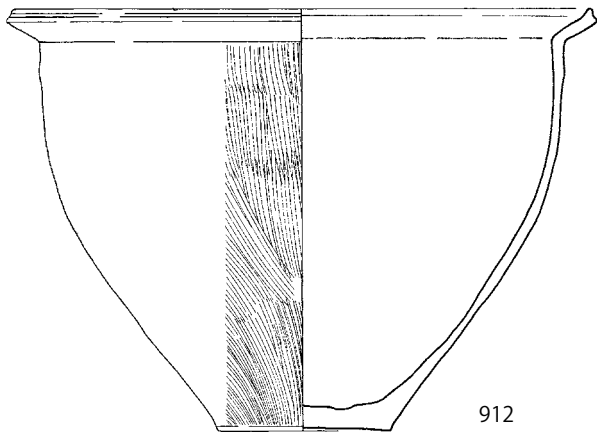
第319図 SK524出土遺物実測図



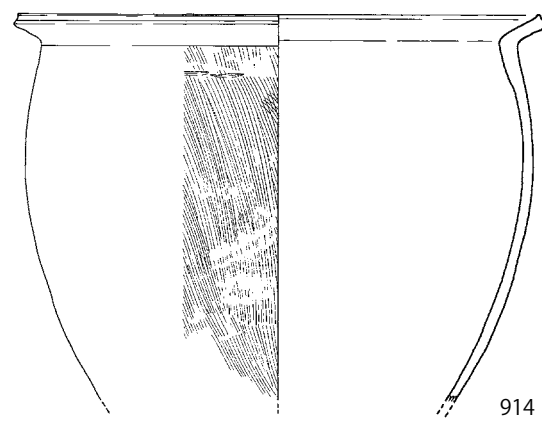
第320図 SK525実測図 (1/20)



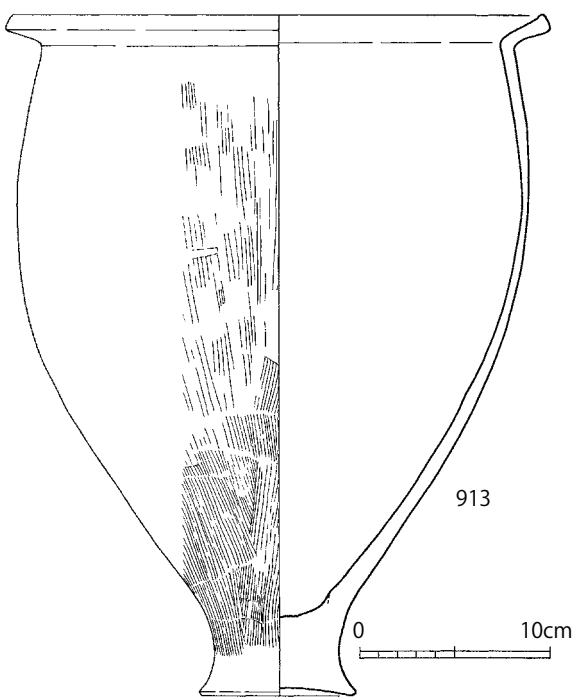
第322図 SK526実測図 (1/20)



912



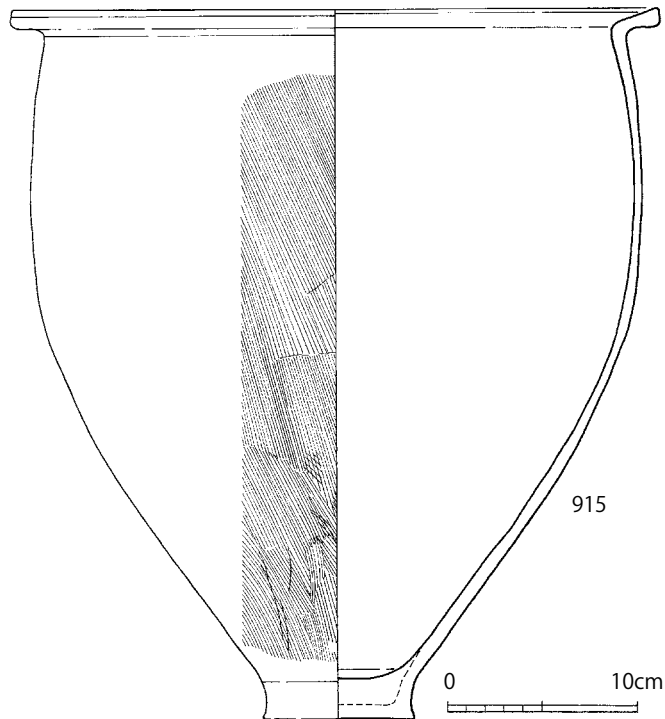
914



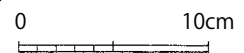
913



第321図 SK525出土遺物実測図

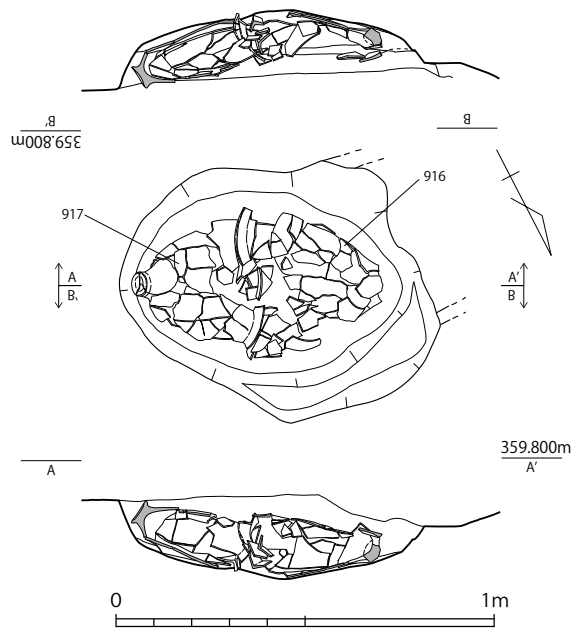


915

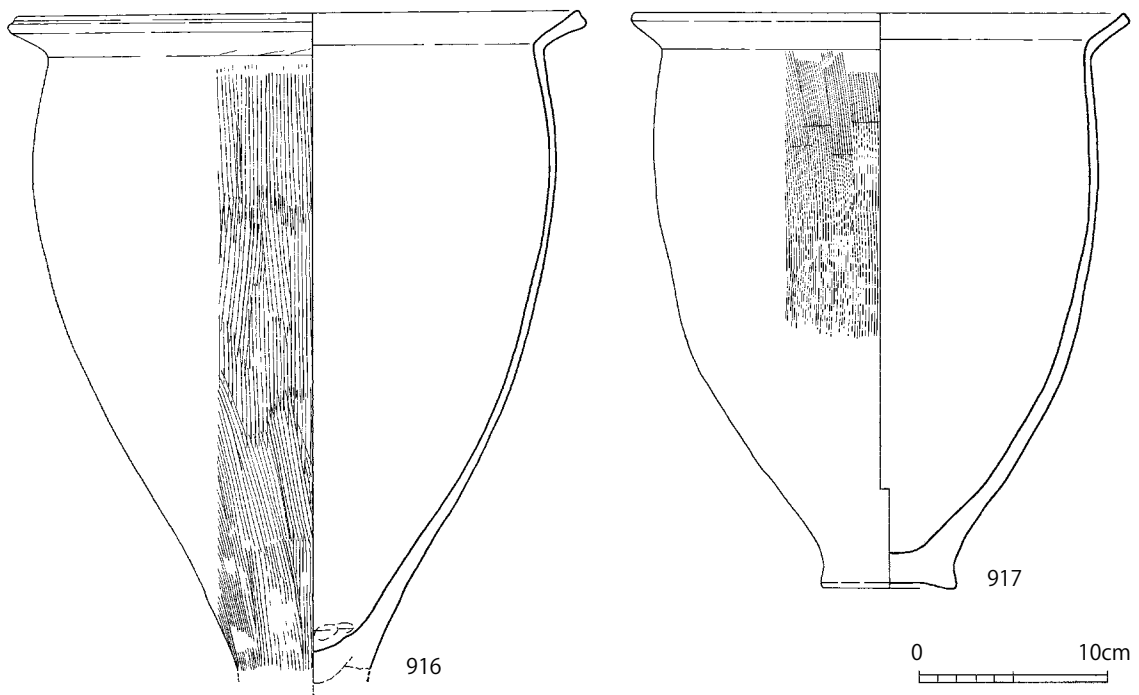


第323図 SK526出土遺物実測図





第324図 SK527実測図 (1/20)

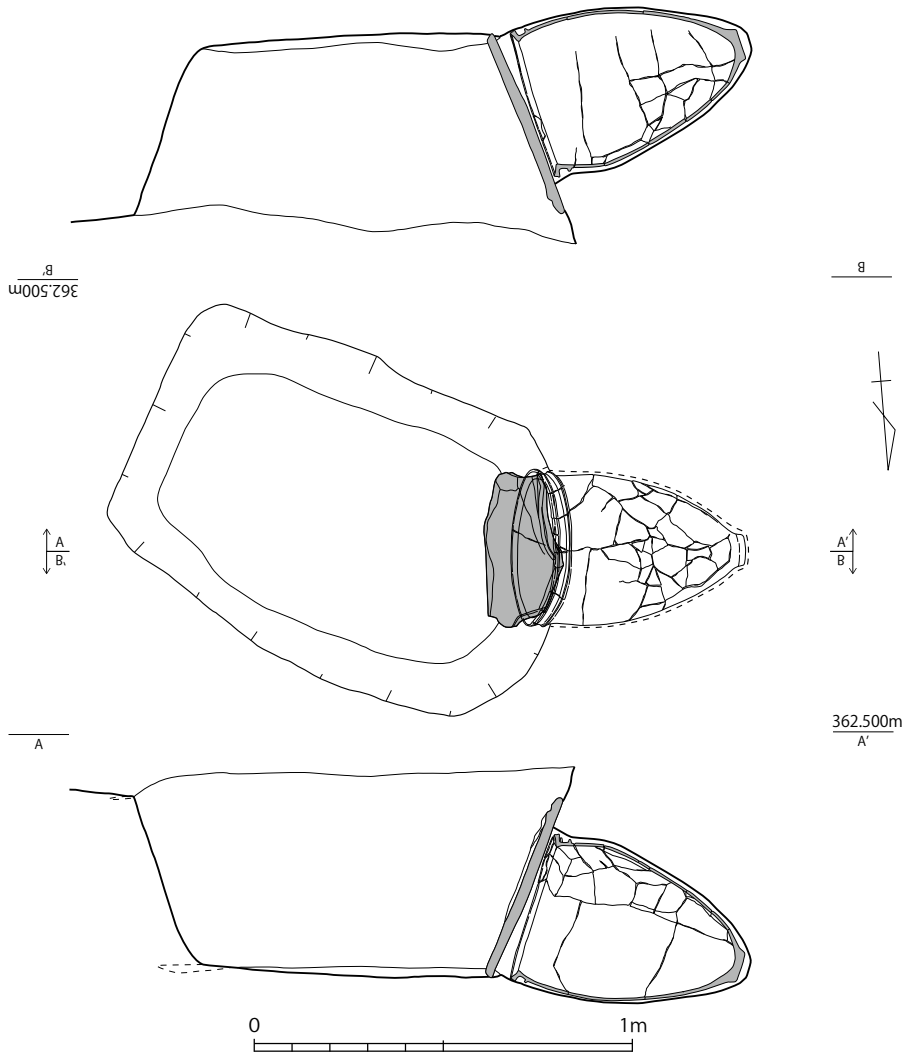


第325図 SK527出土遺物実測図

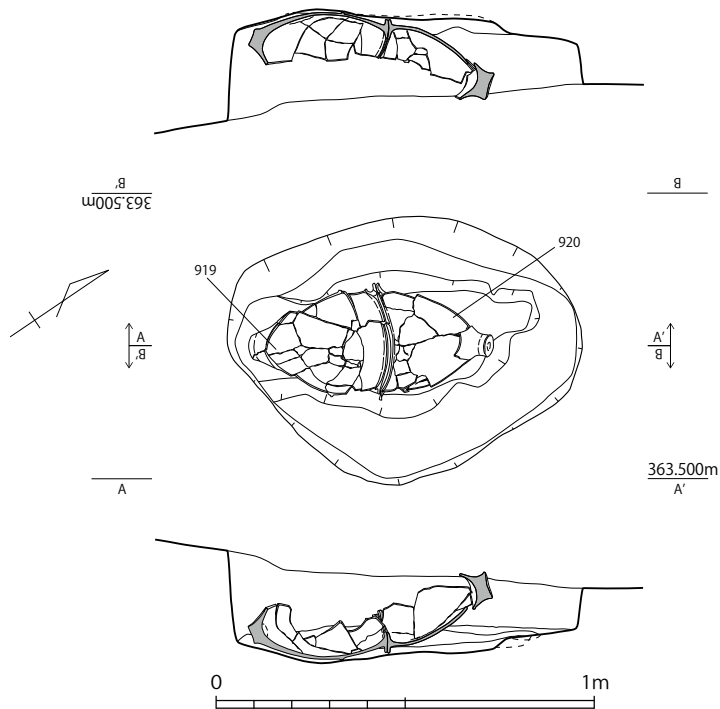
遺物は甕などの小破片がわずかに出土する程度で、埋没過程で混じり込んだものとみられる。図示できるような資料はない。時期は弥生時代中期後半段階と推測する。

**SK499 (第290・291図)**

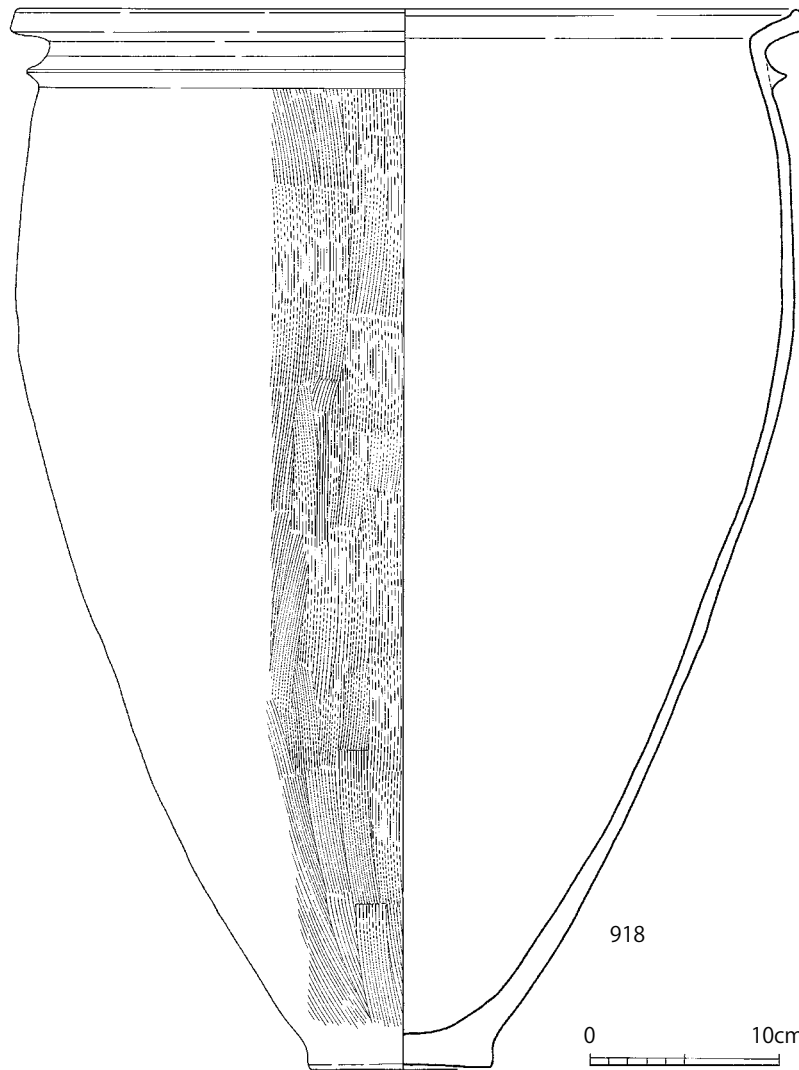
SK499は土坑（陥穴）と考えられる。形状は楕円形で、規模は長軸1.45m、短軸0.95m、深度は0.65mである。壁面は直立気味に立ち上がるが、段掘りのテラスがある西壁面はゆるやかに傾斜していることから、テラスは足場の役割があった可能性もある。床面は平坦で、実測図にある柱穴状の表現は浅い凹みであり杭痕ではない。



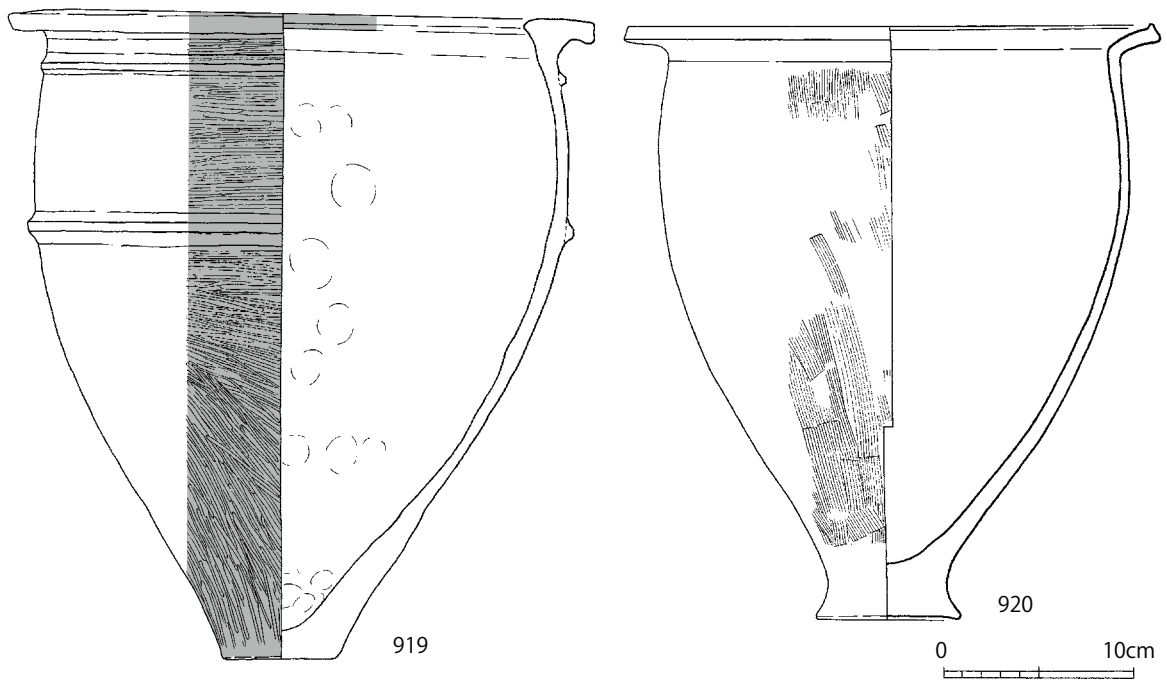
第326図 SK528実測図 (1/20)



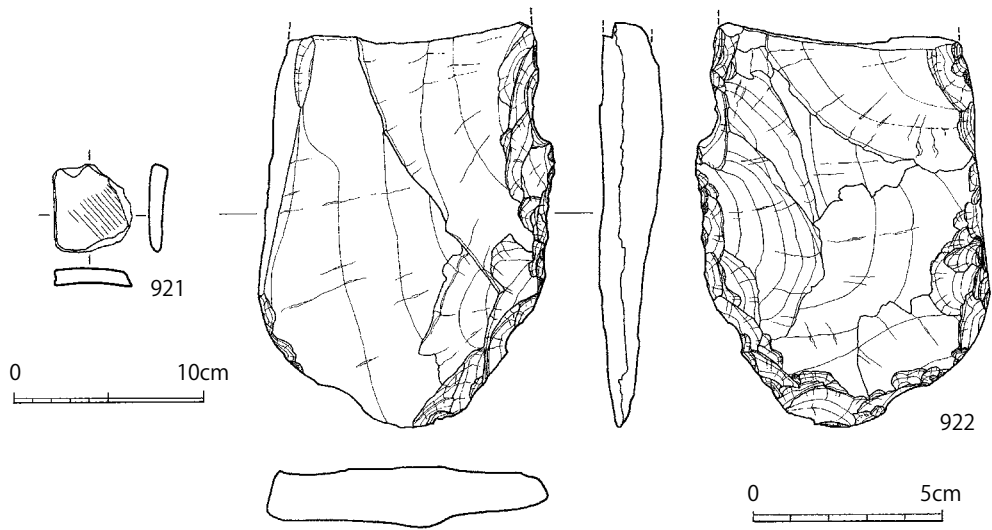
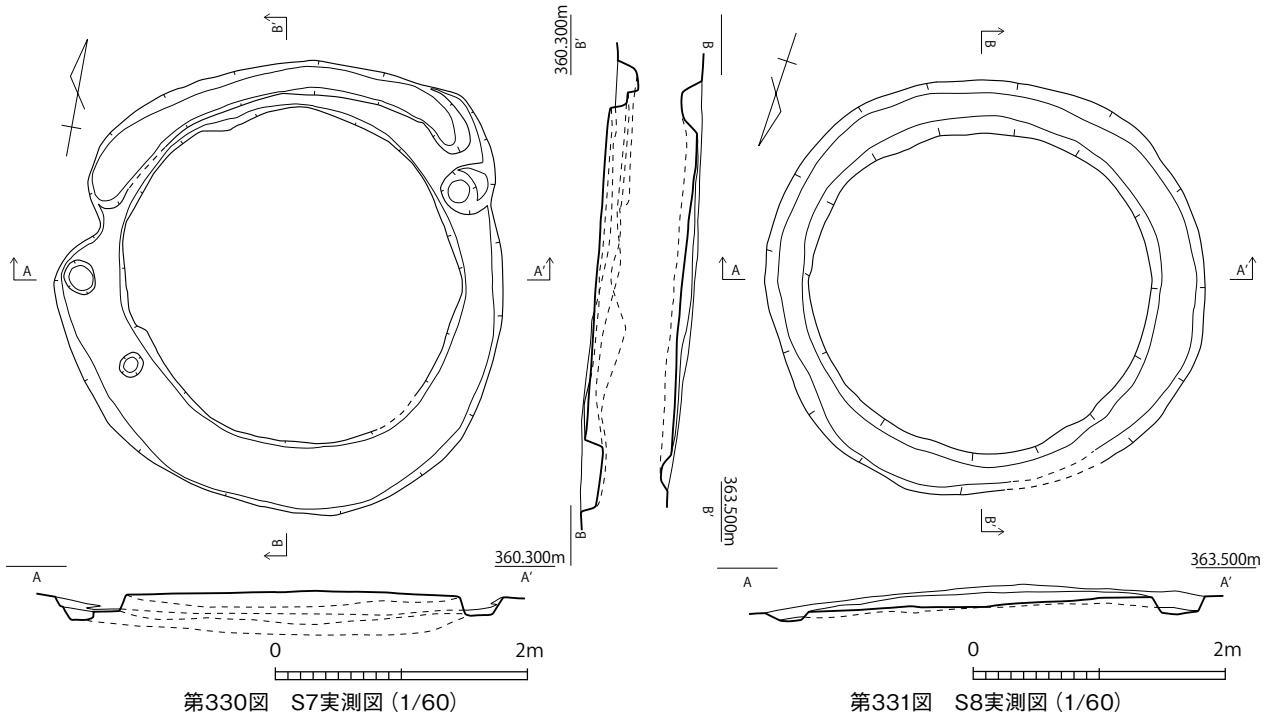
第327図 SK529実測図 (1/20)



第328図 SK528出土遺物実測図



第329図 SK529出土遺物実測図



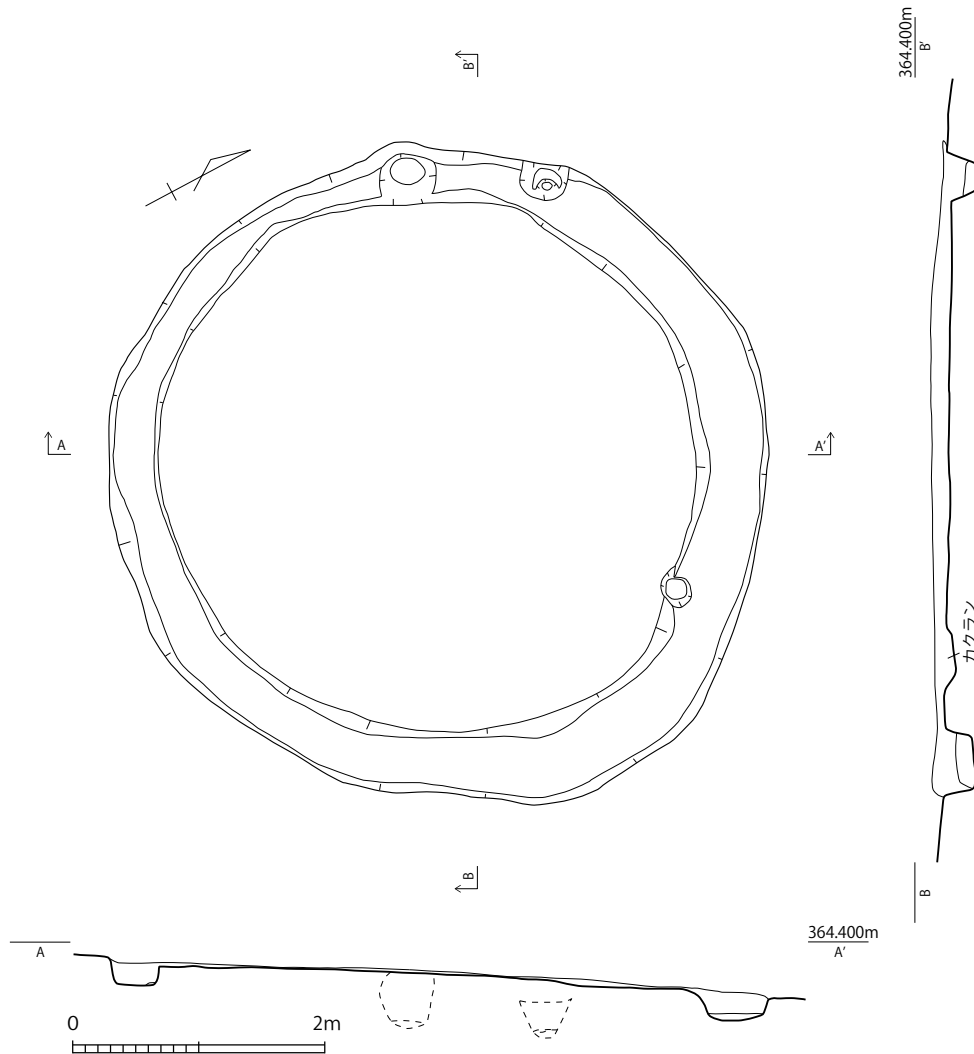
第332図 S7出土遺物実測図

埋土の観察から、特に西側からの土の流入により埋没しているが、これは地形の傾斜に影響を受けたためとみられる。遺物は甕・壺などの小破片がわずかに出土する程度であるが、検出面に近い上部では甕が比較的まとまって出土している。これらは埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK500 (第292図)

SK500は土坑（陥穴）である。上部が近現代の溝に切られる。形状は長方形で、規模は長軸1.1m、短軸0.65m、深度は0.6mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面中央に杭痕と考えられる径0.15mのピットを1本検出した。

埋土は黒色土の単一層で、流入土により自然埋没したとみられる。埋土中から遺物は出土していない。



第333図 S9実測図 (1/60)

**SK501 (第293図)**

SK501は土坑（陥穴）である。形状は楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸0.8m、深度は1.2mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面中央にはピット状の浅い窪みを検出したが、明確な杭痕とはいえない。

埋土は黒色土で、周囲からの土の流入により自然埋没したとみられる。埋土からは甕の小破片がわずかに出土している程度で、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK502 (第294図)**

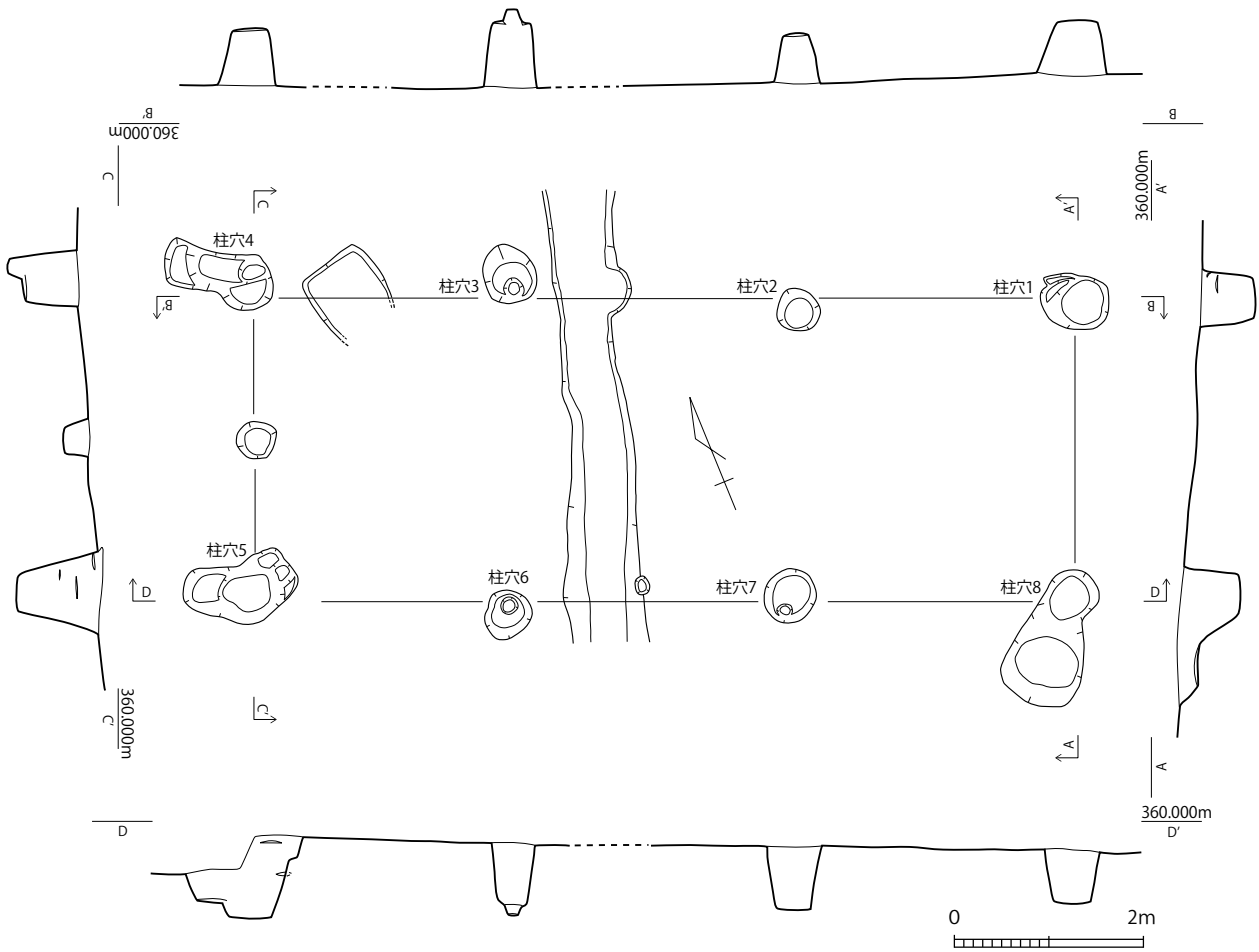
SK502は土坑（陥穴）と考えられる。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.1m、短軸0.75m、深度は0.55mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦で杭痕などは確認できなかった。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土中から遺物は出土していない。

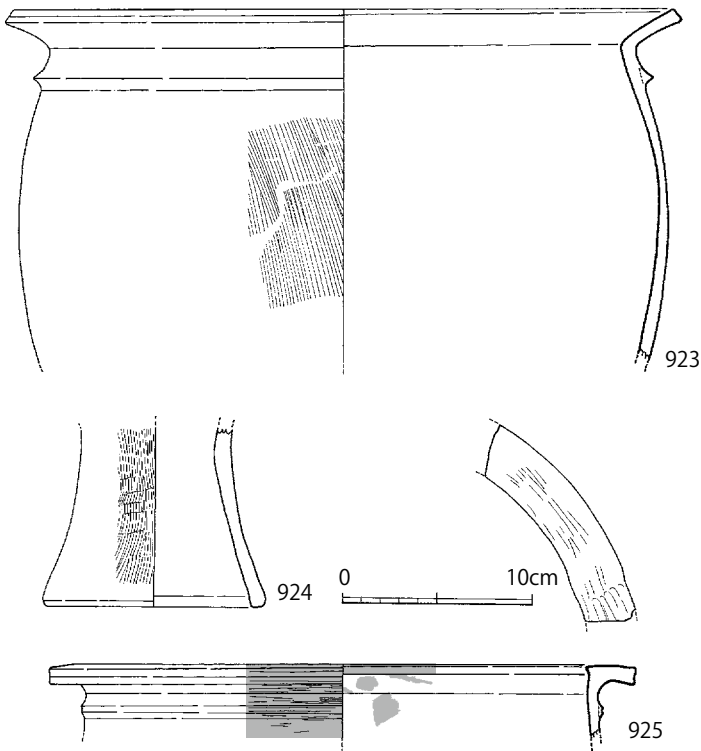
**SK503 (第295図)**

SK503は土坑（陥穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.25m、短軸0.9m、深度は0.85mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面中央で杭を打ち込んだとみられる径0.1m以下のピットを2本検出した。

埋土は黒色土で、周囲からの流入した土により自然埋没したとみられる。埋土から遺物は出土していない。



第334図 SB23実測図 (1/80)



第335図 SB23出土遺物実測図

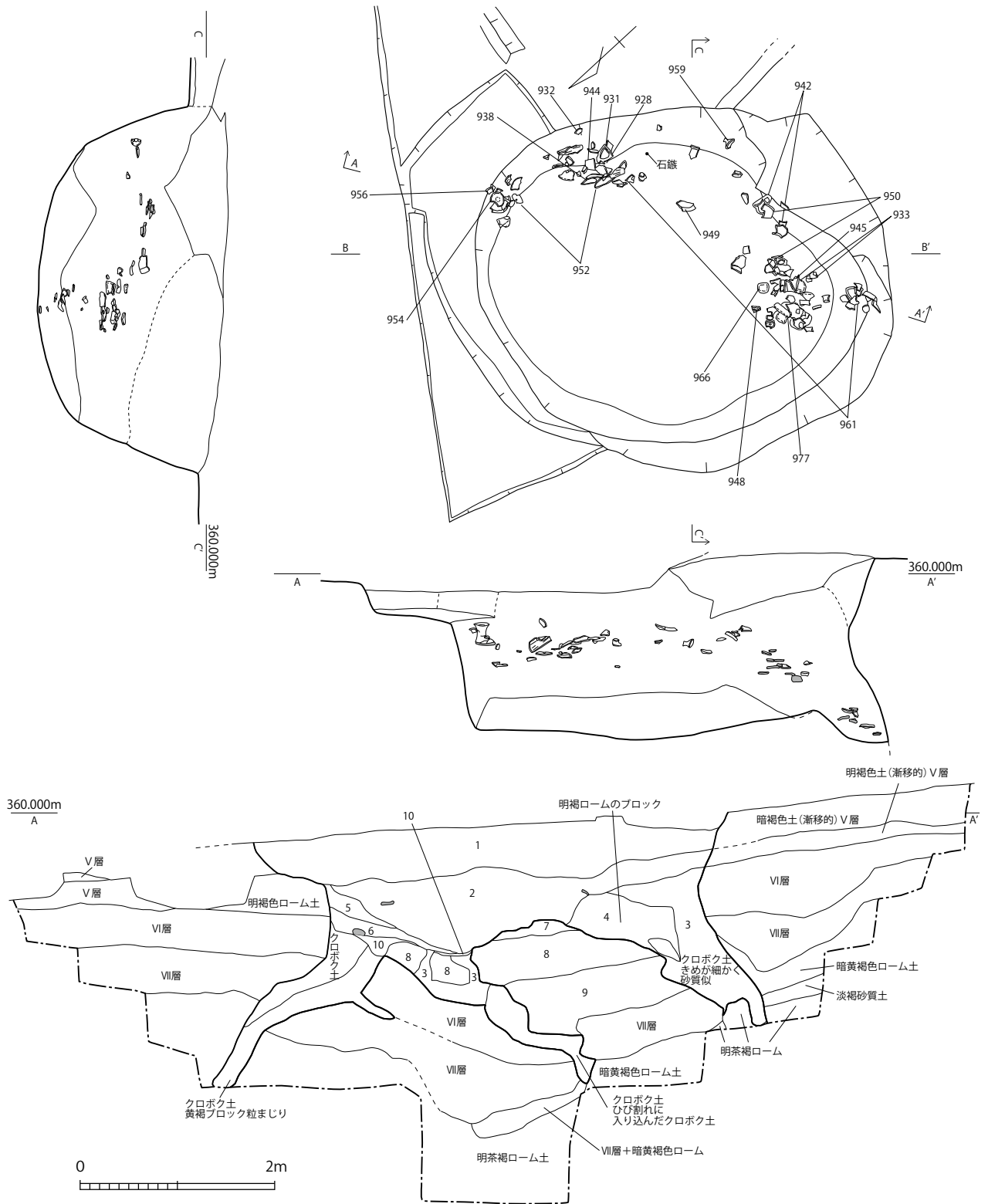
**SK504 (第296図)**

SK504は土坑(陥穴)である。形状は楕円形で、規模は長軸1.4m、短軸1.2m、深度は1.2mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。北西部にある幅の狭いテラスは、足場として利用された可能性もある。床面で杭痕と考えられる径0.1m以下のピットを5本検出した。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土から遺物は出土していない。

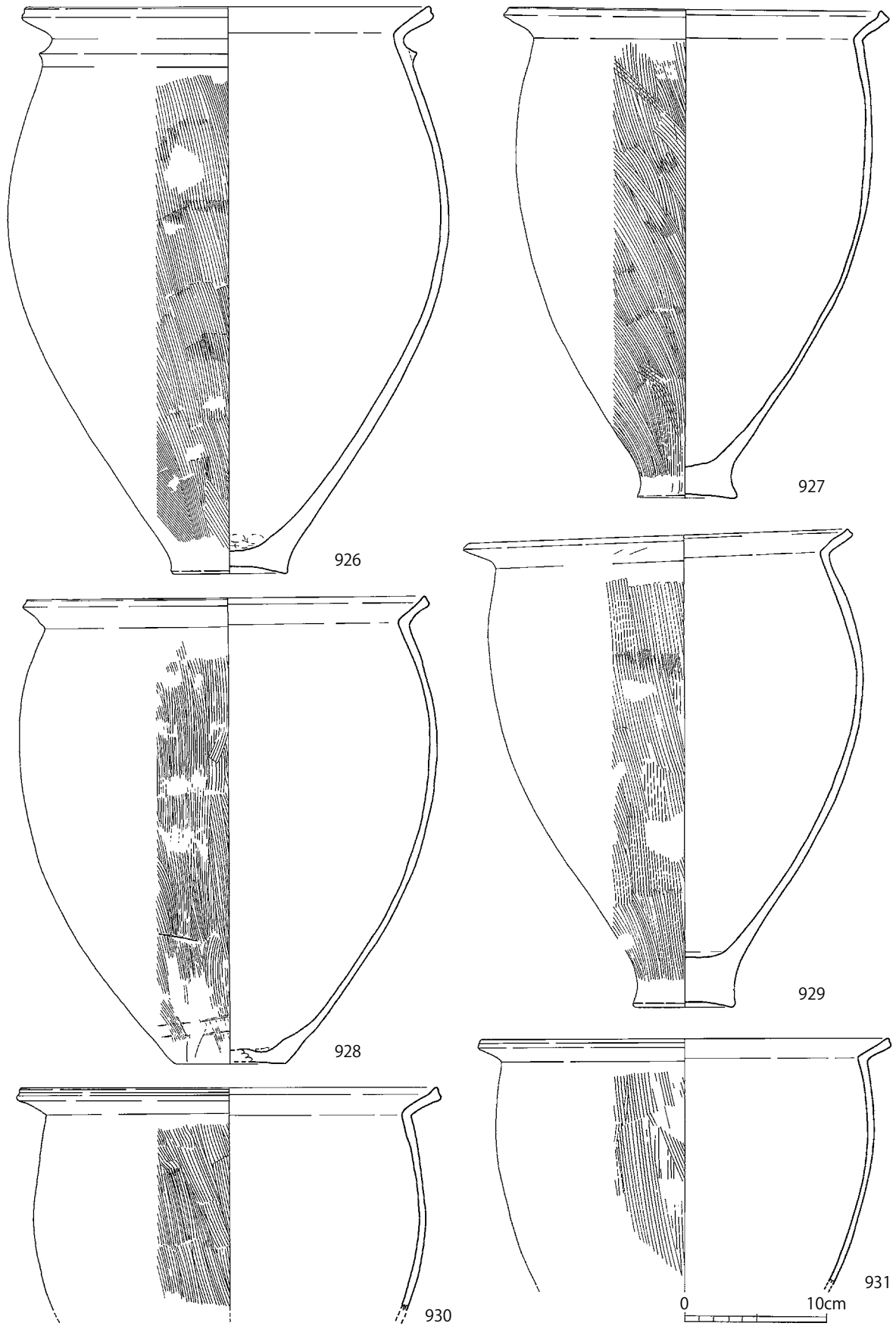
**SK505 (第297図)**

SK505は土坑(陥穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.25m、短軸1.05m、深度は0.85mである。下場の形状は隅丸長方形で比較的整っているのに対し、上場の形状はやや不定形になっているのは廃絶前に上場が拡張されたためと考えられる。壁



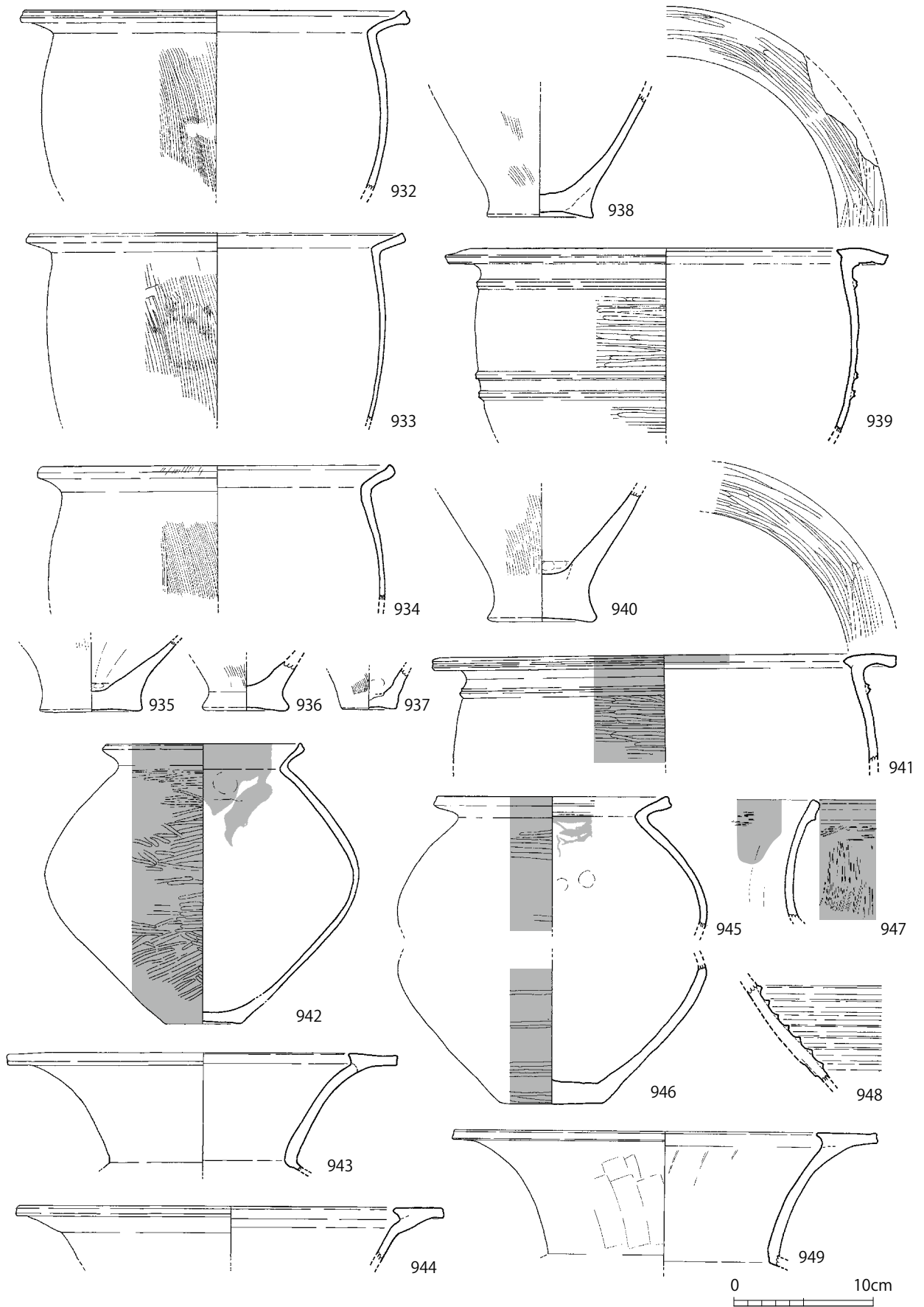
- |          |                                     |
|----------|-------------------------------------|
| 1. 黒褐色土  | 全体的に黄褐色土粒が混じる しまりなし                 |
| 2. 黒褐色土  | 炭粒 土器片を含む 黄褐粒がわずかに混じる しまりなし         |
| 3. 黒色土   | クロボク土 しまりなし 混じりなし 上から流入した土          |
| 4. 黒褐色土  | 2層と土質は似る 黄褐土粒がやや多く混じる 暗褐土粒混じり しまりなし |
| 5. 黒褐色土  | 黄褐色土ブロック混じり しまりなし                   |
| 6. 黒褐色土  | 5層と比べて黄褐色土ブロックの混じりが多い しまりなし         |
| 7. 暗茶褐色土 | 地山土 層序V層                            |
| 8. 明茶褐土  | 地山土 壁面の土が崩落して堆積 層序V層                |
| 9. 黄褐色土  | 地山土 層序VI層                           |
| 10. 黄褐色土 | 黄褐粒混じり 粘性ややあり                       |

第336図 SX12実測図 (1/60)

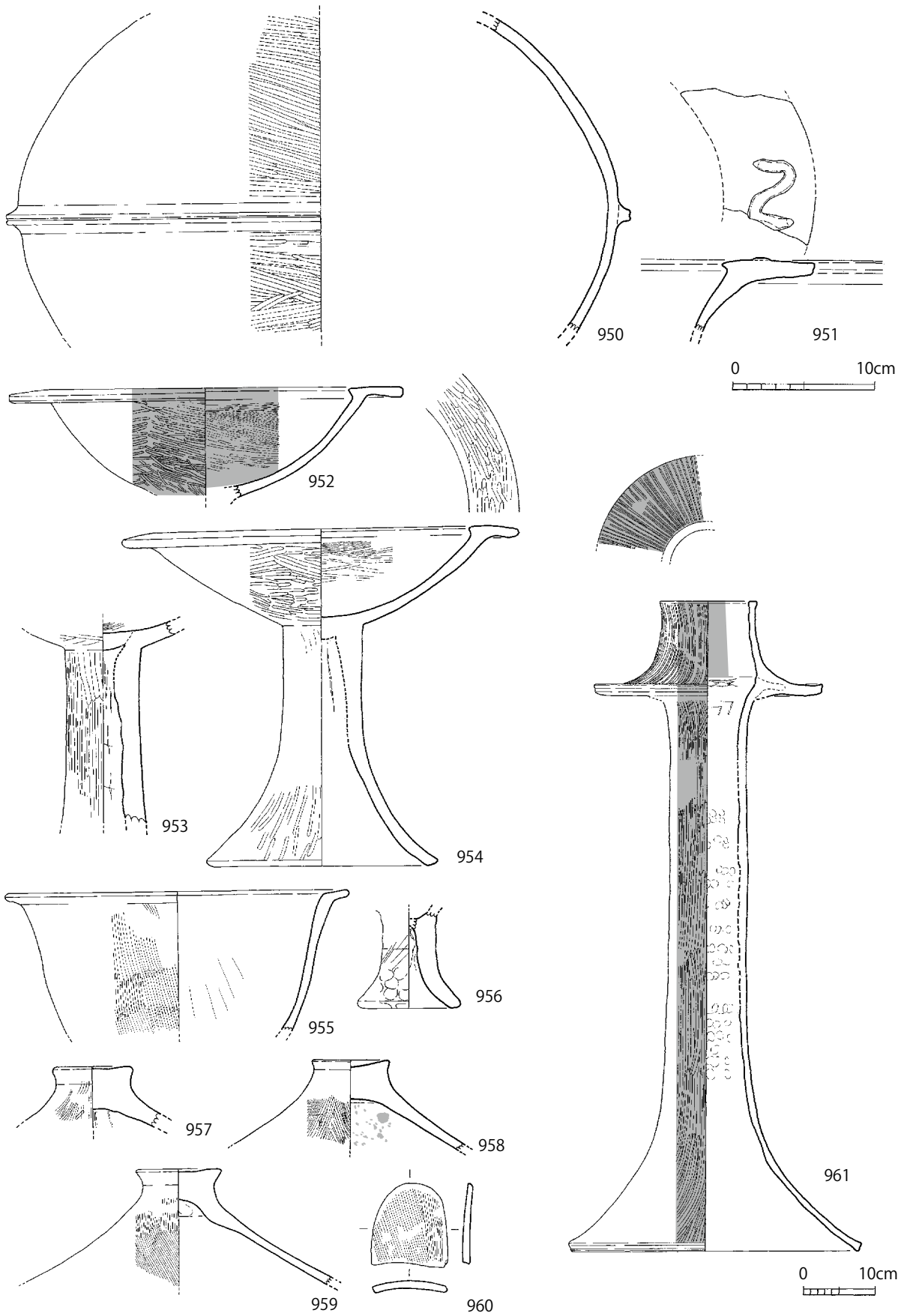


第337図 SX12出土遺物実測図①

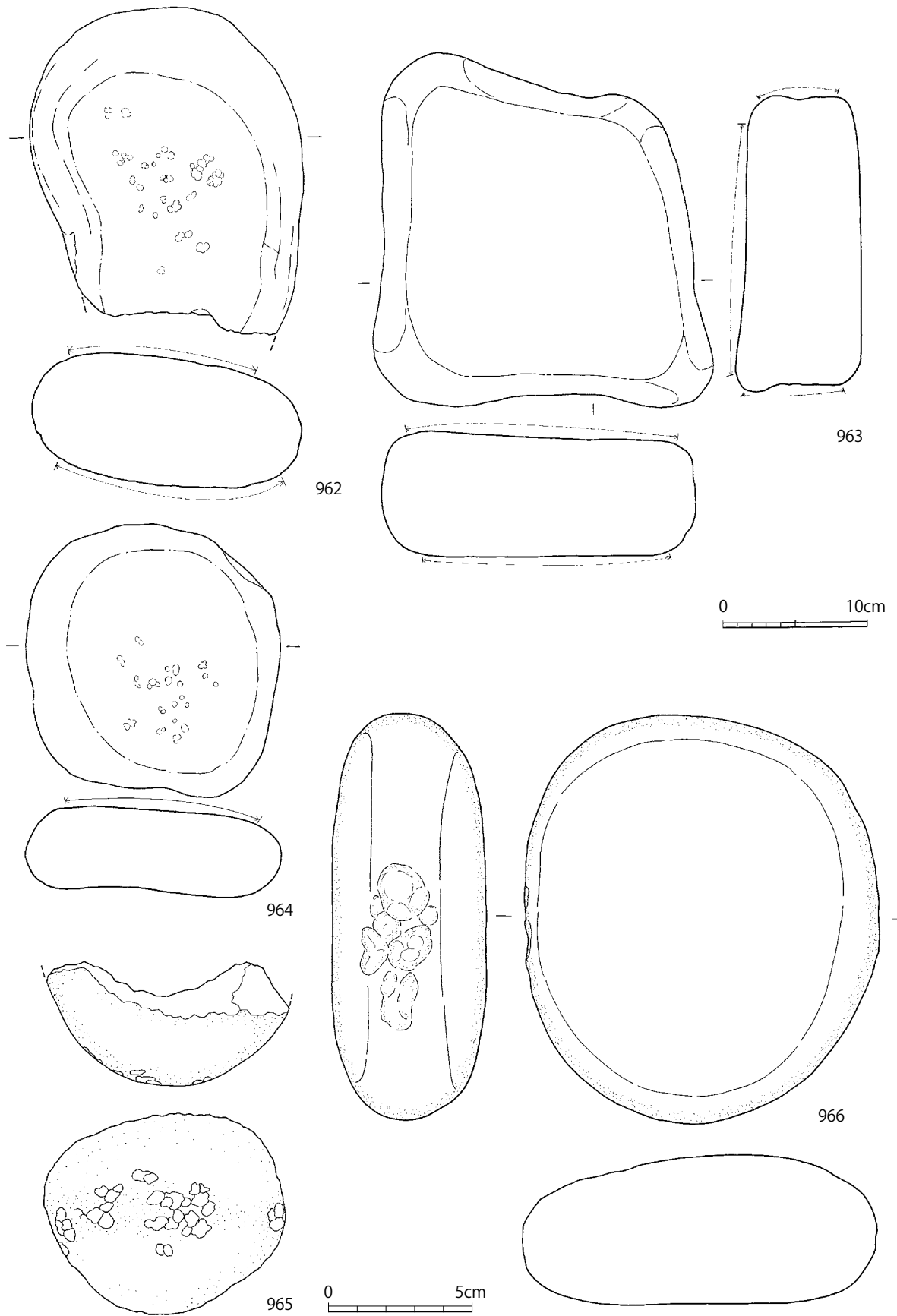




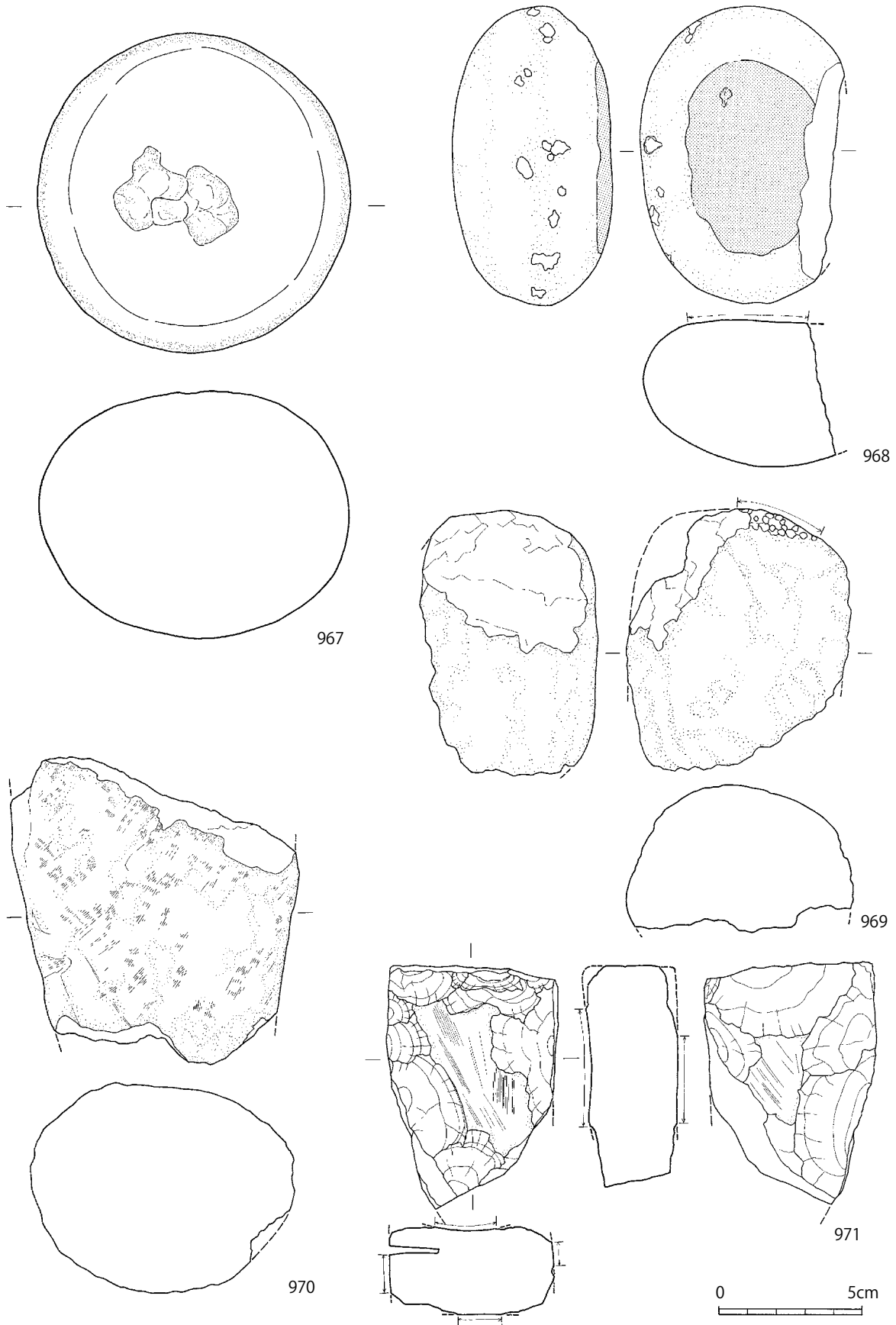
第338図 SX12出土遺物実測図②



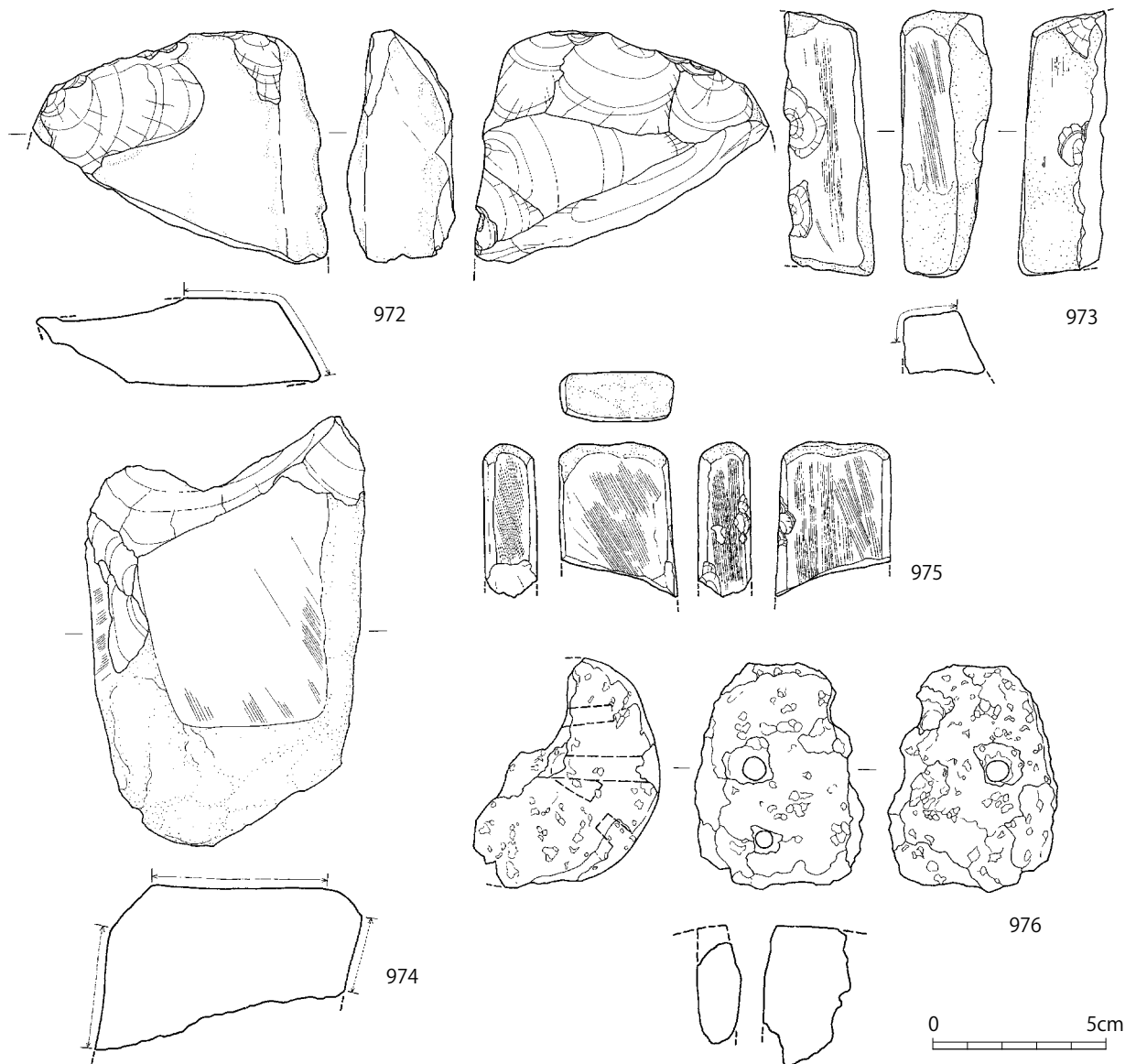
第339図 SX12出土遺物実測図③



第340図 SX12出土遺物実測図④



第341図 SX12出土遺物実測図⑤



第342図 SX12出土遺物実測図⑥

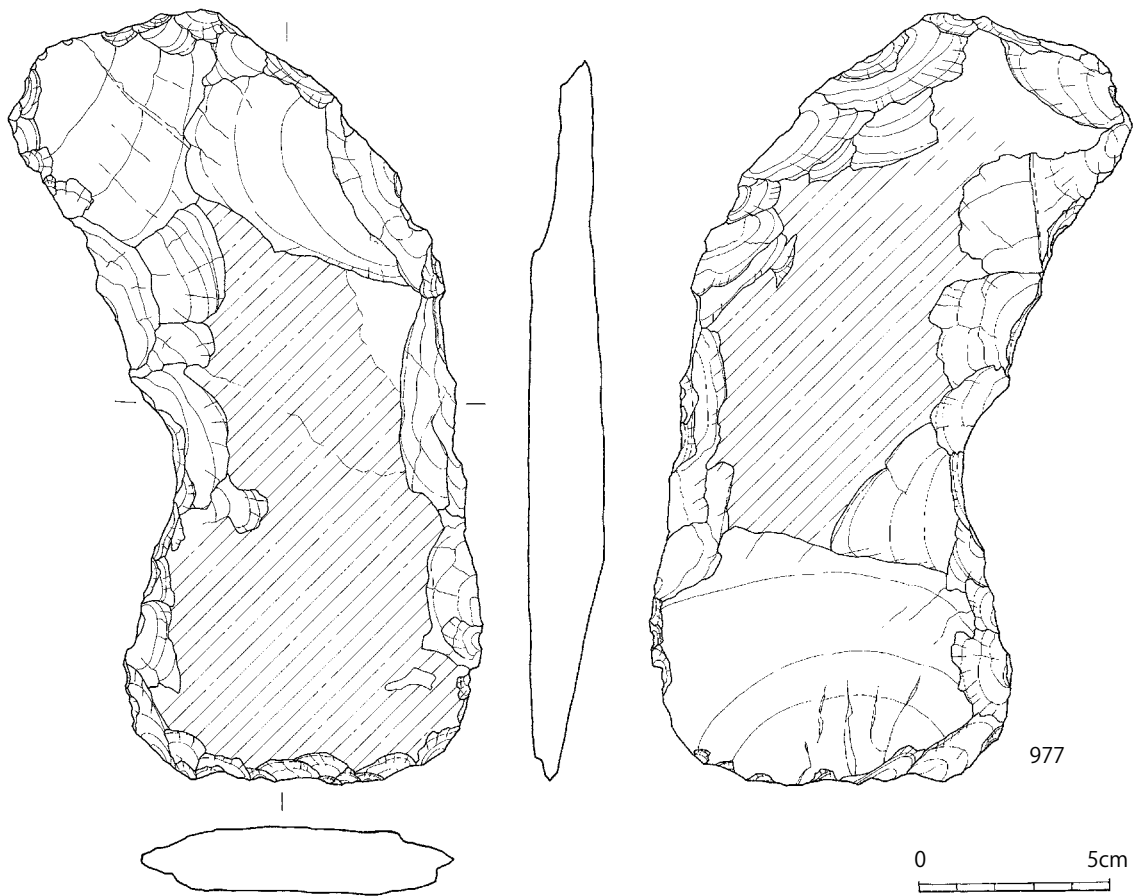
面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面で杭痕と考えられるピットを2本検出した。調査時に床面近くで0.1m程の礫が10個前後出土したようであり、陥穴にかかった獲物への投石の可能性も考えられる。そうであるならば、上場の拡張についても獲物を土坑外へ出すための目的があったかもしれない。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土から遺物は出土していない。

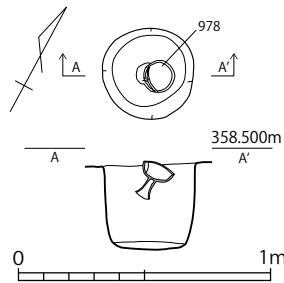
#### SK506 (第298図)

SK506は土坑(陥穴)である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸0.95m、短軸0.7m、深度は0.9mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面で杭痕と考えられる径0.1mのピットを2本検出した。遺構の周囲にあるテラスは掘りすぎによるもので、遺構の本来の形状ではない。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土から甕とみられる小破片がわずかに出土しているが、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階であろうか。



第343図 SX12出土遺物実測図⑦

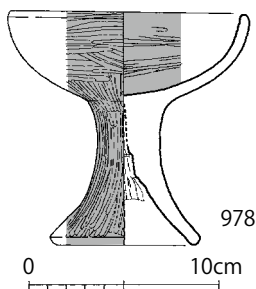


第344図 SX13実測図 (1/30)

**SK507 (第299図)**

SK507は土坑（陥穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.15m、短軸1.0m、深度は0.8mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面で杭痕と考えられる径0.1m以下のピットを6本検出した。

埋土は黒色土で、周囲より流入した土により自然埋没したとみられる。埋土から遺物は出土していない。

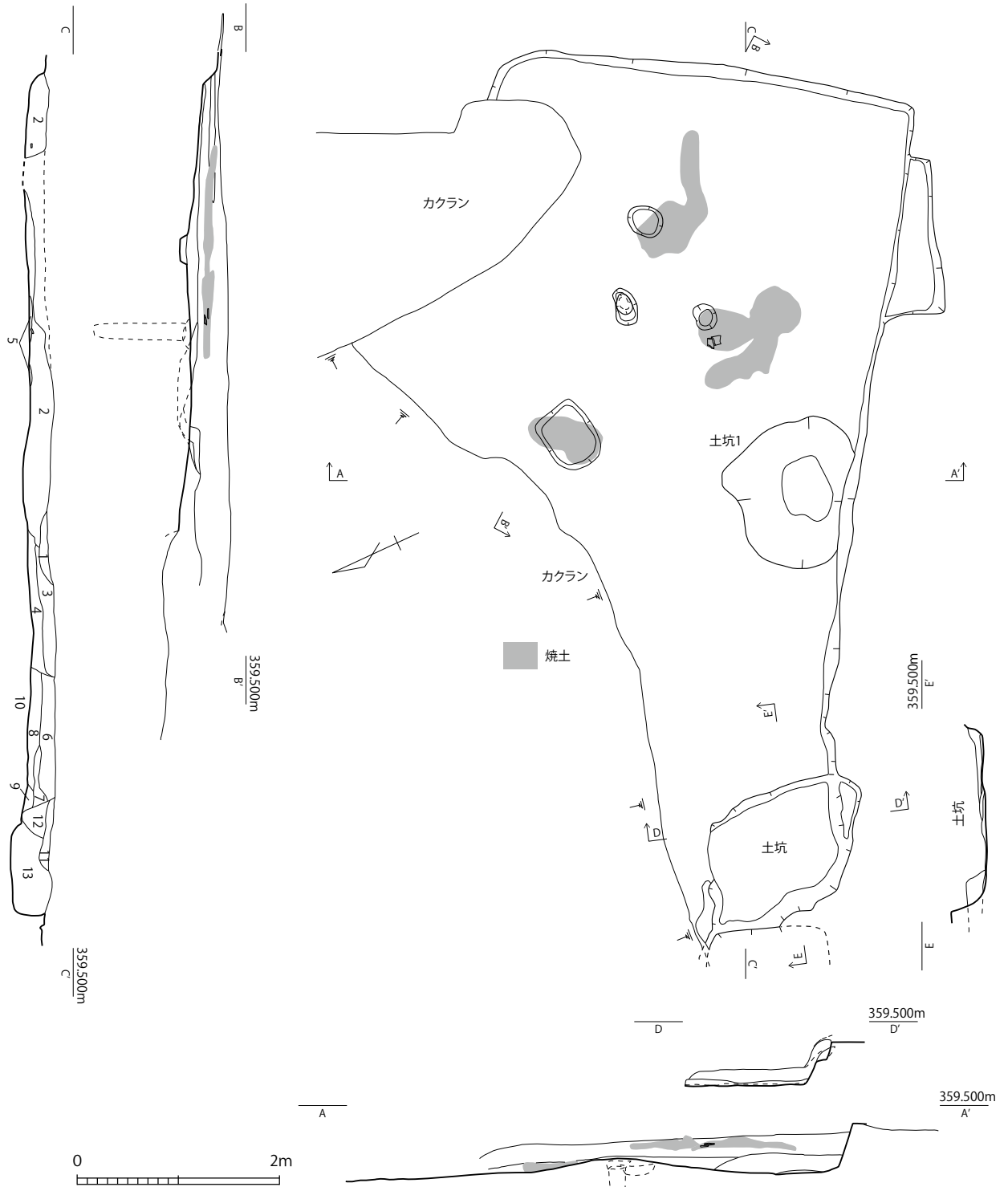


第345図 SX13出土遺物実測図

**SK508 (第301図)**

SK508は土坑（陥穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.85m、短軸0.75m、深度は0.85mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面からは2列に配置された杭痕と考えられるピットを9本検出した。ピットは径0.1m以下だが深度は0.1～0.15mと深いことから、杭状のものが打ち込まれた痕跡と考えられる。遺構の周辺にあるテラスは掘りすぎによりついた段であり、遺構の本来の形状ではない。

埋土は周囲から流入した黒色土の単一層で、自然埋没したとみられるが、埋没の途中で壁面土が崩落した堆積が確認できた。埋土から遺物は出土していない。



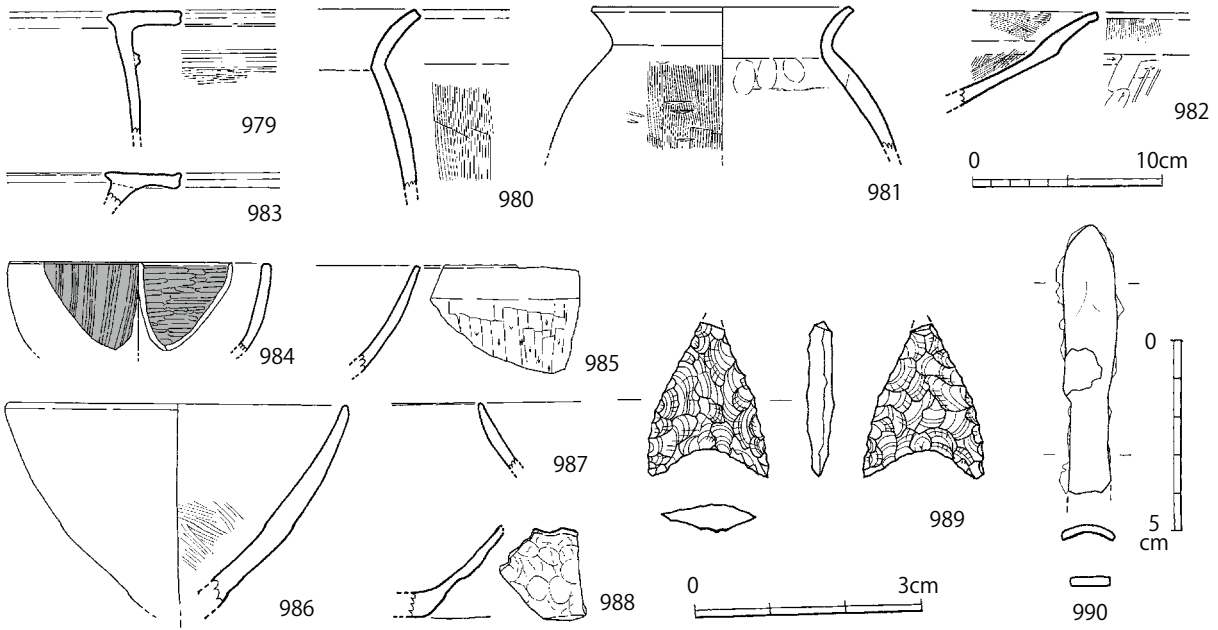
SH163

- 1. 黒褐色土 黄色土微細粒を僅かに含む 粘性なくバサつく
- 2. 黒褐色土 黄色土微細粒少量含む 粘性弱い
- 3. 暗褐色土 黄色土微細粒少量含む 粘性なくバサつく
- 4. 暗褐色土 黄色土微細粒わずかに含む 黄褐色土のブロックあり 粘性弱い
- 5. 明褐色土(焼土)
- 6. 暗褐色土 黄色土微細粒少量含む 粘性弱い 微量の炭まじる
- 7. 暗褐色土 黄色土ブロック及び微細粒多く含む 粘性あり硬く締まる
- 8. 灰黄褐色土 黄色土ブロック及び微細粒多く含む 粘性あり硬く締まる 炭微量に含む
- 9. 暗黄褐色土 黒褐色土が斑状に混じる 粘性あり硬く締まる
- 10. 黄褐色ローム土

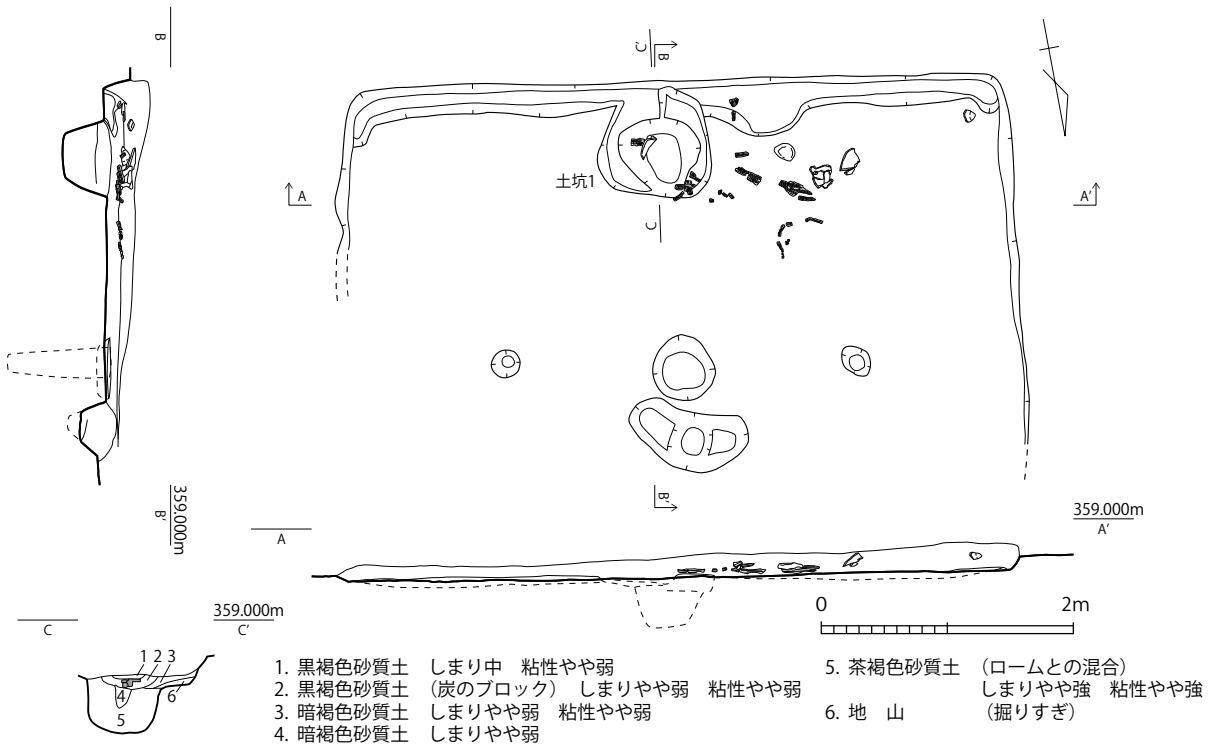
土坑

- 11. 黒褐色土 黄褐色土のブロックが少量混じる 粘性なくバサつく
- 12. 暗黄灰色土 黄色土ブロック及び微細粒混じる 粘性弱い
- 13. 淡黄褐色土 暗褐色・黒褐色土が斑状に混じる やや粘性強い

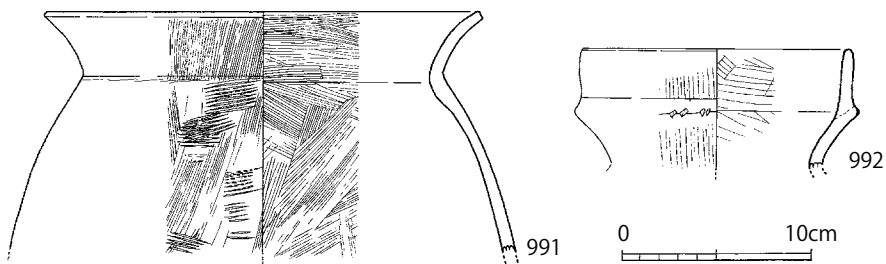
第346図 SH163実測図 (1/60)



第347図 SH163出土遺物実測図



第348図 SH164実測図 (1/60)



第349図 SH164出土遺物実測図



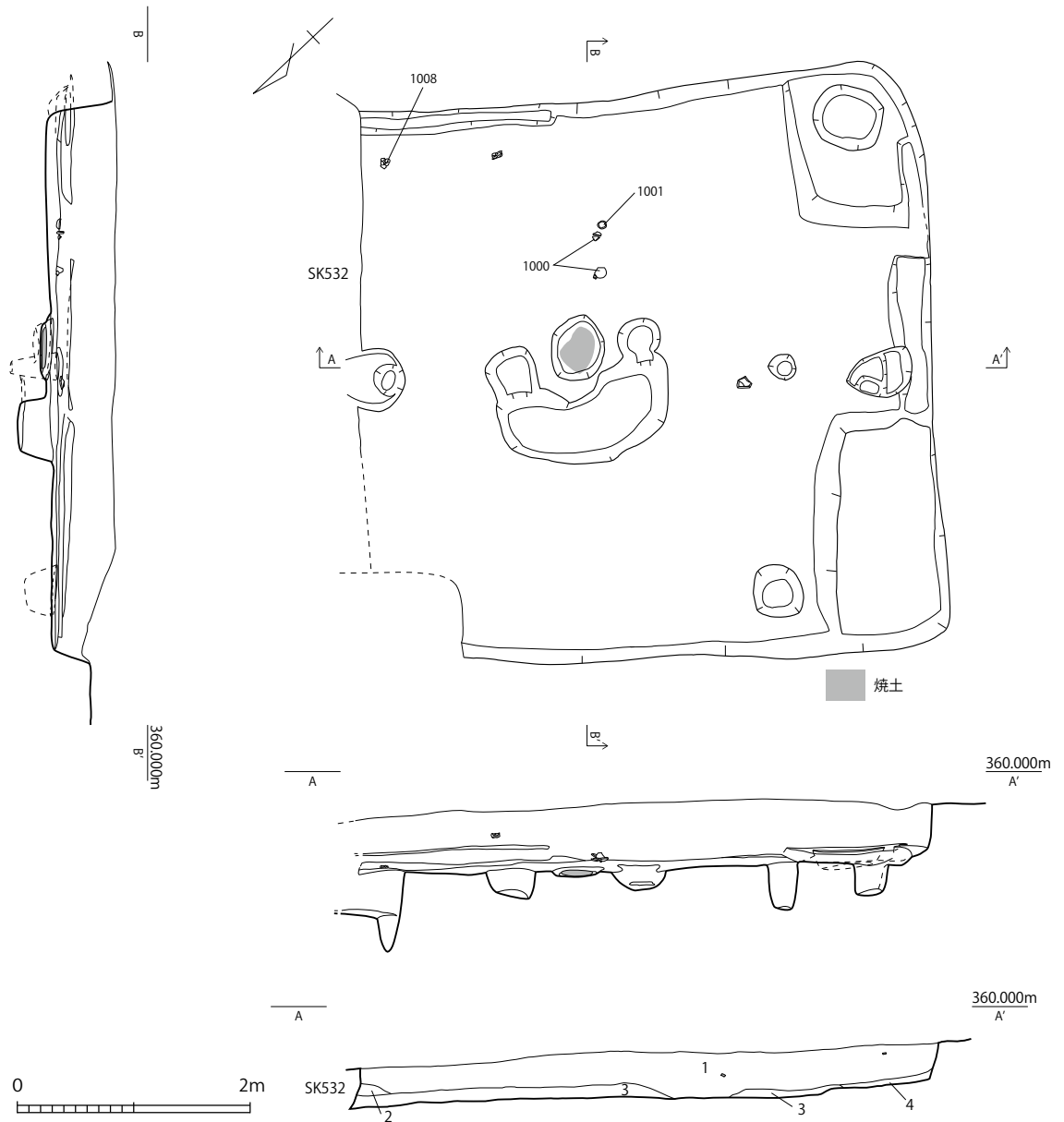
SK509 (第302図)

SK509は土坑（陥穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸1.4m、短軸0.75m、深度は1.35mである。壁面は直立に立ち上がる。床面は平坦で、杭痕と考えられる径0.05mのピット3本が検出できた。遺構周辺の西側と南側にあるテラス状の段は掘りすぎによるもので、遺構の本来の形状ではない。

埋土は黒色土で、周囲から流入した土により自然埋没しているが、床面直上からは壁面から崩落したとみられる地山土が堆積していた。埋土中から遺物は出土していない。

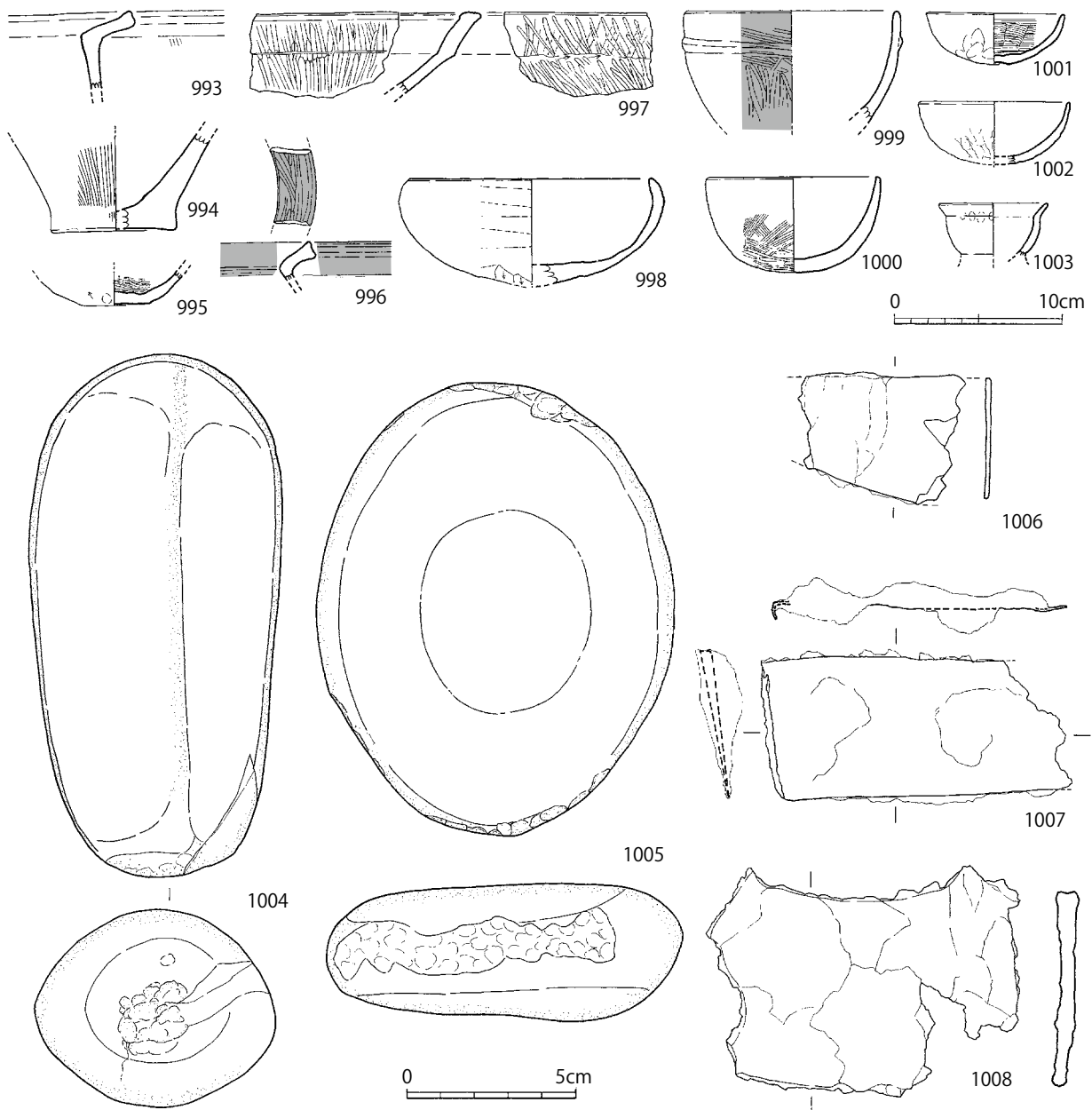
SK510 (第300図)

SK510は土坑である。形状は円形で、規模は径0.95m、深度は0.4mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は



1. 暗褐色砂質土 黄褐色土粒多く混じる 一部5cmの粒あり しまりやや強い 粘性中
2. 黄褐色砂質土 しまりやや強い 粘性やや強い ローム土
3. 暗褐色砂質土 黄褐色土粒やや多く混じる 一部1~2cmの粒あり しまりやや強い 粘性中
4. 暗褐色砂質土 黄褐色土粒混じり しまり強い 粘性中

第350図 SH165実測図 (1/60)



第351図 SH165出土遺物実測図

平坦である。北東壁際にある柱穴はSK510の埋没後に掘り込まれた別遺構である。床面で杭痕などは検出できなかった。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土中からは甕・高坏などの小破片がわずかに出土しているが、図示できるような資料はない。出土遺物は弥生時代中期後半段階と考えられるが、SK510を切る柱穴の遺物が混じり込んだ可能性があることも明記しておきたい。

#### SK511 (第303図)

SK511は土坑である。SK512に切られる。形状が楕円形と推定でき、規模は長軸0.75m以上、短軸0.7m、深度は0.3mである。床面は西に向かって傾斜する。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。遺物は甕・壺とみられる小破片がわずかに出土する程度であり、図示できるような資料はない。埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥

生時代中期後半段階と考えられる。

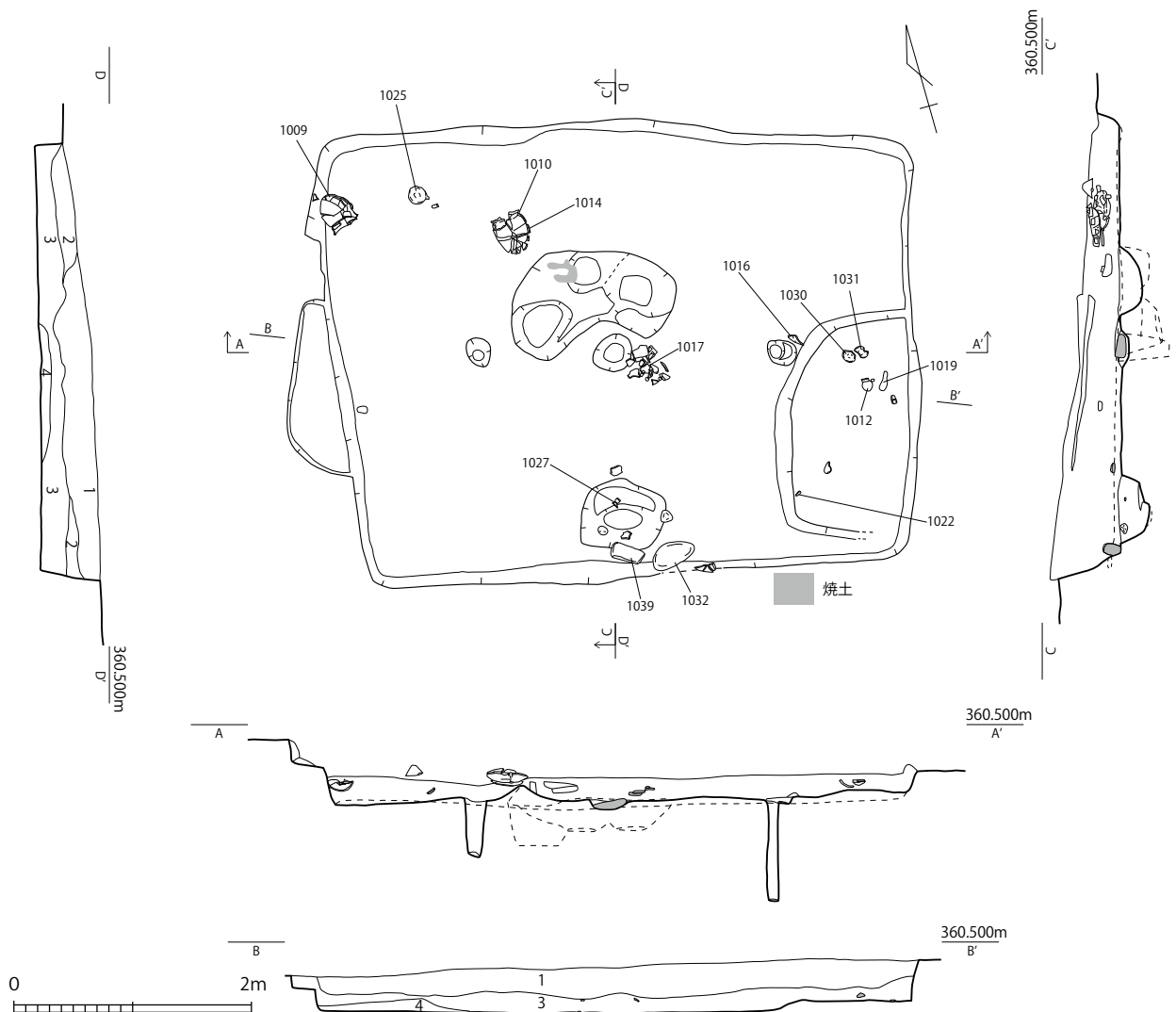
**SK512 (第303・310図)**

SK512は土坑である。SK511を切る。形状が円形で、規模は径1.15m、深度は0.8mである。壁面は直立に立ち上がるが、北壁にのみ幅の狭いテラスがあることから、足場に使用した可能性もある。床面は平坦で、明確な杭痕とはいえないが、ピット状の窪みが床面にある。土坑の特徴から陥穴の可能性もある。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。遺物は壺の小破片がわずかに出土しており、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

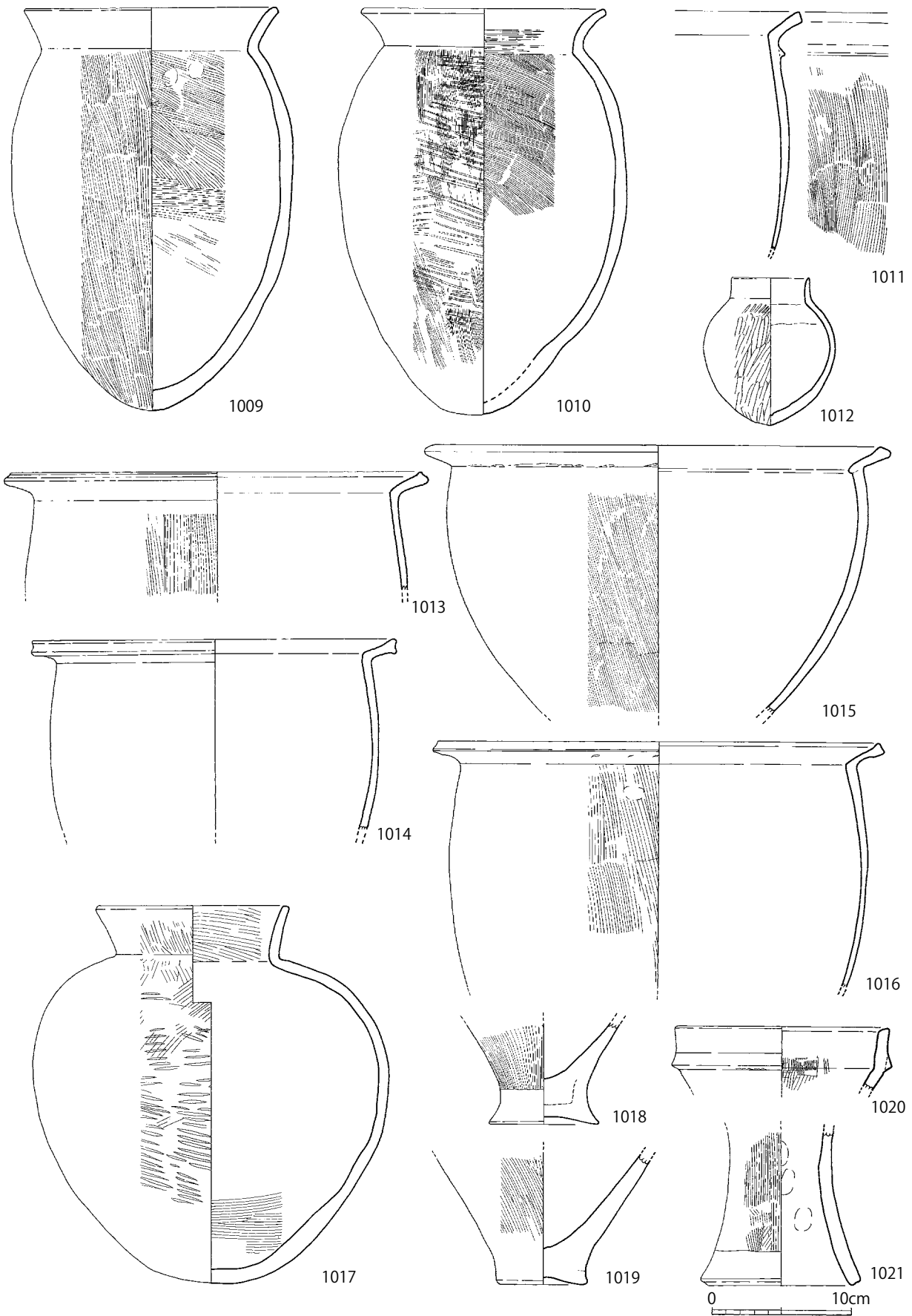
**SK513 (第304図)**

SK513は土坑（陥穴）である。SK514に切られる。形状は楕円形で、長軸0.85m、短軸0.6m、深度は0.45mである。床面は平坦ではない。

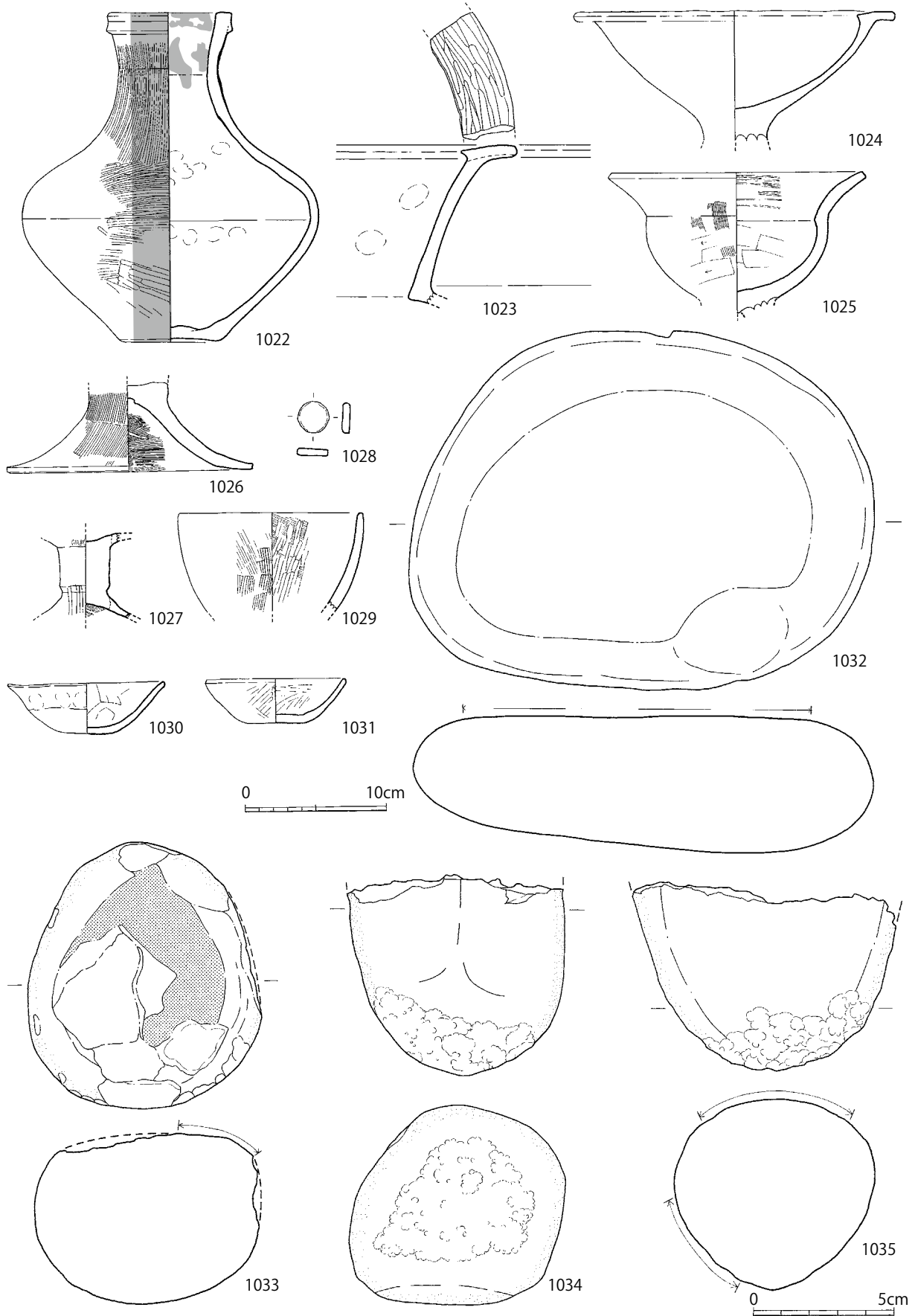


1. 黒褐色砂質土 黄褐色土粒を若干含む しまりやや強 粘性中 (1層中に土器が多くみられる)
2. 暗黄褐色土 粘性あり 黄褐色土ブロックが多く混じる  
→4層よりも黄褐色土ブロックの混じりが明確で多い
3. 暗褐色砂質土 黄褐色土粒を若干含む しまりやや強 粘性中
4. 暗褐色砂質土 黄褐色土ブロックを多く含む しまりやや強 粘性中

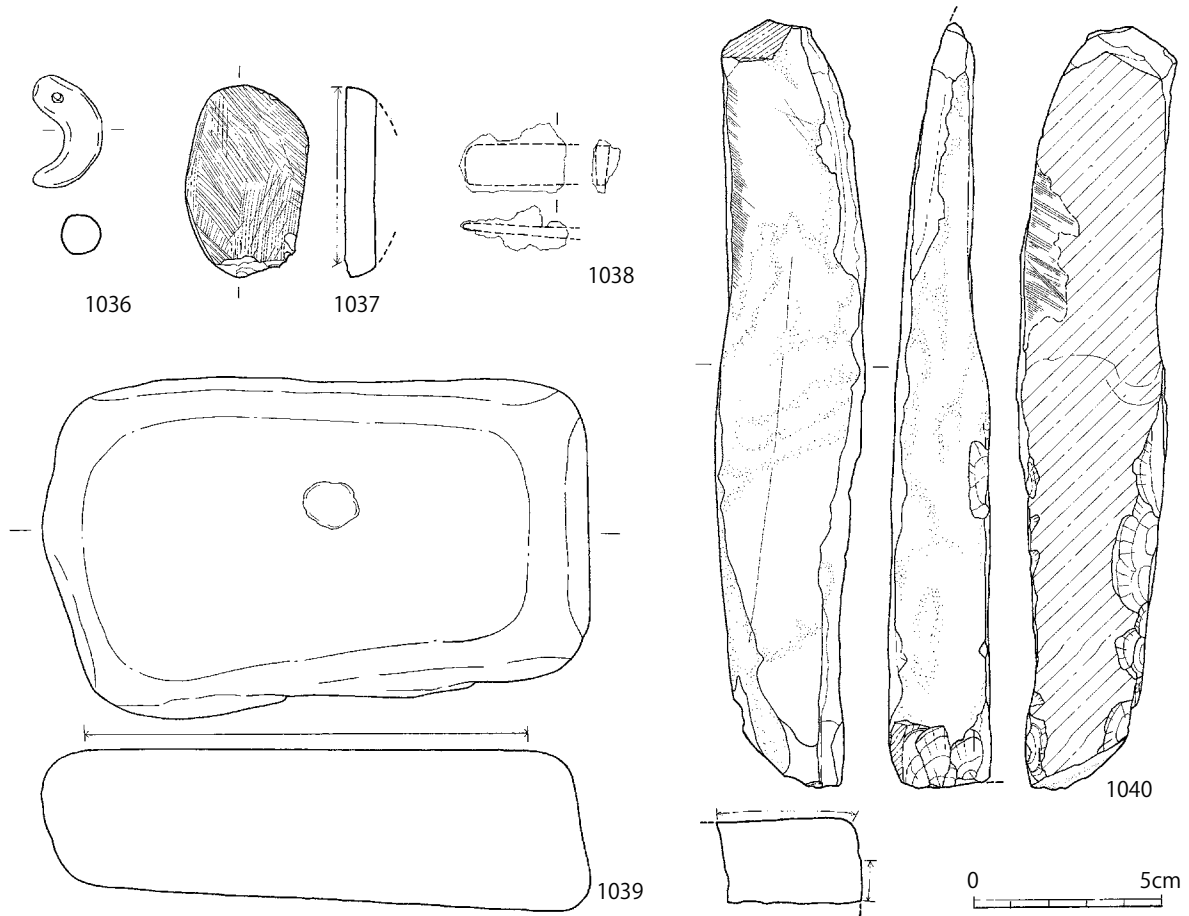
第352図 SH166実測図 (1/60)



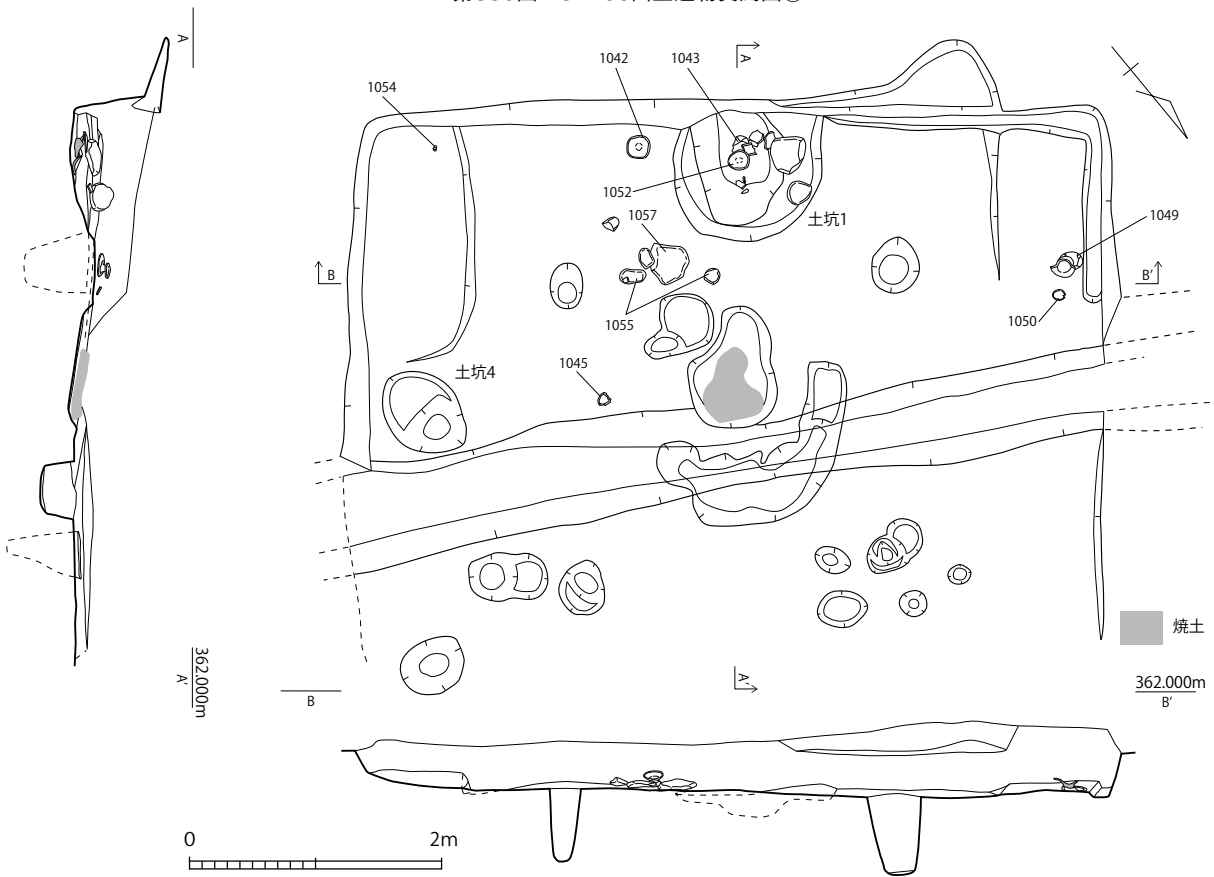
第353図 SH166出土遺物実測図①



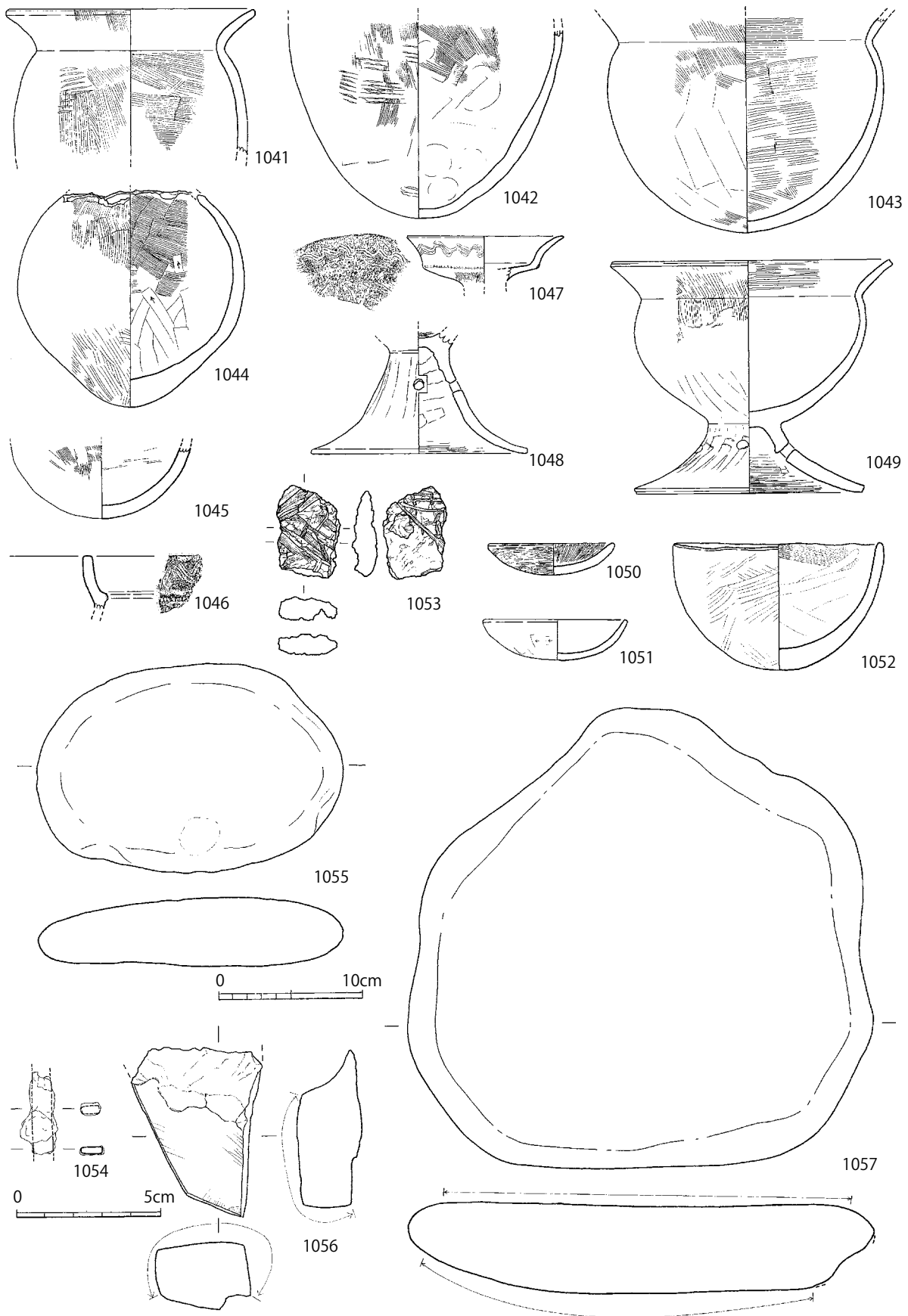
第354図 SH166出土遺物実測図②



第355図 SH166出土遺物実測図③

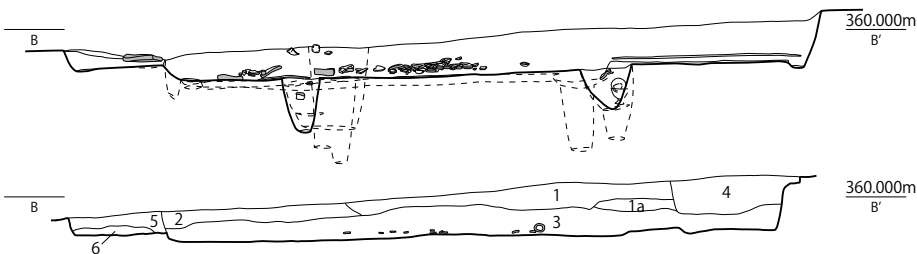
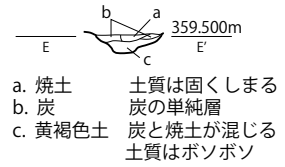


第356図 SH167実測図 (1/60)



第357図 SH167出土遺物実測図

- |            |              |        |       |
|------------|--------------|--------|-------|
| 1. 黒褐色砂質土  | 黄褐色粒を若干含む    | しまりやや強 | 粘性中   |
| 2. 暗褐色砂質土  | 黄褐色粒を若干含む    | しまりやや強 | 粘性中   |
| 3. 黒褐色砂質土  | 黄褐色粒を少し含む    | しまりやや強 | 粘性中   |
| 4. 暗褐色砂質土  | 黄褐色粒を中量含む    | しまりやや強 | 粘性中   |
| 5. 焼土      |              |        |       |
| 6. 淡黄褐色砂質土 | 黒褐色砂質土が中量含む  | しまりやや強 | 粘性中   |
| 7. 淡暗褐色砂質土 | 黄褐色粒を若干含む    | しまりやや強 | 粘性中   |
| 8. 暗褐色砂質土  | 黄褐色粒を少し含む    | しまりやや弱 | 粘性やや弱 |
| 9. 暗褐色砂質土  | 黄褐色ブロックを少し含む | しまりやや弱 | 粘性やや弱 |

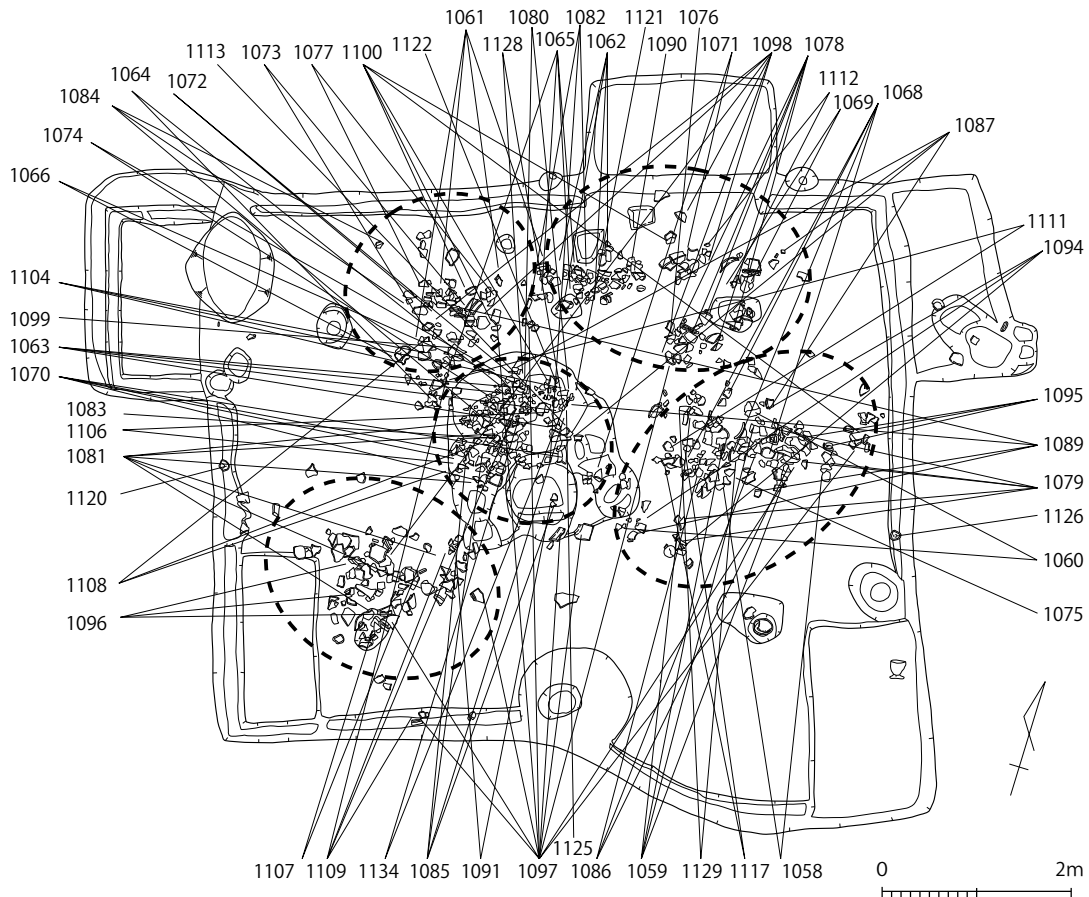


- |            |                    |        |       |
|------------|--------------------|--------|-------|
| 1. 黒褐色砂質土  | 黄褐色粒を若干含む          | しまりやや強 | 粘性中   |
| 1a. 黒褐色砂質土 | 淡黄褐色砂質土のまだらが多くみられる | しまりやや強 | 粘性中   |
| 2. 暗褐色砂質土  | 黄褐色粒を若干含む          | しまりやや強 | 粘性中   |
| 3. 黒褐色砂質土  | 黄褐色粒を少し含む          | しまりやや強 | 粘性中   |
| 4. 黒褐色砂質土  | 黄褐色粒が少しみられる        | しまりやや強 | 粘性中   |
| 5. 暗褐色砂質土  | 黄褐色粒を少し含む          | しまりやや弱 | 粘性やや弱 |
| 6. 暗褐色砂質土  | 黄褐色ブロックを中量含む       | しまりやや弱 | 粘性やや弱 |



第358図 SH168実測図 (1/80)





第359図 SH168遺物出土位置図(1/80)

埋土は黒色土であるが、SK514と比べるとやや淡い色調である。流入土により自然埋没したとみられる。遺物は埋土中から赤色顔料を塗布した壺片とみられる土器片が1点のみ出土しただけであり、図示できるような資料ではない。埋没時に混じり込んだものとみられることから、埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK514 (第304図)

SK514は土坑である。SK513を切る。形状が隅丸長方形で、長軸1.15m、短軸0.6m、深度は0.5mである。壁面は直立で、床面は平坦である。床面に径0.15mのピットを2本検出した。

埋土は黒色土で、流入土により自然埋没したとみられる。遺物は出土していないが、SK513との切り合い関係から、埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

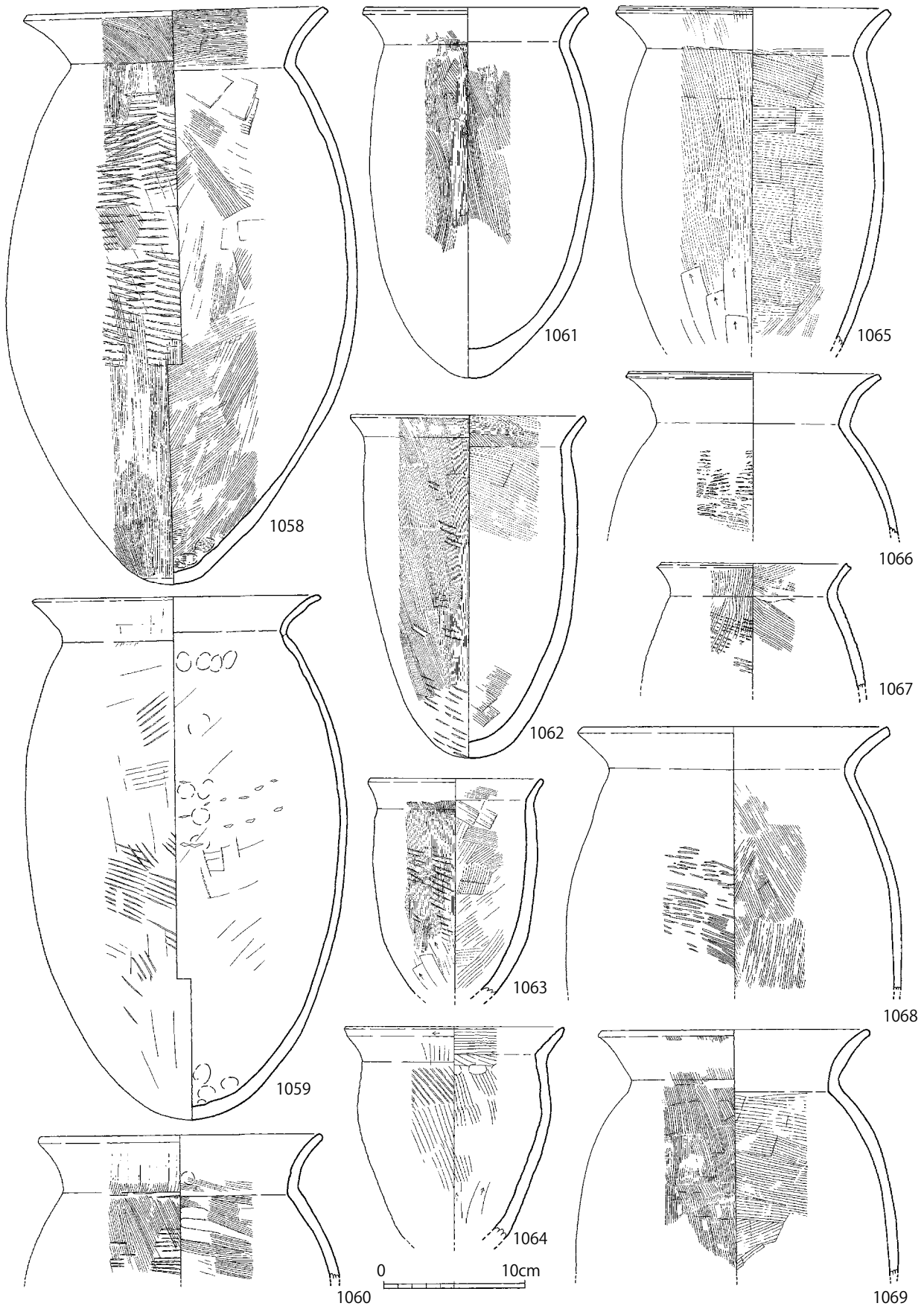
#### SK515 (第305図)

SK515は土坑である。SK516に切られる。SK515はSK516の完掘後に検出した土坑で、形状は円形で、規模は径0.95mである。壁面は直立に立ち上がり、床面付近で段掘りのテラスがつく。深度は0.95mである。

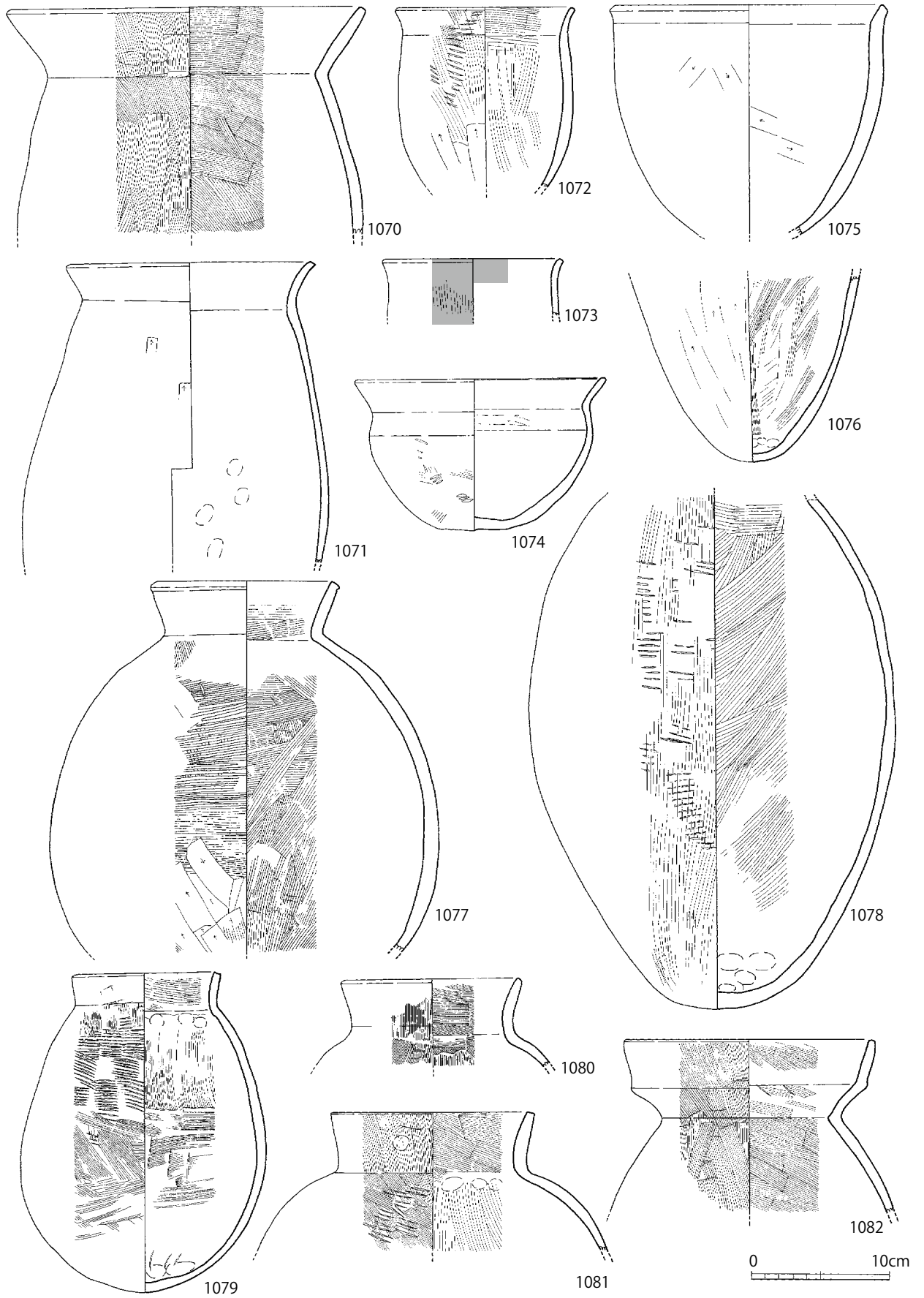
埋土は淡黒褐色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。遺物は埋土中から甕の小破片がわずかに出土しているが、図示できる資料ではない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

#### SK516 (第305・311図)

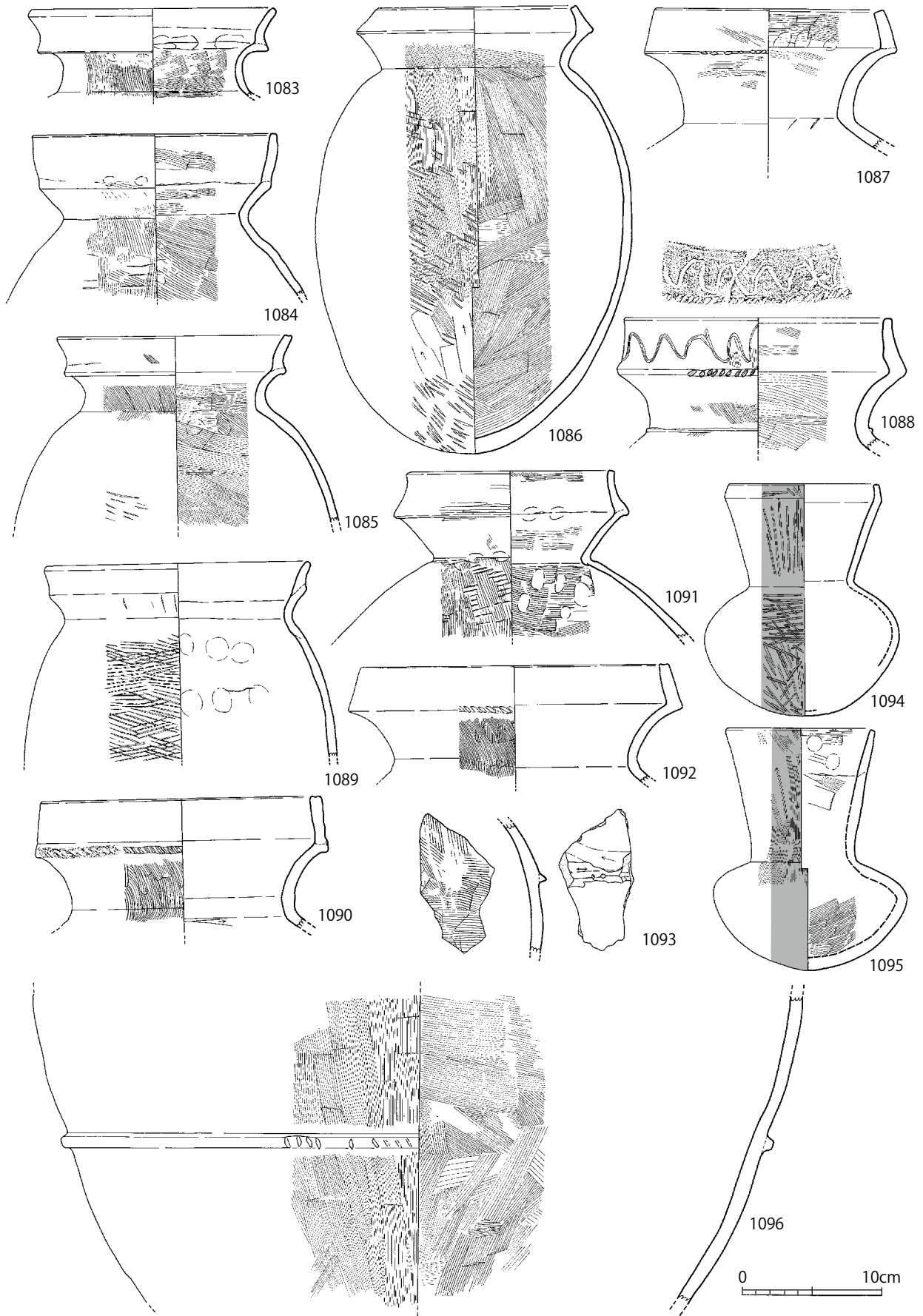
SK516は土坑である。SK515を切る。形状は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.85mで、段掘りになっている。最深深度は0.4mである。



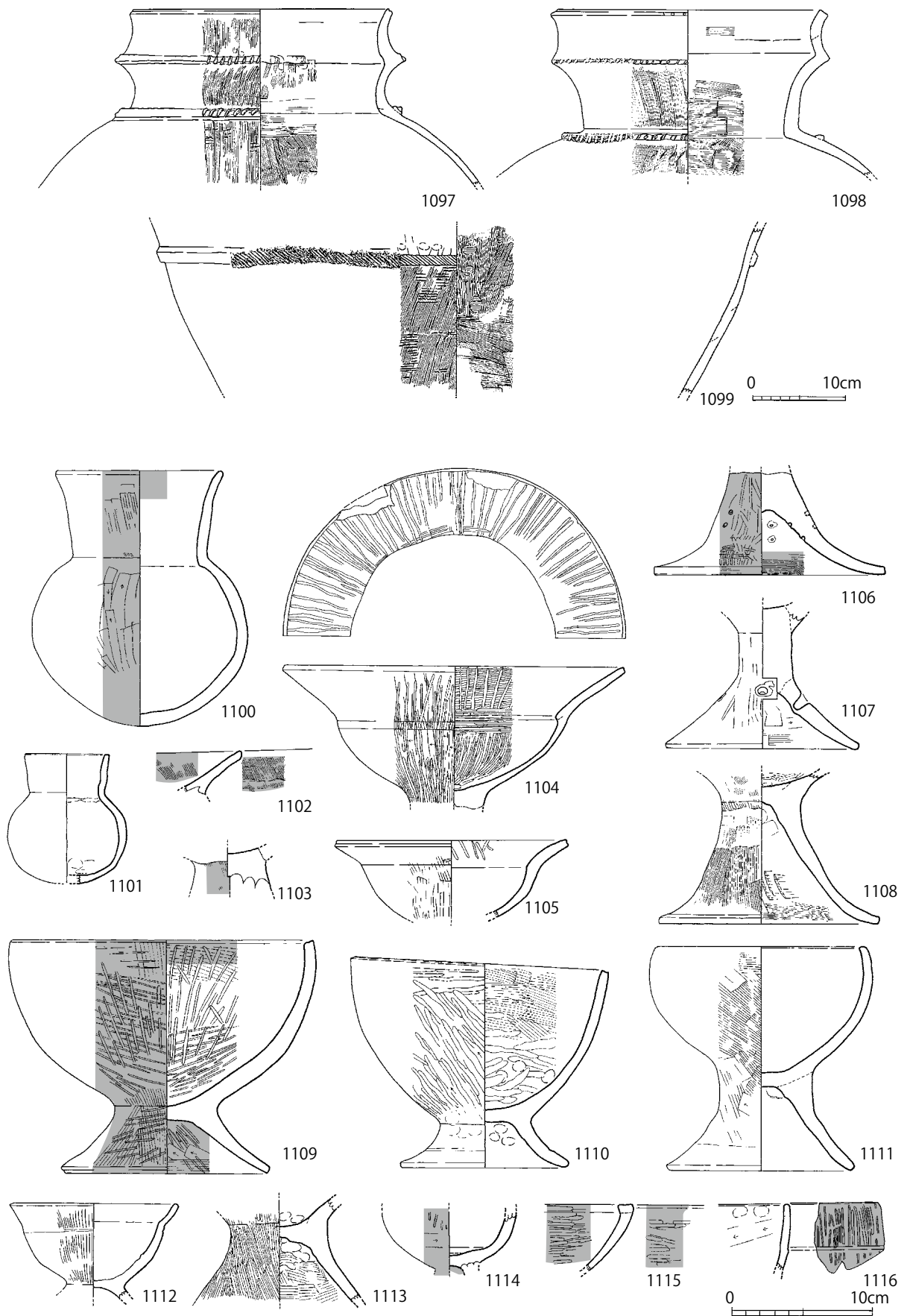
第360図 SH168出土遺物実測図①



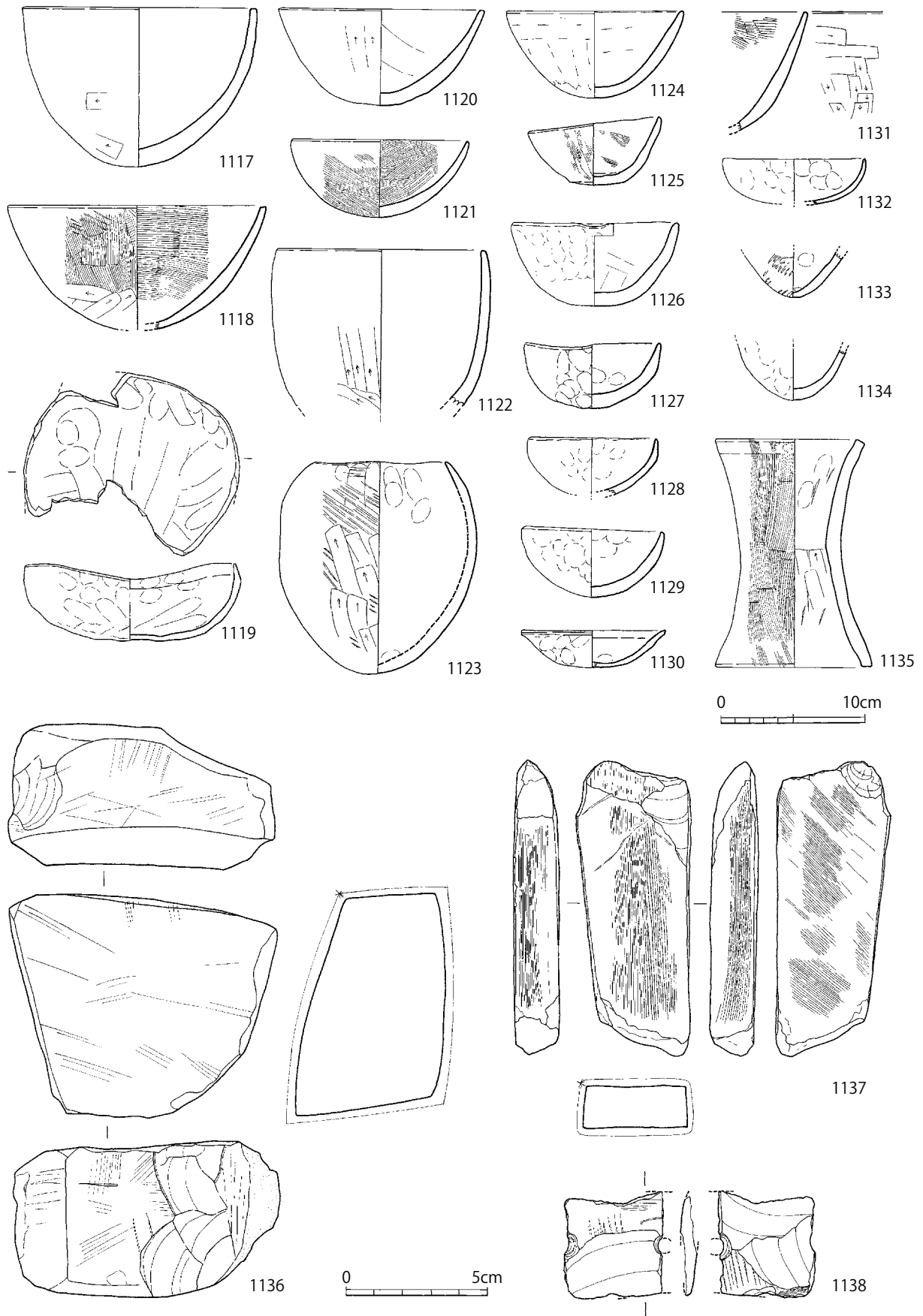
第361図 SH168出土遺物実測図②



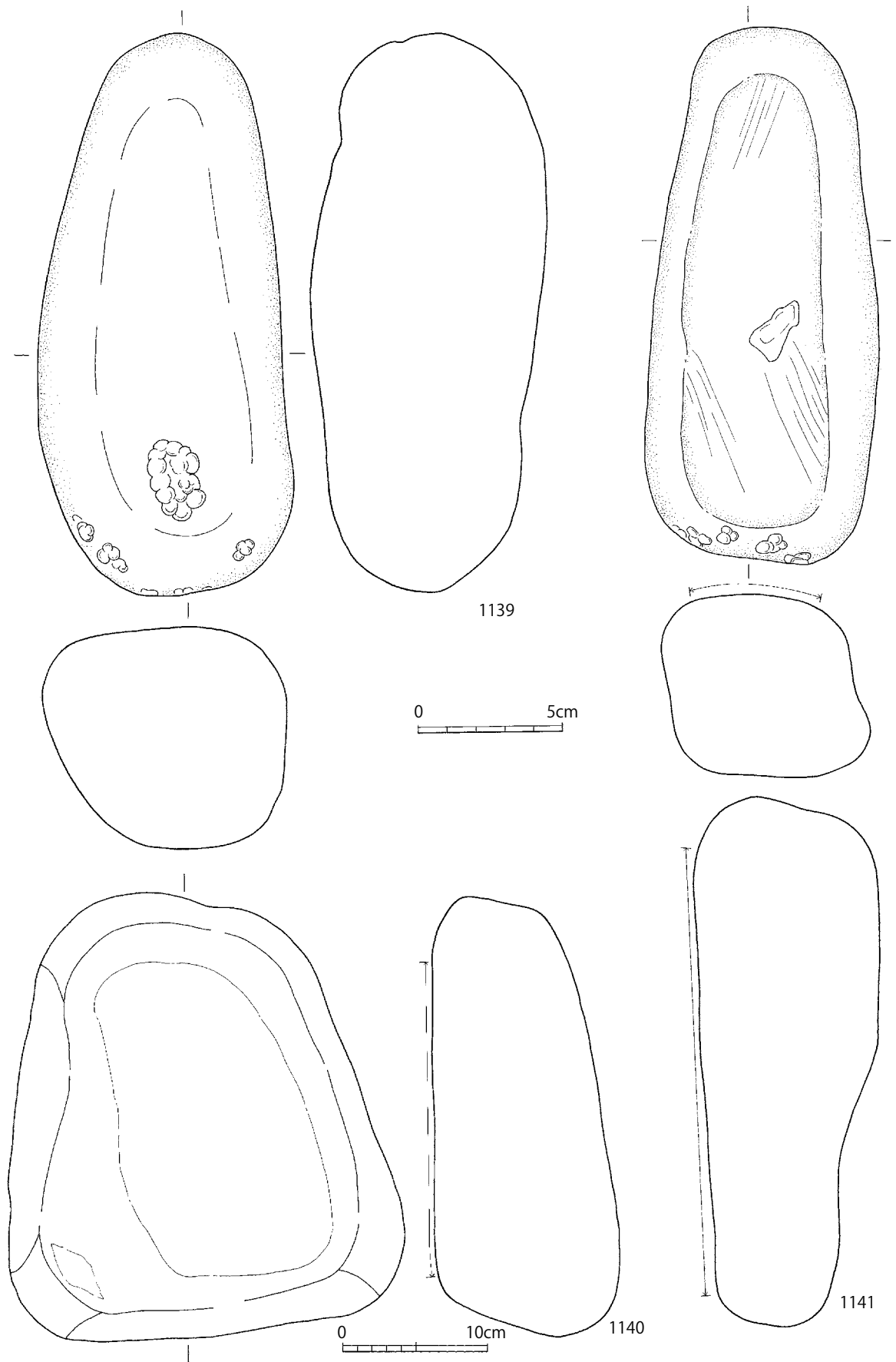
第362図 SH168出土遺物実測図③



第363図 SH168出土遺物実測図④



第364図 SH168出土遺物実測図⑤



第365図 SH168出土遺物実測図⑥

埋土は黒褐色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。表土除去時にSK516の上部から土器がまとめて出土している。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**SK517 (第306図)**

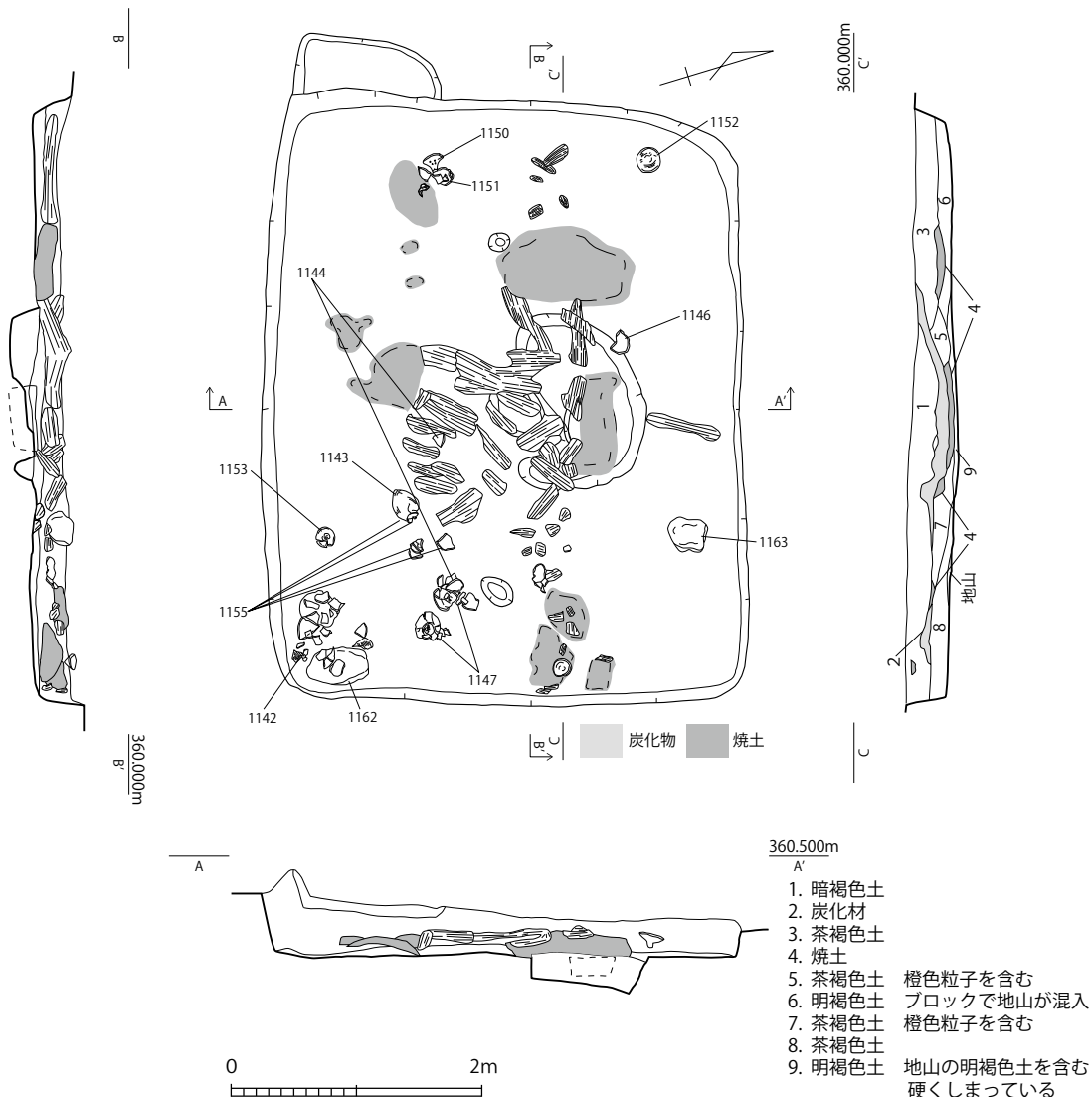
SK517は土坑(陥穴)である。SK518に切られる。楕円形に近い形状で、長軸1.4m、短軸0.85m、深度は0.65mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面からは杭痕と考えられるピット状のくぼみを3本検出した。

埋土は黒色土で、土層の観察から周囲からの流入土により埋没したとみられる。遺物は出土しておらず、後述するSK518との切り合い関係から、埋没時期は弥生時代中期後半より以前と判断した。

**SK518 (第307図)**

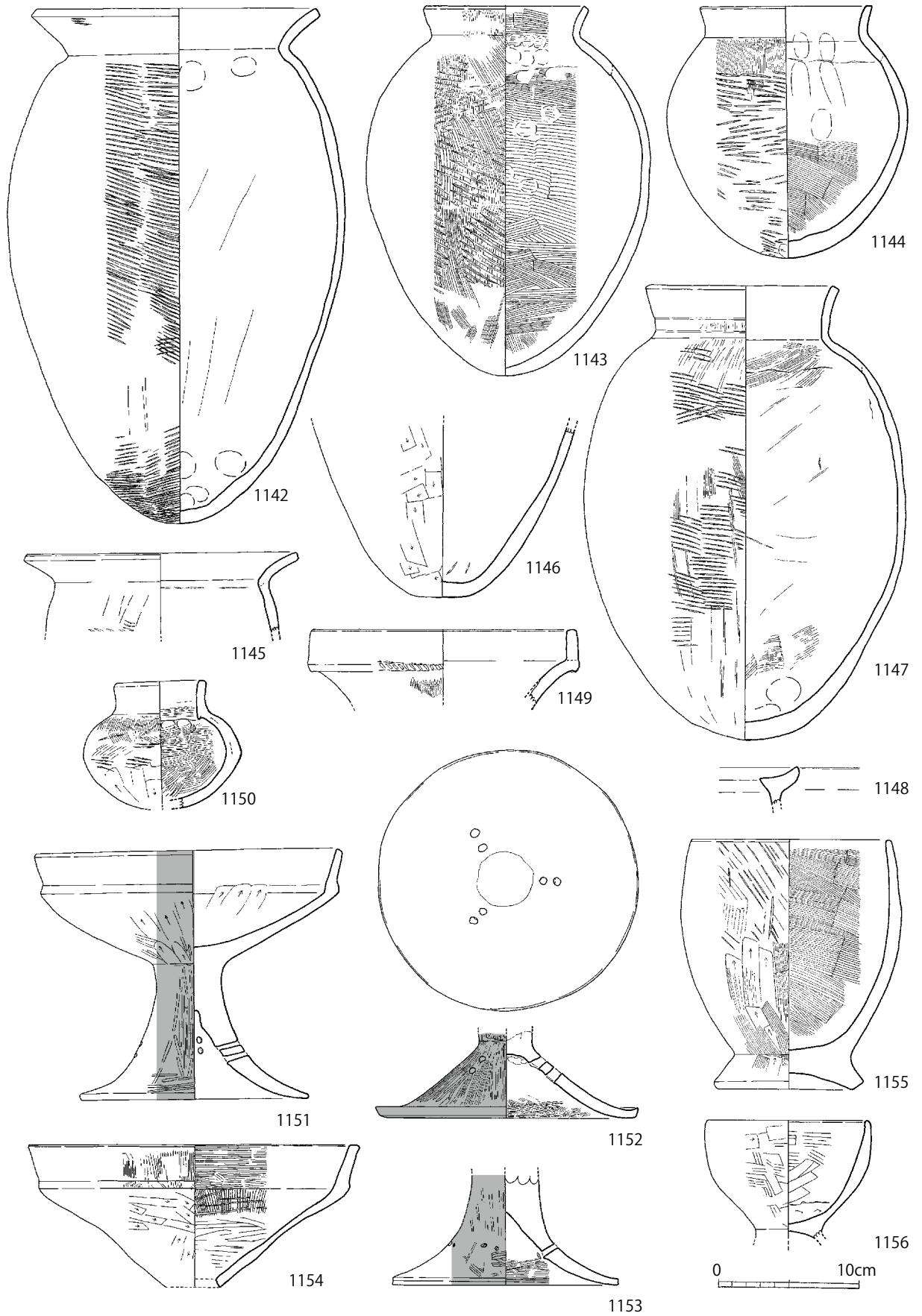
SK518は土坑(陥穴)である。SK517を切る。形状は隅丸長方形と推定でき、規模は長軸1.5m以上、短軸0.8m、深度は1.05mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦で長軸上にならんだ径0.05mのピットを3本検出した。このピットは杭状のものを打ち込んだものとみられる。

周囲から流入した黒色土により自然埋没したとみられる。遺物は埋土中から甕の小破片がわずかに出土する程度であり、図示できるような資料はない。埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

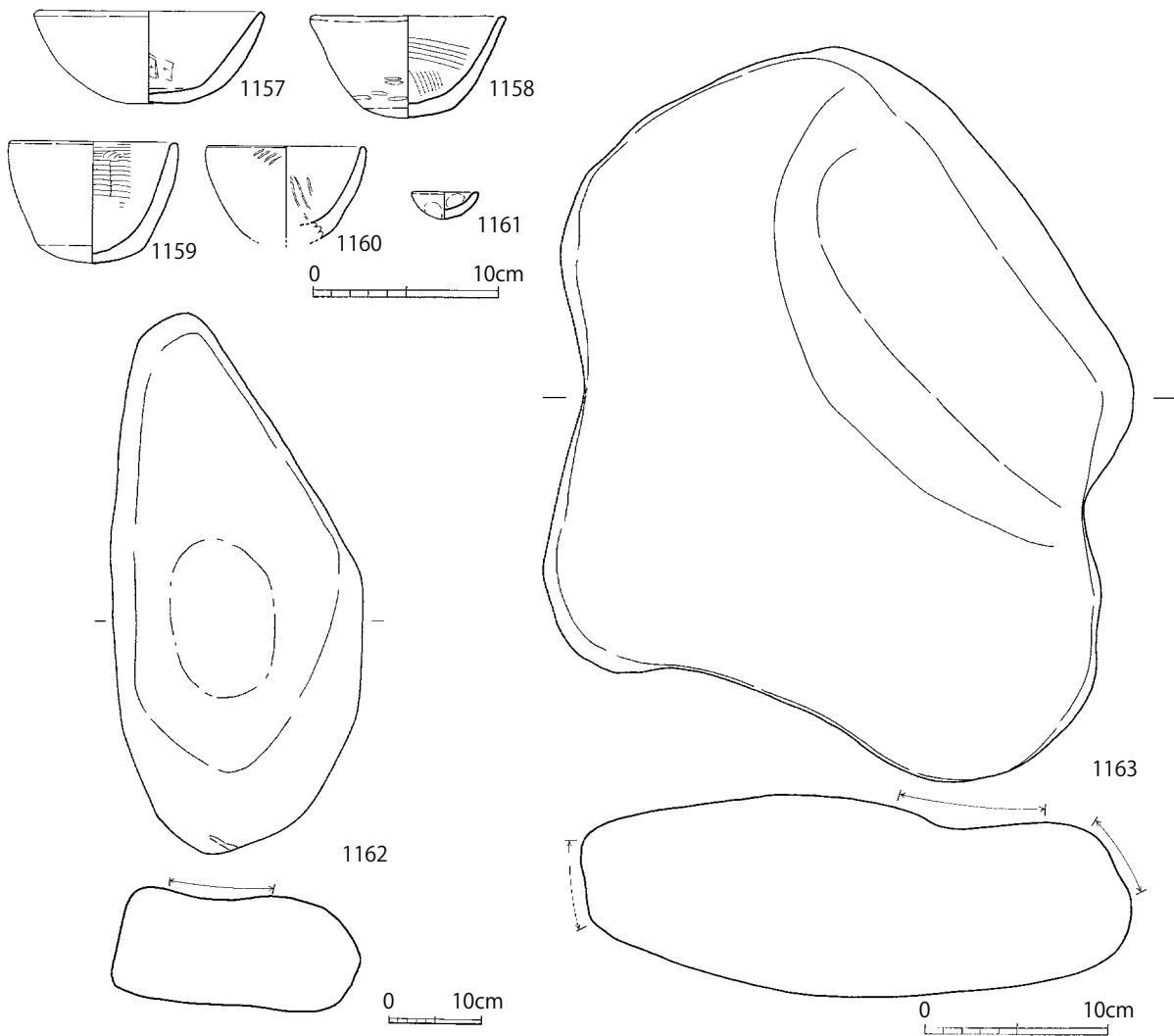


第366図 SH169実測図 (1/60)





第367図 SH169出土遺物実測図①



第368図 SH169出土遺物実測図②

**SK519 (第308図)**

SK519は土坑である。形状は円形で、規模は径0.7m、深度は1.2mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面に杭痕はない。

埋土は黒色土で、周囲からの流入土により自然埋没したとみられる。埋土から遺物は出土していない。

**SK520 (第309図)**

SK520は土坑（陥穴）と考えられる。形状は楕円形でテラスを有する。規模は長軸1.35m、短軸0.9m、深度は0.75mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦で杭痕などは確認できなかった。

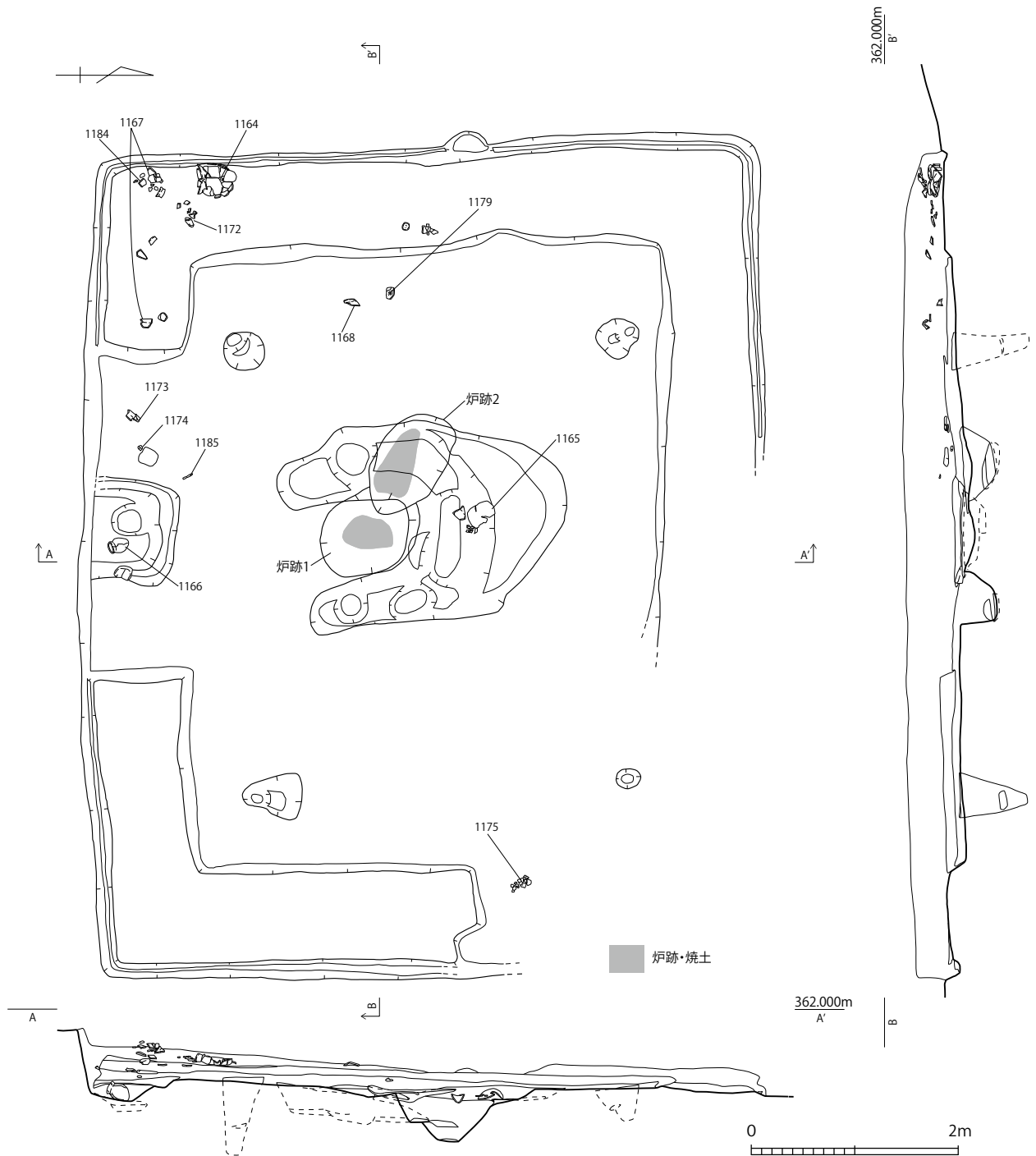
埋土は暗黒褐色土で、流入土により自然埋没したとみられる。遺物は埋土中から甕・鉢などの小破片がわずかに出土する程度であり、図示できるほどの資料はない。埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

(3) 小児用甕棺

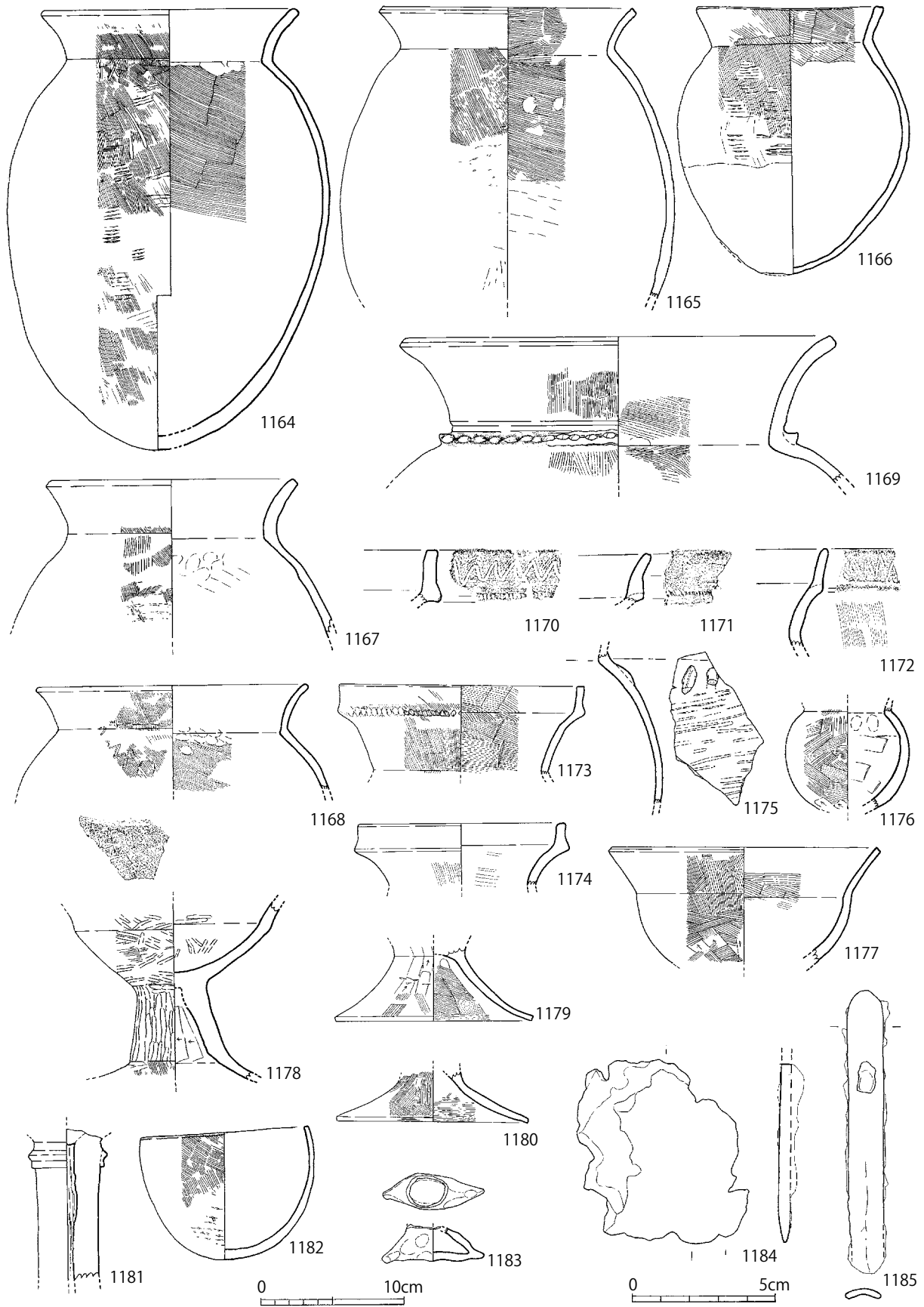
SK521 (第312・313図)

SK521は小児用石蓋甕棺墓である。墓壙は長方形で、規模は長軸1.7m、短軸1.0mである。2段掘りで、下段の壁面に横穴を掘り込み、そこに甕を横向きに埋置し石蓋をする。石蓋は安山岩を方形に加工した板石で、甕の口縁に合うように斜めに置いている。甕は北西から南東に傾斜していることから、北西頭位と推定できる。

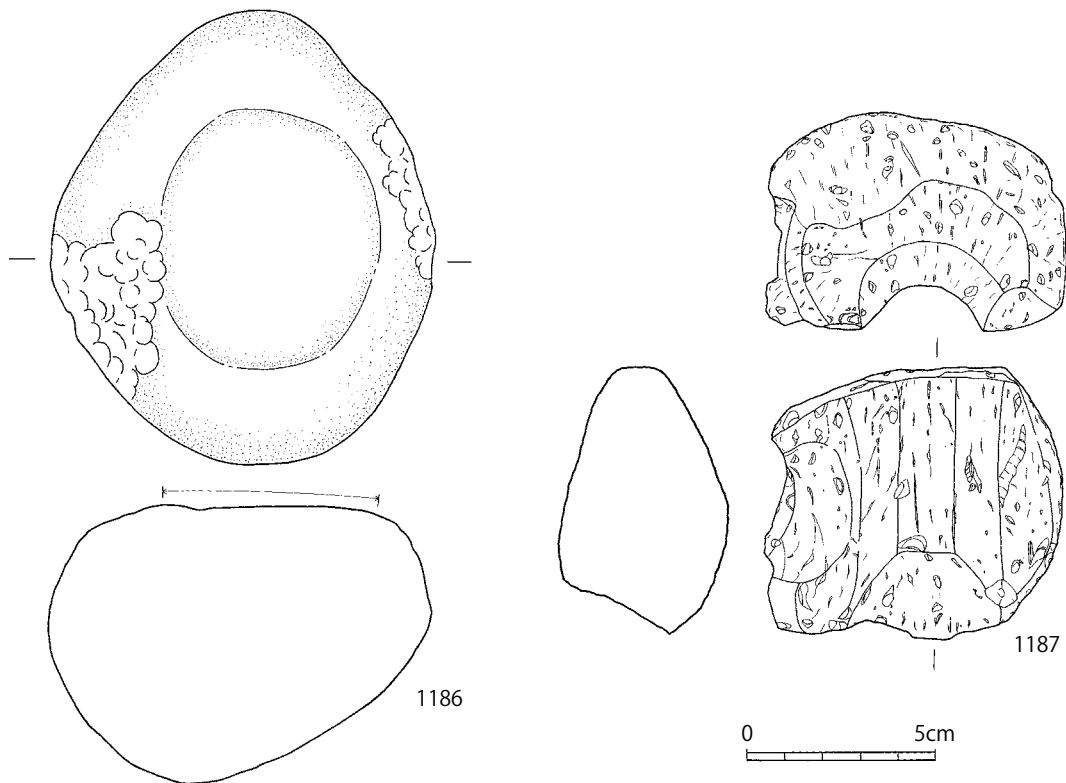
甕棺内から遺物は出土していないが、棺外の埋土から石材片が数点出土していることから、石蓋の最終加工や調整を現地で行ったとみられる。時期は弥生時代中期後半段階である。



第369図 SH170実測図 (1/60)



第370図 SH170出土遺物実測図①



第371図 SH170出土遺物実測図②

**SK522 (第314・315図)**

SK522は小児用合口甕棺墓である。上半分は削平のため欠損している。南東から北西に傾斜していることから南東頭位と推定できる。墓壙は不定形で、規模は長軸0.8m、短軸0.6m、深度は0.32mである。頭位側が広く掘られている。赤色顔料を塗布した須玖式甕を上甕として用いている。

甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。

**SK523 (第316・317図)**

SK523は小児用甕棺墓である。上部が削平により欠損している。甕は北西から南東に傾斜していることから、北西頭位と推定できる。墓壙は楕円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.65m、深度は0.3mである。墓壙の形状から、甕を合口にしたとは考えられず、石材が抜き取られた痕跡や破片も確認できないことから、木蓋が用いられた可能性がある。

甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。

**SK524 (第318・319図)**

SK524は小児用合口甕棺墓である。東西を軸にしており、東から西へ傾斜していることから東頭位と推定できる。墓壙は形状が楕円形で、規模は長軸0.9m、短軸0.65m、深度は0.4mである。赤色顔料を塗布した須玖式甕を上甕として用いている。

甕棺内から遺物は出土していない。隣り合うSK525と主軸が同じ方向であることから、ほぼ同時期に埋葬された可能性がある。時期は弥生時代中期後半段階である。

**SK525 (第320・321図)**

SK525は小児用合口甕棺墓である。上部が削平を受けている。東西を軸としており、西から東へ傾斜している

ことから西頭位と推定できる。墓壙は形状が楕円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.45m、深度は0.15mである。

甕棺内から遺物は出土していない。隣り合うSK524と主軸が同じ方向であることから、ほぼ同時期に埋葬された可能性がある。時期は弥生時代中期後半段階である。

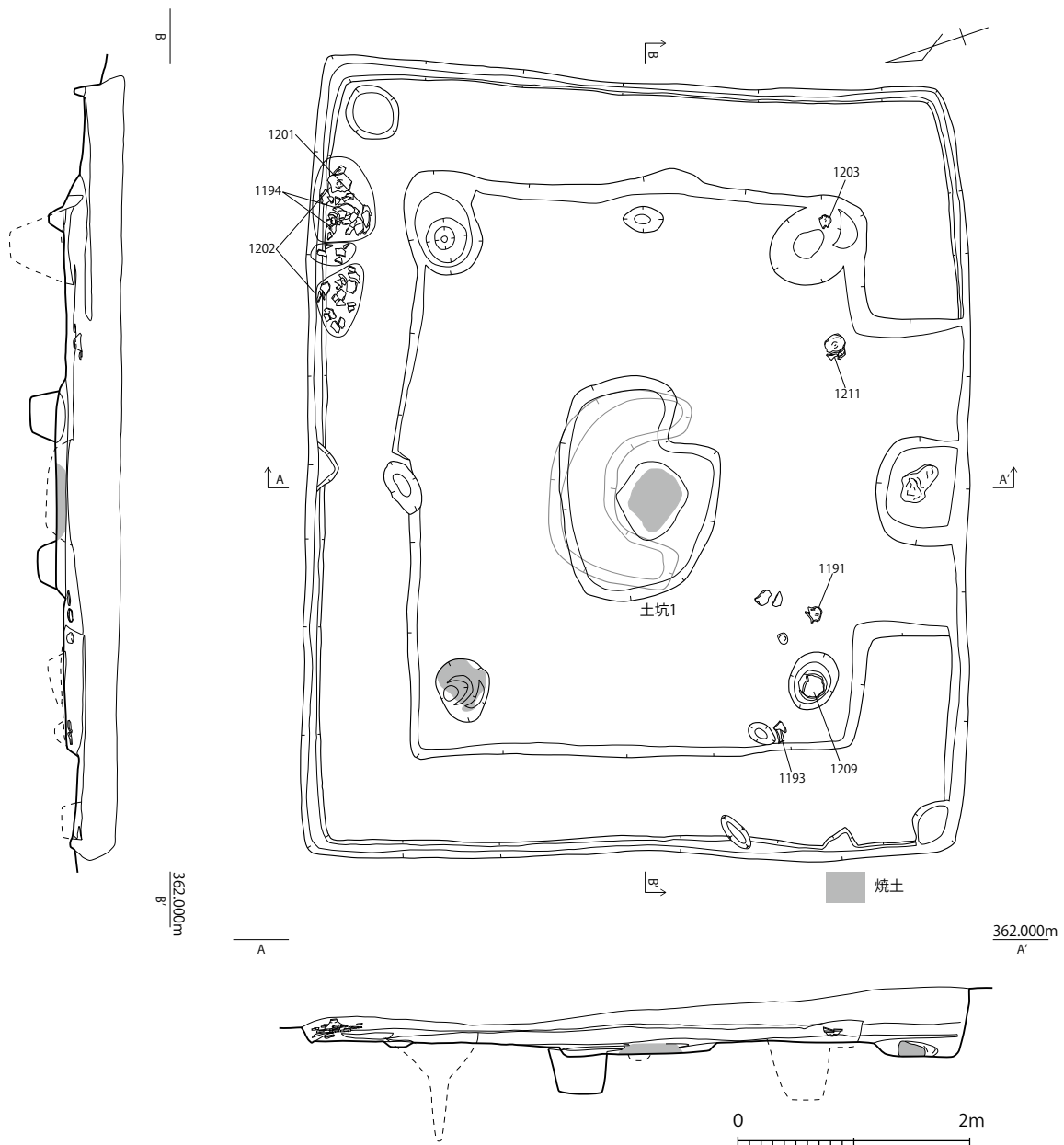
**SK526 (第322・323図)**

SK526は小児用合口甕棺墓である。上部が削平をうけているため、上甕は片側上部しか残存していない。東西に主軸をもち、北西から南東へ傾斜していることから北西頭位と推定できる。墓壙は形状が楕円形で、規模は長軸0.8m、短軸0.55m、深度は0.15mである。

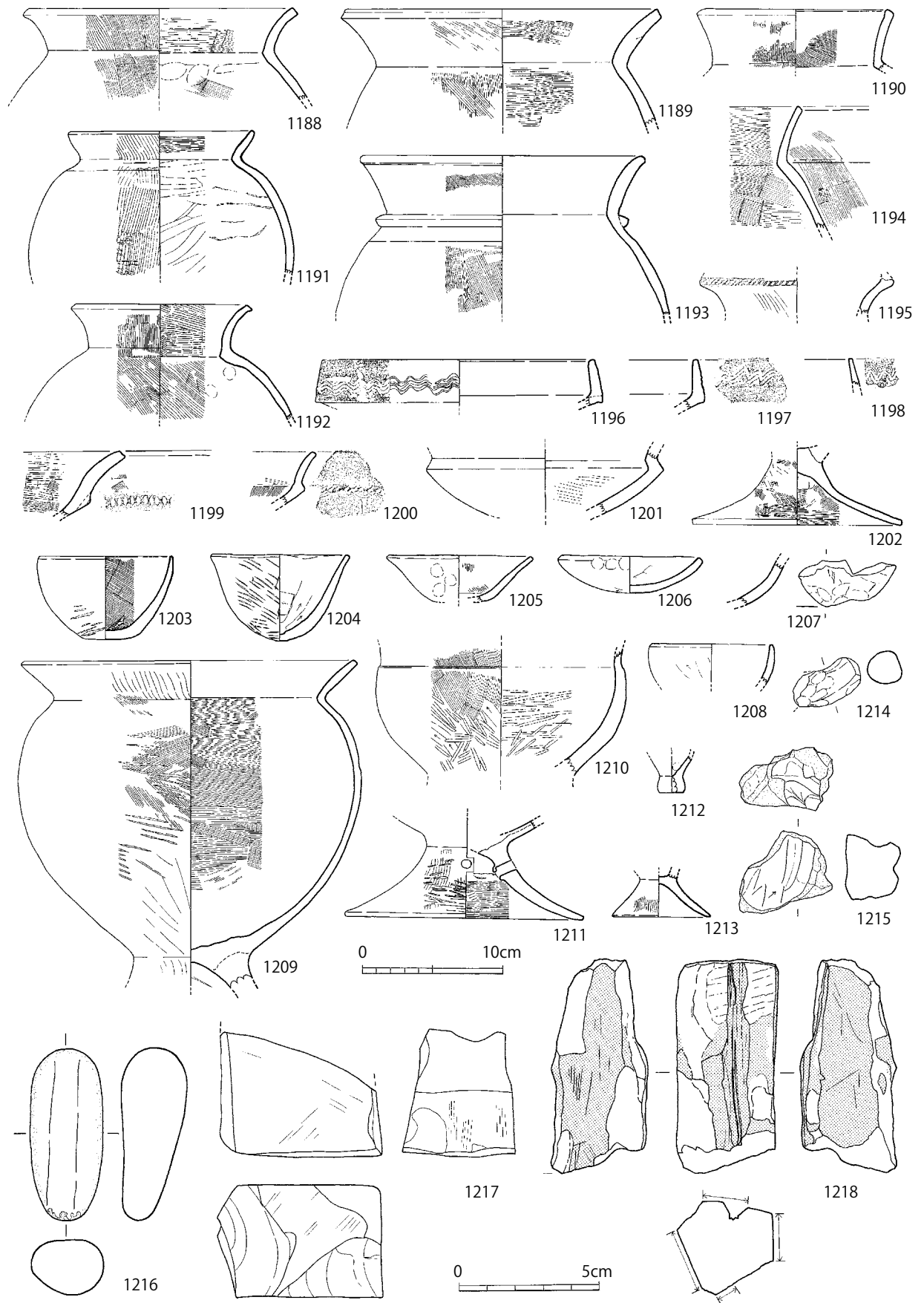
甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。

**SK527 (第324・325図)**

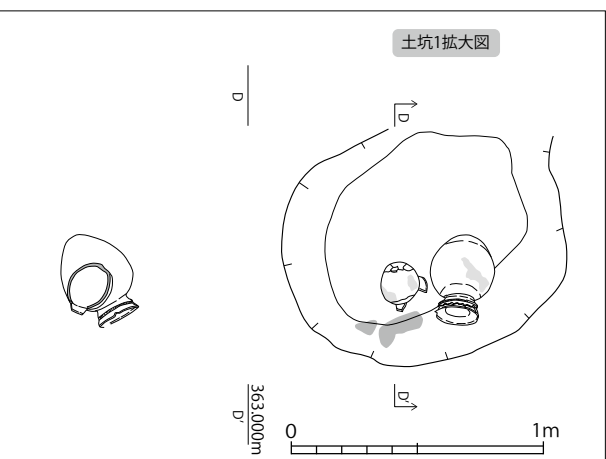
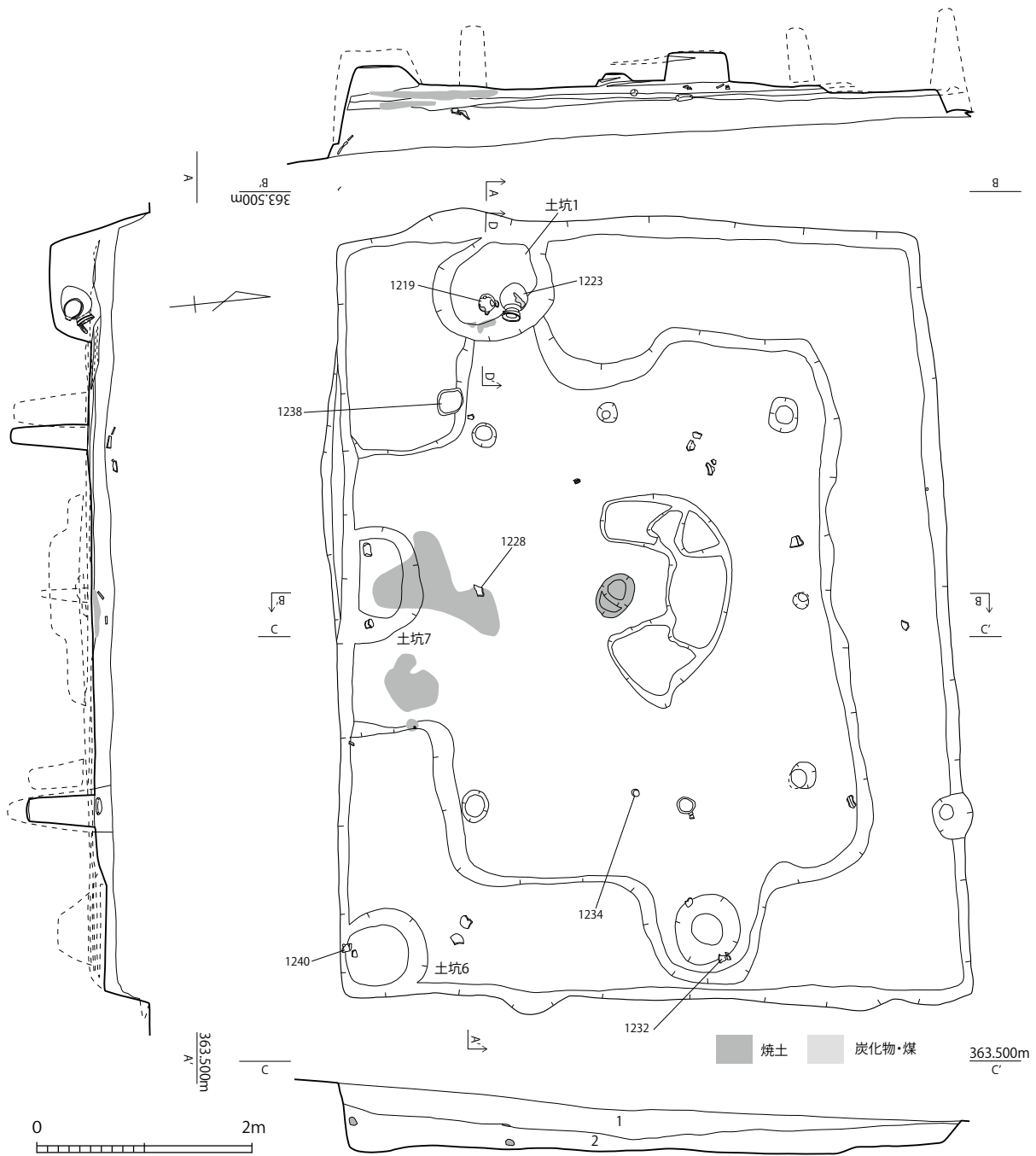
SK527は小児用合口甕棺墓である。東西を軸にしており、東から西へわずかに傾斜していることから東頭位と



第372図 SH171実測図 (1/60)



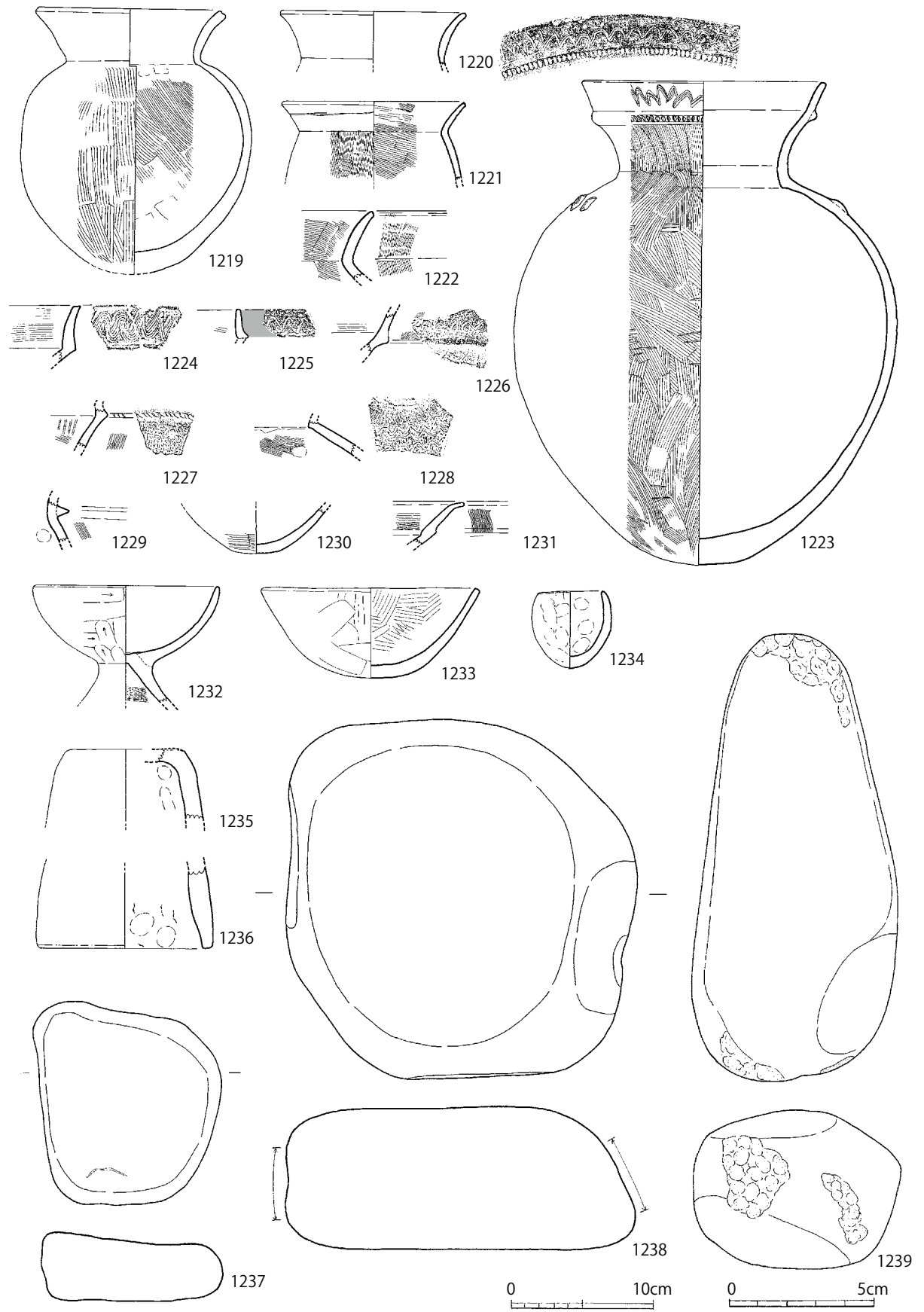
第373図 SH171出土遺物実測図



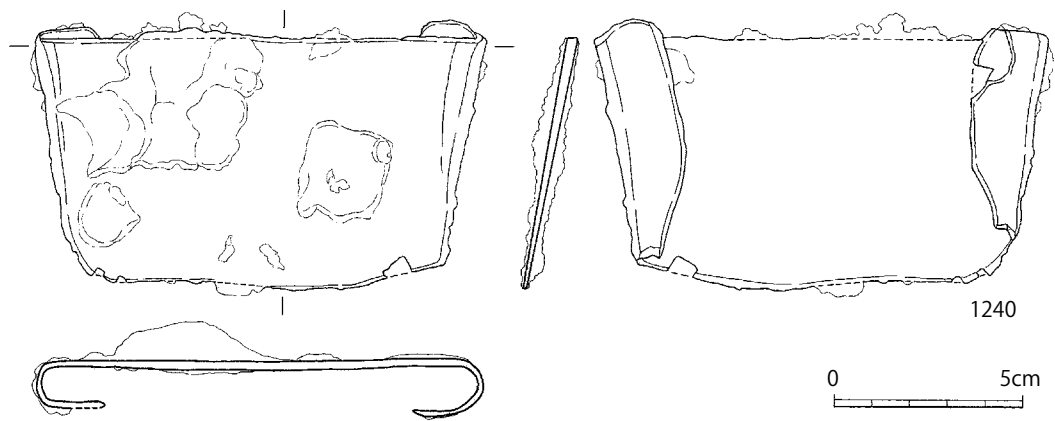
1. 黒褐色土 1~3mm 大の黄褐色粒がわずかに混じる しまりなし
2. 黒褐色土 1~5mm 大の黄褐色土粒 焼土粒が多く混じる  
5mm 以下の炭片もわずかに混じる

第374図 SH172実測図 (1/60)

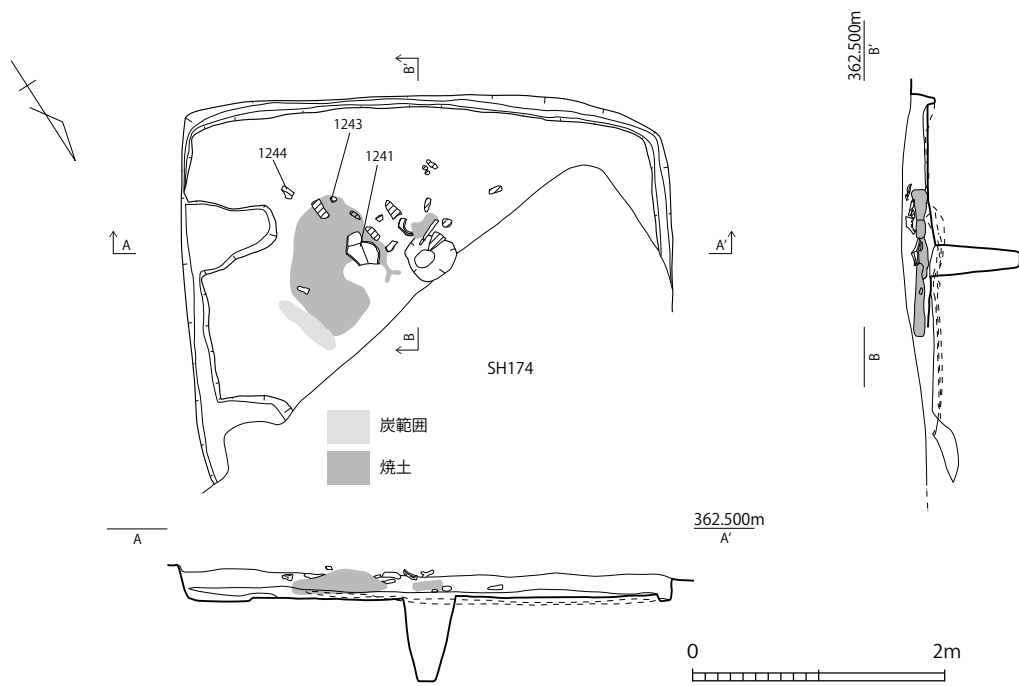




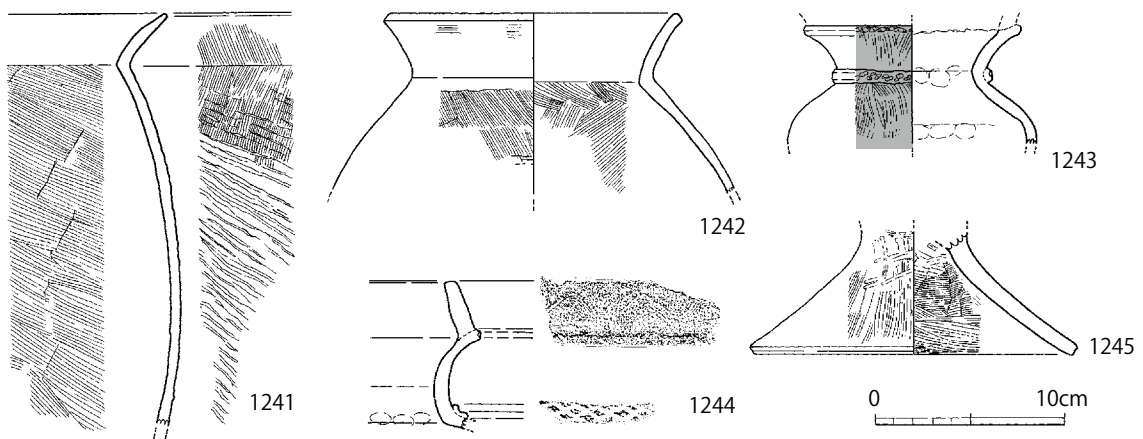
第375図 SH172出土遺物実測図①



第376図 SH172出土遺物実測図②



第377図 SH173実測図 (1/60)



第378図 SH173出土遺物実測図

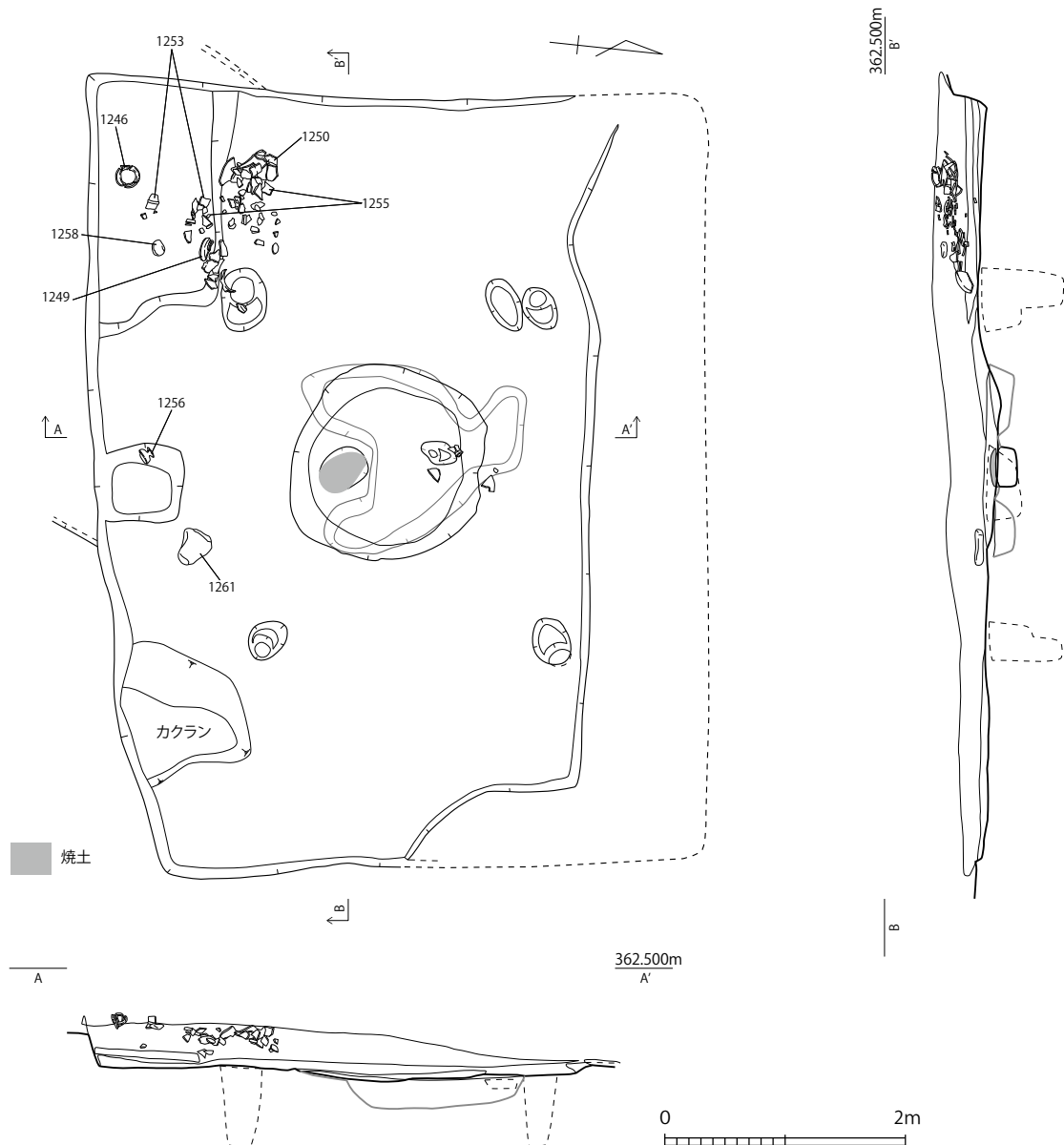
推定できる。墓壙は形状が楕円形で、規模は長軸0.8m、短軸0.6m、深度は0.25mである。検出時には上甕・下甕とも潰れた状態であった。

甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。

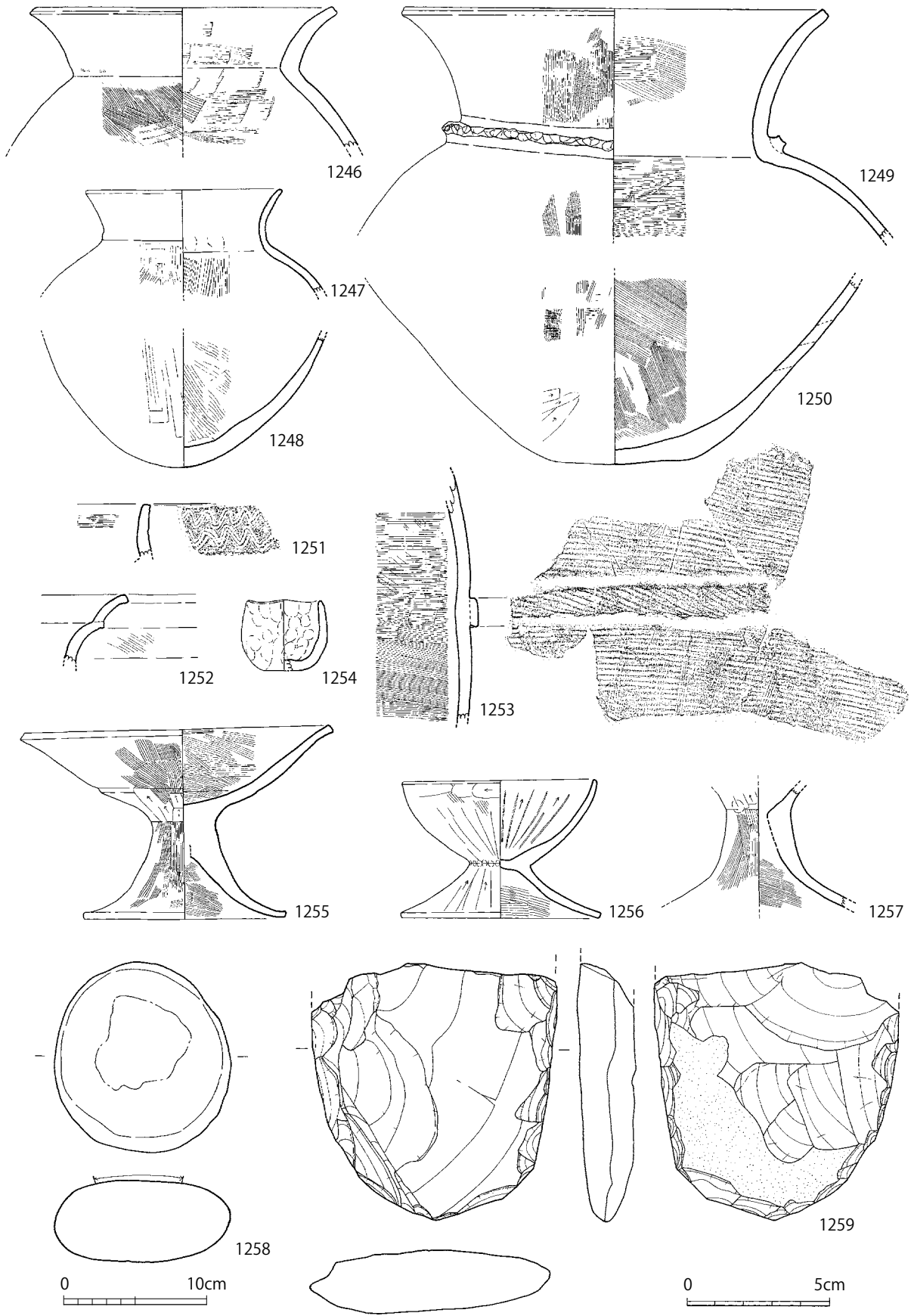
**SK528 (第326・328図)**

SK528は小児用石蓋甕棺墓である。墓壙は隅丸長方形で、規模は長軸1.2m、短軸0.8m、深度は0.45mである。西側壁面に横穴を掘り込み、甕を横に据えている。横穴は甕が隙間なく収まるように掘り込まれている。甕は東西に主軸を持ち、東から西へ傾斜していることから東頭位と推定できる。甕棺の方位を東西方向に合わせる目的のためか、墓壙の中心軸からやや外れた位置に横穴を掘り込んでいる。石蓋は安山岩を方形に加工した板石で、壁面に立てかけるように置かれている。

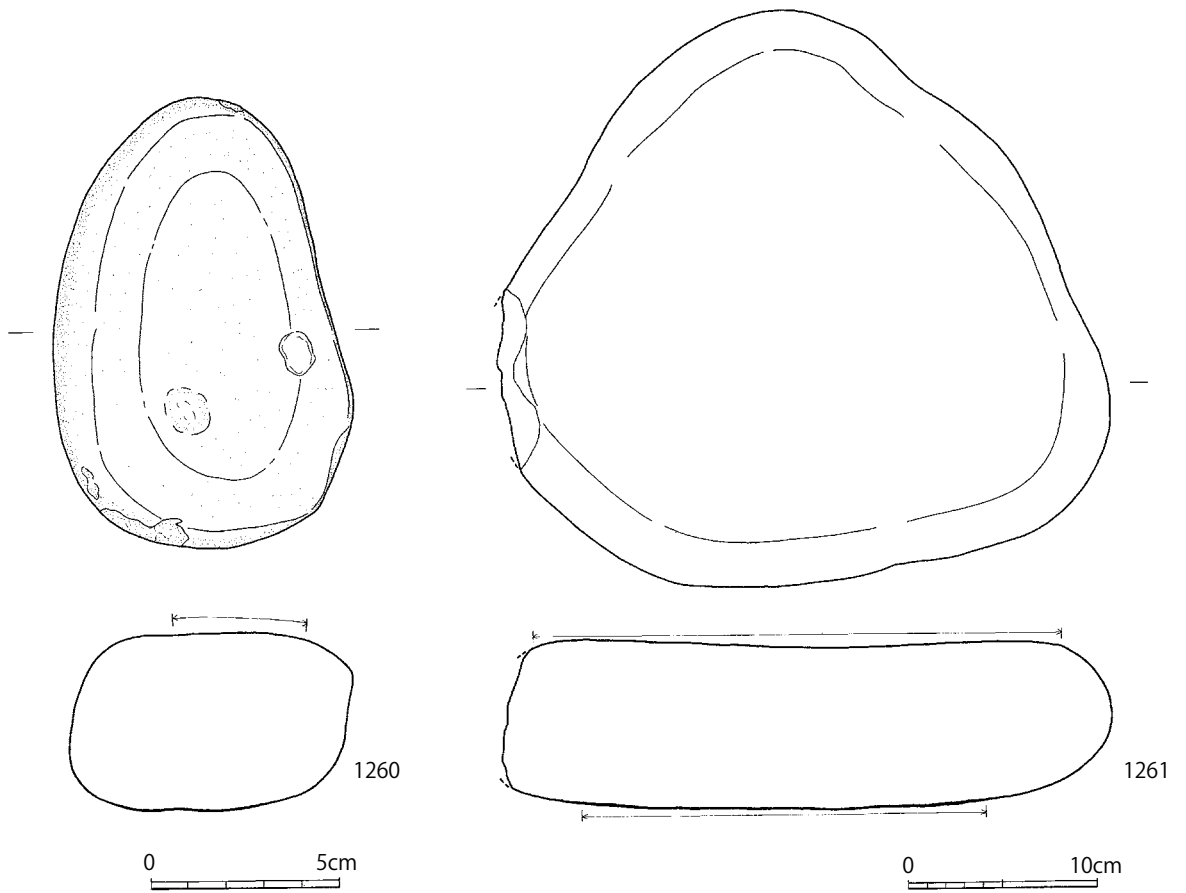
甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。



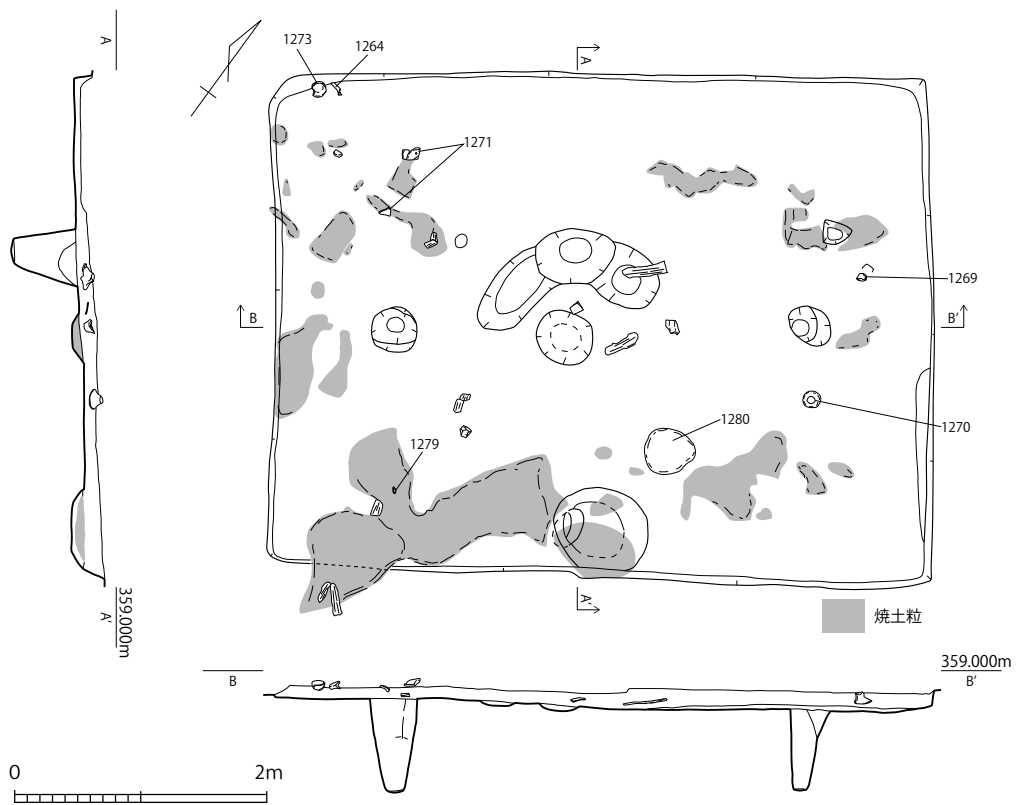
第379図 SH174実測図 (1/60)



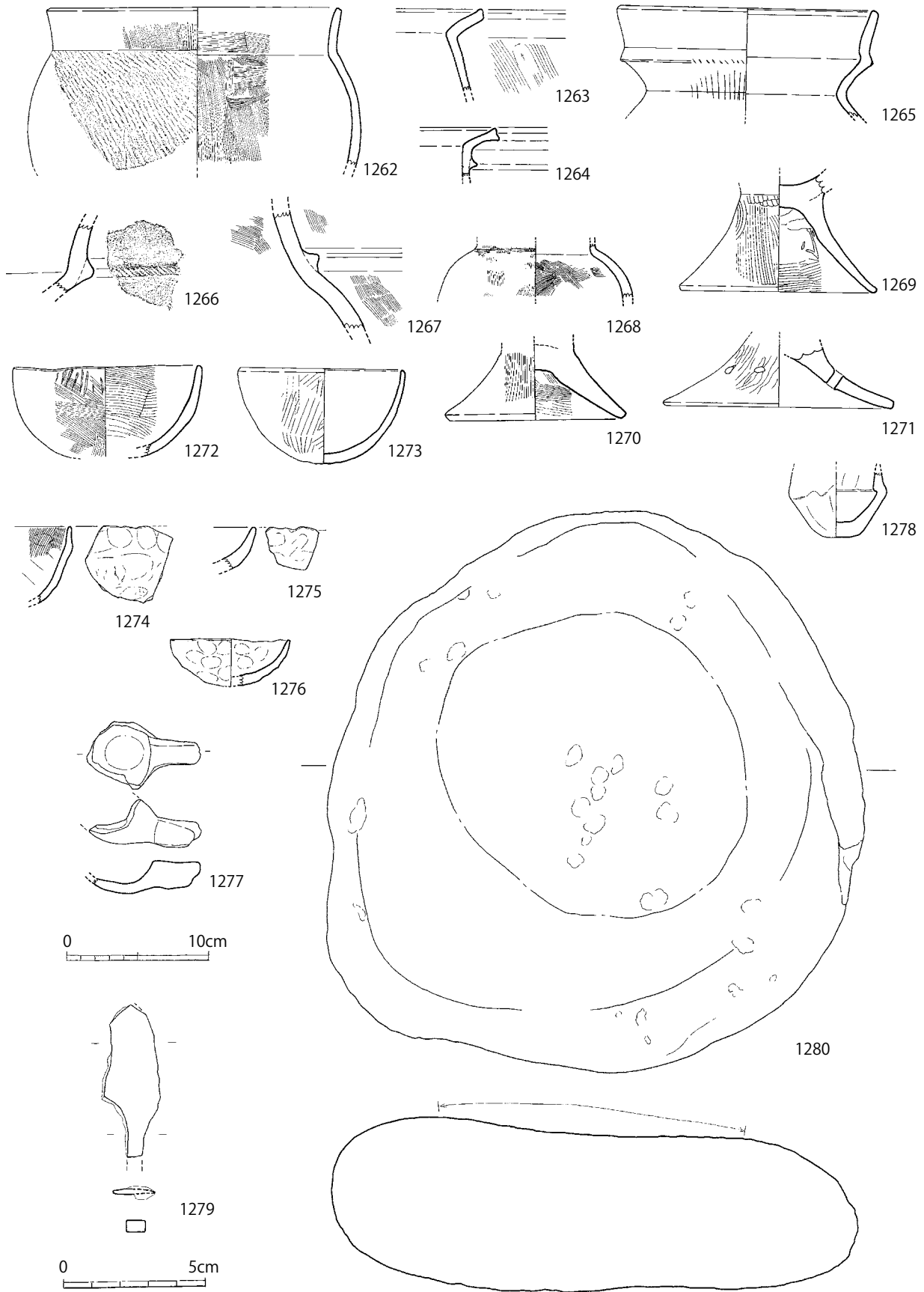
第380図 SH174出土遺物実測図①



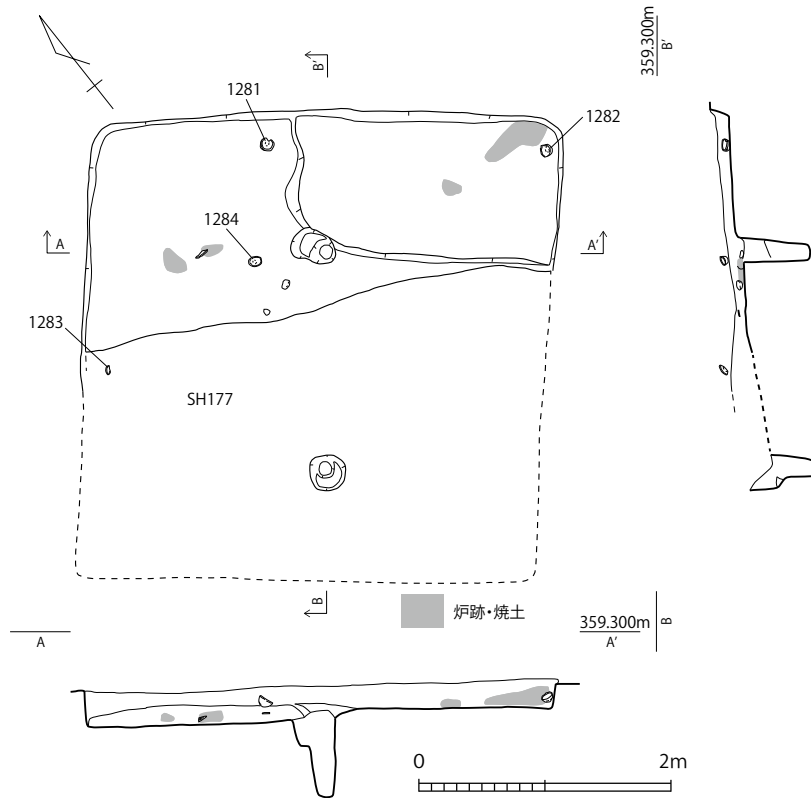
第381図 SH174出土遺物実測図②



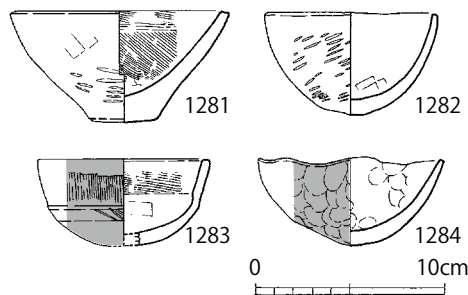
第382図 SH175実測図 (1/60)



第383図 SH175出土遺物実測図



第384図 SH176実測図 (1/60)



第385図 SH176出土遺物実測図

#### SK529 (第327・329図)

SK529は小児用合口甕棺墓である。上半分は削平のため欠損している。墓壙は楕円形で、規模は長軸0.95m、短軸0.7m、深度は0.25mである。甕は南北に主軸を持ち、北東から南西へと傾斜していることから、北東頭位と推定できる。須玖式甕を下甕として用いている。

甕棺内から遺物は出土していない。時期は弥生時代中期後半段階である。

#### (4) 円形周溝遺構

##### S7 (第330・332図)

S7は円形周溝遺構である。正円に近い形状で、溝を含めた規模は径3.6mである。溝の幅は0.35～0.55mと一定ではなく、深度は0.15mと浅い。溝底面のレベルは立地する地形に沿うように南から北へと緩やかに傾斜している。

埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。遺物は土器片加工品・打製石斧が出土した程度であり、埋没過程で混じり込んだとみられる。埋没

時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

##### S8 (第331図)

S8は円形周溝遺構である。SK466を切る。正円に近い形状で、溝を含めた規模は径3.5mである。溝の幅は0.35～0.45mと一定ではなく、深度は0.1mと浅い。溝底面のレベルは立地する地形に沿って北側が若干低くなっている。

溝の埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだとみられる甕・高坏の小破片がわずかに出土した程度で、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

##### S9 (第333図)

S9は円形周溝遺構である。幅0.4～0.6mの溝が円形に巡っており、溝を含めた規模は径5.3m、深度は0.15mである。溝の底面レベルは地形に沿って北側が若干低くなる。

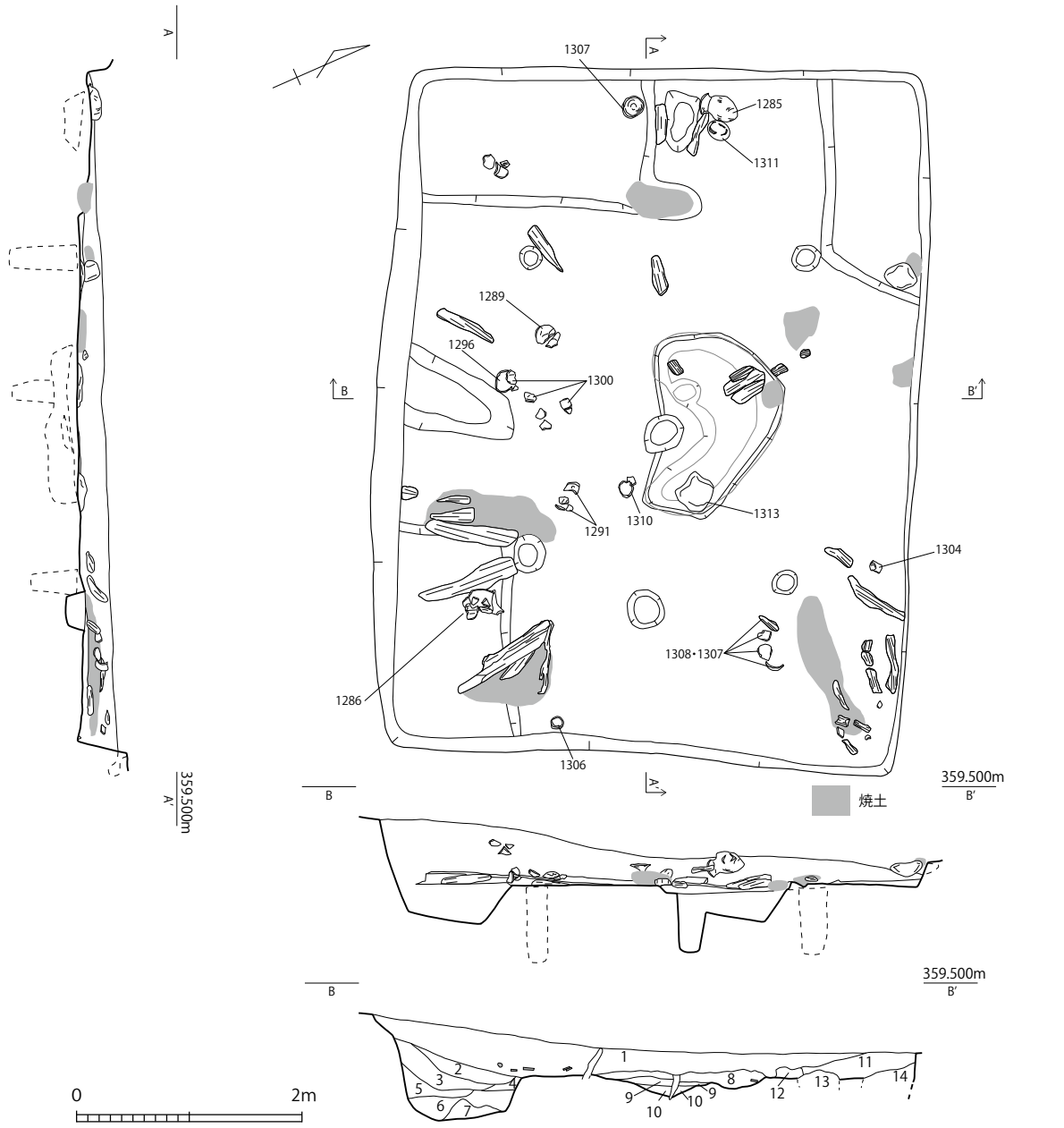
溝の埋土は黒色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。遺物は埋没過程で混じり込んだものとみられる甕・

壺などの小破片がわずかに出土した程度で、図示できる資料はない。埋没時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

(5) 掘立柱建物

SB23 (第334・335図)

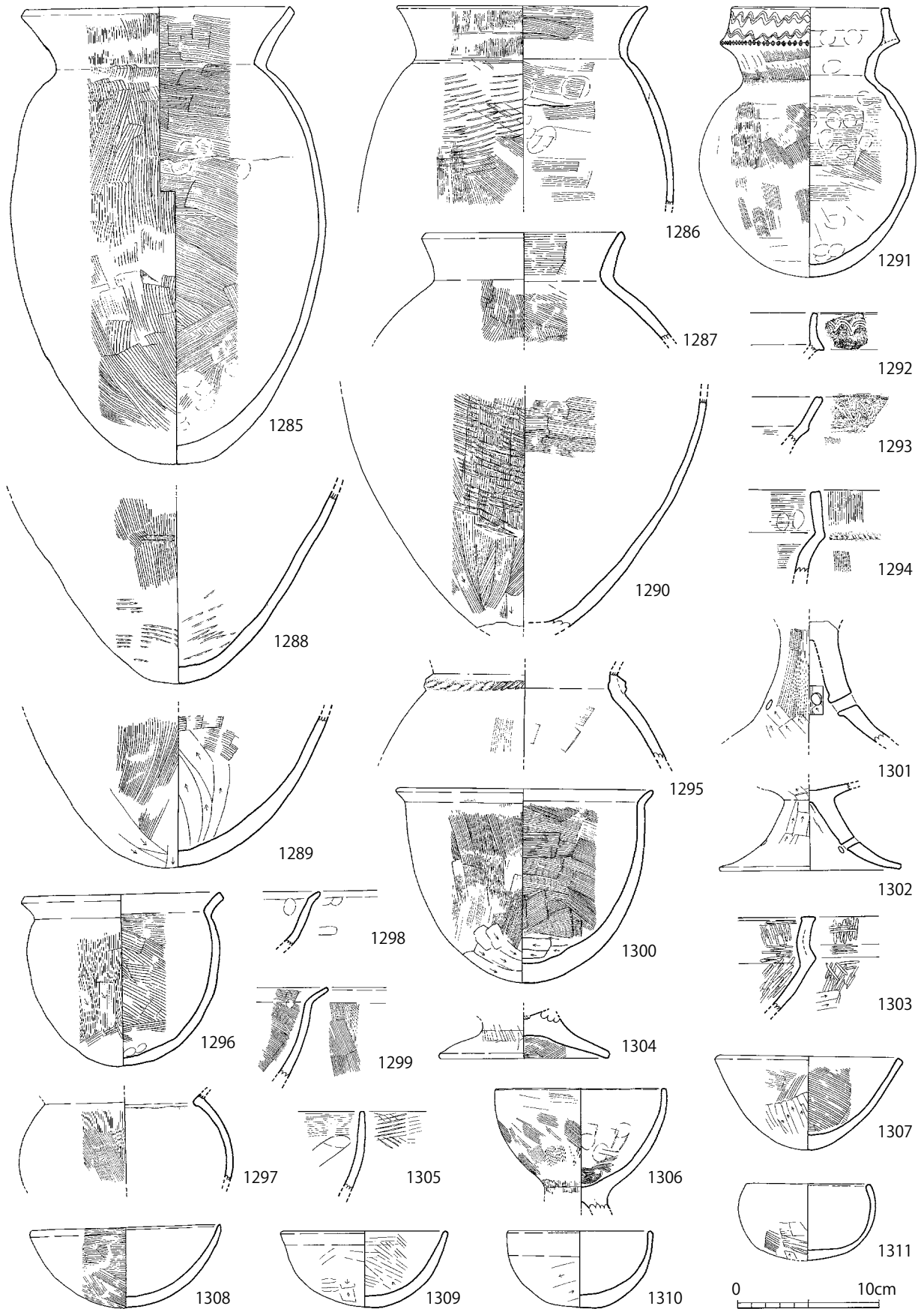
SB23は掘立柱建物である。1間×3間で、東西長軸長8.7m、南北短軸長3.2mを測る。床面積は約27.8㎡、短



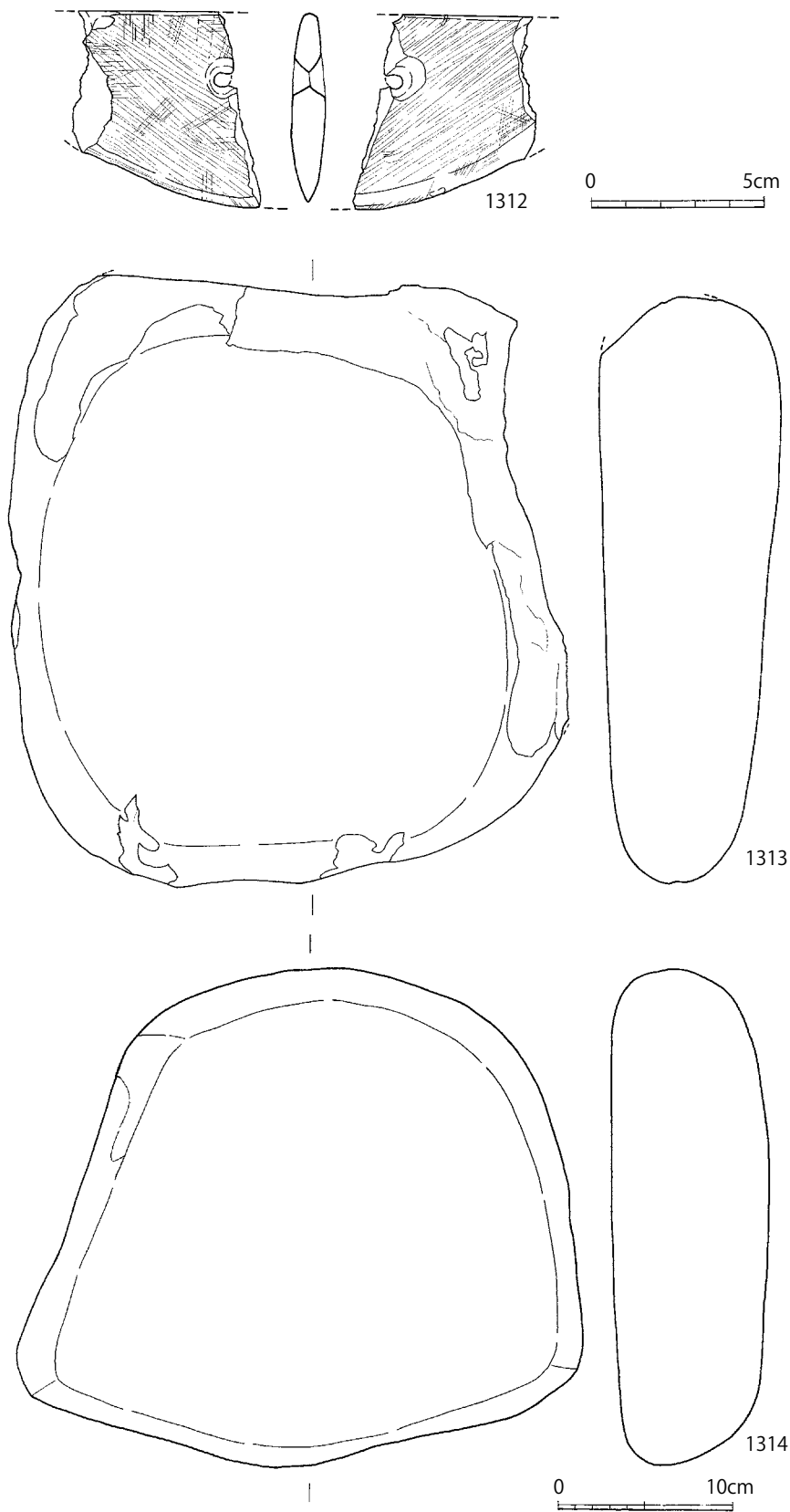
- |                         |                    |           |                     |     |
|-------------------------|--------------------|-----------|---------------------|-----|
| 1. 黒色土                  | やや軟 黄色小粒子若干含む      | 8. 淡褐色土   | 焼土粒子 炭粒子含む          | } 炉 |
| 2. 黒褐色土                 | 黄色小粒子含むも、1層より少ない   | 9. 暗茶褐色土  | 8層より大きい焼土粒 炭含む      |     |
| 3. 暗褐色土                 | 3cm未満の黄色ブロックを含む 若干 | 10. 混土焼土層 | 茶褐色土を含む 焼土層-焼土軟質    |     |
| 4. 暗黄褐色土                | 軟 黒色土ブロックを含む       | 11. 暗褐色土  | 黄色粒子少量含む            |     |
| 5. 暗黄褐色土                | 軟 黄色土粒子若干          | 12. 茶褐色土  | 焼土混じり               |     |
| 6. 淡褐色土                 | 軟 黄色土粒子 小ブロックを含む   | 13. 淡褐色土  |                     |     |
| 7. 暗黄褐色土                | 軟 やや粘              | 14. 淡褐色土  | 0.5cm未満の黄色土ブロック少量 軟 |     |
| ※1~7 壁際土坑 竪穴の埋没時に埋まっている |                    |           |                     |     |

第386図 SH177実測図 (1/60)





第387図 SH177出土遺物実測図①



第388図 SH177出土遺物実測図②

軸の方位角はN-23°-Eである。

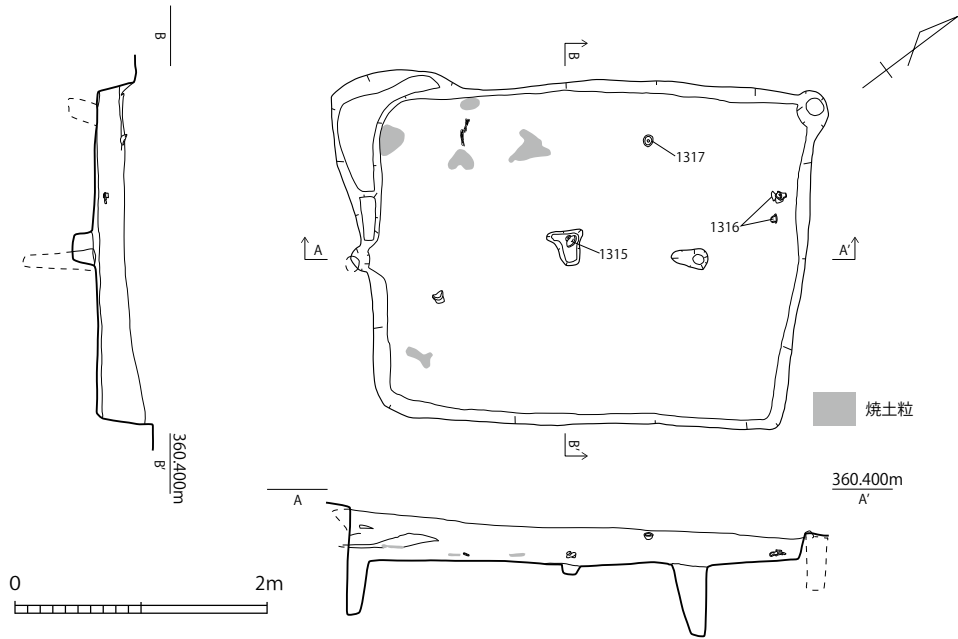
柱穴の埋土はすべて黒褐色土である。柱穴1・3・4・5・7から遺物が出土しているが、いずれも小土器片がわずかに出土する程度で、混じり込んだものとみられる。掘立柱建物の柱穴から出土した遺物はすべて弥生時代中期後半段階のものである。

(6) 不明遺構

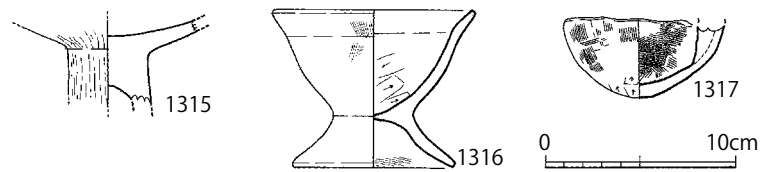
SX12 (第336・337・338・339・340・341・342・343 図)

SX12は当初楕円形の土坑(貯蔵穴)として掘り下げを行っていたが、遺構の中央で地山の黄褐色土が検出できたにも関わらず、壁面際では遺物を含む黒色土がオーバーハングしながら更に深くまで続く状況であった。安全面を考慮して遺構の西側部分を重機により断ち割りを行った結果、SX12は地盤が陥没することで形成された陥没跡であると推測できた。周囲の地山が内側に向かって崩落したため、幅約5.5mにわたるオーバーハングが形成されたとみられる。この際にできた壁際の隙間に、周囲から黒色土が流入することで埋没している。

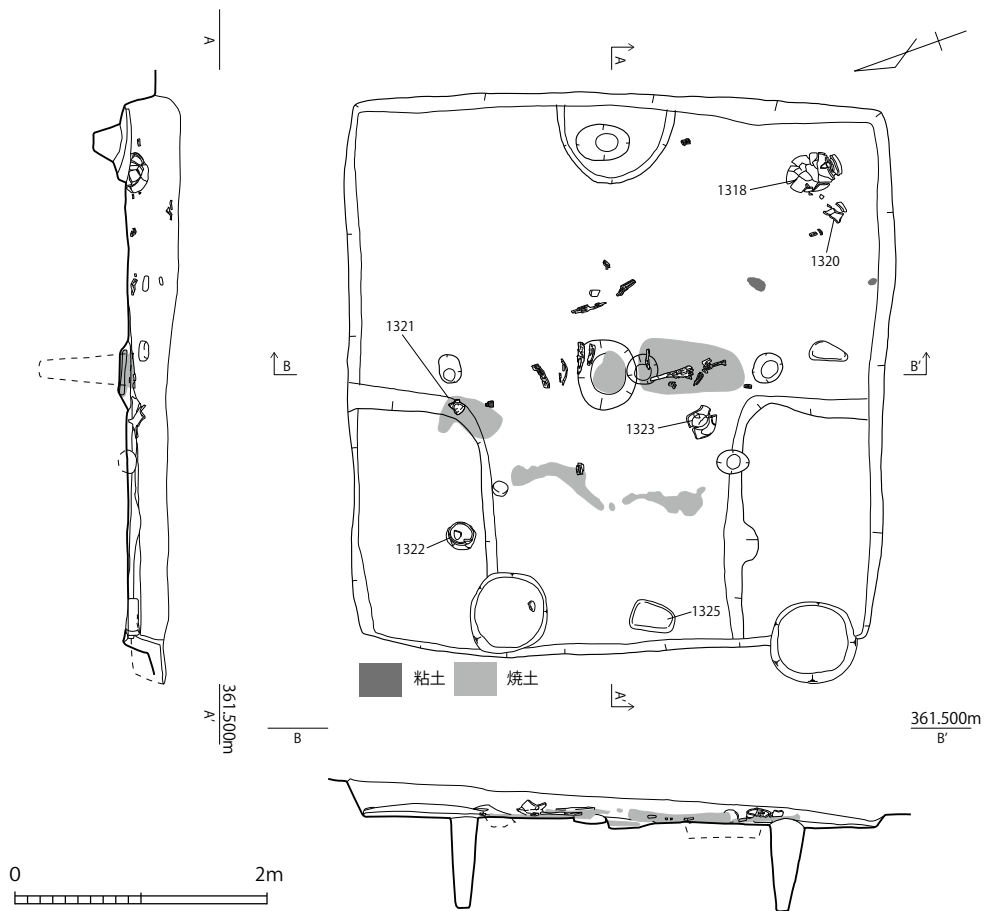
この埋土中から大量の土器・石器が出土したが、いずれも大型の破片でまとまりをもって出土しているこ



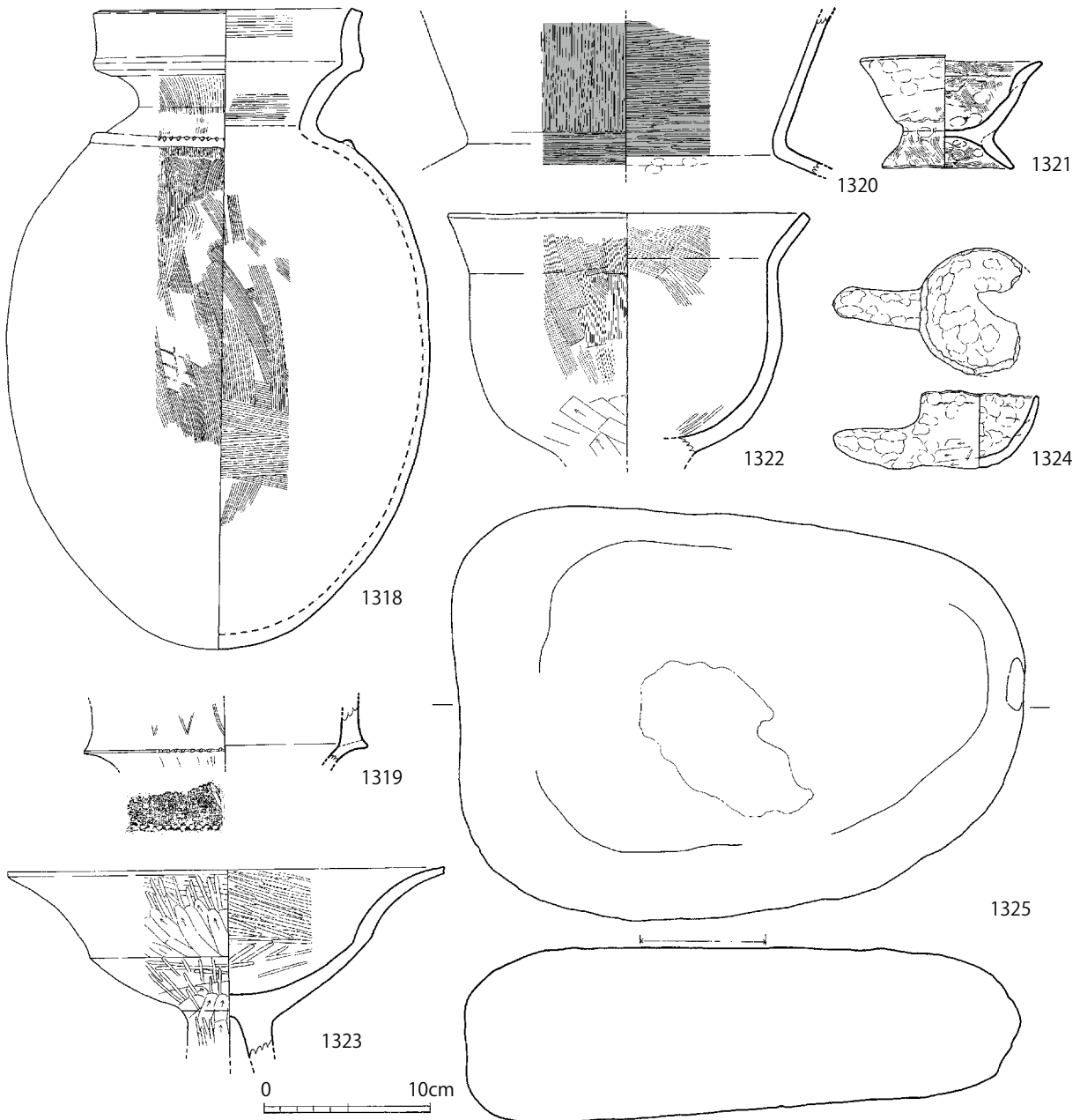
第389図 SH178実測図 (1/60)



第390図 SH178出土遺物実測図



第391図 SH179実測図 (1/60)



第392図 SH179出土遺物実測図

とから、埋没過程で遺棄されたものとみられる。遺物は南半分の壁際付近で特にまとまって出土している。遺物の中でも筒形器台(961)はすべてが接合しないが、全形をうかがい知ることができるまで復元できた県内でも稀な資料である。復元高は91.0cmである。筒形器台の鐔状環縁部は、一度短い鐔を製作した後に改めて粘土を貼り付けることで、横方向に大きく拡張させている。出土遺物はすべて弥生時代中期後半段階のものである。陥没の原因については重機による掘削でも明らかにできなかった。

**SX13 (第344・345図)**

SX13は平面形状が円形を呈し、規模は径0.35m、深度0.3mである。検出面から弥生時代中期後半段階の赤色顔料を塗布した高坏(978)が出土した。

高坏は上部が削平により一部欠損するが、本来は完形であったとみられる。坏部を上に向け、やや傾いた状態で埋没していた。埋土中から他の遺物は出土していないことから、高坏のみを意図的に埋めたことがわかる。

**SX14 (第278・281図)**

SX14はSK492の埋没後に掘り込まれた遺構である。形状は円形で、規模は径0.4mと推定でき、深度は0.35mである。完形の鉢を逆さにした状態で出土していることから、意図的に埋められたものとみられる。時期は弥生時代中期後半段階と考えられる。

**5. 古墳時代 (弥生時代終末～古墳時代初頭)**

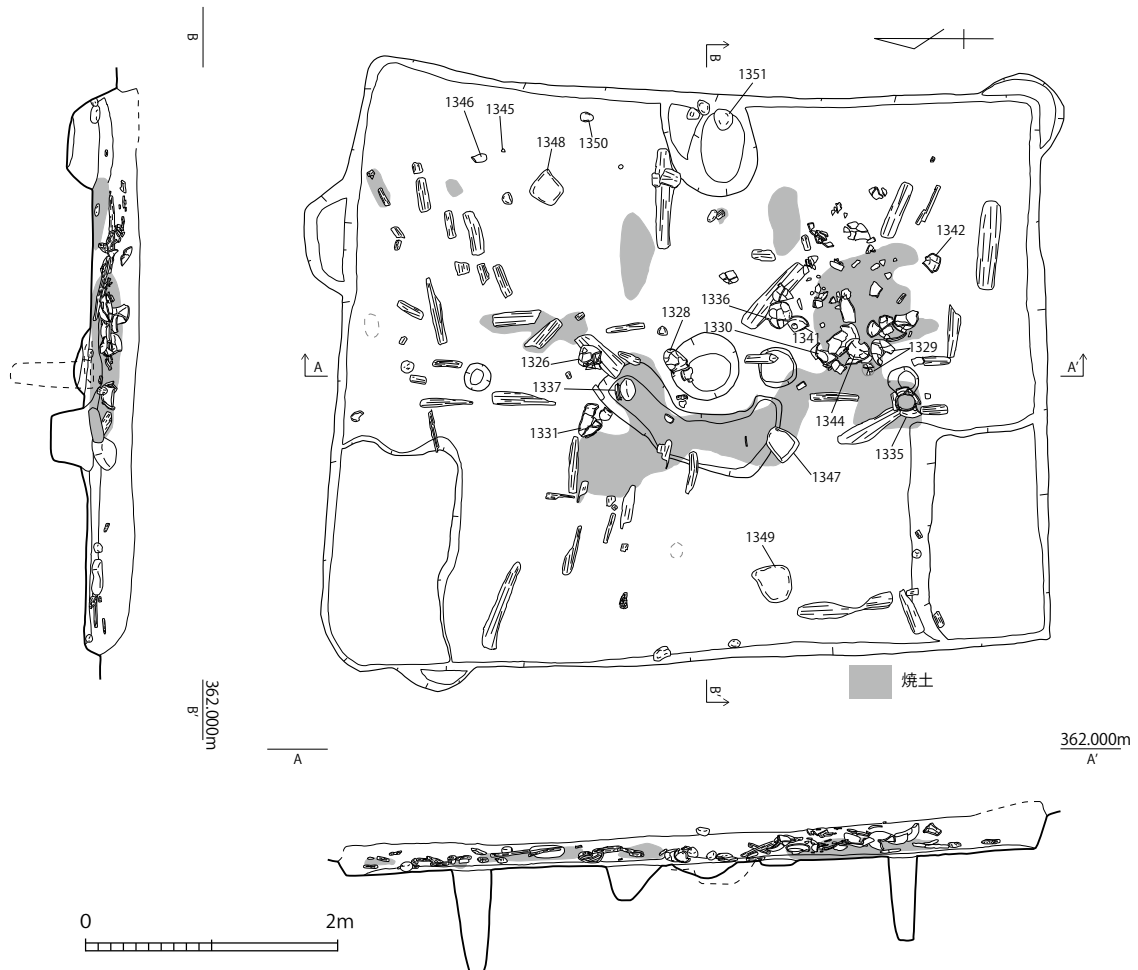
ここでは弥生時代終末段階から古墳時代初頭段階に位置づけられる遺構を報告する。土器は在来系が主体を占める様相のため時期を明確に捉えづらいが、布留古段階の前後に併行するとみられることから、時期については弥生時代終末～古墳時代初頭段階とし、観察表では土師器と表記している。

第16次調査区では竪穴建物、土坑、貯蔵穴などが検出された。

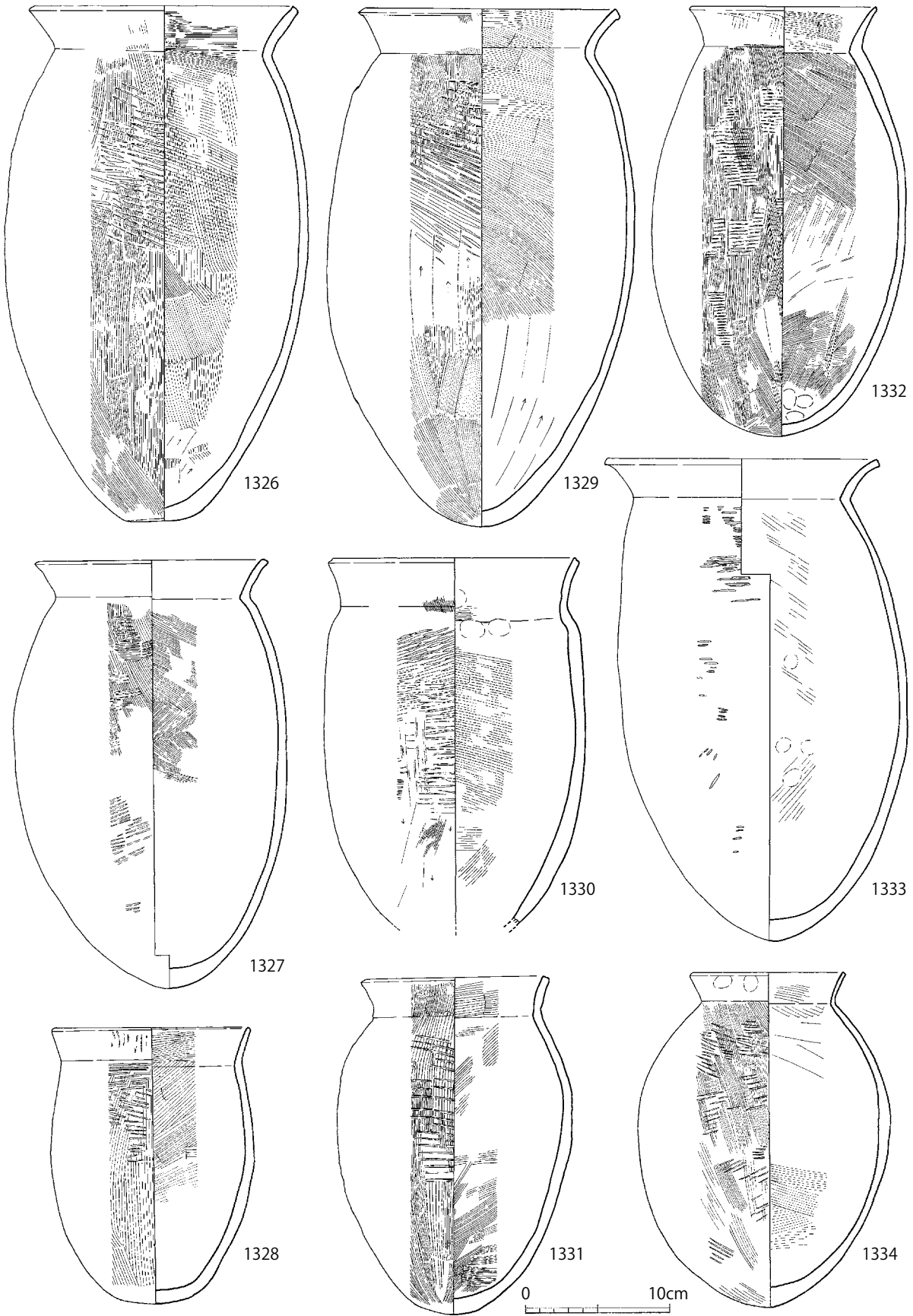
**(1) 竪穴建物**

**SH163 (第346・347図)**

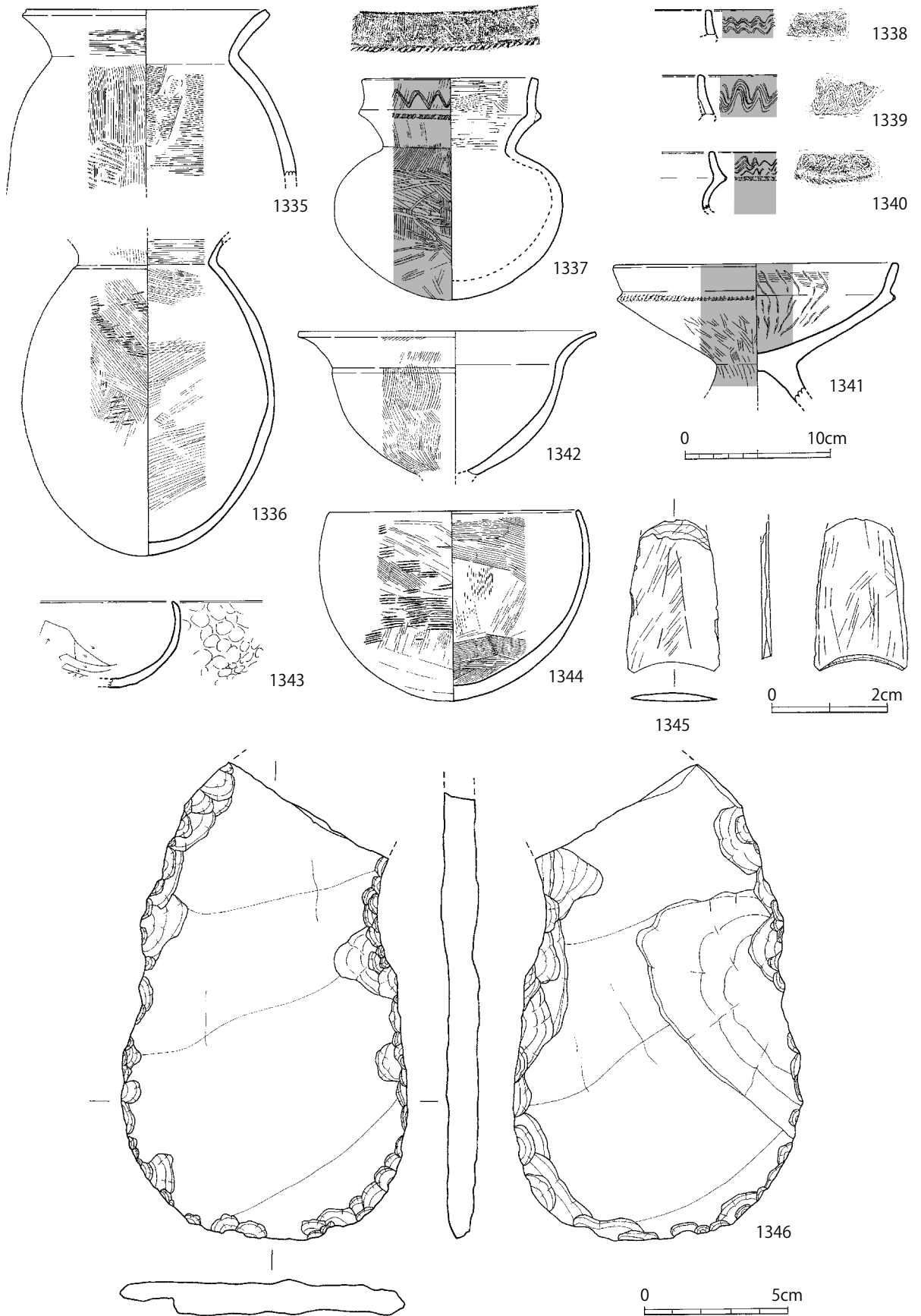
SH163は竪穴建物である。北西側は現代の土取りを、北東側と南西隅は削平を受けていることから残りはよくない。唯一残る南東隅が直角で床面が平坦であることや、炉跡・南壁際に土坑が確認できることから竪穴建物と判断した。炉跡と主柱穴の配置状況、北東部で検出できた隅丸のコーナーを建物の隅と想定すると、形状は長方形に復元できる。規模は長軸8.0m前後、短軸4.2m程度と推測できる。主柱穴は1本しか検出できていないが、本来は2本柱であったと推測できる。ベット状遺構は検出できていない。



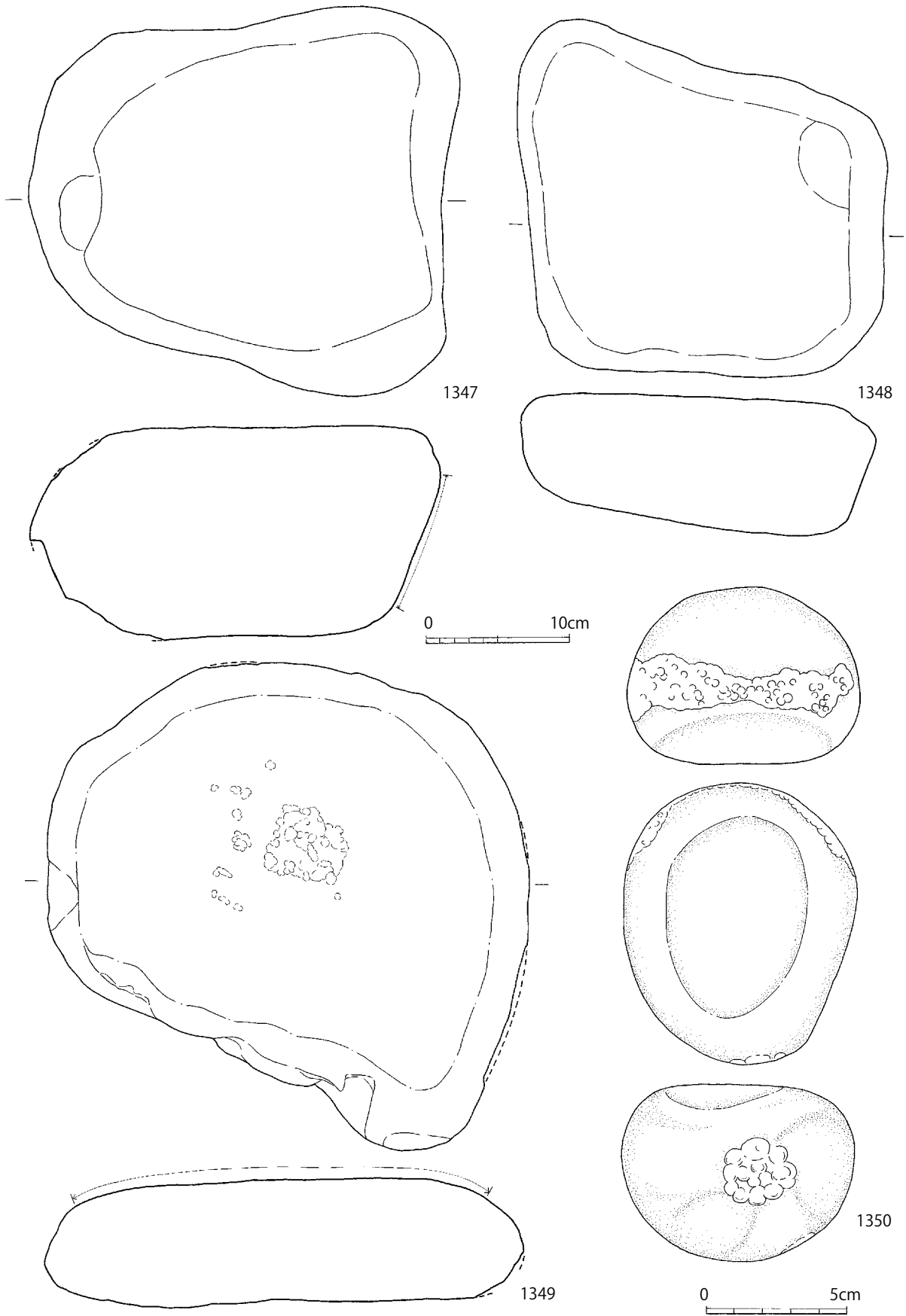
第393図 SH180実測図 (1/60)



第394図 SH180出土遺物実測図①

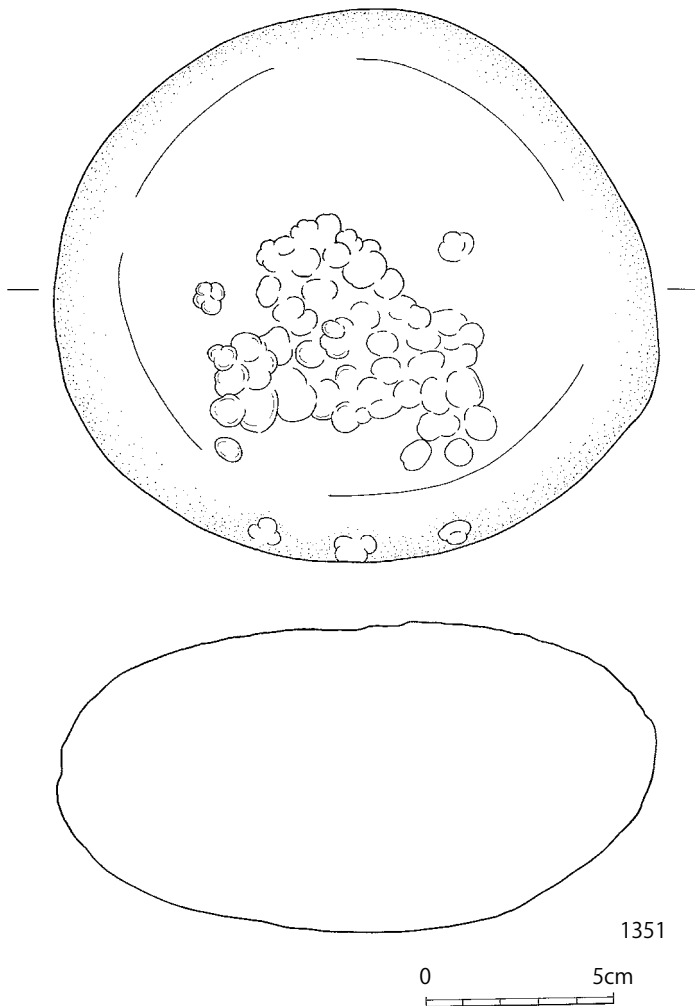


第395図 SH180出土遺物実測図②

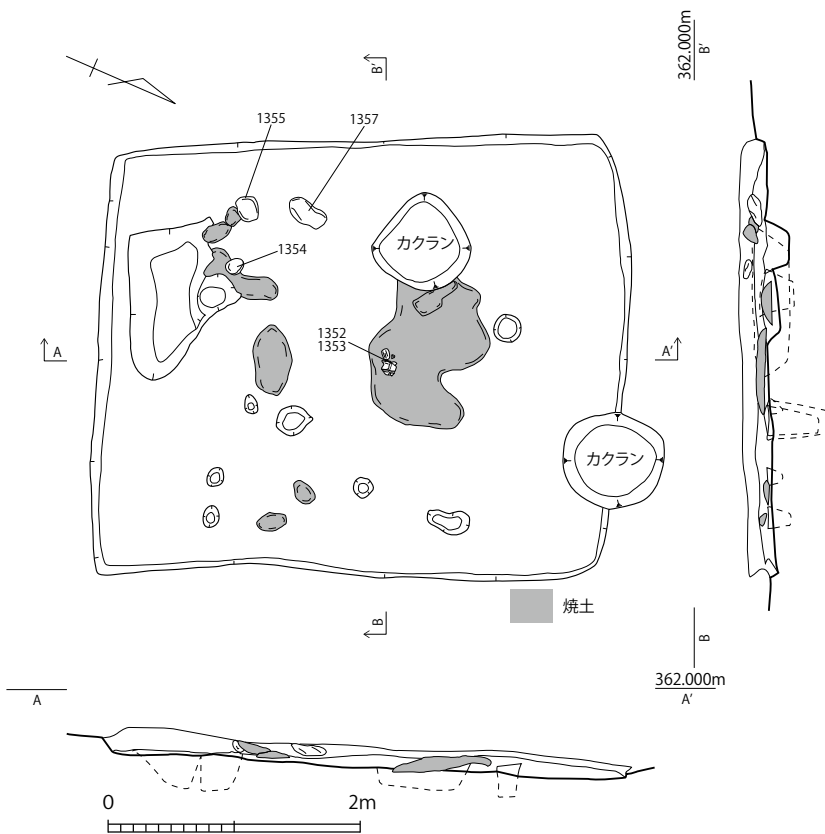


第396図 SH180出土遺物実測図③





第397図 SH180出土遺物実測図④



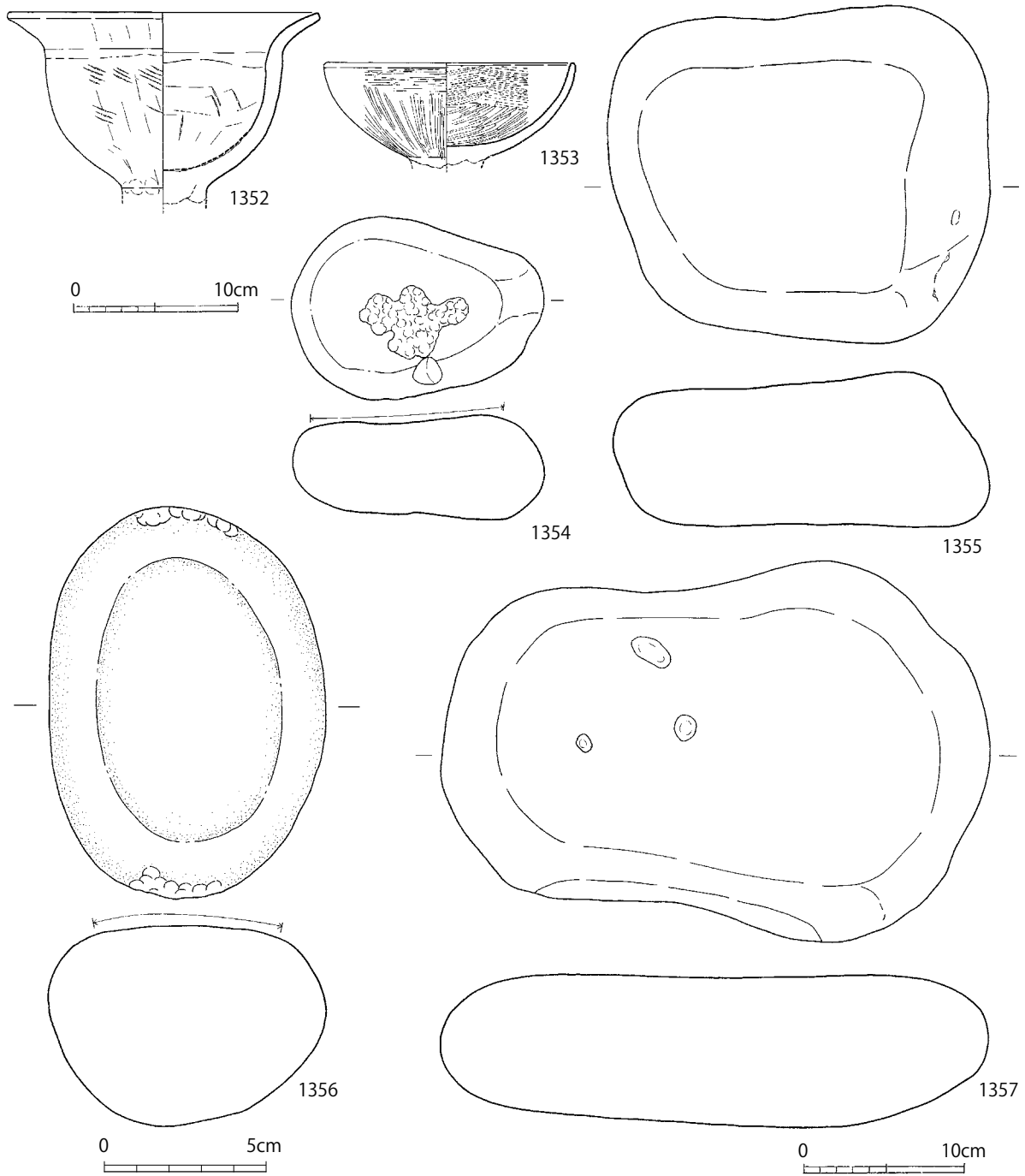
第398図 SH181実測図 (1/60)

建物は自然に埋没したとみられ、埋没過程で焼土が廃棄されている。遺物は埋土中と土坑1から出土しているが、ほとんどが破片の状態であることから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

SH164 (第348・349図)

SH164は竪穴建物である。上部及び北側は削平を受けているため残りはよくないが、形状は長方形で、規模は長軸5.4m、短軸4.5mと推測できる。深度は0.2mである。支柱穴は2本、南壁土坑、建物中央に炉跡とみられる浅い窪みが確認できた。炉跡の北側にはU字状の掘り込み（以下、U字状土坑とする）が確認できた。U字状土坑は複数の掘り込みが炉跡の周囲に連続して掘り込まれた結果U字状に見えたと考えられ、深さも一定ではない。この埋土中には炭・焼土の粒がわずかに混じるのみで、遺物の混じり込みはほとんどない。そのため、掘り込んですぐ埋め戻されたような土質であることから、調査当初はU字状土坑の検出すら困難な状況であった。類例や用途などについては今後の検討課題としたい。

埋土は黒褐色土の単一層で、自然に埋没したとみられる。土坑1が埋没し、建物もわずかに埋没した段階で、炭化材とともに甕・壺・敲石等の遺物が廃棄されている。これらは建物南側からまとまって出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。



第399図 SH181出土遺物実測図

**SH165 (第350・351図)**

SH165は竪穴建物である。SH168・SK532に切られる。形状は長方形で、規模は長軸が6.0mに復元でき、短軸4.8m、深度は0.35mである。支柱穴は長軸上に2本あり、建物の中心に炉跡がある。炉跡は浅く掘り窪めた部分が被熱しており、炉の周囲にはU字状土坑が検出できた。西と南壁際の一部に周溝が、南西・南東両隅には長方形のベット状遺構がある。

埋土は自然堆積により埋没したとみられる。遺物は床面直上から鉢(1000・1001)が、それ以外は埋土全般から弥生中期後半の混じり込んだ土器とともに、土師器や鎌・鋤先とみられる鉄器片(1006・1007・1008)が出土している。これらは埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

SH166 (第352・353・354・355図)

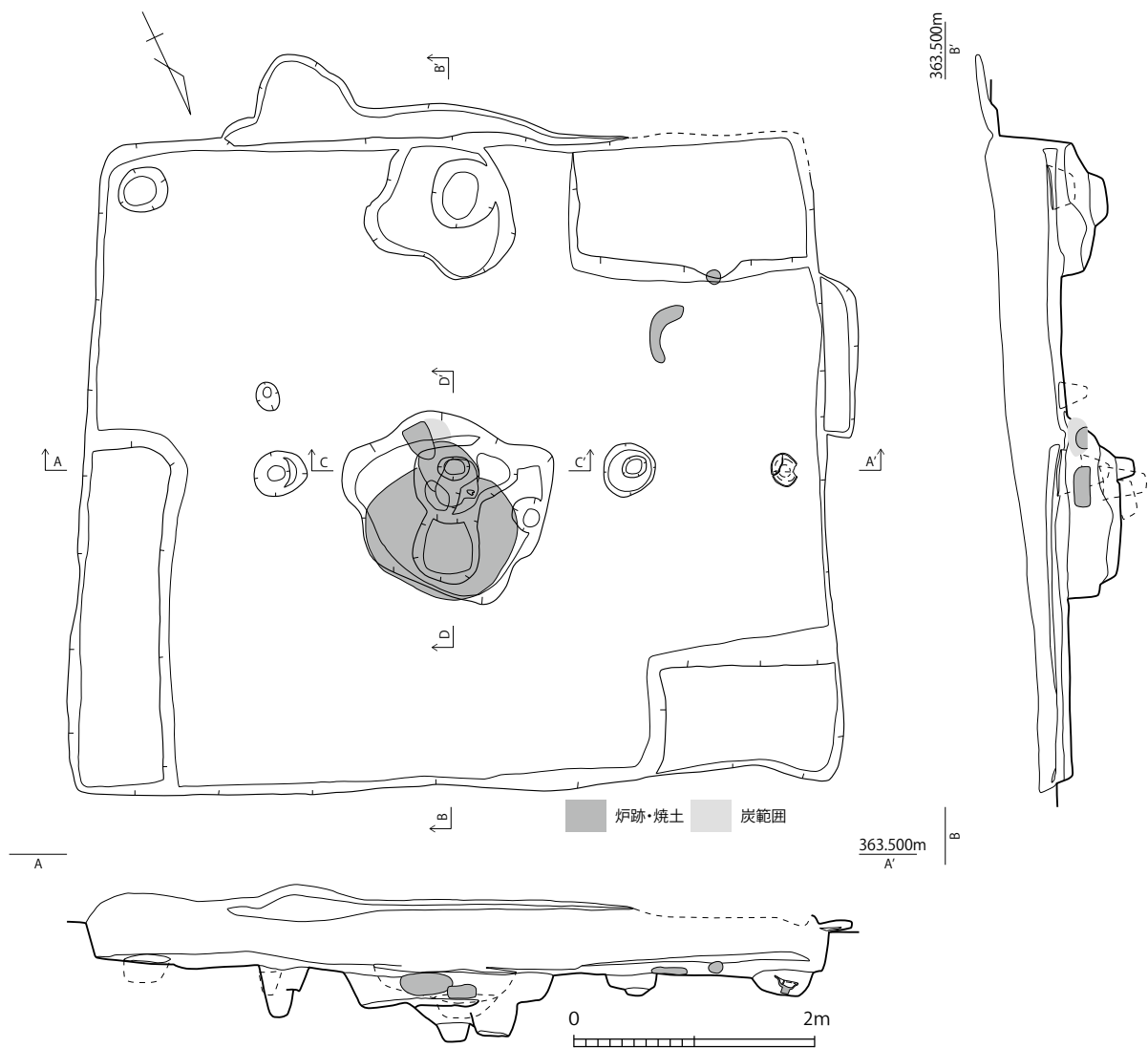
SH166は竪穴建物である。SK417・SX12を切る。形状はやや歪んだ長方形で、規模は長軸4.5～5.0m、短軸3.5～3.85m、深度は0.4mである。支柱穴は2本で、南東隅に高さ0.05mの長方形のベット状遺構がある。建物の中心には浅く掘り窪めた炉跡があり、炉跡の周辺にはU字状土坑がある。南壁際には土坑が掘られており、竪穴建物とともに埋没している。

遺物は埋土全般から出土しているが、とくに1層中から多く出土している。甕などが潰れた状態で出土するなど比較的まとまった出土状況を示しており、埋没途中で廃棄されたものとみられる。弥生時代中期後半段階の遺物も多く混じり込んでいる。また図示していないが、掘り下げ時に埋土中から1cm程度の赤色顔料がわずかに確認できた。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

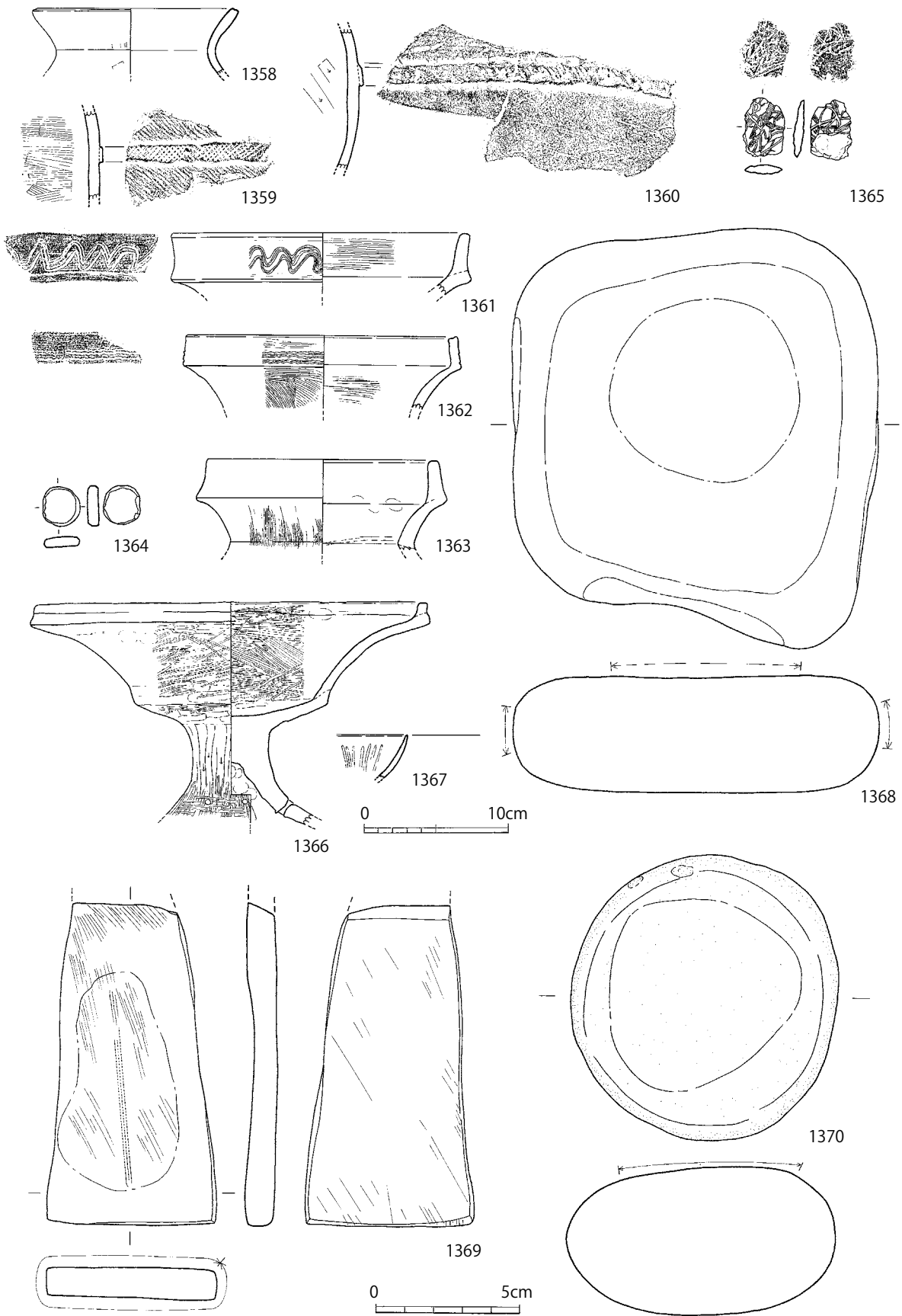
SH167 (第356・357図)

SH167は竪穴建物である。中央は近現代の溝に切られ、北側が削平を受けているため規模が判然としないが、形状は長方形と推測できる。規模は長軸6.1m、短軸は4.5m以上、深度は0.3mである。支柱穴が4本、南壁際に土坑が1基、南東・南西隅には長方形のベット状遺構が確認できた。建物中心部には浅く掘り窪み被熱した炉跡があり、その北側にはU字状土坑が検出できた。

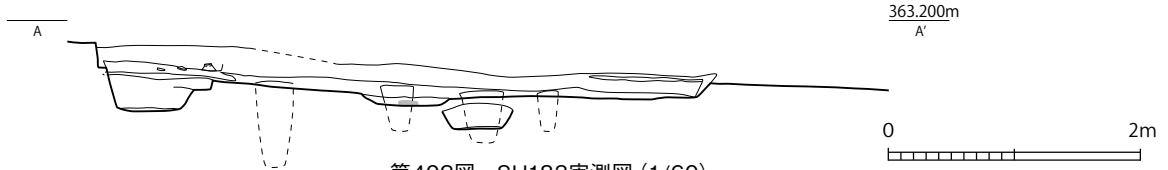
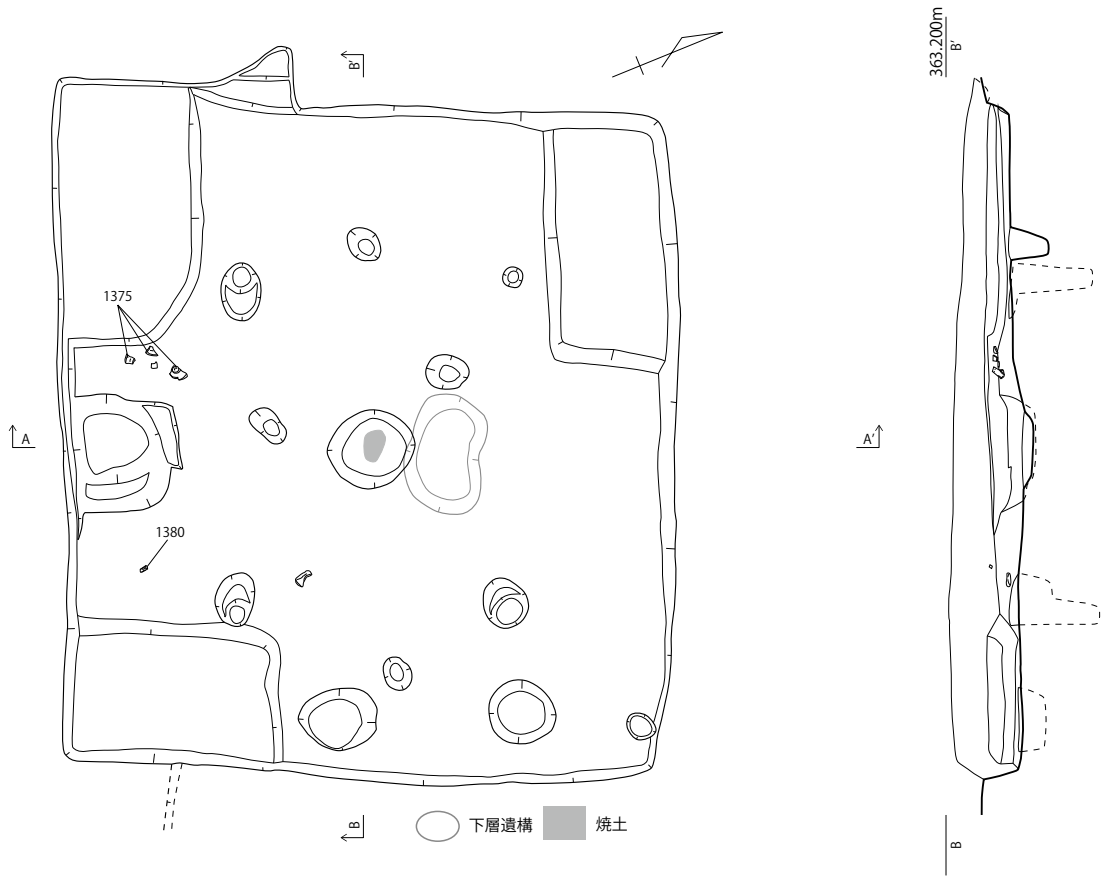
埋土は黒褐色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。遺物は主に土坑1内やその周辺から台石や甕・



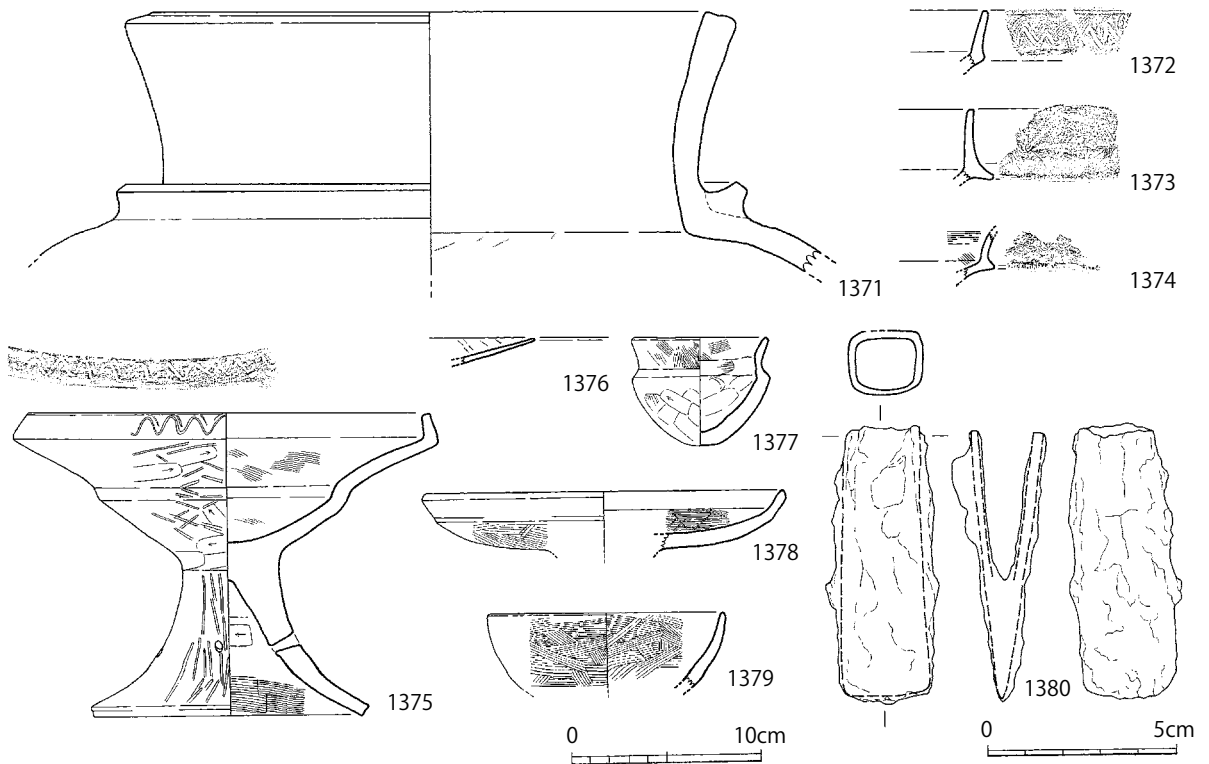
第400図 SH182実測図 (1/60)



第401図 SH182出土遺物実測図



第402図 SH183実測図 (1/60)

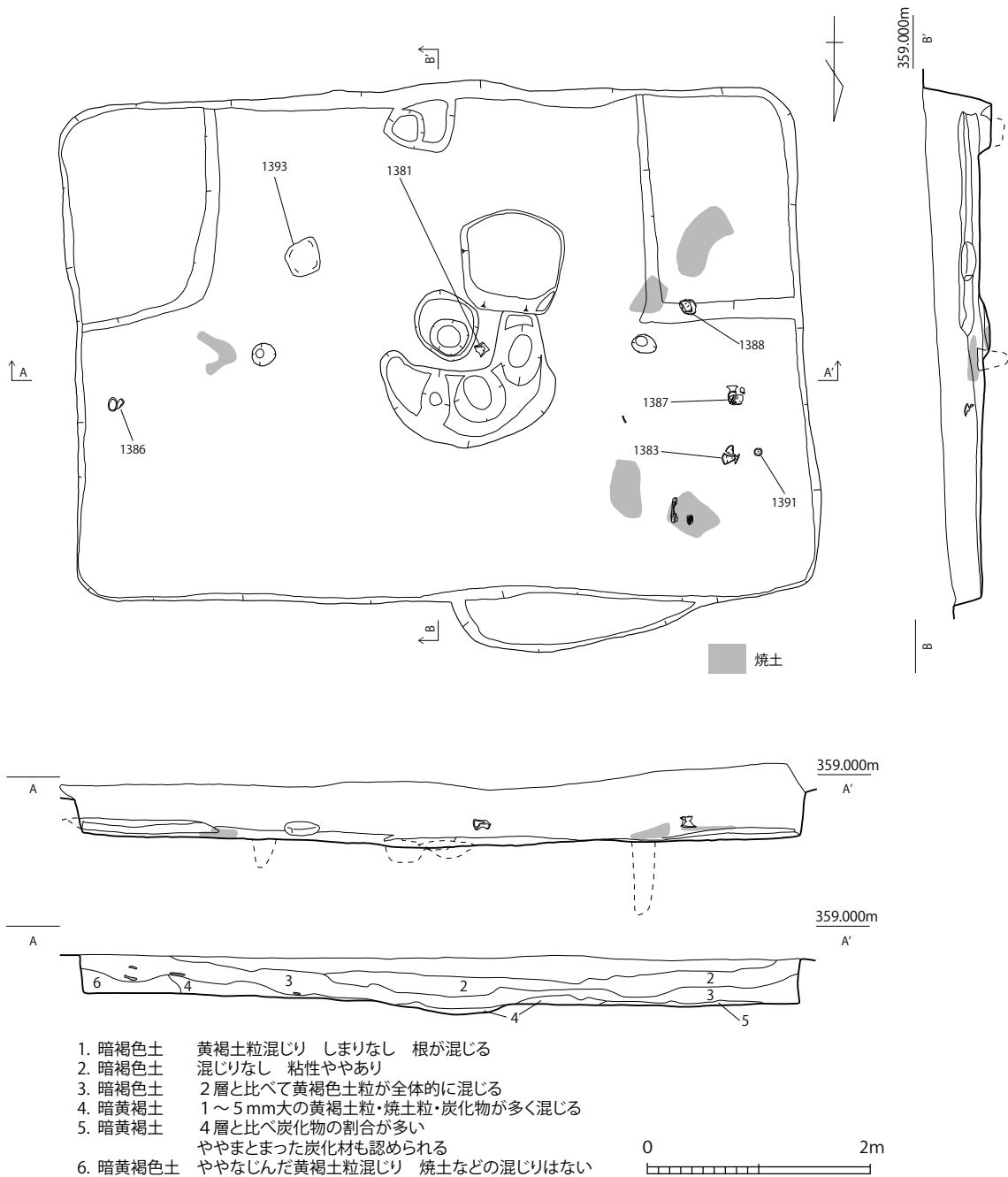


第403図 SH183出土遺物実測図

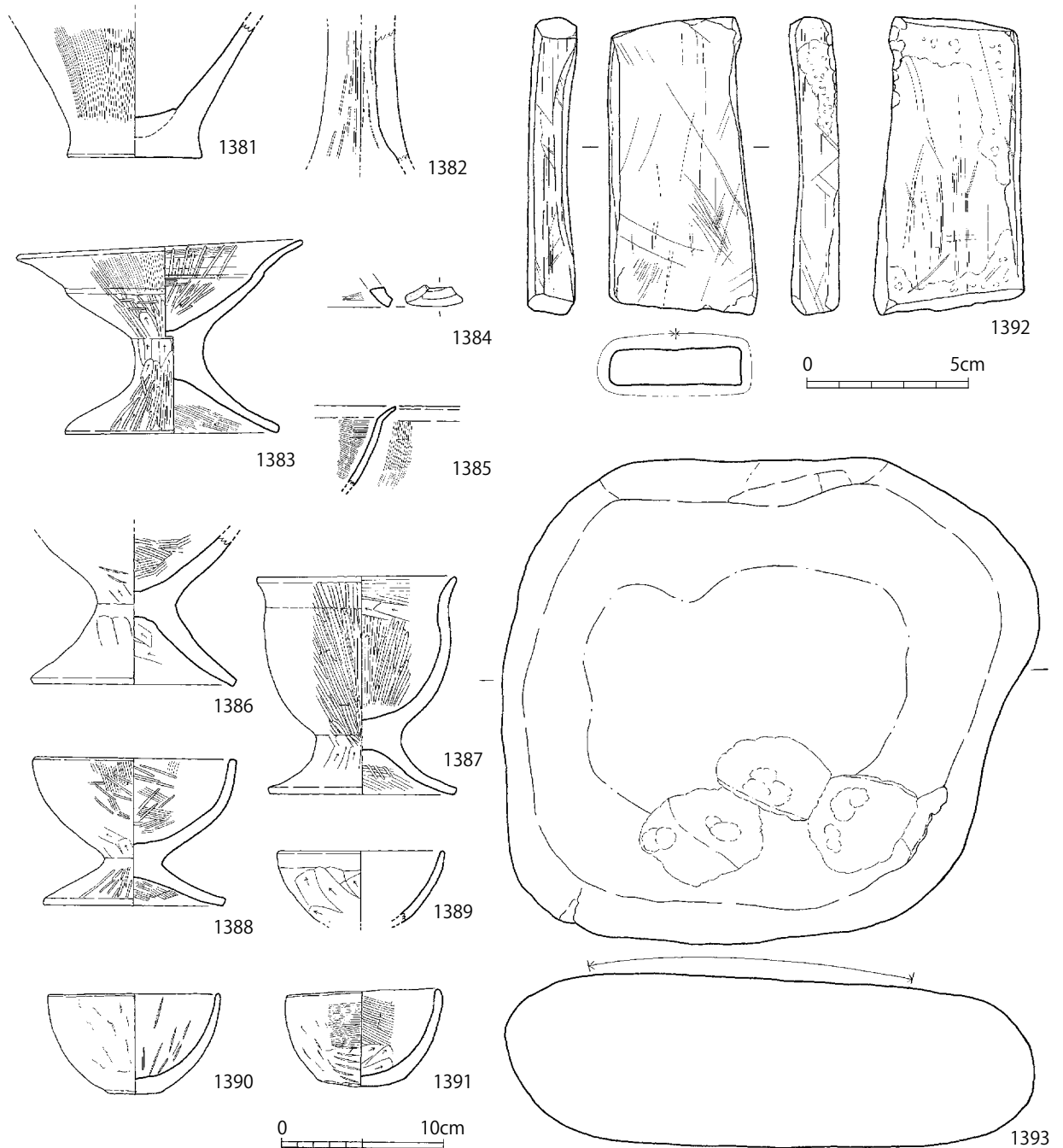
鉢等が出土しており、建物の廃絶直後から廃棄されたものとみられる。また藁状圧痕が内外面につく用途不明品(1053)も出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

SH168 (第358・359・360・361・362・363・364・365図)

SH168は竪穴建物である。調査当初は複数の遺構が切り合うと考え、張り出し各部に遺構番号を付していたが、長方形のプランに3か所の方形張り出しと1か所の台形状の張り出しがともなう竪穴建物と判明したため、一つの遺構番号にまとめた。基本となる長方形プランの規模は長軸7.2m、短軸5.8～6.7m、深度は0.5mである。張り出し部も含めた面積は53.7㎡で最大となることから、SH168が集落内の中心的竪穴建物であったことがわかる。主柱穴は4本で、建物の中心には浅く掘り窪めた部分が被熱した炉跡がある。炉跡の周囲でU字状土坑が検出できた。建物の南壁は、中央付近から外側に向かってなだらかに反った後に直線的に伸びるため、台形の張り



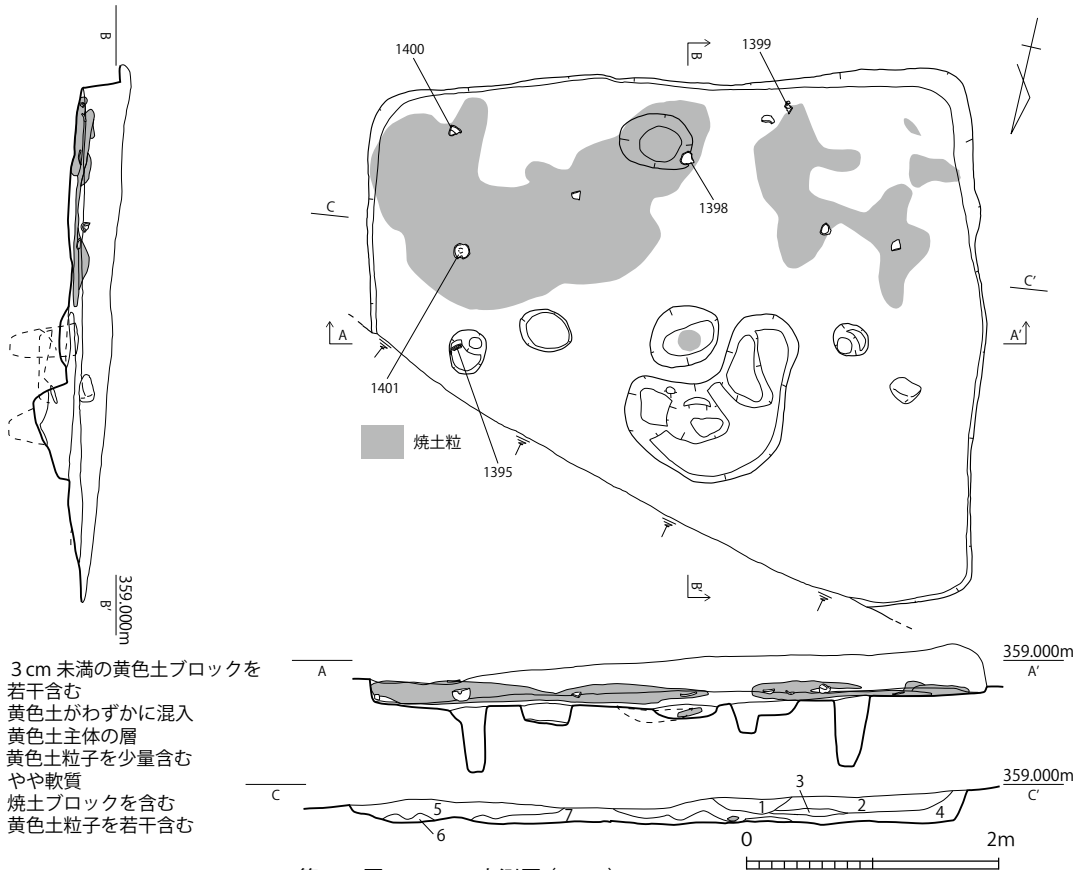
第404図 SH184実測図 (1/60)



第405図 SH184出土遺物実測図

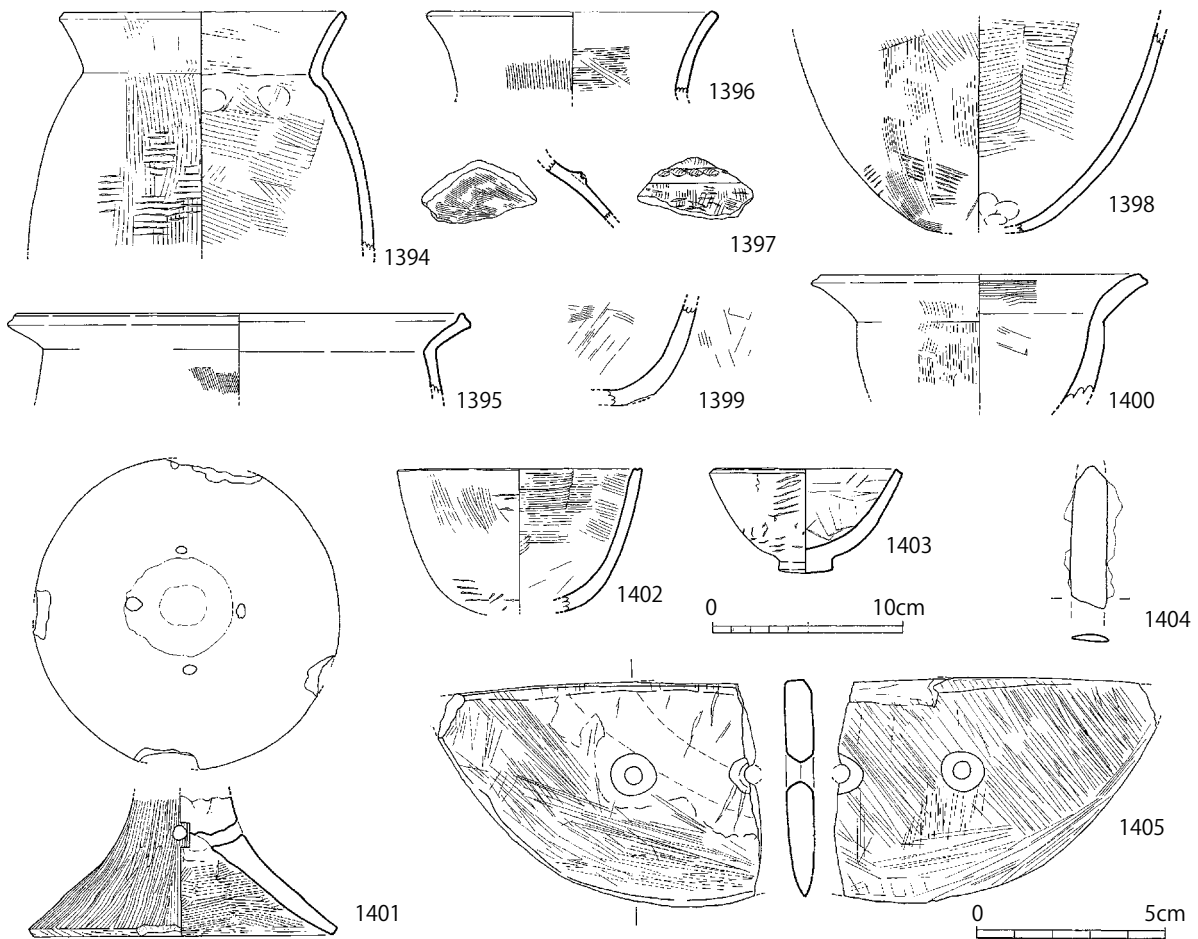
出しがあるように見える。南西隅と南東隅には長方形のベット状遺構があり、南壁際中央には土坑が1基確認できるが、この南壁土坑は反った壁際まで掘り込まれている。長方形の張り出しは北側・北東側・北西側に付設されているが、これらの規模は長軸2.0m、短軸1.0mとおおむね規模が一致し、軸が竪穴建物のプランと一致していることや、建物の壁面際にめぐる周溝が南東のベット状遺構・北西張り出し部・北張り出し部の手前だけ掘られていないことから、一連の遺構と判断できる。

埋土は自然に埋没したものとみられるが、建物北側の床面付近で焼土が厚みをもって堆積するとともに、大量の土器・石器が出土している。遺物は各層全般から出土しているが、その出土量は他の竪穴建物を凌駕し、図示したものが全てではない。これらの遺物は建物の廃絶後、焼土とともに廃棄されたものとみられる。また遺物は出土状況から大きく5群にまとまりをみせる。各群は炉跡とその周囲で1～1.5m範囲に集中しており、群を大



1. 暗茶褐色土 3cm未満の黄色土ブロックを若干含む
2. 暗茶褐色土 黄色土がわずかに混入
3. 暗黄褐色土 黄色土主体の層
4. 黒褐色土 黄色土粒子を少量含む
5. 黒色土 やや軟質
6. 暗褐色土 焼土ブロックを含む
7. 黒褐色土 黄色土粒子を若干含む

第406図 SH185実測図 (1/60)



第407図 SH185出土遺物実測図



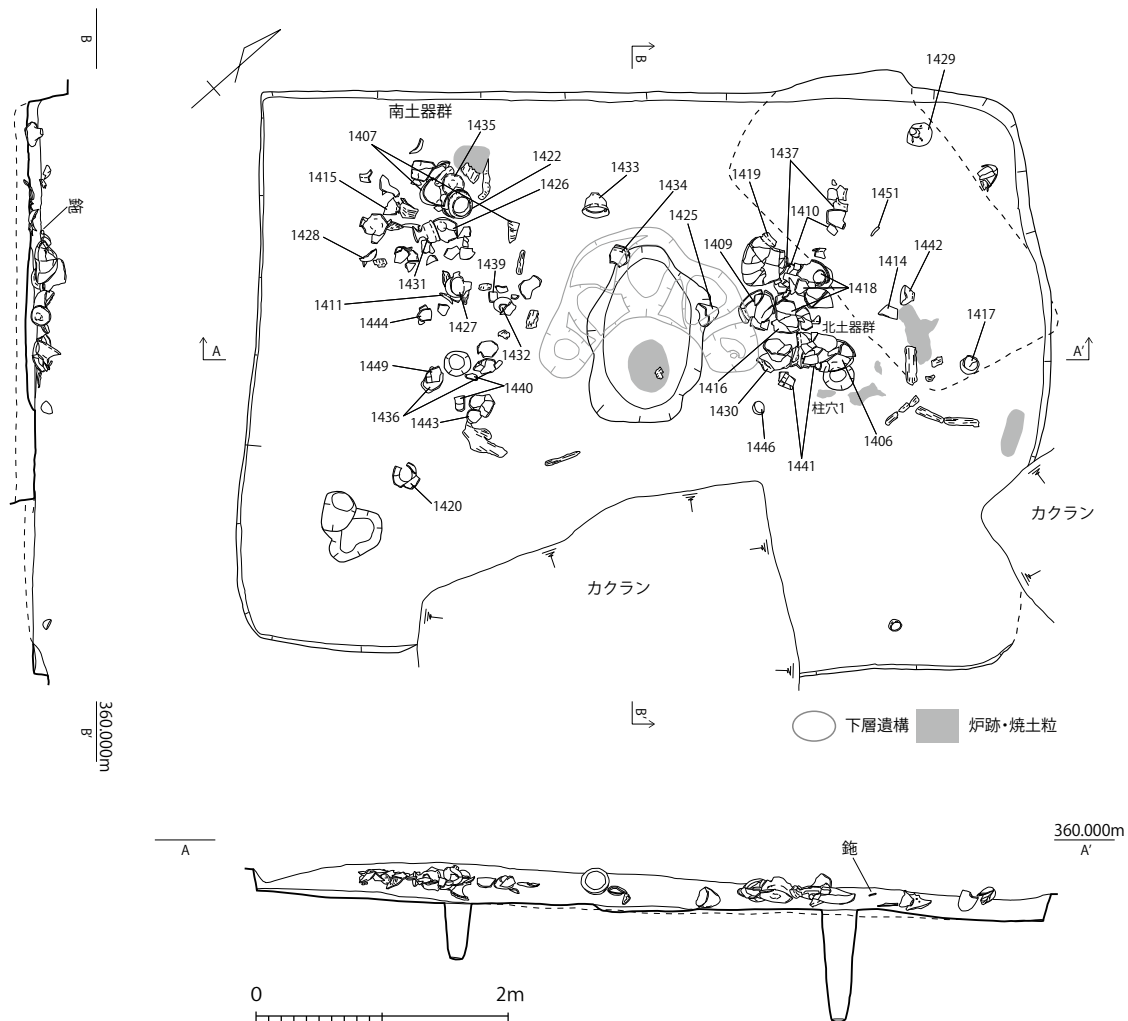
大きく超えた接合関係はあまり認められない。そして群内で土師器の器種が偏るなどの傾向も認められず、これらの群は廃棄のまとまりとみられる。

また建物の西側において焼土に混じり赤色顔料が点在して検出された。顔料の分析を行っていないため正確なことは言えないが、建物の廃絶にともなう祭祀で用いられた可能性がある。出土遺物から埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

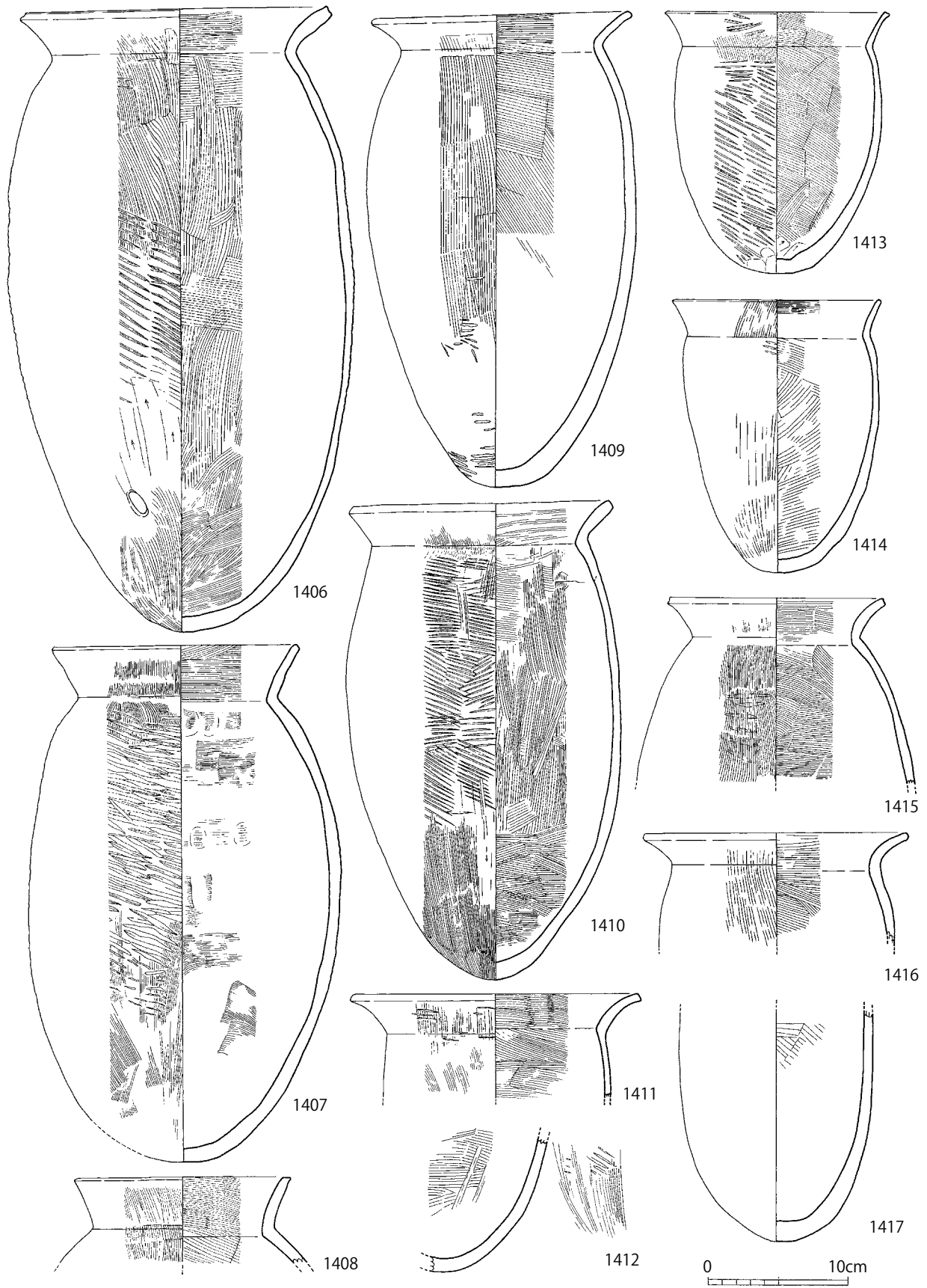
**SH169 (第366・367・368図)**

SH169は竪穴建物である。SH128を切る。形状は長方形で、規模は長軸4.8m、短軸3.85m、深度は0.45mである。主柱穴は2本で、建物中央部に炉跡があり、その周辺には貼床が貼られ硬く締まっている。また炉跡の北側でU字状土坑が検出できた。ベット状遺構・周溝・南壁土坑は確認できなかった。

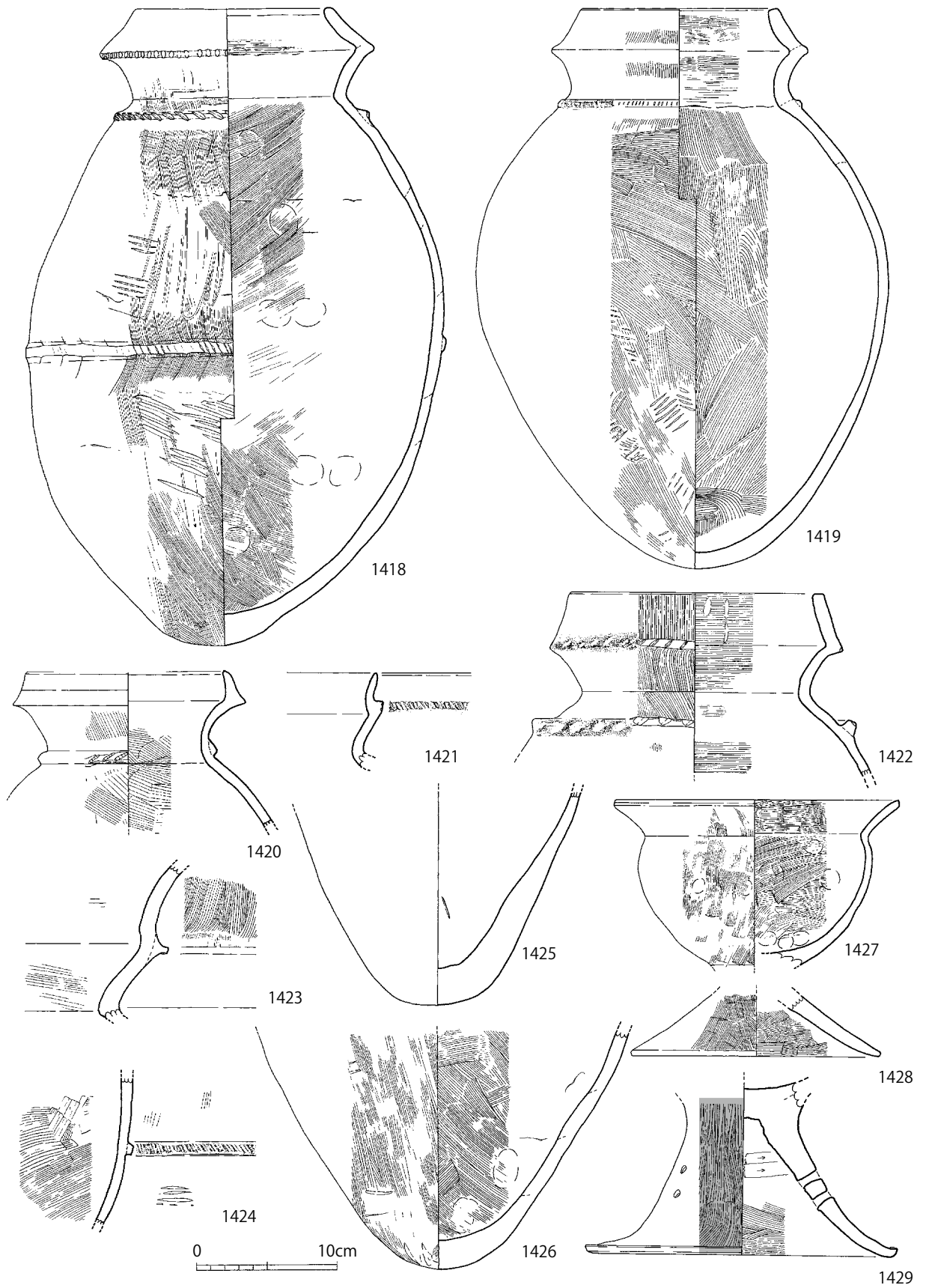
埋土は自然に埋没したものとみられる。床面からやや浮いた状態で焼土とともに炭化材が出土している。炭化材の残りは良く、建物中心部にまとめられた状態で出土したことから、埋没途中で部材を集積させ焼却行為を行ったものと考えられる。遺物は各層全般から出土しているが、大部分は炭化材や焼土の上で出土していることから焼却行為後に廃棄されたとみられる。特に南東隅では甕・壺・高坏とともに台石がまとめて出土した。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。



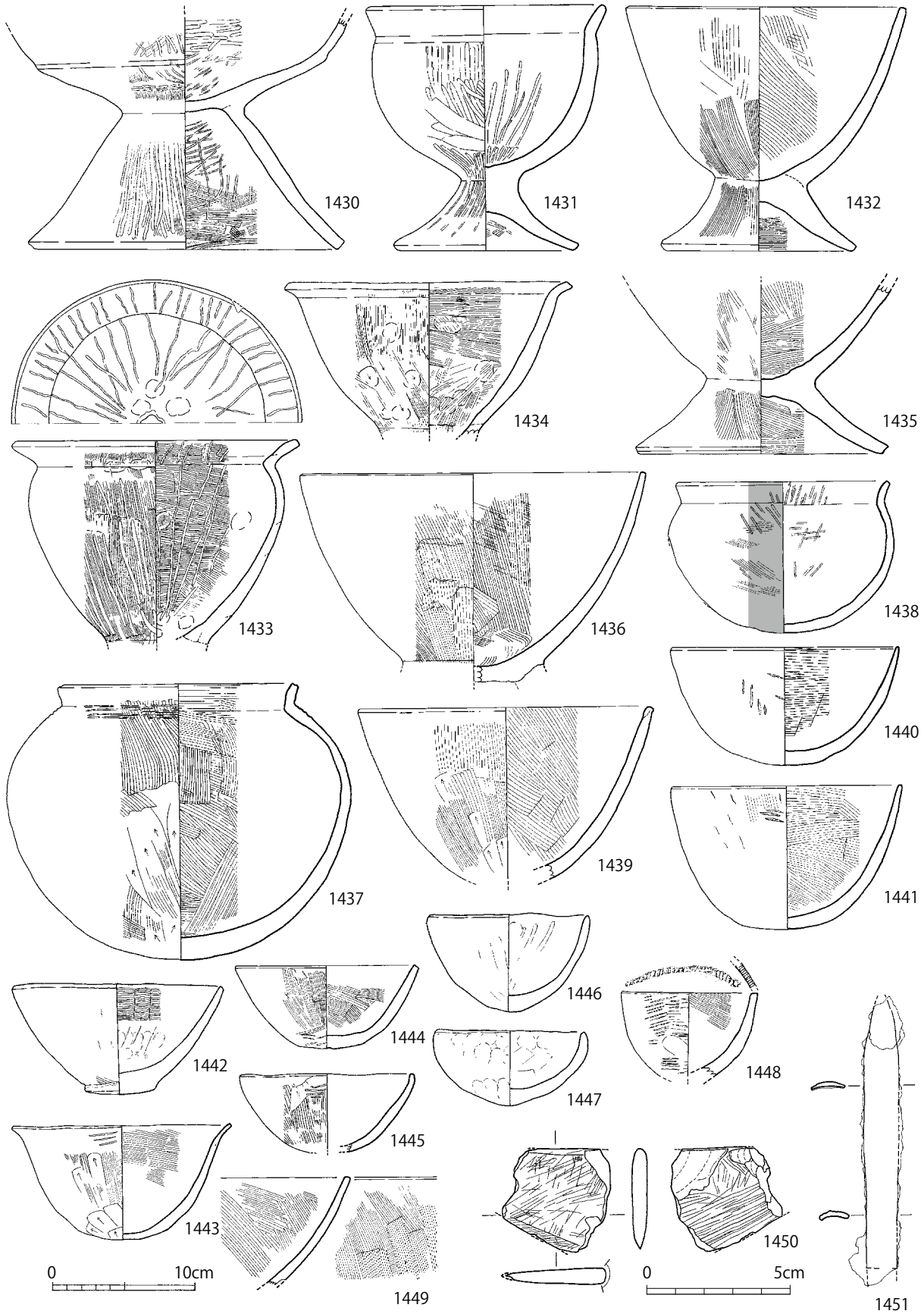
第408図 SH186実測図 (1/60)



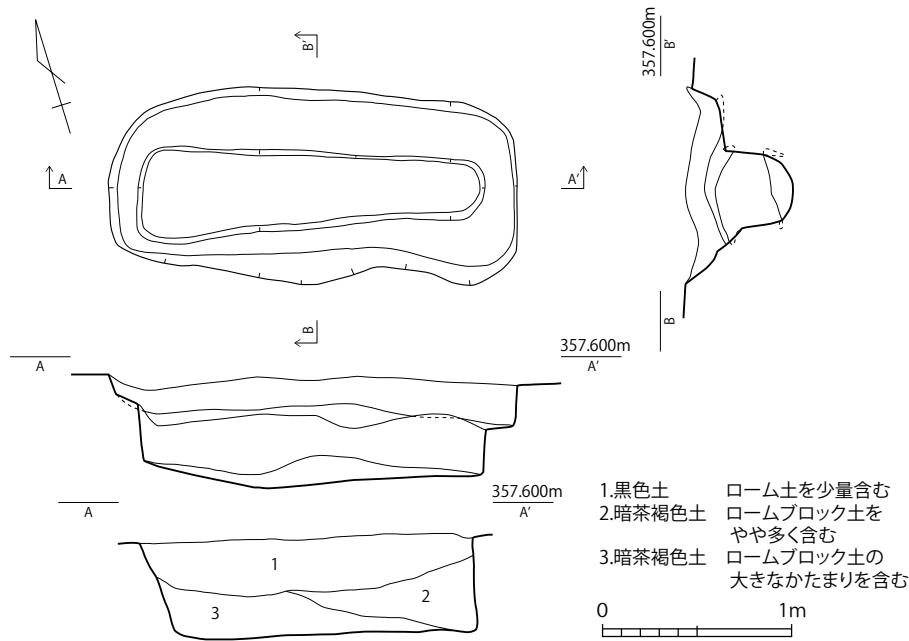
第409図 SH186出土遺物実測図①



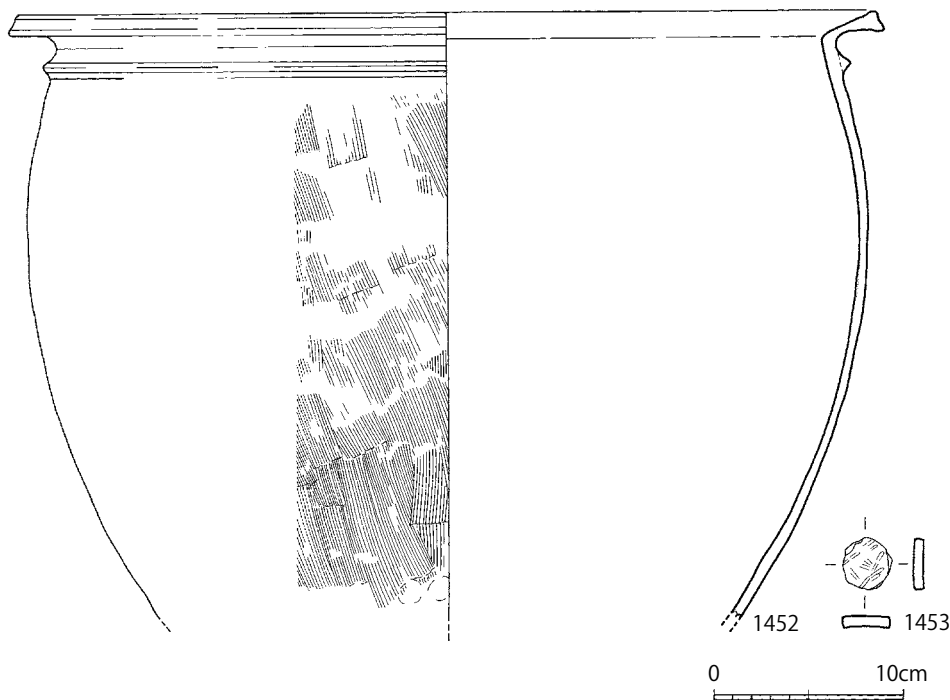
第410図 SH186出土遺物実測図②



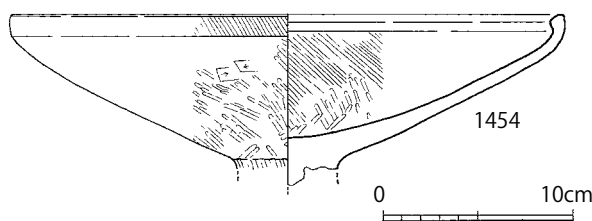
第411図 SH186出土遺物実測図③



第412図 SK530実測図 (1/40)



第413図 SK530出土遺物実測図



第414図 SX15出土遺物実測図

SH170 (第369・370・371 図)

SH170は竪穴建物である。北側は削平を受けているが、なかでも北東部は削平が床面にまで達する。形状は長方形で、規模は長軸8.0m、短軸6.6m、深度は0.5mである。面積は52.8㎡で、SH168に次ぐ規模である。主柱穴は4本で、建物中央には浅く掘り窪めた炉跡が2か所ある。炉跡1の周囲にはU字状土坑が検出できたが、このU字状土坑が埋め戻された後に炉跡2がつくられている。炉跡2の周囲ではU字状土坑は検出できなかった。炉跡2が作られてからも炉跡1は埋め戻されていないことから、炉跡1・炉跡2は併存していたとみられる。南壁際には土坑があり、建物とともに埋没している。この南壁土坑を除いた壁際に幅0.8mのベット状遺構がめぐる。北西部で途切れているようにあるが、これは削平のためで、本来はつながっていたとみられる。ベット状遺構の壁際には周溝がめぐっている。

埋土はレンズ状堆積であることから、自然に埋没したものとみられる。遺物の多くは埋没の過程で廃棄されたもので、埋土全般から出土しているが、南西隅では甕が床面直上で、土坑内では小型甕と台石が底面から出土している。また土坑

付近からは床面から浮いた状態ではあるが鉢（1185）も出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

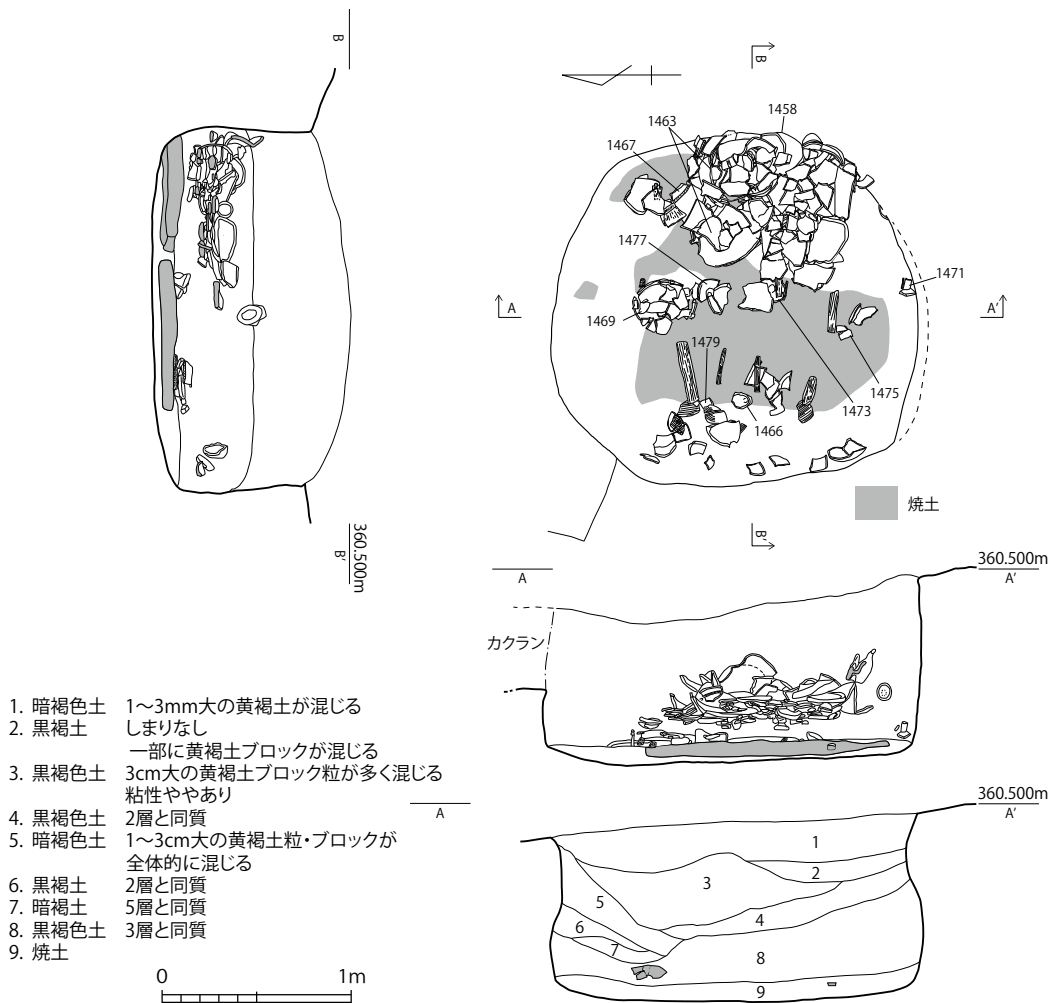
**SH171（第372・373図）**

SH171は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸6.6m、短軸5.7m、深度は0.4mである。主柱穴は4本で、抜き取りが行われている。なかでも北西柱穴には抜き取り後に白色粘土を、南西柱穴には脚を打欠いた鉢を入れている。建物の中央には浅く掘り窪めた炉跡があり、その北側でU字状土坑が検出できた。建物南壁際には土坑があるが、廃絶時に白色粘土塊を入れている。南壁土坑部分を除いた壁際には幅0.7～0.8mのベット状遺構がめぐり、その壁際には周溝がめぐっている。

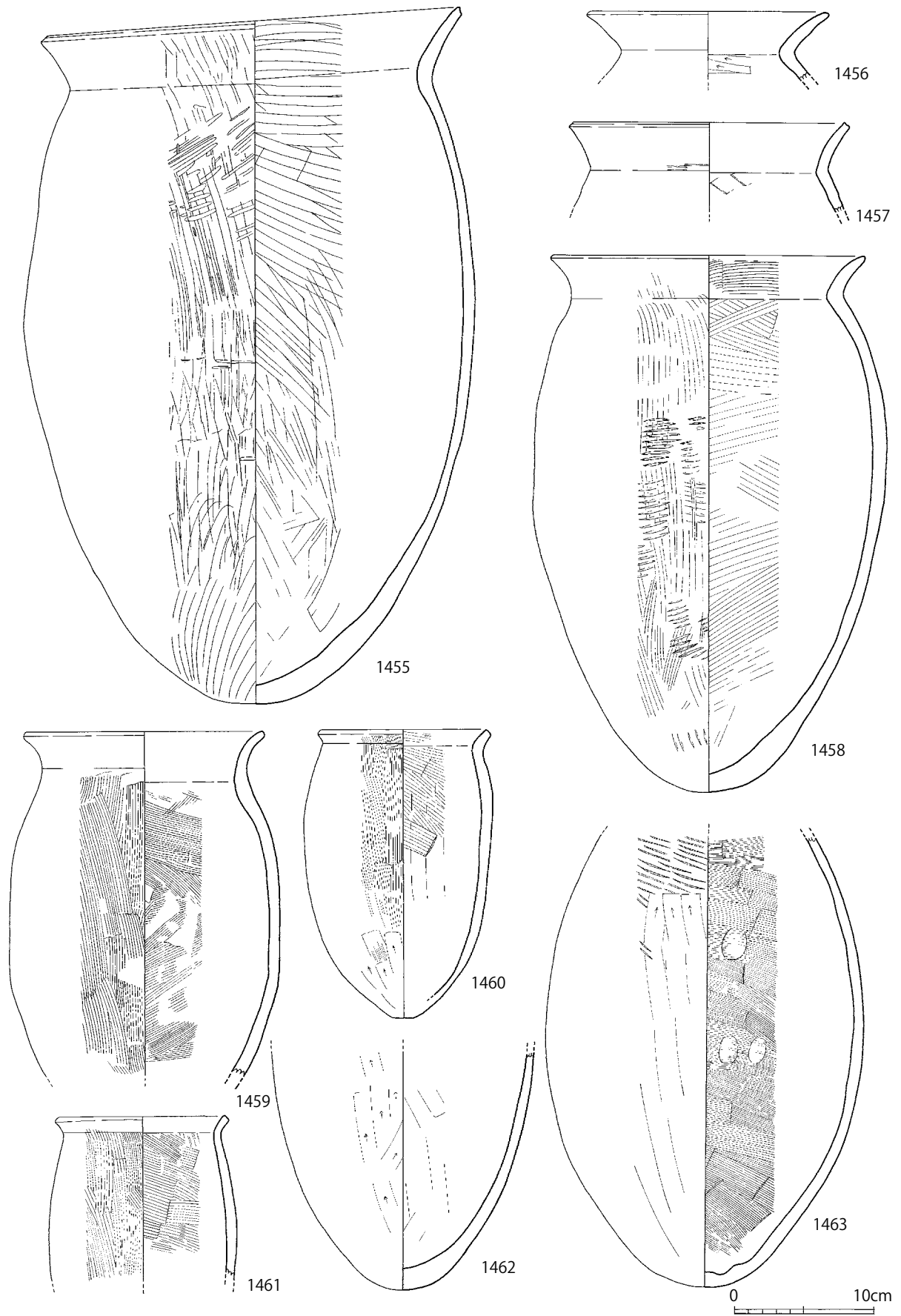
土層図はないが、埋土はレンズ状に近い堆積であったため、自然に埋没したとみられる。遺物は埋土中から比較的多くの遺物が出土しているが、なかでも北東壁際に床面付近から甕と高坏がまとまって出土した。埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

**SH172（第374・375・376図）**

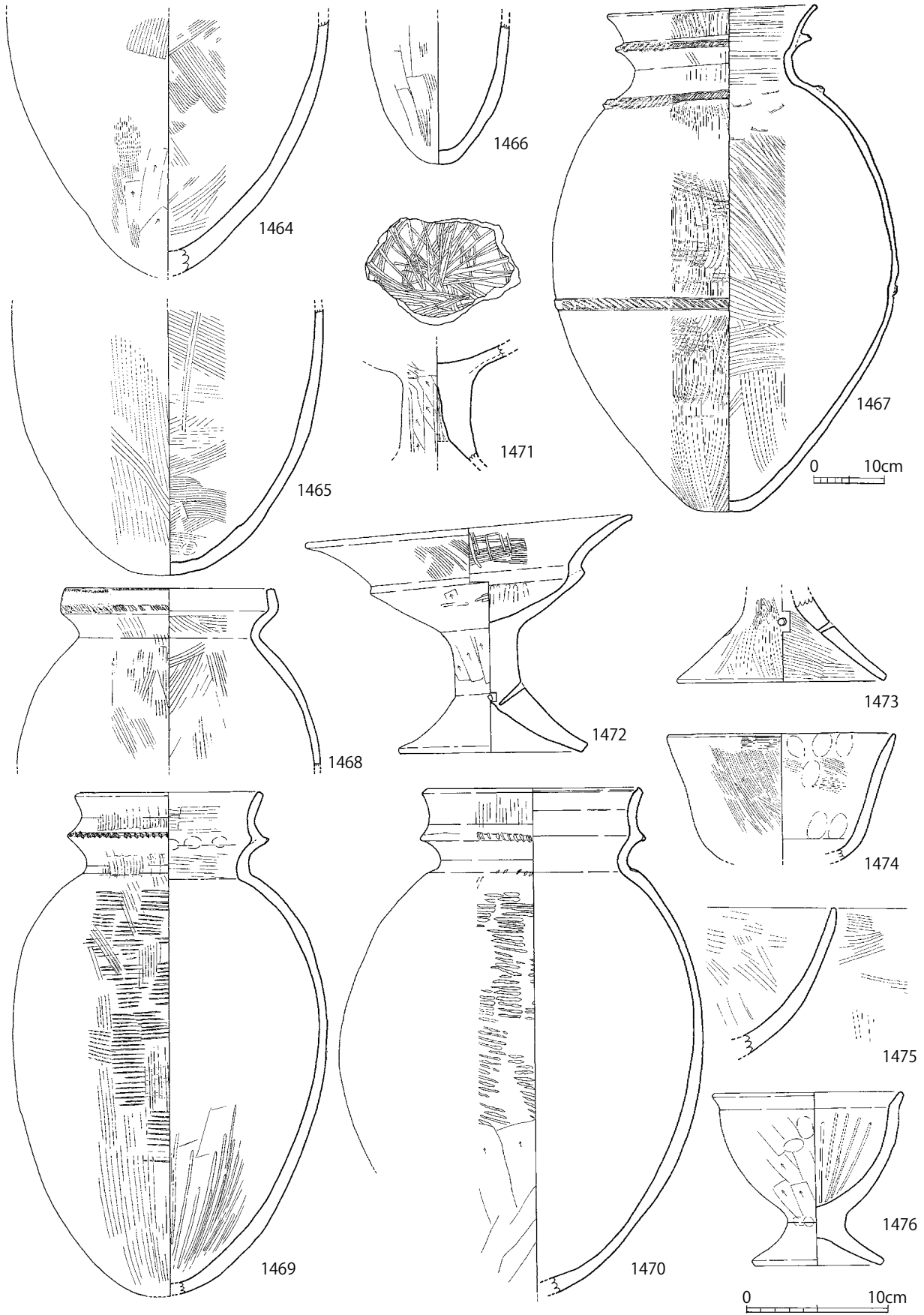
SH172は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸7.3m、短軸5.7m、深度は0.6mである。主柱穴4本、土坑5基、ベット状遺構、炉跡が検出できた。土坑7は南壁際に掘り込まれたもので、建物とともに埋没している。東壁中央部の土坑は、ベット状遺構が土坑を避けるように検出できた。土坑1は建物廃絶にともないベット状遺構を掘り込む土坑で、掘り込んだ際にでた黄褐色地山土を土坑の周辺に盛り、土坑内に複合口縁壺と甕を埋



第415図 SK531実測図 (1/40)

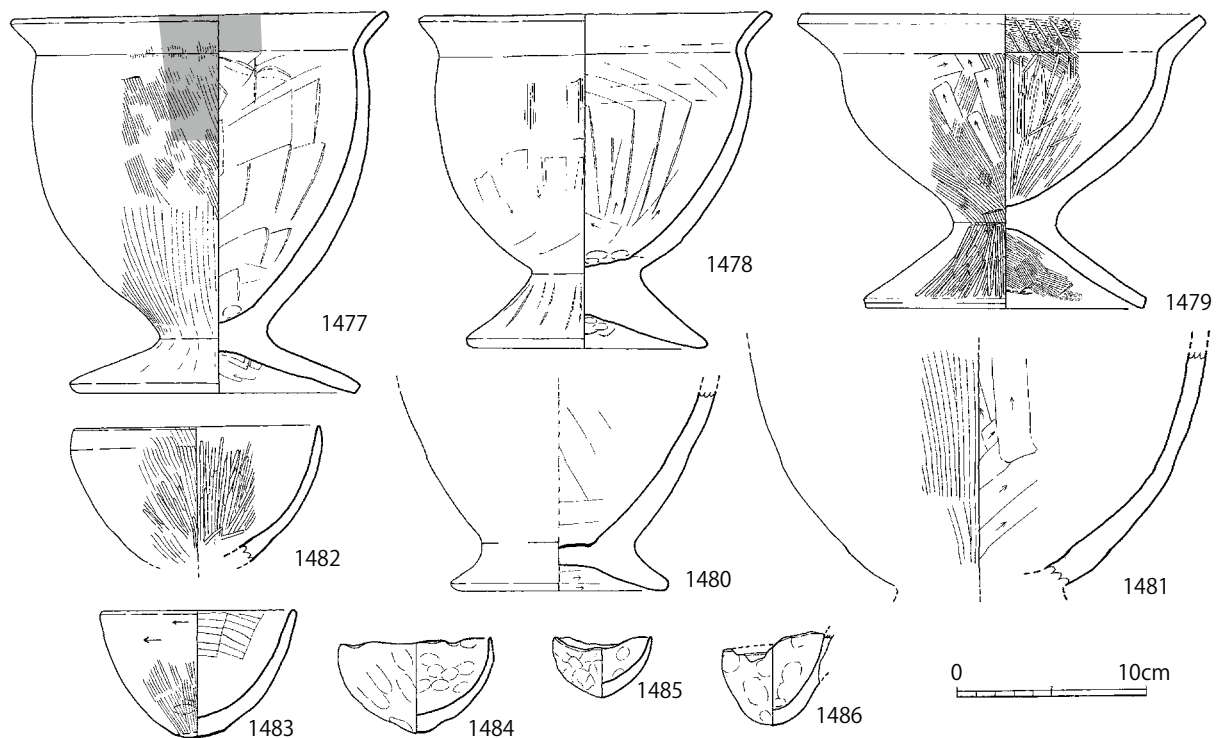


第416図 SK531出土遺物実測図①



第417図 SK531出土遺物実測図②





第418図 SK531出土遺物実測図③

置している。建物中央部には浅く窪んだ炉跡があり、その北側にはU字状土坑が検出できた。U字形土坑の埋土は黄褐色地山土に炭や焼土粒がわずかに混じる土質で、建物の廃絶時にはすでに埋め戻されていたとみられる。

埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。埋没当初に堆積した2層には炭粒と焼土粒が多く混じり込んでいる。遺物は1・2層全般から出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。建物南東隅の壁際からは、床面から浮いた状態で鋤先(1240)が出土している。また全てを図示できなかったが、埋土中からは20点近くの敲石が出土するなど、一つの竪穴建物から出土する量としては非常に多く特徴的な様相をみせる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

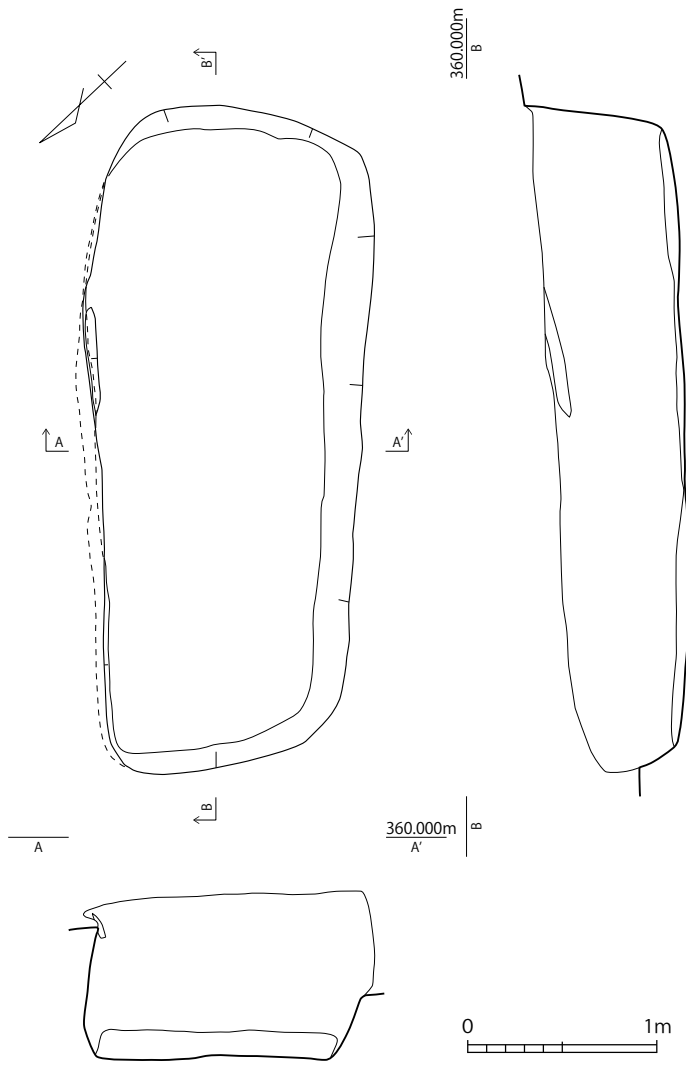
#### SH173 (第377・378図)

SH173は竪穴建物である。SH174に切られるため北側の状況が不明であるが、形状は長方形と考えられる。規模は判明している短軸が3.9m、深度は0.25mである。主柱穴は2本と推定できるが、確認できたのは1本である。対応する1本がSH174内でも検出できていないのは、SH174がSH173の床面よりも深く掘り込まれていることや、SH174のU字状土坑がある位置に柱穴があった場合はより深く掘削を受けている可能性があるため確認できなかったものと考えられる。壁際には周溝がめぐっている。

埋土は黒褐色土の単一層で、自然に埋没したものとみられる。主柱穴の周辺では炭化物と焼土がまとまって出土している。遺物も焼土の堆積にともなって出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

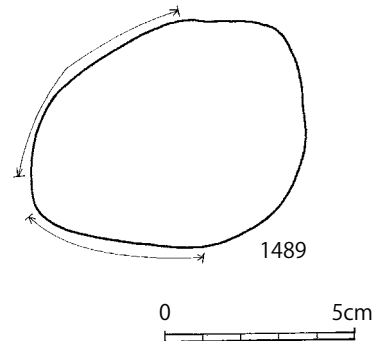
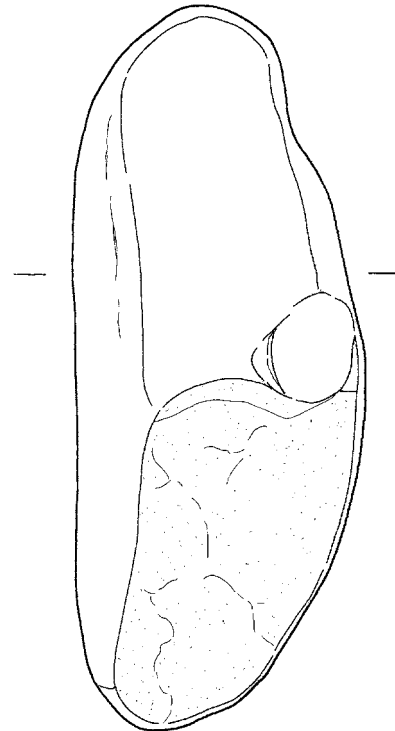
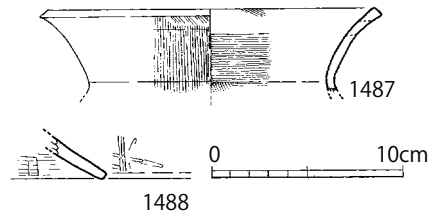
#### SH174 (第379・380・381図)

SH174は竪穴建物である。SH173を切る。北側は床面まで削平を受けている。形状は長方形で、規模は長軸6.4m、短軸は5.1mと推定でき、深度は0.3mである。主柱穴は4本で、建物中央よりやや南寄りに浅く掘り窪めた炉跡がある。炉跡の周辺にはU字状土坑が検出できた。南壁際には土坑があり、南西隅と北壁に沿ってベット状遺構がある。



第419図 SK532実測図 (1/40)

土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していたことから、自然に埋没したとみられる。遺物は床面から浮いた状態で出土していることから、埋没過程で廃棄されたものとみられる。特に南西部のベット状遺構周辺では壺がまとまって出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。



第420図 SK532出土遺物実測図

### SH175 (第382・383図)

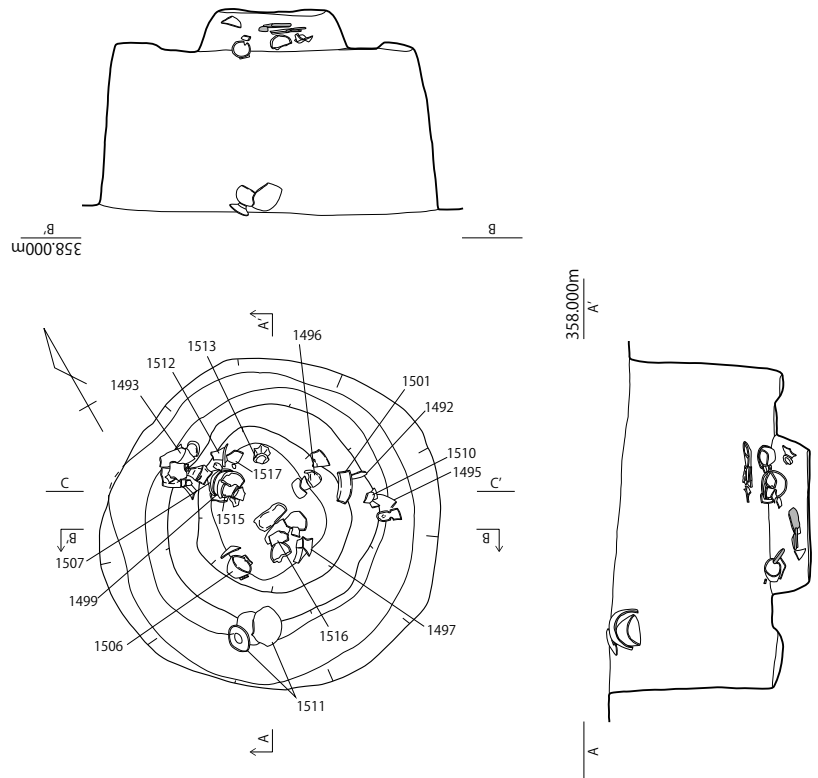
SH175は竪穴建物である。SH126を切る。形状は長方形で、規模は長軸5.2m、短軸4.0m、深度は0.15mである。主柱穴は2本で、建物中心部には浅く掘り窪めた炉跡がある。炉跡の北側にはU字状土坑が検出できた。南側壁面には土坑があり、建物とともに埋没している。

埋土は自然埋没したとみられるが、床面よりやや浮いた状態で焼土と炭化材が広範囲に検出できた。南壁面では、焼土の広がり一部遺構外にまで広がっているが、この部分はSH126を切っている部分であり、建物廃絶後にこの壁面が崩落し傾斜ができたところに焼土が堆積したものと考えられる。遺物は焼土の堆積にともない廃棄されたものとみられる。焼土上からは鉄鏃(1279)も出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

SH176 (第384・385図)

SH176は竪穴建物である。SH177に南半分を切られるが、主柱穴の位置などから形状は方形に復元できる。規模は一辺が3.8m程度、深度は0.15mである。主柱穴は2本で、東隅には長方形のベット状遺構がある。

土層図はないが、レンズ状に近い堆積であったことから、自然に埋没したものとみられる。遺物は完形の鉢が点々と出土しているが、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

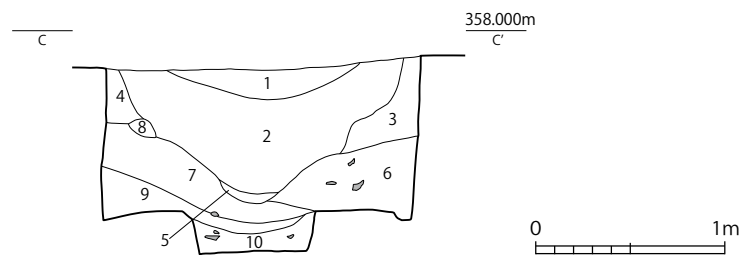


SH177 (第386・387・388図)

SH177は竪穴建物である。SH176・SK431を切る。形状は長方形で、規模は長軸6.1m、短軸4.8m、深度は0.4mである。主柱穴は4本あり、東隅を除く3隅に長方形のベット状遺構が確認できる。中央にある浅い窪みが炉跡であり、炉跡の周辺にはU字状土坑が検出できた。炉跡周辺の床面は硬化している。南壁際に土坑があるが、この土坑は掘り直しが行われており、最終的には竪穴建物とともに埋没している。

埋土はレンズ状に堆積していることから、自然埋没したとみられる。床面よりやや浮いた状態で炭化物と焼土がまとまって出土した。炭化物

は建物中央部に向かって放射状に検出できたことから、廃絶後に竪穴建物の部材を焼却した可能性も考えられる。遺物は床面よりやや浮いた状態で出土しているが、完形の甕や鉢とともに被熱した台石が出土していることから、焼却行為の前後に廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。



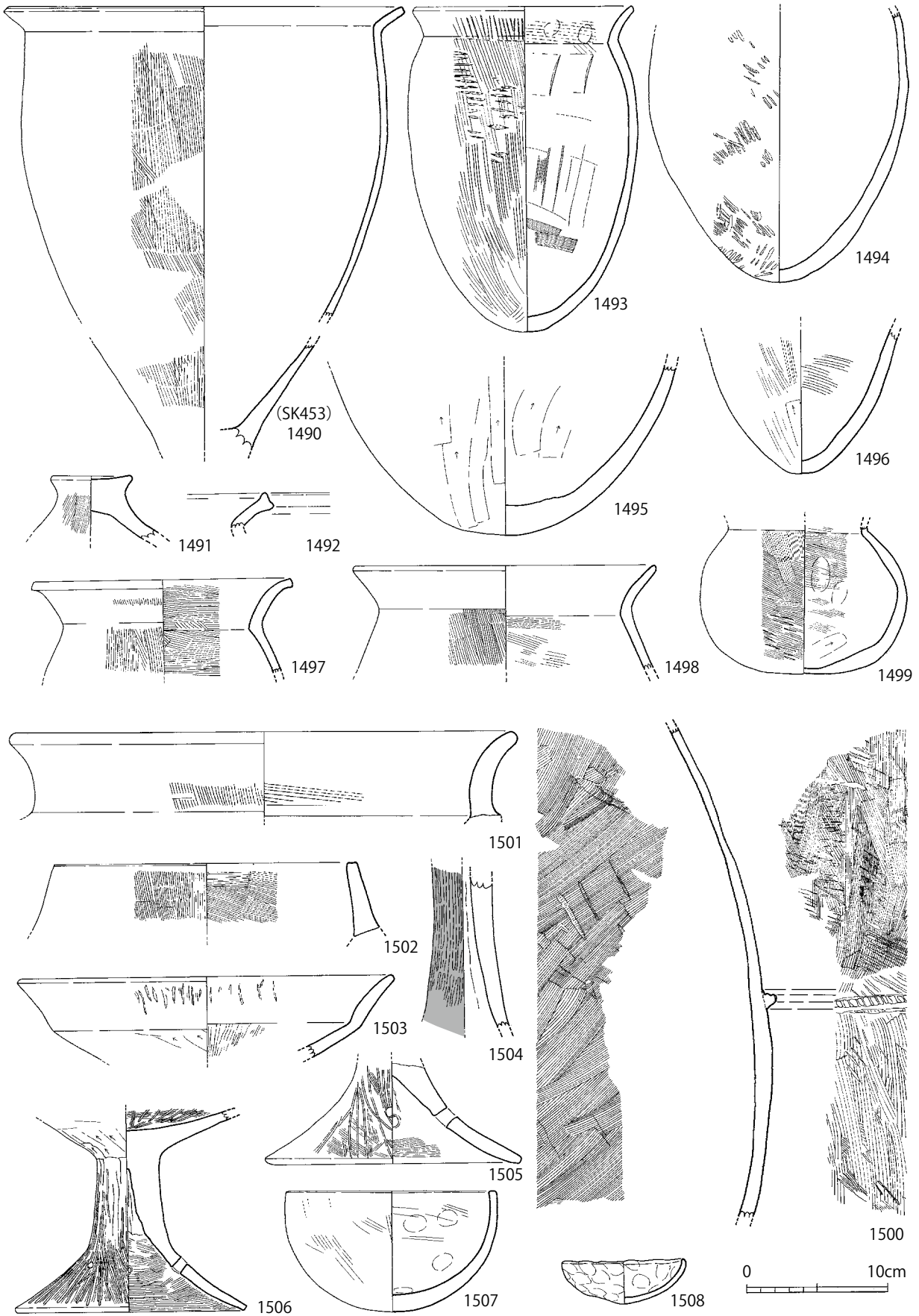
1. 黒色土 やや軟質 やや砂質
2. 茶褐色土 3cm未満の黄色土ブロックを多数含む  
上層の脚付鉢はこの層に伴う
3. 暗茶褐色土 3cm未満の黄色土ブロックを若干含む
4. 暗褐色土 やや軟質
5. 黒褐色土 3cm未満の黄色土ブロックを多数含む  
2層と比べ色調が暗くやや軟質
6. 暗褐色土 1cm大の黄色土ブロックを含む
7. 黒色土 やや軟質 2cm大の黄色土ブロックを少数含む
8. 基本的に2層と同じ
9. 暗褐色土 3cm未満の黄色土ブロックを含む
10. 黒褐色土 土器を多く含む

第421図 SK533実測図 (1/40)

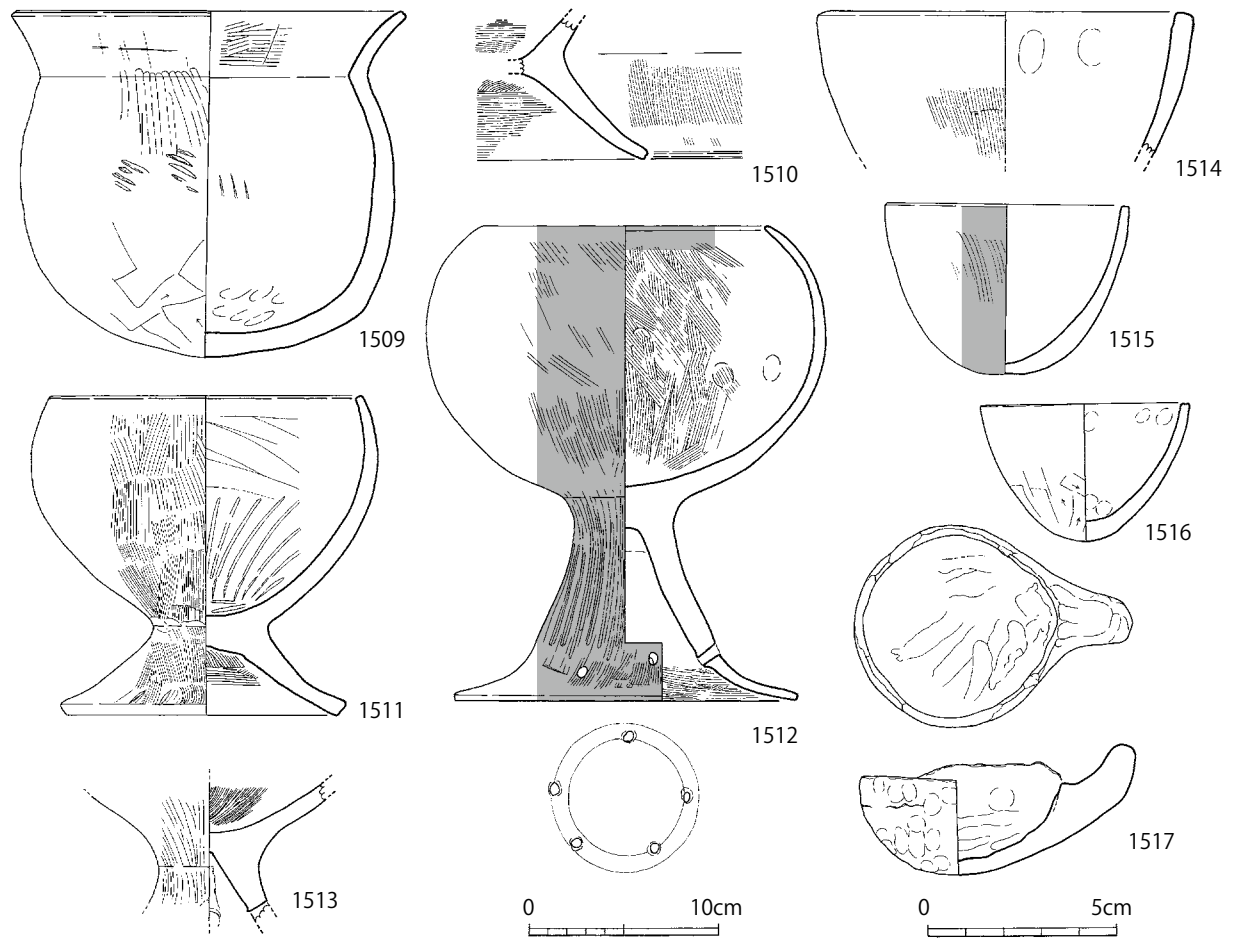
SH178 (第389・390図)

SH178は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸3.45m、短軸2.7m、深度は0.4mである。建物中央には浅い窪みが被熱した炉跡がある。明確に検出できた主柱穴は1本である。南西側の壁際に柱穴が1本あるが、SH178にともなうものかは明確ではない。

土層図はないが、埋土はレンズ状に近い堆積をしていることから、自然に埋没したものとみられる。遺物は床



第422図 SK533出土遺物実測図①



第423図 SK533出土遺物実測図②

面からやや浮いた状態で炭化材・焼土とともに出土しているが、その出土量は多くはない。埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

**SH179 (第391・392図)**

SH179は竪穴建物である。SK444を切る。形状は方形で、規模は一辺4.2～4.4m、深度は0.25mである。主柱穴は2本で、建物の中央には浅く掘り窪めた炉跡がある。北西・南西隅には長方形のベット状遺構が、東壁際中央には土坑がある。

土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。また焼土と炭化物が床面より浮いた状態で出土している。遺物は埋土全般から比較的多く出土しており、埋没過程で廃棄されたものとみられる。南隅の複合口縁壺(1318)と西壁際の台石(1325)については床面直上から出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

**SH180 (第393・394・395・396・397図)**

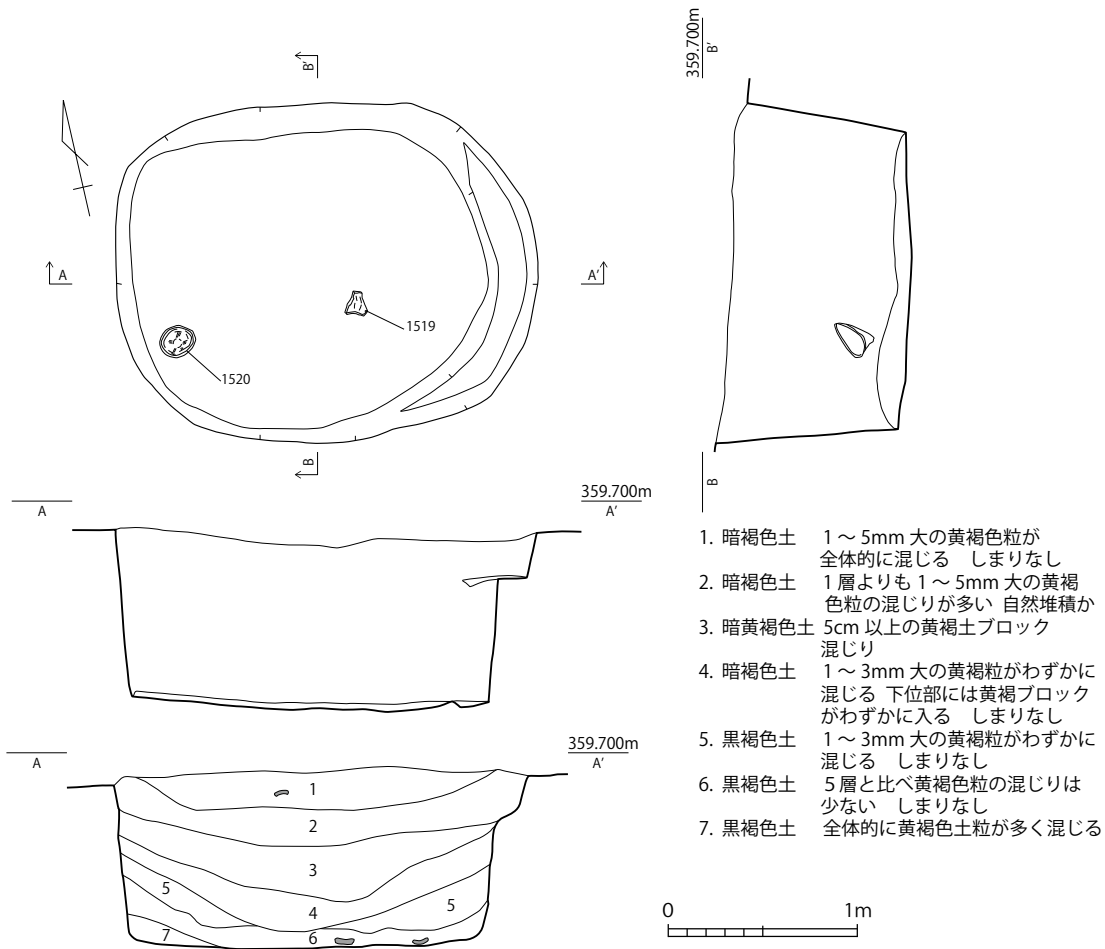
SH180は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸5.6m、短軸4.5m、深度は0.2mである。主柱穴は2本で、建物中央に浅く掘り窪めた炉跡がある。炉跡の西側にはU字形土坑が検出できた。北西・南西隅に長方形のベット状遺構が、東壁際には土坑がある。

土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。床面よりやや浮いた状態で焼土と炭化材が出土しており、炭化材は中央に向くように配置されていることから、竪穴建物の上屋

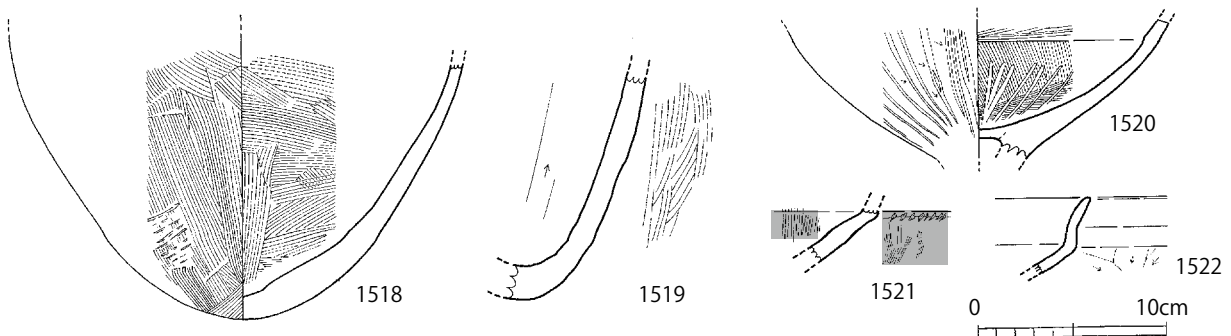
構造が反映されている可能性がある。遺物は特に炉跡周辺から南東にかけてまとまっており、複数個体の甕や楡描波状文を施した完形の小型複合口縁壺などが出土している。台石も比較的多く出土しており、被熱を受けたものもある。埋没過程で焼却行為と遺物の廃棄が行われたとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

SH181 (第398・399図)

SH181は竪穴建物である。SH132を切る。形状は長方形で、規模は長軸4.2m、短軸3.5m、深度0.15mである。主柱穴は2本で、柱穴間には浅く掘り窪めた炉跡があるが、ともに建物中心から西寄りにずれた位置にある。床面は地形に沿って南から北へなだらかに傾斜している。またSH132を切った部分には貼床が施されている。



第424図 SK534実測図 (1/40)



第425図 SK534出土遺物実測図

土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。床面からやや浮いた状態で焼土の堆積が認められる。遺物は埋土全般から出土しているが、まとまって出土しておらず、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

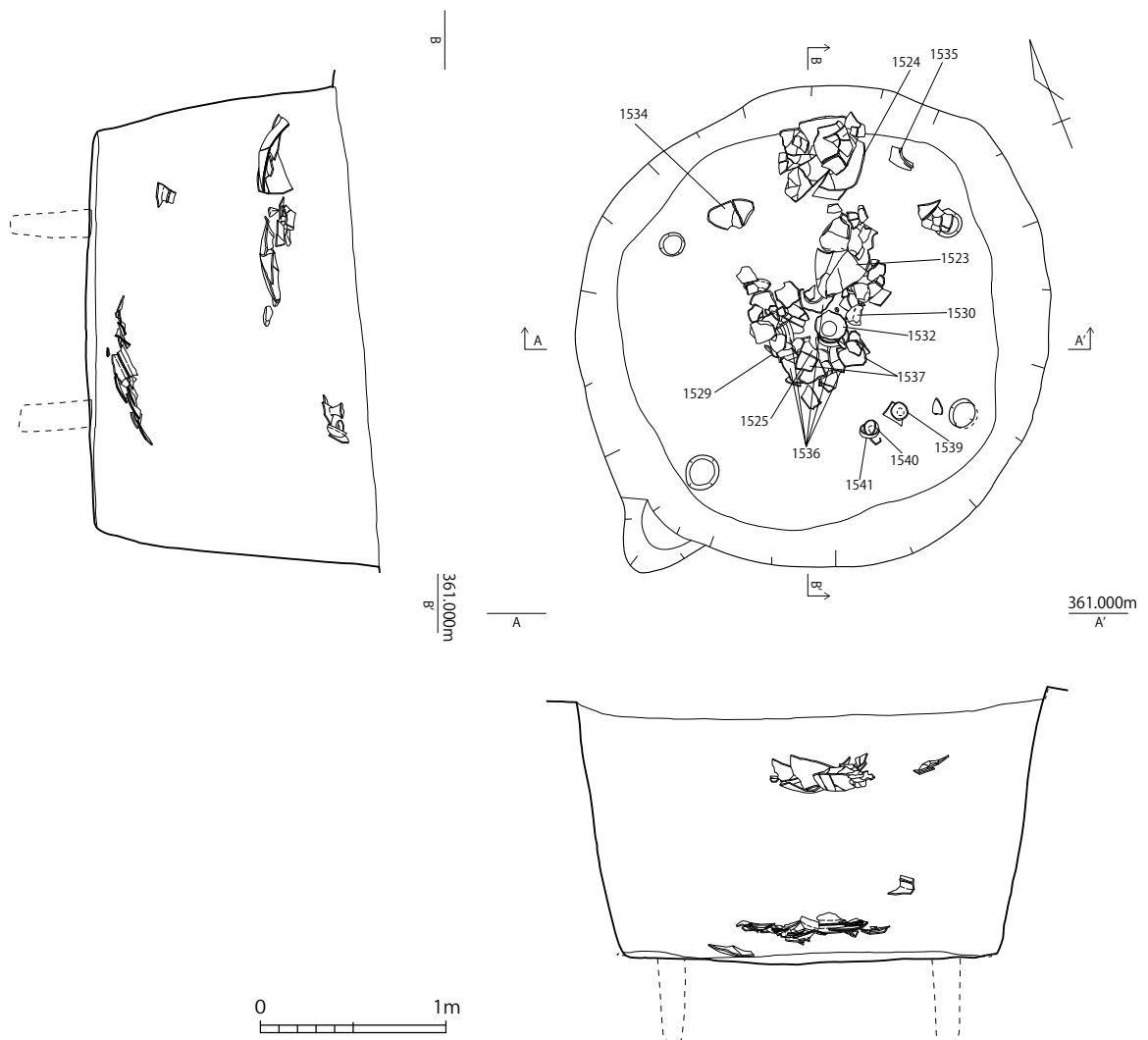
**SH182 (第400・401図)**

SH182は竪穴建物である。SH134を切る。形状は長方形で、規模は長軸6.2m、短軸5.5m、深度は0.3mである。主柱穴は2本で、建物中央には浅く掘り窪めた炉跡がある。炉跡周囲にはU字状土坑があったと考えられるが、SH134の柱穴と混同して掘り下げてしまったため形状を明確に検出できなかった。南隅以外のコーナーには長方形のベット状遺構が、南壁際には土坑がある。

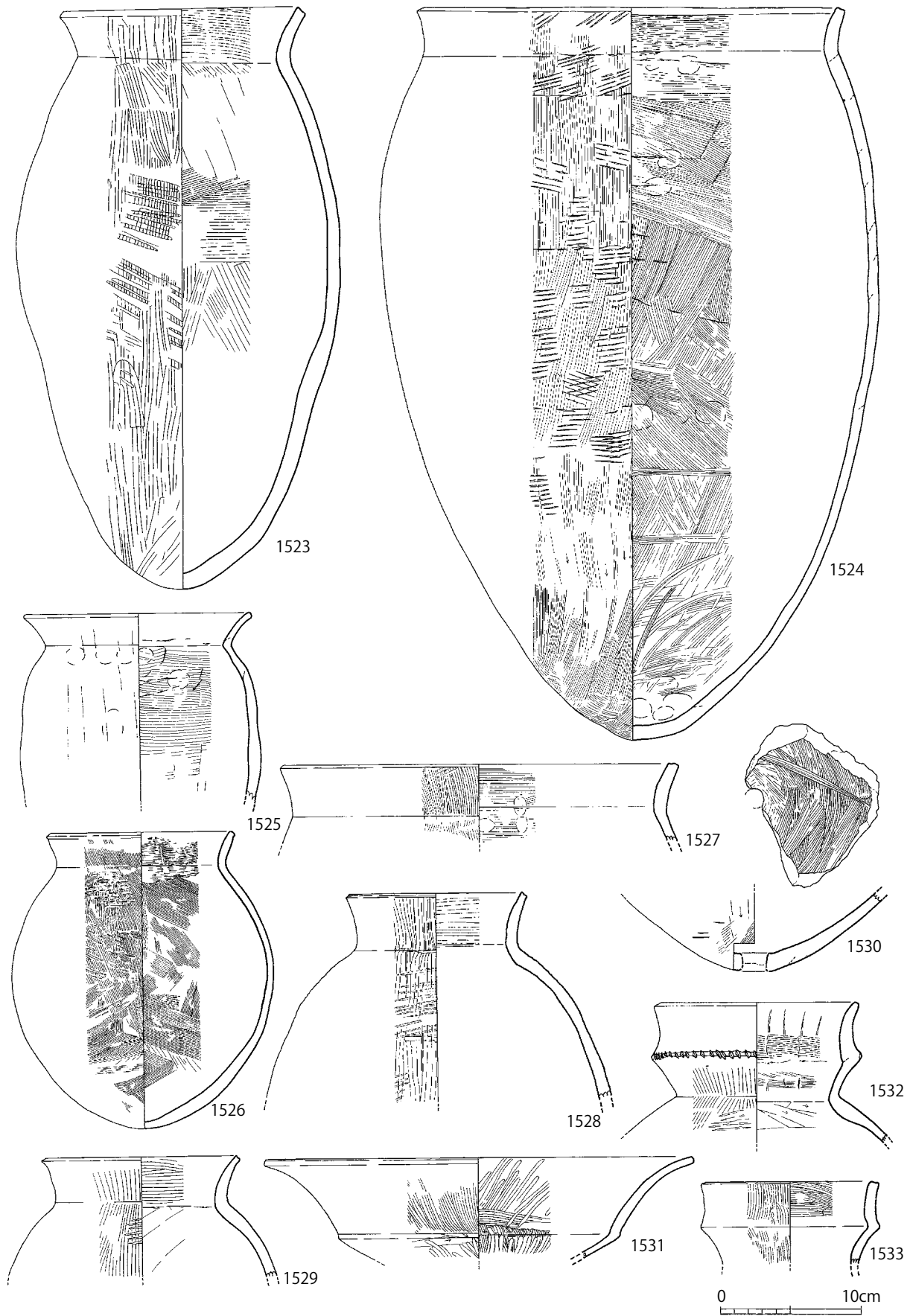
土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。遺物は床面から出土したものはなく、出土量も少ない。埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

**SH183 (第402・403図)**

SH183は竪穴建物である。SH135を切る。形状は長方形で、規模は長軸5.35m、短軸4.9m、深度は0.2mである。主柱穴は4本で、建物中央には浅く掘り窪めた炉跡がある。炉跡の北側でU字形とまでは言えないが掘り込みが

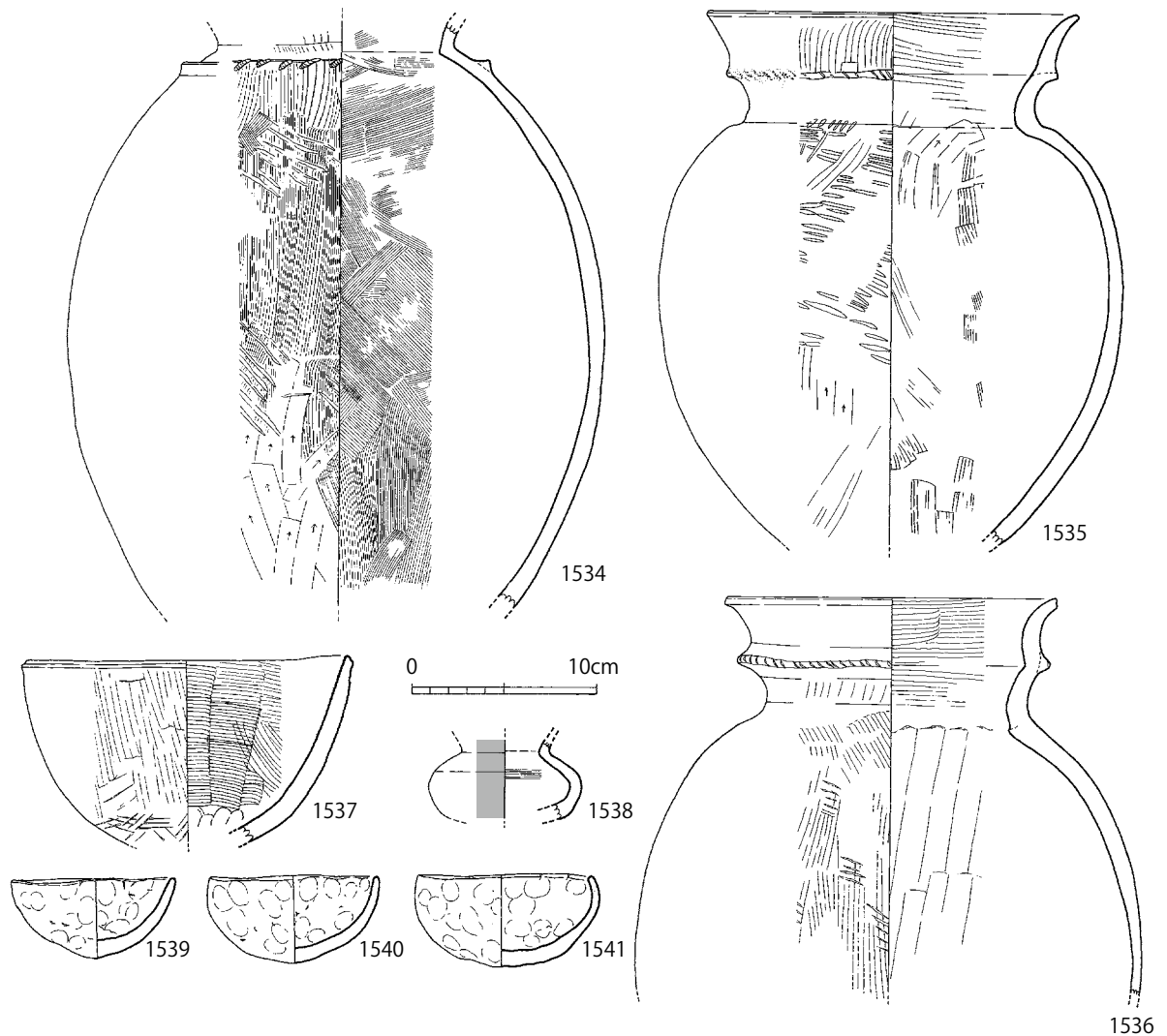


第426図 SK535実測図 (1/40)



第427図 SK535出土遺物実測図①





第428図 SK535出土遺物実測図②

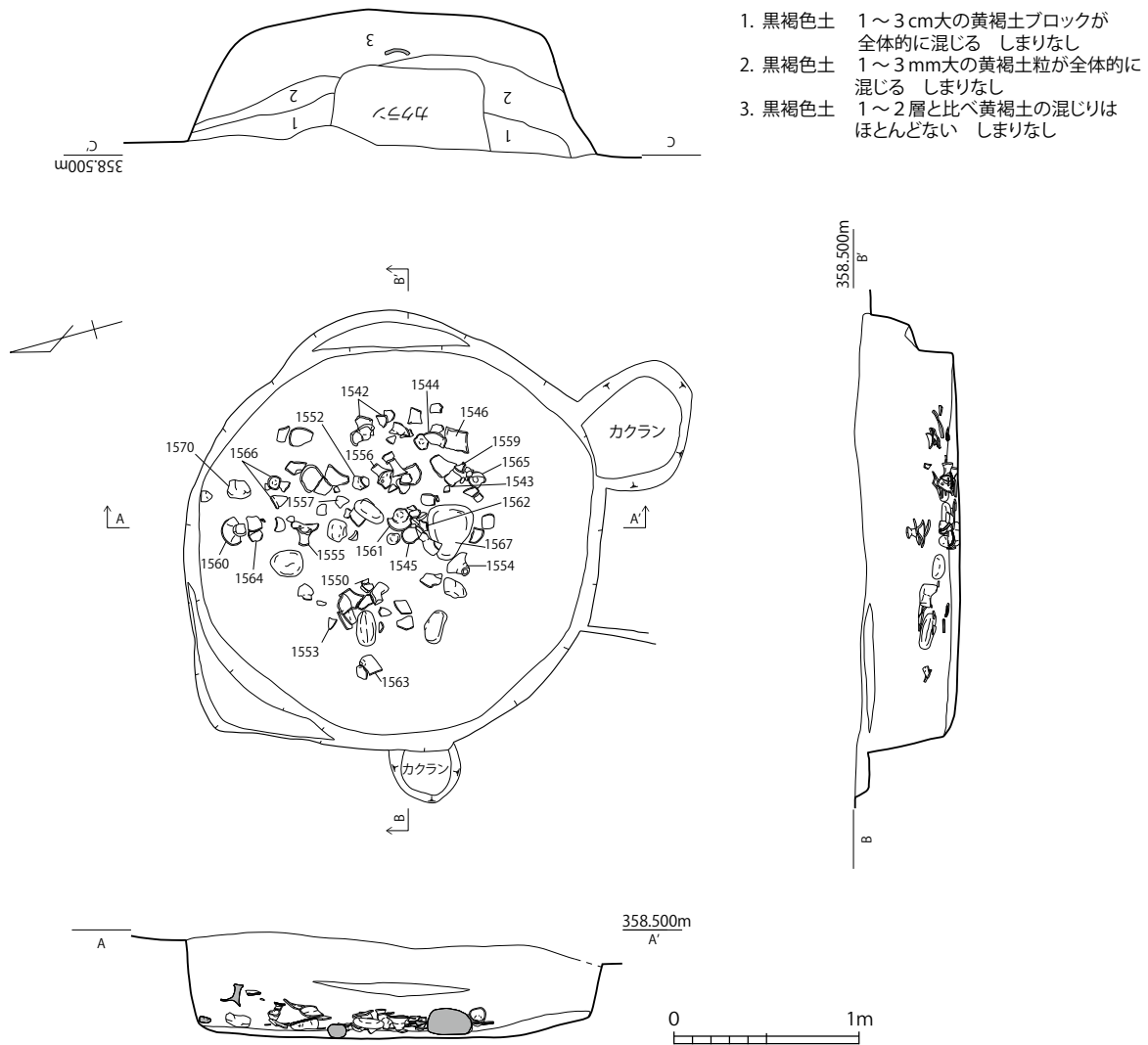
検出できた。北東隅以外のコーナーには黄褐色地山土を貼った長方形のベット状遺構が、南壁際中央には土坑がある。

土層図はないが、埋土はレンズ状に堆積していることから、自然に埋没したものとみられる。遺物は床面から出土したものはなく、出土量も少ないが、南壁土坑の周囲からは比較的残りのよい高坏（1375）や鉄斧（1380）が出土している。これらの遺物は埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

#### SH184（第404・405図）

SH184は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸6.5m、短軸4.6m、深度は0.4mである。南西と南東隅に長方形のベット状遺構を設け、南壁面の中央に土坑がある。支柱穴は長軸上に2本あり、建物中央には浅く掘り窪めた炉跡があり、炉跡の北側周囲でU字状土坑が検出できた。建物中央付近の床面の硬化が顕著であった。

埋土はレンズ状の堆積をしていることから、自然に埋没したとみられる。床面付近で炭化物や焼土が比較的まとまって出土しており、床面から出土した台石（1393）が被熱を受けていることから、廃絶直後に焼却行為が行われた可能性が考えられる。遺物は主に上層部から出土しているがまとまっておらず、埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は出土遺物から弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。



第429図 SK536実測図 (1/40)

**SH185 (第406・407図)**

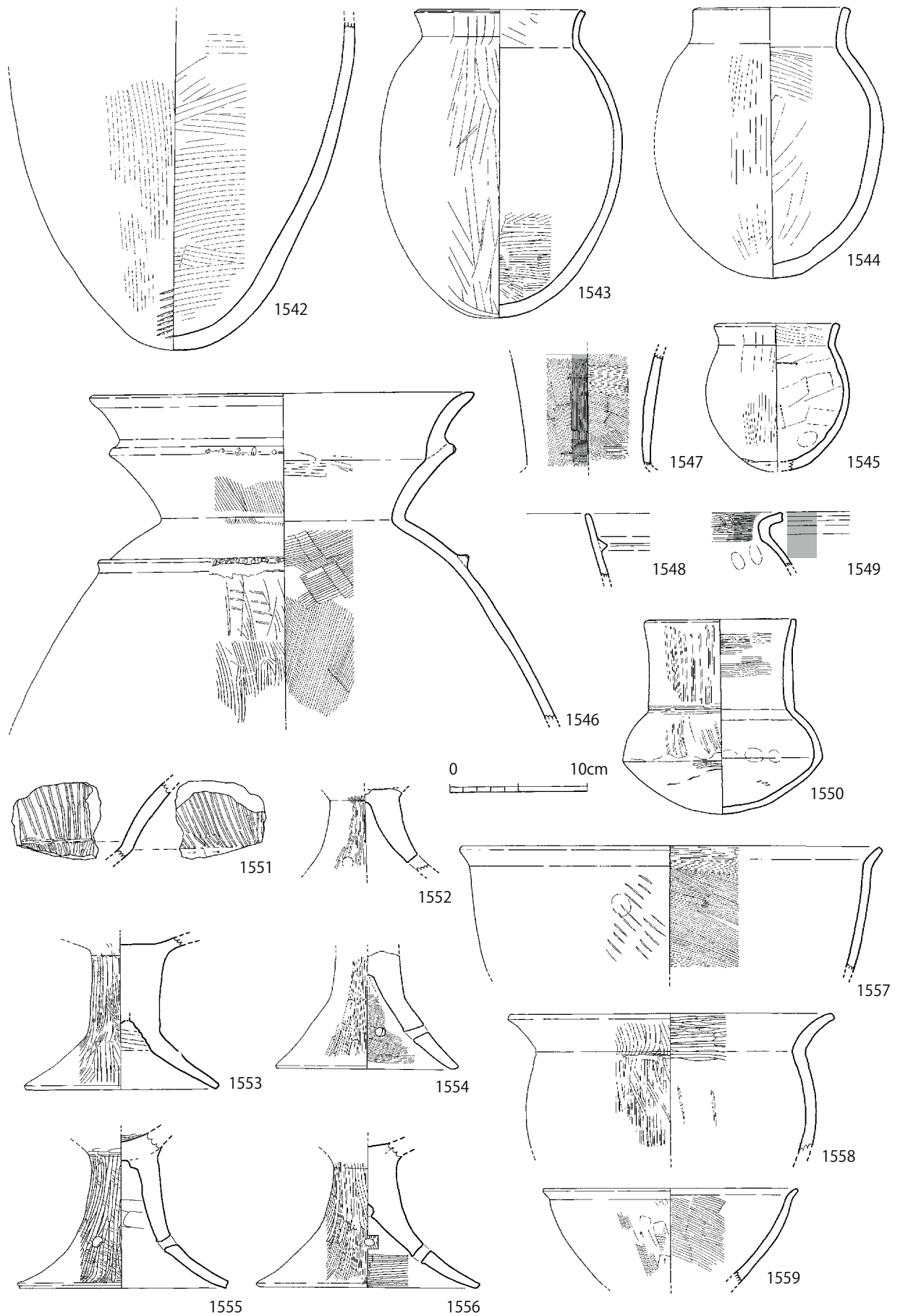
SH185は竪穴建物である。SH138を切る。北側が近現代の溝により削平を受けている。形状は長方形で、規模は長軸4.9m、短軸4.2m、深度は0.2mである。主柱穴は2本で、建物の中央には浅い窪みが被熱した炉跡がある。炉跡の北側にはU字状土坑が検出できた。南壁際からやや離れた位置に土坑がある。

埋土は流入土により自然に埋没したとみられる。床面からやや浮いた状態で焼土と炭が出土しているが、特に焼土は建物南半分に広がって堆積している。遺物は各層全般から出土している。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

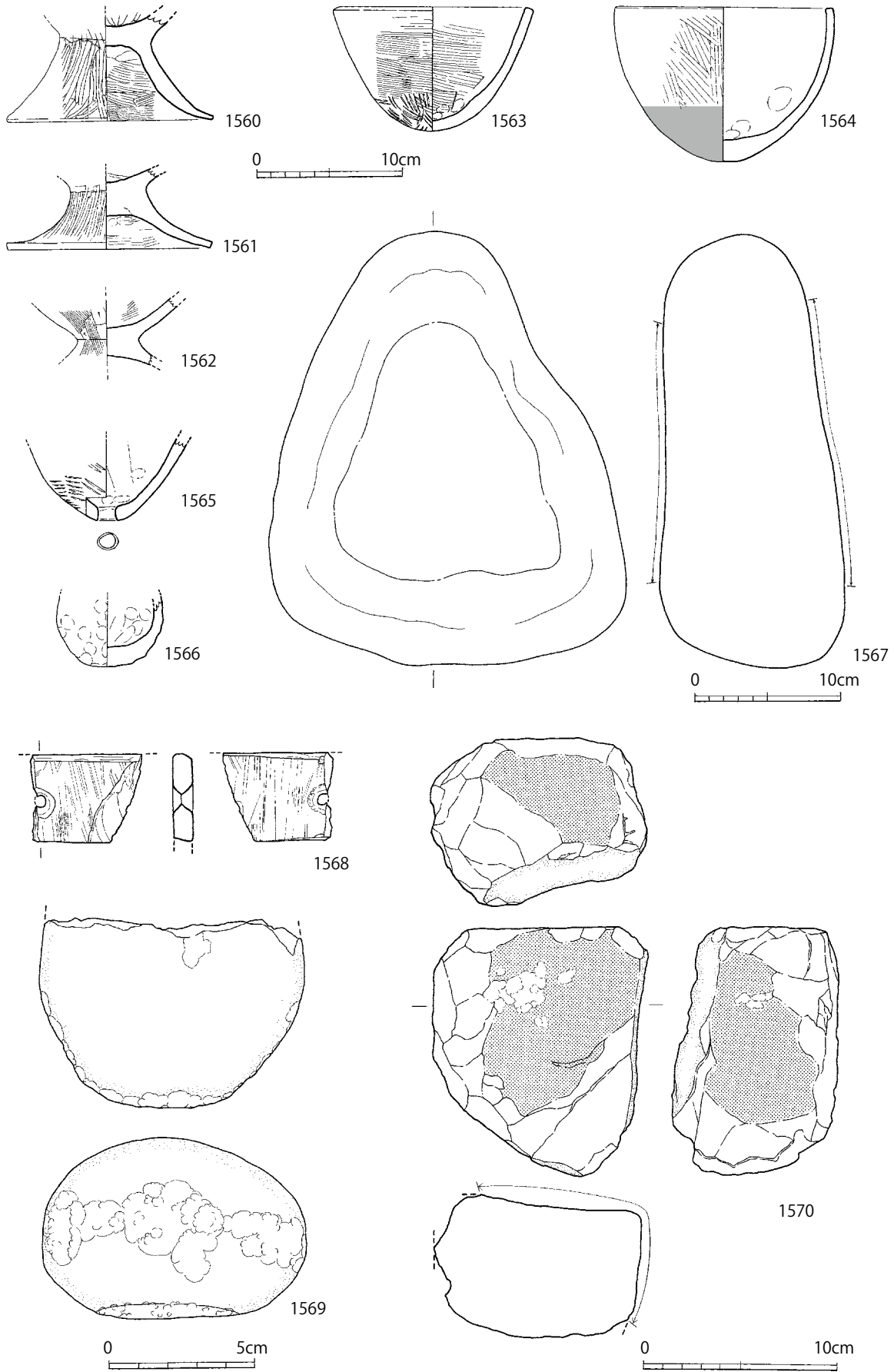
**SH186 (第408・409・410・411図)**

SH186は竪穴建物である。形状は長方形で、規模は長軸6.3m、短軸4.55m、深度は0.2mである。主柱穴は2本で、建物中央には浅い窪みが被熱した炉跡がある。炉跡の北側にはU字状土坑が検出できた。攪乱のため東壁際に土坑があったかは不明である。

埋土は単一層で、自然埋没したとみられる。床面からやや浮いた状態で炭化物・焼土とともに大量の遺物が出土した。遺物は甕・壺・鉢等の土器が大多数を占め、その多くが潰れた状態で出土していることから、埋没過程



第430図 SK536出土遺物実測図①



第431図 SK536出土遺物実測図②

で一括廃棄されたものとみられる。また廃棄は炉跡を境として南北2か所（南土器群・北土器群）にまとまりをみせる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

## (2) 土坑

### SK530・SX15 (第412・413・414図)

SK530は土壙墓と考えられる。東西方向に主軸を持つ土壙で、2段掘りになっている。上段は平面形状が隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.15m、短軸1.0m、深度は0.2mで、下段は平面形状が台形を呈し、規模は長軸1.85m、短軸0.3～0.5m、上段面からの深度は0.2～0.35mである。下段の壁面が直立に立ち上がることや、両小口部分の隅が直角に検出できたことから、頭位を西方向にむけた木蓋土壙墓と考えられる。副葬品と思われる遺物は出土していないが、埋土中からは混じり込みとみられる弥生時代中期後半段階の甕等が出土している。時期は不明としておきたい。

SX15は遺構検出の段階で黒色土中から出土した土器のまとまりである。遺構のプランが確認できていないため実測図はない。SX15の下部でSK530が検出できたため、SK530の供献土器の可能性もあるが、関連性は定かではないため参考として報告する。SX15の出土遺物は弥生時代後期終末段階のものと考えられる。

### SK531 (第415・416・417・418図)

SK531は土坑（貯蔵穴）である。形状は円形で、規模は径1.9m、深度は0.95mである。壁面下部がオーバーハングする。床面は平坦であり、床面上には焼土と炭化物が厚く堆積している。この焼土中からは炭化した種子も出土している。焼土堆積後は、自然に埋没したとみられる。

遺物は土坑の東部分からまとまって出土している。遺物は甕・壺・高坏・鉢などの土器が主体で、総じて大型の破片のものが多く、接合可能なものが多数を占めていることから、焼土堆積後の埋没過程で一括廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

### SK532 (第419・420図)

SK532は土坑である。SH165を切る。形状は隅丸長方形で、規模は長軸3.5m、短軸1.4m、深度は0.8mである。壁面は直立気味に立ち上がるが、北壁のみがオーバーハングしている。床面はおおむね平坦である。

埋土は黒色土の単一層で、自然埋没したとみられる。遺物は甕などの小破片と敲石がわずかに出土する程度であり、埋没過程で混じり込んだものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

### SK533 (第421・422・423図) ※第422図1490はSK453出土遺物

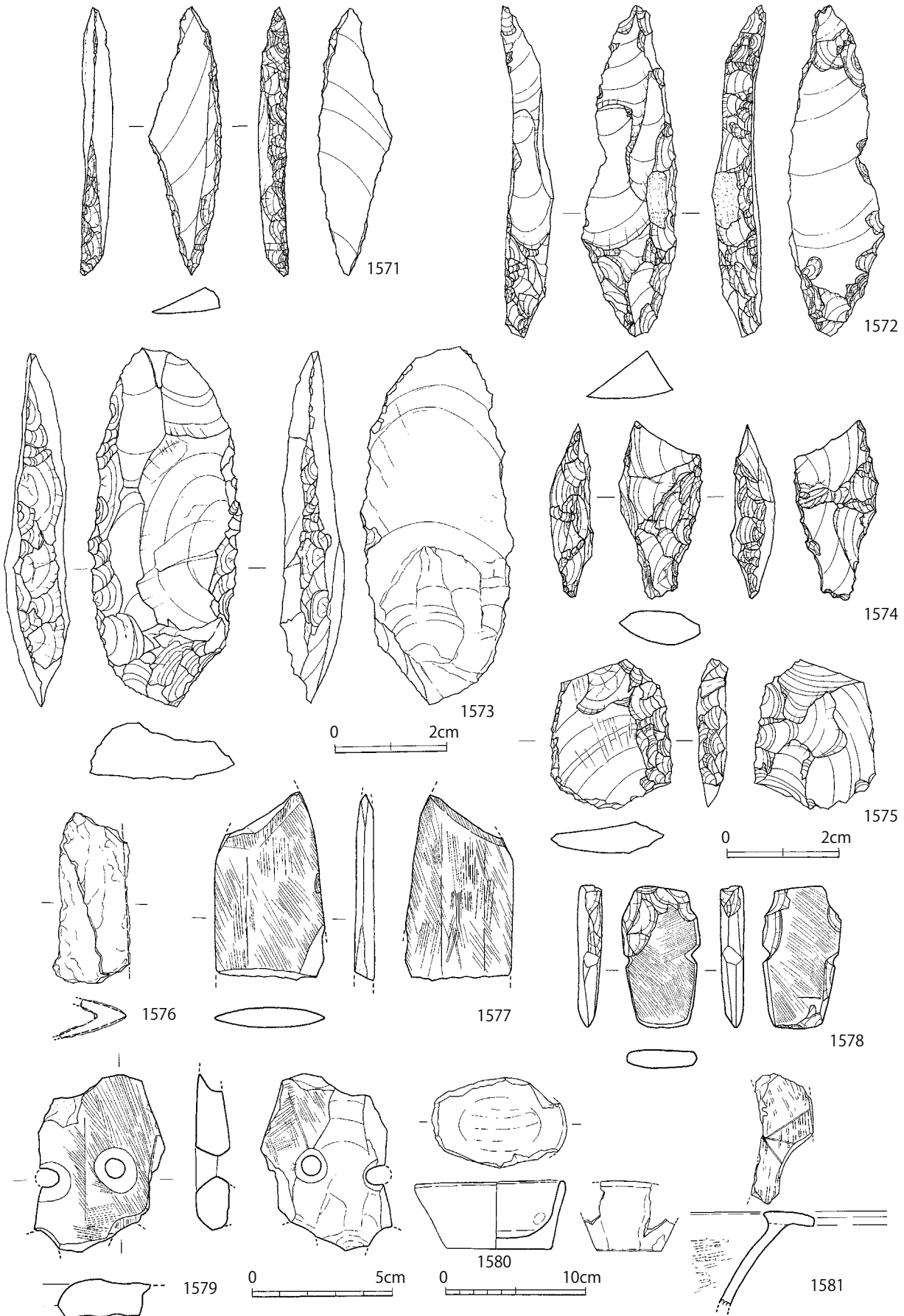
SK533は土坑である。SH125を切る。形状は円形で、床面にも円形の土坑が掘り込まれているため、2段掘りの様相を呈している。規模は上段平面径1.75～1.85m、下段の掘り込み部径は0.8～0.9m、深度は上段床面までが0.8m、下段最深部までの深度が0.95mである。壁面は直立に立ち上がり、壁面際には周溝がめぐっている。

埋土観察により、下段から順に自然埋没したとみられる。遺物は各層全般から出土しているが、特に下段部付近と上段上部からまとまって出土している。埋没過程で廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

### SK534 (第424・425図)

SK534は土坑（貯蔵穴）である。形状は隅丸長方形で、規模は長軸2.2m、短軸1.8m、深度は0.9mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦で、東側に幅の狭いテラスがある。

埋土はレンズ状に堆積していることから流入土により自然埋没したとみられる。遺物は各層全般から出土しているが、破片資料が多くまとまりをもって出土していないことから、埋没過程で混じり込んだものとみられる。



第432図 第16次調査区出土遺物実測図

埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

#### SK535 (第426・427・428図)

SK535は土坑(貯蔵穴)である。SH131を切る。形状は円形で、規模は径2.5m、深度は1.3mである。壁面は直立に立ち上がり、床面は平坦である。床面には4本の柱穴があり、覆屋等の柱の可能性はある。柱の深度は0.4mと深くまで掘り込まれている。

埋土は黒色土と黄褐色地山土混じりの層が相互に堆積していることから、自然堆積と人為的埋め戻しが繰り返されたものとみられる。遺物は特に床面付近の下層と検出面に近い上層からまとまって出土している。出土遺物は上層・下層ともに大型の破片や潰れた状態のものが多いことから、埋没過程で数度にわたり一括廃棄が行われたものとみられる。上層・下層で遺物の時期差は見いだせない。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

#### SK536 (第429・430・431図)

SK536は土坑である。SK460を切る。形状は円形で、規模は径2.2～2.3m、深度は0.5mである。壁面は直立気味に立ち上がり、床面は平坦である。

埋土は黒褐色土がレンズ状に堆積していることから、自然埋没したとみられる。遺物は床面付近から大量の土器片や台石等の石器がまとまって出土していることから、土坑の廃絶にともない一括廃棄されたものとみられる。埋没時期は弥生時代終末～古墳時代初頭段階と考えられる。

### 6. 調査区出土遺物 (第432図)

第16次調査区の検出時や攪乱などから出土した主要な遺物を掲載する。1572・1574はナイフ形石器である。B1区の調査区南端付近の高所から出土している。VI層下部から出土したものと考えられる。1576は鉄製鋤先である。B区P-18検出時に出土しており、同グリッドではSK493が検出されているが帰属は不明である。1578は石剣である。A区G-12検出時に出土しており、同グリッドで検出されたSH139に帰属する可能性が高いと考えられる。1579は石戈である。出土したのは近現代のL字の溝状遺構で、第15次調査区でSH82を切っているが、帰属は不明である。1580は鉢で、A区H-9の検出時に出土している。H-9ではSH132・SH179・SH180・SK444が検出されているが、SH132・SK444のどちらかに帰属する可能性が高いと考えられる。1581は線刻が施された壺で、A区D-7から出土している。このグリッドではSK424～SK427の貯蔵穴が検出されているため、このどれかに帰属する可能性が高いと考えられる。同様の線刻が施された壺が1号周溝墓の周溝内から出土している。

## 7. 第16次調査のまとめ

第16次調査区では旧石器時代から近現代までの幅広い時期の遺物・遺構を検出した。以下、旧石器時代から古墳時代の主要な遺構・遺物についての要点をあげ、第16次調査区のまとめとしたい。

### (1) 旧石器時代・縄文時代

旧石器時代・縄文時代では、第1次調査で検出した石器ブロックの続きをB2区北西部で検出した。出土した層位も同じであり、第1次調査区から続く石器ブロックの範囲を絞り込むことができたと言える。B1区においては石器ブロックを確認できなかったが、それは弥生時代の竪穴建物上部が削平を受けている事からもわかるように、後世の改変を大きく受けていることも影響していると思われる。ただしB1区においては、竪穴建物などの遺構からや検出時にナイフ形石器（第73・432図）が出土しており、これらはB2区で検出したものよりも下層の、VI層下層あたりから出土したものと考えられる。

また第16次調査区においては、厳密な時期比定はできないが、V層から掘り込まれている縄文時代早期以前の陥穴と考えられる遺構（SX11）が検出できたことも注目できる。

### (2) 弥生時代

弥生時代では、竪穴建物・土坑・貯蔵穴・陥穴・円形周溝遺構・小児用甕棺墓等の遺構を検出した。遺構はほぼ弥生時代中期後半段階のものであるが、陥穴についてはB2区の南方向に開析する谷筋に沿って列状に点在していることから、これらは一連の関連性をもった陥穴群と考えられる。そのうちSK501・SK506・SK518などの埋土中から出土したわずかな土器片から弥生時代中期後半段階に埋没した遺構と判断した。遺物が出土していない陥穴については埋没時期を明記していないが、これらについても周辺の陥穴との関連性を考慮して、おおむね同時期のものと推測している。またこれら以外のSK435・SK445については、集落内の竪穴建物に近接した位置にあることや埋土の土質などから、弥生時代中期後半段階よりも以前の陥穴と判断している。

竪穴建物・土坑・貯蔵穴は第16次調査区の全面に展開する。第16次調査区は谷筋・傾斜など地形の起伏が大きい調査区であるが、遺構は傾斜面においても検出されるなど、集落は四日市台地の東側を中心とした広範囲に展開する様相が確認できた。また遺構の多くが切り合うことなく一定間隔をもって検出できていることや、出土土器に大きな型式差を見いだせないことも、弥生時代の集落の存続期間が短期的であったことを示している。

竪穴建物等の遺構から出土する遺物は土器・石器が主体を占め、金属製品は極めて少ない。土器については筑後河流域の北部九州・遠賀川以東の東北部九州の土器を主体として、肥後地域の黒髪式もわずかに出土するなど、玖珠地域周辺からの多様な影響・交流がうかがえる。石器については台石・敲石がほとんどの竪穴建物から出土するなど、稲作だけではない縄文時代から続く植物質食料の利用の一端をうかがうことができる。そのなかでもSH139は竪穴建物の覆土資料であるため厳密な一括資料とはいえないものの、一遺構内から出土する石器の種類としてはかなりまとまった資料といえる。金属製品についてはSH140から出土した青銅製品が注目できる。本文でも触れているように中期後半段階のSH140にともなうかの判断が難しいが、少なくとも近現代の新しい遺物ではないと思われる。器種は弧を描くようにあるため当初は銅鏡片と考えていたが、高橋徹氏・小柳和宏氏から器厚が薄すぎるため銅鏡とは考え難いとの指摘を頂いたため不明青銅製品としておきたい。

遺構からは多量の遺物が出土したが、そのなかでも鹿を描いた高坏と筒形器台は注目される。線刻絵画土器は近接する第15次調査区においても鹿や矢羽根状の模様を描いた壺が出土しており、下村智氏・井大樹氏が検討している（註1）が、第16次調査区の鹿の表現・線刻工法は第15次調査区のものとは異なっている。こうした線刻絵画土器は祭祀に用いられた土器とみられるが、四日市遺跡では遺構密度の高い集落中心部ではなく、遺構が密から疎となっていく集落の縁部付近にあたる場所から出土している。

筒形器台は陥没跡と推測するSX12から出土した。四日市遺跡ではこれまでも鏝から口縁部までが部分的に出土しているが、全形が一遺構からまとめて出土したのは初めてである。主に背振山地をとりまく周辺部に分布し墳墓や集落祭祀に用いられる筒形器台が、筑後川上流域の四日市遺跡にまで及んでいることは、玖珠地域が筑後川を介した北部九州を中心とした文化圏の末端に位置づけられることをよく示していると共に、SX12の特



殊性を表しているといえる。

また筑後川を介した影響は、日常的に使用された甕や小児用甕棺に用いられた甕の多くで、砂粒を多く含んだ粘土を内面底部にナデ付ける特徴からも見てとれる。これは田中裕介氏により「底部A」と指摘された特徴（註2）であり、土器製作の面においても日田地域との関連性をうかがうことができる点も付記しておきたい。

### （3）古墳時代（弥生時代終末～古墳時代初頭）

弥生時代終末から古墳時代初頭に位置づけられる遺構には、竪穴建物と土坑がある。四日市遺跡においてこの時期に該当する竪穴建物は総計32基検出しているが、そのうち24基が第16次調査区で検出していることから、第16次調査区がこの時期の集落の中心部であったことは明らかである。遺構が展開するのは、四日市台地の縁辺部からやや離れた内寄りの、地形の傾斜が緩やかな場所に集中しており、弥生時代中期後半段階の集落が傾斜面にまで及ぶのとは対照的な様相を示す。第16次調査区の北西部が大きく土取りにより削平を受けているため、竪穴建物などの遺構が更に展開した可能性もあるが、おおむね集落の全容を調査できたと考えている。集落の規模は東西約150m、南北約100mにおよぶ。集落の周囲には遺構が存在しない空地が広がっていたにもかかわらず、竪穴建物に切り合い関係が認められることから、集住する上で特にこの場所が選地されたとみられる。

竪穴建物・土坑から出土する遺物は、土器・石器が中心で、鉄器がわずかにともなう。土器はA系統（久住氏分類（註3）の在来系土器群）が主体を占めており、C・D・E系統（久住氏・檀氏分類（註4）の庄内式系・布留式系・山陰系土器群）の受容はほとんどみられない。B系統ないしは折衷とみられるものは高坏を中心に数点あるが主体的ではない。器種は厳密な個体数を算出していないが、甕・鉢が比較的多く出土していたように見受けられた。甕をみると、外面は平行タタキ後ハケ調整、内面にはハケ調整・ナデ調整を施しており、底部の形状はやや尖底気味の丸底に近い形状で、胴部最大径は中位にあるものが大多数である。しかし底部が丸みを持つレンズ状に近い形状を呈するものや、胴部の最大径が中位よりもやや下位にある下ぶくれに近い形状を呈するものも少数ながら出土していることから、久住ⅡA期を中心としたⅠB～ⅡB期、坂本編年（註5）弥生時代後期終末～古墳時代初頭、高橋編年（註6）弥生Ⅵ期から古墳Ⅰ期、渡邊編年（註7）5b～Ⅰb期の幅のなかで収まるものとみられる。壺については豊後地域に分布する安国寺式土器の影響を受けたとみられる櫛描波状文を施したものが多く出土しており影響がうかがえるが、坂本嘉弘氏が指摘するように複合口縁部の接合部に列点文を施す（註8）など、玖珠地域独自の様相も同時に認められる。

器種組成の豊かさや土器群廃棄一括状況がうかがえる資料として、竪穴建物ではSH168（中でも第359図で接合関係を示した資料）・SH180・SH186を、土坑ではSK531・SK533下層・SK535上層・SK535下層・SK536をあげておきたい。またこれに準じる一括性のある資料としてSH170南西隅出土（1164・1167・1172・1184）、SH171北東部出土（1194・1201・1202）、SH172土坑1（1219・1223）、SH174南西部廃棄（1246・1249・1250・1253・1255・1258）、SH177西部（1285・1311）なども参考となる。

第16次調査区で検出した竪穴建物の特徴としては、①平面形状が方形・長方形である、②南壁際中央に1基の土坑がある、③中心に炉跡がある、④炉跡の周囲でU字状土坑が検出できる、などがあげられる。④のU字状土坑については、玖珠地域における同時期の集落と考えられる中西遺跡9号竪穴等で類似するような掘り込みが確認できる。そこでは用途について湿気対策の可能性をあげている（註9）が、第16次調査区でもその用途を判断できるような知見を得られなかったため、今後の検討課題としたい。また⑤火災跡ではないが竪穴建物の埋没過程において炭・焼土がまとまって出土する事例が多くみられた。本文では焼却行為としたが、部材を建物内で焼却したもの以外にも、炭・焼土をまとめて廃棄したものも含まれる可能性がある。いずれにしても竪穴建物の廃絶にともない行われたとみられることから、特徴の一つとしてあげておきたい。

竪穴建物の規模は、床面積がおおむね10㎡前後・20㎡前後・30㎡前後・40㎡以上に分けられる。20㎡・30㎡が大部分を占め、40㎡以上の大型建物は極めて少ない。なかでもSH168は複数の張り出し部を含めた面積が53.7㎡、張り出しをとみなさないSH170が52.8㎡と突出した規模で、日田市小迫辻原遺跡で検出されている竪穴建物と比較すると小さいものの、玖珠地域で確認されている竪穴建物のなかでは最大クラスの規模である。大型竪穴建物

の周囲で区画溝などは検出されていない。

竪穴建物の軸方向に着目すると、①E-40～50°-N (SH165・SH175・SH176・SH178・SH180・SH186)、②W-20～30°-N (SH163・SH167・SH169・SH171・SH173・SH177・SH179・SH182・SH183)、③E-5～10°-N (SH174) ④E-15～25°-N (SH164・SH168・SH181)、⑤W-2～5°-Nの真北に近い (SH166・SH170・SH172・SH184) の5群にまとまりをみせる。ちなみに第16次調査区以外で検出された竪穴建物についても、SH34・SH80・SH81・SH82・SH109は②、SH3・SH17・SH35は③のように、いずれかの群にまとまるようである。群のなかでは、例えば①の軸の竪穴建物群は地形の傾斜に長軸を向けるという共通した特徴がみられるなど、集落内において軸が何らかのまとまりを反映していたとみられる。5群の中には切り合い関係があり、①→②→③、①→④の新古関係が認められる。軸を同じくする竪穴建物群が必ずしも共時性があるとは言いきれないが、在来系土器が中心で型式の大きな差異が認めにくいなど、出土遺物から竪穴建物の詳細な時期差や変遷を見出しづらい状況においては、集落の変遷を考える上で重要な情報となるかもしれない。

玖珠地域における布留系などの外来系土器の受容期について、渡邊隆行氏は渡邊I b～I c期(久住II B～II C期)にあたりと指摘しているが、四日市遺跡の集落はその受容期のまさに直前の段階に位置づけられる。さて四日市遺跡から北東約800m離れた近接した位置にある名草台遺跡では限定的であるが竪穴建物・土坑等の遺構が発掘調査されており、その遺構から在地の胎土とは異なる搬入品とみられる布留式系甕が出土(註10)している。この名草台遺跡の台地から森川へと至る場所に位置する治別当遺跡でも布留式系甕などの遺物とともに水田にとまると想定される導水施設が出土しており、これらは久住II B～II C期とみられる。また外来系土器の受容後、森川を挟んだ名草台遺跡の対岸の台地上には、外来系の竪穴式石郭を主体部とする瀬戸古墳が築造されるなど、玖珠川右岸の森川流域周辺は古墳時代前期の玖珠地域における拠点集落が存在した有力な候補地と考えられる。外来要素の伝播は玖珠地域の社会構造に大きな影響と変化をもたらしたと推測できるが、こうした変化の一環で集落の再編が行われたことが、四日市遺跡の集落が継続することなく終焉した要因とも考えられる。

註1 下村智 2017「シカの絵からみた弥生人の精神世界と儀礼」『埋文講演会5 話題の資料展を語る』大分県立埋蔵文化財センター

井大樹 2017「弥生時代の線刻絵画土器～二頭の鹿が意味するもの～」『埋文講演会5 話題の資料展を語る』大分県立埋蔵文化財センター

註2 田中裕介 1999『小迫辻原遺跡I A・B・C・D区編』大分県教育委員会

註3 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX』庄内式土器研究会 他

註4 壇佳克 2011「土師器の編年①九州」『古墳時代の考古学 第1巻古墳時代史の枠組み』同成社

註5 坂本嘉弘 1999「第1節玖珠盆地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年」『玖珠町文化財調査報告書第9集 陣ヶ台遺跡』玖珠町教育委員会

註6 高橋徹 2001「大分の弥生・古墳時代土師器編年」『大分県立歴史博物館研究紀要2』大分県立歴史博物館

註7 渡邊隆行 2017「筑後川上流域(豊後西部・日田玖珠地域)の古式土師器の状況」『第19回九州前方後円墳研究会 九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会

渡邊隆行 2018「豊後西部の動態」『第21回九州前方後円墳研究会 集落と古墳の動態I 弥生時代終末期～古墳時代前期』九州前方後円墳研究会

註8 註5文献

註9 宮内克己 1987「第2章中西遺跡」『小田遺跡群I』玖珠町教育委員会

註10 野口典良 2007『玖珠町埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 名草台遺跡』玖珠町教育委員会  
出土遺物については野口典良氏のご協力により実見の機会を得ることができた。

## 第5章 自然科学的分析

### 1. 四日市遺跡6号周溝墓出土人骨について

田淵朱莉<sup>1</sup>・米元史織<sup>2</sup>・足達悠紀<sup>3</sup>・舟橋京子<sup>4</sup>

1：九州大学文学部人文学科

2：九州大学総合研究博物館

3：九州大学大学院地球社会統合科学府

4：九州大学大学院比較社会文化研究院

#### 1. はじめに

大分県玖珠郡玖珠町四日市遺跡において、古墳時代の周溝墓が検出され、石棺内より人骨が複数出土した。調査にあたった大分県教育委員会から九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座に調査依頼があり、講座員（当時）の舟橋京子と石川健が取り上げを行った。人骨はその後本学に搬入され、比較社会文化研究院および九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに分析の依頼があったため、以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、栃原の歯牙の咬耗度（栃原,1957）、頭蓋骨の縫合（Buikstra and Ubelaker,1994）を用いた。性別判定については、頭蓋はBuikstra and Ubelaker（1994）を基準に、眼窩上隆起・乳様突起・外後頭隆起で性別判定を行った。計測はMartin-Saller（1957）に従った。

なお、人骨は現在、アジア埋蔵文化財研究センター・九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

#### 2. 人骨出土状況

6号周溝墓（『四日市遺跡3』）から出土した人骨は遺存状態がよくないため、すべての部位がどの個体に帰属するかを確定することは難しいが、頭蓋・遊離歯および下肢の出土状況から南北にそれぞれ頭をおいた対置埋葬であったと考えられる。以下南頭位の個体を1号（年齢：成年・性別：女性）、北頭位の個体を2号（年齢：10代の終わり～成年前半・性別：不明）として人骨の出土状況を詳述する。

まずは頭位を南側に向けた1号人骨について詳述する。石棺内の南小口側中央付近に設えられた粘土枕の北側から遊離歯が出土している。これらの遊離歯よりもさらに北側から頭蓋骨が出土している。頭蓋骨は左側頭骨を下に、顔面を北側に向けて出土している。その北側から同人骨の右側頭骨が出土している。頭蓋と粘土枕との距離がやや離れていることから、本来は粘土枕に頭を置いて埋葬されたものの、その後の土砂の流入によって頭蓋の位置が二次的に動いたと考えられる。

1号人骨の頭骨の北西より左右寛骨片が出土する。また、石棺中央部よりやや南側、1号人骨の頭蓋骨の北側より大腿骨が二体分出土している。以下に記載する2号人骨の大腿骨と近接するが、2号人骨の右大腿骨より上位のレベルから1号人骨の左右大腿骨が重なった状態で出土している。さらにその北側から近位を南西にとり、外側を下向きにした脛骨と、その周辺に腓骨片が出土する。これら1号人骨の寛骨、大腿骨、脛骨、腓骨は、近位を南側にそろえた状態であるがいずれも相対的な位置関係を保っていない。またこの脛骨の直下より棺材と思われる石片が出土している。

次に、頭位を北側にして埋葬されたと考えられる2号人骨について詳述する。石棺の北小口の東壁よりに設けられた粘土枕直上およびその周辺から、上下顎の遊離歯および右下顎が広範囲に散らばって出土している。石棺北東部の壁に割れ目が確認されることから、そこから流入した土砂により二次的に動いた結果と考えられる。出土した歯牙はいずれも歯列を保っていない。上述の1号人骨の大腿骨付近の下位のレベルから2号人骨の左右大腿骨が出土している。東側より近位を北にした左大腿骨が、その西側から右大腿骨が近位を北、正面を上に向け

て出土している。これらの大腿骨のやや北側から右寛骨が、寛骨臼を下に、腸骨翼を北にして出土しており、大腿骨と寛骨の向きおよび位置関係から、これらは頭位を北にして埋葬された2号人骨に帰属し、頭蓋及び下肢は相対的な位置関係を保っている。

埋葬順序に関しては、上述の通り寛骨と大腿骨がほぼ原位置に近い状態で出土している2号人骨が追葬者であり、1号人骨の遺体を石棺西側に片付けた後、頭位を北にして2号人骨を追葬したと推定される。石棺中央部で2号人骨の右大腿骨の上に1号人骨の大腿骨が重なって出土している現象に関しては、1号人骨の大腿骨とその下の2号人骨の右大腿骨の間に3cm、1号人骨の左右大腿骨の間に5cm程度の流入土が確認されることから、2号人骨追葬後、石棺西側壁の割れ目から流入した土砂によって西側に片付けられていた1号人骨が東側に二次的に動いた結果であると考えられる。

埋葬間隔については、1号寛骨及び下肢骨が南を頭位として埋葬した際の相対的な位置関係のある程度保っているようにも見られるため、まだ白骨化が完全に進んでいない状態で西側に片付けられた可能性もあるが、流入土による攪乱のため、正確な間隔については不明である。

南側の粘土枕東側からは1号人骨に伴う振文鏡が出土しており、頭部右側に副葬されていたと考えられる。また、2号人骨の頭部と1号人骨の脚部の間にあたる北側の粘土枕西側からは、鉄鏃が出土している。

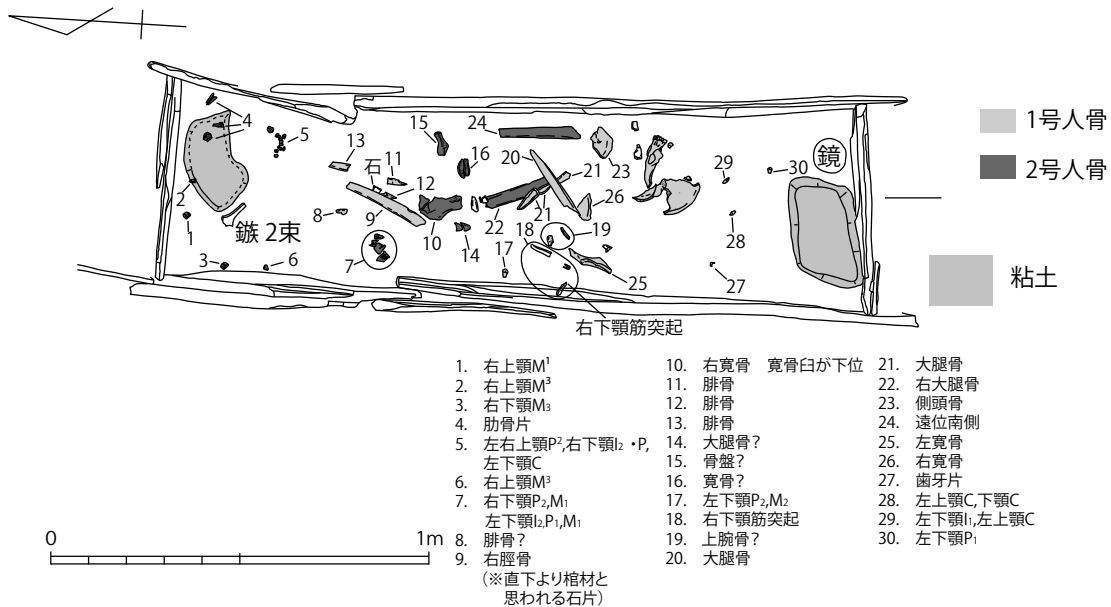


図1 四日市遺跡6号周溝墓出土人骨

### 3. 人骨所見

#### 1号人骨

##### 【保存状態】

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋は頭頂骨の一部及び左右側頭骨及び顔面が遺存している。ラムダ縫合と矢状縫合は内板、外板ともに開いている。遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	×	M <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	P <sup>1</sup>	C	I <sup>2</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>1</sup>	I <sup>2</sup>	C	P <sup>1</sup>	P <sup>2</sup>	M <sup>1</sup>	M <sup>2</sup>	M <sup>3</sup>
/	/	/	/	/	/	/	/	I <sub>1</sub>	/	/	P <sub>1</sub>	/	/	/	/
								.			.				

(○) 歯槽開放 × 歯槽閉鎖 / 欠損 △ 歯根のみ ・ 遊離歯 ( ) 未萌出

歯牙咬耗度は、柝原（1957）の  $1a^{\circ} - 2a^{\circ}$  である。

下肢骨は左右大腿骨片及び右脛骨、左右寛骨片が遺存している。

【年齢と性別】

全体的な歯牙の咬耗はあまり進んでいないが、上顎の中切歯に象牙質が線状に露出していることや頭骨のラムダ縫合及び矢状縫合が内板外板ともに開いていることから、年齢は成年と考えられる。眼窩上隆起が発達していないこと、乳様突起が未発達であることから、女性である可能性が高い。

【形質】

頭蓋計測を行った結果、上顔幅は100mm、上顔高は61mmと低い。両眼窩幅は91mmであり、左眼窩幅は39mm、左眼窩高は32mmであることから眼窩示数は82.05と中眼窩である。また、鼻幅は27mm、鼻高は46mmであり、鼻示数は58.70と過広鼻である。

【特記事項】

左上顎の第1および第2小白歯にC4、第2大白歯にC3程度の齲歯が確認された。

2号人骨

【保存状態】

人骨の保存状態は良好ではなく、頭蓋は下顎の一部が残るのみである。遊離歯を含めた残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\cdot$ $M^3$ / $M^1$ $P^2$ / / / / / $M_3$ / $M_1$ $P_2$ $P_1$ C $I_2$ $I_1$ / / / / / $\cdot$	$\cdot$ $P^2$ / / / $M^3$ $P_2$ / / / / / $\cdot$
--	--

歯牙咬耗度は、柝原（1957）の  $0^{\circ} - 1c^{\circ}$  ある。また、第3大白歯に関しては咬耗の状態が不明瞭であるため、未萌出の可能性がある。

下肢骨は左右大腿骨が、その他は左右寛骨片が遺存している。

【年齢と性別】

年齢は歯牙咬耗度から10代後半～成年の前半と推定される。性別に関しては骨の残存状態が悪いため、不明である。

4. 形質的特徴

頭蓋骨が残る個体は1号のみであるが、1号人骨においても保存状態が良好ではないため、脳頭蓋計測に関しては計測不可であり、顔面頭蓋に関しても計測可能な部分は限られている。本来形質的特徴の比較分析は、集団を代表させるに足る個体数を用いた平均値によって行うべきである。しかし、当該地域の資料は少なく、その形質的特徴を明らかにするために、この個体を現時点でどのように位置づけることができるかを検討する意味はあると考える。したがって、以下本遺跡出土人骨と比較群の平均値（表1）との比較を行っていく。

まず、上顔高は61mmで、肥後古墳人や西北九州弥生人に近く、比較群中で最も値が小さい。上顔幅は100mm、両眼窩幅は91mmであり、顔幅が狭い。左眼窩幅は39mm、眼窩高は32mmで眼窩示数は82.05と中眼窩である。眼窩示数は比較群中では土井ヶ浜弥生人に類似する。前眼窩間幅は17mmである。鼻根最小幅は5mm、鼻示数は58.70と過広鼻であり、これは鼻高が46mmと、比較群中で比較的値が小さいのに対して、鼻幅が27mmと、かなり大きいことに起因すると考えられる。また、この鼻示数は他地域、他時代の人骨と比べても突出している。以上の点から、1号の顔面のサイズは比較群中では高さ・幅ともに小さい傾向にあり、この点では豊後古墳人に類似するが、かなり鼻が広い点が特徴であるといえる。

そこで、この特徴を比較群とともに総合的にみるために、頭蓋計測値5項目を用いて主成分分析を行った。分

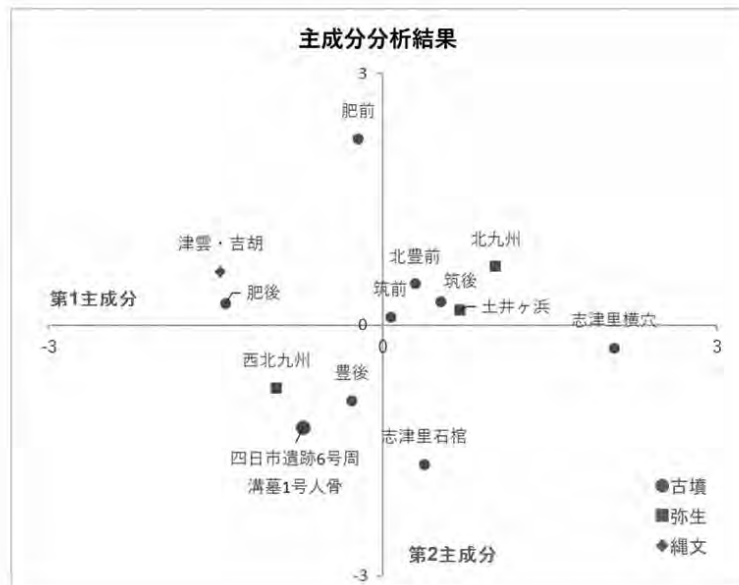


図2 主成分分析結果

析に際してバリマックス法による回転を行っている。第1主成分は固有値2.35、寄与率47.15%、第2主成分は固有値1.15、寄与率23.16%である。第1主成分と第2主成分の固有ベクトルを表2に示す。第一主成分は鼻幅と負の相関を示し、上顔高、眼窩高、鼻高とは正の相関を示す。このことは第1主成分ではプラスであるほど顔が高く、マイナスであるほど鼻の幅が大きいことを示している。第2主成分は鼻幅と鼻高に負の相関を示し、眼窩幅とは正の相関を示す。このことはマイナスであるほど鼻が大きいことを示し、顔面部の眼窩と鼻のシェイプの違いを示している。

第1主成分を横軸に、第2主成分を縦軸にとって、各集団の主成分得点を二次元展開したものが図2である。四日市遺跡6号周溝墓1号人骨は第3象限で豊後古墳人と西北九州弥生人に近接して位置している。この結果を見ると、四日市遺跡6号周溝墓1号人骨は、低顔・低眼窩・広鼻という特徴を持つ典型的豊後古墳人 (Doi and Tanaka, 1987) に類似し、その点で今回の比較集団中の豊後古墳人や西北九州弥生人に類似するが、鼻の大きさが突出しており、眼窩もやや高い。また、玖珠町北部に位置する志津里遺跡出土人骨 (岩橋など, 2014) と比較すると、志津里石棺出土人骨とは比較的近い位置にプロットされるが、志津里横穴墓出土人骨は離れた位置にプロットされている。これは上記のような特徴を持つ四日市遺跡6号周溝墓1号人骨及び豊後古墳人と比較して、志津里横穴墓出土人骨が高顔・高眼窩であるという特徴に起因すると考えられる。豊後地域において玖珠地域が若干異なる地域性を持つことは既に指摘されている (田中・大森, 1999) が、志津里遺跡出土人骨と四日市遺跡出土人骨間の形質差にあるように玖珠地域内での形質の多様性が明らかになった。この要因に関しては墓制など考古学的な情報との関連をより詳細に検討していく必要がある。四日市遺跡6号周溝墓1号人骨は低顔・広鼻という典型的豊後古墳人の在地集団と類似する形質を示す一方、眼窩がやや高いため田中 (1999) でも指摘されたように、高顔な形質を有する集団との混血過程の中にある可能性もあるが、資料数が少ないため、可能性を提示するに留める。また、Doi and Tanaka (1987) で指摘された傾向は男性の形質的地域性であり、本稿で検討した女性の傾向については検討されていない部分が多い。これらの点については今後の資料の増加を待って検討する必要がある。

## 5. おわりに

以上、出土人骨について報告を行ってきた。四日市遺跡6号周溝墓石棺内からは2体分の人骨が出土しているが、保存状態は良好ではない。埋葬順序に関しては南頭位の1号が初葬者、北頭位の2号が追葬者であり、2号

を追葬するにあたって石棺西壁側に寄せられた1号人骨がその後の土砂の流入により一部2号人骨の上に動いたと推定される。埋葬間隔については不明である。

人骨の形質の特徴としては、計測可能部位は少ないが、1号人骨は顔が低く鼻が比較的大きいという特徴を示し、豊後古墳人や西北九州弥生人に類似し、Doi and Tanaka (1987) で指摘された傾向と一致する。同じ玖珠町に位置する志津里遺跡出土人骨と比較すると、志津里石棺出土人骨とは比較的類似しやや顔が低い傾向を共有するが、志津里横穴墓出土人骨は高顔傾向を示すため形質の類似性が低いという結果が得られた。

## 謝辞

大分県立埋蔵文化財センターの服部真和氏および各位には発掘および報告に際し様々なご配慮を賜った。深謝したい。

## 参考文献

- Buikstra, J. E., & Ubelaker, D. (1994). Standards for data collection from human skeletal remains. Research series no. 44.
- Doi N. and Tanaka Y. (1987) A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *Anthropological Science*, 95 : 325-343
- 岩橋由季・米元史織・谷澤亜里・早川和賀子・中井歩・福永将大・藤井恵美・舟橋京子・田中良之, 2014.志津里遺跡B地区横穴墓出土人骨について, 志津里遺跡B地区4～6次発掘調査報告書—県道玖珠山国線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—. 大分県教育庁埋蔵文化財センターp.63-93
- 金高勘次 1928 「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」『人類学雑誌』43
- 清野謙次・宮本博人 1926 「津雲貝塚人人骨の人類学的研究 第2部 頭蓋骨の研究」『人類学雑誌』41
- Martin-Saller (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*.Bd.I.Gustav Fischer Verlag.stuttgart
- 中橋孝博・永井昌文 1989「弥生人の形質、男女差、寿命」 弥生文化の研究1 雄山閣出版
- 内藤芳篤 1971 「西北九州出土の弥生時代人骨」『人類学雑誌』79
- 大分県教育庁埋蔵文化財センター, 2017.四日市遺跡1—玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—
- 坂田邦洋, 1996.『比較人類学』青山社 p.181-193,231-265
- 田中良之・大森円,1999.陣ヶ台遺跡出土の人骨について, 陣ヶ台遺跡 玖珠町上水道第2拡張事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 玖珠町文化財調査報告書第9集. 玖珠町教育委員会 p.77-103
- 栃原博, 1957.日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌31,607-656

表1 頭蓋骨計測値

Martin No.	四日市遺跡6号周溝 墓1号人骨 計測値	志津里横穴		志津里石棺		筑前 (古墳)		筑後 (古墳)		肥前 (古墳)		北豊前 (古墳)	
		n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
1	頭蓋最大長	—	2 185.5	2	177	14	171.6	4	174.3	3	175.7	15	177.9
8	頭蓋最大幅	—	2 139.5	4	139.5	15	135.4	3	136.7	1	136.0	17	138.5
17	Ba-Br高	—	2 133	2	131	12	128.5	3	131.0	4	134.3	10	130.9
8/1	頭長幅示数	—	2 74.9	2	78.8	12	79.1	3	78.3	1	76.8	15	77.4
17/1	頭長高示数	—	2 71.7	1	74	9	74.7	3	74.3	2	73.0	8	74.1
17/8	頭幅高示数	—	2 95.7	2	93.9	9	95.3	2	97.1	1	92.6	10	94.1
45	頬骨弓幅	—	—	2	130.5	12	129.9	2	131.0	3	136.0	6	133.0
46	中顔幅	—	2 99.5	3	102	18	98.2	3	97.3	4	102.0	16	99.1
47	顔高	—	2 70.5	—	—	7	106.4	1	114.0	1	114.0	4	115.5
48	上顔高	61	2 70.5	3	63	17	65.6	2	67.5	3	69.7	14	67.2
47/45	顔示数 (K)	—	—	—	—	6	81.6	1	86.4	1	85.1	2	83.5
47/46	顔示数 (V)	—	2 116.1	—	—	7	107.8	2	58.8	1	123.9	4	113.4
48/45	上顔示数 (K)	—	—	1	48.3	12	50.2	2	51.5	1	49.3	5	51.7
48/46	上顔示数 (V)	—	2 70.9	2	61.8	17	67.0	2	69.6	2	70.7	14	67.9
51(L)	眼窩幅	39	2 42	4	40	17	40.8	3	41.7	4	42.0	16	41.4
52(L)	眼窩高	32	2 36	4	32.3	17	33.4	3	33.7	6	33.5	17	33.9
52/51(L)	眼窩示数	82.05	2 85.7	4	80.6	16	81.9	3	80.9	4	80.5	16	81.6
54	鼻幅	27	2 22.5	3	26	15	24.4	3	26.3	4	25.3	14	25.6
55	鼻高	46	2 52.5	3	49	16	48.1	2	49.0	3	47.0	13	48.4
54/55	鼻示数	58.70	2 48.6	3	53.1	14	51.0	2	55.2	3	55.0	13	53.2
72	全側面角	—	1 84	—	—	7	84.3	1	83.0	2	85.0	—	—
74	齒槽側面角	—	1 74	—	—	7	70.7	1	63.0	2	75.0	—	—

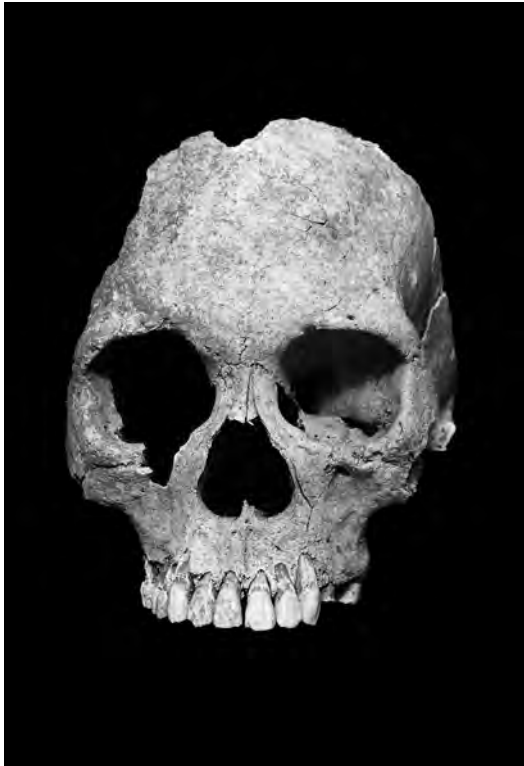
Martin No.	豊後 (古墳)		肥後 (古墳)		北九州 <sup>1)</sup> (弥生)		土井ヶ浜 <sup>1)</sup> (弥生)		西北九州 <sup>2)</sup> (弥生)		津雲・吉胡 <sup>3)</sup> (縄文)	
	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	N	M
1	6	175.0	3	173.3	86	177.0	32	176.0	15	178.1	46	176.1
8	10	134.7	4	137.8	84	138.4	32	138.1	15	139.3	49	141.5
17	8	127.5	2	132.0	66	130.7	29	128.1	7	127.3	21	129.7
8/1	6	75.8	3	80.0	72	78.1	30	78.5	15	78.2	41	80.3
17/1	5	72.5	2	76.3	62	74.1	28	72.8	7	71.2	20	73.6
17/8	7	94.1	2	97.8	56	94.9	29	92.8	7	92.5	20	91.9
45	9	131.4	3	132.0	61	131.3	20	131.9	6	130.2	10	132.6
46	11	96.6	4	98.0	67	99.8	23	98.5	11	95.9	23	99.7
47	7	106.6	4	105.5	45	116.3	23	114.2	9	104.9	14	105.1
48	11	62.8	3	61.3	66	70.1	22	68.3	12	60.9	17	62.0
47/45	6	80.8	3	77.6	34	88.7	17	86.6	6	81.7	7	79.2
47/46	7	108.6	4	107.7	39	116.7	21	115.9	9	109.5	13	106.8
48/45	8	47.2	2	43.6	49	53.7	17	51.8	6	47.6	7	48.0
48/46	10	65.2	3	62.7	57	70.2	21	69.3	11	63.5	14	62.3
51(L)	11	40.0	3	42.0	66	41.6	24	40.3	10	41.1	22	41.7
52(L)	11	31.9	4	32.0	65	34.1	25	33.3	10	31.2	14	32.6
52/51(L)	11	80.1	3	76.2	62	82.0	24	82.6	10	75.9	13	78.0
54	9	25.8	4	26.0	72	26.6	20	26.0	12	26.6	27	25.4
55	10	47.4	4	45.3	71	49.8	23	49.0	12	46.3	21	44.9
54/55	9	54.5	4	57.7	69	53.5	30	53.0	12	57.4	20	56.1
72	1	82.0	2	78.5	48	83.5	22	83.6	10	81.5	12	81.5
74	2	60.5	2	54.0	47	67.9	22	70.5	—	—	13	68.7

1) 中橋・永井 (1989) 2) 内藤 (1971) 3) 清野・宮本 (1926), 金高 (1928)

表2 頭蓋骨計測値5項目の固有ベクトルと各成分の固有値及び寄与率

	主成分負荷量	
	1	2
@48上顔高	0.816	0.573
@51眼窩幅	0.107	0.718
@52眼窩高	0.832	0.396
@54鼻幅	-0.08	-0.391
@55鼻高	0.991	-0.065
固有値	2.358	1.157
寄与率 (%)	47.158	23.136

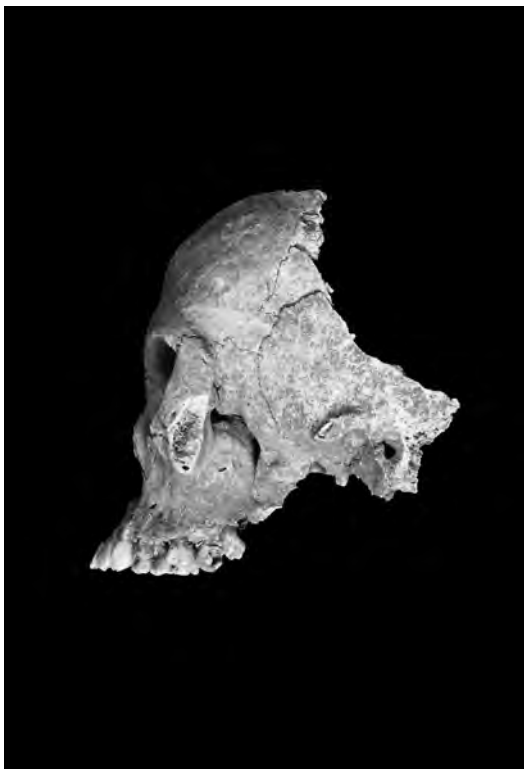




1号頭蓋骨正面觀



1号大腿骨



1号頭蓋骨側面觀



2号下肢骨

写真図版 四日市遺跡6号周溝墓出土人骨

## 2. 四日市遺跡第16次における放射性炭素年代 (AMS測定)

(株) 加速器分析研究所

### 1 測定対象試料

四日市遺跡は、大分県玖珠郡玖珠町大字四日市に所在し、台地上に位置する。測定対象試料は、土坑埋土内から出土した炭化物2点と、竪穴建物埋土内から出土した炭化物8点の合計10点である(表1)。炭化物は、5つの遺構から各々2点ずつ測定している。

想定年代は、SX12、SH143が弥生時代中期後半、SH169、SH186が弥生時代後期終末頃、SH180が古墳時代初頭である。

### 2 測定の意義

土坑、竪穴建物の廃絶時期を明らかにする。

### 3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{mol}/\ell$  (1 M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素( $\text{CO}_2$ )を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

### 4 測定方法

加速器をベースとした $^{14}\text{C}$ -AMS専用装置(NEC社製)を使用し、 $^{14}\text{C}$ の計数、 $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$ 濃度( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸( $\text{HOxII}$ )を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### 5 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)  $^{14}\text{C}$ 年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$ 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。 $^{14}\text{C}$ 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$ 年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の $^{14}\text{C}$ 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合である。pMCが小さい ( $^{14}\text{C}$ が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 ( $^{14}\text{C}$ の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modernとする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2、3に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が $^{14}\text{C}$ 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、3に示した。暦年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

## 6 測定結果

測定結果を表1～3、図版1、2に示す。較正年代は、cal BPとcal BC/ADの2通りで算出したが、以下の説明ではcal BC/ADの値で記載し (表3、図版2-1・2)、cal BPの値は図表のみ提示した (表2、図版1-1・2)。以下、想定年代の古い順に記述する。

想定年代が弥生時代中期後半のSX12の炭化材2点とSH143の炭化材2点の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $2190 \pm 20\text{yrBP}$  (SH143炭No.4) から $2130 \pm 20\text{yrBP}$  (SX12 4層) の間にある。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古いSH143炭No.4が $354 \sim 203\text{cal BC}$ 、最も新しいSX12 4層が $202 \sim 114\text{cal BC}$ の間にそれぞれ2つの範囲で示される。いずれも弥生時代中期頃に相当し、(藤尾 2009)、想定年代の弥生時代中期後半におおむね一致するかやや古い値となった。

想定年代が弥生時代後期終末頃のSH169の炭化材2点とSH186の炭化材2点の $^{14}\text{C}$ 年代は、 $1890 \pm 20\text{yrBP}$  (SH186 No.73) から $1830 \pm 20\text{yrBP}$  (SH169炭No.4) の間にある。暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、最も古いSH186 No.73が $80 \sim 129\text{cal AD}$ 、最も新しいSH169炭No.4が $139 \sim 223\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。弥生時代後期頃に相当し (佐原 2005)、おおむね一致するかやや古い値となった。

想定年代が古墳時代初頭の炭化材2点のうち、SH180炭No.1の $^{14}\text{C}$ 年代が $1830 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) が $139 \sim 220\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、SH180炭No.2の $^{14}\text{C}$ 年代が $1850 \pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代 ( $1\sigma$ ) が $130 \sim 214\text{cal AD}$ の範囲で示される。弥生時代後期頃に相当し (佐原 2005)、想定年代よりもやや古い結果となった。

炭化材10点全てでやや古い値を示した。この理由としては、以下に記す古木効果の影響が考えられる。

樹木は外側に年輪を形成しながら成長するため、その木が伐採等で死んだ年代を示す試料は最外年輪から得られ、内側の試料は年輪数の分だけ古い年代値を示す (古木効果)。今回測定された炭化材は、いずれも樹皮が残存せず、本来の最外年輪を確認できなかった。そのため、測定された年代値はその木が死んだ年代よりも古い可能性があり、炭化材の本来の年代は新しい可能性がある。

なお、SH169、SH186、SH180で出土した炭化材6点について、これらが含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある (尾碕2009、坂本2010など)。その日本産樹木のデータを用いて測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率は59% (A区S-148) ～ 69% (SH186 No.73) の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1), 337-360
- 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54
- 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55 (4), 1869-1887
- 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90
- 佐原真 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原真, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of <sup>14</sup>C data, Radiocarbon 19 (3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS)	δ <sup>13</sup> C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-170840	SX12 4層	土坑埋土内	炭化物	AAA	-26.18 ± 0.22	2,130 ± 20	76.68 ± 0.21
IAAA-170841	SX12	土坑埋土内	炭化物	AaA	-24.07 ± 0.27	2,160 ± 20	76.44 ± 0.22
IAAA-170842	SH169 炭No.1	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-26.33 ± 0.23	1,840 ± 20	79.51 ± 0.22
IAAA-170843	SH169 炭No.4	竪穴建物埋土内	炭化物	AaA	-23.85 ± 0.25	1,830 ± 20	79.65 ± 0.22
IAAA-170844	SH186 No.73	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-25.27 ± 0.25	1,890 ± 20	79.04 ± 0.22
IAAA-170845	SH186 No.75	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-28.21 ± 0.27	1,860 ± 20	79.35 ± 0.24
IAAA-170846	SH180 炭No.1	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-28.55 ± 0.25	1,830 ± 20	79.64 ± 0.23
IAAA-170847	SH180 炭No.2	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-22.89 ± 0.31	1,850 ± 20	79.46 ± 0.23
IAAA-170848	SH143 炭No.2	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-25.73 ± 0.29	2,150 ± 20	76.54 ± 0.20
IAAA-170849	SH143 炭No.4	竪穴建物埋土内	炭化物	AAA	-26.26 ± 0.30	2,190 ± 20	76.10 ± 0.22

[IAA登録番号 #8646]

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 $^{14}\text{C}$ 年代、較正年代cal BP)

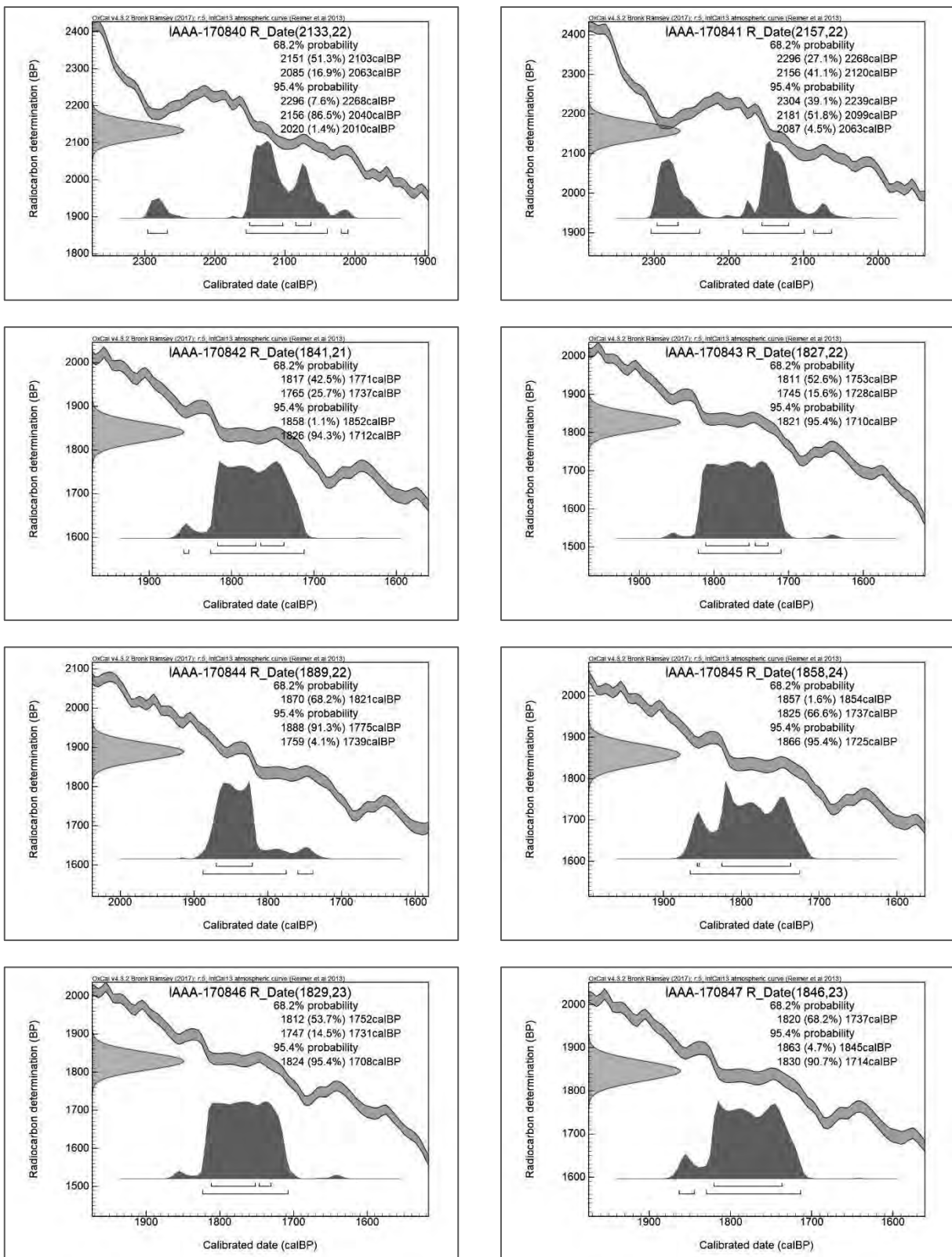
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170840	2,150 $\pm$ 20	76.49 $\pm$ 0.21	2,133 $\pm$ 22	2151calBP - 2103calBP (51.3%) 2085calBP - 2063calBP (16.9%)	2296calBP - 2268calBP ( 7.6%) 2156calBP - 2040calBP (86.5%) 2020calBP - 2010calBP ( 1.4%)
IAAA-170841	2,140 $\pm$ 20	76.59 $\pm$ 0.21	2,157 $\pm$ 22	2296calBP - 2268calBP (27.1%) 2156calBP - 2120calBP (41.1%)	2304calBP - 2239calBP (39.1%) 2181calBP - 2099calBP (51.8%) 2087calBP - 2063calBP ( 4.5%)
IAAA-170842	1,860 $\pm$ 20	79.29 $\pm$ 0.21	1,841 $\pm$ 21	1817calBP - 1771calBP (42.5%) 1765calBP - 1737calBP (25.7%)	1858calBP - 1852calBP ( 1.1%) 1826calBP - 1712calBP (94.3%)
IAAA-170843	1,810 $\pm$ 20	79.83 $\pm$ 0.22	1,827 $\pm$ 22	1811calBP - 1753calBP (52.6%) 1745calBP - 1728calBP (15.6%)	1821calBP - 1710calBP (95.4%)
IAAA-170844	1,890 $\pm$ 20	78.99 $\pm$ 0.21	1,889 $\pm$ 22	1870calBP - 1821calBP (68.2%)	1888calBP - 1775calBP (91.3%) 1759calBP - 1739calBP ( 4.1%)
IAAA-170845	1,910 $\pm$ 20	78.82 $\pm$ 0.24	1,858 $\pm$ 24	1857calBP - 1854calBP ( 1.6%) 1825calBP - 1737calBP (66.6%)	1866calBP - 1725calBP (95.4%)
IAAA-170846	1,890 $\pm$ 20	79.05 $\pm$ 0.23	1,829 $\pm$ 23	1812calBP - 1752calBP (53.7%) 1747calBP - 1731calBP (14.5%)	1824calBP - 1708calBP (95.4%)
IAAA-170847	1,810 $\pm$ 20	79.80 $\pm$ 0.22	1,846 $\pm$ 23	1820calBP - 1737calBP (68.2%)	1863calBP - 1845calBP ( 4.7%) 1830calBP - 1714calBP (90.7%)
IAAA-170848	2,160 $\pm$ 20	76.42 $\pm$ 0.19	2,148 $\pm$ 21	2295calBP - 2270calBP (17.6%) 2155calBP - 2113calBP (50.6%)	2301calBP - 2247calBP (25.2%) 2177calBP - 2171calBP ( 0.8%) 2160calBP - 2057calBP (69.4%)
IAAA-170849	2,220 $\pm$ 20	75.90 $\pm$ 0.21	2,194 $\pm$ 23	2303calBP - 2240calBP (47.3%) 2181calBP - 2152calBP (20.9%)	2310calBP - 2144calBP (95.4%)

[ 参考値 ]

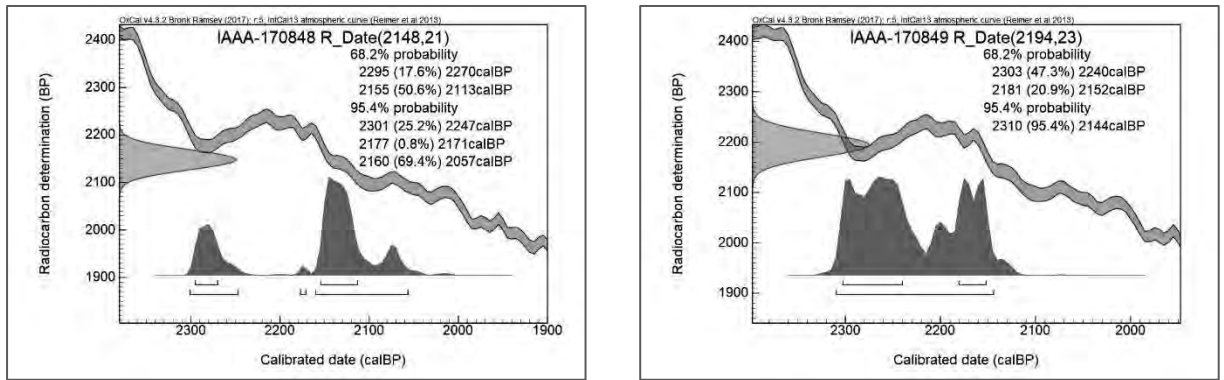
表3 放射性炭素年代測定結果(暦年較正用<sup>14</sup>C年代、較正年代cal BC/AD)

測定番号	δ <sup>13</sup> C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170840	2,150 ± 20	76.49 ± 0.21	2,133 ± 22	202calBC - 154calBC (51.3%) 136calBC - 114calBC (16.9%)	347calBC - 319calBC (7.6%) 207calBC - 91calBC (86.5%) 71calBC - 61calBC (1.4%)
IAAA-170841	2,140 ± 20	76.59 ± 0.21	2,157 ± 22	347calBC - 319calBC (27.1%) 207calBC - 171calBC (41.1%)	355calBC - 290calBC (39.1%) 232calBC - 150calBC (51.8%) 138calBC - 114calBC (4.5%)
IAAA-170842	1,860 ± 20	79.29 ± 0.21	1,841 ± 21	133calAD - 180calAD (42.5%) 186calAD - 214calAD (25.7%)	92calAD - 98calAD (1.1%) 125calAD - 238calAD (94.3%)
IAAA-170843	1,810 ± 20	79.83 ± 0.22	1,827 ± 22	139calAD - 197calAD (52.6%) 206calAD - 223calAD (15.6%)	129calAD - 240calAD (95.4%)
IAAA-170844	1,890 ± 20	78.99 ± 0.21	1,889 ± 22	80calAD - 129calAD (68.2%)	62calAD - 175calAD (91.3%) 191calAD - 211calAD (4.1%)
IAAA-170845	1,910 ± 20	78.82 ± 0.24	1,858 ± 24	94calAD - 96calAD (1.6%) 125calAD - 214calAD (66.6%)	85calAD - 225calAD (95.4%)
IAAA-170846	1,890 ± 20	79.05 ± 0.23	1,829 ± 23	139calAD - 198calAD (53.7%) 204calAD - 220calAD (14.5%)	127calAD - 243calAD (95.4%)
IAAA-170847	1,810 ± 20	79.80 ± 0.22	1,846 ± 23	130calAD - 214calAD (68.2%)	87calAD - 106calAD (4.7%) 121calAD - 237calAD (90.7%)
IAAA-170848	2,160 ± 20	76.42 ± 0.19	2,148 ± 21	346calBC - 321calBC (17.6%) 206calBC - 164calBC (50.6%)	352calBC - 298calBC (25.2%) 228calBC - 222calBC (0.8%) 211calBC - 108calBC (69.4%)
IAAA-170849	2,220 ± 20	75.90 ± 0.21	2,194 ± 23	354calBC - 291calBC (47.3%) 232calBC - 203calBC (20.9%)	361calBC - 195calBC (95.4%)

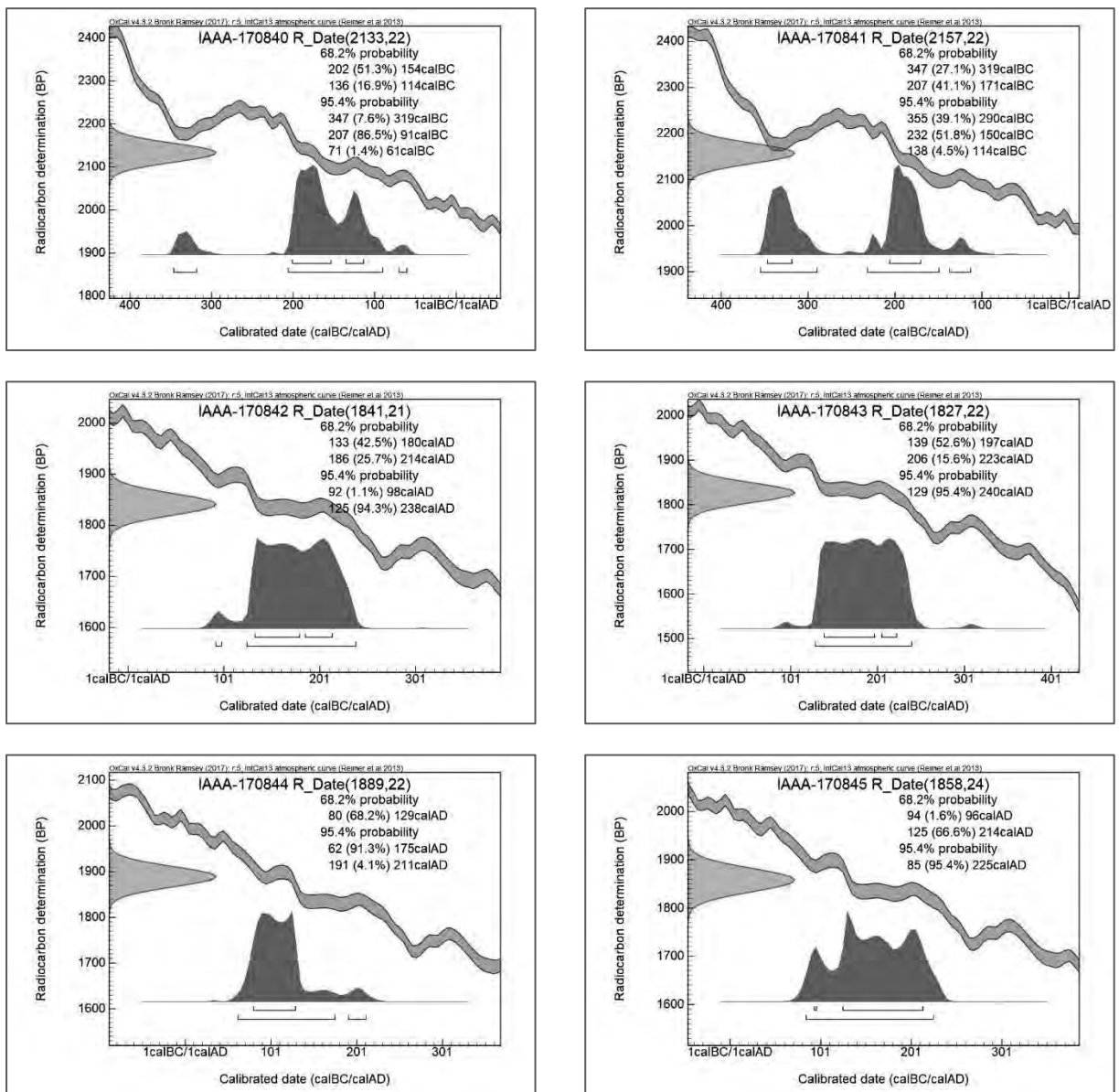
[ 参考値 ]



【図版1-1】 暦年較正年代グラフ (Cal BP、参考)

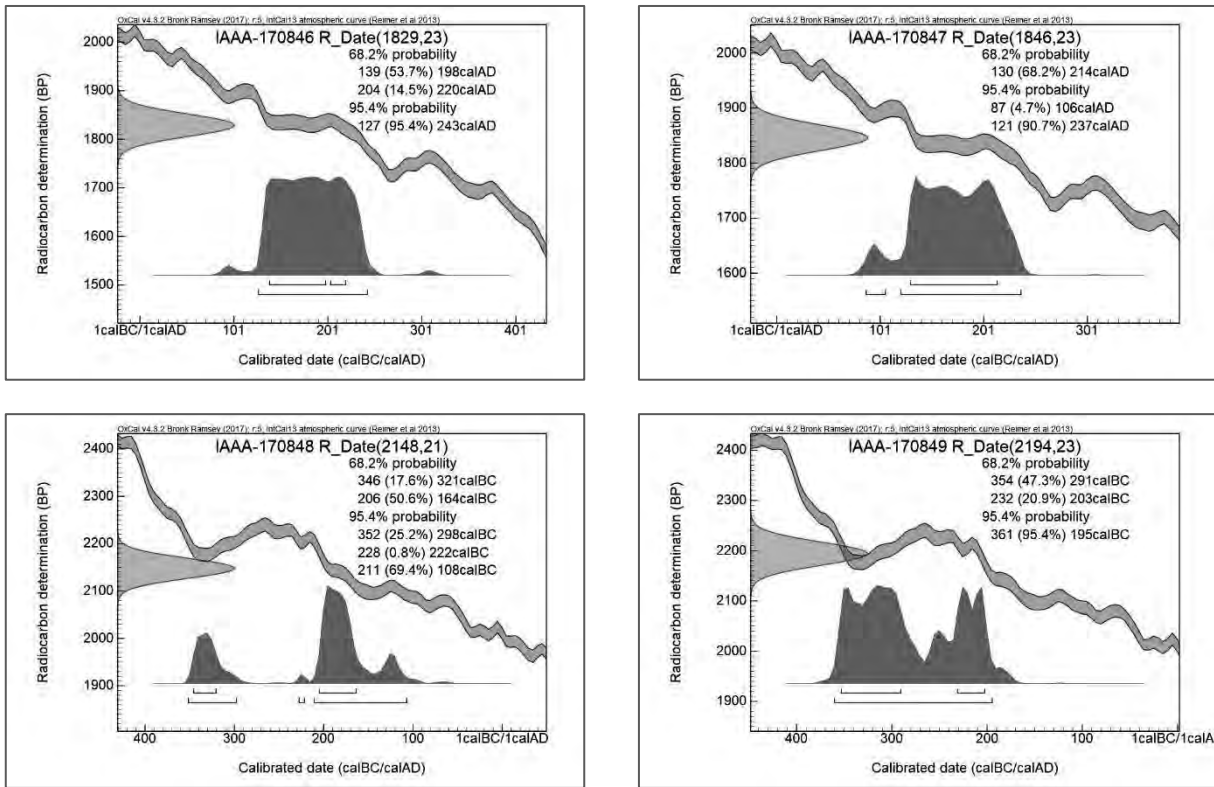


[図版1-2] 暦年較正年代グラフ (Cal BP、参考)



[図版2-1] 暦年較正年代グラフ (Cal BC/AD、参考)





[図版2-2] 暦年較正年代グラフ (Cal BC/AD、参考)

※放射性炭素年代測定報告の「試料名」については、調査時番号から新番号にかえていますが、「採取場所」の遺構の時期や性格については調査時のままである。

## 第6章 総括

### 1. 旧石器時代後期・縄文時代草創期初頭

ここでは、四日市遺跡で出土した旧石器時代後期と縄文時代草創期初頭の資料のうち、本書で報告の第1次調査4トレンチ～8トレンチ出土の資料と、第16次調査で出土した資料を中心にその成果と意義を総括する。1次調査の第9トレンチと9次調査区域3の出土資料については、別途報告する。

今回報告した石器類のうち最も古いのが、1次調査5トレンチ出土のナイフ形石器である。その形態は尖端の尖る二側縁加工で整形されている。その出土層位はAT下の黒色帯中であり、3万年以上前に遡る。これと同じか、AT直後の時期とみられるのが16次調査で表採や遺構検出時に出土した2点の二側縁加工のナイフ形石器である(A区G11、B区1P)。また16次調査区では、ポジ面の剝離軸が斜行する剝片を素材とし、形態が長楕円形をしたナイフ形石器と、幅広の剝片を素材とした切出形石器が出土している。これらは、県内の事例で言えば、AT上位の段階で角錐状石器などが出土する岩戸遺跡第1文化層の段階にみられる石器である。これらは西北九州産と推定される漆黒色の黒曜岩を石材と大野川流域で使われる流紋岩を石材としており、ナイフ形石器段階におけるこの地域と西北九州地域/大野川流域との直接的・間接的な韌帯の強さを反映している。

四日市遺跡の調査で最も多量で、良好な状態で出土した地区は、1次調査の4トレンチ・7トレンチ・8トレンチ・9トレンチと16次調査のB2区である。これらのトレンチから出土した遺物の出土状態で極めて重要な事柄が3点あり、列記すると次のとおりである。

- ① 出土層位が、アカホヤ下のクロボク土層最下部域から、ソフト・ローム層の深さ15cmまでの間
- ② ほとんどがチップ、剝片、石核で、細石刃、ナイフ形石器を含まず、尖頭器、石斧未成品を含有
- ③ 出土した石器は500点をこえる数量で、ほとんどが泥岩、凝灰岩質輝石安山岩が石材

こうした遺物が出土したのは1次調査区、隣接する16次調査区の各トレンチであり、それぞれ距離が離れているものの、①～③の点について共通性がある。このうち①は本文中の層位でいえば4層の最下部から5層と6層最上部域であり、②とともに、その所属する時期を反映しているとみられる。②で示したように尖頭器を伴っている点についてであるが、正確には凸レンズ形の横断面をもつ両面調整尖頭器の未成品である。ここではその象徴的な意味から、この文化層出土の石器類を両面調整尖頭器石器群とする。この両面調整尖頭器の位置づけに際し、その出土層位を考慮すると九州においては縄文時代草創期以降ということになる。縄文時代草創期のなかでも隆起線土器段階の遺物がソフト・ローム中から出土した事例はなく、必然的に古いほうに類例と位置付けを求めなければならない。ローム最上位の石器類といえば、船野型細石刃核に尖頭器や石斧が伴う豊後大野市犬飼町の市ノ久保遺跡段階がある。この市ノ久保遺跡の船野型細石刃核と福井洞穴等の福井型細石刃核は、技術的につながらないことから宮崎県出羽洞穴や佐賀県多久茶園原遺跡例などの石器組成を細石刃技術欠落期として考えたことがある。今回、報告した四日市遺跡の両面調整尖頭器石器群は、ソフト・ローム最上部域に生活面が想定される細石刃技術欠落期に位置づけることが可能である。汎日本的に言えば長者久保・神子柴文化並行器期や初期有茎尖頭器段階に位置させるのが自然である。

次に③であるが、これらの石材が分布する状況を把握しているわけではないが、四日市遺跡の北西に位置する綾垣地区の山塊に角礫が存在することを確認しており、おそらく転礫として麓の川に分布することが予測できる。出土した石器類の大半が泥岩、凝灰岩質輝石安山岩を石材としており、中には原石や径20cm近い石核などがあり、近隣の原石産地から入手していたことが窺える。これらの石材利用の時期幅がどの程度であるのか情報は無いが、少なくとも本遺跡における両面調整尖頭器段階においては多用されたことがいえる。

## 2. 弥生時代

### はじめに

四日市遺跡の発掘調査は、大分県内では最も調査面積が大きく、しかも台地平坦面のほぼすべてを調査した稀有な事例である。中心となる遺構は弥生時代のもので、中でもほとんどが中期後半に属す竪穴建物および土坑、さらには掘立柱建物で占められる。つまり、弥生時代中期後半の集落（居住地）を一単位（あるいは複数単位）全掘したことになる。もちろん、生産活動の範囲は台地下に広がる沖積地や、周辺の山なども含まれるであろうし、埋葬地（墓地）も見つかっていないことなどを考えれば、当時の生活や社会を全体として復元的に語るのは困難ではある。しかしながら、居住地での生活単位や祭祀の単位などは、検出された遺構の組み合わせなどから推測することが可能である。ここでは、主に掘立柱建物に注目しながら、四日市遺跡の弥生時代集落を考えていきたい。

### 中期後半の遺構

弥生時代の遺構は、終末を除くとほぼ中期後半に限られる。何カ所かで遺構の重なりがあるので、存続期間は2～3世代ほどであろうか。その中期後半の遺構の分布状況を模式的に示したのが第435図である。これを見ると、台地上に平坦面が広がる東側に多く展開し、丘陵が狭くなる西側にはあまり遺構が無いことが分かる。さらに、東側に展開する遺構群にも、間には遺構がない部分（かなり傾斜がある）があり、図中に円で示したように、A、B二つのグループに分けることが可能である。さらにBグループの西側には幅4m、深さ0.7mの箱堀状を呈する溝（SD17、SD18）が、屈曲しながらほぼ南北方向に延び、丘陵の頂部には長さ5m弱の土橋も持つ（この溝の北側は図示した部分で終わり、北側には伸びない。北側にはまだ平坦地が続いているため、傾斜のある丘陵部分のみに溝を掘削し、あたかも中世城郭の堀切のようにしている。出土遺物は弥生時代の遺物だけのため弥生時代中期の溝としているが、箱堀状をなす断面形状などから見ると、中世の所産である可能性もわずかながらあるのではないかと考えている。）。この溝を境にして、さらに西側には弥生時代の遺構は極端に少なくなる。

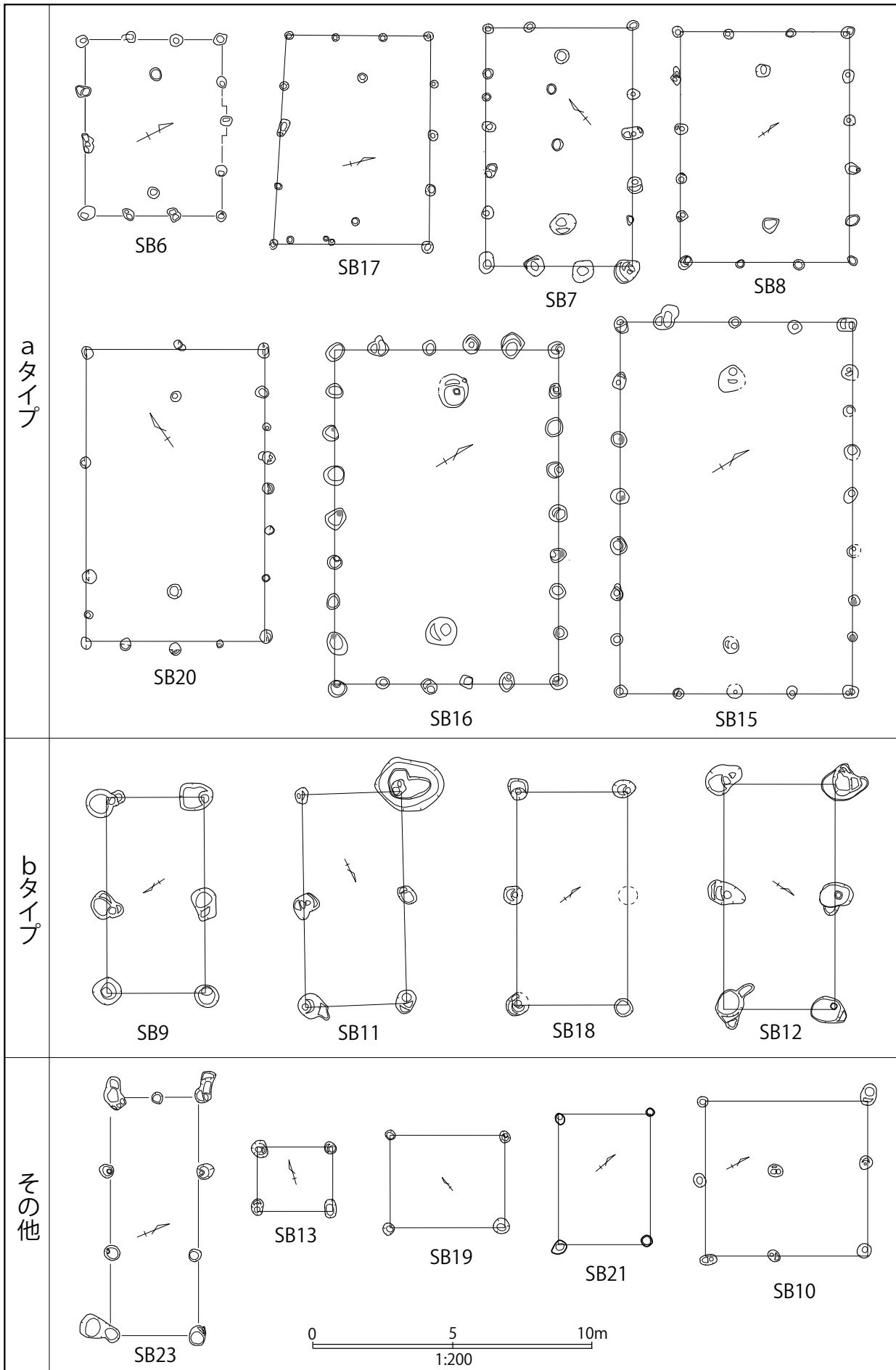
次に、中期後半の「集落」の構成要素を見ると、大型～中型の円形竪穴建物約40基、中型～小型の方形竪穴建物約60基、大型掘立柱建物7基、1×2間の掘立柱建物5基、その他の掘立柱建物4基、方形や円形の土坑約200基、小児用甕棺18基となる。つまり円形竪穴建物1基に対して、方形竪穴建物は1.5基、土坑は5基となる。この組み合わせが最小単位となるのか、あるいは竪穴建物をプランにかかわらず、すなわち単に大きさが違うという事で考えて、竪穴建物1基に対して土坑2基が最小単位ということになるのか。分布を見ると、円形と方形でエリア分けがなされているようにも見えるので、後者の可能性が高いと考えられよう。

また、先述したように分布図からは台地上の弥生時代中期の集落には、西側の溝より東側（内側）に大きく2グループ、そして溝の西側（外側）に1グループ（Cグループ）の、合計3つのグループが存在したことが想定できる。次に、これらのグループ相互の関係や、グループ内部でさらに細かなグループ分けが出来るのかどうか検討することとする。

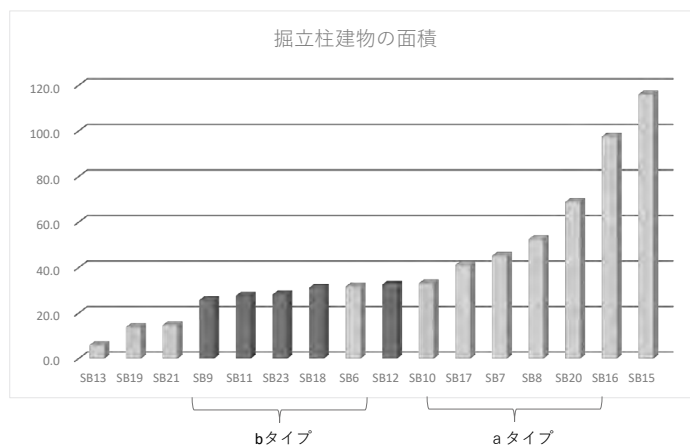
### 掘立柱建物の分布と分類

発掘調査で計16基の掘立柱建物が検出されている。それらは大きくa、b二つのタイプに分けることができる。aタイプは、桁行の側柱が5本から9本、梁行の側柱が4本ほどで、内部に棟持ち柱を2本持ち、面積が100㎡に及ぶ大型のものがある。いわゆる「屋内棟持ち柱付き建物」と呼ばれるタイプである（宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1996年）。bタイプは1間×2間（1棟のみ1間×3間）の掘立柱建物で、しばしば柱穴が深く掘られている。第434図のグラフでわかるように、この両者は明らかに志向する面積が異なる。

aタイプは最少が32㎡、最大は116㎡となるが、概ね40㎡以上に集中している。台地の東端に近い場所にある最少のものと最大のものは切り合い関係があり、同一場所での建て替えである。その他のaタイプの建物は、建て替えはない。分布を見ると、aタイプの建物はAグループに4か所6棟、Bグループに1棟ある。



第433図 四日市遺跡掘立柱建物集成



第434図 四日市遺跡掘立柱建物の床面積

Aグループを見るとグループを取り囲むように建物群の一番外側に等間隔に位置しているように見える。しかも、SB6、SB7、SB8は平側を内部に向けているように見えるし、SB15とSB16、さらにSB20も含めて見ると、全体が主軸を揃えるか、あるいは90度振っているようにも見える（SB7とSB20は約8度のずれ、SB8とSB16はほぼ等しい）。このことは、Aタイプの掘立柱建物群がAグループ全体として計画的に建てられたことを示唆する。また、SB17→SB15→SB16と同一地点で建て替えられた（SB17は切り合いがないが、大きさから考えて、SB15の前に存在したと考えた。）集落の東端に近い場所が特別な場であったことがわかる。当初にaタイプが存在したのもここであろう。建て替えられたSB15が116㎡、SB16が98㎡と大型であるのも、ここが集落全体のある種の中心であったことをうかがわせる。

Bグループの1棟は3間×3間（平面は長方形）で内部に棟持柱を持つ31.8㎡のもので、2番目に小さい。やはりこのSB6も、Bグループの中心ではなく西寄りの外れに位置する。

bタイプは5棟あり、すべてAグループ内である。面積はおおむね30㎡前後に集中する。bタイプもaタイプ同様、竪穴群の中央にはなくて、周辺に点在する在り方を示す。北東部の2棟（SB11、SB12）を除くと、他はaタイプと対になるように点在する。特にaタイプのSB8とbタイプのSB9、同じくSB15、16とSB18は主軸を揃えて20～30mの間隔で建つ。

では、ここで確認されたaタイプとbタイプの掘立柱建物は、一体どのような場面で使われる建物であったのだろうか。大型掘立柱建物は「北部九州では祖先の霊を祀る行為が、墓群と対をなす大型建物でおこなわれていたのだろう」（設楽博己「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告 第149号』2009年）とされ、大型掘立柱建物はしばしば墓地との関係の中で解釈されてきた。しかしながら、四日市遺跡では台地全体を調査したにも拘らず、中期後半の成人墓は1基も確認されていない。さらにaタイプの掘立柱建物の配置を見ると、明らかに居住域との関係を有している。このことは、大型掘立柱建物が集落内における祭祀に関わるものであるとすると、Aグループ内部に複数の祭祀集団が存在したことも意味する（厳密に同時期に存在したかどうかは分からないが、分布を見ると1基ずつ順番に建てられていったとするよりも、同時期に複数の大型掘立柱建物が建っていたと考えた方が可能性が高いと考える。）。想像を逞しくすれば、SB17を中心とした集団が草分けとして台地上に居住を始め、その後SB7、SB8の集団がそこから分かれていった、あるいは後に他所から入ってきたと考えられないだろうか（SB7やSB8を中心とした竪穴建物群が視覚的にグルーピングできるわけではないが）。その後、SB17は中心的な集団として最も大きな掘立柱建物を維持することになる。これがAグループ全体の、あるいはCグループまで入れた台地全体の祭祀に関わる機能を有していたことも想定できる。

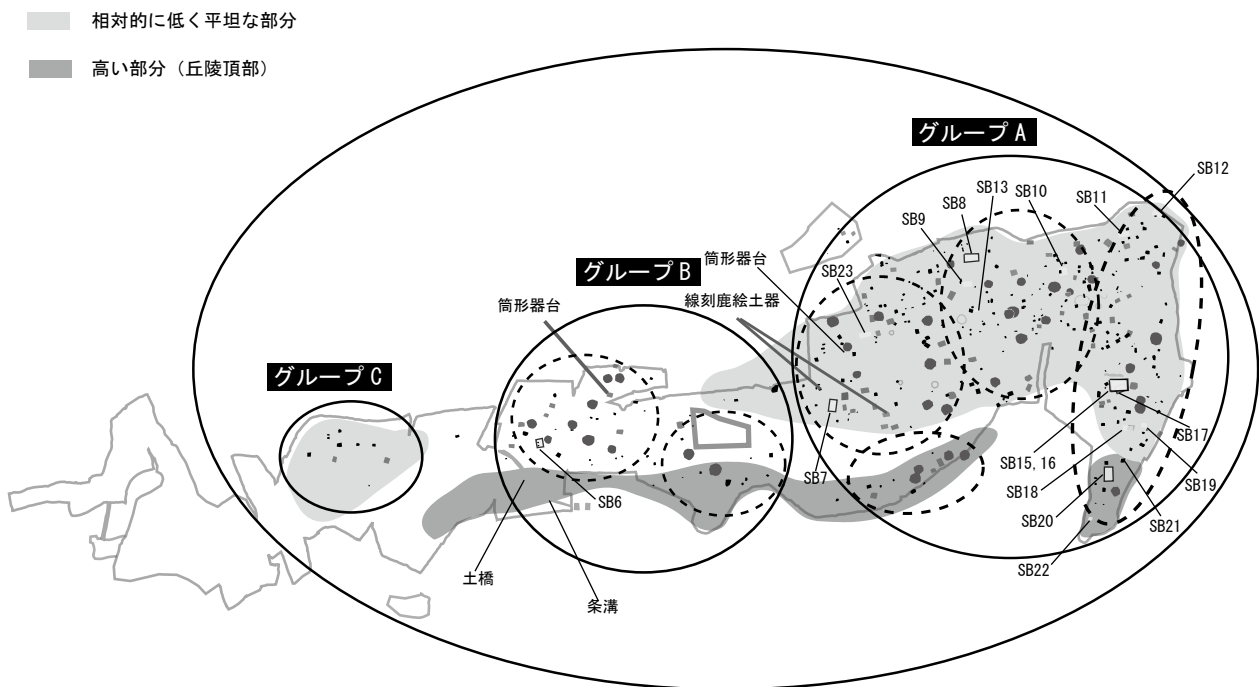
bタイプの掘立柱建物の最大の特徴は柱穴が深く、比較的大きいということである。このことは、建物の重量に関わるであろうから、望楼のような高い建物か、あるいは重量物を保管する倉庫ということになるだろう。建つ場所がSB12のように台地縁辺であれば望楼の可能性もある（SB12は主軸が地形に沿っており、他の掘立柱建物

とは明らかに軸線が異なっている。望楼であるとする、玖珠川沿いに広がる広い沖積地方面ではなく、玖珠川の支流が作る中規模な沖積地方面を望んでいるのが、望楼の役割を示しているようでもおもしろい。が、他は居住区の外縁ではあるものの、台地縁辺ではない。ここでは多くは倉庫と考えておきたい（四日市遺跡では多くの土坑が検出されており、その多くは貯蔵穴と考えられる。実際に中期後半の土坑からはイネ、アワ、アズキ、ダイズ、ドングリなどが出土している。これらが日常的に消費するものであるとすると、掘立柱建物で保管されるものは種籾や神前に捧げるような特殊な意味を持ったものであった可能性があるだろう。）。そうすると、bタイプの建物との位置関係が、aタイプの建物の性格を示す可能性がある。つまり、先にaタイプの建物は祖霊祭祀に関わる可能性があるとしたが、倉庫との関係を見ると、豊穰祈願などの要素も併せ持つものとも言えるのではなかろうか。

このように、視覚的にグループ分けできる大、中、小の集団の中に、視覚的には明確にグルーピングできない小集団があり、各々祭祀を行っていたとすると、 $A > B > C$ という視覚的な差はいわば格差であり、身分の表徴でもあったのに対し（実際にaタイプの建物規模にも $A > B > C$ という違いがある）、Aグループ内部の小集団は祭祀集団といういわば内面の、他と区別されるだけの差異に過ぎないことになる（ただし、掘立柱建物そのものの大きさが格差を示している可能性もあるが。）。このことは、とりとめもなく堅穴建物が続くように見える集落、例えば石井入口遺跡（竹田市）などでも、視覚的に区別できない小集団があったことを示唆する。

以上のように、掘立柱建物の分布を見ることによって、四日市台地の集落には、視覚的には3集団、そして最も大きいAグループ内にはさらに3つ前後の「小集団」が存在した可能性があることが想定できた。さらに、それらは最も東側のAグループを頂点として、西に向かうほど小規模に、あるいは相対的な力関係で下位に位置づけられると考えた。最も東側の集団は、四日市台地全体の統括者でもあったのであろう。仮に、どこかに成人用墓地が営まれていたとしたら、この「小集団」の出身者は何らかの差別化が図られていたであろう。隣の日田盆地での吹上遺跡における甕棺墓群は吹上台地全体を代表する集団の墓地であろうから、それと同様な形態であった可能性は高いと考える。

四日市弥生集落



第435図 四日市遺跡弥生時代集落の想定構成図

## 集落の始まりと終焉

四日市台地では、弥生時代中期後半に突然集落の形成が始まる。前期や中期前半の遺物はほぼ確認されていないので、中期後半のある時点で他所から集団で移ってきたと考えられる。それが「開拓」という言葉で表現できるものかどうかは分からないが、大型掘立柱建物を伴う秩序立った集団が、ある程度の規模でやってきたものであろう。その集団が玖珠盆地周辺に以前から居住していたのか、新たに別の地域から入ってきたのかはわからない。土器を見ると、豊後の要素（下城式土器など）はほぼなく、須玖式土器の範疇で理解できるものであるもので、直接なのか、間接なのかを問わなければ、筑後川（玖珠川）下流域との強い繋がりが想定できる。

四日市台地の集落では、石包丁に見られるように台地下（玖珠川本流の沖積地ではなく、そこに流れ込む支流沿い、特に四日市台地の北側を西から東に流れる小河川沿いや、もう少し大きな森川が玖珠川と合流するあたりなどを水田と想定している。）での水田経営を行うと同時に、様々な畑作物やドングリ類の採取にもかなりの力を注いでいたことを植物依存体の検出により窺い知ることができる。

ところで、この弥生時代中期後半は玖珠盆地にも中広銅矛が複数本もたらされている。確実なものは元畑（大字大田）のみであるが、他に角牟礼山頂（大字森）とその東裾の久恵（大字森）で出土している。すべてが四日市遺跡と同じ玖珠川右岸で、四日市遺跡からみて北～東北方に3km以内に収まる。中期後半において玖珠盆地最大の集落であった四日市遺跡が、この埋納に係わっていなかったとは考えづらい。SB20が立つ丘陵最高所からSB15を見下ろす視線の先には角牟礼山が屹立しており、その間には墓地のあった可能性の高い名草台も広がっている。このように、祭祀にかかわる空間が四日市台地から北に四日市台地を離れてさらに広がっていた可能性が高い。

そして、多様な食料資源を確保し、数世代にわたって生活を送っていた集団が、突如台地から姿を消すのは何故だろうか。残念ながら、玖珠盆地全体で弥生時代遺跡の動態が不明なため明確に答えるのは難しいが、後期になって玖珠盆地周辺では大規模な集落は今のところ確認されていないので、四日市台地を去った集団は小集団に分かれて、小規模な開発に向かったことが想定できる。小規模にならざるを得なかった原因の一つとして考えられるのは、重きを置いていたと思われる沖積地での水田耕作の行き詰まりであろう。近年の温暖化に伴うと考えられる夏季の豪雨災害を見ると、堤防のない時代であれば平野部に壊滅的な打撃を与えることは容易に想像できる。水害により人間の手で抱えられないほどの円礫が大量に運ばれてくると、重機がない時代には復旧は容易ではなからう。その後の氾濫によって土砂がその上を覆ってしまうまで可耕地としての利用は待たねばならなかったはずである。そうであれば、四日市台地に再び集落が形成される弥生時代後期末までの間は、そのような時代であった可能性が高いのではなからうか。

しかしながら、集落の始まりが、単に耕作地を求めた移住などではなく、祭祀空間を前述のように考え、銅矛の埋納にも四日市遺跡の集落が関わっていたとすれば、その集落が突然姿を消すのは、そこに玖珠盆地という広いエリアの秩序の再編を伴うような何らかの「政治」的な動きを想定することも可能であろう。広形銅矛が一切玖珠盆地からは出土していないのも、四日市集落の動態と関わりがあるのであろう。

調査回数	遺構番号	タイプ	柱間	桁行長さ	梁行長さ	面積	調査回数	遺構番号	タイプ	柱間	桁行長さ	梁行長さ	面積
6	SB6	a	3間×3/4間	6.35	5	31.8	3	SB15	a	4間×7/8間	13.5	8.6	116.1
15	SB7	a	3間×5/6間	8.7	5.2	45.2	3	SB16	a	5間×8間	12.2	8	97.6
13	SB8	a	3間×5間	8.48	6.2	52.6	3	SB17	a	3間×4間	7.5	5.5	41.3
13	SB9	b	1間×2間	7.15	3.6	25.7	3	SB18	b	1間×2間	7.8	4	31.2
13	SB10	c	2間×2間	5.9	5.62	33.2	3	SB19	c	1間×1間	4.15	3.35	13.9
13	SB11	b	1間×2間	7.7	3.6	27.7	4	SB20	a	2/4間×4/7間	10.6	6.5	68.9
13	SB12	b	1間×2間	8.15	4	32.6	4	SB21	c	1間×1間	4.6	3.2	14.7
2	SB13	c	1間×1間	2.7	2.2	5.9	16	SB23	b	1間×3間	8.3	3.4	28.2

第2表 四日市遺跡掘立柱建物一覧表

### 3. 古墳時代

古墳時代の大大分県は地域性により大きく3地域に分けられるが、玖珠地域は日田地域とともに第3地帯（豊後西部）に位置づけられる。日田・玖珠両地域は筑後川を介して密接な関係性が認められる地域であり、墓制の変化は同調しているようにも見えるが、導入された埋葬施設などの様相は日田地域に比べ多様とはいえないなど必ずしも一致してはいない。玖珠地域で現在確認できる諸要素はシンプルで、これは他地域と比べて社会構造をシンプルにとらえやすいことを意味しており、玖珠地域の地域性ともいえる。古墳時代の玖珠地域に関しては主に田中裕介氏（註1）・坂本嘉弘氏（註2）・渡邊隆行氏（註3）の他、九州前方後円墳研究会での大大分県発表者各氏（註4）による研究があげられるが、こうした先行研究をもとに玖珠地域の墓制を概観し、四日市遺跡で検出した墳墓についてみていきたい。

玖珠地域では、古墳・墳墓の分布と地形を考慮すると、おおむね6地域（太田川上流地域・玖珠盆地西部地域・玖珠盆地中央地域・玖珠盆地東部地域・四日市地域・森川地域）にまとまりを見いだすことができると指摘（註2）されている。墓制では古墳・周溝墓・集団墓・横穴墓があり、これらが各地域および玖珠地域全体のなかで展開し、階層性が重層的に示されている。

古墳前期の墓制は集団墓・周溝墓・古墳があげられる。墳丘を有する古墳は、玖珠川や支流河川を見下ろす台地や丘陵部の縁辺などの眺望の良い立地に造営される場合が多い。対外を意識した立地と、古墳の数の少なさから、階層的に上位の、地域の有力者墓と位置づけられるが、前期から中期は地域の有力者墓か玖珠全体の盟主墓か判断が難しい。古墳時代前期の古墳としては瀧ノ原古墳（方墳・9m）・瀬戸古墳（円墳・18m）があげられる。前期前半とみられる瀧ノ原古墳は玖珠地域でも古い段階に位置付けられ、埋葬施設は土壙墓ないし木棺墓考えられる。周囲で検出された箱式石棺は蓋石が鎧重ねであることから弥生時代の石蓋土壙墓からの影響を受けた特徴が指摘されている。一方、前期中～後半とみられる瀬戸古墳は中心主体部に堅穴式石郭が導入されており、外来的埋葬施設の導入された古墳としては玖珠地域で最も古く位置付けられるが、外来要素の受容は墓制に画期と変化をもたらしたと推測できることから、盟主墓との位置づけも可能かもしれない。

周溝墓については墳丘が消失した可能性や低墳丘墓であった可能性も考えられるものの、古墳の下位に位置づけられるが、規模は古墳と大差ないことから古墳と同様に各地域の有力者墓とみられる。前期では陣ヶ台1・2・4・5号墳、瀬戸墳墓群、中期ではおごもり周溝墓群などがあげられる。円形と方形の形状が時期差・階層差を示すのは現状では判然としないが、主体部には箱式石棺や石蓋土壙墓などの在来の埋葬施設が採用され、複数の主体部を有する事例が多い。周溝墓は少なくとも前期中～後半頃から中期前半頃までは造営されたとみられる。

集団墓は箱式石棺や土壙墓などがまとまって検出されるものであるが、これらは軸を同じくする墓が列状ないしはグループとしてまとまって配置されるもので、八幡中学校遺跡・小竿遺跡・名草台遺跡などがあげられる。この他にも古くから開発にともない発見された事例が伝えられており、こうした事例を含めるとほぼ6地域すべてで確認されている。こうした墓群からは出土品・副葬品が少ないため時期の比定が困難であるが、箱式石棺の特徴などから弥生時代後期末段階から古墳時代前期のなかで推移したと考えられる。こうした墓の位置づけは、ムラなどの共同体の構成員墓と考えられている。

集団墓のように石棺がまとまらず、単独ないしは数基が近接して確認できる事例がある。志津里B地区石棺・寺山1・2号石棺（註5）などがあげられ、前期後半から中期前半にかけて確認できる。これらは周溝や墳丘をともなわないものの集落を見下ろす丘陵や台地上に立地しており、地域の有力者墓とみられる。

さて、玖珠地域で出土した箱式石棺の深度を総じてみると、古墳や周溝墓の主体部石棺の深度は約0.5m以上であるのに対し、集団墓等の石棺深度は約0.3m前後と浅い傾向が認められる。石棺深度については石棺構築時から追葬を想定して作られたとする見解（註6）や、時期差とする見解（註2）が示されているが、加えて階層性についても検討していく必要がある。

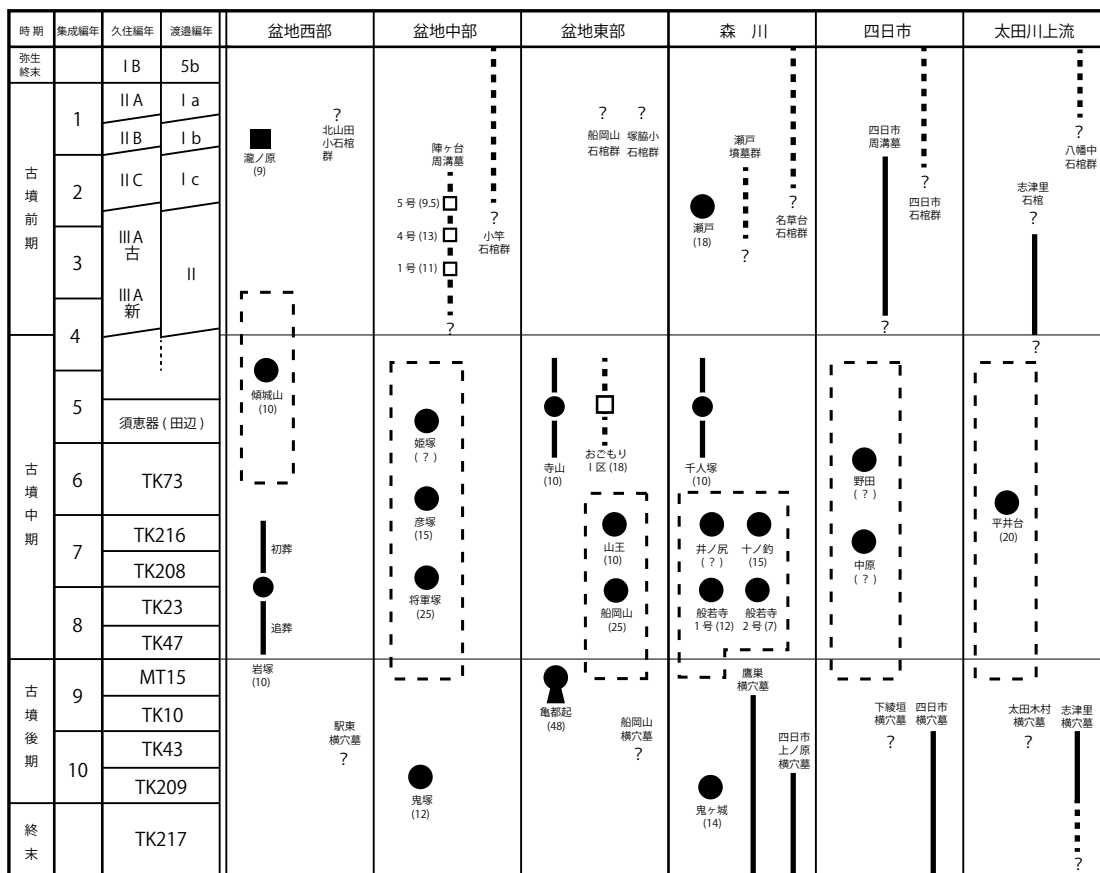
中期の様相は不明な点が多い。中期では千人塚古墳（円墳・10m）・寺山古墳（円墳か・10m）・岩塚古墳（円墳・10m）などが調査されている。瀬戸古墳以後は円形墳が主流となっており、埋葬施設については調査事例が



少ないため不明な点が多いが、瀬戸古墳のような外来的ではなく在来の箱式石棺が用いられた可能性が高いと推測する。中期は全国的に前方後円墳の巨大化が進むなど、墳形や規模により階層性が顕著にうかがえるが、第3地帯（豊後西部）においては前期・中期においても前方後円墳の築造は確認できず、古墳の規模に顕著な差は認められない。田中裕介氏はこうした情勢を、日田・玖珠地域が吉井・浮羽などの筑後川流域の政治領域に含まれていたため前方後円墳や巨大古墳を築造できなかったとみる（註7）。先にあげた以外にも各地域に築造された十ノ釣古墳（円墳・15m）・平井台古墳（円墳・20m）・陣ヶ台姫塚古墳（円墳）・陣ヶ台彦塚古墳（円墳・15m）・將軍塚古墳（円墳・25m）・船岡山古墳（円墳・25m）・般若寺1号墳（円墳・12m）・般若寺2号墳（円墳・7m）などの円墳の時期比定が今後の課題となるが、これらの規模は全て25m以下と突出した規模ではないことから玖珠地域の盟主墳と判断するのは難しい。

後期は墓制上大きな画期が認められるとともに、首長系譜がとらえやすい。亀都起古墳（前方後円墳・48m）は主体部が不明だが玖珠唯一の前方後円墳で、他の古墳と比較しても墳形・規模において明確な差を見出すことができるため、玖珠地域全体の盟主的古墳に位置づけられる。前方後円墳が後期から築造されるのは日田地域でも同様であり、中期までの筑後川流域の政治領域から独立するなど、関係性の変化が反映したものと指摘されているが、こうした背景には磐井の乱などの社会情勢が影響を及ぼした可能性も考えられる。亀都起古墳以後、前方後円墳は築造されないが、鬼塚古墳（円墳・12m）・鬼ヶ城古墳（円墳・14m）といった円墳が築造される。これらの円墳は規模が20m以下ではあるが、これらの主体部は複室横穴式石室で、彩色や線刻などの装飾や石棚を有する特徴から筑後川流域だけではなく肥後・豊前地域との関連例も指摘されるなど、玖珠地域全体の盟主的古墳と考えることができる。

横穴墓は日田地域では中期後半段階から造られるのに対し、玖珠地域では現状では6世紀から7世紀を中心に確認されている。多くが玖珠川・支流河川に面した丘陵の南壁崖面に開口しており、鷹巣横穴墓群、四日市上ノ



※ [ ] 内は時期不明の古墳

第436図 古墳時代の玖珠地域

## 第6章 総括

原横穴墓群、志津里横穴墓群、二日市横穴墓群、駅東横穴墓群、船岡山横穴墓群・下綾垣横穴墓群など玖珠各地域で知られている。鷹巣4号横穴墓のように装飾を施す横穴墓もあり、こうした横穴墓が他の横穴墓よりも上位に位置づけられていた可能性も考えられる。玖珠地域において前方後円墳・横穴墓・横穴式石室の導入は、従来にはない新たな要素により階層性が示されるという、墓制全体の大きな変化と位置付けられる。玖珠地域のこうした流れをふまえて四日市遺跡をみていきたい。

四日市遺跡では集団墓・周溝墓・横穴墓が検出されている。集団墓は石棺墓32基、土壙墓2基・石蓋土壙墓5基が列状に配置されている。位置は台地西側の、台地を南北に縦断する浅い谷筋に沿って展開しており、決して対外的な眺望や視認性を意識したものとはいえない。集団墓からは副葬品が極めて少なく遺物から時期を特定するのは困難であるが、箱式石棺の蓋石が鎧重ね・側石の枚数などの構造から、おおむね弥生時代終末から古墳時代前期前半頃を中心とする時期と考えられるが、これは台地東で検出された集落の時期と重なる可能性が高いとみられる。集落については第16次調査のまとめでふれているため省略するが、集団墓が集落という共同体の構成員墓と位置づけられるならば、台地東側と西側で居住域と墓域が分離して成り立っていたことになる。ただし台地下の久大線南側で、時期は不詳だが石棺の存在が知られており（註8）今後も検討を要するが、集団墓を集落との関連から検討できる可能性があるなど、四日市台地全体を調査できた意義は大きいといえる。また集団墓からやや離れ単独であるSK137は、石棺の深度が0.5m以上と深く、集団墓とは一線を画する様相を示す。内部は攪乱を受け時期が判然としないが、集団墓を見下ろす位置にあることもそうした被葬者像を表しているのかもしれない。SK137が集落内で認められた竪穴建物の規模の差に対応し、集団墓から周溝墓・古墳へと至る過程の中に位置づけられるのであれば興味深い。

周溝墓は7基確認され、周溝が全周しないものや調査が全体に及んでいないものなど制約はあるが、円形3基・方形4基とみられる。すべての周溝墓は玖珠川を見下ろす台地の縁辺部の、外部から視認されやすい立地であり、集団墓とは対照的である。周溝墓の多くが台地東端部に連続と造営されている。副葬品が残されていたものは6号周溝墓のみであり、そこからは珠文鏡・鉄鏃が出土している。各周溝墓から出土した土師器は在来系土師器ではなく布留系および吉備系といった外来系土師器が主体であり、遺物から久住ⅡB～ⅢA期の古墳時代前期中～後半段階と考えられることから、集落の終焉後に築造されたとみられる。四日市台地上は集落から墓域へと土地利用が変化したとみられ、集団墓の存続時期が明確に押さえられないものの、四日市台地上においては集団墓（構成員）から周溝墓（有力者）への墓制の変化をみてとれる。こうした変化は外来的要因によってもたらされた可能性が高く、この流れは玖珠全体にも及んだかもしれない。

四日市台地上では中期の遺構や墳墓は検出されておらず、調査事例の少なさもあろうが玖珠全体の様相を見て玖珠川左岸と比べると玖珠川右岸の状況はやや低調といわざるを得ない。

玖珠川に面した台地壁面では合計13基の横穴墓が検出され、うち10基を大分県が調査したが、四日市台地ではこれら以外にも戦前に4基の横穴墓の存在が記録（註9）されている。所在地をみると第5次調査区の台地下に位置しており、現状ではその付近には横穴墓らしき穴がわずかに確認できる程度で詳細は不明だが、当時の写真に写された出土須恵器・馬具から6世紀後半から7世紀初頭に位置づけられ、第10-1次調査区と同時期のものと思われる。このように四日市台地には横穴墓群が少なくとも2カ所に点在しており、これらの横穴墓群は共に前期の周溝墓下の台地壁面に造られていることは意図的なものか検討していく必要がある。

四日市遺跡では台地上全面を調査したものの、周溝墓・横穴墓を造る基盤となった集落については発見できておらず、居住域と墓域の関連性を論じるには台地をこえたより広い範囲での検討が必要であり、今後の周辺調査の課題としておきたい。

註1 田中裕介1987「玖珠の古墳時代とその社会」『玖珠郡史談 第18号』玖珠郡史談会

註2 坂本嘉弘1999「第1節玖珠盆地とその周辺の弥生時代から古墳時代の土器編年」『玖珠町文化財調査報告書 第9集 陣ヶ台遺跡』玖珠町教育委員会

- 註3 渡邊隆行2017「筑後川上流域(豊後西部・日田玖珠地域)の古式土師器の状況」『第19回九州前方後円墳研究会 九州島における古式土師器』九州前方後円墳研究会  
渡邊隆行2018「豊後西部の動態」『第21回九州前方後円墳研究会 集落と古墳の動態Ⅰ 弥生時代終末期～古墳時代前期』九州前方後円墳研究会
- 註4 池邊千太郎2001「豊後地域における横穴墓の様相」『第4回九州前方後円墳研究会 九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会  
吉田和彦2006「東九州の前期古墳の再検討」『第9回九州前方後円墳研究会 前期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会  
古川匠2007「東九州(豊前・豊後地域)における中期古墳の検討」『第10回九州前方後円墳研究会 九州島における中期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会  
長直信2008「東九州(豊前・豊後)における後期古墳の再検討」『第11回九州前方後円墳研究会 後期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会  
越智淳平2009「豊後地域における終末期古墳の様相」『第12回九州前方後円墳研究会 終末期古墳の再検討』九州前方後円墳研究会  
若杉竜太2011「豊前南部・豊後における古墳埋葬施設の多様性」『第14回九州前方後円墳研究会 九州島における古墳埋葬施設の多様性』九州前方後円墳研究会  
長直信2019「豊後における古墳と集落」『第22回九州前方後円墳研究会 集落と古墳の動態Ⅱ 古墳時代前期末～古墳時代中期』九州前方後円墳研究会
- 註5 野口典良氏御教示
- 註6 高橋徹1989「まとめ」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(1)草場第二遺跡』大分県教育委員会
- 註7 田中裕介2010「東九州における首長墓の変遷と性格」『第13回九州前方後円墳研究会 九州における首長墓系譜の再検討』九州前方後円墳研究会
- 註8 河野康彦1998「四日市集落の歴史と伝承」『玖珠郡史談 第42号』玖珠郡史談会
- 註9 河野清實1931「玖珠郡北山田村の横穴」『大分県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯』

#### 4. 古代

古代の玖珠地域を考える上で重要な遺物に、大宰府跡から出土した木簡があげられる。大宰府は律令時代に国がおいた九州を管轄する拠点であるとともに、諸外国との外交・交流の最前線でもあった。その大宰府跡蔵司西地区から出土した木簡には「久須評」と記されており、玖珠地域が「郡」の前身である「評」の設置された段階から律令体制に取り込まれていたことがわかる。

玖珠地域の古代については不明な点が多い。古代の球珠郡(以下、玖珠郡)の中心施設である郡衙については、大隈地区で見られる地名が郡衙ないし郡家関連施設の存在を想起させるといわれており(註1)、玖珠地域で唯一の前方後円墳である亀都起古墳が築造された地でもあることから有力な候補地ともされている。また『豊後国風土記』では玖珠郡には郷が3カ所、里が9カ所とあるが具体的な名は記されておらず、『和名抄』では3郷を小田・永野・今己とするが、これらが現在のどの地域・どの領域まで及ぶかは明確とはいえない。

発掘調査の成果としては、九重町松木遺跡からは8世紀前半から中頃の集落を構成する竪穴建物・掘立柱建物・溝などが出土している。また西田遺跡からは奈良時代の円面硯が出土し、原田遺跡の包含層からは9世紀前半頃に比定される銚(巡方)が出土しているが、考古学的見地から古代の玖珠地域を具体的に語ることは困難なのが現状であり、今後の発掘調査成果により解明されることが期待されている。

16年に及ぶ四日市遺跡の発掘調査において、古代の遺構はわずか3基しか検出できておらず、遺物もほとんど

## 第6章 総括

皆無である。しかし検出された3基の遺構は、玖珠地域の古代を考える上で重要な資料であり、すでに『四日市遺跡1・2』において遺構の詳細は報告されているが、改めてあげておきたい。

台地の東端に位置する第1次調査区では、2基の木棺墓（S K87・S K126）が検出された。ともに9世紀代に造営された墓であるが、なかでも副葬品が注目される。S K87からは越州窯青磁唾壺・隅入方鏡片・土師器坏が、S K126からは隅入方鏡片が出土した。越州窯青磁唾壺は、本来は唾や痰を吐き入れるための容器であるが、日本に輸入された青磁唾壺は高級官僚の調度品として用いられたとみられる。福岡県筑紫野市堀池遺跡（註2）の墓から完形品が出土しているが、それ以外では大宰府・平城京・平安京でしか出土していない遺物であるが、S K87では越州窯青磁唾壺の口縁部を意図的に打ち欠いて副葬している。また隅入方鏡は、鏡背面に模様がな素文の方形鏡で、縁が廻り、中央には鈕が付いている。隅入方鏡についても栃木県日光市男体山頂遺跡（註3）のみ出土例が知られている希少な遺物である。隅入方鏡も副葬にともない意図的に打ち割られているが、S K87とS K126で出土した鏡片は別個体であり、各木棺墓に1枚分の隅入方鏡が副葬されたことがわかる。このように2基の木棺墓に副葬されていた遺物は、国内での出土事例が少ない、遣唐使により大陸から舶来した希少品と考えられ、被葬者像を考える上で参考となる。これらの遺物は県指定文化財に指定された。

また、台地の西端に位置する第10次調査区では、1基の遺構（S K135）が検出された。S K135では土坑内から板石に上下を挟まれた企救甕が出土している。甕の内部から炭や骨片等は検出されていない。企救甕の年代から8世紀中頃～後半に位置づけられ、祭祀的遺構ないしは墓の可能性が考えられる。

以上が四日市遺跡で検出できた古代の遺構の全てである。S K135については遺構の性格などをふくめて今後とも検討が必要だが、四日市台地で検出できた古代の遺構はほぼ墓に限られるといえ、これらは単独で出土していることが特徴としてあげられる。加えて、四日市台地の北西裾部に位置する下綾垣遺跡（註4）においても古代墓が1基検出されている。周溝をとまなう土壙墓ないしは木棺墓とみられ、副葬された土師器坏から9世紀後葉と考えられる。下綾垣遺跡についても、周囲に古代の遺構は展開しておらず、墓が単独で出土している点は四日市遺跡とも共通している。

こうした古代墓のあり方は、土壙墓か木棺墓が主体となり、その立地が丘陵状ないしはその裾部に造営される9世紀代の大宰府の古代墳墓と類似した様相（註5）といえる。こうした墓の造営と、希少な舶来品の入手が可能であったことを考慮すると、四日市遺跡の木棺墓の被葬者は大宰府との関係を有する、郡に関与した官人などが推測できよう。

四日市台地は郡衙の有力な候補地と考えられている玖珠川東南部から見通すことができ、日田や豊前へと通じるルートの結節点に近い場所に立地しているながら、周辺に遺構が展開しない清閑な地であったとみられる。こうした地が古代墓の造営地として選定された要因の一つと考えられ、古代墓の調査事例が少ない大分県において、四日市遺跡の発掘調査が古代の在地有力者・官人層墓の立地や葬法を考える上での重要な知見をもたらしたといえる。

註1 後藤宗俊 2001 「豊後国風土記の世界」『玖珠町史 上巻』 玖珠町教育委員会

註2 小鹿野亮 2017 「第5次調査木炭柳木棺墓ST235から出土した越州窯系青磁唾壺の評価」『筑紫野市文化財調査報告第112集 堀池遺跡 第3・5・6次発掘調査』 筑紫野市教育委員会

註3 中川あや・降幡順子 2014 『飛鳥資料館研究図録第17冊 東アジア金属工芸史の研究17 日光二荒山神社中宮祠宝物館所蔵男体山頂遺跡出土鏡の研究』 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・日光二荒山神社

註4 村上久和・柴矢和徳 1997 「下綾垣遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(6)』

日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』 大分県教育委員会

註5 狭川真一 2011 「古代墳墓の展開」『中世墓の考古学』 高志書院

## 5. 中世

四日市遺跡では、東西に長い台地上の所々で中世の遺構が確認されている。中でも、最も西に位置する第10次、11次調査区では、まとめて遺構が検出された。

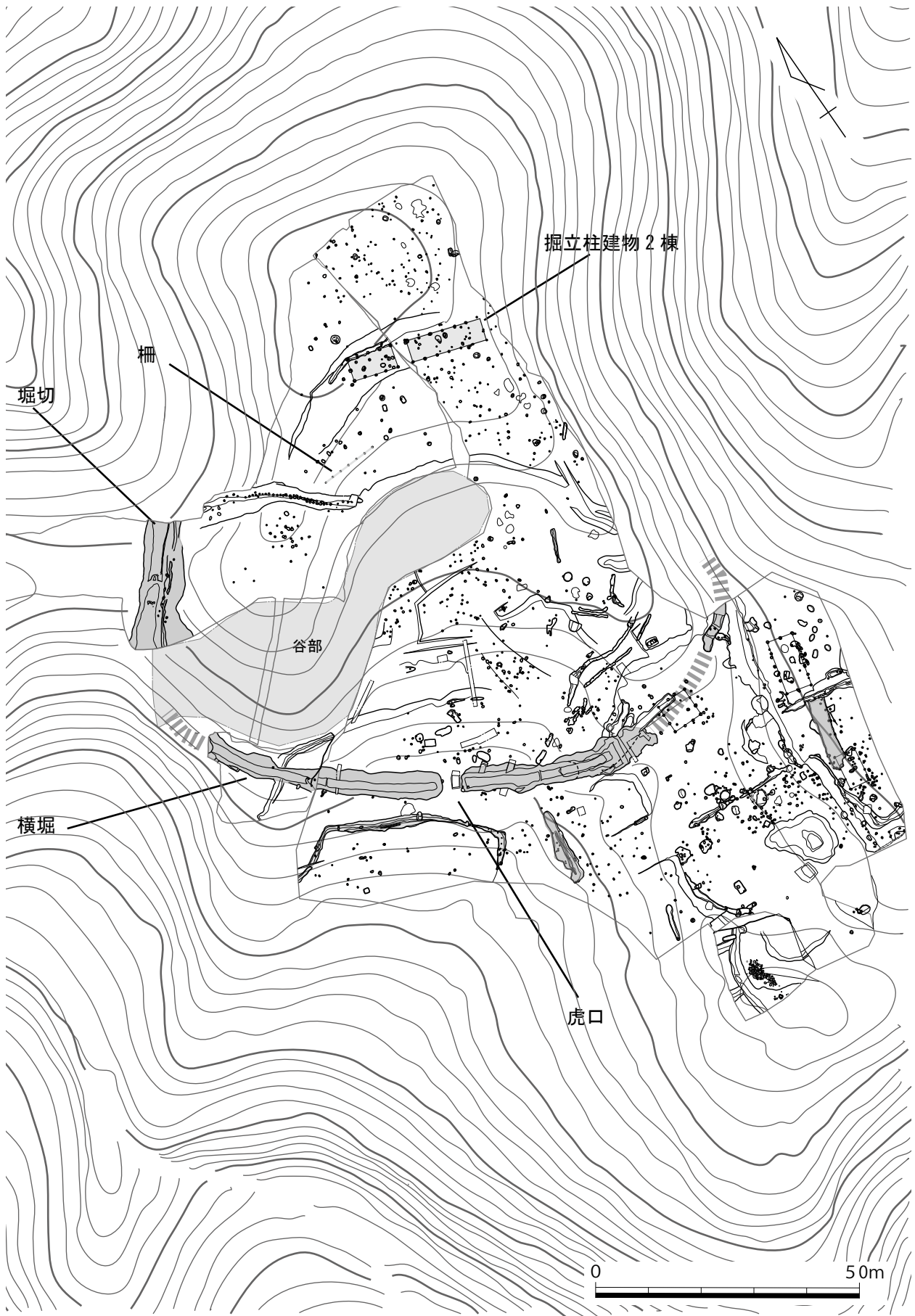
第437図は、出土遺物から12世紀後半～13世紀代の「城郭」遺構である。三方向に伸びる尾根の結節点のあまり広くない平坦地を取り込み、四日市台地の西側では最も高い標高380mの高まりを背負う形で「城域」を固めている。西側の尾根の付け根は堀切で遮断し（ただし、横堀と一体となる可能性もある）、南側の緩斜面から東側の尾根にかけては幅約5mの横堀で囲う。横堀のちょうど最南端、真ん中あたりには幅3mの土橋が作られている。北側半分は斜面部まで調査が及ばなかったため、横堀の有無は確認できていないが、おそらく最高所を取り込む形で廻っていたものと想定できる。そうすれば、内部の平坦地は小さいものの、東西100m、南北70mの楕円形を呈する「城域」を確保していたことになるだろう。建物は背後に最高所を控えた一段高い場所で2棟の掘立柱建物が並んで見つかっている。

横堀を廻らせる、「城郭」に関係すると考えられる堀が、四日市台地と玖珠盆地を挟んで南側約2kmにある陣ヶ台遺跡でも見つかっている（第438図）。幅約4mで断面逆台形の溝が長さ80mに渡って確認されているが、報告者も述べているように、伐株山から伸びる緩斜面の尾根を囲っていたものであろう。堀を緩斜面に穿ち、且つ堀の断面が逆台形という点で四日市遺跡と共通する。時期も12世紀後半から13世紀前半とまったく同じ時期である（小皿や坏を見ると、やや陣ヶ台遺跡の方が古い）。さらに、四日市遺跡から2.5kmほど東にある瀬戸遺跡では、比高差40～50mの丘陵上で12世紀後半から13世紀前半の掘立柱建物群が見つかっている。さらに13世紀の内には切岸で方形に整え、四方に伸びる尾根には堀切を入れ（発掘されたものはないが、平坦面からは室町時代以降に下る遺物は出土しておらず13世紀に構築されたと考えざるを得ない）、城郭としての形を整える。瀬戸遺跡の「城郭」と陣ヶ台遺跡・四日市遺跡で確認された横堀で囲むという「城郭」を同列で考えて良いのかどうかは慎重な検討を要するが、少なくとも、玖珠盆地周辺において、12世紀後半から13世紀前半、つまり平安時代終わりから鎌倉時代前半にかけて、何らかの軍事的緊張が高まっていたことは言えるであろう。同じ豊後に属する現在の大半の大分県の大分県の大分県においては、このような12世紀から13世紀代の横堀を伴うような、あるいは丘陵上に建物を建てるような遺跡の検出例はない。

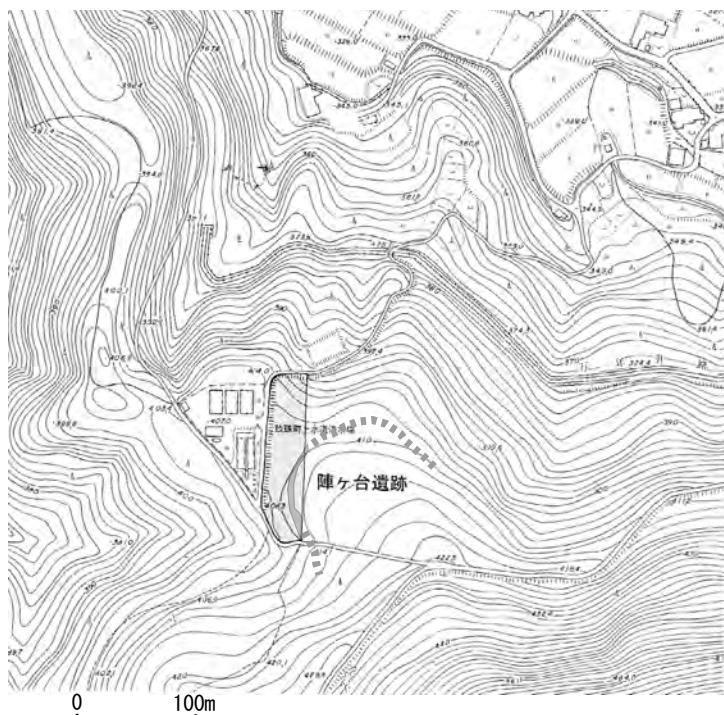
平安時代後期の保安3年（1122）には、後に玖珠郡を代表する武士団に成長する清原氏が史料（清原通次讓状案）で初めて確認できる。この清原氏は貴種流離譚伝承を持つ一族で、11世紀には玖珠郡に広く所領を有していたとされる。惣領家は郡司職を有し、庶家は長野郷や小田郷、帆足郷などの各郷司職を相伝しながら郡内に勢力を伸ばしていたが、康治2年（1143）には安楽寿院領として玖珠郡の大半が立券された。しかし、13世紀後半の段階では各郷内で分割相続による単位所領の形成が進み、その所領ごとに領家が確認できる（「豊後国弘安田代注進状」）ので、清原氏一族内部での意思の不一致、対立・抗争が生じたとされている。その抗争は具体的には12世紀後半の寿永年間以降といわれており、まさに遺構で確認できる時期と重なる。

ちなみに、四日市遺跡は旧古後郷に、陣ヶ台遺跡は旧山田郷に、瀬戸遺跡は旧帆足郷に位置すると考えられ、いずれの郷も背後に領域が広がる中で、遺跡が玖珠盆地を望むその先端部に立地していることは注目される（瀬戸遺跡は支流沿いで直接盆地に面してはいないが）。互いに見通す事のできる丘陵部に、曲線を基調とする横堀を設け、四日市遺跡の場合には一番奥に掘立柱建物を設けるなど、恒常的に人員が配備されていたことを窺わせる（この点、瀬戸遺跡は館的であり、日常居住もなされていたと考えられる）。出土遺物が一定量あることもそれを裏付けるであろう。

玖珠盆地周辺で見られるこれらの「城郭」は、鎌倉時代の内には姿を消す。南北朝期には玖珠郡の武士の多くは南朝方として玖珠城（＝高勝寺城：遺跡名としては「伐株山城」）に立て籠もるが、それらの戦乱の痕跡を示す遺跡も玖珠盆地周辺では確認できない。城郭の多くが15世紀後半以降のものであることを考えれば、12世紀後半から13世紀前半という限られた時期に、玖珠盆地周辺に「城郭」が構築される意味は大きい。やはり、「豊後



第437図 四日市遺跡の中世城郭遺構



第438図 陣ヶ台遺跡の遺構

段の中央の広いスペースのほぼ中央には2基の地下式土坑が存在する。地下式土坑からは大量の石塔部材が出土している。調査者は地下式土坑の上面に石塔が積み上げられており、その重みで崩落したと考えているが、この上段テラスの南西の一角にある列をなして検出された石塔群（南西石塔群とする）が、五輪塔の地輪と空風輪のみであることは、地下式土坑出土石材の多くが五輪塔の水輪と火輪を中心とすることを考え合わせると、埋没した地下式土坑に南西石塔群から持ち出した石材を投げ入れた可能性が高いと考える。そう考えられるとすると、この上段テラス中央部は中世の段階でどのような状況を呈していたのであろうか。可能性の一つとしては、地下式土坑から出土した石塔の内、五輪塔を除くと無縫塔が残るので、無縫塔だけが本来この地下式土坑のあった地上に立っていたとする考えである。そうであれば、ここが禅宗に関わる僧侶の埋葬された墓地空間であったとも考えられる。地下式土坑が墓であったのかどうかは、出土資料からは不明であるが、可能性は高いものとする（筆者は地下式土坑の一部は「土牢」の可能性が高いと考えているが、地下空間の利用には様々な用途があっべきで、当然ながら墓としての利用も考えられる。ただし、その場合にはあくまで特殊な事例として扱うべきであろうと考える。）。

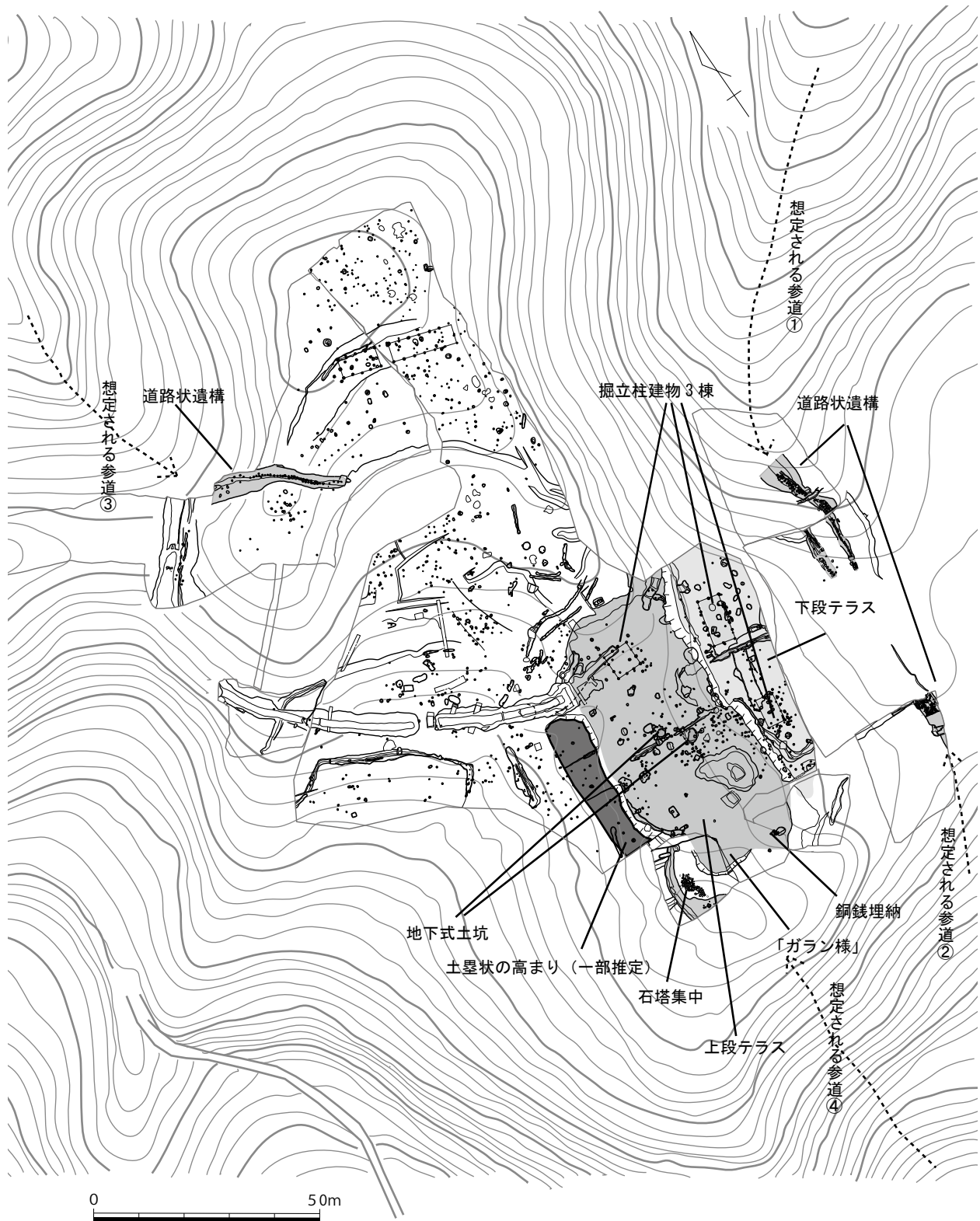
この地下式土坑は、四日市台地全体では他に3基確認されている。これらは1次調査区と4次調査区であり、台地の東端にあたる。今まで述べた台地西端の「寺院」との関連性は低いと思われる。台地東端部の調査では中世の石塔類も出土しておらず、孤立的に築かれている。これらの用途はまた別に考えた方がよいであろう。

さて、台地西端で確認された「寺院」について、もう少し構造について見てみたい。削平によって形成されたテラスの在り方から考えて、「寺院」の正面は東側であろう。そうすると、第439図に記した想定される参道の内、①と②が正規のルートである可能性が高い（第440図のように、近年までその道が使われていた。③のルートも近年まで使われていたが、下綾垣というかなり離れた集落からの道であり主要参道ではなかろう。④は、ごく最近「ガラン様」へ行くための直線ルートであり、この道が古く遡るとは考えづらい。）。まず下段テラスに入ると、そこには左右に2棟の掘立柱建物がある。この2棟は中世では通有の建物であり、居住に関わるものである可能性が高い。その間を抜けて上段に上ると、正面に僧侶の墓があり、右手（北側）には本堂とも言うべき「堂」が建っている。そして、堂とは逆の南側は一段高くなり、そこにも五輪塔が列をなして立ち並んでいた。先記した

清原氏」と総称される一族の存在、特に「内乱」といった出来事抜きには説明がつかないのではなかろうか。

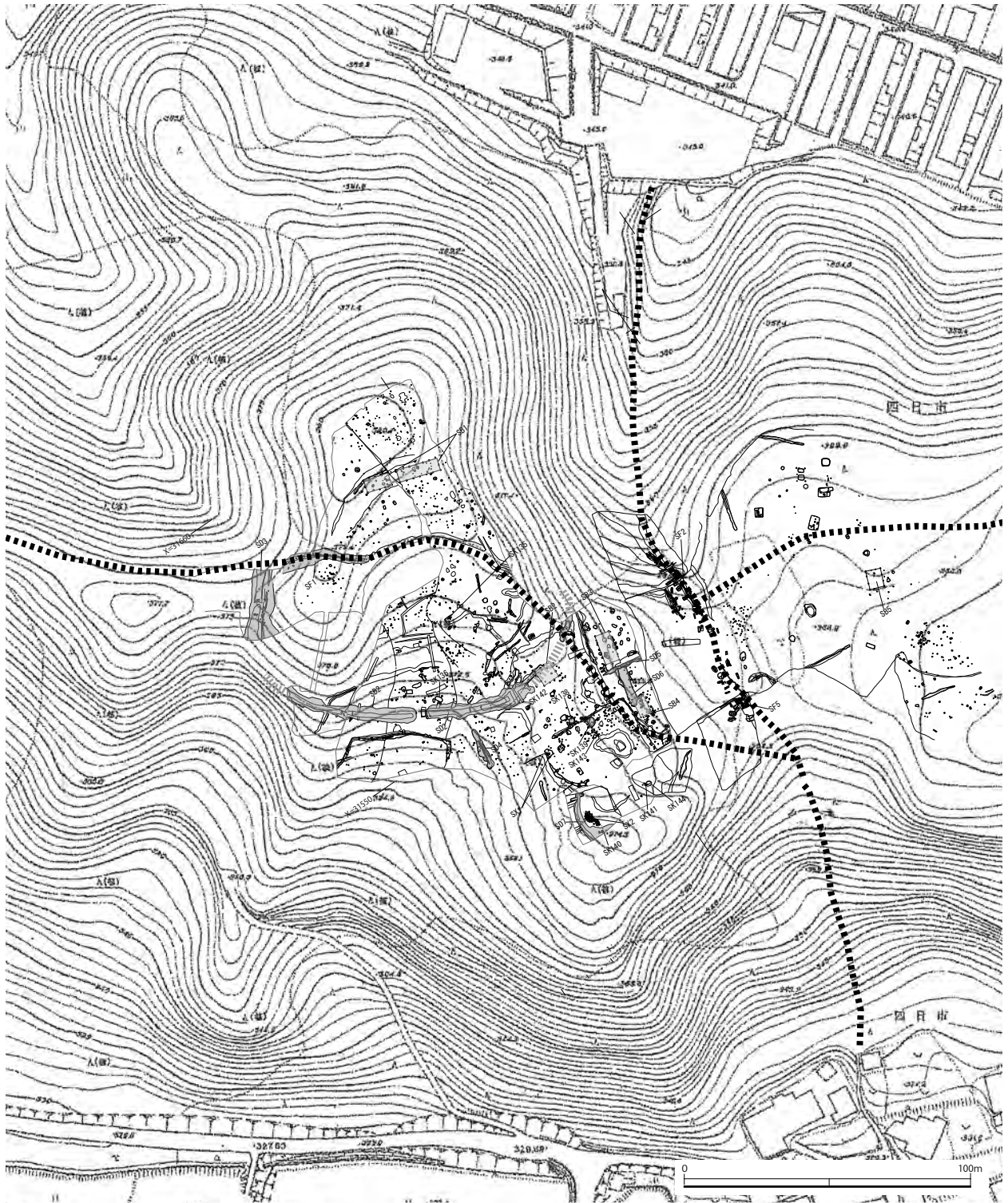
次に、15世紀後半から16世紀にかけて、「城郭」遺構のあったすぐ東側の平坦地に宗教関連遺構が形成される。調査前の段階で、この一角には「ガラン様」と呼ばれる祠があり、その側には戦国期の石塔が散乱した状況があった。調査の結果、「土塁状の高まり」を残しながら、2段に渡って削平を行い、平坦面を作り出していることがわかった。上段には3間×3間の掘立柱建物が、下段には2間×4間と2間×3間の掘立柱建物が建っていた（第439図）。

上段の3間×3間の建物はほぼ正方形を呈する宝形造りの建物で、何らかの「堂」であったと考えられる。また、上



第439図 四日市遺跡の中世寺院遺構





..... 昭和44年作成の「国土基本図」に記された道

第440図 「国土基本図」に記された道

**昭和44年作成の「国土基本図」に記された道**

昭和44年段階の「国土基本図」には、四日市台地上に幾筋もの道が表現されている。略南北に横断する道は四日市と台地北側の池の原を最短距離で結ぶ道である。その道に東西方向から台地を縦断する道が接続する。寺院遺構のある地点が、道路の結節点に位置していると同時に、四日市集落から登った取り付きの場所にあたるということでもある。そのような場所が寺院の立地として選ばれたのであろう。

## 第6章 総括

ように後に石材が持ち出された可能性が高いが、それまではここが死者供養の空間として機能していたのであろう。また、その手前東側には銅銭埋納遺構があるが、地上標識がなければ普通は意識されないものであつたろう。

この「寺院」については、地元で伝えられた「チョウフク寺」あるいは「コウフク寺」と呼ばれる「寺院」であった可能性が高い。瓦葺き礎石建物ではない、草堂と呼べる茅葺きの掘立柱建物で構成された「寺院」は、遺物からすると近世まで継続されたとは考えにくい（居住者がいなくなった状態、すなわち無住となった。）。しかしながら、明治の段階ではここに「観音堂」があつたことがわかる（『大分県社寺名勝図録』）ので、「寺院」で祀られていた「観音菩薩像」のみが台地下の「四日市村」の人々の手によって近世を通じて守られてきたのであろう。

台地の西端のこの一帯は、平坦地が少ないこともあって、江戸時代以降畑地として利用された形跡はない。その代わり、四日市の人々の宗教空間として、15世紀後半から江戸時代、明治時代と引き続き維持されてきた。そして、小さな石祠で祀られる「ガラン様」として最後を迎えたのである。

## 遺物觀察表

第1次調査区出土の旧石器時代・縄文時代草創期初頭石器類の実測図掲載の観察表

番号	大グリッド	遺物番号	ト	プロ	層	器種	南北軸	東西軸	標高	石材	長さ(奥行)	幅	厚さ(高さ)	重量	備考
1	ロD91区	17	4T	1a	II	削器	467	243	362.57	凝輝安山岩	82.12	67.85	19.15	109.00	
2	ロD91区	37	4T	1a	II	削器	902	52	362.78	凝輝安山岩	99.81	72.80	16.90	115.46	
3	ロD91区	3	4T	1b	II	石核	630	788	362.52	凝輝安山岩	22.09	69.93	23.46	90.31	
4	ロD92区	10	4T	1a	II	石核	775	902	362.79	泥岩他	31.87	81.67	61.92	199.00	礫打面
5	ロE1区	35	4T	1b	II	剥片	362	272	363.11	泥岩	57.69	117.86	19.91	117.25	
6	ロE1区	40	4T	1b	III	剥片フラグ	10	125	362.82	凝輝安山岩	81.68	55.41	16.48	89.89	折れ面
7	ロE1区	24	4T	1b	II	石核	264	315	363.03	泥岩	25.76	71.53	65.92	95.68	
8	ロD91区	11	4T	1b	II	石核	998	484	362.79	泥岩他	117.32	127.00	87.84	1270.00	
9	ロD91区	10	4T	1b	II	片刃礫器	933	517	362.76	泥岩他	117.33	89.76	59.21	749.00	
10	ロD91区	13	4T	1b	II	石核	991	463	362.76	泥岩他	82.40	41.47	57.52	254.33	
11	ロD91区	12	4T	1b	II	石核	996	473	362.8	泥岩他	115.52	66.32	59.37	666.00	
12	ロE1区	26	4T	1b	III	石核	260	305	363.02	凝輝安山岩	22.93	92.69	62.72	113.51	
13	ロE1区	5	4T	1b	II	剥片	10	379	362.79	泥岩	74.28	84.24	13.50	80.26	25と接合
14	ロE1区	25	4T	1b	III	石核	247	316	363.01	泥岩	33.93	102.02	63.83	249.53	5と接合
15	イE10区	1	4T	ブ外	II	細石刃	534	688	362.9	牟田系黒曜岩	21.06	7.42	1.80	0.31	端部礫面
16	イE19区	16	4T	2	2	尖頭器未成品	866	58	364.19	泥岩	100.33	52.92	23.87	105.14	
17	イE19区	27	4T	2	2	剥片	954	40	364.22	泥岩	60.38	82.67	23.10	102.19	
18	イE19区	9	4T	2	3	剥片	780	75	364.01	泥岩	102.21	101.18	20.64	171.45	
19	イE19区	11	4T	2	3	石核	826	99	363.97	泥岩	83.68	55.55	63.86	355.00	
20	イE29区	16	4T	2	3	石核	1	43	364.18	チャート	29.95	22.07	16.37	7.92	
21	イE29区	3	4T	3	3	尖頭器未成品	166	720	364.21	泥岩他	136.95	115.58	25.14	575.00	
22	イE46区	2	5T		黒	ナイフ形石器				灰色黒曜岩	24.10	15.63	5.46	1.36	破損
23	イE46区	1	5T		黒	剥片				灰色黒曜岩	33.06	29.64	11.10	6.47	
24	イE58区	229	7T	1	3	搔器	615	562.5	365.37	泥岩	65.01	35.15	15.42	40.88	
25	イE58区	227	7T	1	III	削器	602	543	365.320	泥岩	56.90	64.35	20.38	66.72	
26	イE58区	476	7T	1	III	石斧未成品	833.5	922.5	365.410	泥岩	53.70	69.24	25.99	108.83	破損
27	イE58区	346	7T	1	III	両刃礫器	713.5	858	365.385	泥岩	44.85	122.88	50.22	682.00	
28	イE58区	390	7T	1	IIIu	剥片	848.5	920	365.410	泥岩?	79.73	59.17	22.14	99.13	
29	イE58区	133	7T	1	III	剥片	778	614	365.435	泥岩	70.43	129.39	19.22	145.75	石斧の調整
30	イE58区	127	7T	1	III	石核	675.5	606	365.400	泥岩	86.02	68.23	34.44	222.04	
31	イE58区	413	7T	1	III	原石	697.5	736.5	365.390	凝輝安山岩	48.44	78.92	61.67	251.18	質見剥離有
32	イE58区	458	7T	1	III	石核	848.5	968	365.400	泥岩	37.69	94.36	69.98	350.00	
33	イE58区	198	7T	1	III	石核	738	446.5	365.425	泥岩					
34	イE58区	389	7T	1	III	石核	862	916	365.410	泥岩	37.69	62.26	36.45	138.38	
35	イE58区	一括	7T	1	III	石核				泥岩	46.16	79.14	82.93	343.00	
36	イE58区	197b	7T	1	III	石核	725	437	365.420	泥岩	71.72	63.48	61.21	291.35	
37	イE58区	53	7T	1	III	剥片	792	517	365.380	泥岩	88.69	99.50	50.68	540.00	
38	イE58区	54	7T	1	III	石核	803.5	518	365.400	泥岩	113.68	91.88	91.61	1003.00	接合
39	イE58区	428	7T	1	III	削器	792	765.5	365.360	凝輝安山岩	61.76	37.72	20.30	40.08	
40	イE58区	196	7T	1	III	剥片	706	408	365.445	凝輝安山岩	86.03	73.40	14.82	106.63	
41	イE58区	69	7T	1	II	剥片	716.5	728.5	365.491	凝輝安山岩	69.27	53.09	15.90	60.96	
42	イE58区	43	7T	1	II	フラグメント	698	674	365.579	凝輝安山岩	13.17	42.21	12.11	6.73	接4
43	イE58区	365	7T	1	III	石核	966.5	915	365.415	泥岩	25.53	81.15	74.40	156.50	
44	イE58区	275	7T	1	III	石核	703.5	827.5	365.400	泥岩	19.38	53.23	53.38	99.17	
45	イE58区	457	7T	1	III	石核	843.5	967	365.430	泥岩	59.26	37.74	67.87	175.65	
46	イE58区	216	7T	1	III	石核	593.5	447	365.470	泥岩	21.53	22.45	58.92	43.96	

番号	大グリッド	遺物 番号	ト	プロ	層	器種	南北 軸	東西 軸	標高	石材	長さ (奥行)	幅	高さ (高さ)	重量	備考
47	イE58区	299	7T	1	Ⅲ	原石	785	765	365.370	泥岩	92.46	60.75	48.89	422.00	
48	イE58区	285	7T	1	Ⅲ	素材	734.5	726	365.370	泥岩	112.76	59.97	29.56	333.00	
49	イE58区	44	7T	1	Ⅱ	石核	696	639	365.554	不明	29.09	59.06	32.50	39.08	
50	イE58区	296	7T	1	Ⅲ	剥片	719.5	800	365.415	凝輝安山岩	113.05	72.48	19.15	170.67	
51	イE58区	338	7T	1	Ⅲ	石核	675	818	365.400	凝輝安山岩	49.63	79.42	118.76	411.00	
52	イE58区	344	7T	1	Ⅲ	石核	613.5	814.5	365.375	凝輝安山岩	100.90	75.61	39.66	359.00	
53	イE58区	303	7T	1	Ⅲ	石核	812.5	727.5	365.380	凝輝安山岩	78.47	55.26	45.11	244.78	
54	イE58区	254	7T	1	Ⅲ	石核	810	717.5	365.400	凝輝安山岩	40.65	60.60	54.94	143.03	
55	イE58区	273	7T	1	Ⅲ	石核	699	703.5	365.350	凝輝安山岩	145.00	142.00	95.00	2410.00	
56	イE58区	160	7T	1	Ⅲ	原石	750	710	365.400	泥/凝輝安山岩	62.72	77.61	48.71	272.40	泥岩部分を質見
57	イE58区	333	7T	1	Ⅲ	剥片	670	899	365.395	凝輝安山岩	99.97	65.82	13.83	93.50	
58	イE58区	345	7T	1	Ⅲ	剥片	616	824	365.380	凝輝安山岩	103.63	68.63	27.39	278.74	
59	イE58区	256	7T	1	Ⅲ	敲石	816.5	823	365.415	角閃石安山岩	40.57	55.31	19.72	173.10	接合
	イE58区	310	7T	1	Ⅲ		803.5	757.5	365.390		74.55	58.62	35.76	173.10	
60	イE68区	8	8T	1	Ⅲ	石核	88.0		366.000	灰色黒曜岩	41.49	40.85	19.72	28.40	剥片素材

凡例

- 1 旧石器の確認トレンチは、7aT (7a トレンチ7b) /7bT (7b トレンチ)と省略している。
- 2 同一個体で泥岩と凝灰岩質輝石安山岩がみられる資料は(56)、泥/凝輝安山岩と省略した。
- 3 凝灰岩質輝石安山岩は、凝輝安山岩と省略した。
- 4 「プロ」は、石器ブロックである。

第16次調査区 土器観察表

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第30図	82	SH78	弥生土器	甕	(28.8)	8.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	少	少	多	外面：スス	B区 S-063	11
第30図	83	SH78	弥生土器	壺	(13.0)	15.5	(4.8)	外面：ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	多	多		多		B区 S-063	10
第30図	84	SH78	弥生土器	壺		16.2+ a	7.0	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	多	多	多	多		B区 S-063	6・7
第32図	85	SH83	弥生土器	甕		12.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-028	1
第32図	86	SH83	弥生土器	蓋		2.1+ a	(10.5)	外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		少	穿孔2ヶ所	A区 S-028	
第32図	87	SH83	弥生土器	壺		3.3+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内面：黒斑	A区 S-028	
第32図	88	SH83	弥生土器	壺		5.0+ a	7.0	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ・指オサエ	多	多		多	内外面：スス	A区 S-028	2
第32図	89	SH83	弥生土器	器台		15.2+ a	(10.7)	外面：タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-028	
第35図	92	SH121	弥生土器	甕	37.2	47.0	8.6	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多			内外面：コゲ・スス	A区 S-101	33・36
第35図	93	SH121	弥生土器	甕		23.0+ a	7.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多				A区 S-101焼土中	23・27
第35図	94	SH121	弥生土器	甕	(27.2)	22.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-101	31・32・39・41
第35図	95	SH121	弥生土器	甕		7.1+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-101焼土下	
第35図	96	SH121	弥生土器	甕		6.8+ a	6.3	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多	少			A区 S-101	20
第35図	97	SH121	弥生土器	壺		12.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ナデ	多	多				A区 S-101	4～6・8～10・12
第35図	98	SH121	弥生土器	壺		24.0+ a	(34.4)	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-101焼土	3・14・22・29・33・38・40
第35図	99	SH121	弥生土器	器台		10.8+ a	(8.6)	外面：タテハケ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-101焼土中・下	
第35図	100	SH121	弥生土器	鉢	(23.6)	7.6+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-101	23・24
第35図	101	SH121	弥生土器	高坏か	(19.6)	6.0+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ		少			内外面：丹塗り	A区 S-101焼土下	2層
第37図	102	SH122	弥生土器	甕か		1.2+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	少			少	内外面：丹塗り	A区 S-179	
第37図	103	SH122	弥生土器	甕		2.4+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-179	
第37図	104	SH122	弥生土器	壺		2.1+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少				内外面：丹塗り	A区 S-179	
第37図	105	SH122	弥生土器	長頸壺		4.8+ a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少				内外面：丹塗り	A区 S-179周溝	
第37図	106	SH122	弥生土器	壺		4.8+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-179	
第37図	107	SH122	弥生土器	壺		1.9+ a	(6.0)	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少	少			丹塗り	A区 S-179柱穴3	
第37図	108	SH122	弥生土器	鉢		3.4+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少			穿孔2カ所	A区 S-179	
第39図	119	SH123	弥生土器	甕	(28.0)	5.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-128	
第39図	120	SH123	弥生土器	甕		3.8+ a		外面：不明 内面：不明	少	少		少		A区 S-128	4
第39図	121	SH123	弥生土器	甕		5.2+ a	(6.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-128	
第39図	122	SH123	弥生土器	甕		6.0+ a	6.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多	多	多		A区 S-128	5
第39図	123	SH123	弥生土器	鉢	27.4	17.6	6.7	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	多		多		A区 S-128	7
第39図	124	SH123	弥生土器	高坏		5.0+ a		外面：不明 内面：ナデ・シボリ痕	少	多		多		A区 S-128	6
第41図	128	SH124	弥生土器	甕	(28.2)	7.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-200・148	
第41図	129	SH124	弥生土器	甕		5.4+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-200	
第41図	130	SH124	弥生土器	甕		5.1+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-200	
第41図	131	SH124	弥生土器	甕		5.0+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-200	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第41回	132	SH124	弥生土器	甕	(25.6)	5.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多		少		A区 S-200	
第41回	133	SH124	弥生土器	甕		7.4+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少	内面：黒斑 外面：スス	A区 S-200	
第41回	134	SH124	弥生土器	甕		5.5+a	7.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-200	
第41回	135	SH124	弥生土器	甕		8.8+a	(9.7)	外面：タテハケ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：丹塗り	A区 S-200	
第41回	136	SH124	弥生土器	壺		5.8+a	(6.7)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：タテナデ・ヨコナデ	少	少				A区 S-200	
第41回	137	SH124	弥生土器	壺		4.7+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	多	多				A区 S-200	
第41回	138	SH124	弥生土器	甕		2.0+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-200	
第41回	139	SH124	弥生土器	壺		3.0+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-200	
第41回	140	SH124	弥生土器	高坏		10.8+a		外面：タテハケ・ナデ 内面：シボリ痕・タテナデ	多	多		多		A区 S-200	
第41回	141	SH124	弥生土器	高坏		4.3+a	(16.1)	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少	少	少	外面：丹塗り	A区 S-200	6層
第41回	142	SH124	弥生土器	鉢	(15.7)	6.4+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		多		A区 S-200	
第41回	143	SH124	弥生土器	鉢		4.0+a	4.0	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：タテナデ	多	多		多		A区 S-200	
第41回	144	SH124	弥生土器	ミニチュア土器		3.7+a	9.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多				A区 S-200	
第43回	146	SH125	弥生土器	甕		8.1+a	6.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多	多	多	内面：スス	A区 S-257	2
第43回	147	SH125	弥生土器	甕		5.4+a	6.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多	少	多		A区 S-257	1
第43回	148	SH125	弥生土器	壺		24.2+a	6.6	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-257 Pit1	
第43回	149	SH125	弥生土器	壺		6.3+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-257	
第43回	150	SH125	弥生土器	高坏か		1.9+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少		A区 S-257	
第45回	151	SH126	弥生土器	甕	(27.0)	23.8+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多			外面：スス	A区 S-231	検出他
第45回	152	SH126	弥生土器	甕	(22.6)	6.3		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	部分的に顔料	A区 S-231土坑1	
第45回	153	SH126	弥生土器	甕		1.7+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-231	
第45回	154	SH126	弥生土器	甕		3.4+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-231	4
第45回	155	SH126	弥生土器	甕		8.7+a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		多	外面：丹塗り・スス	A区 S-231土坑1	
第45回	156	SH126	弥生土器	甕		9.2+a	7.4	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-231	6
第45回	157	SH126	弥生土器	甕		6.4+a	(7.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-231	7
第45回	158	SH126	弥生土器	甕		7.1+a	(6.4)	外面：ナメハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-231	9・11
第45回	159	SH126	弥生土器	甕		7.3+a	6.5	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-231土坑1	
第45回	160	SH126	弥生土器	甕		9.4+a	(7.5)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	少		多	外面：スス	A区 S-231	5
第45回	161	SH126	弥生土器	長頸壺	(7.7)	2.8+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-231	
第45回	162	SH126	弥生土器	壺		3.4+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ	少	少		少		A区 S-231土坑	
第45回	163	SH126	弥生土器	鉢	(10.3)	7.1	(5.2)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-231	検出
第45回	164	SH126	弥生土器	高坏か	(19.2)	4.9+a		外面：ヨコナデ・不明 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少		A区 S-231	3
第45回	165	SH126	弥生土器	鉢	(15.7)	11.0+a		外面：ヨコハケ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-231	
第45回	166	SH126	弥生土器	鉢	(8.4)	8.0	5.2	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多	外面：黒斑	A区 S-231	1
第45回	167	SH126	弥生土器	器台		7.5+a	(12.8)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：タテナデ・ヨコナデ	少	少				A区 S-231	
第45回	168	SH126	弥生土器	高坏か		5.3+a	(12.0)	外面：タテナデ・ヨコナデ 内面：工具痕・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-231	

挿入 番号	遺物 番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃 石	長石	石英	その他			
第45図	169	SH126	弥生土器	ミニチュア 土器		1.9+ a	2.0	外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-231	
第49図	183	SH127	弥生土器	甕	(29.4)	16.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-230	2
第49図	184	SH127	弥生土器	甕	(21.6)	18.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-230	検出
第49図	185	SH127	弥生土器	壺		5.2+ a	(9.0)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	多	多		少		A区 S-230	3
第49図	186	SH127	弥生土器	鉢	(17.4)	5.9+ a	(9.7)	外面：ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-230	
第49図	187	SH127	弥生土器	鉢	23.6	9.9+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多		A区 S-230	検出
第49図	188	SH127	弥生土器	ミニチュア 土器	3.6	3.9	2.3	外面：ナデ 内面：ヘラケズリ	多	多				A区 S-230	
第49図	189	SH127	弥生土器	高坏		8.5+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕・ナデ		多		少		A区 S-230	
第49図	190	SH127	弥生土器	器台		5.8+ a	(10.6)	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ		少		少		A区 S-230	
第49図	191	SH127	弥生土器	鉢	(23.0)	7.9+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-230	
第52図	194	SH128	弥生土器	甕	(27.6)	17.2		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-294Pit3	
第52図	195	SH128	弥生土器	甕	(29.0)	7.7+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多				A区 S-294	
第52図	196	SH128	弥生土器	甕	(30.6)	5.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多		A区 S-294	
第52図	197	SH128	弥生土器	甕		6.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-294Pit11	
第52図	198	SH128	弥生土器	甕		3.8+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-294	
第52図	199	SH128	弥生土器	甕		1.5+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-294	
第52図	200	SH128	弥生土器	甕		9.8+ a	(7.6)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少		多	外面：スス	A区 S-294	
第52図	201	SH128	弥生土器	甕		12.4+ a	7.6	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少		多	外面：スス	A区 S-294	
第52図	202	SH128	弥生土器	甕		11.0+ a	7.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ナデ	多	少		多		A区 S-294	
第52図	203	SH128	弥生土器	甕		9.0+ a		外面：ヨコハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-294	1
第52図	204	SH128	弥生土器	壺		11.0+ a		外面：ミガキ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-294	
第53図	206	SH129	弥生土器	甕	(21.6)	7.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-242	
第53図	207	SH129	弥生土器	甕	(22.4)	8.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-242土坑1	
第53図	208	SH129	弥生土器	甕		6.0+ a	(6.5)	外面：タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-242	
第53図	209	SH129	弥生土器	甕		2.7+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		少		A区 S-242	
第53図	210	SH129	弥生土器	壺		13.4+ a	5.9	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：工具ナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-242	6
第53図	211	SH129	弥生土器	壺		5.3+ a	(8.7)	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-242	5
第53図	212	SH129	弥生土器	壺		3.3+ a	(6.5)	外面：ミガキ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り、穿 孔3ヶ所残存	A区 S-242	
第53図	213	SH129	弥生土器	壺		9.1+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-242	1
第53図	214	SH129	弥生土器	短頸壺	(13.2)	4.0+ a		外面：ミガキ 内面：工具ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-242土坑1他	10
第53図	215	SH129	弥生土器	高坏		3.4+ a		外面：不明 内面：ミガキ	多	多		多	内面：丹塗り	A区 S-242	
第53図	216	SH129	弥生土器	高坏		6.7+ a		外面：ミガキ 内面：工具ナデ・シボリ痕	少	少	少		外面：丹塗り	A区 S-242	
第53図	217	SH129	弥生土器	蓋		2.0+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ		少		少	外面：丹塗り	A区 S-242	
第53図	218	SH129	弥生土器	器台	(11.0)	10.3+ a		外面：ヨコナデ・ナナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ		多				A区 S-242	
第53図	219	SH129	弥生土器	台付鉢 か		5.0+ a	(6.4)	外面：ハケ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-242	
第56図	227	SH130	弥生土器	甕	(40.1)	17.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-080	9・10・13



挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第56図	228	SH130	弥生土器	甕	(23.1)	7.1+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	多		多		A区 S-080	
第56図	229	SH130	弥生土器	甕		5.8+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-080	24
第56図	230	SH130	弥生土器	甕		5.1+a	8.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	少		多		A区 S-080	14
第56図	231	SH130	弥生土器	甕	(6.9)	14.0+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多				A区 S-080	15
第56図	232	SH130	弥生土器	壺	(30.6)	3.7+a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-080	
第56図	233	SH130	弥生土器	壺		7.6+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	多		少		A区 S-080	26
第56図	234	SH130	弥生土器	壺	(26.0)	10.2+a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-080	
第56図	235	SH130	弥生土器	壺		18.2+a	(7.0)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-080	12・17
第56図	236	SH130	弥生土器	器台		10.6+a	9.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-080	
第56図	237	SH130	弥生土器	高坏	(24.0)	4.2+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-080・036	19
第59図	241	SH131	弥生土器	甕		4.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-268	
第59図	242	SH131	弥生土器	壺		6.3+a	6.1	外面：ミガキ 内面：工具ナデ	多	多	少	多	外面：丹塗り	A区 S-268	
第61図	243	SH132	弥生土器	高坏	(17.3)	5.6+a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-289	
第63図	245	SH133	弥生土器	甕		3.2+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少					A区 S-287	
第65図	246	SH134	弥生土器	甕		3.3+a		外面：ヨコナデ・ナナメハケ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-312Pit1	
第65図	247	SH134	弥生土器	壺	(31.4)			外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-312Pit2	
第65図	248	SH134	弥生土器	壺		8.9+a	(9.6)	外面：ナナメハケ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-312	
第65図	249	SH134	弥生土器	鉢		5.6+a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-312	
第65図	250	SH134	弥生土器	ミコチュア土器		1.5+a	1.8	外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-312	
第67図	256	SH135	弥生土器	器台		18.2		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-300・301	
第67図	257	SH135	弥生土器	甕		3.0+a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-301土坑1	
第67図	258	SH135	弥生土器	甕		3.2+a		外面：ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-301土坑1	
第69図	259	SH136	弥生土器	甕	(29.7)	18.8+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少	多	多		A区 S-262	11・17・18
第69図	260	SH136	弥生土器	甕	(26.9)	11.3+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多		A区 S-262	30
第69図	261	SH136	弥生土器	甕	39.2	10.0+a		外面：不明 内面：不明	多	多		多	外面：スス	A区 S-262	83
第69図	262	SH136	弥生土器	甕	34.0	6.8+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	少		多		A区 S-262	69
第69図	263	SH136	弥生土器	甕	28.4	25.2+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少	外面：スス・コゲ	A区 S-262	45
第69図	264	SH136	弥生土器	甕	(24.0)	8.5+a		外面：ヨコナデ・ナナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			外面：スス	A区 S-262	
第69図	265	SH136	弥生土器	甕	(18.8)	6.5+a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-262	3・26
第69図	266	SH136	弥生土器	甕		8.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-262	27・68
第69図	267	SH136	弥生土器	甕		5.4+a	6.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-262	66
第69図	268	SH136	弥生土器	甕		18.7+a	7.4	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：不明	多	多		多	内外面：スス・コゲ	A区 S-262	83
第69図	269	SH136	弥生土器	甕		5.1+a	6.6	外面：不明 内面：ナデ	多	少		多	内外面：スス	A区 S-262	78
第69図	270	SH136	弥生土器	甕		7.4+a	8.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-262	
第69図	271	SH136	弥生土器	甕		8.7+a	7.4	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		多	内外面：スス	A区 S-262	25
第69図	272	SH136	弥生土器	甕	(32.2)	4.0+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ		少		少	内外：丹塗り	A区 S-262	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第69図	273	SH136	弥生土器	甕	34.2	35.0	(6.0)	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少	黒斑	A区 S-262土坑8・10	43～46
第70図	274	SH136	弥生土器	鉢	(23.4)	13.4	7.1	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・不明	少	少		少		A区 S-262	82
第70図	275	SH136	弥生土器	鉢	(21.2)	9.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-262	
第70図	276	SH136	弥生土器	台付鉢	(21.5)	17.2+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少	少	少	円盤充填	A区 S-262	12
第70図	277	SH136	弥生土器	甕		5.0+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-262	56
第70図	278	SH136	弥生土器	鉢	(10.3)	9.65	5.0	外面：ヨコナデ・タテハケ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多	穿孔	A区 S-262	
第70図	279	SH136	弥生土器	壺	(31.8)	26.5+ a	(31.5)	外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		A区 S-262土坑7他	60・67・79
第70図	280	SH136	弥生土器	壺	(27.6)	6.8+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ケズリ・ヨコナデ・ミガキ	多			少	内面：スス	A区 S-262土坑3他	41
第70図	281	SH136	弥生土器	壺	(20.0)	28.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-262土坑3・6他	65
第70図	282	SH136	弥生土器	広口壺	(28.0～29.4)	43.3	7.7	外面：ヨコナデ・タテハケ・ミガキ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-262土坑7他	50～52・72・74
第71図	283	SH136	弥生土器	広口壺	32.7	15.5+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ・ヨコナデ・ナデ		少		少	内外面：丹塗り	A区 S-262	33・61・64
第71図	284	SH136	弥生土器	壺		5.7+ a	8.4	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		少	外面：黒斑	A区 S-262土坑2他	38
第71図	285	SH136	弥生土器	壺		3.4+ a	5.8	外面：ナデ・不明 内面：ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-262	57
第71図	286	SH136	弥生土器	長頸壺	10.3	29.8	6.2	外面：ヨコナデ・ナデ・ミガキ 内面：ミガキ・タテハケ・ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-262	5～8・16
第71図	287	SH136	弥生土器	長頸壺	(8.9)	7.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・工具ナデ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-262	
第71図	288	SH136	弥生土器	高坏	30.0	26.2	16.4	外面：ナデ・不明 内面：シボリ痕・ナデ・不明	多	少		多		A区 S-262	1・4・9・11・14・23・24
第71図	289	SH136	弥生土器	高坏		2.1+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-262	
第71図	290	SH136	弥生土器	高坏		4.0+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ・不明 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-262	
第71図	291	SH136	弥生土器	高坏		5.2+ a	11.8	外面：ヨコナデ・不明 内面：不明	少	少	少	少	被熱	A区 S-262	13
第71図	292	SH136	弥生土器	高坏		10.8+ a	8.5	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ・シボリ痕	少	少	少	少	外面：丹塗り 内外面：スス	A区 S-262	29
第71図	293	SH136	弥生土器	高坏		4.3+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ		少		少		A区 S-262	
第71図	294	SH136	弥生土器	高坏		3.8+ a		外面：不明 内面：シボリ痕	少	少		少		A区 S-262	
第71図	295	SH136	弥生土器	高坏		9.5+ a		外面：タテハケ 内面：シボリ痕・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-262	
第71図	296	SH136	弥生土器	高坏		11.6+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ・シボリ痕	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-262	48
第71図	297	SH136	弥生土器	器台	11.1	17.1	9.3	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-262	
第71図	298	SH136	弥生土器	器台	(10.5)	17.2	(9.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-262	
第71図	303	SH136	弥生土器	ミニチュア土器	5.9	3.3		外面：ナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-262	47
第75図	313	SH137	弥生土器	甕	(29.3)	19.3		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-077	2
第75図	314	SH137	弥生土器	甕	(26.5)	12.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-077	
第75図	315	SH137	弥生土器	甕	(29.2)	7.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-077	
第75図	316	SH137	弥生土器	鉢		6.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	少		少	外面：スス	A区 S-077	
第77図	319	SH138	弥生土器	甕		8.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多		A区 S-216	
第77図	320	SH138	弥生土器	甕	(22.0)	2.3+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多	多	多		A区 S-216	
第77図	321	SH138	弥生土器	鉢か	(19.0)	6.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ		多		多		A区 S-216	
第77図	322	SH138	弥生土器	甕		10.2+ a	(6.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-216	
第77図	323	SH138	弥生土器	甕		1.0+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-216	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第77図	324	SH138	弥生土器	壺		5.9+ a	11.4	外面：タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-216土坑1	
第77図	325	SH138	弥生土器	壺		3.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-216	
第77図	326	SH138	弥生土器	壺		10.0+ a	(3.6)	外面：ナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		多		A区 S-216土坑	
第77図	327	SH138	弥生土器	器台		5.2+ a	(12.7)	外面：タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-216	
第79図	329	SH139	弥生土器	甕	(46.0)	6.5+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-220	8・1層・2層
第79図	330	SH139	弥生土器	甕	(26.0)	9.0		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-220	33・1層
第79図	331	SH139	弥生土器	甕	22.1	6.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-220	1層・2層
第79図	332	SH139	弥生土器	蓋		4.7+ a		外面：タテハケ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-220	2層
第79図	333	SH139	弥生土器	甕	(33.0)	4.9+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：丹塗り	A区 S-220	1層
第79図	334	SH139	弥生土器	甕	(30.2)	32.2+ a		外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多	内外面：丹塗り	A区 S-220	37
第79図	335	SH139	弥生土器	壺		31.7+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-220土坑	26
第79図	336	SH139	弥生土器	壺		24.4+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ	多	多			赤色顔料が点々と付着	A区 S-220	32・34・36・1層・2層・8層
第79図	337	SH139	弥生土器	壺				外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		少		A区 S-220	1層
第79図	338	SH139	弥生土器	壺	(43.8)	15.1+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	少	少		少	内外面：スス、丹塗り	A区 S-220	28・1層
第79図	339	SH139	弥生土器	壺	(30.2)	5.0+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ハケ・ミガキ	少	少		少	内面：スス	A区 S-220	37
第79図	340	SH139	弥生土器	壺		4.3	6.9	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	多	多		少		A区 S-220	1層
第79図	341	SH139	弥生土器	壺		5.0+ a	6.2	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ	多	多				A区 S-220	2層
第80図	342	SH139	弥生土器	壺		15.8+ a	9.6	外面：ナデ・工具ナデ 内面：工具ナデ	多	多		少		A区 S-220	1層
第80図	343	SH139	弥生土器	甕		13.9+ a	8.6	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：不明	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-220	24
第80図	344	SH139	弥生土器	壺	(6.7)	9.3	3.8	外面：ミガキ・工具ナデ 内面：ミガキ・工具ナデ	少	多		多		A区 S-220	15・1層・2層
第80図	345	SH139	弥生土器	短頸壺	11.4	9.2～9.7	6.4	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少	少	少	外面：丹塗り、穿孔、外面被熱	A区 S-220	30
第80図	346	SH139	弥生土器	高坏	26.4	5.9+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-220	1層・2層
第80図	347	SH139	弥生土器	高坏	(26.6)	8.0+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		多	内外面：丹塗り	A区 S-220	31
第80図	348	SH139	弥生土器	高坏	(30.4)	5.4+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	丹塗り	A区 S-220	1層・2層
第80図	349	SH139	弥生土器	高坏		24.9+ a	(18.6)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：シボリ痕・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-220	14・16・2層
第80図	350	SH139	弥生土器	鉢か		10.1+ a	7.3	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-220	23
第80図	351	SH139	弥生土器	鉢	26.7	23.0	8.4	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-220	38・1層
第80図	352	SH139	弥生土器	鉢	(18.8)	(9.8)		外面：ナデ・工具ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	少		少	外面：スス	A区 S-220	1層・2層
第80図	353	SH139	弥生土器	鉢	23.0	16.5	8.05	外面：不明 内面：不明	少	少	少	少	内外面：黒斑	A区 S-220	6・19・2層
第81図	354	SH139	弥生土器	鉢	(12.4)	10.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-220	1層
第81図	355	SH139	弥生土器	鉢		(5.7)		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-220	1層
第81図	356	SH139	弥生土器	器台		9.2+ a	(10.5)	外面：タテハケ 内面：工具ナデ	多	多				A区 S-220	1層
第81図	357	SH139	弥生土器	器台	8.9	17.3	10.7	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-220	27
第81図	358	SH139	弥生土器	器台	9.9	17.3～17.4	11.4	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-220	35
第81図	359	SH139	弥生土器	器台	9.9	17.7～17.8	11.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少	少	少		A区 S-220	40
第86図	376	SH140	弥生土器	甕		4.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少	内外面：スス	A区 S-304	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第86図	377	SH140	弥生土器	甕		6.2+ a	8.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-304	10
第86図	378	SH140	弥生土器	甕		2.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ		少		少	内外面：丹塗り	A区 S-304	
第86図	379	SH140	弥生土器	壺		2.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		少		A区 S-304	
第86図	380	SH140	弥生土器	壺		12.7+ a	10.4	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	多		少	外面：スス	A区 S-304	13・16
第86図	381	SH140	弥生土器	壺		19.3+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-304	10・11
第86図	382	SH140	弥生土器	高坏		12.0+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕・ナデ	多	多		少		A区 S-304	
第86図	383	SH140	弥生土器	器台	(9.8)	10.4+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-304土坑1	
第88図	389	SH141	弥生土器	甕		5.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-242	
第88図	390	SH141	弥生土器	甕		4.3+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-242	6
第88図	391	SH141	弥生土器	壺	(17.6)	10.2+ a		外面：工具ナデ 内面：ナデ	少	少		少		B区 S-242	17
第88図	392	SH141	弥生土器	壺	(27.0)	2.4+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		B区 S-242	10
第88図	393	SH141	弥生土器	壺		6.4+ a	(7.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	B区 S-242	7
第88図	394	SH141	弥生土器	高坏		11.7+ a		外面：ナデ 外面：シボリ痕・ナデ	多	多		多		B区 S-242	1層
第88図	395	SH141	弥生土器	器台		8.0+ a	(9.3)	外面：ナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-242	1
第88図	396	SH141	弥生土器	高坏	(21.6)	7.8+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	多	多		多	外面：黒斑 内外面：丹塗り	B区 S-242	
第88図	397	SH141	弥生土器	鉢	(18.0)	8.2+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-242	16
第90図	398	SH142	弥生土器	甕		12.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少	外面：スス	B区 S-090	12
第90図	399	SH142	弥生土器	甕		8.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		少		B区 S-090	10
第90図	400	SH142	弥生土器	壺		13.6+ a	(6.4)	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少			少	外面：丹塗り、スス	B区 S-090	7
第90図	401	SH142	弥生土器	壺		12.8+ a	7.2	外面：タテハケ 内面：ナデ	多	少	少		内面：スス 外面：黒斑	B区 S-090	5・11
第90図	402	SH142	弥生土器	蓋		6.2+ a		外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少		B区 S-090	8
第92図	403	SH143	弥生土器	甕	26.3	34.3	6.4	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少	内外面：スス	B区 S-065	22
第92図	404	SH143	弥生土器	甕	27.8	21.2+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		多	外面：スス	B区 S-065	18・下層一括
第92図	405	SH143	弥生土器	甕	(27.0)	13.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多		B区 S-065	6
第92図	406	SH143	弥生土器	甕	(22.4)	12.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		B区 S-065	13
第92図	407	SH143	弥生土器	甕	(23.6)	30.6	7.8	外面：ナデ・ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多	少	少		B区 S-065	20
第92図	408	SH143	弥生土器	壺	14.2	17.70	6.2	外面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ	多	多	多	多	外面：丹塗り	B区 S-065	3
第92図	409	SH143	弥生土器	壺		17.9+ a	7.6	外面：ナメハケ・ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少	内外面：スス、口縁部打欠か	B区 S-065	21・下層
第93図	410	SH143	弥生土器	壺		17.1		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ	少	多		少	外面：丹塗り	B区 S-065	
第93図	411	SH143	弥生土器	高坏	26.6	24.4	15.7	外面：ミガキ・ナデ 内面：ミガキ・ヨコナデ・シボリ痕	少	少		少	鹿の線刻、内外面：丹塗り、打欠	B区 S-065	4
第93図	412	SH143	弥生土器	鉢	16.8	7.2	7.0	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内外面：スス	B区 S-065	16
第96図	417	SH144	弥生土器	甕	(25.7)	10.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	少	多	多	外面：スス	B区 S-085	5
第96図	418	SH144	弥生土器	鉢	(20.0)	11.6	8.0	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多	多	多	外面：黒斑	B区 S-085	9
第99図	419	SH145	弥生土器	甕		12.2+ a		外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	B区 S-048	17
第99図	420	SH145	弥生土器	甕		4.6+ a		外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	B区 S-048	
第99図	421	SH145	弥生土器	壺	(13.0)	12.1+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	B区 S-048	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第99図	422	SH145	弥生土器	壺	(12.0)	10.8+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	内外面：丹塗り 外面：黒斑	B区 S-048	13・14
第100図	430	SH146	弥生土器	甕		7.5+a		外面：タテハケ 内面：ナデ	少			少		B区 S-015土坑1	2
第100図	431	SH146	弥生土器	壺	(30.6)	9.3+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少			多	外面：黒斑	B区 S-015土坑1	1
第102図	432	SH147	弥生土器	甕		4.2+a	(6.8)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-016土坑1	
第102図	433	SH147	弥生土器	高坏		5.8+a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕・工具ナデ	少	多		少	外面：丹塗り	B区 S-016土坑	3層
第102図	434	SH147	中世土器	器	(12.2)	3.0	(9.0)	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	多	多		多	回転糸切	B区 S-016Pit7	
第102図	435	SH147	中世土器	器		0.8+a		外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	少	少		少	回転糸切	B区 S-016Pit10	
第104図	436	SH148	弥生土器	鉢	(16.6)	15.9	(8.9)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少	外面：スス	B区 S-008土坑1	2・3
第106図	438	SH149	弥生土器	甕		3.4+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ		少			外面：スス	B区 S-005	
第106図	439	SH149	弥生土器	短頸壺		4.4+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		B区 S-005	
第108図	440	SH150	弥生土器	壺		10.0+a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		多	外面：スス	B区 S-017	
第108図	441	SH150	弥生土器	壺		6.3+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-017	
第108図	442	SH150	弥生土器	壺		3.2+a	6.6	外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多	外面：黒斑	B区 S-017	
第110図	446	SH151	弥生土器	甕	(31.4)	13.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少	外面：スス	B区 S-006	8・11・1層
第110図	447	SH151	弥生土器	甕	(28.2)	15.3		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：スス	B区 S-006	2層
第110図	448	SH151	弥生土器	甕	(30.4)	13.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-006	13・1層
第110図	449	SH151	弥生土器	高坏		7.5+a		外面：ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	少	多		少	内外面：丹塗り	B区 S-006	5
第110図	450	SH151	弥生土器	短頸壺		4.5+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		B区 S-006	3・1層
第112図	454	SH152	弥生土器	甕		5.5+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：黒斑	B区 S-200	57
第112図	455	SH152	弥生土器	甕		8.0+a	8.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-200	22
第112図	456	SH152	弥生土器	壺		16.1+a		外面：ミガキ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		少		B区 S-200	52
第112図	457	SH152	弥生土器	壺		11.8+a	8.0	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	B区 S-200	70
第112図	458	SH152	弥生土器	蓋		2.0+a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	少	少		少	外面：丹塗り、穿孔2	B区 S-200	3層
第112図	460	SH152	弥生土器	高坏	(29.0)	5.1+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-200	68
第112図	461	SH152	弥生土器	高坏办		2.5+a		外面：ナデ・ナメハケ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-200Pit9	
第112図	462	SH152	弥生土器	鉢	(31.5)	19.5	8.5	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	少	少	少	外面：黒斑	B区 S-200	28・31・32・36・59・62
第112図	463	SH152	弥生土器	鉢	(18.0)	6.0+a		外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-200Pit6	
第114図	470	SH153	弥生土器	甕		5.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		B区 S-050	
第114図	471	SH153	弥生土器	甕		5.2+a	(7.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-050	4
第114図	472	SH153	弥生土器	甕		1.6+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-050	
第114図	473	SH153	弥生土器	高坏办		2.0+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		B区 S-050	
第114図	474	SH153	弥生土器	器台		5.7+a	(9.1)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少		B区 S-050	
第114図	475	SH153	弥生土器	高坏		9.4+a		外面：ミガキ 内面：ナデ・シボリ痕	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-050	
第115図	481	SH153内土坑	弥生土器	甕		6.6+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多		多	少		B区 S-099	14
第115図	482	SH153内土坑	弥生土器	甕		5.6+a	6.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：指オサエ・ナデ	少		少	少		B区 S-099	3
第115図	483	SH153内土坑	弥生土器	壺		5.9+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少		少	少		B区 S-099	9

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第117図	487	SH154	弥生土器	甕	23.0	12.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少	外面：スス	B区 S-207	14・19
第117図	488	SH154	弥生土器	甕	(30.0)	4.8+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		多	外面：スス	B区 S-207	11
第117図	489	SH154	弥生土器	甕	(27.4)	5.7+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		B区 S-207	
第117図	490	SH154	弥生土器	甕		10.8+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少	外面：スス	B区 S-207	31
第117図	491	SH154	弥生土器	甕		6.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少		B区 S-207	
第117図	492	SH154	弥生土器	甕	(22.0)	8.8+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-207	31
第117図	493	SH154	弥生土器	甕	(16.0)	6.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・工具ナデ・ヨコナデ	少	多		少		B区 S-207	
第117図	494	SH154	弥生土器	甕	(22.6)	6.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少	外面：スス	B区 S-207	24
第117図	495	SH154	弥生土器	甕	(22.8)	4.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		少	外面：スス	B区 S-207	55
第117図	496	SH154	弥生土器	甕	(23.6)	16.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-207	2層
第117図	497	SH154	弥生土器	甕		5.5+ a	7.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：スス	B区 S-207	6
第117図	498	SH154	弥生土器	甕		6.9+ a	(7.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多	少	多		B区 S-207	52
第117図	499	SH154	弥生土器	甕		8.7+ a	(7.6)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-207	24・29
第117図	500	SH154	弥生土器	甕		10.1+ a	(8.6)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-207	46
第117図	501	SH154	弥生土器	甕		7.9+ a	7.6	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-207	25
第117図	502	SH154	弥生土器	壺	(21.0)	8.4+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少		B区 S-207	
第117図	503	SH154	弥生土器	広口壺	(31.0)	11.3+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナメナデ	少	少		少		B区 S-207	1・4・6
第117図	504	SH154	弥生土器	鉢		9.5+ a	7.6	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：黒斑 外面：丹塗り	B区 S-207	50
第117図	505	SH154	弥生土器	壺	(20.0)	7.8+ a		外面：タテハケ・ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		多		B区 S-207土坑1	10・48
第117図	506	SH154	弥生土器	壺		20.0+ a	36.0	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-207土坑1	38
第118図	507	SH154	弥生土器	壺		17.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	多		多	外面：黒斑	B区 S-207	
第118図	508	SH154	弥生土器	壺		4.4+ a	9.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-207	
第118図	509	SH154	弥生土器	高坏	18.9	6.7+ a		外面：不明 内面：不明・ミガキ	多			少	内外面：丹塗り 外面：黒斑	B区 S-207	37
第118図	510	SH154	弥生土器	高坏		5.4+ a	(12.6)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少		B区 S-207	
第118図	511	SH154	弥生土器	高坏		10.5+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕	少	多		少	外面：丹塗り	B区 S-207	
第118図	512	SH154	弥生土器	高坏	24.6	8.2+ a		外面：不明 内面：不明	少			少	内外面：丹塗り	B区 S-207	5
第118図	513	SH154	弥生土器	高坏	(24.8)	7.4+ a		外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	内外面：スス	B区 S-207	58
第120図	522	SH155	弥生土器	甕		6.9+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多			少		B区 S-223	2
第120図	523	SH155	弥生土器	高坏		3.8+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ				少	内外面：丹塗り	B区 S-223	
第120図	524	SH155	弥生土器	高坏	24.1	22.2	13.8	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ・シボリ痕・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	B区 S-223	3
第122図	526	SH156	弥生土器	甕	(23.0)	8.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少		少	少		B区 S-215	
第122図	527	SH156	弥生土器	甕		2.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ			多	少		B区 S-215	
第122図	528	SH156	弥生土器	甕		7.7+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少		少	少	内外面：丹塗り	B区 S-215	
第122図	529	SH156	弥生土器	壺		3.3+ a		外面：ナデ 内面：ナデ			少	少		B区 S-215	
第122図	530	SH156	弥生土器	器台	(10.3)	14.8	(10.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少			少		B区 S-215	
第124図	531	SH157	弥生土器	甕	(22.6)	5.1+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・タテハケ	少	多		多		B区 S-211	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第124図	532	SH157	弥生土器	甕		4.0+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ	少			少	外面：丹塗り	B区 S-211	
第124図	533	SH157	弥生土器	壺		4.4+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ						B区 S-211	
第126図	535	SH158	弥生土器	甕	(34.0)	8.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多		少	少		B区 S-060	1
第126図	536	SH158	弥生土器	甕	(29.0)	5.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少			少		B区 S-060	10
第126図	537	SH158	弥生土器	甕		9.8+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少		少	少		B区 S-060	5・8
第126図	538	SH158	弥生土器	壺		19.8+ a	(7.0)	外面：ミガキ 内面：ナデ	少	多		多	丹塗り	B区 S-060	13・14・17・19・ 21・23～25
第126図	539	SH158	弥生土器	壺		17.3		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		少		B区 S-060	
第126図	540	SH158	弥生土器	壺	(22.0)	12.4+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	少	多		少		B区 S-060	4
第126図	541	SH158	弥生土器	壺か		5.6+ a	6.0	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	B区 S-060	
第126図	542	SH158	弥生土器	短頸壺	(8.6)	3.5+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少			少	外面：丹塗り	B区 S-060	
第126図	543	SH158	弥生土器	高坏		4.1+ a		外面：不明 内面：ミガキ	多	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-060	
第126図	544	SH158	弥生土器	高坏		5.0+ a	(17.2)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ			少	少	内外面：丹塗り	B区 S-060	26
第126図	545	SH158	弥生土器	高坏		11.1+ a	(11.9)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・シボリ痕・ヨコナデ	少	少	多	多	外面：丹塗り	B区 S-060	3
第126図	546	SH158	弥生土器	器台		9.7+ a	(13.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多		少	少		B区 S-060	30～32
第126図	547	SH158	弥生土器	器台		13.2+ a	(11.6)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	少		少		B区 S-060	9
第126図	548	SH158	弥生土器	蓋		4.8+ a	(29.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少			少		B区 S-060	
第128図	553	SH159	弥生土器	甕		3.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		少		B区 S-201	
第128図	554	SH159	弥生土器	甕		5.6+ a	(8.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	多		多		B区 S-201土坑1	
第128図	555	SH159	弥生土器	長頸壺	(7.8)	5.7+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		B区 S-201土坑1	
第128図	556	SH159	弥生土器	壺		1.8+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		少		B区 S-201貼床中	
第128図	557	SH159	弥生土器	高坏		8.2+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ		多		少		B区 S-201	
第130図	559	SH160	弥生土器	甕	32.0	37.5	7.4	外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-212	6
第130図	560	SH160	弥生土器	甕		7.5+ a	7.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-212	1
第130図	561	SH160	弥生土器	甕	22.0	13.0+ a		外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-212	36
第130図	562	SH160	弥生土器	甕	(24.6)	4.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-212	37
第130図	563	SH160	弥生土器	鉢	26.0	8.3	17.3	外面：ナデ・タテハケ 内面：ナデ	少	少		少		B区 S-212	26
第130図	564	SH160	弥生土器	鉢		4.0+ a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	B区 S-212	
第130図	565	SH160	弥生土器	脚付鉢		9.5+ a		外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	多	多		多	外面：丹塗り	B区 S-212	23
第130図	566	SH160	弥生土器	高坏	21	9.5+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	多	多		多	円盤充填か	B区 S-212	4
第130図	567	SH160	弥生土器	蓋		5.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	B区 S-212	
第130図	568	SH160	弥生土器	器台		11.3+ a	14.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：タテハケ	多	多		多		B区 S-212	2
第130図	569	SH160	弥生土器	器台	(10.8)	16.0	(11.6)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少		B区 S-212	11
第130図	570	SH160	弥生土器	鉢	10.8	9.9	5.0	外面：ナデ 内面：ナデ・工具ナデ				少		B区 S-212	25
第131図	572	SH160	弥生土器	壺	(33.0)	51.0+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ	少			少		B区 S-212土坑5	1
第131図	573	SH160	弥生土器	壺		42.5+ a		外面：ナデ・ミガキ 内面：不明	多	多		多		B区 S-212	2・7・38・40・44
第131図	574	SH160	弥生土器	壺		23.5+ a	11.0	外面：ミガキ・工具ナデ 内面：不明	多	多		多	外面：スス	B区 S-212土坑	1

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第131図	575	SH160	弥生土器	壺	(26.6)	14.0 + a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-212	43
第133図	576	SH161	弥生土器	甕	29.4	10.3 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	B区 S-213	
第133図	577	SH161	弥生土器	甕		8.8 + a	8.3	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ		少		多		B区 S-213土坑1	4・6
第133図	578	SH161	弥生土器	甕		5.0 + a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-213	10
第133図	579	SH161	弥生土器	甕		12.9 + a	(7.4)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少		外面：スス	B区 S-213土坑1	3
第133図	580	SH161	弥生土器	壺		4.6 + a	6.6	外面：ミガキ 内面：ナデ		多		多	内外面：丹塗り	B区 S-213土坑1	2
第133図	581	SH161	弥生土器	壺		3.6 + a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	少		少		B区 S-213	
第133図	582	SH161	弥生土器	壺	15.4	9.6 + a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	少	多		少	口縁端打欠	B区 S-213土坑1	1・5・7
第135図	584	SH162	弥生土器	甕	25.4	12.5 + a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-131	13・15・17
第135図	585	SH162	弥生土器	甕		7.3 + a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-131	
第135図	586	SH162	弥生土器	壺		7.5 + a		外面：ナデ 内面：ミガキ・ナデ	多	多		多		B区 S-131	2
第135図	587	SH162	弥生土器	壺		16.5 + a	6.5	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：丹塗り、黒斑	B区 S-131	6・15・18～20・22・23
第135図	588	SH162	弥生土器	鉢		3.0 + a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-131	検出
第137図	590	SK288	弥生土器	甕	(25.2)	26.9 + a	(23.7)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス、2次被熱か	A区 S-050	1
第137図	591	SK288	弥生土器	甕		1.6 + a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少			A区 S-050	
第137図	592	SK288	弥生土器	壺		4.7 + a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少		A区 S-050	1
第139図	593	SK412	弥生土器	長頸壺	5.90	12.6	4.0	外面：ミガキ 内面：ナデ	少	少	少	少	丹塗り	A区 S-129	1
第142図	594	SK413	弥生土器	甕	(25.5)	21.2 + a		外面：ヨコナデ・ヨコハケ・ タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-102	7・5・3
第142図	595	SK413	弥生土器	甕		18.5 + a	7.1	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-102	5・11
第142図	596	SK413	弥生土器	甕		7.0 + a	7.2	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-102	1
第142図	597	SK413	弥生土器	鉢	(13.3)	7.9	(7.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			穿孔1か所残存	A区 S-102	
第142図	598	SK413	弥生土器	壺		3.5 + a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多		A区 S-102	
第142図	599	SK413	弥生土器	器台		11.5 + a	(9.6)	外面：タテハケ・ナデ 内面：タテナデ	多	多		多		A区 S-102	
第143図	601	SK414	弥生土器	甕	(28.9)	7.9 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		多		A区 S-104	
第143図	602	SK414	弥生土器	甕	(25.8)	3.8 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		多	外面：スス	A区 S-104	
第143図	603	SK414	弥生土器	甕	(23.5)	8.9 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-104	4層
第143図	604	SK414	弥生土器	甕	(29.6)	4.4 + a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			外面：丹塗り	A区 S-104	
第143図	605	SK414	弥生土器	甕		4.9 + a	6.8	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-104	5層
第143図	606	SK414	弥生土器	壺		17.6 + a	6.6	外面：ナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多			丹塗り、スス	A区 S-104	2・5層
第143図	607	SK414	弥生土器	器台		4.7 + a	(9.8)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-104	
第145図	609	SK415	弥生土器	甕	(25.3)	5.3 + a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少	内面：スス	A区 S-137	1層
第145図	610	SK415	弥生土器	甕	(24.3)	13.4 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		多		A区 S-137	1層
第145図	611	SK415	弥生土器	甕		4.9 + a	6.5	外面：ナメハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-137	1層
第145図	612	SK415	弥生土器	壺		3.1 + a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少		A区 S-137	2層
第145図	613	SK415	弥生土器	甕		3.1 + a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少		A区 S-137	1層



挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第145図	614	SK415	弥生土器	高坏か		5.4+a	8.0	外面：不明 内面：不明・シボリ痕	多	多		少		A区 S-137	1
第147図	615	SK416	弥生土器	甕		20.7+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-120	20
第147図	616	SK416	弥生土器	甕		9.8+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-120	31
第147図	617	SK416	弥生土器	甕		8.3+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-120	18
第147図	618	SK416	弥生土器	甕		6.7+a	7.3	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	内面：スス	A区 S-120	7
第147図	619	SK416	弥生土器	甕	(36.5)	33.7+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多	少			A区 S-120	1・5・14・15・18・23・25・2層
第147図	620	SK416	弥生土器	壺	(23.2)	32.9	(7.5)	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-120	16・30・34・36
第147図	621	SK416	弥生土器	壺		4.9+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-120	36
第147図	622	SK416	弥生土器	壺		9.4+a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-120	17
第147図	623	SK416	弥生土器	高坏か		6.6+a		外面：タテハケ 内面：工具ナデ	少	多		多		A区 S-120	
第147図	624	SK416	弥生土器	壺か		2.1+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	多	少		多	口縁部：丹塗り	A区 S-120	1層
第147図	625	SK416	弥生土器	壺		3.9+a		外面：ミガキ 内面：ミガキ		少		少	内外面：丹塗り	A区 S-120	
第147図	626	SK416	弥生土器	器台		5.9+a	(8.6)	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	少				A区 S-120	
第147図	627	SK416	弥生土器	器台		13.6+a	(10.8)	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-120	
第147図	628	SK416	弥生土器	蓋	(10.2)	2.5+a		外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少		少	円孔1ヶ所残存、 外面：丹塗り	A区 S-120	
第147図	629	SK416	弥生土器	蓋		4.6+a		外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少		A区 S-120	
第149図	631	SK417	弥生土器	高坏	(23.2)	7.4		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少	少		内外面：スス	A区 S-127・126	4
第151図	632	SK418	弥生土器	甕	(42.2)	8.4+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多	少	少		A区 S-305	3
第151図	633	SK418	弥生土器	甕	(27.8)	8.6+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		A区 S-305	2
第151図	634	SK418	弥生土器	甕		10.4+a	8.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-305	8
第151図	635	SK418	弥生土器	甕	(32.2)	6.0+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-305	4・5・7
第151図	637	SK418	弥生土器	壺	(34.8)	5.0+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	少			少		A区 S-305	
第151図	638	SK418	弥生土器	蓋	(5.2)	8.8	(28.6)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-305	10
第154図	642	SK420	弥生土器	甕		4.7+a	(7.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-283	2
第154図	643	SK420	弥生土器	蓋		5.8+a	(34.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少	少	少		A区 S-283	1
第157図	644	SK421	弥生土器	長頸壺	8.8	22.4~ 22.9	6.0	外面：ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-259	
第158図	645	SK422	弥生土器	甕		9.5+a	(7.4)	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多				A区 S-260	1
第158図	646	SK422	弥生土器	甕		17.9+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少	外面：黒斑	A区 S-260	3
第158図	647	SK422	弥生土器	壺		23.7+a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-260	2・5・6
第161図	648	SK424	弥生土器	甕	(16.0)	8.0+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-032	
第161図	649	SK424	弥生土器	甕		8.2+a	5.3	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ	少	少	少	少		A区 S-032	
第161図	650	SK424	弥生土器	高坏		3.7+a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕・ナデ	少			少	外面：スス、丹塗り	A区 S-032	
第161図	651	SK424	弥生土器	器台		11.7+a	10.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多				A区 S-032	1層
第164図	652	SK426	弥生土器	甕		6.0		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-067	
第166図	655	SK427	弥生土器	甕	(26.6)	9.3+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多	少	少	外面：スス	A区 S-062	
第166図	656	SK427	弥生土器	甕	(30.3)	18.6+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少	外面：スス	A区 S-062	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第166図	657	SK427	弥生土器	甕		6.7 + a	6.8	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-062	
第166図	658	SK427	弥生土器	甕か	(28.0)	1.0 + a		外面：ミガキ・工具ナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-062	
第166図	659	SK427	弥生土器	壺	22.0	9.3 + a		外面：ナデ 内面：ミガキ・ナデ	多	多				A区 S-062	
第166図	660	SK427	弥生土器	鉢		6.1 + a		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	少			少	口縁部：丹塗り	A区 S-062	1層
第166図	661	SK427	弥生土器	壺		3.3 + a		外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少	内外面：丹塗り	A区 S-062	
第166図	662	SK427	弥生土器	器台		5.4 + a	(8.6)	外面：タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		A区 S-062	
第169図	664	SK429	弥生土器	甕		6.5 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少		A区 S-098	
第169図	665	SK429	弥生土器	壺		3.5 + a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ		少			丹塗り	A区 S-098	
第169図	666	SK429	弥生土器	壺		3.4 + a	7.4	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ	少	多		少		A区 S-098	
第172図	669	SK431	弥生土器	壺	39.0	13.3		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-272	1
第174図	670	SK432	弥生土器	甕	(27.2)	13.5 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少	少	少	内外面口縁部：スス	A区 S-238	
第174図	671	SK432	弥生土器	甕	(26.4)	8.1 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-238	
第174図	672	SK432	弥生土器	甕	(24.0)	7.3 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ハケ・ヨコナデ	少	多		多	外面：コゲ・スス	A区 S-238	
第174図	673	SK432	弥生土器	甕		5.4 + a		外面：タテハケ 内面：不明	少	多		少		A区 S-238	
第174図	674	SK432	弥生土器	甕		10.4 + a	6.8	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-238	5
第174図	675	SK432	弥生土器	甕		6.1 + a		外面：ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	多	多		少	外面：スス、丹塗り	A区 S-238	
第174図	676	SK432	弥生土器	壺		5.2 + a	(8.6)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ハケ	多	多		少		A区 S-238	6
第174図	677	SK432	弥生土器	壺		3.9 + a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多	線刻か	A区 S-238	6・7
第174図	678	SK432	弥生土器	高坏		6.8 + a	9.1	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・シボリ痕	少	少	少	少		A区 S-238	
第174図	679	SK432	弥生土器	高坏		12.9 + a		外面：ヨコナデ 内面：シボリ痕・ナデ	多	多		少	丹塗り	A区 S-238	
第174図	680	SK432	弥生土器	高坏		8.0 + a	12.2	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・シボリ痕	少	少	少	少	外面：丹塗り	A区 S-238	1
第176図	681	SK433	弥生土器	甕		5.1 + a	7.2	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-292	2
第176図	682	SK433	弥生土器	器台		12.4 + a	(9.2)	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-292	1
第178図	684	SK434	弥生土器	甕	26.8	12.2 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：スス	A区 S-278	1
第182図	685	SK437	弥生土器	広口壺	31.3	13.6 + a	19.8	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		A区 S-074	1～7
第185図	686	SK439	弥生土器	甕	(24.5)	4.7 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-060	
第185図	687	SK439	弥生土器	甕	(34.0)	9.3 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-060	
第185図	688	SK439	弥生土器	甕		8.0 + a	7.2	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：スス	A区 S-060	
第185図	689	SK439	弥生土器	鉢か		7.1 + a		外面：タテハケ 内面：ナデ・ナメナデ	多	多				A区 S-060	1層
第185図	690	SK439	弥生土器	壺		8.5 + a	7.6	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-060	
第185図	691	SK439	弥生土器	器台		5.3 + a	(9.0)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		多		A区 S-060	
第185図	692	SK439	弥生土器	器台	(9.6)	16.5	(10.0)	外面：タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	少		多		A区 S-060	1
第185図	693	SK439	弥生土器	器台	(9.5)	15.1	(9.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-060	2
第185図	694	SK439	弥生土器	器台	(9.4)	16.3	(12.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-060	
第189図	695	SK442	弥生土器	甕	24.8	27.3 + a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-072	16
第189図	696	SK442	弥生土器	甕	22.4	18.2 + a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多			外面：スス	A区 S-072	1・2・6・7

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第189図	697	SK442	弥生土器	甕	(26.6)	11.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-072	14
第189図	698	SK442	弥生土器	甕	(22.4)	23.2+ a		外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	多	多			外面：スス	A区 S-072	6
第189図	699	SK442	弥生土器	壺		7.8+ a		外面：ヨコナデ 内面：工具ナデ	少	少		少		A区 S-072	
第189図	700	SK442	弥生土器	広口壺	32.8	10.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	少			丹塗り	A区 S-072	4・11
第189図	701	SK442	弥生土器	高坏	(21.2)			外面：工具ナデ・ミガキ 内面：ミガキ	多	少		少	線刻か	A区 S-072	12
第191図	702	SK443	弥生土器	甕	(28.8)	7.1+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-092	3
第191図	703	SK443	弥生土器	甕		3.7+ a	6.4	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-092	1
第191図	704	SK443	弥生土器	甕		5.4+ a	(8.75)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-092	2
第191図	705	SK443	弥生土器	甕		10.2+ a	(8.3)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-092	5
第194図	706	SK444	弥生土器	甕	(28.4)	28.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-282	
第194図	707	SK444	弥生土器	甕	(30.3)	19.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		A区 S-282	
第194図	708	SK444	弥生土器	甕	(20.0)	6.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-282	
第194図	709	SK444	弥生土器	甕	(25.2)	15.9+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			外面：スス	A区 S-282	1・2・4・6
第194図	710	SK444	弥生土器	鉢	(29.8)	10.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-282	1・7・9
第194図	711	SK444	弥生土器	甕	(26.6)	2.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-282	
第194図	712	SK444	弥生土器	甕	(27.0～28.6)	24.7+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナメナデ	少	少			丹塗り	A区 S-282	13～17
第194図	713	SK444	弥生土器	壺		6.5+ a	10.4	外面：タテハケ・工具ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	少	少		少	底部に圧痕か	A区 S-282	
第194図	714	SK444	弥生土器	高坏か	(16.2)	6.0+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-282	
第194図	715	SK444	弥生土器	高坏		3.5+ a	(17.6)	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少		A区 S-282	
第194図	716	SK444	弥生土器	蓋		5.8+ a		外面：ナデ・ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-282	12
第196図	717	SK446	弥生土器	甕	(24.6)	9.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多				A区 S-079	
第196図	718	SK446	弥生土器	甕		6.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-079	
第196図	719	SK446	弥生土器	甕		3.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-079	
第196図	720	SK446	弥生土器	壺		12.4+ a	(5.9)	外面：タテハケ・ミガキ 内面：不明	少	少		少		A区 S-079	
第196図	721	SK446	弥生土器	壺		15.0+ a	5.8	外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多			丹塗り	A区 S-079	1
第198図	722	SK447	弥生土器	甕	(19.8)	5.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		少		A区 S-069	
第198図	723	SK447	弥生土器	甕		12.8+ a	5.9	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	多			穿孔	A区 S-069	1
第198図	724	SK447	弥生土器	高坏か		1.3+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-069	
第200図	725	SK448	弥生土器	甕		3.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-036	
第200図	726	SK448	弥生土器	壺		6.1+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-036	2層
第200図	727	SK448	弥生土器	短頸壺		2.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	穿孔2ヶ所残存	A区 S-036	
第200図	728	SK448	弥生土器	高坏		2.6+ a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-036	2層
第202図	729	SK449	弥生土器	甕	(38.6)		9.8+ a	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	少				A区 S-041	
第202図	730	SK449	弥生土器	甕	(27.8)	6.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ		少		少		A区 S-041	
第202図	731	SK449	弥生土器	甕		13.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		少		A区 S-041	検出
第202図	732	SK449	弥生土器	甕		13.2+ a		外面：タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-041	6

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第202図	733	SK449	弥生土器	甕		6.5+ a	(7.1)	外面：ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-041	1
第202図	734	SK449	弥生土器	甕		6.9+ a	(6.8)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-041	検出
第202図	735	SK449	弥生土器	甕		2.0+ a		外面：ミガキ 内面：不明	多	多		多	内外面：丹塗り	A区 S-041	3
第202図	736	SK449	弥生土器	甕	27.4	15.1+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多	多	多		A区 S-041	8
第202図	737	SK449	弥生土器	壺	(34.0)		6.1+ a	外面：ヨコナデ・タテナデ 内面：ヨコナデ	多	多				A区 S-041	4
第202図	738	SK449	弥生土器	壺		6.7+ a	(5.5)	外面：ミガキ・ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多	2次被熱	A区 S-041	
第202図	739	SK449	弥生土器	壺		3.9+ a	(4.8)	外面：ミガキ・ナデ 内面：ミガキ・ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-041	検出
第204図	741	SK450	弥生土器	壺か		1.7+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-023	
第204図	742	SK450	弥生土器	壺		5.8+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-023	5
第204図	743	SK450	弥生土器	器台	9.30	18.4	11.7	外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-023	7
第206図	746	SK451	弥生土器	甕	(31.3)	8.2+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少	内外面口縁部：スス	A区 S-053	
第206図	747	SK451	弥生土器	甕		5.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-053	
第206図	748	SK451	弥生土器	器台	9.3	17.8	11.3	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少	少	少		A区 S-053	1
第206図	749	SK451	縄文土器	深鉢		3.5+ a		外面：押型文 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-053	
第208図	750	SK452	弥生土器	甕		5.2+ a	3.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-054	2
第208図	751	SK452	弥生土器	壺		4.9+ a	8.1	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-054	4
第208図	752	SK452	弥生土器	甕		2.5+ a		外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少	多		少	内外面：丹塗り	A区 S-054	
第208図	753	SK452	弥生土器	壺		7.7+ a	6.0	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	多				外面：丹塗り、スス	A区 S-054	3
第210図	754	SK453	弥生土器	器台	9.5	17.9	11.2	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	多		少		A区 S-030	1
第210図	755	SK453	弥生土器	器台	8.7	18.5	11.5	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		少		A区 S-030	10
第210図	756	SK453	弥生土器	器台	(9.0)	12.1+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-030	7
第212図	757	SK454	弥生土器	甕		5.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-221	
第212図	758	SK454	弥生土器	甕		5.1+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-221	
第212図	759	SK454	弥生土器	甕		6.0+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-221	
第212図	760	SK454	弥生土器	甕		4.7+ a	(6.2)	外面：ヨコハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-221	
第212図	761	SK454	弥生土器	脚付鉢か		2.8+ a	(6.8)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-221	
第212図	762	SK454	弥生土器	蓋		3.6+ a	(17.8)	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-221	
第212図	763	SK454	弥生土器	鉢		4.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-221	
第214図	764	SK455	弥生土器	甕	33.0	11.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少		内外面：スス	A区 S-249	
第214図	765	SK455	弥生土器	甕		4.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少		A区 S-249	
第214図	766	SK455	弥生土器	甕		5.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少			A区 S-249	
第214図	767	SK455	弥生土器	甕		6.7+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	丹塗り	A区 S-249	
第214図	768	SK455	弥生土器	甕		4.3+ a	6.6	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	少	少	少			A区 S-249	
第214図	769	SK455	弥生土器	甕		4.3+ a	(5.6)	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-249	
第214図	770	SK455	弥生土器	壺		1.4+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少	少	少	丹塗り	A区 S-249	
第214図	771	SK455	弥生土器	高坏	(22.7)	5.1+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少	少	少	丹塗り	A区 S-249	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種	大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号		
				口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他				
第214図	772	SK455	弥生土器	壺	(22.1)	6.0+ <i>a</i>		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-249	
第214図	773	SK455	弥生土器	脚付鉢か		5.0+ <i>a</i>	(8.5)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・シボリ痕	少	少	少	少		A区 S-249	2層
第214図	774	SK455	弥生土器	器台		7.3+ <i>a</i>	(9.3)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ハケ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-249	
第216図	776	SK456	弥生土器	甕	(28.0)	34.2	(6.3)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-211	7・22・24・26～28・46
第216図	777	SK456	弥生土器	甕		33.5+ <i>a</i>	7・1	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-211	4・10・13・30・46
第216図	778	SK456	弥生土器	甕	(23.6)	6.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-211	
第216図	779	SK456	弥生土器	甕	(26.4)	10.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ハケ・ヨコナデ		多	少	多	外面：スス、コゲ	A区 S-211	5・6
第216図	780	SK456	弥生土器	甕		14.2+ <i>a</i>	8.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ		多	多	多	内面：コゲ、スス	A区 S-211	9・14
第216図	781	SK456	弥生土器	甕		1.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多	内外面：丹塗り	A区 S-211	
第216図	782	SK456	弥生土器	甕	28.6+ <i>a</i>	(8.0)		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-211	20
第216図	783	SK456	弥生土器	甕	(33.1)	25.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少		内外面：スス	A区 S-211	12・25・1層
第217図	784	SK456	弥生土器	甕		4.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-211	
第217図	785	SK456	弥生土器	短頸壺	(13.2)	10.8	(4.8)	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ・ミガキ	少	少		少	口縁部：穿孔1ヶ所	A区 S-211	
第217図	786	SK456	弥生土器	高坏	(25.8)	7.9+ <i>a</i>		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-211	
第220図	789	SK459	弥生土器	甕	(26.0)	6.6+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ		多			外面：スス	A区 S-219	
第220図	790	SK459	弥生土器	甕		6.3+ <i>a</i>	7.6	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	多		多	底部：スス	A区 S-219	
第220図	791	SK459	縄文土器	深鉢		3.3+ <i>a</i>		外面：押型文 内面：ナデ	少			少		A区 S-219	
第222図	793	SK460	弥生土器	甕	38.2	56.2	9.4	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	多			外面：スス	A区 S-033	21
第222図	794	SK460	弥生土器	甕	(25.6)	4.1+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-033	10
第222図	795	SK460	弥生土器	甕	(28.8)	6.4+ <i>a</i>		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	少	少		少	丹塗り	A区 S-033	7
第222図	796	SK460	弥生土器	壺		3.6+ <i>a</i>		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ヨコナデ	少	少		少	丹塗り	A区 S-033	
第222図	797	SK460	弥生土器	鉢		4.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-033	
第222図	798	SK460	弥生土器	壺	(14.0)	5.9+ <i>a</i>	(5.3)	外面：ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-033	9・14
第222図	799	SK460	弥生土器	壺		10.5+ <i>a</i>	8.1	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	外面底部：黒斑	A区 S-033	8
第222図	800	SK460	弥生土器	高坏	32.0	16.1+ <i>a</i>		外面：ミガキ 内面：ミガキ・シボリ痕	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-033	18～20・22
第222図	802	SK416	弥生土器	壺		12.2+ <i>a</i>	(25.4)	外面：ミガキ 内面：ナデ	少	少	少		内外面：スス	A区 S-120	33
第225図	804	SK461	弥生土器	壺か		9.7+ <i>a</i>	7.1	外面：ケズリ・ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		少	外面：スス	A区 S-174	1
第227図	805	SK462	弥生土器	甕		3.9+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-236	
第227図	806	SK462	弥生土器	甕		2.6+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-236	
第227図	807	SK462	弥生土器	ミニチュア土器高坏か		1.4+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ		少		少		A区 S-236	
第229図	810	SK463	弥生土器	甕		5.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少	少			A区 S-239	
第229図	811	SK463	弥生土器	甕		3.7+ <i>a</i>	(7.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：不明	多	多		少		A区 S-239	
第229図	812	SK463	弥生土器	壺		8.9+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-239	
第229図	813	SK463	弥生土器	壺		3.5+ <i>a</i>	(9.2)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		少	外面：黒斑	A区 S-239	
第229図	814	SK463	弥生土器	器台か		3.4+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		少				A区 S-239	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第229図	815	SK463	弥生土器	鉢		4.3+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少		A区 S-239	
第232図	816	SK465	弥生土器	甕	(26.2)	18.4+ a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少	外面：スス	A区 S-310	2
第232図	817	SK465	弥生土器	脚付鉢	7.8	12.7	5.8	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少	内外面：丹塗り、 黒斑	A区 S-310	1
第232図	818	SK465	弥生土器	蓋		1.6	(6.8)	外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り、 穿孔2ヶ所	A区 S-310	
第234図	819	SK466	弥生土器	甕	(38.0)	30.5+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-228	1
第234図	820	SK466	弥生土器	長頸壺		15.0+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多		少	内外面：丹塗り	B区 S-228	4
第234図	821	SK466	弥生土器	壺	(25.0)	3.5+ a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ	多	多		多	線刻か	B区 S-228	5
第236図	822	SK467	弥生土器	甕	(35.0)	14.8+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	多			少		B区 S-219	7
第236図	824	SK467	弥生土器	壺	(16.8)	4.9+ a		外面：ナデ・工具ナデ 内面：ナデ				少	内外面：丹塗り	B区 S-219	3
第238図	826	SK468	弥生土器	長頸壺	(8.9)	2.6+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	B区 S-062	1層
第238図	827	SK468	弥生土器	甕	(25.2)	5.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		B区 S-062	1層
第240図	828	SK469	弥生土器	甕		1.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	外面：スス	B区 S-042	
第240図	829	SK469	弥生土器	長頸壺		5.4+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		B区 S-042	
第240図	830	SK469	弥生土器	蓋		5.0+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ				少	外面：丹塗り	B区 S-042	
第244図	831	SK472	弥生土器	甕	(25.5)	6.9+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		B区 S-003	1層
第244図	832	SK472	弥生土器	器台	(12.0)	10.0+ a	(11.8)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	少		多		B区 S-003	1層
第247図	833	SK474	弥生土器	甕	(37.8)	8.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		B区 S-240	1層～3層
第247図	834	SK474	弥生土器	鉢	(16.6)	9.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-240	
第247図	835	SK474	弥生土器	甕		12.9+ a	(7.0)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：タテハケ・ナデ	少	少		少		B区 S-240	2
第247図	836	SK474	弥生土器	壺		6.4+ a	10.2	外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ	多	多		少		B区 S-240	3
第247図	837	SK474	弥生土器	鉢	(10.9)	4.0	4.4	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ナデ	多	多		少	底部：黒斑	B区 S-240	1
第249図	838	SK475	弥生土器	甕	37.0	26.8+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：スス	B区 S-007	1層～3層
第249図	839	SK475	弥生土器	甕		19.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-007	2層
第249図	840	SK475	弥生土器	壺		12.6+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：黒斑	B区 S-007	1層
第249図	841	SK475	弥生土器	器台		6.4+ a	(11.1)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		B区 S-007	2層
第251図	842	SK476	弥生土器	甕		5.5+ a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		多	丹塗り	B区 S-013	1層
第253図	843	SK477	弥生土器	広口壺	(27.0)	11.5+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-014	1～5
第253図	844	SK477	弥生土器	器台	9.3	16.0～ 16.4	11.8	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		多		B区 S-014	6
第255図	845	SK478	弥生土器	甕	(26.0)	8.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		B区 S-206	24
第255図	846	SK478	弥生土器	甕	(28.4)	6.5+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少	口縁外面：スス	B区 S-206	7
第255図	847	SK478	弥生土器	壺		4.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少		B区 S-206	9
第255図	848	SK478	弥生土器	甕		5.4+ a	6.0	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ		多	多			B区 S-206	
第255図	849	SK478	弥生土器	甕	(31.2)	44.0+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ		少		少	内外面：丹塗り	B区 S-206	11
第257図	851	SK479	弥生土器	器台	10.2	16.1	11.4	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		少		B区 S-239	2・5
第259図	852	SK480	弥生土器	甕	(27.6)	4.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		B区 S-222	2層
第259図	853	SK480	弥生土器	壺		22.0+ a		外面：ナデ・工具ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-222	13層

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第261図	854	SK481	弥生土器	鉢	(13.3)	17.0	(7.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	少		少	多		B区 S-231	2・5
第261図	855	SK481	弥生土器	高坏		5.7+a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少		少	少		B区 S-231	6
第264図	858	SK483	弥生土器	甕	(25.2)	9.4+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少	外面：スス	B区 S-205	2・1層
第266図	859	SK484	弥生土器	壺		1.7+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少		B区 S-057	2層
第268図	860	SK485	弥生土器	甕	(26.8)	6.6+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-059	1層
第270図	861	SK486	弥生土器	鉢	(25.0)	3.8+a		外面：ヨコナデ・ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	少		多	内外面：丹塗り	B区 S-061	
第273図	862	SK489	弥生土器	甕		9.7+a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少		少	少		B区 S-235	
第273図	863	SK489	弥生土器	甕		6.5+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多		少		B区 S-235	21
第273図	864	SK489	弥生土器	壺		26.5+a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-235	2・5・11・20・30 ～32・36・2層
第273図	865	SK489	弥生土器	長頸壺		17.9+a	5.8	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	少			少	外面：丹塗り	B区 S-235	1
第273図	866	SK489	弥生土器	長頸壺		15.2+a	4.8	外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多		少	外面：丹塗り	B区 S-235	20・33
第273図	867	SK489	弥生土器	器台		4.0+a	(10.0)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ			少	少		B区 S-235	3
第274図	869	SK489	弥生土器	壺	26.0	12.7+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		B区 S-235	38-1・2・3
第274図	870	SK489	弥生土器	壺		45.6+a	11.0	外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多		少	外面：黒斑	B区 S-235	4・10・15・18・19・ 23・25～28・38
第274図	871	SK489	弥生土器	壺		26.5+a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	多		多	少		B区 S-235	14・23・34・37・ 40
第276図	872	SK490	弥生土器	甕		8.8+a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		B区 S-303	
第276図	873	SK490	弥生土器	甕		3.1+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		B区 S-303	4層
第276図	874	SK490	弥生土器	高坏		2.1+a		外面：不明 内面：ヨコナデ	多	少		少		B区 S-303	
第279図	875	SK491	弥生土器	甕	(21.0)	28.3	6.8	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-145	6
第279図	876	SK491	弥生土器	甕	(21.8)	17.1+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：コゲ、スス	B区 S-145	4
第279図	877	SK491	弥生土器	壺		5.6+a	12.6	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		少		B区 S-145	1・7
第279図	878	SK491	弥生土器	壺		18.4+a	6.4	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ	少	多		少	外面：丹塗り	B区 S-145	3・10
第279図	879	SK491	弥生土器	鉢	(19.0)	5.0+a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：工具ナデ	少	多		少		B区 S-145	
第279図	880	SK491	弥生土器	長頸壺		2.0+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ					内外面：丹塗り	B区 S-145	
第280図	881	SK492	弥生土器	壺		8.8+a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少		B区 S-144	1・3・4・9・10
第280図	882	SK492	弥生土器	壺		8.0+a	(13.1)	外面：ナデ 内面：工具ナデ	多	多		少		B区 S-144	13
第281図	883	SX14	弥生土器	鉢	23.1	14.2	9.0	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		B区 S-194	1
第284図	884	SK494	弥生土器	甕	(19.2)	7.1+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-181	2
第284図	885	SK494	弥生土器	壺		14.1+a	(5.6)	外面：工具ナデ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	多	多	少	多	外面：黒斑	B区 S-181	14
第284図	886	SK494	弥生土器	壺		3.7+a	(6.4)	外面：ミガキ・工具ナデ 内面：ナデ	少	多	少	多	外面：丹塗り	B区 S-181	6
第284図	887	SK494	弥生土器	壺		16.4+a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：丹塗り	B区 S-181	21
第284図	888	SK494	弥生土器	長頸壺		12.9+a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：丹塗り	B区 S-181	8
第284図	889	SK494	弥生土器	壺		4.4+a	8.0	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ	多	多	少	多		B区 S-181	7
第284図	890	SK494	弥生土器	短頸壺	(13.0)	5.8+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	内外面：丹塗り、 穿孔1ヶ所	B区 S-181	18
第285図	891	SK495	弥生土器	甕	(28.2)	15.6+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-131土坑1	2
第285図	892	SK495	弥生土器	甕	(28.2)	9.0+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		B区 S-131土坑1	11

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第285図	893	SK495	弥生土器	甕		14.1+ a	6.6	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ		多		多	外面・底部：黒斑か	B区 S-131土坑1	12
第285図	894	SK495	弥生土器	甕		10.0+ a	8.6	外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ		多		多	内面：スス	B区 S-131土坑1	4
第285図	895	SK495	弥生土器	甕		4.4+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		B区 S-131土坑1	3
第285図	896	SK495	弥生土器	鉢	(17.0)	8.8		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-131土坑1	1
第288図	897	SK497	弥生土器	甕	(37.0)	9.0+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：スス	B区 S-101	2
第288図	898	SK497	弥生土器	高坏	(23.0)	5.1+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ		多	少			B区 S-101	4・5
第291図	899	SK499	弥生土器	甕	(30.6)	19.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	B区 S-155	1
第310図	900	SK512	弥生土器	甕		8.4+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		B区 S-173	
第311図	901	SK516	弥生土器	甕	(23.0)	5.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少		少	少		B区 S-151	
第311図	902	SK516	弥生土器	甕		3.4+ a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	B区 S-151	
第311図	903	SK516	弥生土器	高坏		9.9+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕	多	多		少	外面：丹塗り	B区 S-151	
第311図	904	SK516	弥生土器	高坏		6.7+ a		外面：タテハケ 内面：ナデ・シボリ痕	少	多		少		B区 S-151	
第311図	905	SK516	弥生土器	器台	(10.4)	4.6+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	少		少	少		B区 S-151	
第313図	906	SK521	弥生土器	甕	44.3	54.5	8.7	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-005	2
第315図	907	SK522	弥生土器	甕	32.2	32.4	6.8	外面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少	内外面：丹塗り 外面：コゲ、スス	A区 S-063	1
第315図	908	SK522	弥生土器	甕	27.2	31.4	8.4	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多	底面・外面：黒斑	A区 S-063	2
第317図	909	SK523	弥生土器	甕	47.7	64.5	10.5	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			内外面：スス	A区 S-222	
第319図	910	SK524	弥生土器	甕	28.2	35.7	6.9	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少			外面：丹塗り	A区 S-226	1
第319図	911	SK524	弥生土器	甕	28.8	36.0	7.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		少	外面：スス、コゲ	A区 S-226	2
第321図	912	SK525	弥生土器	鉢	(30.2)	22.2	9.0	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-227	2
第321図	913	SK525	弥生土器	甕	(27.8)	35.8	7.8	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-227	1
第323図	914	SK526	弥生土器	甕	(27.2)	20.3+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-233	1
第323図	915	SK526	弥生土器	甕	(33.7)	37.4+ a	(7.7)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-233	2
第325図	916	SK527	弥生土器	甕	29.5	34.3+ a	(27.7)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多		少	外面：スス	A区 S-279	2
第325図	917	SK527	弥生土器	甕	25.8	30.2	6.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-279	1・2
第328図	918	SK528	弥生土器	甕	41.2	55.6	9.3	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：コゲ、スス	A区 S-309	2
第329図	919	SK529	弥生土器	甕	24.7	33.3	5.8	外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	下甕、外面：丹塗り	B区 S-244	1・2
第329図	920	SK529	弥生土器	甕	27.6	30.6	(7.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多	上甕、内外面：スス	B区 S-244	
第335図	923	SB23	弥生土器	甕	(34.2)	18.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少		A区 S-250Pit1	
第335図	924	SB23	弥生土器	器台		9.1+ a	(11.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少	少	少	スス	A区 S-250Pit4	
第335図	925	SB23	弥生土器	甕	(31.0)	3.8+ a		外面：ミガキ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少	内外面：丹塗り	A区 S-250Pit5	
第337図	926	SX12	弥生土器	甕	(27.6)	39.5	7.8	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多	多	多		A区 S-148	25・3層
第337図	927	SX12	弥生土器	甕	25.9	33.0	6.9	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多			外面：スス	A区 S-148	4層
第337図	928	SX12	弥生土器	甕	27.6	32.5	7.7	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-148	3・7・9・15・25・29・4層
第337図	929	SX12	弥生土器	甕	26.3	32.9	6.8	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多				A区 S-148	25
第337図	930	SX12	弥生土器	甕	(28.8)	15.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-148	2層・4層



挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第337図	931	SX12	弥生土器	甕	(28.4)	17.1+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-148	29
第338図	932	SX12	弥生土器	甕	(26.6)	13.3+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-148	18・4層
第338図	933	SX12	弥生土器	甕	(26.2)	13.4+a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少		内外面：スス	A区 S-148	4・10
第338図	934	SX12	弥生土器	甕	(24.6)	9.6+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-148	25
第338図	935	SX12	弥生土器	甕		5.0+a	6.6	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：工具ナデ	少	多		少		A区 S-148	2層
第338図	936	SX12	弥生土器	甕		3.5+a	5.4	外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-148	
第338図	937	SX12	弥生土器	ミニチュア土器壺か		3.0+a	3.75	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		少		A区 S-148	
第338図	938	SX12	弥生土器	甕		8.8+a	(7.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	内面：スス	A区 S-148	25
第338図	939	SX12	弥生土器	甕	(31.6)	13.2+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-148	4層
第338図	940	SX12	弥生土器	甕		9.2+a	6.9	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-148	2層
第338図	941	SX12	弥生土器	甕	(33.0)	7.7+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-148	
第338図	942	SX12	弥生土器	短頸壺	(13.7)	20.0	(5.4)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少			外面：丹塗り	A区 S-148	13・41・42・1層・2層・4層
第338図	943	SX12	弥生土器	壺	(27.1)	8.4+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-148	5層
第338図	944	SX12	弥生土器	壺	(30.0)	3.9+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ		少		少	口縁部：丹塗り、スス	A区 S-148	29
第338図	945	SX12	弥生土器	短頸壺	(16.4)	9.4+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	外面：スス 内外面：丹塗り	A区 S-148	10
第338図	946	SX12	弥生土器	壺		10.3+a	7.4	外面：ナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少		少		A区 S-148	4層
第338図	947	SX12	弥生土器	長頸壺		8.4+a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-148	
第338図	948	SX12	弥生土器	壺		7.0+a		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	少	多				A区 S-148	14
第338図	949	SX12	弥生土器	壺	(30.0)	9.5+a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	多				A区 S-148	34
第339図	950	SX12	弥生土器	壺		22.1+a		外面：ミガキ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-148	3・39・4層
第339図	951	SX12	弥生土器	壺		5.0+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-148	
第339図	952	SX12	弥生土器	高坏	22.0	7.7+a		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ	少	少			内外面：丹塗り	A区 S-148	28・29・2層・4層・6層
第339図	953	SX12	弥生土器	高坏		14.2+a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・シボリ痕	少	少				A区 S-148	1層
第339図	954	SX12	弥生土器	高坏	23.0	23.7	15.1	外面：ミガキ 内面：ミガキ・ヨコナデ・シボリ痕	多	多				A区 S-148	28
第339図	955	SX12	弥生土器	鉢	23.6	9.9+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多				A区 S-148	2層
第339図	956	SX12	弥生土器	高坏か		6.8	(5.9)	外面：ナデ 内面：シボリ痕・ナデ	少	少	少	少		A区 S-148	28
第339図	957	SX12	弥生土器	蓋		4.3+a		外面：ナデ・ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-148	
第339図	958	SX12	弥生土器	蓋	5.1	6.3+a		外面：ナデ・ヨコナデ・ハケ 内面：ナデ	少	少	少	少	外面：スス、丹の飛散	A区 S-148	2層
第339図	959	SX12	弥生土器	蓋		8.2+a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ナデ	少	多				A区 S-148	36
第339図	961	SX12	弥生土器	筒形器台	(11.8)	(91.0)		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ・工具ナデ	少	少		少	丹塗り	A区 S-148	22・29・2・4層
第345図	978	SX13	弥生土器	高坏	12.3	12.1～12.3	7.2	外面：ナデ・ミガキ 内面：ミガキ・シボリ痕・ヨコナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-024	1
第347図	979	SH163	弥生土器	甕		6.4+a		外面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		少		B区 S-123・125	
第347図	980	SH163	土師器	甕		9.5+a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ヨコナデ		多		少	外面：スス	B区 S-123	1
第347図	981	SH163	土師器	甕	(13.4)	7.5+a		外面：タテハケ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		B区 S-123	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第347図	982	SH163	土師器	高坏		5.0+ a		外面：タテハケ・ナデ・ミガキ 内面：タテハケ・ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多	外面：黒斑	B区 S-123	
第347図	983	SH163	弥生土器	高坏		1.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		B区 S-123	2層
第347図	984	SH163	土師器	鉢	13.6	4.7+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少			少		B区 S-123	
第347図	985	SH163	土師器	鉢		5.6+ a		外面：ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		B区 S-123土坑1	
第347図	986	SH163	土師器	鉢	(17.8)	9.7+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ		少		少		B区 S-123・125	
第347図	987	SH163	土師器	鉢か		3.5+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ナデ	多			多		B区 S-123土坑1	
第347図	988	SH163	土師器	ミニチュア土器鉢		4.3+ a		外面：ナデ 内面：ナデ		多		多		B区 S-123・125	
第349図	991	SH164	土師器	甕	(22.8)	12.5+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナメハケ	多	多		多	外面：スス	A区 S-173土坑1	2層
第349図	992	SH164	土師器	複合口縁壺	(14.2)	6.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナメハケ・ヨコハケ	少	少	少	少	内外面：黒斑	A区 S-173	
第351図	993	SH165	弥生土器	甕		4.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-136	
第351図	994	SH165	弥生土器	甕		5.7+ a	(6.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-136	
第351図	995	SH165	土師器	鉢か		2.0+ a	4.0	外面：ケズリ 内面：ヨコハケ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-136	
第351図	996	SH165	弥生土器	壺		2.2+ a		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-136	
第351図	997	SH165	土師器	高坏		4.8+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少		A区 S-136	
第351図	998	SH165	土師器	鉢	(14.0)	6.3+ a		外面：ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少		A区 S-136	
第351図	999	SH165	土師器	鉢	12.4	6.7+ a		外面：ミガキ 内面：工具ナデ	多	少		多	外面：丹塗り	A区 S-136	5層
第351図	1000	SH165	土師器	鉢	(9.9)	5.7		外面：ヨコナデ・ナメハケ・ミガキ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	内面：スス	A区 S-136	3・4
第351図	1001	SH165	土師器	鉢	8.0	3.0		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	少		少		A区 S-136	1
第351図	1002	SH165	土師器	鉢	(8.9)	3.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-136	
第351図	1003	SH165	土師器	ミニチュア土器台付鉢か	(6.3)	3.2+ a		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	少	少		少		A区 S-136	
第353図	1009	SH166	土師器	甕	17.8	28.6		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ハケ	多	多	多	多		A区 S-126	1
第353図	1010	SH166	土師器	甕	16.9	28.9		外面：ナデ・タタキ後タテハケ 内面：ナデ・ヨコハケ・ナメハケ	少	少		多	外面：スス	A区 S-126	3
第353図	1011	SH166	弥生土器	甕		17.0+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多			外面：スス	A区 S-126	11
第353図	1012	SH166	土師器	壺	(5.6)	10.5		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ	少			多		A区 S-126	15
第353図	1013	SH166	弥生土器	甕	(28.8)	8.4+ a		外面：ヨコナデ・ナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		少		A区 S-126	11
第353図	1014	SH166	弥生土器	甕	(25.4)	13.5+ a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-126	3
第353図	1015	SH166	弥生土器	鉢	(31.4)	19.1+ a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多	多	少	内面：黒斑	A区 S-126	11
第353図	1016	SH166	弥生土器	甕	(31.2)	17.4+ a	(29.8)	外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	多	少	少	外面：スス	A区 S-126	7・10・12・14
第353図	1017	SH166	土師器	壺	(13.0)	26.9	4.5	外面：ナデ・タタキ後ナメハケ 内面：ナメハケ・ナデ	少	少	少	少	器形歪む	A区 S-126床面	4
第353図	1018	SH166	弥生土器	甕		7.2+ a	7.8	外面：ナメハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多	多		外面：黒斑	A区 S-126	24
第353図	1019	SH166	弥生土器	甕		9.4+ a	6.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少	少	少		A区 S-126	16
第353図	1020	SH166	土師器	複合口縁壺	(14.8)	4.5+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少	少	少		A区 S-126	
第353図	1021	SH166	弥生土器	器台		10.9+ a	10.1	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		少		A区 S-126	1層

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第354図	1022	SH166	弥生土器	長頸壺	(7.3)	23.4	6.4	外面：ナデ・ミガキ 内面：工具ナデ	多	多	少	少	外面：丹塗り	A区 S-126	19・20
第354図	1023	SH166	弥生土器	壺		11.3+ <i>a</i>		外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		少		A区 S-126	
第354図	1024	SH166	弥生土器	高坏	22.2	9.1+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多				A区 S-126	10
第354図	1025	SH166	土師器	脚付鉢	(17.6)	9.9+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ・ ヘラケズリ 内面：ヨコナデ・ミガキ・ 工具ナデ	多	多				A区 S-126	2
第354図	1026	SH166	土師器	脚付鉢 か		6.1+ <i>a</i>	17.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ	多	多	少			A区 S-126	1層
第354図	1027	SH166	土師器	高坏		5.9+ <i>a</i>		外面：ナデ・タテハケ 内面：ナデ後ハケ	少				外面：黒斑	A区 S-126	6
第354図	1029	SH166	土師器	鉢か	(12.8)	7.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ハケ・ミガキ	少	少				A区 S-126	
第354図	1030	SH166	土師器	鉢	9.8	3.7	3.5	外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：工具ナデ	少	少		少		A区 S-126	13
第354図	1031	SH166	土師器	鉢	9.5	3.15	4.0	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ・ケズリ・ミガキ	少	少				A区 S-126	14
第357図	1041	SH167	土師器	甕	(17.0)	10.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-307	
第357図	1042	SH167	土師器	甕		14.1+ <i>a</i>		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ナナメハケ・ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-307	3
第357図	1043	SH167	土師器	鉢		15.0+ <i>a</i>		外面：タタキ後ナメハケ・工具ナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-307土坑1他	15
第357図	1044	SH167	土師器	甕		15.1+ <i>a</i>	0.7	外面：タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ハケ	多	多	多	多	口縁部：打欠	A区 S-307	12
第357図	1045	SH167	土師器	甕		5.0+ <i>a</i>		外面：ナナメハケ・工具ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-307	2
第357図	1046	SH167	土師器	複合口 縁壺		3.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	少	少		少	櫛描波状文	A区 S-307	
第357図	1047	SH167	土師器	高坏	10.8	3.3+ <i>a</i>		外面：ナデ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：黒斑	A区 S-307	
第357図	1048	SH167	土師器	高坏		8.5+ <i>a</i>	(15.0)	外面：工具ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		多	穿孔3ヶ所	A区 S-307土坑4	
第357図	1049	SH167	土師器	脚付鉢	(19.3)	16.2	15.8	外面：タテハケ・工具ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多	多	多	内外面：黒斑、 穿孔4か所	A区 S-307	10
第357図	1050	SH167	土師器	鉢	8.5	2.2		外面：ミガキ 内面：ミガキ	多	多		少		A区 S-307	11
第357図	1051	SH167	土師器	鉢	(9.9)	2.8		外面：ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		多	外面：黒斑	A区 S-307	
第357図	1052	SH167	土師器	鉢	14.2	8.8		外面：ナナメハケ・ナデ 内面：ナナメハケ・ナデ・ミガキ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-307	14
第360図	1058	SH168	土師器	甕	20.6～ 21.0	40.4	3.7	外面：ヨコナデ・タタキ後 ナナメハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ ナナメハケ・タテハケ	多	多		多		A区 S-130Pit1・ Pit4	2・36・53・56・ 57・3層
第360図	1059	SH168	土師器	甕	20.3	37.0		外面：タタキ後ハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-130	31・32・38～40・ 42・44・46・52・
第360図	1060	SH168	土師器	甕	(19.7)	10.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-130	38・65・3層
第360図	1061	SH168	土師器	甕	(15.4)	26.3	2.0	外面：ヨコナデ・ナデ・ハケ 内面：ナデ・ナナメハケ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-130	84・91・94・102・ 109
第360図	1062	SH168	土師器	甕	16.4	24.3		外面：タタキ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：コゲ、スス	A区 S-130	73・77・79～81・ 83
第360図	1063	SH168	土師器	甕	(12.0)	15.3+ <i>a</i>		外面：工具ナデ・タタキ後 タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	多		多	外面：黒斑	A区 S-130	90・143・145・147
第360図	1064	SH168	土師器	甕	(15.4)	15.0+ <i>a</i>		外面：ケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ	少	少		少		A区 S-130	122・118
第360図	1065	SH168	土師器	甕	18.8	24.0+ <i>a</i>		外面：タテハケ後ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・タテハケ	多	多		多	外面：スス	A区 S-130	80・82～85・ 113・5層
第360図	1066	SH168	土師器	甕	(17.5)	11.4+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後ナデ 内面：不定方向ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-130	3層
第360図	1067	SH168	土師器	甕	(13.0)	8.9+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	少		少		A区 S-130	110・121・143・ 146
第360図	1068	SH168	土師器	甕	21.4	18.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後ナデ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ	多	多		少	外面：スス	A区 S-130	27・34・40・54・ 55・58
第360図	1069	SH168	土師器	甕	(18.8)	17.4+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ	多			多	内外面：スス	A区 S-130	12・28・3層

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第361図	1070	SH168	土師器	甕	24.2	16.4+ a		外面：タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多	外面：スス	A区 S-130	129・133・134・136
第361図	1071	SH168	土師器	甕	16.5	21.7+ a		外面：ケズリ後工具ナデ 内面：ナデ	多	少		少	外面：スス	A区 S-130	21・71
第361図	1072	SH168	土師器	甕	(12.4)	13.0+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・タテハケ		多		多	内外面：黒斑	A区 S-130	102・143・5層
第361図	1073	SH168	土師器	鉢	(12.6)	4.1+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	少			少	内外面：丹塗り	A区 S-130	95・106
第361図	1074	SH168	土師器	鉢	(17.6)	11.05		外面：タタキ後ハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ハケ・工具ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-130	121・122・135・142・143
第361図	1075	SH168	土師器	鉢	(19.4)	16.6+ a		外面：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ	多			少	外面：黒斑	A区 S-130	57
第361図	1076	SH168	土師器	甕		13.3+ a		外面：ヘラケズリ後タテナデ 内面：ナナメハケ・タテハケ・ナデ	多	多				A区 S-130	29・5層
第361図	1077	SH168	土師器	壺	12.2	26.7+ a		外面：ナデ・タタキ後ハケ・ヘラケズリ 内面：ナデ・不定方向ハケ	多	多		少		A区 S-130	92・102・103
第361図	1078	SH168	土師器	甕か		37.0+ a		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-130Pit4	22・24・28・29・3層
第361図	1079	SH168	土師器	壺	9.8	23.2		外面：タタキ後タテハケ・不定方向ハケ 内面：ヨコハケ・ナデ後タテハケ	多	多		多		A区 S-130	2・38・42・50・59・60・3層
第361図	1080	SH168	土師器	壺	(12.4)	6.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	多		多		A区 S-130	90・143
第361図	1081	SH168	土師器	壺	14.6	10.0+ a		外面：タタキ後タテハケ・ ナナメハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・タテハケ・ ナデ	多	多		多		A区 S-130	134・139・140・160・165・166
第361図	1082	SH168	土師器	複合口 緑壺	17.8	12.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-130	80・84・85・130・1層・3層・5層
第362図	1083	SH168	土師器	複合口 緑壺	(16.7)	6.4		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ・ヨコハケ	少	少		少		A区 S-130	136・3層
第362図	1084	SH168	土師器	複合口 緑壺	15.7～ 16.6	11.7+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-130	100・104・137・140・144・3層・5層
第362図	1085	SH168	土師器	複合口 緑壺	(16.2)	13.4+ a		外面：タタキ後タテハケ・ナデ・ ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコハケ・ ナナメハケ・ヨコナデ	少	多		多	外面：黒斑	A区 S-130	133・136・144・147・3層
第362図	1086	SH168	土師器	複合口 緑壺	(14.0)	31.8		外面：ケズリ・タタキ後 タテハケ・ヨコナデ 内面：タテハケ・ヨコハケ・ ヨコナデ	多	多		多		A区 S-130	2・34・40・43・49・52・3層
第362図	1087	SH168	土師器	複合口 緑壺	12.6	9.8		外面：ヨコハケ・ナナメハケ・ 工具ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ	少	多		多	内面：スス	A区 S-130	11・37・124・126・141
第362図	1088	SH168	土師器	複合口 緑壺	19.0	9.3+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多	内面・口唇部：スス	A区 S-130	3層
第362図	1089	SH168	土師器	複合口 緑壺	(18.4)	14.0+ a		外面：ヨコナデ・タタキ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-130	48・64・90・102・145
第362図	1090	SH168	土師器	複合口 緑壺	(19.4)	9.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ケズリ・ヨコハケ・ナデ	少	少		少		A区 S-130	76
第362図	1091	SH168	土師器	複合口 緑壺	(13.9)	11.9+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ	多	多		多		A区 S-130	69・164・3層
第362図	1092	SH168	土師器	複合口 緑壺	(21.7)	8.4+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-130	
第362図	1093	SH168	土師器	壺		9.3+ a		外面：工具ナデ 内面：不定方向ハケ	少	少		少		A区 S-130	
第362図	1094	SH168	土師器	長頸壺	10.4	16.5		外面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面・底部：黒斑	A区 S-130	37・62・63・3層
第362図	1095	SH168	土師器	長頸壺	10.4	17.9		外面：ナナメハケ・タテハケ 内面：ヨコハケ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-130	3・6・41
第362図	1096	SH168	土師器	壺		22.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-130	157・158・161・3層
第363図	1097	SH168	土師器	複合口 緑壺	27.0～ 28.5	18.9+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコナデ・タテハケ・ ヨコハケ	多	多		多		A区 S-130Pit6他	4・29・43・67・68・87・95・108・149・160・167
第363図	1098	SH168	土師器	複合口 緑壺	28.2	17.8		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多	1096と同一個体か	A区 S-130	16・20・21・28・74・95・96・106・162
第363図	1099	SH168	土師器	壺		18.5		外面：ナデ・タタキ後ナナメハケ 内面：ヨコハケ・タテハケ	多	多		多		A区 S-130	111

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第363図	1100	SH168	土師器	長頸壺	11.6	18.1		外面：ヨコナデ・ヘラケズリ後 ナナメハケ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多	外面：丹塗り、黒斑	A区 S-130土坑3他	5・18・89・90・ 93・95・140・3層・ 5層
第363図	1101	SH168	土師器	壺	(5.8)	9.2+ a		外面：ヨコナデ・工具ナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	スス	A区 S-130	
第363図	1102	SH168	土師器	高坏		3.0+ a		外面：ナナメハケ 内面：ナナメハケ	多			多	内外面：丹塗り	A区 S-130	
第363図	1103	SH168	土師器	高坏		3.0+ a		外面：タテハケ 内面：工具ナデ	多	少		多	外面：丹塗り	A区 S-130	
第363図	1104	SH168	土師器	高坏	24.0	9.8+ a		外面：タテハケ後ミガキ 内面：ヨコハケ・ナデ後ミガキ	多	多		多		A区 S-130	101・110・113・ 116・118・119・ 135・138・139・ 142～144
第363図	1105	SH168	土師器	高坏	(16.2)	5.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ミガキ・ナデ	少	少		少		A区 S-130	
第363図	1106	SH168	土師器	高坏		7.1+ a	(16.3)	外面：ミガキ 内面：ハケ	少	少	少	少	内外面：スス、穿孔	A区 S-130	90・136
第363図	1107	SH168	土師器	高坏		10.1+ a	13.6	外面：ナデ・ケズリ後ハケ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	少		少	穿孔4ヶ所(未貫通)	A区 S-130	160・163・2層
第363図	1108	SH168	土師器	高坏		10.7+ a	15.3～ 15.7	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：工具ナデ・ヨコハケ	多	少		少		A区 S-130	107・136・137
第363図	1109	SH168	土師器	脚付鉢	(21.0)	16.5	14.0	外面：タタキ・タテハケ後 ヨコナデ・ミガキ 内面：ケズリ・ヨコハケ・ ヨコナデ・ミガキ	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-130	113・114・117～ 122・139・143・ 144・146・148・ 164
第363図	1110	SH168	土師器	脚付鉢	17.3	14.0～ 14.9	11.4	外面：ヨコナデ後ミガキ 内面：ヨコハケ・ナデ後ミガキ	多	多		多		A区 S-130Pit1	
第363図	1111	SH168	土師器	脚付鉢	(14.6)	15.8	(12.3)	外面：ヨコナデ・ナナメハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	底部：黒斑	A区 S-130	35・115・3層
第363図	1112	SH168	土師器	脚付鉢	11.2	6.7+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-130	13・19
第363図	1113	SH168	土師器	脚付鉢 か		7.2		外面：ミガキ 内面：ナデ・ナナメハケ・ヨコハケ	少	少		多		A区 S-130	125
第363図	1114	SH168	土師器	脚付鉢 か		4.0+ a		外面：ヘラケズリ後ミガキ 内面：ヨコナデ	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-130	
第363図	1115	SH168	土師器	鉢		4.8+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-130	
第363図	1116	SH168	土師器	鉢		4.7+ a		外面：ヘラケズリ後ミガキ 内面：ヘラケズリ後ナデ	多			少	外面：丹塗り	A区 S-130	
第364図	1117	SH168	土師器	鉢	16.3	11.2		外面：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		少	外面：黒斑	A区 S-130	34・35・3層
第364図	1118	SH168	土師器	鉢	(18.0)	8.6		外面：ヘラケズリ・タタキ・ タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多			内外面：黒斑	A区 S-130	
第364図	1119	SH168	土師器	鉢	14.6	4.2～5.5		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多	隅丸方形か	A区 S-130	5層
第364図	1120	SH168	土師器	鉢	14.0	6.8		外面：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ 内面：工具ナデ・ヨコナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-130	172
第364図	1121	SH168	土師器	鉢	12.2	5.5		外面：タテハケ・ヨコハケ 内面：タテハケ・ヨコハケ	少	多		多	外面底部：黒斑	A区 S-130	90・145・147
第364図	1122	SH168	土師器	鉢	(14.0)	11.0+ a		外面：ヨコナデ・ケズリ後ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-130	145
第364図	1123	SH168	土師器	鉢	9.1	14.9+ a		外面：タタキ・ヘラケズリ 内面：ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-130	
第364図	1124	SH168	土師器	鉢	(12.2)	6.1		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-130	
第364図	1125	SH168	土師器	鉢	9.1	4.2	3.9	外面：工具ナデ・ヘラケズリ 内面：工具ナデ・ナデ	少	少		多		A区 S-130	90
第364図	1126	SH168	土師器	鉢	(11.4)	5.9		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	多	多	少	多	外面：黒斑	A区 S-130	1
第364図	1127	SH168	土師器	鉢	(9.4)	4.5		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多	内面：スス	A区 S-130	5層
第364図	1128	SH168	土師器	鉢	(9.0)	3.4+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-130	140・142・145・ 146
第364図	1129	SH168	土師器	鉢	9.4	4.8		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-130	55・58
第364図	1130	SH168	土師器	鉢	10.0	2.1		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-130	
第364図	1131	SH168	土師器	鉢		6.8+ a		外面：ヘラケズリ 内面：ナナメハケ	多	少		多		A区 S-130	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第364図	1132	SH168	土師器	鉢	(10.0)	3.2+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-130	
第364図	1133	SH168	土師器	鉢		3.2+ a		外面：タタキ後ナデ 内面：ナデ	少			少	外面：黒斑	A区 S-130	
第364図	1134	SH168	土師器	鉢		4.0+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-130	90・143
第364図	1135	SH168	弥生土器	器台	10.4	16.0	10.7	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-130	34～36
第367図	1142	SH169	土師器	甕	19.0	36.4	(2.0)	外面：ヨコナデ・タタキ後工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-235	13
第367図	1143	SH169	土師器	甕	11.0	26.2		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ	多	多	多	多		A区 S-235	9
第367図	1144	SH169	土師器	甕	(12.0)	17.9		外面：タタキ後タテハケ・ケズリ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ナデ	少	多		多		A区 S-235	6・11
第367図	1145	SH169	土師器	甕	18.4	5.7+ a		外面：工具ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	少		多	外面：スス	A区 S-235	
第367図	1146	SH169	土師器	甕か		12.2+ a		外面：工具ナデ 内面：ヘラケズリ後工具ナデ	多	多		多	内外面：黒斑	A区 S-235	2
第367図	1147	SH169	土師器	甕	12.7	32.3		外面：ヨコナデ・タタキ後ハケ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ・工具ナデ	多	多		多	外面：スス	A区 S-235	6・10
第367図	1148	SH169	弥生土器	甕		2.1+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多	少	多		A区 S-235	
第367図	1149	SH169	土師器	複合口 縁壺	(18.7)	4.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-235	
第367図	1150	SH169	土師器	壺	(5.4)	8.9+ a	(10.8)	外面：ヨコナデ・タテハケ・ナナメハケ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ	少	多		多		A区 S-235	14
第367図	1151	SH169	土師器	高坏	20.8	17.6	15.8	外面：ヘラケズリ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ	少	少		多	外面：丹塗り、脚部に2列の穿孔5ヶ所	A区 S-235	14
第367図	1152	SH169	土師器	高坏		6.0+ a	17.2	外面：タテハケ後ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコハケ	多	多		多		A区 S-235	1
第367図	1153	SH169	土師器	高坏		7.8+ a	15.9	外面：ミガキ・ナデ 内面：ナデ・ミガキ	少	少		多	穿孔は2孔1組が5ヶ所、内外面：丹塗り・スス	A区 S-235	12
第367図	1154	SH169	土師器	高坏か	(23.0)	10.1		外面：タテハケ・ヘラケズリ後ナデ 内面：ヨコハケ・タテハケ	多	少		多	底面剥落か	A区 S-235	
第367図	1155	SH169	土師器	脚付鉢	(14.0)	17.7	9.5	外面：ケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	少	少		多	内外面：黒斑	A区 S-235	7～9
第367図	1156	SH169	土師器	脚付鉢	(11.4)	8.4+ a		外面：ヘラケズリ後ヨコハケ 内面：ヘラケズリ後ヨコハケ	多	少		多	内外面：スス	A区 S-235	
第368図	1157	SH169	土師器	鉢	11.8	5.0		外面：ナデ 内面：ケズリ後ナデ	多	多		多		A区 S-235	
第368図	1158	SH169	土師器	鉢	10.4	5.5		外面：ヨコナデ・タタキ後ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	内外面：黒斑、一部スス	A区 S-235	
第368図	1159	SH169	土師器	鉢	(8.6)	6.5		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ・ハケ	多	多		多		A区 S-235	
第368図	1160	SH169	土師器	鉢	(8.3)	5.0+ a		外面：タタキ後ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-235	
第368図	1161	SH169	土師器	ミニチュア 土器鉢	(3.6)	1.5		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		少		A区 S-235	
第370図	1164	SH170	土師器	甕	16.3	30.8		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-298	15
第370図	1165	SH170	土師器	甕	(17.3)	20.2+ a		外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ハケ	少	少		少	外面：スス	A区 S-298	13
第370図	1166	SH170	土師器	甕	12.5	18.8		外面：タタキ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ	少	少		多	外面：スス	A区 S-298	14
第370図	1167	SH170	土師器	甕	(16.6)	11.1+ a		外面：ハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：スス、2次被熱か	A区 S-298	5・7
第370図	1168	SH170	土師器	甕	(18.3)	7.3+ a		外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少	少	少	頭部下に波状文	A区 S-298	9
第370図	1169	SH170	土師器	広口壺	(29.7)	10.3+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少		少		A区 S-298	
第370図	1170	SH170	土師器	複合口 縁壺		3.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-298	
第370図	1171	SH170	土師器	複合口 縁壺		3.4+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多		A区 S-298	
第370図	1172	SH170	土師器	複合口 縁壺		6.9+ a		外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-298	8
第370図	1173	SH170	土師器	複合口 縁壺	(17.0)	6.1+ a		外面：ナナメハケ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ	少	多		多		A区 S-298	4
第370図	1174	SH170	土師器	複合口 縁壺	(14.4)	4.4+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	少		多		A区 S-298	3

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第370図	1175	SH170	土師器	壺		10.6+ <i>a</i>		外面：タタキ・ナデ 内面：ハケ・ナデ		多		少		A区 S-298	12
第370図	1176	SH170	土師器	壺		7.2+ <i>a</i>		外面：ヘラケズリ・タテハケ・ ヨコハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・工具ナデ	少	多		多		A区 S-298	
第370図	1177	SH170	土師器	鉢	(8.6)	8.2+ <i>a</i>		外面：ヘラケズリ・ハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナメハケ・ナデ	少	多		多		A区 S-298	
第370図	1178	SH170	土師器	高坏		12.4+ <i>a</i>		外面：ハケ後ミガキ・ミガキ 内面：ミガキ・ケズリ・ナデ	少	少		多		A区 S-298	
第370図	1179	SH170	土師器	高坏		5.2+ <i>a</i>	13.7	外面：ヘラケズリ・ナメハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコハケ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-298	10
第370図	1180	SH170	土師器	高坏		3.6+ <i>a</i>	13.3	外面：ハケ 内面：ハケ後ナデ	少	少	少	少		A区 S-298	
第370図	1181	SH170	弥生土器	高坏		10.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：シボリ痕	少	多		多		A区 S-298	
第370図	1182	SH170	土師器	鉢	(11.2)	9.3		外面：ハケ・工具ナデ 内面：ナデ	少	少		少	内面：スス、2次 被熱か	A区 S-298	
第373図	1188	SH171	土師器	甕	18.0	6.5+ <i>a</i>		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ	少	多		多	外面：スス	A区 S-297	
第373図	1189	SH171	土師器	甕	(22.0)	8.5+ <i>a</i>		外面：ナメハケ後 ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ	多	多		多		A区 S-297	
第373図	1190	SH171	土師器	甕	12.9	4.3+ <i>a</i>		外面：タテハケ後ナデ 内面：ヨコハケ	多	多				A区 S-297	
第373図	1191	SH171	土師器	甕	(12.1)	10.3+ <i>a</i>		外面：タタキ後タテハケ 内面：工具ナデ・ハケ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-297	4
第373図	1192	SH171	土師器	甕	11.7	8.1+ <i>a</i>		外面：工具ナデ・ナメハケ 内面：ナメハケ	多	少		多		A区 S-297	
第373図	1193	SH171	土師器	甕	(19.5)	11.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少		少		A区 S-297	6
第373図	1194	SH171	土師器	甕		8.8+ <i>a</i>		外面：タタキ後ナメハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ		多		多	外面：スス	A区 S-297	9・10
第373図	1195	SH171	土師器	複合口 緑壺		2.5+ <i>a</i>		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多		A区 S-297	
第373図	1196	SH171	土師器	複合口 緑壺	(19.2)	3.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-297	
第373図	1197	SH171	土師器	複合口 緑壺		3.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-297	
第373図	1198	SH171	土師器	複合口 緑壺		2.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多	外面：丹塗り	A区 S-297土坑1	
第373図	1199	SH171	土師器	高坏か		5.8+ <i>a</i>		外面：ナデ 内面：ヨコハケ	多	少		多		A区 S-297	
第373図	1200	SH171	土師器	高坏		3.8+ <i>a</i>		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：タテハケ・ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多	外面：丹塗り	A区 S-297	
第373図	1201	SH171	土師器	高坏		4.7+ <i>a</i>		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-297	9
第373図	1202	SH171	土師器	高坏		6.0+ <i>a</i>	14.8	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-297	9・11
第373図	1203	SH171	土師器	鉢	(9.05)	6.0	3.7	外面：タタキ・ナデ・ヨコナデ 内面：ハケ・ヨコナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-297	2
第373図	1204	SH171	土師器	鉢	(9.4)	6.2		外面：ヨコナデ・タタキ 内面：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	多	多		多		A区 S-297	
第373図	1205	SH171	土師器	鉢	(10.1)	3.2+ <i>a</i>		外面：ナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-297	
第373図	1206	SH171	土師器	鉢	(9.7)	2.6		外面：ナデ 内面：ナデ	多	少		多	外面：スス	A区 S-297	
第373図	1207	SH171	土師器	鉢		3.2+ <i>a</i>		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-297	
第373図	1208	SH171	土師器	鉢	(8.4)	2.8+ <i>a</i>		外面：ケズリ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-297	
第373図	1209	SH171	土師器	脚付鉢		21.1+ <i>a</i>		外面：タタキ後ハケ・工具ナデ 内面：ヨコハケ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-297	7
第373図	1210	SH171	土師器	脚付鉢		9.0+ <i>a</i>		外面：ケズリ・タテハケ・ミガキ 内面：ナデ・ヨコナデ・ミガキ	少	少		多		A区 S-297	
第373図	1211	SH171	土師器	脚付鉢 か		7.1+ <i>a</i>	16.8	外面：ナデ・ハケ後ミガキ 内面：ハケ・ナデ	少	少	少	少	内外面：黒斑、穿 孔	A区 S-297	1
第373図	1212	SH171	土師器か	ミニチュア 土器甕か		2.7+ <i>a</i>	(1.65)	外面：ナデ 内面：ナデ	少	少				A区 S-297	
第373図	1213	SH171	土師器	ミニチュア 土器か		3.05	(6.7)	外面：ハケ・ナデ 内面：ナデ	少	少		少	内面：スス	A区 S-297	

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第375図	1219	SH172	土師器	甕	126	18.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナメハケ	多	多		多	外面：スス	B区 S-236土坑1	2
第375図	1220	SH172	土師器	甕	(128)	3.7+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ		少		少		B区 S-236土坑1	
第375図	1221	SH172	土師器	甕	(126)	5.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナメハケ	少	多		多		B区 S-236土坑7	
第375図	1222	SH172	土師器	甕		4.8+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ		少		多		B区 S-236	
第375図	1223	SH172	土師器	複合口 緑壺	16.6	34.0		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少		少	外面：黒斑	B区 S-236土坑1	1
第375図	1224	SH172	土師器	複合口 緑壺		4.0+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコハケ		多		多		B区 S-236	
第375図	1225	SH172	土師器	複合口 緑壺		2.0+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ		少		少	外面：丹塗り	B区 S-236	
第375図	1226	SH172	土師器	複合口 緑壺		3.2+ a		外面：タテハケ後ヨコナデ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ		少		多		B区 S-236	
第375図	1227	SH172	土師器	複合口 緑壺		2.9+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：タテハケ・ヨコハケ・ヨコナデ	少			多		B区 S-236	
第375図	1228	SH172	土師器	壺		3.3+ a		外面：タテハケ 内面：ヨコハケ	少	多			肩部に櫛描波状文	B区 S-236	19
第375図	1229	SH172	土師器	壺		3.0+ a		外面：ナメハケ・ヨコナデ 内面：ナデ		多		多		B区 S-236土坑6	
第375図	1230	SH172	土師器	鉢		3.1+ a	3.5	外面：ヨコハケ・ナデ 内面：ナデ		少		多		B区 S-236	
第375図	1231	SH172	土師器	高坏		3.0		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ		少		多		B区 S-236	
第375図	1232	SH172	土師器	高坏	(126)	8.2+ a		外面：ヘラケズリ・ナデ 内面：ナデ・ヨコハケ	少	少		多		B区 S-236	9・17
第375図	1233	SH172	土師器	鉢		3.1+ a	3.5	外面：ヨコハケ・ナデ 内面：ナデ		少		多		B区 S-236	
第375図	1234	SH172	土師器	ミニチュア 土器鉢	4.5	5.4		外面：ナデ 内面：ナデ		多		多		B区 S-236	5
第375図	1235	SH172	土師器	支脚か	(8.2)	4.9+ a		外面：ナデ 内面：ナデ		多		多	1236と同一個体	B区 S-236	
第375図	1236	SH172	土師器	支脚か		5.7+ a	(12.0)	外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多	1235と同一個体	B区 S-236	
第378図	1241	SH173	土師器	甕		21.7+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナメハケ	多	多		多	内外面：黒斑	A区 S-303	2
第378図	1242	SH173	土師器	甕	15.0	9.5+ a		外面：ヨコハケ・ナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・ナメハケ	多	多		多		A区 S-303	6
第378図	1243	SH173	土師器	複合口 緑壺	(6.2)	6.3+ a		外面：タテハケ 内面：ナデ・指オサエ	多	多		少	外面：丹塗り	A区 S-303	5
第378図	1244	SH173	土師器	複合口 緑壺		7.6+ a		外面：ナデ 内面：指オサエ・ナデ	多	多	少	多		A区 S-303	1
第378図	1245	SH173	土師器	高坏		6.5+ a	(16.6)	外面：タテハケ・ミガキ 内面：ハケ・工具ナデ	多	多	多	多		A区 S-303	
第380図	1246	SH174	土師器	甕	22.0	9.5+ a		外面：ナメハケ後ヨコナデ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ	多	多		少		A区 S-302	8
第380図	1247	SH174	土師器	壺	(13.2)	7.7+ a		外面：ヨコナデ・ナメハケ 内面：ヨコナデ・タテハケ	少			少	内外面：黒斑	A区 S-302	
第380図	1248	SH174	土師器	甕か		9.1+ a		外面：ナメハケ 内面：ナメハケ	多			多	内外面：スス	A区 S-302	
第380図	1249	SH174	土師器	壺	29.0	16.0+ a		外面：タテハケ 内面：不定方向ハケ	多			多		A区 S-302	7・10
第380図	1250	SH174	土師器	壺		13.0+ a	10.0	外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ナメハケ	多			多	内外面：黒斑	A区 S-302	11
第380図	1251	SH174	土師器	複合口 緑壺		3.0+ a		外面：ナデ 内面：ヨコハケ	多			少		A区 S-302	
第380図	1252	SH174	土師器	複合口 緑壺		4.8+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多			多		A区 S-302	
第380図	1253	SH174	土師器	壺		18.0+ a		外面：タタキ・タテナデ 内面：ヨコハケ	多			多		A区 S-302	9・10
第380図	1254	SH174	土師器	ミニチュア 土器鉢	(4.8)	4.5		外面：ナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-302	
第380図	1255	SH174	土師器	高坏	21.0	13.3	13.0	外面：ケズリ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナメハケ・ヨコナデ	多	多		多	内面：黒斑	A区 S-302	10～12
第380図	1256	SH174	土師器	高坏	13.2	9.6	13.7	外面：ヘラケズリ・ナメハケ・ナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコハケ・ナデ	少	多		多		A区 S-302	2
第380図	1257	SH174	土師器	高坏		8.4+ a		外面：ヘラケズリ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	少	多		多		A区 S-302	4
第383図	1262	SH175	土師器	甕	(19.8)	11.2+ a		外面：タタキ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・タテハケ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-232	



挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第383区	1263	SH175	弥生土器	甕		5.8+ a		外面：ナナメハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		多	外面：スス	A区 S-232	
第383区	1264	SH175	弥生土器	甕		3.4+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少	内外面：スス 外面：丹塗り	A区 S-232	2
第383区	1265	SH175	土師器	複合口 緑壺	(17.6)	7.6+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ	少	少		多		A区 S-232・231	
第383区	1266	SH175	土師器	複合口 緑壺		4.9+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多		A区 S-232	
第383区	1267	SH175	土師器	壺		8.5+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ナデ	少	多		多		A区 S-232	
第383区	1268	SH175	土師器	壺		3.8+ a		外面：タテハケ・ナデ 内面：ナデ・不定方向ハケ	多	多		多		A区 S-232・231	
第383区	1269	SH175	土師器	高坏	8.3+ a	13.6		外面：ハケ・ナデ 内面：ハケ・指ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-232	7
第383区	1270	SH175	土師器	脚付鉢 か		5.4+ a	11.9	外面：ハケ・ヨコナデ 内面：ハケ・ヨコナデ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-232	9
第383区	1271	SH175	土師器	脚付鉢 か		4.8+ a	15.9	外面：ミガキ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-232	3・5
第383区	1272	SH175	土師器	鉢	(12.8)	6.4+ a		外面：タタキ・ヨコハケ・ナナメハケ 内面：ヨコハケ		多		多		A区 S-232	
第383区	1273	SH175	土師器	鉢	11.3	6.7		外面：タタキ・ナデ 内面：指ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-232	1
第383区	1274	SH175	土師器	鉢		5.4+ a		外面：ナデ 内面：タテハケ・工具ナデ		多		多		A区 S-232	
第383区	1275	SH175	土師器	鉢		3.0+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-232	
第383区	1276	SH175	土師器	鉢	(8.2)	3.3+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多		A区 S-232	
第383区	1277	SH175	土師器か	柄杓形 土器	4.0+ a	3.5+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-232	
第383区	1278	SH175	土師器か	鉢か		4.7+ a	2.6	外面：ナデ 内面：ナデ		少		多		A区 S-232	
第385区	1281	SH176	土師器	鉢	10.8	6.8	3.4	外面：タタキ後工具ナデ 内面：ナナメハケ	多	少		多	内外面：スス	A区 S-269	1
第385区	1282	SH176	土師器	鉢	(9.0)	5.3+ a		外面：タタキ後ナデ 内面：工具ナデ	少	少		多	外面：スス	A区 S-269	7
第385区	1283	SH176	土師器	鉢	(4.6)	4.5+ a		外面：ナナメハケ・ヘラケズリ 後工具ナデ 内面：ナナメハケ・ヨコナデ・ 工具ナデ	少	少		少	外面：丹塗り	A区 S-269	6
第385区	1284	SH176	土師器	鉢	9.5	4.6		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少		多	外面：スス	A区 S-269	2
第387区	1285	SH177	土師器	甕	17.0	32.3		外面：タテハケ後ヨコナデ・ タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ ナナメハケ		多		多	外面：スス	A区 S-086	18
第387区	1286	SH177	土師器	甕	17.4	14.0+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-086	7
第387区	1287	SH177	土師器	甕	(13.6)	7.7+ a		外面：ナデ・タテハケ・ナナメハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多	内外面：スス	A区 S-086	15
第387区	1288	SH177	土師器	甕		13.3+ a		外面：タタキ後工具ナデ 内面：工具ナデ	少	少		少	外面：スス	A区 S-086	
第387区	1289	SH177	土師器	甕		10.7+ a		外面：工具ナデ・ケズリ 内面：ヨコハケ・ケズリ	少	少	少	多	外面：黒斑	A区 S-086	15
第387区	1290	SH177	土師器	甕		16.3+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ	多	少		多	外面：スス	A区 S-086	
第387区	1291	SH177	土師器	複合口 緑壺	11.0	19.0		外面：ヨコナデ・タテハケ後ナデ 内面：ナデ・ヨコハケ	多	多		多		A区 S-086	10
第387区	1292	SH177	土師器	複合口 緑壺		2.6+ a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ		少		多	外面：丹塗り	A区 S-086	
第387区	1293	SH177	土師器	複合口 緑壺		3.3+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-086	
第387区	1294	SH177	土師器	複合口 緑壺		5.4+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ	多	多		多		A区 S-086	
第387区	1295	SH177	土師器	壺		6.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-086	
第387区	1296	SH177	土師器	鉢	13.3	12.1		外面：ヨコナデ・ケズリ後タテハケ 内面：ヨコナデ・ハケ・ナデ	少	少		少		A区 S-086	14
第387区	1297	SH177	土師器	鉢	(11.0)	6.1+ a		外面：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-086	
第387区	1298	SH177	土師器	鉢		3.8+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-086	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第387図	1299	SH177	土師器	鉢		6.3+ a		外面：ヨコハケ 内面：タテハケ・ヨコナデ	少	多		多	内外面：スス	A区 S-086	
第387図	1300	SH177	土師器	鉢	(17.8)	13.7		外面：タテハケ後ヨコナデ・ヘラケズリ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ・ヨコハケ・ヘラケズリ	少	少		多		A区 S-086	11・13・14
第387図	1301	SH177	土師器	高坏		8.5+ a		外面：ヘラケズリ・タテハケ 内面：ナデ	多	多		多	脚部に穿孔6カ所か	A区 S-086	
第387図	1302	SH177	土師器	高坏		6.1+ a		外面：ヘラケズリ・ナデ 内面：シボリ痕・ナデ	少	多		多	脚部に穿孔2個一組で対	A区 S-086	
第387図	1303	SH177	土師器	高坏		6.6+ a		外面：ヘラケズリ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-086	
第387図	1304	SH177	土師器	脚付鉢		3.3+ a	11.8	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-086	1
第387図	1305	SH177	土師器	鉢		5.0+ a		外面：タタキ・ナデ 内面：ヨコハケ・工具ナデ	少	多		多		A区 S-086	
第387図	1306	SH177	土師器	台付鉢	12.0	8.5+ a		外面：ヨコナデ・ナナメハケ・タテハケ 内面：ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-086	6
第387図	1307	SH177	土師器	鉢	12.6	6.6		外面：タテハケ・ヨコハケ・ヘラケズリ 内面：ナナメハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-086	17
第387図	1308	SH177	土師器	鉢	13.2	5.7		外面：不定方向ハケ 内面：ナデ	多	多		多	口縁部・底部：黒斑	A区 S-086	5
第387図	1309	SH177	土師器	鉢	11.4	5.4		外面：ヘラケズリ後タタキ 内面：ナナメハケ	多	多		多	口縁部・外面：黒斑	A区 S-086	5
第387図	1310	SH177	土師器	鉢	10.0	5.4		外面：ヘラケズリ後ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多		A区 S-086	8
第387図	1311	SH177	土師器	鉢	8.7	5.4		外面：ナナメハケ・工具ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-086	19
第390図	1315	SH178	土師器	高坏		4.4+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多	多	多		A区 S-241	2
第390図	1316	SH178	土師器	脚付鉢	10.4	8.3	8.4	外面：ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコハケ・ナデ	多	少		少	脚内面：黒斑	A区 S-241	4・5
第390図	1317	SH178	土師器	柄杓形土器	7.5～8.4	4.2		外面：タテハケ・ケズリ 内面：ヨコハケ	少			多	外面：スス	A区 S-241	3
第392図	1318	SH179	土師器	複合口縁壺	15.1	38.2		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ後ナデ・ハケ後ナデ	少	少		少		A区 S-284	10
第392図	1319	SH179	土師器	複合口縁壺		3.7+ a		外面：ヨコナデ・タテナデ 内面：ヨコナデ	多	少		多		A区 S-284	
第392図	1320	SH179	弥生土器	壺		9.3+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・ナデ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-284	8
第392図	1321	SH179	土師器	脚付鉢	10.7	(6.5～6.8)	7.5～7.9	外面：タテハケ 内面：ヨコハケ・タテハケ	多	多		多		A区 S-284	4・10
第392図	1322	SH179	土師器	脚付鉢	21.0	14.6+ a		外面：ヘラケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-284	2
第392図	1323	SH179	土師器	高坏	26.3	11.3+ a		外面：ケズリ・ミガキ 内面：ナデ後ミガキ	多	多		多		A区 S-284	6
第392図	1324	SH179	土師器	柄杓形土器	(5.7)	4.8		外面：ナデ・ヘラケズリ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-284	
第394図	1326	SH180	土師器	甕	17.7	35.9		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ヘラケズリ	多	多		多	内外面：スス	A区 S-285	54・60
第394図	1327	SH180	土師器	甕	(15.4)	29.8		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少		少		A区 S-285	33～35・38
第394図	1328	SH180	土師器	甕	(13.3)	19.2+ a		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少	少	少	外面：黒斑	A区 S-285	49
第394図	1329	SH180	土師器	甕	17.2	36.0		外面：タタキ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ヘラケズリ・ナデ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-285	10～12・15・25・29・30・50
第394図	1330	SH180	土師器	甕	(16.6)	25.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ・タタキ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	多	多		多		A区 S-285	15
第394図	1331	SH180	土師器	甕	12.4	23.5		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ハケ・ナデ	少	少		少		A区 S-285	53
第394図	1332	SH180	土師器	甕	(12.8)	29.9		外面：タタキ後タテハケ・ヘラケズリ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-285	10・21・27・29・30

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第394図	1333	SH180	土師器	甕	(18.6)	33.5		外面：タタキ後タテハケ 内面：工具ナデ・ナナメハケ	多	少		多	内外面：スス	A区 S-285	6・8～10・22・24・25・31・33
第394図	1334	SH180	土師器	甕	10.4	23.2		外面：タタキ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ケズリ・ヨコハケ・ナデ		多		多	外面：スス	A区 S-285	20・38
第395図	1335	SH180	土師器	甕	16.7	12.4+a		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	多	多	少	多	外面：スス	A区 S-285	5・12
第395図	1336	SH180	土師器	甕		22.2+a		外面：タタキ後ハケ・ナデ 内面：ハケ・ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：黒斑	A区 S-285	20
第395図	1337	SH180	土師器	複合口緑壺	11.3	15.4		外面：ナデ・タテハケ後ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ミガキ・ナデ	少	少		少	外面：丹塗り、2次被熱	A区 S-285	59
第395図	1338	SH180	土師器	複合口緑壺		1.7+a		外面：ナデ 内面：ヨコナデ	少	多	多	少	外面：丹塗り	A区 S-285	
第395図	1339	SH180	土師器	複合口緑壺		2.7+a		外面：ナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多	内外面：丹塗り	A区 S-285	
第395図	1340	SH180	土師器	複合口緑壺		3.1+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多			多	外面：丹塗り	A区 S-285	
第395図	1341	SH180	土師器	高坏	(19.4)	9.7+a		外面：ヨコナデ・工具ナデ・ハケ 内面：ミガキ	多	多		多	内外面：丹塗り	A区 S-285	18
第395図	1342	SH180	土師器	台付鉢	(20.5)	9.9+a		外面：ハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少	少	少		A区 S-285	7
第395図	1343	SH180	土師器	鉢		6.0+a		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少	少	少		A区 S-285	
第395図	1344	SH180	土師器	鉢	17.3	13.3		外面：タタキ後ヨコハケ・ 工具ナデ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ・ タテハケ	多	多				A区 S-285	12
第399図	1352	SH181	土師器	脚付鉢	(8.9)	11.8+a		外面：ヨコナデ・タタキ後 工具ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-288	1
第399図	1353	SH181	弥生土器	高坏	(15.1)	6.3+a		外面：ミガキ 内面：ミガキ	少	多		多		A区 S-288	1
第401図	1358	SH182	土師器	甕	(13.0)	4.6+a		外面：ヨコナデ・タテハケ後ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少			多		A区 S-299	
第401図	1359	SH182	土師器	壺		6.1+a		外面：ナナメハケ・不定方向ハケ 内面：ヨコハケ	少			少		A区 S-299	
第401図	1360	SH182	土師器	壺		9.8+a		外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：ヘラケズリ後ナデ	多			多		A区 S-299	
第401図	1361	SH182	土師器	複合口緑壺	(21.0)	4.2+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	少		少		A区 S-299	
第401図	1362	SH182	土師器	複合口緑壺	(18.4)	5.0+a		外面：ヨコナデ・ヨコハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	多		多		A区 S-299	
第401図	1363	SH182	土師器	複合口緑壺	(16.0)	6.2+a		外面：タテハケ後ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ後ナデ	多	多		多		A区 S-299	
第401図	1366	SH182	土師器	高坏	26.7	15.3+a		外面：ヨコナデ・工具ナデ・ミガキ 内面：ミガキ・ナデ・工具ナデ	多	多		少	脚部に2個一組穿孔2ヶ所	A区 S-299	1
第401図	1367	SH182	土師器	鉢		3.0+a		外面：ナデ 内面：ナデ・ミガキ	少			多		A区 S-299	
第403図	1371	SH183	弥生土器	壺	(32.0)	13.7+a		外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-300・301	
第403図	1372	SH183	土師器	複合口緑壺		3.9+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多		A区 S-300	
第403図	1373	SH183	土師器	複合口緑壺		3.7+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-300	
第403図	1374	SH183	土師器	複合口緑壺		2.6+a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ		多		多		A区 S-300	
第403図	1375	SH183	土師器	高坏	21.0	14.9	(14.0)	外面：ケズリ後ヨコナデ・ミガキ 内面：ケズリ後ナデ・ヨコハケ	多	多		多		A区 S-300・301	3～5
第403図	1376	SH183	土師器	不明		1.4+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		少		A区 S-300	
第403図	1377	SH183	土師器	ミニチュア土器鉢	(7.0)	5.7+a		外面：ヘラケズリ・タテハケ・ ナデ 内面：ヘラケズリ・ヨコハケ・ ナデ	多	多		多		A区 S-300	
第403図	1378	SH183	土師器	高坏	(18.8)	3.1+a		外面：ヨコナデ・ヨコハケ・ ナナメハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ ミガキ	少	多		多		A区 S-300	
第403図	1379	SH183	土師器	鉢	(12.4)	3.6+a		外面：ヨコハケ・ナナメハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	多		多		A区 S-300	
第405図	1381	SH184	弥生土器	甕		8.4+a	8.2	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-002	3

挿入番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第405図	1382	SH184	土師器	高坏		8.3+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕・ナデ	少	多		少		A区 S-002	
第405図	1383	SH184	土師器	高坏	17.5 ~ 18.0	11.1 ~ 11.9	13.0	外面：タテハケ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ	多	多			内面：スス	A区 S-002	7
第405図	1384	SH184	土師器	高坏か		1.3+ a		外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ				少	脚部穿孔部分か	A区 S-002	
第405図	1385	SH184	土師器	鉢		4.9+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-002	
第405図	1386	SH184	土師器	脚付鉢		9.3+ a	12.3	外面：タタキ・ナデ・ヨコナデ 内面：ケズリ・ヨコハケ・ヨコナデ	少	多			脚内面：黒斑	A区 S-002	1
第405図	1387	SH184	土師器	脚付鉢	12.2	13.4	11.4	外面：タテハケ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ	少	多			内面：スス	A区 S-002	5
第405図	1388	SH184	土師器	脚付鉢	12.4	9.1	11.0	外面：タテハケ・ナデ・ミガキ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ	少	多			丹塗り	A区 S-002	4
第405図	1389	SH184	土師器	鉢	(10.0)	4.5+ a		外面：ヘラケズリ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多		多		A区 S-002	
第405図	1390	SH184	土師器	鉢	(10.4)	6.2	3.4	外面：ケズリ後ナデ 内面：工具ナデ	少	多		少	外面：黒斑	A区 S-002	
第405図	1391	SH184	土師器	鉢	9.4	5.6 ~ 6.1	5.1	外面：ケズリ・タタキ・ヨコハケ 内面：ケズリ・ヨコハケ・ナデ	多	多				A区 S-002	6
第407図	1394	SH185	土師器	甕	(14.5)	12.7+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ	多	多		多		A区 S-215	
第407図	1395	SH185	弥生土器	甕	(23.4)	4.2+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ	多	多		多		A区 S-215	3
第407図	1396	SH185	土師器	甕	(14.5)	4.3+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ	多	多		多		A区 S-215	
第407図	1397	SH185	土師器	壺		3.1+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ナナメハケ	多	多		多		A区 S-215	
第407図	1398	SH185	土師器	甕か		10.8	(19.4)	外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多	1394と同一個体か	A区 S-215	5
第407図	1399	SH185	土師器	甕か		5.3+ a		外面：タテハケ後工具ナデ 内面：ヨコハケ後工具ナデ	多	多		多		A区 S-215	7
第407図	1400	SH185	土師器	鉢	(16.7)	6.8+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-215	1
第407図	1401	SH185	土師器	高坏		7.2+ a	15.8	外面：タテハケ後ミガキ・ ヨコハケ 内面：工具ナデ・ヨコハケ・ ナナメハケ	多	多		少	打欠か	A区 S-215	2
第407図	1402	SH185	土師器	鉢	(12.9)	7.6+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-215	
第407図	1403	SH185	土師器	鉢	(9.5)	5.5	2.9	外面：工具ナデ・タタキ後ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多		A区 S-215	
第409図	1406	SH186	土師器	甕	20.0	43.9		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ タテハケ	少	少		少	穿孔	A区 S-247北土器 群一括	58
第409図	1407	SH186	土師器	甕	16.3	36.5		外面：タテハケ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ	多	多		多		A区 S-247南土器 群一括	12・23・25・30 ~ 32・ 34・35・41・46 ~ 48
第409図	1408	SH186	土師器	甕	(15.0)	6.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-247	19
第409図	1409	SH186	土師器	甕	17.7	33.2		外面：タタキ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-247	59
第409図	1410	SH186	土師器	甕	(18.0)	34.2+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ タテハケ	多	多		多		A区 S-247北土器 群一括	61・62・67・68
第409図	1411	SH186	土師器	甕	(20.0)	7.5+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-247	14
第409図	1412	SH186	土師器	甕か	9.7+ a			外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-247	46
第409図	1413	SH186	土師器	甕	(15.4)	18.5+ a		外面：タタキ・タテハケ 内面：ヘラケズリ・ヨコハケ・ ナナメハケ	少	多		多		A区 S-247北土器 群一括	
第409図	1414	SH186	土師器	甕	14.2	19.25		外面：工具ナデ 内面：ナナメハケ	多	少		多	内外面：黒斑	A区 S-247北土器 群一括	64
第409図	1415	SH186	土師器	甕	(15.0)	13.0+ a		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ	多	多		多	1412と同一個体か	A区 S-247	33
第409図	1416	SH186	土師器	甕	(18.6)	8.0+ a		外面：タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	少		多	外面：スス	A区 S-247北土器 群一括	60・63
第409図	1417	SH186	土師器	甕		16.4+ a		外面：工具ナデ 内面：ナナメハケ・工具ナデ	多	少		多	内外面：スス	A区 S-247	55

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第410図	1418	SH186	土師器	複合口緑壺	13.0 ~ 13.6	44.8 ~ 45.0		外面：タタキ後タテハケ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-247北土器群一括	60・61・63・64
第410図	1419	SH186	土師器	複合口緑壺	(13.5)	39.4		外面：タテハケ・タタキ後ハケ 内面：ヨコハケ・ハケ		多		多		A区 S-247北土器群一括	61・62
第410図	1420	SH186	土師器	複合口緑壺	13.6	11.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ハケ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少		少	外面：黒斑	A区 S-247	1
第410図	1421	SH186	土師器	複合口緑壺		4.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少		多		A区 S-247柱穴1	
第410図	1422	SH186	土師器	複合口緑壺	17.6	12.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコハケ	少	少		少		A区 S-247	42
第410図	1423	SH186	土師器	複合口緑壺		11.9+ <i>a</i>		外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-247	
第410図	1424	SH186	土師器	壺		10.4+ <i>a</i>		外面：タタキ後ナデ 内面：ナナメハケ	少	多		少		A区 S-247	
第410図	1425	SH186	土師器	壺か		15.0+ <i>a</i>		外面：工具ナデ 内面：工具ナデ	多	少		多		A区 S-247	52
第410図	1426	SH186	土師器	壺か		16.6+ <i>a</i>		外面：工具ナデ・タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-247	21
第410図	1427	SH186	土師器	台付鉢	(19.9)	11.8+ <i>a</i>		外面：タテハケ後ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ・ナナメハケ	多	多		多		A区 S-247	16
第410図	1428	SH186	土師器	高坏		4.3+ <i>a</i>	(17.4)	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-247	26
第410図	1429	SH186	土師器	高坏		12.1+ <i>a</i>	(20.8)	外面：タテハケ後ミガキ・ヨコナデ 内面：ミガキ・ナデ・ケズリ・ヨコハケ	少	少		少	丹塗り、穿孔4ヶ所	A区 S-247	70
第411図	1430	SH186	土師器	高坏		16.2+ <i>a</i>	21.0	外面：ヨコナデ・タテハケ後ミガキ 内面：ナデ・ヨコナメハケ後ミガキ	多	多		少		A区 S-247	57
第411図	1431	SH186	土師器	脚付鉢	16.0	17.1	12.0	外面：ヨコナデ・ミガキ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ・ミガキ	多	多		多	内外面：黒斑	A区 S-247	22
第411図	1432	SH186	土師器	脚付鉢	(18.6)	12.6	17.0	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ヨコハケ・工具ナデ	多	多	多	多		A区 S-247	10・36・37
第411図	1433	SH186	土師器	脚付鉢	19.5	14.3+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ナデ・ハケ・ミガキ	少	少				A区 S-247	51
第411図	1434	SH186	土師器	脚付鉢	(19.3)	10.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ヘラケズリ後タテハケ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ・ヨコハケ	少	多		多		A区 S-247	50
第411図	1435	SH186	土師器	脚付鉢		11.8+ <i>a</i>	16.6	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ・ヨコハケ・工具ナデ	少	少		少	脚内面：黒斑	A区 S-247	9・43
第411図	1436	SH186	土師器	脚付鉢	(23.5)	14.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・ハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少	少	少	内外面：黒斑	A区 S-247	5・8
第411図	1437	SH186	土師器	鉢	(15.8)	18.9		外面：ヨコナデ・タテハケ・ケズリ 内面：ヨコハケ・タテハケ	少	少		少		A区 S-247北土器群一括	61・62・68
第411図	1438	SH186	土師器	鉢	14.3	10.5+ <i>a</i>		外面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ミガキ	多	多		少	内外面：黒斑	A区 S-247南土器群一括	
第411図	1439	SH186	土師器	鉢	(20.4)	12.0+ <i>a</i>		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ	少	多		多	内外面：黒斑	A区 S-247南土器群一括	38
第411図	1440	SH186	土師器	鉢	15.3	8.2		外面：タタキ・ナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少	少	少	内外面：黒斑	A区 S-247南土器群一括	3・7
第411図	1441	SH186	土師器	鉢	15.6	10.0		外面：タタキ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ	多	少		多	外面：黒斑	A区 S-247	49・56・58
第411図	1442	SH186	土師器	鉢	14.3	7.6	4.75	外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-247	65
第411図	1443	SH186	土師器	鉢	(15.0)	8.0		外面：タタキ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ケズリ・ナデ・ヨコナデ	多	多		多	内外面：黒斑	A区 S-247	2

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第411図	1444	SH186	土師器	鉢	12.5	5.8		外面：タタキ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	少		多	内外面：黒斑	A区 S-247	11・13
第411図	1445	SH186	土師器	鉢	(12.0)	5.4+ a		外面：タタキ後ヘラケズリ・ナナメハケ 内面：工具ナデ	多	少		少	内外面：スス	A区 S-247	
第411図	1446	SH186	土師器	鉢	11.0	6.7		外面：ヨコナデ・工具ナデ ヨコナデ・工具ナデ	少	多	多	多		A区 S-247	53
第411図	1447	SH186	土師器	鉢	10.1	5.2		外面：工具ナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ヘラケズリ後ナデ		多	多	多	内外面：黒斑	A区 S-247	54
第411図	1448	SH186	土師器	鉢	(9.2)	5.8+ a		外面：タタキ・工具ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-247	50
第411図	1449	SH186	土師器	鉢か		7.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：タテハケ・ナナメハケ・ヨコナデ	多	少		多		A区 S-247	4
第413図	1452	SK530	弥生土器	甕	(45.0)	31.7+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ナデ	少			少	外面：スス	A区 S-007	
第414図	1454	SX15	弥生土器	高坏	29.0	9.0+ a		外面：ナナメハケ・ヘラケズリ・ミガキ 内面：ナデ・ナナメハケ・ミガキ	多	少	少	多		A区 S-001	
第416図	1455	SK531	土師器	甕	29.2	48.5		外面：ヨコハケ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	少		少	内外面：スス	A区 S-122	1
第416図	1456	SK531	土師器	甕	(16.6)	5.2+ a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ケズリ	少	多		多		A区 S-122	
第416図	1457	SK531	土師器	甕	(19.2)	6.3+ a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ナデ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-122	46
第416図	1458	SK531	土師器	甕	21.9	38.2		外面：ナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・不定方向ハケ	多	多		多		A区 S-122	31
第416図	1459	SK531	土師器	甕	(16.5)	24.5+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ハケ	多	多		多		A区 S-122	35・37・39・40・42
第416図	1460	SK531	土師器	甕	11.8	20.5		外面：ヘラケズリ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ナナメハケ後タテナデ	多	多		多	外面：コゲ	A区 S-122	30・32～34・36・48
第416図	1461	SK531	土師器	甕	(11.6)	11.7+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	少		多		A区 S-122	
第416図	1462	SK531	土師器	甕		17.0+ a		外面：ヘラケズリ後ナデ 内面：工具ナデ	多	多		少	外面：スス	A区 S-122	29
第416図	1463	SK531	土師器	甕	(22.5)	32.1+ a		外面：タタキ後ケズリ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	少		多		A区 S-122	1・2・20・46
第417図	1464	SK531	土師器	甕		18.1+ a		外面：タテハケ・ヘラケズリ 内面：不定方向ハケ	多	多	少	多	内外面：スス	A区 S-122	2
第417図	1465	SK531	土師器	甕		18.7+ a		外面：タテハケ 内面：不定方向ハケ	多	多		多		A区 S-122	19
第417図	1466	SK531	土師器	甕か		9.0+ a		外面：ケズリ後タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ナデ	少	多		多		A区 S-122	50
第417図	1467	SK531	土師器	複合口緑壺	28.9	70.6		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ後ヨコナデ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-122	1～4・8～10・13・20・21
第417図	1468	SK531	土師器	複合口緑壺	(14.4)	12.5+ a		外面：タテハケ・ナナメハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	少		少		A区 S-122	46
第417図	1469	SK531	土師器	複合口緑壺	12.5～12.9	35.3+ a		外面：ヨコナデ・タタキ後 ミガキ 内面：ヨコハケ・ナデ・ミガキ	多	多		多		A区 S-122	53
第417図	1470	SK531	土師器	複合口緑壺	14.8	35.5+ a		外面：タタキ・工具ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-122	23
第417図	1471	SK531	土師器	高坏		8.1+ a		外面：ケズリ・ナデ 内面：ミガキ・工具ナデ・シボリ痕	少	少		多		A区 S-122	58

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第417図	1472	SK531	土師器	高坏	23.0	15.0~16.6	13.0	外面：ナナメハケ・タタキ・ヨコナデ 内面：ミガキ・ヨコナデ	少	少		少	穿孔4ヶ所(未貫通)	A区 S-122	17・46
第417図	1473	SK531	土師器	高坏		6.0	14.6	外面：タテハケ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコハケ	少	多			外面：黒斑、穿孔4ヶ所	A区 S-122	55
第417図	1474	SK531	土師器	鉢	(15.8)	8.9+a		外面：ヨコハケ・ナナメハケ・ナデ 内面：ヨコハケ			多	多	外面：黒斑	A区 S-122	
第417図	1475	SK531	土師器	鉢		10.4+a		外面：不定方向ハケ 内面：不定方向ハケ	多	多				A区 S-122	47
第417図	1476	SK531	土師器	脚付鉢	13.1~13.6	12.1	8.9	外面：ヘラケズリ・ヨコナデ 内面：ナデ後ヘラミガキ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-122	27
第418図	1477	SK531	土師器	台付鉢	19.0~19.5	19.8	14.4	外面：ヨコナデ・ナナメハケ・タテナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	少	少		多		A区 S-122	No.29~45・54
第418図	1478	SK531	土師器	台付鉢	17.9	17.4~17.8	11.8	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ヘラケズリ・ナデ	多	多	少	多		A区 S-122	9・11・12・14・46
第418図	1479	SK531	土師器	脚付鉢	21.0	15.4	14.6	外面：ケズリ後タテハケ・ミガキ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ・ミガキ	多	多			外面口縁：黒斑	A区 S-122	51
第418図	1480	SK531	土師器	台付鉢		9.9+a	10.5	外面：タテハケ・ヨコナデ・ケズリ 内面：工具ナデ	多	多				A区 S-122	7
第418図	1481	SK531	土師器	脚付鉢		11.7+a		外面：タテハケ後ナデ 内面：工具ナデ	少	多		多		A区 S-122	22
第418図	1482	SK531	土師器	鉢	(12.8)	6.5+a		外面：タテハケ・ヨコナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	多		多	丹塗り	A区 S-122	
第418図	1483	SK531	土師器	鉢	10.1	6.2		外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ後タテナデ	少	多		多	底部：黒斑	A区 S-122	6
第418図	1484	SK531	土師器	鉢	7.8			外面：ナデ 内面：ナデ	少	多			内外面：黒斑	A区 S-122	57
第418図	1485	SK531	土師器	鉢	5.0	2.6~3.0		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多		多	外面：黒斑	A区 S-122	
第418図	1486	SK531	土師器	柄杓形土器	5.0~5.7	3.9~4.4		外面：ナデ 内面：ナデ	少	多			黒斑	A区 S-122	5
第420図	1487	SK532	土師器	甕	(17.0)	3.9+a		外面：ヨコナデ・ナナメハケ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	少		多		A区 S-138	
第420図	1488	SK532	土師器	高坏办		2.25+a		外面：ミガキ 内面：ヨコハケ	多	少		少	内外面：黒斑	A区 S-138	
第422図	1490	SK453	弥生土器	甕	(27.4)	31+a	(25.5)	外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ナデ・ヨコナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-030	2・8
第422図	1491	SK533	弥生土器	蓋		4.6+a	5.6	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-031	
第422図	1492	SK533	弥生土器	甕		2.5+a		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	少				A区 S-031	4
第422図	1493	SK533	土師器	甕	15.2	23.0		外面：タタキ・タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ・ヨコハケ・ヨコナデ	少	多			外面：スス	A区 S-031	11・12層
第422図	1494	SK533	土師器	甕		19.1+a	(18.3)	外面：タタキ後工具ナデ 内面：ナデ	少	少	少	多	外面：スス	A区 S-031	
第422図	1495	SK533	土師器	甕×壺		12.0+a		外面：ヘラケズリ 内面：ヘラケズリ	多	多		多		A区 S-031	2

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ (cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第422図	1496	SK533	土師器	甕		10.2+ a		外面：ヘラミガキ・タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	少		多		A区 S-031	7
第422図	1497	SK533	土師器	甕	(17.7)	6.7+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	少	多		少	外面：スス	A区 S-031	16
第422図	1498	SK533	土師器	甕	(21.0)	7.3+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	少		多		A区 S-031	
第422図	1499	SK533	土師器	壺		10.5+ a		外面：タタキ・タテハケ・ヨコナデ 内面：ケズリ後ヨコハケ・ナデ	多	多			外面：黒斑	A区 S-031	12
第422図	1500	SK533	土師器	壺		34.6+ a		外面：タタキ後ハケ 内面：ハケ	少	少	少	少		A区 S-031	
第422図	1501	SK533	土師器	複合口縁壺	(35.6)	6.1+ a		外面：ヨコナデ・ハケ 内面：ヨコナデ・ハケ	少	少	少	少		A区 S-031	5・2層
第422図	1502	SK533	土師器	複合口縁壺	(21.0)	5.1+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	多	多		多		A区 S-031	
第422図	1503	SK533	土師器	高坏	(26.0)	5.8+ a		外面：ミガキ・ヘラケズリ 内面：ミガキ・タテハケ	多	多		多		A区 S-031	
第422図	1504	SK533	土師器	高坏		11.3+ a		外面：ミガキ 内面：シボリ痕	多	多		多	外面：丹塗り	A区 S-031	
第422図	1505	SK533	土師器	高坏		7.2+ a	16.7	外面：ナナメハケ後ミガキ 内面：シボリ痕・ヨコハケ	多	多		多	穿孔	A区 S-031	7
第422図	1506	SK533	土師器	高坏		14.2+ a	15.9	外面：ナデ・ケズリ・ミガキ 内面：ヨコハケ後ミガキ	多	多		多	穿孔4カ所	A区 S-031	6・7・17
第422図	1507	SK533	土師器	鉢	14.3	8.5		外面：ヨコナデ・ナナメハケ 内面：ヨコナデ・ナナメハケ後ナデ	多	多		多	口縁：スス	A区 S-031	13
第422図	1508	SK533	土師器	鉢	8.4	3.1		外面：ナデ 内面：ナデ	少	少	少	多	内面：黒斑	A区 S-031	
第423図	1509	SK533	土師器	鉢	(20.1)	18.4		外面：タタキ・工具ナデ・ヨコナデ 内面：ハケ・ナデ	少	少	少	少	外面：スス	A区 S-031	
第423図	1510	SK533	土師器	脚付鉢		7.4+ a		外面：タテハケ・ナデ 内面：ヨコハケ	多	多	多	多		A区 S-031	3
第423図	1511	SK533	土師器	脚付鉢	16.3	16.7	14.2	外面：タテハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ・工具ナデ・ヨコハケ	多	多		多	内面底部：黒斑	A区 S-031	1
第423図	1512	SK533	土師器	脚付鉢	(15.0)	24.9	(17.9)	外面：ヨコナデ・ナナメハケ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ヨコナデ後ナナメハケ	少	少			穿孔5ヶ所、外面：丹塗り	A区 S-031	10・16
第423図	1513	SK533	土師器	高坏		7.3+ a		外面：ミガキ 内面：ミガキ・シボリ痕	多	多		少	内外面：丹塗り	A区 S-031	8
第423図	1514	SK533	土師器	鉢	(18.2)	7.6+ a		外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ナデ・ヨコナデ		多		少		A区 S-031	3層
第423図	1515	SK533	土師器	鉢	(12.8)	8.9		外面：ナナメハケ・ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	少	多			内面：スス、丹塗り	A区 S-031	12・13・3層
第423図	1516	SK533	土師器	鉢	10.2	7.2		外面：ヨコナデ・ナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	少	少				A区 S-031	15
第423図	1517	SK533	土師器	柄杓形土器	(9.5～10)	6.6		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-031	9
第425図	1518	SK534	土師器	甕		14.7+ a		外面：タタキ後ナナメハケ 内面：不定方向ハケ	多	多		多	外面：スス	A区 S-224	
第425図	1519	SK534	土師器	甕か		11.6+ a		外面：タテハケ・ナデ 内面：工具ナデ	多	少		多		A区 S-224	2
第425図	1520	SK534	土師器	高坏		7.3+ a		外面：ヘラケズリ後ミガキ 内面：不定方向ハケ後ミガキ	多	多	多	多	内外面：スス	A区 S-224	1
第425図	1521	SK534	土師器	高坏か		2.4+ a		外面：タテハケ後ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	少		少	内外面：丹塗り	A区 S-224	
第425図	1522	SK534	土師器	高坏か		3.6+ a		外面：ヨコナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	少		多		A区 S-224	
第427図	1523	SK535	土師器	甕	16.3	41.5		外面：ナデ・タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多	多	多	外面：スス	A区 S-267	2
第427図	1524	SK535	土師器	甕	29.3	51.8	35.1	外面：ヨコナデ・タタキ後タテハケ 内面：ナデ・ナナメハケ・タテハケ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-267	1
第427図	1525	SK535	土師器	甕	(15.7)	13.5+ a		外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ナデ	多	多		多		A区 S-267	50



挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第427図	1526	SK535	土師器	甕	(126)	21.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ・不定方向ハケ	多	多		多		A区 S-267	2
第427図	1527	SK535	土師器	甕	(26.8)	5.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコハケ	少	少		少		A区 S-267	
第427図	1528	SK535	土師器	壺	(122)	14.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ・工具ナデ	多	少		多		A区 S-267	
第427図	1529	SK535	土師器	甕	(134)	8.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-267	26
第427図	1530	SK535	土師器	甕形土器		5.6+ <i>a</i>		外面：ヘラケズリ後ナナメ ハケ・ミガキ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	多	多		多	底部に穿孔	A区 S-267	5
第427図	1531	SK535	土師器	高坏	(300)	7.2+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ・ ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ・ タテハケ	少	少		少		A区 S-267	
第427図	1532	SK535	土師器	複合口 緑壺	13.7	10.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ・ タタキ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ ヘラケズリ	多	多		多	外面：スス	A区 S-267	46
第427図	1533	SK535	土師器	複合口 緑壺	(11.4)	5.8+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タテハケ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	少		少		A区 S-267	
第428図	1534	SK535	土師器	壺		31.9+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ・ヘラケズリ 内面：不定方向ハケ	多	多		多	外面：黒斑	A区 S-267	13
第428図	1535	SK535	土師器	複合口 緑壺	(20.0)	29.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ヨコハケ・ヘラケズリ	多	少	多	多	内面：スス	A区 S-267	12
第428図	1536	SK535	土師器	複合口 緑壺	17.9	21.5+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・工具ナデ・ タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ・工具ナデ	多	多		多		A区 S-267	18・20・22・44・ 47
第428図	1537	SK535	土師器	鉢	(16.8)	10.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ・タタキ後 タテハケ 内面：ナナメハケ・ナデ	多	少		多		A区 S-267	16・21
第428図	1538	SK535	土師器	壺		4.3+ <i>a</i>		外面：ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ		少		少	外面：丹塗り	A区 S-267	
第428図	1539	SK535	土師器	鉢	8.6	4.4		外面：ナデ 内面：ナデ	多	少		多		A区 S-267	7
第428図	1540	SK535	土師器	鉢	8.9	4.8		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-267	9
第428図	1541	SK535	土師器	鉢	9.3	5.0		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-267	10
第430図	1542	SK536	土師器	甕		24.0+ <i>a</i>		外面：タタキ後タテハケ 内面：ヨコハケ	多	多		多		A区 S-003	3・21・24・31・32・ 34・40・48・49・52・56
第430図	1543	SK536	土師器	甕	11.6	19.5	17.4	外面：工具ナデ 内面：工具ナデ・ヨコハケ	少	少	少	多	内外面：スス、2 次被熱	A区 S-003	33・38・47・51・ 54・65・5層
第430図	1544	SK536	土師器	甕	10.5	19.8		外面：ヨコナデ・工具ナデ・ ヘラケズリ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	多	多		多	外面：黒斑、スス	A区 S-003	11・31・42・53・56・ 58・60・62・5層
第430図	1545	SK536	土師器	甕	(8.3)	10.7		外面：工具ナデ・タテハケ・ ヘラケズリ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・ 工具ナデ	多	多		多		A区 S-003	38
第430図	1546	SK536	土師器	壺	(27.0)	24.0+ <i>a</i>		外面：タタキ後タテハケ・ナデ 内面：ヨコナデ・ハケ・ナデ	少	少	少	少	内外面：スス	A区 S-003	16・35・59
第430図	1547	SK536	土師器	長頸壺		8.3+ <i>a</i>		外面：タテハケ 内面：ナナメハケ		多		多	外面：丹塗り	A区 S-003	
第430図	1548	SK536	弥生土器	鉢		4.7+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	少	多		少		A区 S-003	
第430図	1549	SK536	弥生土器	短頸壺		4.0+ <i>a</i>		外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ミガキ		多		少	外面：丹塗り	A区 S-003	

挿図番号	遺物番号	遺構名	器種		大きさ(cm)			整形・調整の特徴	胎土				備考	調査時取り上げ番号	
					口径	器高	底径		角閃石	長石	石英	その他			
第430図	1550	SK536	土師器	長頸壺	(10.7)	14.2		外面：ヨコナデ後ミガキ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ・工具ナデ	多	少				A区 S-003	5・6
第430図	1551	SK536	土師器	高坏		5.7+ a		外面：ヘラケズリ・ミガキ 内面：タテハケ・ミガキ	少	多		多		A区 S-003	
第430図	1552	SK536	土師器	高坏		5.8+ a		外面：ミガキ 内面：ナデ	多	多		多	内外面：丹塗り、脚部に穿孔4ヶ所か	A区 S-003	28
第430図	1553	SK536	土師器	高坏		11.1+ a	13.7	外面：ハケ・ミガキ 内面：ミガキ・工具ナデ・ヨコナデ	少	少	少	少		A区 S-003	8・30
第430図	1554	SK536	土師器	高坏		8.3+ a	(12.6)	外面：ケズリ後ヘラミガキ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多	内面：スス 外面：黒斑、穿孔	A区 S-003	46
第430図	1555	SK536	土師器	高坏		11.2+ a	15.0	外面：ミガキ・ナナメハケ・ヨコナデ 内面：ミガキ・工具ナデ・ヨコナデ	多	少		少	穿孔3ヶ所(2ヶ所残存)	A区 S-003	18
第430図	1556	SK536	土師器	高坏		10.5+ a	15.9	外面：タテハケ後ミガキ・ヨコナデ 内面：ハケ後ミガキ・ヨコナデ・ヨコハケ	多	少		多	穿孔4ヶ所(3ヶ所残存)	A区 S-003	29
第430図	1557	SK536	土師器	鉢	(30.2)	9.2+ a		外面：タタキ後ナデ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナナメハケ	少	多		多	外面：スス	A区 S-003	17・27
第430図	1558	SK536	土師器	鉢	(23.5)	10.4+ a		外面：ヨコナデ・タテハケ後ミガキ 内面：ヨコハケ後ミガキ・工具ナデ	少	少		少		A区 S-003	
第430図	1559	SK536	土師器	鉢	(18.4)	7.0+ a		外面：ケズリ後タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ヨコナデ	少	多		多		A区 S-003	56
第431図	1560	SK536	土師器	脚付鉢		7.2+ a	13.6	外面：ミガキ・ヨコハケ・ナデ 内面：ミガキ	多	少		多		A区 S-003	14
第431図	1561	SK536	土師器	脚付鉢		5.5+ a	(13.9)	外面：ナデ・ミガキ・工具ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多	底面充填	A区 S-003	36
第431図	1562	SK536	土師器	脚付鉢		4.5+ a		外面：ヘラケズリ・タテハケ 内面：ヨコハケ・ナデ	多	多		多	脚部内面：スス	A区 S-003	39
第431図	1563	SK536	土師器	鉢	(12.6)	8.55		外面：ヨコナデ・ヨコハケ・タタキ 内面：ヨコナデ・ヨコハケ	多	多		多		A区 S-003	1
第431図	1564	SK536	土師器	鉢	(14.7)	10.6		外面：ヨコナデ・ナナメハケ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	多	多		多		A区 S-003	13・20
第431図	1565	SK536	土師器	漏斗形土器か		5.7+ a	1.4	外面：タタキ後ナデ 内面：工具ナデ	多	多		多	底部に穿孔	A区 S-003	50
第431図	1566	SK536	土師器	ミニチュア土器鉢		4.9+ a		外面：ナデ 内面：ナデ	多	多		多		A区 S-003	17
第432図	1580		弥生土器	鉢	(10.4)	4.7	7.4	外面：ナデ・ヨコナデ 内面：ナデ	多	多		少	楕円形	A区	H-9 検出時
第432図	1581		弥生土器	壺		6.7+ a		外面：ナデ・ミガキ 内面：ヨコナデ・ミガキ	少	多	少	少	線刻	A区	D-7

第16次調査区 石器観察表

挿入番号	遺物番号	遺構番号	種別	石材	法量				備考	調査時取り上げ番号	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
第25図	61		石核	泥岩	5.5	7.3	9.1	420.0	V・VI層間	B2区	16
第25図	62		剥片	角閃石安山岩	10.0	7.3	5.3	490.4	V・VI層間	B2区	36
第25図	63		敲石	安山岩	7.7	6.9	6.7	530.0	V・VI層間	B2区	69
第25図	64		未成品	流紋岩	15.6	10.6	3.6	517.5	V・VI層間	B2区	41
第25図	65		原石	泥岩	15.6	6.9	6.0	1270.0	V・VI層間	B2区	10
第25図	66		スクレイパー	西九州産黒曜石	4.0	6.1	1.4	25.7	V・VI層間	B2区	58
第25図	67		剥片	西九州産黒曜石	3.4	2.4	0.9	4.8	V・VI層間	B2区	29
第25図	68		剥片	小国産黒曜石	3.6	3.7	1.8	13.9	V・VI層間	B2区	15
第25図	69		剥片	姫島産角閃石安山岩	1.6	2.0	0.5	1.5	V・VI層間	B2区	30
第25図	70		剥片	象ヶ鼻産黒曜石	3.1	3.8	1.0	10.5	V・VI層間	B2区	6
第26図	71		剥片	泥岩	11.6	12.6	5.3	580.0	V・VI層間	B2区	64
第26図	72		剥片	泥岩	7.5	10.3	3.7	237.7	V・VI層間	B2区	37
第26図	73		剥片	泥岩	7.3	10.6	2.2	152.6	V・VI層間	B2区	47
第26図	74		剥片	泥岩	9.5	9.3	2.0	156.4	V・VI層間	B2区	60
第26図	75		剥片	泥岩	6.9	7.9	2.5	111.1	V・VI層間	B2区	18
第26図	76		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	4.1	5.3	1.0	17.3	V・VI層間	B2区	49
第26図	77		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	5.1	5.4	1.2	37.3	V・VI層間	B2区	22
第26図	78		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	6.7	5.9	2.7	84.1	V・VI層間	B2区	63
第26図	79		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	7.3	5.7	3.6	134.9	V・VI層間	B2区	9
第26図	80		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	5.3	6.9	1.2	45.9	V・VI層間	B2区	31
第26図	81		剥片	凝灰岩質輝石安山岩	7.3	7.1	1.6	69.0	V・VI層間	B2区	51
第32図	90	SH83	磨製石斧	蛇紋岩	6.9+ a	5.6+ a	1.0	58.3		A区 S-083	
第34図	91	SH121	敲石	角閃石安山岩	13.2	9.9	6.1	1000.0		A区 S-101	21
第37図	113	SH122	紡錘車	砂岩	3.3+ a	5.5	0.8	16.9		A区 S-179	
第37図	115	SH122	磨石	安山岩	4.8+ a	4.7	2.1	87.0		A区 S-179	
第37図	116	SH122	磨製石斧	蛇紋岩	10.5+ a	4.2	1.4	104.0	破損後、天地逆で再利用	A区 S-179	1
第37図	117	SH122	敲石	安山岩	12.4	6.9	4.5	550.0		A区 S-179	
第37図	118	SH122	台石	安山岩	5.6	10.3	5.3	1200.0		A区 S-179土坑5	
第39図	126	SH123	砥石	泥岩	5.6+ a	3.4+ a	2.7	56.8		A区 S-128	
第39図	127	SH123	台石	角閃石安山岩	38.3	22.2	12.0	17500.0		A区 S-128	2
第41図	145	SH124	台石	安山岩	24.5	41.3	16.7	27000.0		A区 S-200	
第45図	171	SH126	石庖丁	流紋岩	4.8	9.6	0.5	40.2		A区 S-231	13
第45図	172	SH126	打製石斧	角閃石安山岩	8.7	7.2	1.1	76.5		A区 S-231土坑1	
第45図	173	SH126	磨製石斧	流紋岩	7.3	5.8	3.8	238.9		A区 S-231	
第46図	174	SH126	磨製石斧	流紋岩	3.7	3.0	3.3	54.8		A区 S-231	
第46図	175	SH126	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	7.1	5.3	1.0	50.7		A区 S-231	
第46図	176	SH126	磨石	角閃石安山岩	9.8	5.2	5.5	328.0		A区 S-231土坑1	
第46図	177	SH126	砥石	砂岩	7.8+ a	7.2+ a	5.2	500.0		A区 S-231	11
第46図	178	SH126	砥石	砂岩	7.9+ a	5.1	4.2	289.0		A区 S-231	11
第46図	179	SH126	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	5.4	7.4	1.9	73.1		A区 S-231	
第47図	180	SH126	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	8.0	6.4	1.5	123.7		A区 S-231	
第47図	181	SH126	石鎌	牟田系黒曜石	3.3	1.8	0.3	1.2		A区 S-231	
第47図	182	SH126	スクレイパー	姫島産黒曜石	4.3	4.9	0.9	16.4		A区 S-231	
第49図	192	SH127	砥石	砂岩	18.5	21.7	9.3	4350.0		A区 S-230	5
第49図	193	SH127	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	5.9	3.1	2.9	45.2		A区 S-230	
第52図	205	SH128	台石	角閃石安山岩	29.9	23.8	5.6 ~ 7.7	8400.0		A区 S-294	3
第53図	222	SH129	敲石	安山岩	16.0+ a	11.6	4.3 ~ 6.4	1680.0		A区 S-242	9
第54図	223	SH129	石庖丁	片岩	6.0	7.5+ a	0.6	34.8		A区 S-242	11
第54図	224	SH129	砥石	頁岩	8.1+ a	2.35	0.7	24.4		A区 S-242	
第54図	225	SH129	打製石斧	頁岩	15.8	6.7	1.9	290.6		A区 S-242	
第54図	226	SH129	敲石・磨石	角閃石安山岩	9.2	9.1	5.8	870.0		A区 S-242	3
第56図	238	SH130	磨製石斧	片麻岩	14.5+ a	7.6	4.4	700.0		A区 S-080	
第57図	239	SH130	台石	角閃石安山岩	19.3+ a	19.5	10.3	6190.0		A区 S-080土坑	
第57図	240	SH130	台石	角閃石安山岩	38.4	25.7	8.0	12000.0		A区 S-080	1
第63図	244	SH133	磨石・敲石	安山岩	12.3+ a	9.3	4.2	690.0		A区 S-287	
第65図	251	SH134	石庖丁	砂岩	3.7	7.8+ a	0.8	30.6		A区 S-312	
第65図	252	SH134	砥石	角閃石安山岩	17.5+ a	9.0	5.3	1310.0		A区 S-312土坑5	
第65図	253	SH134	石剣形	立岩産輝緑凝灰岩	6.4+ a	3.2	4.5	13.2	石包丁転用か	A区 S-312	
第65図	254	SH134	敲石・砥石	安山岩	5.9	4.3	3.4	142.5		A区 S-312土坑5	

挿入 番号	遺物 番号	遺構番号	種別	石材	法量				備考	調査時取り上げ番号	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
第65図	255	SH134	打製石斧	凝灰岩質輝石安山岩	10.9+ a	10.0	1.0	167.3		A区 S-312土坑5	
第71図	304	SH136	石庖丁	輝緑凝灰岩	5.7	4.4	0.7	21.1		A区 S-262	2・36
第71図	305	SH136	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.8	4.4	0.7	21.1		A区 S-262	
第72図	306	SH136	磨石	角閃石安山岩	11.3	9.2	5.3	810.0		A区 S-262	81
第72図	307	SH136	台石	角閃石安山岩	30.9	27.3	10.8	1550.0		A区 S-262	63
第72図	308	SH136	敲石	メノウ	8.5	7.7	5.9	540.0		A区 S-262	
第72図	309	SH136	台石	安山岩	29.8	14.3	12.5	8640.0		A区 S-262	39
第73図	310	SH136	砥石	砂岩	10.2	6.5	5.5	440.0		A区 S-262貼床内	
第73図	312	SH136	ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	5.3	1.6	0.5	4.0		A区 S-262	
第75図	317	SH137	台石	輝石安山岩	28.0	35.4	14.0	19500.0		A区 S-077	1
第75図	318	SH137	磨製石斧	頁岩	7.0+ a	6.4+ a	2.6	122.3		A区 S-077	
第77図	328	SH138	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.2	3.1+ a	0.6+ a	9.9		A区 S-216	
第81図	360	SH139	石庖丁	立岩産輝緑凝灰岩	5.4	9.0	0.8	40.6		A区 S-220	3
第81図	361	SH139	扁平片刃石斧	蛇紋岩	4.5	3.3	1.1	37.1		A区 S-220	2
第81図	362	SH139	敲石・磨石	角閃石安山岩	9.2	9.4	3.3～5.9	740.0		A区 S-220	10
第81図	363	SH139	敲石	角閃石安山岩	6.9	5.3	1.3～3.2	172.6		A区 S-220	25
第81図	364	SH139	磨製石斧	蛇紋岩	11.1+ a	5.7	3.5	420.0		A区 S-220	1層
第81図	365	SH139	砥石	カオリン	6.7+ a	1.1	1.0	9.5		A区 S-220	1層
第82図	366	SH139	砥石	砂岩	39.7	15.3	13.0	7000.0		A区 S-220	13
第82図	367	SH139	砥石	カオリン	4.6	3.2	2.8	29.5		A区 S-220	1層
第82図	368	SH139	磨製石鏃	結晶片岩	4.8	2.1	0.2	3.4		A区 S-220	5
第82図	369	SH139	磨製石鏃	結晶片岩	3.2	1.8	0.2	1.6		A区 S-220	4
第82図	370	SH139	磨製石鏃	結晶片岩	2.4+ a	1.6	0.2	1.8		A区 S-220	42
第82図	371	SH139	磨製石鏃	スレート	2.6	1.7	0.2	1.4		A区 S-220	41
第83図	372	SH139	打製石斧	輝石安山岩	12.7	6.2	1.5	114.7		A区 S-220	1
第83図	373	SH139	打製石斧	緑泥片岩	7.4+ a	6.0	1.5	80.0		A区 S-220	12
第83図	374	SH139	石核か	凝灰岩質輝石安山岩	11.2	14.2	6.4	1150.0		A区 S-220	21
第85図	375	SH140	敲石	安山岩	11.9	5.4	4.2	377.9		A区 S-304	5
第86図	386	SH140	台石	安山岩	38.1	34.7	12.9	24000.0		A区 S-304	2
第86図	387	SH140	台石	安山岩	18.7	17.6	5.0	3140.0		A区 S-304	14
第86図	388	SH140	台石	安山岩	17.2	11.1	7.5	3000.0		A区 S-304	1
第93図	413	SH143	磨製石鏃	結晶片岩	3.7	1.5	0.2	2.8		B区 S-065	1
第93図	414	SH143	不明品	軽石	9.3	6.6	3.9	78.1		B区 S-065	2
第94図	415	SH143	砥石	砂岩	12.3	12.6	3.9	760.0		B区 S-065	7
第94図	416	SH143	磨石・敲石	安山岩	9.6	9.2	5.9	760.0		B区 S-065	14
第99図	423	SH145	台石・敲石	安山岩	8.6	10.9	4.5	790.0		B区 S-048	
第99図	424	SH145	石庖丁	結晶片岩	5.2	4.3+ a	0.6	27.6		B区 S-048	
第99図	425	SH145	石庖丁	立岩産輝緑凝灰岩	6.4	11.3+ a	0.7	61.6		B区 S-048	4
第100図	426	SH146	磨製石鏃	砂岩	4.5+ a	2.7	0.5	7.9		B区 S-015	
第100図	427	SH146	打製石斧	安山岩	9.9	7.9	1.0	87.2		B区 S-015土坑1	
第100図	428	SH146	砥石	角閃石安山石	37.4	17.2	10.4	9500.0		B区 S-015土坑1	4・5
第100図	429	SH146	砥石	砂岩	8.2+ a	5.8	3.9	273.3		B区 S-015土坑1	
第104図	437	SH148	砥石	泥岩	13.9+ a	8.4	3.4	450.0		B区 S-008	1
第108図	445	SH150	打製石斧	凝灰岩質輝石安山岩	8.3	6.0	2.2	80.5		B区 S-017	
第110図	451	SH151	磨石・敲石	安山岩	9.6	8.7	6.2	780.0		B区 S-006	1層
第110図	452	SH151	火打石か	石英	7.1	8.3	2.2	132.6		B区 S-006	
第110図	453	SH151	砥石	砂岩	4.0	1.8	1.2	10.4		B区 S-006	
第112図	466	SH152	敲石・磨石	安山岩	10.5	8.4+ a	6.1	750.0		B区 S-200	6
第112図	467	SH152	敲石	安山岩	11.0	6.9	5.3	560.0		B区 S-200	
第112図	468	SH152	磨製石鏃	緑泥片岩	6.3+ a	1.7	0.2	4.9		B区 S-200	26
第112図	469	SH152	今峠型ナイフ 形石器	腰岳産黒曜石	3.6	2.4	1.0	7.1		B区 S-200	34
第114図	478	SH153	砥石	泥岩	2.5+ a	3.0	1.2	19.4		B区 S-050Pit3	
第114図	479	SH153	石庖丁	立岩産輝緑凝灰岩	3.9+ a	9.0+ a	0.6	25.0		B区 S-050	
第114図	480	SH153	磨製石斧	安山岩	8.6	4.0	1.9	118.7		B区 S-050	
第115図	485	SH153内土坑	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	13.7	12.3	6.2	1310.0		B区 S-099	13
第115図	486	SH153内土坑	不明品	軽石	5.2	2.9	1.7	5.6		B区 S-099	3層
第118図	516	SH154	砥石	砂岩	10.3+ a	6.1	3.6	269.8		B区 S-207	49
第118図	517	SH154	台石	安山岩	19.0	14.2	6.4	3130.0		B区 S-207	23
第118図	518	SH154	台石	安山岩	21.5	21.6	8.5	6000.0		B区 S-207	40

挿入番号	遺物番号	遺構番号	種別	石材	法量				備考	調査時取り上げ番号	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
第118図	519	SH154	敲石	安山岩	10.3	8.3	6.7	920.0		B区 S-207	8
第118図	520	SH154	磨製石斧	砂岩	4.8+ a	4.3	1.6+ a	56.1		B区 S-207	
第118図	521	SH154	砥石	結晶片岩	7.6+ a	3.1	2.3	95.8		B区 S-207	59
第120図	525	SH155	台石	安山岩	42.4	29.6	13.0	27000.0		B区 S-223	17
第124図	534	SH157	砥石か	泥岩	2.8+ a	5.0	0.3	6.6	円形	B区 S-211	
第128図	558	SH159	砥石	砂岩	13.2	8.0	6.7	1440.0		B区 S-201土坑1	
第130図	571	SH160	台石	安山岩	36.5	32.8	9.4	19400.0		B区 S-212	12
第133図	583	SH161	磨製石鏃	緑泥片岩	3.6+ a	1.8	0.2	1.8		B区 S-213	
第135図	589	SH162	敲石	安山岩	8.8	8.1	5.6	560.0		B区 S-131	
第142図	600	SK413	石庖丁	粘板岩	3.6+ a	10.8+ a	0.8	37.5		A区 S-102	2
第143図	608	SK414	台石	角閃石安山岩	18.7	19.7	7.2	3840.0		A区 S-104	
第147図	630	SK416	台石	角閃石安山岩	16.8	18.8	3.3 ~ 4.8	2690.0		A区 S-120	32
第151図	639	SK418	台石	安山岩	17.9	23.7	7.0	4000.0		A区 S-305	
第151図	640	SK418	敲石	安山岩	8.1	7.2	7.2	570.0		A区 S-305	
第151図	641	SK418	磨製石鏃	結晶片岩	2.7+ a	1.7	0.2	1.5		A区 S-305	
第164図	654	SK426	石庖丁	泥岩	2.5+ a	4.0+ a	0.5	4.6		A区 S-067	
第166図	663	SK427	敲石・磨石	凝灰岩質輝石安山岩	8.6	7.3	2.4	116.9		A区 S-062	
第169図	667	SK429	石庖丁	頁岩	4.6	4.1+ a	5.5	9.2		A区 S-098	
第169図	668	SK429	石庖丁	頁岩	6.0	3.9+ a	0.9	28.2		A区 S-098	
第176図	683	SK433	台石	輝石安山岩	32.5	17.9	8.5	8050.0		A区 S-292	3
第202図	740	SK449	石庖丁	頁岩	13.6	3.8	0.8	46.6		A区 S-041	5
第204図	745	SK450	磨石	安山岩	10.6	8.7	4.7	650.0		A区 S-023	2
第214図	775	SK455	砥石	結晶片岩	6.7	1.3	1.5	25.2		A区 S-249	
第217図	787	SK456	台石	輝石安山岩	27.9	26.7	12.1	12000.0		A区 S-211	
第217図	788	SK456	砥石	凝灰岩質輝石安山岩	15.8	10.3	6.2	1120.0		A区 S-211	
第220図	792	SK459	台石か	凝灰岩質輝石安山岩	9.0+ a	11.8+ a	8.7	1410.0		A区 S-219	
第222図	801	SK460	磨石	凝灰岩質輝石安山岩	12.7+ a	9.3+ a	3.8	560.0	被熱	A区 S-033	6
第223図	803	SK460	台石	安山岩	29.2	37.6	14.6	23500.0		A区 S-033	1
第227図	808	SK462	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.7	7.1	0.6	22.2		A区 S-236	検出
第227図	809	SK462	砥石	泥岩	10.5+ a	4.2	1.4	104.0		A区 S-179	1
第238図	825	SK468	磨製石斧	砂岩	3.8	4.3	3.6	91.0		B区 S-062	
第255図	850	SK478	石庖丁	立岩産輝緑凝灰岩	4.1	13.8	0.8	64.2		B区 S-206	
第261図	856	SK481	紡錘車	泥岩	3.8+ a	2.2+ a	0.6	6.0		B区 S-231	8
第261図	857	SK481	磨製石斧	蛇紋岩	9.0	5.2	1.8	181.0		B区 S-231	
第332図	922	S7	打製石斧	輝石安山岩	10.7+ a	7.6	1.5	143.1		A区 S-246	
第340図	962	SX12	台石	角閃石安山岩	22.8+ a	19.1	9.5	5060.0		A区 S-148	2層
第340図	963	SX12	台石	角閃石安山岩	20.4 ~ 24.1	20.6 ~ 23.2	7.8 ~ 8.7	9190.0		A区 S-148	
第340図	964	SX12	台石	角閃石安山岩	19.0	17.7	6.4	3360.0		A区 S-148	1層
第340図	965	SX12	敲石	角閃石安山岩	4.4+ a	8.4+ a	7.0+ a	202.3		A区 S-148	29
第340図	966	SX12	敲石・磨石	角閃石安山岩	14.1	12.2	5.2	1220.0		A区 S-148	6
第341図	967	SX12	敲石	角閃石安山岩	11.1	10.5	8.5	1430.0		A区 S-148	6層
第341図	968	SX12	磨石	角閃石安山岩	10.3	7.1+ a	5.5	560.0		A区 S-148	4層
第341図	969	SX12	敲石	角閃石安山岩	9.1+ a	7.8+ a	6.2+ a	366.6		A区 S-148	
第341図	970	SX12	不明	軽石	10.8+ a	9.9+ a	7.3	280.8		A区 S-148	
第341図	971	SX12	砥石	泥岩	8.5+ a	6.0	3.2+ a	158.5		A区 S-148	
第342図	972	SX12	砥石	頁岩	6.7	8.4	3.1	168.8		A区 S-148	
第342図	973	SX12	砥石	泥岩	7.7	2.6+ a	2.6	71.2		A区 S-148	
第342図	974	SX12	砥石	砂岩	12.4+ a	8.1+ a	4.8+ a	510.0		A区 S-148	
第342図	975	SX12	砥石	泥岩	4.5+ a	3.4	1.5	24.8		A区 S-148	2層
第342図	976	SX12	不明	軽石	6.6+ a	4.8+ a	5.4+ a	35.5		A区 S-148	
第343図	977	SX12	石斧	頁岩	20.3	12.6	2.0	470.0		A区 S-148	12
第347図	989	SH163	石鏃	姫島産黒曜石	2.0+ a	1.6+ a	0.4	0.8		A区 S-123・125	
第351図	1004	SH165	敲石	角閃石安山岩	15.5	7.2	5.8	900.0		A区 S-136	
第351図	1005	SH165	敲石	角閃石安山岩	13.5	10.6	3.8	810.0		A区 S-136	
第354図	1032	SH166	台石	角閃石安山岩	25.5	33.1	9.7	12400.0		A区 S-126	10
第354図	1033	SH166	敲石・磨石	角閃石安山岩	9.4	8.2	6.1	630.0	スス、被熱	A区 S-126	
第354図	1034	SH166	敲石	角閃石安山岩	7.1+ a	7.7	7.1	530.0		A区 S-126	
第354図	1035	SH166	敲石・磨石	角閃石安山岩	6.8+ a	9.3	6.8	470.0		A区 S-126・127	
第355図	1037	SH166	砥石	泥岩	5.0	3.2	0.8	13.4		A区 S-126・127	

挿入 番号	遺物 番号	遺構番号	種別	石材	法量				備考	調査時取り上げ番号	
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
第355図	1039	SH166	台石	角閃石安山岩	17.7	29.0	8.2	7970.0		A区 S-126	9
第355図	1040	SH166	砥石か	泥岩	19.9	4.0+ a	2.7	300.3		A区 S-126	26
第357図	1055	SH167	台石	安山岩	14.5	21.1	5.1	2190.0		A区 S-307	6・7
第357図	1056	SH167	砥石	泥岩	5.9	4.5	2.3	56.7		A区 S-307	
第357図	1057	SH167	台石	安山岩	32.0	32.5	6.1	11000.0		A区 S-307	8
第364図	1136	SH168	砥石	カオリン	7.8	9.2	3.0 ~ 5.0	360.0		A区 S-130	177
第364図	1137	SH168	砥石	泥岩	10.4	3.9	1.6	73.0		A区 S-130・131	
第364図	1138	SH168	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.8+ a	3.4+ a	0.6+ a	6.7		A区 S-130・134	
第365図	1139	SH168	敲石	角閃石安山岩	19.4	8.7	8.1	1950.0		A区 S-130	1
第365図	1140	SH168	台石	黒雲母輝石安山岩	27.1	30.5	12.6	16000.0		A区 S-130	179
第365図	1141	SH168	敲石・磨石	角閃石安山岩	18.5	8.0	6.3	13800.0		A区 S-130・131	
第368図	1162	SH169	台石	安山岩	58.3	26.6	11.5	31000.0		A区 S-235	16
第368図	1163	SH169	台石	安山岩	40.0	33.7	10.7	20000.0		A区 S-235	15
第371図	1186	SH170	磨石	角閃石安山岩	12.0	10.1	7.2	1110.0		A区 S-298	
第371図	1187	SH170	不明	軽石	7.1	7.9	4.4	73.2		A区 S-298	
第373図	1216	SH171	敲石	流紋岩	6.1	2.6	2.3	35.4		A区 S-297	
第373図	1217	SH171	砥石	カオリン	4.3	5.5	4.0	129.2		A区 S-297	
第373図	1218	SH171	砥石	カオリン	7.6	3.6	3.3	104.6		A区 S-297	
第375図	1237	SH172	台石	安山岩	14.2	12.6	4.8	1540.0		B区 S-236	
第375図	1238	SH172	台石	安山岩	25.1	24.4	10.1	11000.0		B区 S-236	21
第375図	1239	SH172	敲石	安山岩	15.6	7.0	5.5	860.0		B区 S-236	
第380図	1258	SH174	台石	安山岩	13.2	11.8	5.5	1090.0		A区 S-302	1
第380図	1259	SH174	打製石斧	凝灰岩貫輝石安山岩	9.0+ a	8.3	2.0	211.2		A区 S-302・303	
第381図	1260	SH174	敲石	安山岩	11.8	7.4	4.4	640.0		A区 S-302	
第381図	1261	SH174	台石	安山岩	30.0	32.0	8.0	13000.0		A区 S-302	6
第383図	1280	SH175	台石	安山岩	39.5	37.0	11.8	27000.0		A区 S-232	18
第388図	1312	SH177	石庖丁	頁岩	5.2+ a	5.7+ a	0.9	34.0		A区 S-086	
第388図	1313	SH177	台石	角閃石安山岩	35.5	32.7	10.5	20500.0	被熱	A区 S-086	21
第388図	1314	SH177	台石	安山岩	28.6	32.1	8.9	13500.0	スス、被熱	A区 S-086	20
第392図	1325	SH179	台石	角閃石安山岩	24.6	33.7	10.3	14500.0		A区 S-284	1
第395図	1345	SH180	磨製石鏃	スレート	2.7+ a	1.7	0.2	1.4		A区 S-285	47
第395図	1346	SH180	打製石斧	角閃石安山岩	16.6	10.0	1.4	285.0		A区 S-285	46
第396図	1347	SH180	台石	輝石安山岩	27.3	28.2	14.8	18500.0		A区 S-285	17
第396図	1348	SH180	台石	角閃石安山岩	24.7	26.2	9.6	10000.0		A区 S-285	44
第396図	1349	SH180	台石	角閃石安山岩	34.0	33.4	9.2	15500.0	スス、被熱	A区 S-285	3
第396図	1350	SH180	敲石	角閃石安山岩	10.0	8.2	6.2	670.0		A区 S-285	43
第397図	1351	SH180	敲石	角閃石安山岩	14.6	15.7	8.2	1970.0		A区 S-285	41
第399図	1354	SH181	台石	輝石安山岩	11.3	15.6	6.5	1620.0		A区 S-288	2
第399図	1355	SH181	台石	輝石安山岩	20.9	23.5	9.6	8460.0		A区 S-288	3
第399図	1356	SH181	磨石	角閃石安山岩	12.1	8.4	6.2	830.0		A区 S-288	
第399図	1357	SH181	台石	輝石安山岩	23.5	33.9	9.4	11500.0		A区 S-288	4
第401図	1368	SH182	台石	安山岩	28.8	25.2	8.0	11500.0		A区 S-299	
第401図	1369	SH182	砥石	泥岩	11.1	3.6 ~ 5.8	1.0	106.8		A区 S-299	
第401図	1370	SH182	磨石	安山岩	9.8	9.2	5.1	620.0		A区 S-299	
第405図	1392	SH184	砥石	頁岩	9.2	4.6	1.2	76.2		A区 S-002	
第405図	1393	SH184	台石	角閃石安山岩	32.2	30.0	10.8	19000.0	被熱	A区 S-002	2
第407図	1405	SH185	石庖丁	スレート	5.8	8.3	0.8	59.4		A区 S-215	
第411図	1450	SH186	石庖丁	輝緑凝灰岩	3.7+ a	3.8+ a	0.6	11.5		A区 S-247	
第420図	1489	SK532	磨石	安山岩	19.0	7.6	6.0	1050.0		A区 S-138	
第431図	1567	SK536	台石	角閃石安山岩	29.8	24.4	12.8	13500.0		A区 S-003	43
第431図	1568	SK536	石庖丁	頁岩	3.7+ a	3.1+ a	0.6	10.5		A区 S-003	5層
第431図	1569	SK536	敲石	角閃石安山岩	6.5+ a	8.9	6.3	510.0		A区 S-003	
第431図	1570	SK536	台石	流紋岩	12.7	11.0	7.3	1480.0		A区 S-003	16
第432図	1571		ナイフ形石器	流紋岩	4.8	1.3	0.5	2.6		A区	G-11
第432図	1572		ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	5.9	1.7	0.9	6.5		B区	P-9
第432図	1573		ナイフ形石器	流紋岩	6.4	2.8	1.2	17.2		B区	表採
第432図	1574		ナイフ形石器	腰岳産黒曜石	3.2	1.5	0.5	2.9		B区	P-5検出時
第432図	1575		スクレイパー	腰岳産黒曜石	2.7	2.2	0.6	3.2		B区	J-8攪乱
第432図	1577		石剣	砂岩	6.5+ a	3.8	0.7	30.5		B区	遺構検出
第432図	1578		石剣か	砂岩	5.1	2.7	7.0	15.2		A区	G-12検出時
第432図	1579		石戈か	砂岩	5.5+ a	4.4+ a	1.3	49.5		B区	S-243

第16次調査区 土製品観察表

挿図番号	遺物番号	遺構番号	種類	法量				備考	調査時取り上げ番号	
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
第37図	109	SH122	紡錘車	3.8	3.2	0.6	7.2	土器転用	A区 S-179	
第37図	110	SH122	紡錘車	4.7	2.5	0.6	5.8	土器転用	A区 S-179	
第37図	111	SH122	紡錘車	4.3	2.3+ a	0.5	5.1	土器転用	A区 S-179	
第37図	112	SH122	紡錘車	2.9+ a	5.8	0.4	9.4	土器転用	A区 S-179	
第37図	114	SH122	紡錘車	2.5+ a	3.6+ a	0.5	5.4	土器転用	A区 S-179	
第39図	125	SH123	メンコ	2.9	2.8	0.5	5.1	土器片加工	A区 S-128	
第53図	220	SH129	メンコ	5.2	5.5	0.7	23.7	土器片加工	A区 S-242	2層
第53図	221	SH129	粘土塊	3.9	4.1	1.5	18.3	用途不明	A区 S-242	
第71図	299	SH136	投弾	4.1	2.2	2.1	14.6		A区 S-262	
第71図	300	SH136	投弾	4.3+ a	2.7	2.6+ a	25.6		A区 S-262	
第71図	301	SH136	投弾	3.4+ a	2.3	2.2+ a	14.5		A区 S-262	
第71図	302	SH136	メンコ	2.7	2.6	0.5	3.4	土器片加工	A区 S-262	
第108図	443	SH150	メンコ	5.3	5.5	0.6	24.3	土器片加工	B区 S-017	
第108図	444	SH150	紡錘車	4.1	4.5	0.6	15.7	土器転用	B区 S-017Pit2	
第112図	459	SH152	不明	3.6+ a	1.8	1.6	12.3	柄か	B区 S-200	
第112図	464	SH152	紡錘車	3.1	2.9	0.6	6.6	土器転用	B区 S-200	
第112図	465	SH152	メンコ	4.7	4.7	0.5	13.2	土器片加工	B区 S-200	
第114図	476	SH153	メンコ	4.6	3.2	0.4 ~ 0.3	7.5	土器片加工	B区 S-050	
第114図	477	SH153	メンコ	3.6	3.7	0.9 ~ 0.8	12.4	土器片加工	B区 S-050	
第115図	484	SH153土坑	勾玉	3.8	1.2	1.1	7.0		B区 S-099	15
第118図	514	SH154	投弾	4.1+ a	2.3	2.4	17.8		B区 S-207	
第126図	549	SH158	メンコ	5.0	5.3	0.7	19.6	土器片加工	B区 S-060	1層
第126図	550	SH158	紡錘車	4.6	4.6	1.5	26.0		B区 S-060	
第126図	551	SH158	紡錘車	4.2	4.2	1.8	21.8		B区 S-060	
第126図	552	SH158	紡錘車	6.0+ a	6.0	1.0	29.3		B区 S-060	
第151図	636	SK418	不明	3.2+ a	1.3	1.0	4.3	柄か	A区 S-305	
第164図	653	SK426	メンコ	3.6	3.5	0.5	7.5	土器片加工	A区 S-067	
第204図	744	SK450	投弾	3.9	2.4	2.3	16.4		A区 S-023	
第236図	823	SK467	紡錘車	3.9+ a	2.8+ a	1.0	9.0		B区 S-219	
第273図	868	SK489	メンコ	5.6	5.5	0.7	33.5	土器片加工	B区 S-235	2層
第332図	921	S7	メンコ	4.6	4.1	0.9	19.0	土器片加工	A区 S-246	
第339図	960	SX12	メンコ	5.9	5.4	0.5	21.9	土器片加工	A区 S-148	
第354図	1028	SH166	メンコ	2.2	2.2	5.5	3.1	土器片加工	A区 S-126	
第355図	1036	SH166	勾玉	3.0	1.9	1.0	4.2		A区 S-126	1
第357図	1053	SH167	不明	6.4	4.4	1.7	35.3	両面に薬状圧痕	A区 S-307	
第370図	1183	SH170	皮袋形土製品	7.2	2.3 ~ 4.6	0.3	19.2		A区 S-298	
第373図	1214	SH171	不明	5.0	3.4+ a	2.3	35.7	柄か	A区 S-297	
第373図	1215	SH171	粘土塊	5.8	6.7	3.8	113.8		A区 S-297	
第401図	1364	SH182	メンコ	2.7	2.5	0.7	5.8	土器片加工	A区 S-299	
第401図	1365	SH182	不明	4.1	2.8	0.6	8.0	両面に薬状圧痕	A区 S-299	
第413図	1453	SK530	メンコ	2.7	2.6	0.6	5.5	土器片加工	A区 S-007	

第16次調査区 金属製品観察表

挿図番号	遺物番号	遺構番号	種別	材質	法量				備考	調査時取り上げ番号	
					長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)			
第45図	170	SH126	不明	鉄	2.6+ a	1.5	0.1	2.0		A区 S-231	
第73図	311	SH136	鉄鏃	鉄	6.6+ a	0.4	0.3	5.4	茎部	A区 S-262	
第86図	384	SH140	不明	銅	1.6+ a	3.4+ a	0.1 ~ 0.2	6.7		A区 S-304	
第86図	385	SH140	鉄鏃	鉄	5.2+ a	2.2	0.5	9.1		A区 S-304	
第118図	515	SH154	刀子か	鉄	3.3+ a	1.1	2.5	4.6		B区 S-207	
第347図	990	SH163	鈍	鉄	7.0+ a	1.4	0.2	8.8		A区 S-123	
第351図	1006	SH165	鎌か	鉄	4.8+ a	3.5	0.15	11.9		A区 S-136	
第351図	1007	SH165	鋤鏃先	鉄	9.2	4.2	1.0	43.5		A区 S-136	
第351図	1008	SH165	鋤鏃先	鉄	6.8	9.4	0.6	57.9		A区 S-136	鉄器1
第355図	1038	SH166	刀子か	鉄	2.6+ a	(1.1)	(3.5)	4.2		A区 S-126	
第357図	1054	SH167	鉄鏃	鉄	2.9+ a	0.8	0.3	2.8		A区 S-307	No1
第370図	1184	SH170	鏃先か	鉄	6.3	5.5	0.3	59.7		A区 S-298	No2
第370図	1185	SH170	鈍	鉄	9.8	1.2	0.2	15.4		A区 S-298	No1
第376図	1240	SH172	鏃先	鉄	7.4	12.0	0.2	120.3		A区 S-236	No1
第383図	1279	SH175	鉄鏃	鉄	5.3+ a	1.9	0.2 ~ 0.4	10.3		A区 S-232	No17
第403図	1380	SH183	鉄斧	鉄	7.1	3.0	2.0	59.1		A区 S-300	No2
第407図	1404	SH185	鈍	鉄	3.7+ a	1.1	0.15	3.3		A区 S-215	
第411図	1451	SH186	鈍	鉄	10.1	1.4	0.4	11.2		A区 S-247	No66
第432図	1576		鋤先	鉄	6.3+ a	2.7+ a	0.2 ~ 1	26.2		B区	P-18検出



## 写真図版





写真1 4トレンチ1bブロック (東から西へ)



写真2 4トレンチ3ブロックと2ブロック (東から西へ)



写真3 4トレンチ2ブロック (南から北へ)



写真4 (1図) 削器 (口D91区17) 1aプロ



写真5 (2図) 削器 (口D91区37) 1aプロ



写真6 (3図) 石核 (口D91区3) 1aプロ



写真7 (4図) 石核 (口D92区10) 1aプロ



写真8 (5図) 石核 (口E1区35) 1bプロ



写真9 (6図) 石核 (口E1区40) 1bプロ



写真10 (7図) 石核 (口E1区24) 1bプロ



写真11 (8図) 石核 (口D91区11) 1bプロ



写真12 (9図) 片刃礫器 (口D91区10) 1bプロ



写真13 (10図) 石核 (口D91区13) 1bプロ



写真14 (11図) 石核 (口D91区12) 1bプロ



写真15 (13図+14図) 接合資 (ロE1区5+ロE1区251 区12) 1bプロ



写真16 (15図) 石核 (イE10区1) ブロック外



写真17 (16図) 尖頭器未成品 (イE19区16) 2プロ



写真18 (19図) 石核 (イE19区11) 2プロ



写真19 (20図) 石核 (イE29区16) 2プロ



写真20 (21図) 尖頭器未成品 (イE29区3) 3プロ



写真21 (22図) ナイフ形石器 (イE46区2) 5トレンチ



写真22 (23図) 削器 (イE46区1) 5トレ



写真23 7トレンチの石器出土状況 右は8トレンチ、上は1号墳の周溝



写真24 7トレンチの石器出土状況の近景



写真25 四日市7トレ近景



写真26 四日市7トレ近景



写真27 四日市7トレ近景



写真28 四日市7トレ近景





写真29 (24図) 搔器 (イ E58区229) 7ト



写真30 (25図) 削器 (イ E58区227) 7ト



写真31 (26図) 石斧未成品 (イ E58区476) 7ト



写真32 (27図) 両刃礫器 (イ E58区346) 7ト



写真33 (31図) 石核 (イ E58区127) 7ト



写真34 (31図) 原石 (イ E58区413) 7ト



写真35 (32図) 石核 (イ E58区458) 7ト



写真36 (33図) 石核 (イ E58区198) 7ト



写真37 (35図) 石核 (イ E58区採取) 7ト



写真38 (37+38図) 接合資料  
(イ E58区53と54) 7ト



写真39 (39図) 削器 (イ E58区428) 7ト



写真40 (40図) 加工痕ある剥片加工痕ある剥片 (イ E58区196) 7ト



写真41 (43図) 搔器 (イ E58区365) 7ト



写真42 (44図) 石核 (イ E58区275) 7ト



写真43 (45図) 石核 (イ E58区457) 7ト



写真44 (47図) 原石 (イ E58区299) 7ト



写真45 (48図) 素材 (イ E58区44) 7ト



写真46 (50図)  
剥片 (イ E58区296) 7ト



写真47 (51図) 石核 (イ E58区338) 7ト



写真49 (53図) 石核 (イ E58区303) 7ト



写真48 (52図) 石核 (イ E58区344) 7ト



写真50 (54図) 石核 (イ E58区254) 7ト



※左:打面部、右:左側面



写真51 (55図) 石核 (イ E58区273) 7ト



写真52 (56 図) 原石 (イ E58区160) 7ト  
※石材



写真53 (57図)  
剥片 (イ E58区333) 7ト



写真54 (58図)  
剥片 (イ E58区345) 7ト



写真55 (57+58図) 接合資料  
(イ E58区345+同333) 7ト



写真56 (59図) 敲石  
(イ E58区256+同310)



写真57 (60図) 石核 黒曜岩 (イ E68区8)



写真58 (28図) 剥片  
(イ E58区390)



写真59 (46図) 石核 (イ E58区216)



写真60 (29図) 剥片 (イ E58区133)



第16次A区空中写真



第16次B区 (B1・B2区) 空中写真



B2区 包含層掘削状況



B2区 土層堆積状況



B2区 石器出土状況



SX11 検出状況



SX11 土層堆積状況



SX11 完掘状況



SH76 完掘状況



SH78 出土状況



SH83 完掘状況





SH121 焼土出土状況



SH121 出土状況



SH121 完掘状況



SH122 完掘状況



SH123 出土状況



SH123 完掘状況



SH124 完掘状況



SH125 出土状況



SH126 円礫出土状況



SH126 完掘状況



SH127 出土状況



SH128 完掘状況



SH129 出土状況



SH130 土層堆積状況



SH130 出土状況



SH131 完掘状況



SH132 出土状況



SH133 完掘状況



SH134 石剣 (253) 出土状況



SH134 完掘状況



SH135 完掘状況



SH136 土層堆積状況 遠景



SH136 土層堆積状況 近景



SH136 出土状況





SH136 出土状况 近景1



SH136 出土状况 近景2



SH136 完掘状况



SH137 出土状況



SH138 完掘状況



SH139 土層堆積状況



SH139 出土状况



SH139 出土状况 近景1



SH139 出土状况 近景2



SH139 出土状況 近景3



SH139 完掘状況



SH140 出土状況



SH140 土坑1出土状况



SH141 出土状况



SH142 出土状况



SH143 出土状況



SH143 出土状況 近景1



SH143 出土状況 近景2



SH143 完掘状況



SH144 出土状況



SH144 完掘状況



SH145 出土状況



SH145 完掘状況



SH146 完掘状況





SH147 完掘状况



SH148 完掘状况



SH149 出土状况



SH150 完掘状況



SH151 完掘状況



SH152 完掘状況



SH153 出土状況



SH153 土坑出土状況



SH154 出土状況



SH154 完掘状況



SH155 出土状況



SH155 完掘状況



SH156 完掘状况



SH157 出土状况



SH158 出土状况



SH159 完掘状況



SH160 出土状況



SH160 完掘状況



SH161 完掘状況



SH162 出土状況



SH162 完掘状況



SK288 出土状況



SK412 出土状況



SK413 出土状況





SK414 完掘状況



SK415 出土状況



SK416 出土状況



SK417 出土状況



SK418 出土状況



SK419 完掘状況



SK420 出土状況



SK421 出土状況



SK422 出土状況



SK423 完掘状況



SK424 完掘状況



SK425 完掘状況



SK426 完掘状况



SK427 完掘状况



SK428 完掘状况



SK429 土層堆積状況



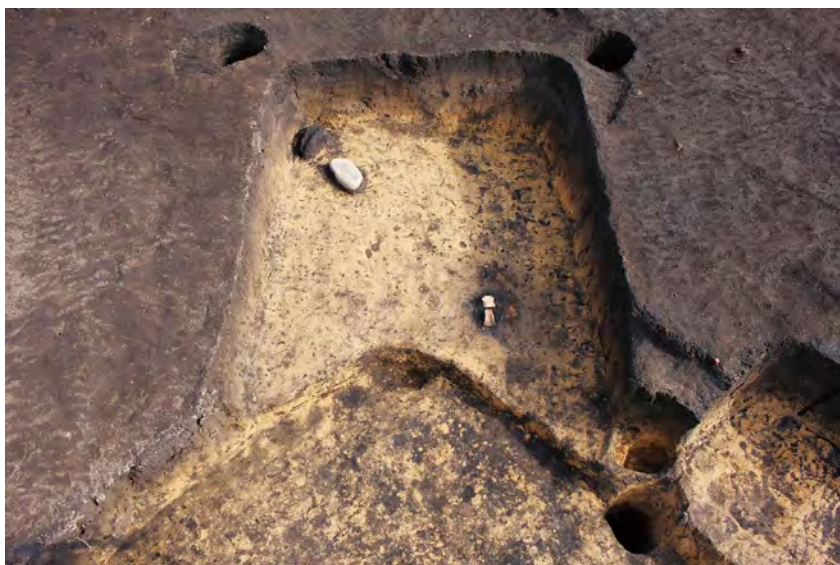
SK429 完掘状況



SK431 出土状況



SK432 出土状況



SK433 出土状況



SK434 出土状況



SK435 完掘状況



SK436 完掘状況



SK437 出土状況





SK438・SK439 土層堆積状況



SK438・SK439 出土状況



SK440 完掘状況



SK441 土層堆積状況



SK441 完掘状況



SK442 出土状況



SK443 出土状況



SK444 出土状況



SK445 完掘状況



SK446 出土状況



SK447 出土状況



SK448 完掘状況



SK449 出土状況



SK450 出土状況



SK451 出土状況



SK452 出土状況



SK453 出土状況



SK454 完掘状況



SK455 出土状況



SK455 出土状況 横穴近景1



SK455 出土状況 横穴近景2



SK456 土層堆積状況



SK456 出土状況



SK457 完掘状況





SK458・SK459 完掘状況



SK460 出土状況



SK461 出土状況



SK462 完掘状況



SK463 完掘状況



SK464 完掘状況



SK465 出土状況



SK466 出土状況



SK467 出土状況



SK468 完掘状況



SK469 焼土出土状況



SK470 完掘状況



SK471 完掘状況



SK472 完掘状況



SK473 完掘状況



SK474 出土状況



SK475 完掘状況



SK476 完掘状況



SK477 出土状況



SK478 土層堆積状況



SK478 出土状況



SK478 完掘状況



SK479 出土状況



SK480 完掘状況





SK481 出土状況



SK482 完掘状況



SK483 出土状況



SK484 完掘状況



SK485 完掘状況



SK486 土層堆積状況



SK486 完掘状況



SK488 土層堆積状況



SK488 完掘状況



SK489 出土状況



SK490 土層堆積状況



SK490 完掘状況



SK491・SK492 出土状況



SK494 出土状況



SK496 完掘状況



SK497 出土状況



SK498 完掘状況



SK499 出土状況



SK500 完掘状況



SK501 完掘状況



SK502 完掘状況



SK503 完掘状況



SK504 完掘状況



SK505 完掘状況





SK506 完掘状況



SK507 完掘状況



SK508 完掘状況



SK509 完掘状況



SK510 完掘状況



SK511・SK512 完掘状況



SK514 完掘状況



SK515・SK516 完掘状況



SK517 完掘状況



SK518 完掘状況



SK519 完掘状況



SK520 完掘状況



SK521 出土状況1



SK521 出土状況2



SK522 出土状況



SK523 出土状況



SK524 出土状況



SK525 出土状況



SK524・SK525 出土状況



SK526 出土状況



SK527 出土状況



SK528 石蓋出土状況



SK528 断割状況



SK528 断割後壙棺出土状況





SK529 出土状況



S7 完掘状況



S8 完掘状況



S9 完掘状況



SB23 完掘状況



SX12 土層堆積状況1



SX12 出土状況



SX12 出土状況 近景



SX12 土層堆積状況2



SX13 出土状況



SX14 出土状況



SH163 完掘状況



SH164 出土状況



SH164 完掘状況



SH165 完掘状況



SH165 U字状土坑完掘状況



SH166 出土状況



SH166 完掘状況



SH166 U字状土坑完掘状况



SH167 出土状况



SH167 完掘状况



SH168 出土状況1



SH168 出土状況2



SH168 出土状況 近景1





SH168 出土状況 近景2



SH168 赤色顔料出土状況



SH168 完掘状況1



SH168 完掘状況2



SH169 出土状況



SH169 炭化材出土状況



SH169 完掘状况



SH170 出土状况



SH170 出土状况 近景



SH170 土坑出土状況



SH170 炉跡・U字状土坑完掘状況



SH171 出土状況



SH171 炉跡・U字状土坑完掘状況



SH171 完掘状況



SH172 出土状況



SH172 土坑1出土状況



SH172 完掘状況



SH173 出土状況



SH173 完掘状況



SH174 出土状況



SH174 完掘状況



SH174 U字状土坑完掘状況



SH175 出土状況



SH175 完掘状況





SH176 出土状況



SH177 出土状況



SH177 完掘状況



SH178 出土状況



SH179 出土状況



SH179 完掘状況



SH180 出土状況



SH180 複合口縁壺 (1337) 出土状況



SH180 完掘状況



SH181 出土状況



SH181 完掘状況



SH182 完掘状況



SH183 完掘状況



SH184 出土状況



SH184 完掘状況



SH184 U字形土坑完掘状況



SH185 出土状況



SH186 出土状況



SH186 出土状况 近景1



SH186 出土状况 近景2



SH186 完掘状况



SK530 完掘状況



SK531 土層堆積状況



SK531 出土状況





SK531 焼土・炭化物出土状況



SK532 完掘状況



SK533 出土状況



SK533 完掘状況



SK534 出土状況



SK535 上層遺物出土状況



SK535 土層堆積状況



SK535 完掘状況



SK536 出土状況



253



273



288



299



312



334



335



345



361



368



369



384



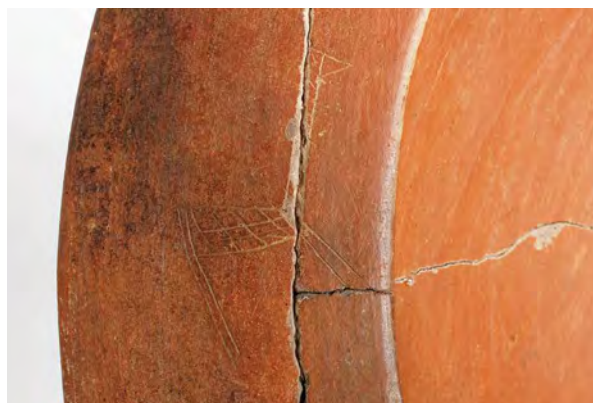
408



411



411 上部から



411 「鹿」線刻



412



644



907



908



908 内面底部



910



911



918



919



920



951



954



961



961 罅部上部から



961 罅部下部から



976



978



1008



1053



1058



1062



1077



1086





1095



1098



1100



1109



1147



1151



1164



1183



1183 上部から



1185



1187



1219



1223



1240



1326



1329



1331



1333



1337



1380



1406



1407



1409



1418



1431



1455



1458



1467



1469



1472



1571



1572

報 告 書 抄 録

ふりがな	よっかいちいせき
書名	四日市遺跡4
副書名	玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	(4)
シリーズ	大分県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第20集
編集・執筆者	服部真和 後藤一重 小柳和宏 綿貫俊一
所在地	〒870-0152 大分市牧緑町1-61
発行年月日	令和3年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯	東経	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "	
よっかいちいせき 四日市遺跡	おおいたけんくすぐんくすまちおおあぎよっかいちあぎうえのはる 大分県玖珠郡玖珠町大字四日市字上の原	218	56	33° 17' 17"	131° 8' 7"	玖珠工業団地造成工事のため

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
四日市遺跡	集落 墳墓	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世 近世	竪穴建物 土坑 貯蔵穴 掘立柱建物 小児用甕棺 円形周溝遺構 溝	石器 縄文土器 弥生土器 土師器 土製品 金属製品	第16次調査では県下でも出土事例の少ない弥生時代中期後半段階の「鹿」が描かれた線刻絵画高坏やほぼ完形に復元できる筒形器台などが出土した。

調査回数	調査期間	調査面積 (㎡)	要 約
第1次調査	平成14年5月16日 ～ 平成15年3月20日	10,800	第1次調査区のほぼ全域で弥生時代中期後半を中心とした住居跡、土坑が分布しており、覆土や壁部分のロームから石器類が出土していた。こうした部分の隣接地にトレンチを設定し、掘り下げたところ、各所で膨大な石器類が出土した。このうち少量ながらナイフ形石器が出土した第5トレンチのほか、4トレンチ、7トレンチから縄文時代草創期初頭と推定される両面調整尖頭器などがローム層上位から出土した。石材の大半は、近隣の産地で採取したと推定する凝灰岩質輝石安山岩と泥岩であった。
第16次調査	平成29年4月19日 ～ 平成29年9月29日	19,738	四日市台地の東部に位置する。旧石器時代の調査では、第1次調査で検出された石器ブロックの続きを確認した。また弥生時代中期後半段階の竪穴建物・土坑・貯蔵穴・小児用甕棺・円形周溝遺構・掘立柱建物や、弥生時代終末～古墳時代初頭段階の竪穴建物・土坑などの遺構を検出した。これにより各時期の集落の全容を把握することができた。



---

---

## 四日市遺跡 4

玖珠工業団地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(4)  
大分県立埋蔵文化財センター調査報告書第20集  
令和3年3月31日

編集・発行 大分県立埋蔵文化財センター  
〒870-0152 大分市牧緑町1-61  
TEL 097-552-0077

印刷 株式会社インタープリント  
〒870-0945 大分市大字津守563-7  
TEL 097-582-1122

---

---

